和十八年七月一日

大和民族を中核とする世界政策の検討

―特に民族人口政策を中心として―

（第二分冊）

厚生省研究所人口民族部

序

本輯「大和民族を中核とする世界政策の検討」は曩に假印刷に附せし「戰爭の人口に及ぼす影響」の續篇として「厚生省研究所人口民族部」において特に民族人口政策の見地より編纂せるものなり。

第一篇より第七篇に亘る本輯は製本の都合上之を左の如く三分冊とす。

第一分冊
- 第一篇　總説
- 第二篇　大東亜民族事情
- 第三篇　世界各國の民族事情

第二分冊
- 第四篇　自然環境と民族の關係
- 第五篇　民族的世界觀と國家觀

第三分冊
- 第六篇　大和民族を中核とする世界政策
- 第七篇　大東亜建設計畫

資料入手其の他の困難を超えて特に怱々の間に取纒めたるものにして行間統一を缺きたるの恐れ無きにしもあらざれども右の廣汎なる夫々の問

題に對し一應の集成に達し此處に取敢へず假印刷に附し以て部内の參考に資するものなり。

昭和十八年七月一日

厚生省研究所人口民族部

厚生省研究所人口民族部調

「大和民族を中核とする世界政策の檢討」

（特に民族人口政策を中心として）

第二分冊

目次

第三編 蘇聯民族事情

第一章 概説

ソヴェート社会主義共和國聯邦を構成する主要民族は、周知の如く印度ゲルマン人種（アリアン人種）に族するスラブ民族であり、其の所謂「東スラブ」族と称せらるゝものである。之れは聯邦総人口の約七八割を占むるものであるが、其外にアリアン系古代アジア系及蒙古系の人種民族を無数に内包し、其の種別は大小二百種に垂んとしてゐる。正に民族博物館の名に恥ぢず、其の民族的構成の複雑なることは世界無比である。而して斯くの如く他に比類のない多数の異民族を内包してゐるロシヤは、帝政時代永らく此等を無知と兇暴、相互の怨恨と反噬と

に押へつけて来たのであるが、而かも時には大小の民族的叛乱が屡々繰返されるのを如何ともなし得なかつたのである。然るに之が大革命以来二十有餘年、表面上とにかく何等の波瀾も起すことなく、又傳へられる所の如くんば、弊陬の弱少民族に至る迄、日に月に文化は向上し、生活は豊富となる状態であるといふことは、今日地球上至る処で困難なる民族問題が続出しておる折柄、大いに注目せられねばならぬ。

ソ聯邦内諸民族をその人種的血統及言語系統に分類することは甚だ困難であるが、大体次の如くであるとされておる。

(一) インド、ヨーロッパ種族

(1) 東スラブ族

ロシヤ人、ウクライナ人、白ロシヤ人、

(2) 其他スラブ系諸族

ポーランド人、ブルガリヤ人、チエック人、及スロバキヤ人

(3) バルト諸族

レット人、リッアニア人

(4) インド、イラン族

タヂック人、ペルシャ人、イラン人、オセッテン人、タルイシ人

クルド人、ジプシイ人等

(5) その他インド、ヨーロッパ族

ドイツ人、モルダヴイア人、ギリシヤ人

(二) ヤペテ族(カウカサス族)

1、アルメニア人

2、南カウカサス、ヤペテ族、グルジア人、アッジャル人、メグレル人等、

3、北カウカサス、ヤペテ族

アブハズ人、チエルケス人、カバルジン人、チエチエン人、イングーシ人、アワール人、レズグ人、ダルギン人等。

(三) セム族

ユダヤ人、アラビア人、

(四) トルコ族

1. 北西トルコ族

カザーク人、キルギス人、カラ、カルパク人、タタール人、バシュキール人等、

2. 南西トルコ族

アゼルバイジヤン人、トルクメン人等、

3. 南東トルコ族

ウズベク人、ウイグール人等

4. 北東トルコ族

ヤクート人　ハカッス人等、

(五) チユワシ族

チユワシ人

(六) 蒙古族

ブリヤート人、カルムイク人、サルト、カルムイク人

(七) ツングース、満洲族

1. ツングース族

ツングース人、ラムート人等

2. 満洲族

ゴーリド人、オロチ人等

(八) フイン、ウグリヤ、サモエード族

1. バルト、フイン族

カレリア人、エストニア人、フイン人、レニングラード、フイン人等、

2. ヴオルガ、フイン族

モルドワ人、マリ人、

3. ペルミ、フイン族

ウドムルト人、コミ人等

4北部フイン族

ロパーリ人

5ウグリヤ族

オスチヤク人、サモエード人（ネネツ人）等

(九)古代アジア諸族

チユクチ人、コリヤーク人、カムチヤダール人、エスキモー人、

(十)極東文化民族

朝鮮人、支那人等

而してこの細別に至つては驚くべき程多く、一九二六年の國勢調査に於ては、その民族別分類は一九五種及「其他外國人」となされてゐた程である。一九三九年の國勢調査の結果は、人口二万以上を基準として、四七民族、二種族及無数の少数民族を含む「其他」に分類されてゐるのである。今一九三九年の調査結果を左に掲げ、一九二六年との増減割合を見よう。

	1939年		1926年		1926年に対する1939年の増減（△印減）	
民族別	千人	%	千人	%	千人	%
ロシア人	99.019.9	58.09	77.791.1	52.91	21.228.8	27.3
ウクライナ人	28.070.4	16.47	31.195.0	21.22	△ 3.124.6	△ 10.0
白ロシア人	5.267.4	3.09	4.738.9	3.22	528.5	11.1
ウズベク人	4.844.0	2.84	3.904.6	2.66	939.4	24.0
タタール人	4.300.3	2.52	2.916.5	1.98	1.383.8	47.4
カザック人	3.098.8	1.82	3.968.3	2.70	△ 869.5	△ 21.9
ユダヤ人	3.020.1	1.77	2.672.5	1.82	347.6	13.0
アゼルバイヂヤン人	2.274.8	1.33	2) 0	0	0	0
グルヂヤ人	2.248.6	1.32	1.821.2	1.24	427.4	23.5
アルメニヤ人	2.151.9	1.26	1.567.6	1.07	584.3	37.2
モルドワ人	1.451.4	0.85	1.340.4	0.91	111.0	8.3
ドイツ人	1.423.5	0.84	1.238.5	0.84	185.0	14.9

民族別	1939年 千人	%		1926年 千人	%	1926年に対する1939年の増減(△印減) 千人	%
チユワシ人	1.367.9	0.80		1.112.4	0.76	250.5	22.5
タヂーク人	1.229.0	0.72		978.7	0.67	250.3	25.5
キルギス人	8843	0.52		762.7	0.52	1216	15.9
ダゲスタンの諸族	857.4	0.50	3)	0	0	0	0
バシキール人	842.9	0.48		713.7	0.49	1292	18.1
トルクメン人	811.8	0.48		763.9	0.52	47.9	6.3
ポーランド人	626.9	0.37		782.3	0.53	△155.4	△19.9
ウドムルト人(ヴオトヤク人)	605.7	0.36	4)	504.2	0.34	101.5	20.1
マリ人	481.3	0.28		428.2	0.29	53.1	12.4
コミ人(ジルヤン人)	408.7	0.24	5)	0	0	0	0
チエチエン人	407.7	0.24		318.5	0.22	892	28.0
オセット人	3545	0.21		272.3	0.19	822	30.2

民族別	1939年 千人	%		1926年 千人	%	1926年に対する1939年の増減(△印減) 千人	%
ギリシア人	285.9	0.17		213.8	0.15	72.1	33.7
モルダビヤ人	260.0	0.15		278.9	0.19	△18.9	△6.8
カレリア人	252.6	0.15		248.1	0.17	4.4	1.8
カラカルパク人	185.8	0.11		146.3	0.10	39.5	27.0
朝鮮人	180.4	0.11		87.0	0.06	93.4	107.4
カバルヂン人	164.1	0.10		139.9	0.10	242	17.3
フインランド人	143.1	0.08	6)	1347	0.09	8.4	6.2
エストニア人	142.5	0.08		1547	0.11	△12.2	△7.9
カルムイク人	134.3	0.08		1293	0.09	5.0	3.9
レツト人及レツトガル人	126.9	0.07		1514	0.10	△24.5	△16.2
ブルガリア人	1135	0.07		111.3	0.08	2.2	2.0
イングウシ人	921	0.05		74.1	0.05	18.0	24.3
アヂゲエル人	880	0.05	7)	0	0	0	0
カラチヤーエフ人	757	0.04		55.1	0.04	20.6	37.4

民族別	1939年 千人	1939年 %	1926年 千人	1926年 %	1926年に対する1939年の増減(△印減) 千人	1926年に対する1939年の増減(△印減) %
アブハジヤ人	59.0	0.03	57.0	0.04	2.0	3.5
ハカッス人	52.6	0.03	45.6	0.03	7.0	15.4
オイラート人	47.7	0.03 8)	0	0	0	0
クルヂスタン人	45.9	0.03	54.7	0.04	△ 8.8	△ 16.1
バルカル人	42.7	0.03	33.3	0.02	9.4	28.2
イラン人(ペルシア人)	39.0	0.02	44.0	0.03	△ 5.0	△ 11.4
リトワニア人	32.3	0.02	41.5	0.03	△ 9.2	△ 22.2
支那人	29.6	0.02	10.2	0.01	19.4	190.2
チエッコ人及スロヴァキヤ人	26.9	0.02	27.1	0.02	△ 0.2	△ 0.7
アラビア人	21.8	0.01	29.0	0.02	△ 7.2	△ 24.8
アッシリヤ人	20.2	0.01 9)	0	0	0	0
その他	809.3	0.47	0	0	0	0
合計	169519.1	99.44	0	0	0	0
未確認(10)	948.1	0.56	0	0	0	0
総人口	170467.2	100.00	147027.9	100.0	23439.3	15.9

一般的に見て一九二六年に比して一九三九年が著しく人口を増加してゐるのは云ふ迄もないが、其著しいのはタタール人（四七・四％）、アルメニア人（三七・二％）、ロシヤ人（二七・三％）、ウズベック人（二四・二％）及白ロシヤ人（一一・一％）である。（支那人及朝鮮人の増加率は実に著大であるが、絶対数が少ないため之を除外する）。之に反して人口数が減少してゐる民族数は十一であつて、何れも西部及南東部の辺境民族であることは注目せらる。その最も顕著なのは、率から言へばアラビヤ人（二四・八％）リツアニア人（二二・〇％）カザツク人（二一・九％）ポーランド人（一九・九％）一年であるが、絶対数の最も著しい減少はウクラ

イナ人で、其数三百十二万に及び、之に次ぐはカザツク人の八十七万人減少、反ポーランド人の十六万人減が目立つ。このことは本来異民族に属しながら、一九三九年の調査に於ては彼らに「ロシヤ人」と記入したつ者が相当に存したであらうといふことを推測せしむるのである。

それはともかく、ソヴェート聯邦に於て圧倒的多数を占めるものは、云ふ迄もなくロシヤ人即ち帝政時代の大ロシヤ人であつて、總数九千九百餘万人で、全人口の五八、四一%を占め、政治経済、文化各方面に最も指導的役割を演じてゐる。之に次ぐものはウクライナ人（小ロシヤ人）の二千八百餘万人（一六、五六%）、白ロシヤ人の五百二十餘万人（三、一%）一等で、此等三スラブ族の合計は一億三千二百三十五万人に達し、全人口の七七、六五%即ち四分の三以上を占めてゐるのである。其他百万以上を占める民族は、ウズベック、タタール、カザフ、ユタヤ、アゼルバイヂヤン等以下十一種 更に十万以上はキルギーズ以下二十一種を数へてゐる。而してこの民族構成は周知の如く一九三九年九月以降の新地域獲得（帝政時代の旧領土回復）によつて著しき変化を蒙り、各民族の人口順位、全人口に対する比率は著しく変化し、人口百万以上の民族数も一九三九年の十四より十九に増加するに至つた。今新地域編入前後の民族別人口及其の割合を掲ぐれば次の如くである。

民族別	1940 100万	1940 %	1939 100万	1939 %
ロシヤ人	99.8	51.7	99.0	58.1
ウクライナ人	35.6	18.4	28.1	16.5
白ロシヤ人	8.3	4.3	5.3	3.1
ウズベク人	4.8	2.5	4.8	2.8
ユダヤ人	4.6	2.4	3.0	1.8
韃靼人	4.3	2.2	4.3	2.5

民族別	1940		1939	
	100万	%	100万	%
カザック人	3.1	1.6	3.1	1.8
アゼルバイジャン人	2.3	1.2	2.3	1.3
グルジア人	2.2	1.1	2.2	1.3
アルメニヤ人	2.2	1.1	2.2	1.3
ルーマニヤ人(モルダビヤ)	2.1	1.1	0.3[3]	0.1
リツアニア人	2.0	1.0[2]	—	—
ポーランド人	1.7	0.9	0.6	0.4
レツト及レツトガル人	1.6	0.8	0.1	0.1
モルダヴイア人	1.5	0.8	1.5	0.9
ドイツ人	1.4	0.7	1.4	0.8
チユワツシユ人	1.4	0.7	1.4	0.8
タジーク人	1.2	0.6	1.2	0.7
エストニア人	1.1	0.6	0.1	0.1
キルギス人	0.9	0.5	0.9	0.5
バンキール人	0.8	0.4	0.8	0.5
トルコメン人	0.8	0.4	0.8	0.5
ウドムルト(ヴオトヤク)人	0.6	0.5	0.6	0.4
マリ人	0.5	0.3	0.5	0.3
コミ人	0.4	0.2	0.4	0.2
チエチエン人	0.4	0.2	0.4	0.2
カレリア、フイン人	0.2	0.2	0.4	0.2
オセツト人	0.4	0.2	0.4	0.2
ブルガリア人	0.3	0.2	0.1	0.1
ギリシア人	0.3	0.2	0.3[4]	0.2
カラカルパク人	0.2	0.1	0.2	0.1
朝鮮人	0.2	0.1	0.2	0.1
カバルヂン人	0.2	0.1	0.2	0.1

民族別	1940		1939	
	100万	%	100万	%
カルミーク人	0.1	0.1	0.1	0.1
其他	5.5	2.8	3.3	1.9
合計	193.2	100.0	170.5	100.0

即ち人口増加の最も著しかつたのはポーランドよりのウクライナ人で七百五十万人、同じく白ロシヤ人が三百万人で、ソ聯邦内のウクライナ人、白ロシア人は、夫々三千五百六十万人、八百三十万人の多数を擁することゝなつた。聯邦内のエストニア、ラトヴィア、リツアニアの三民族は、従来極めて少数であつたゝめ、事実上悉くが新民族と称して差支えない。ベツサラビアのモルダヴィア人も多数に上り、之はウクライナ共和國内のそれと合せて、モルダヴィア新構成共和國となつた。ユダヤ人は新地域編入によつて殆んど倍加し、四百六十万を数ふるに至つたのである。

ロシア人は大なる変化を示してゐないが、全人口に対する比率は五八、一%から五一、七%に低下し、ウクライナ人は一六、五%から四、三%に、ユダヤ人は一、八%から二、四%に何れも増加したのである。

次に之等諸民族中主要なる若干の民族につき、その居住地域を略述すれば次の如くである。

全人口の半ば以上を占めるロシヤ人の最も多く集中してゐる地域は、云ふまでもなくロシア共和國内のヨーロッパの部である。こゝでは「少數民族地方」を除けば、全人口に対するロシヤ人の平均割合は九割に達する。殊にヨーロッパ・ロシヤ中央部の諸地方に於ては九九％以上に及ぶところがあり、黒土地帯の南部に下るにつれてこの率は次第に減少し、ヴォルガ中流及び下流では六割乃至七割前後になってゐる。北カウカサス地方に於ても到るところでロシア人は絶対多數を占めてをり、シベリヤ及び極東地方においても優に過半數を占めてゐる。その外少數民族の共和國、自治共和國、自治州においてもロシヤ人の割合はかなり高く、例へばブリヤート蒙古自治共和國、タタール自給共和國に於ては四割前後を占めてゐる。

ウクライナ人はその人口の約四分ノ三がウクライナ共和國に集中してゐるが、其の他ウクライナ人の分布地域は北カウカサス、中央黒土地帯、ヴォルガ下流地方、シベリヤ、極東地方にも及んでゐる。

白ロシア人は白ロシア共和國の農業地帯に住んでゐるほか、主としてシベリヤ、ロシアの共和國の西部、ウクライナー等に住んでゐる。トルコ系諸民族はそれぞれ同名の共和國又は自給共和國に住んでゐるが、タヽール人の如きはソ聯邦の到る処に群住して居り、殊にアジアの諸都市に於ては相当の比率を占めてゐるものもある。

尚ほ周知の通り、帝政ロシヤの崩壊後、ソヴエート政権の支配下にあきたらぬ者は、現在故國を離れて、世界各地方に不安定な且つ窮迫せる生活を以て其の日其の日を送ってゐる。所謂白系ロシヤ人之であって、其の數は今詳しく計ることを得ないが、全世界のそれを數へると相当の數に上るであらう。アジアでは、中國、殊に満洲國（六万と称せられる）に居住する者が多い。之等白系ロシヤ人の消息については、今之を審にすることを得ないので、本章は之が記述を省略する。又一九四一年夏の独ソ開戦後幾許もなく西國境バルト諸民族を始め、ウクライナ、白ロシヤ民族も概ねドイツ占領軍の支配下に移って現在に至ってゐることは周知の通

りである。

第二節　民族自治体制

革命の成功により旧帝政の機構が無残にも破壊さるゝや、永年圧政に呻吟した大ロシヤ人以外の大小の被抑圧民族は、茲に解放の絶好の機会を掴むに至つたのである。殊に革命政権自体が早くも一九一七年三月、「民主主義的ロシヤは、各民族の民族的自決の立場に立つ。従つてポーランドは國家的にも又國際的にも完全に独立する権利を有する。」と宣言したことは、國内少数民族の解放を公約したものに外ならなかつた。而も大戦後に於ては人種平等、民族自決主義が澎湃として世界を風靡し、欧洲の小数民族は踵を接して独立を宣したのであるが、この氣運に乗つて旧ロシヤ領内からも、ポーランド、フインランドを始めバルト三國が新に独立國家となるに至つたのである。然るに此等辺境の一部民族を除いた餘の大小諸民族は如何と云へば、その總てが依然として「ロシヤ」の一員と

して残り、当時帝政ロシヤ時代の領土は四分五裂するであらうと予想した外界の観測は、早くも裏切られてしまつた。

勿論此等諸民族に対して何ものも與へられなかつたのではない。「メメ社会主義共和國」、「メメ自治共和國」、「メメ自治州」、「メメ民族管区」等々が、此等諸民族に與へられた表面上の名称であつた。云ふ迄も無く、茲に「國家」の名を與へられたものも、地球上の他の独立國家に当篏まるものではなく、「國家内の國家」に止まつたのである。何となれば、此等「自由ナル諸共和國」は、「自由ナル結合」を以て、更に高次の大ソヴエート聯邦を形成せしめらるゝに至つたからである。

大ソヴエート聯邦が出来上つたのは一九二二年末内乱が全く鎮定されてからであつて、翌二三年迄に四個の構成社会主義共和國、後カウカサス聯邦共和國内の三共和國、十個の自治共和國、十六個の自治州が結成せられ、境域内の諸民族は夫々憲法規定の代表者を選出し、民族会議を構成することゝなつた。其後一九三六年新憲法の実施に及び加盟共和國、自治共和國、自治州、民族管区にも増減があり、殊に最近旧帝政時代の領土の回復に依り、其の数は増加した。今之を表示してその変遷を見れば左の如くである。

	一九二三年	一九二五年	一九二九年	一九三六年	新憲法実施後	一九四一年
加盟共和國	四	六	六	七	一一	一六
後カウカサス聯邦共和國の諸共和國	三	三	三	三	—	—
自治共和國	一〇	一三	一六	一九	二二	二〇
自治州	一六	一七	一六	一四	九	九
民族管区	—	—	一	九	九	一〇
合計	三五	三九	四二	五二	五一	五五

即ち新憲法実施後の加盟共和國は、ロシヤ、白ロシヤ、ウクライナ、アゼルバイジャン、グルジア、アルメニア、カザック、トルクメン、キルギス、ウズベック、タヂクの十一國であり、之と共に二十二國の自治共和國、九個の自治州、及び九個の民族管区が存するに至ったのである。然るに一九三九年以後帝政時代の失地を概ね回復するに至るや、その構成共和には更にカレロ、フィン、モハダビヤ及び旧バルト三國を加へて、十六を数える様になった。

(註一) 聯邦構成共和國たり得る資格を有する共和國は、一九三六年十一月廿五日の第八回全聯邦ソヴィエート臨時大会に於けるスターリン書記長の演説に依れば、次の條件を具備する必要がある。

一、該共和國はソヴィエート聯邦の他の領域により四辺を包囲されざる辺境共和國であること。蓋しかゝる共和國のみが論理的にも実際的にもソ聯邦から脱退すると云ふ問題を提起し得るからである。

二、該共和國に名を與へるべき人種(民族)が、其の共和國に於て程度の差を問はずとも過半数を占めるものでなければならない。

三、該共和國は少くなくとも百万以上の人口を有するものでなければならない。蓋し人口少く、兵力弱少の小ソヴィエート共和國が独立國として存続し得るとは考へられず、列國の干渉を喚び起すことは疑を容れないからである。

次に現在(一九四〇年)各構成共和國内の自治共和國及自治州及民族管区を一覧表に作れば次の如くである。

ロシヤ社会主義共和國
- 民族自治共和國
  - 「マミ」「ウドムルト」「チユワーシユ」「マリ」「タタール」「パシユキール」「モルドワ」「ボルガ、ドイツ民族」「カルミク」「カバルヂノ、バルカル」「北オセチヤ」「チエチエノイングーシユ」「ダゲスタン」「クリミヤ」(以上欧露)

「ヤクート」「ブリヤート・モンゴール」（以上シベリヤ）

民族自治州
「カラチヤエフ」「チユルケス」「アヂゲイ」（以上歐露）「ビロビジヤンユダヤ人」「ハッカス」「オイロート」（以上シベリヤ）

民族管區
「ネネツ」「ペルメル、コミ」（以上歐露）「オスチヤコヴォーグル」「ジヤマロ、ネンツ」「アギンスコーエ、ブリヤート」「タイミール」「エウエンク」「ウスチオルダ、ブリヤート」「コリヤク」「チユクチ」（以上シベリヤ）

グルジヤ社會主義共和國
- 民族自治共和國＝「アブバス」「アジヤリヤ」
- 民族自治州＝「南オセチヤ」

アゼルバイジヤン社會主義共和國
- 民族共和國＝「ナヒチエワン」
- 民族自治州＝「ナゴルノカルバフ」

タヂク社會主義共和國＝「ゴルノ・バダフシヤン」自治州

ウズベック社會主義共和國＝「カラカルパク」自治共和國

各民族自治共和國、民族管区別の人口は詳細不明であるから之を除き各構成共和國の人口、面積及人口密度を次に掲げるに止める。年度は一九三九年一月十七日の國勢調査を基礎とし、之に其後編入された諸共和國の人口及面積を參酌したものである。

ソ聯邦各構成各共和國面積及人口（1940年末現在）

構成共和國別	面積（單位1,000平方粁）	人口（100万人）	密度（一平方粁ニ付）
ロシア	16,374.1	108.8	6.6
ウクライナ	556.0	40.3	72.4
白ロシア	2286	10.6	46.3
アゼルバイジャン	86.0	3.2	37.3
グルジヤ	69.6	3.5	50.9
アルメニア	30.0	1.3	42.7
トウルクメン	443.6	1.2	2.8
ウズベク	378.3	6.3	16.6
タヂク	143.9	1.5	10.3
カザック	2.7445	6.1	2.2
キルギーズ	196.7	1.5	7.4
カレロ、フイン	180.8	0.5	2.8
モルダヴィア	32.7	2.4	73.4
リスアニア	59.8	2.9	48.5
ラトヴィア	65.8	2.0	30.4
エストニア	47.5	1.1	23.2
合計	21.637.9	193.2	8.9

即ち加盟十六共和國中、ロシヤ共和国は、今日欧露のみならず、シベリヤ地方もその本国の一部として所属せしめてゐるため、面積に於ては全聯邦の約八割、人口に於ては約六割を占めて、断然他の諸共和國を圧倒してゐるのである。勿論その構成民族はロシヤ人（所謂大ロシヤ人）のみならず、数多の民族を内包するのであつて、一六個の自治共和国と六個の自治州及十個の民族管区を持つてゐることでも之が証せらるゝ。即ち見方によればロシヤ共和國はソヴィエット聯邦の主幹であると云ふよりも寧ろその全部であるとも云へるのである。特に今日ロシヤ共和国に亜ぐ有力共和国たるウクライナ共和国及白ロシヤ共和国は新編入の西辺境諸共和国と共にドイツ軍の占領下にあるのであるから、文字通りそれは全部となつたのである。

第三節　欧露の民族事情

第一款　概説

ヨーロッパ・ロシヤには「ロシヤ」「ウクライナ」「白ロシヤ」の三大共和国があり、その主要構成民族は云ふまでもなく夫々ロシヤ人（帝政時代の大ロシヤ人）ウクライナ人（同じく小ロシヤ人）及白ロシヤ人である。而してこの三民族が何れもスラブ民族、その中の東スラブ族（或はロシヤ族）に属することは前述の如くである。尤もロシヤ共和国の中には此外に多数のアジヤ系の民族や先住の原始民族を内包し、此等の内の大なるものは自治共和国を、小なるものは自治州を形成し、更に原始的小数民族は民族管区に所属せしめられてゐることは、之亦既述の通りである。

ロシヤ族はもとカルパチヤ前地の住民であつたが、紀元後（一五〇年乃至七〇〇年）ウイッスラ河及ドニエップル河地方に現はれ、漸次欧露の中央部に進出し後分離定着して現在の如き分布状態を示し、夫々ロシヤ人、白ロシヤ人、ウクライナ人と称せらるゝに至つたのである。

欧露の北西部にはロシヤ族と前後してアジヤ系の民族、例へばフイン族の一派たるカレリヤ族（カレリヤ地方）やラップ族（コラ半島）等が来住した。前者は主として狩猟漁撈等を営み、最近までカレリヤ自治共和国を形成し、後者は今尚遊牧生活を主としてゐる。又東北部には一般に「ジルヤン族」と呼ばれるサモエード族及コミ族が居住してゐる。此両者も狩猟遊牧の民であるが、北部諸民族中では最も優秀であつて、教員或は技術員等をも出して居り、殊にコミ族はサマエードよりも一層文化的であつて、現在自治共和国を許されてゐるのである。東部のウラル前地からボルガ中流にかけては、アジヤ遊牧民の子孫たるチユワーシユ、ウドムルト、マリ、タタール、バシキール、モルドワ等が居住し、之

亦大々自治共和国を認められてゐる。此等のアジヤ系の諸民族は、曽ては勇敢な戦闘的民族であつて、屡々モスクワ公国を劫掠蹂躙し、或は又ロシヤ人の東侵を永く阻止するの防塞となつたのである。
ボルが河の下流沿岸には、後述の如く十八世紀の後半にドイツから大挙して移住したドイツ農民の子孫が、現在も一団として居住蕃延し、自治共和国を作つてゐる。尤も之等ドイツ人の子孫は今回の独ソ戦争開始せらるゝや、強制的に他地方に転住せしめられたといふことである。
ウクライナ南西のボリドアからベッサラビヤにかけての三角地帯には、ロシヤ人の外にブルガリヤ人、アルメニヤ人、ドイツ人、ユダヤ人等が多数混住し、人種的に複雑を極めて居り、当然の結果として又政治的にも極めて不安定な地帯をなしてゐるのである。

第二款　ロシヤ民族

ロシヤ人即ち帝政時代の大ロシヤ人は、今日人口九千九百万を数へ、ソ聯邦人口の五八%を占め、最大の構成共和国たるロシヤ社会主義共和国を形成してゐる。その先祖は始めプリペート河とオネガ湖との中間に於て、長い間農耕を営んでゐたが、久しく国家的組成をなさず、漸く九世紀に至りスカンヂナヴィアからワリャーグ人を招いて秩序を整へたのが、その国家組織の端緒である。而して大ロシヤ人と云ふ共同的感情は十三世紀から十五世紀に亘る韃靼人支配時代に始めて発成したもので、云はゞ惨酷なる異民族の支配によつて覚醒せしめられたのである。然しその民族的自覚は尚ほ微弱且つ消極的であつて、共同の言語を話し、共通のギリシヤ正教信仰者であるといふことが、彼等を一団として結びつけ、又他の諸民族から区別する程度に止まつたのである。其の民族意識が大いに覚醒せられ、且つ積極的となつたのは、十八世紀に入りてロシヤ国が

ドイツ系指導者の下に欧洲の政治に参加し、且つ一方では其兵士及開拓移民によって不断に領域を拡張するやうになってからである。尤もその民族的意識は、理性や積極的感情に基くものと云ふより寧ろ漠然として他の民族、特に西欧の諸民族とは縁のないといふ感情に発して居り彼等はこの感情を陰鬱な程固持しておるのである。又永らく無数の村落団体として散居し、隣接村落とも概して没交渉に生活して来たことが影響して、民族全体としての有機的連絡を欠き、従って団結力もさ程強くないと云はれておる。

彼等は社会的には長い間貴族政治及専制政治（時には屡々異民族の支配下に）の下に呻吟した。

又自然的には暗い森、缺乏せる耕地、厳格な気候に虐まされ、特に長い冬を陰鬱なる小舎に送らねばならないのである。これらの社会的、自然的環境は、長年の間にその民族的性質に重大な影響を与へた。もし大ロシヤ人の適性を一言にして云へば、憂鬱にして遠慮深く、保守的であつ

て、政治的権力や宗教的権威は勿論地主の笞にも絶対に服従してよく一身を犠牲に供しがちである。権威や規律に比較的柔順であるといふことは、下級兵士としては必ずしも不適当ではないが、独創的な行動力や、指導能力は乏しいとされておる。又有識者中には、忽ちにして憂鬱的気分となり、忽ちにして放逸となり、常に生活の現実的要求に従ふよりは空想や気分に導かれると云つた傾向が多い。其の結果として、組織を缺き、不秩序に陥り、时間を空費することが、目につくのである。大ロシヤ人はよく物に屈托しないと云はれ、運命に柔順であると云はれる。所謂「ニチエボー」（仕方がない）といふ言葉の存在が之を証明すると説かれておるが、之は要するに彼等の受けた社会的、自然的影響の然らしむる所であつて、その美徳ともなり、又缺点ともなつておる所以である。而してこの憂鬱にして空想的な特性は彼等の文学や民謡音楽にもよく反映しておる。大ロシヤの農民は農民でなく、夢を見る遊下学徒であるとの譬へがあるが、実際彼等は冬は暖炉の側に仮睡し、夏は路傍に时

を遁すことを最も好むのである。

以上は勿論主として帝政时代の大ロシヤ人を観察しての結論であつて、必ずしも今日のロシヤ人を語るものではない。然しその民族的特質といふものが、二十年や三十年で一擲されるものでない事は云ふまでもない、唯今日工鉱業から農業に至るまで悉く社会化し、共同化した时代に於ては、その団結力や内部的連絡は自ら昔日の如くではなかるべく、其精神的或は社会的生活に於ても著しく進取積極的且自主独創的となつておるかに傳へられておる。今日ロシヤ人は之は必ずしも大ロシヤ人に限らず、白ロシヤ人、ウクライナ人、其他ソヴエート内の凡ゆる民族に於ても同様であるが、一つの階級に属し、その特殊の一細胞として始めて意義を有しておる。換言すれば彼等は一個人ではなく、全体としての共同的実在である。古き且つ低度の民族文化の上に、卒然高度且つ強力な組織を持つに至つたロシヤの民族的或は国家的結合力が如何程の強さを持ち得るかは、世界の人が久しく疑問の眼を以て眺めたのであるが、独

ソ死闘を続けて凡そ二年、其解答は自らなされておるかの如くである。

帝政时代に於ては大ロシヤ人は云ふまでもなく他の諸民族に対して支配的な民族であつた。之れはロシヤ帝国の全人口中に占むる其の比率が圧倒的に大であつたゝめであることは云ふ迄もない。ソヴエート体制下に於ては勿論民族的支配被支配の関係は名目上ない。共和国の面積が広大であり、人口が圧倒的に多いといふことは、当然の結果として聯邦會議や民族会議に選出する代表者の数を多からしむるのであるが、規定上其数は絶対多数たることを許されないのである。勿論比較的多数であるといふことは、夫自体比較的力の強いことを意味するものに外ならないが、その絶対的多数は許されないといふことは、民族的専制への一つの障壁であり、民族的ショーヴィニズムに対する一つの保障であると看做されておるのであらう

第三款　ウクライナ民族

ウクライナ人は帝政時代小ロシヤ人と呼ばれた。一般に黒土地帯の小ロシヤ及ウクライナ地方からヴォリニヤ及ポドリヤにかけて居住して居り、ソ聯邦内のウクライナ人の数は三千五百六十万に上りウクライナ共和国を形成して、ロシヤ人に亜いで第二の有力民族である。聯邦外に於てはガリシヤ及東北ハンガリーにも居住して「ルーテン人」と呼ばれてゐる者もあり、更にベッサラビヤ及タウリヤにも移住して其の地方の多数民族となつてゐる。ウクライナ人は細長くてブリユウネット色を帯び、南方気質で軽快であり、詩歌音楽を愛好し、殊に俗謡俚諺に長ずると云はれる。ドイツのヘットネル教授著「ロシヤ」中ウクライナ人に就て左の如く記述してゐるのは、尽し要を得てゐるものであらう。

「小ロシヤ人（ウクライナ人）は本来白ロシヤ人居住地方の南方より森林地方と臨原地方との中間地帯に居住し、其の後更に東方及び東南方

に移住したのである。人口は近年迄（二〇世紀初頭）欧露に於て二千五十万人と云はれしも最近（第一次大戦後）増加して三千万乃至三千五百万（ガリシヤのルーテン人及領内波蘭人を含む）に達してゐる。白ロシヤ人及大ロシヤ人が一般にブロンド色頭髪を有するに反して小ロシヤ人は帯黒色頭髪の者が多い。恐らく印度ゲルマン人種と或帯黒色民族との混合の結果であらう。なほ大ロシヤ人が一般に有鬚なると異りて小ロシヤ人は鬚を剃つてゐる。又衣服も同一ではないが、過去に遡れば小ロシヤ人は大ロシヤ人と共通点が多かつたのである。然し運命が両者を分ち、小ロシヤ人は長く波蘭人の支配を受け、其の後再び大ロシヤ人と合体し、其の反抗は打破せられ文章語も圧迫されて、僅かにその言語は民族ディヤレクトとして存続したのである。斯くて特殊の民族的感情は漸次に衰へ、漸く一九〇五年の革命後復活したのである。而してその鼓吹者はロシヤ人よりは寧ろ墺地利、ウクライナ人であつた」

「バンゼ」の「ロシヤ」に依れば、ウクライナ人が膨大たる大ロシヤ

人に対して政治上一歩を譲って来たのは、人口の小なるためのみでなく、此農業民族が指導的な上層階級を缺き、殆ど国家的活動を発揮することがなかったためであると云ふ。又両者の民族的感情は俄かに一掃されることは出来ず、現在に於ても、例へば大ロシヤ人が何をおいても共産主義者たらんと努力してゐるのに対して、ウクライナ人は先づウクライナ人であって、然る後始めて共産主義者たらんと欲するのであるといふ。之は両民族の民族的感情が依然として一致してゐないことを指摘したのであるが、其の政治的或は社会的基礎の喰違ひは、バンゼに依れば、ウクライナには大ロシヤに見る如き「ミール」制度が発現しなかった、めであるらしい。

前大戦後のロシヤの内乱はウクライナ独立の絶好の機会であった。一時ウクライナは独墺軍の援助によって赤軍を境外に駆逐し、スコロパツスキー将軍は独立政府の樹立に成功したが、然し之は独逸軍の敗退と共に三日天下に終ってしまった。其の後もウクライナ独立運動者は、ペト

ルイラやコノパレット大佐に指揮されて、赤軍を始め、周囲のポーランド軍、ルーマニヤ軍並にデニキン麾下の白衛軍とすらも、絶望的な戦を続けてゐたが、一九二一年遂に屈服して領土の大部分が革命ロシヤの支配下に入り、一部はポーランド及ルーマニヤの領土となったのである。革命ロシヤの支配下に入った地方には幾許もなくウクライナ社会主義ソヴエート共和国が成立した。

ウクライナ独立運動は今日尚完全に跡を絶ったわけではなく、国の内外で時々その現れをみることがある。殊に赤色政権の支配を逃れて国外に流亡してゐるウクライナ人の数はアメリカ合衆国に一万アルゼンチンに八万、ブラジルに六万、カナダを始め其他の米洲諸島に三万に上ると云ふ。又満洲国や中國、其他ヨーロッパ諸国にも相当居住してゐると思はれる。此等はウクライナ独立運動者の温床たることは云ふまでもないが、今日其の力は甚だ弱く鉄の如キソヴエット政権に対しては到底反向ふことは出来まいと見られてゐる。

尚一九三九年九月に於けるポーランド東部のソ聯領編入により、約七百五十万のウクライナ人が増大したこととなり、ウクライナ社会主義ソヴエット共和国はそれだけ面積及人口を拡大したのである。

第四款　白ロシヤ民族

白ロシヤ人の居住地域は白ロシヤ地方（白ロシヤ共和国）、即ちスラブ民族の発祥地と推定せられるプリペット流域及其附近であつて、十九世紀末には約六百万と云はれた其人口は今日八百三十万を数へてゐる。白ロシヤといふ名称は、彼等の衣服が白く或は明るいためであるとも云はれ、又彼等がタタール人の支配及混血をうけることなく、純粋なスラブの血統を保持してゐるためであるとも云はれる。其の居住形態は概ね

散居的であつて、村落は小さく、一般に生活は貧窮で、文化の度も他のスラブ族より低い。蓋し長らくポーランド人、リトワニア人、大ロシヤ人、小ロシヤ人等に挟みこまれて、民族的発展を遂ぐることを得なかつたのである。其の人種的特徴は、ブロンド短頭型で、大ロシヤ人が血液的に或は文化的にフィン族或はタタール人に混血せるに反して、民族的混淆は少ない。尤も人によつては、西部ではポーランド人に、北部ではリトアニア人に影響せられ、其特徴を多少享けてゐると云ふ者もある。要するに其居住地域が天然の恩恵に乏しかつたゝめ、文化向上せず、体格も立派ならず、生活様式も尚ほ甚だ低級である。

斯くの如く文化が永く停頓し、生活の向上が見られなかつたのは、ポーランド人が、カトリツク僧侶の援助の下に、幾多の奸計圧迫、買収等に依つて、先づ白ロシヤの貴族をカトリツク教に改宗せしめ、次で之をポーランド化し、一般白ロシヤ人から切離してしまつたことに発すると云ふ。即ち白ロシヤの農民は、全くポーランド化した地主に隷属する無

権利の民となつてしまひ、更に都市の商工民も聴てポーランドから侵入したユダヤ人によつて商工業の実権を奪はれてしまつたのである。斯くて白ロシヤ人は、国民的上層階級を失つたのみならず、中級商工階級も消滅し、更に国民的感情を代表する僧侶とは信仰の分裂のために離れ、其の地主をも奪はれて、全く農民のみが唯一の白ロシヤ民族として残つたのである。従つて彼等は政治的には「無」となり、民族的感情及思想の源泉たる文学は枯死し、白ロシヤの名も既に語る者なく、「白ロシヤ人」などといふ者はない。若し汝がカトリツク信者ならばポーランド人であり、又もし汝が正教信者ならばロシヤ人である」と言はれるに至つたのである。然るに一七七二年以降ポーランドが分割され、次で同国が滅びるに及び、白ロシヤ人は始めて民族的に復活するの端緒を得た。白ロシヤの名は再び世上に語らるゝやうになつた。勿論之は百数十年間ツアールの支配下に於てゞあつたが、此の貴族や地主、僧侶等国民的上層階級を最も早く失つた孤児の民族は、それだけ容易に革命勢力の母胎となり易く、一九〇五年には早くも新らしき民族的力を地上に芽生えしめた。而してその芽は不断に成長して、一九一七年には逸早く「白ロシヤ人民共和国」を建設して其の実を結んだのである。

尚、ウクライナの場合と同様に、一九三九年九月のポーランド東半のソ聯領編入により、凡そ三百万の白ロシヤ人が新に加はることゝなり、白ロシヤ共和国はこれだけ人口と面積とを拡大したのである。

第五款　沿バルト諸民族

帝政時代露領に属し、第一次大戦後独立し、更に最近ソ聯邦に帰属することになつた、バルト海沿岸には、カレリヤ人、フイン人、エストニヤ人、レツト人、レツトガル人及りツアニヤ人等が居住してゐる。此外

に一九三九年九月独ソ間に協定されたポーランドの分割に依り、ポーランドの東半も亦ソ聯領となつたが、此地の住民は大部分ウクライナ人及白ロシヤ人であり、その民族事情は記述したので茲には之を省略したい。

カレリヤ人はフイン族の一派であつて、其居住地即ち、カレリヤ地方は厳密に云へばバルト海には面しておず、芬蘭と国境を接する白海からラドガ湖に至る一帯である。其人口は現在二十五六万であつて、先年迄ロシヤ社会主義共和国内でカレリヤ自治共和国を形成しておたが、ソ芬戦争の結果一九四〇年三月フインランドの一部ラトが湖水域がソ聯領となるに及び、約十五万のフイン人と共に、新にカレロ・フイン社会主義共和国を組織して、聯邦構成の一国となつたのである。此地方はロシヤに於ける正教派地域として有名であり、住民の大部分はもと狩猟と漁撈とに從事し、僅かに農業を営み、又伐木と水運の労役に服して極度の貧困な生活をなしておた。最近は鉄道沿線の泥湿地が排水されて共営農場の村落か開かれ、面目を一新しておると云ふ。

旧バルト三國の一たるエストニヤ、即ち現在のエストニヤ社会主義共和国の主要住民はエスト民族であつて、同国住民の凡八八%を占め、百二三十万人に上る。エスト人はフイン族と同系で、ウラル・アルタイ附近から出で、牛数百年前現在の地に定住したのである。

同じくアジヤ人種のマヂヤール人との親近関係は言語構成の上に現はれておるに過ぎないが、フイン族とは長い接触を有し、その文化的聯関は極めて大で、言語以外の文化様式は殆んど同一である。而してその文化水準は寧ろ同国内に居住するロシヤ人よりも高いとされておる。宗教は新教徒が大部分で八割を占め、ギリシヤ正教は二割弱である。大部分が農業・牧畜、林業等の原始産業に從事し（五八、八%）、工業一五、二%商業四、〇%、交通業三、三%である。

ラトビヤ共和国は約二〇〇万の人口を推しておるが、民族構成はエストニヤよりも複雑である。主要民族たるレット人及レットガル人は総人口の七七%を占め、インドゲルマンのバルト族に属し、リツアニア人に

親近しておる。エスト人程純粋ではなく、四周の諸民族との混血型で、外貌はゲルマン、性格はスラブに似ておる。宗教は大部分が新教で約七五%、カトリック二五%、ギリシャ正教は殆んど存在しない。職業別人口はエストニヤと略同様であるが、農業等の原始産業の占むる割合（六三、三%）は同国よりも高い。尚、此国の西部にはドイツ人、東部にはロシヤ人、ポーランド人、ユダヤ人、南部にはリツアニア人、北部にはエスト人が多少づゝ住んでおる。

リツアニア共和国は総人口約二五〇万であつて、リツアニア人が約八割を占め、東部に若干のポーランド人、ロシヤ人、南西部にドイツ人、北西部にレツト人が居住し、又都市にはユダヤ人の居住者が比較的多い。リツアニア人は久しくポーランドの影響をうけ、固有の服装も文語も持たず、又カトリック教徒の圧倒的に多いのも（八六%）同国の影響である。殆んど全部が農民で無学者数も多く（四〇%）、文化水準は甚だ低いが、国民性として愛郷心の強いのを特徴としておる。ユダヤ人が比

較的に多いのは、帝政時代にプスコフ、チヤーコフの線以西にのみ一般ユダヤ人の定住を許したゝめである。

以上バルト沿岸諸民族は、近年ソ聯邦に合併せられ、夫々の社会主義共和国を構成したのであるが、屢々説く如く、独ソ開戦以来幾許もなくドイツ軍の占領する所となつて、現在に至つておる。

第六款　ボルガ流域ドイツ民族

今日ソ聯邦内には百四十万を超ゆるドイツ民族が存し、之等の中には帝政時代にも又現在に於ても軍政其他学芸技術方面の指導的地位に立つ者も少くない。ドイツ系民族は勿論全部が一定地域に集団生活しておるわけではないが、ウクライナ西部ボドリヤからベツサラビヤへかけて及

バルト沿岸には相当に群住してゐる。然し乍ら最も数多く集団居住してゐるのは、ボルガ下流の沿岸地方であつて、第一次大戦前に於て既に六十万の人口に上り、数百の繁栄せる村を形成し、大規模な小麦栽培と、盛大なる織物業とを営み、自らの教会及学校を有してゐた。但し同地方の人口は其後余り増加せず（他に移住したのであらうか）現在も六十万台に止まつて居り今「ボルガ、ドイツ民族自治共和國」が組織されてゐる。

右ボルガ、ドイツ人の先祖は、エカテリナ女帝時代にドイツ各地方、就中南ドイツから招致された農業移民であつて、元来ドイツ人たるエカテリナは一七六三年ドイツ移民に対して、自由な土地の支給、一切の公租公課の十年間免除、旅費支給、農家建築の補助、自治と自己の裁判所、自由な信仰、永久的な兵役免除等のあらゆる好條件を以て之を迎ふる旨宣言したのである。その後五ケ年間に約三万人が来住したが与へられた土地はボルガ下流の未開の曠野であり、周囲には半ば野蛮な諸民族や盗賊団が横行してゐた。従つて最初移民の生活は悲惨を極め、数千人は病気、

飢餓、困苦欠乏のためたをれ、数千人はステップの盗賊によつてさらはれ或は虐殺され、又数千人はブガチョフの叛乱によつて生命を失つたのである。然しドイツ農民はよく耐え忍んで、新しい土を拓き、遂に繁栄せるボルガ、ドイツ人地帯を作りあげたのである。勿論遠隔の地のこととて、ドイツの故郷に対する直接的関係は殆ど全く喪失してゐるのであるが、尚ほドイツ民族性は之を忠実に守り続けてきた。革命後に於ては前記の如く自治共和国を認められ、首都をエンゲルス（人口七万三千）に置いてゐるが、曽ては大地主経営を主としてゐた此地方も、現在は真先に集団機械化し、一九三三年には既に一〇〇%が共営とされた。作物は輸出向小麦が主で、向日葵、煙草、ケシ等も多く栽培されてゐる。

尚ほこゝに一言附記すべきは、此の地方のドイツ人が、独ソ開戦幾許もなく、ソ聯当局によつて強制的に他地方に立退き転住せしめられたことである。

第四節　南コーカサス及中央アジアの民族事情

コーカサス地方の中北半は現在殆んどスラブ人の居住地域となり、ロシヤ社会主義共和国ニ編入されてゐるのであるから、茲には之を省略し南半即ちザ、カフカス地方に於てのみ述べることゝする。ザ、カフカス即ち所謂南コーカサスには「アゼルバイジャン」「グルジア」及「アルメニヤ」の三構成社会主義共和国がある。更にグルジヤ共和国には「アブバス」「アヂャーリヤ」の二個の民族自治共和国及一個の南オセチヤ民族自治州があり、又アゼルバイジャン共和国にはナヒチエワン民族自治共和国と、ナゴルノカルバフ民族自治州とがある。即此地方は地域的にはさほど広大ではないが、民族的にはやはり複雑な構成をなしてゐると云へよう。然し此等は大体に於て所謂コーカシャ族と呼ばれるトルコ・イラ

ン系のアジア種に属し、民族的にはアジアの色彩が濃厚である。人口はアゼルバイジャン、アルメニア、グルジア三民族共大差なく、何れも二百二三十万を数ふるに止まる。元来此地方は曽てペルシヤ領に属してゐたのであるが、一七二二年のピヨートル大帝のペルシヤ遠征、一八二八年の露土戦争の結果、ロシヤ領に帰属したのである。而も欧露とは険峻な山嶽を以て隔絶されてゐるので、自ら永く別天地をなしたのであるが、革命後に於ても別にロシヤの覊絆から脱することなく、寧ろ三民族は直にコーカサス共和国聯邦を結成して逸早くソヴエート聯邦の傘下に走せ参じたのである。スターリン議長は此地方グルジアの出身であり其他にも当地方出身の党、政府首脳者が多く、其郷党に対する影響力は相当に大であるべく、帝政時代猛烈な反抗をくり返して政府に手を焼かした此地方も、現政権になつてからは比較的平穏である。

中央アジアには「キルギス」「ウズベック」「ダヂーク」「カザック」「トルコメン」の五構成社会主義共和国が存し、更にクヂク共和国に

はゴルノ、バダクシャン自治州が、ウズベック共和国にはカラカルパク自治共和国がある。

元来この地域は支那古代史の所謂西域地方であつて、古くから匈奴、鮮卑、突厥、回紇、韃靼等と称せられたアジア系統の所謂ウラル、アルタイ民族の占據した所である。自然環境が内陸的の草原又は沙漠で、雨量に乏しい乾燥気候であるため、住民の生業も農耕に頼ること少く、主として遊牧を営み、遊牧民族に特有な文化を持つてゐる。漢唐の時代既に自己の国家を組織してゐたが、十三世紀初頭ジンギス汗に征服せられ、軈て此地方にチヤガダイ汗国の建設を見るに至つて、同国は元の滅亡と共に亡びたが、次いで其の後裔チムールの勃興となり、欧亜に勢威を振つたが、其没後域内にウズベック、ボハラ、ホレズム（後のヒバ）コーカンド、トルクメン等の諸汗国が分立し、相争ふて興廃するうちに、ロシヤ帝国の東方経略に遭ひ、その征服するところとなつてしまつたのである。

大革命に当つては、此地方は本国との経略関係を絶たれ、住民は窮乏し、中には白系軍と共に反革命運動に投ずる者もあつたが、統制ある軍に抵抗することが出来ず、相次いで征服され、一九二〇年にホレズム及ボハラの各人民共和国の成立をみた。其後トルキスタン自治共和国も建設されたが、一九二四年に至り民族別に、ウズベック、トルコメン、キルギス、カラカルパックの諸国に区分せられ、更に数回の改廃を経て、一九三二年北部一帯をカザック社会主義共和国となし、南部をトルコメン、ウズベック、タージック、キルギース社会主義共和国に劃定して現在に至つてゐる。

此地方の住民は前記の如くウラル、アルタイ系トルコ種族に属してゐるが、多少アリアン種族の血液を混じてゐる。キルギース、サルト、ウズベック、トルコメン、タゲーク等が代表的民族である。

キルギース人は曾ては東はアルタイ山脈より、西はウラル山脈に至る広大な地域に遊牧し、総数四百五十万と称せられたが、然し現在の民族

別人口に依れば、僅かに九十万に過ぎない。身体的特徴は、身長中位、肩広く、顔は額広く、顴骨よく発達し、眼瞼が斜に截れ、鬚髯の少ないのが普通である。一般に遊牧生活をなし、住居には張幕を用ひるが、冬の厳寒期には冬舎（ジモウカ）と称する氏を積み重ね、その三分の二が土中に埋る家に住む。富裕な者は欧露人と同様な木造の家にトタンの屋根を葺いたものに住んでゐる。

ウズベク民族は、サアルカンド、フエルガン、シルダリンスク等の各地方に多く住み、身長は中位、頭は卵形、顔は細長く、顴骨は普通、皮膚は褐色で頭髪は黒い。性勇敢にして尊大性を有し、大部分は定着して農業に従事して居り、半ば遊牧の生活をなす者はボハラの東部に見られるに過ぎない。ウズベク族とイラン族との混血種にサルト族がある。体格及鼻目端正であるが、激しい労働を厭ひ、多く商業に従事してゐる。貧富の別なく男女室を異にし、又女子は外出の时頭部から長い袍衣を被り、顔は馬毛の網で覆ふ風習がある。宗教は回教を信じ、之によつて家

庭生活、社会生活、精神生活が支配されてゐる。

トルコメン族は、主として南部及東南部地方に住んでゐる。ロシヤ人に征服せらるゝ迄は純然たる野蛮人の生活をなし、掠奪を事とし、敵の俘虜を捕へ、之を奴隷として売ることもあつた。村落をなして土造の家、又は土と瓦で造つた家に住み、漸々文化の進んだ者はロシヤ式の木造家屋を営んでゐる。然し其の家屋内の生活状態は、全く他の遊牧人と異ならない。回教を信じて、固く古来の習慣を保持し、又族長制度が強固であつて異族の女と婚することは許されぬ。ロシヤ人に征服されて以来、旧来の蛮性を失ひ、勤勉な民族となつたが、尚ほ犠牲的精神に富み、外客を優遇し、友情を重んじ、礼義を正しくし、自尊観念の強い等の美徳を有してゐる。

カザク人はキルギス族の一派であり、遊牧を主とし、重ねて農業を営み、部族別にオルダと称する同盟を組織してゐる。カザラ共和国内のカラカルパク自治州に住むカラカルパク人はウズベク族に属し、文化漸々

進み、農業に従事しておる。
ダゲク族は概ね牧畜業を営み、羊、山羊、牛、馬、騾馬、駱駝等を多数に飼養しておる。
次に中央アジアの諸族は之を合計しても牛六百五六十万に止まり、其の占むる広大なる面積に対すれば、其の密度は甚だ粗である。尚ほロシヤ人に依る此の地方の征服以来、特に近時に至っては、ロシヤ人の移民が多く入り込み、その数は地方によりては屡々土着民より多くなってゐる。彼等は、主として南ロシヤの黒土地帯諸地方より出たウクライナ人で、之れ次いで大ロシヤ人も植民したのである。此等移民は農耕を主としたので、自然その感化をうけて遊牧の土民も定着するやうになったと云はれる。

第五節　シベリヤの民族事情

第一款　概説

今日シベリヤと云ふ行政区劃はなく、曽てのシベリヤは、トルキスタンを除いて悉くロシヤ社会主義聯邦ソヴェット共和國の一部に編入されてしまった。即ち曽ての植民地は本國そのものとなったのであるが、曽ては単なる原料生産地であり、穀倉と肉倉との役割をしか持たなかったシベリヤは、両三次に亙る五ヶ年計画の遂行により、一轉して所在に重工業を持ち、軍事の據点を持つ新しい世界を現出したのである。然し斯く行政上の名稱を失ったとは云へ、又近代化したとは云へ、シベリヤのもつ地理的性格及こゝに住む諸多の民族のもつ民族的性格は――ロシヤ人を始めとするヨーロッパ人が年と共に多く来住して、自然その影響を蒙むるのは当然であるが、――簡単に之を一変し得ないことは云ふ迄もない、
シベリヤの民族は周知の如く、甚だ多種に止り、或る学者の数ふる所

に依れば、土民だけでも二十二種に及び、之にヨーロッパ諸民族が十一種、更に東洋の文化民族たる支那人及朝鮮人の移住者を加ふれば三十六種となり、の外雑種を加ふると合計四十三種に達すると云ふ。然しながら之を大まかな人種的系統によって大別すれば、

(一)古代アジア族（十種族に分る）
(二)ツングース族（細かい部族に両分される）
(三)トルコ族（ヤクート族等）
(四)蒙古族（ブリヤート族）
(五)スラブ族（ロシヤ人、ウクライナ人）
(六)極東文化族（支那人、朝鮮人）
(七)セム族（ユダヤ人）
(八)其他

である。

此等の或者は原住民族であり、或者は外来民族であることは云ふ迄もない。而して諸民族が渇望して止まなかった争奪の地は、シベリヤ南部の森林ステップ及びステップの低地方である。この中原を望んで侵入したアジア諸族は、何れも狩猟民族か、遊牧民族であって、獲物を追ふか又は次に来たる他の強力な民族に追はれて広大なシベリヤに散布して行き、或ひはウラル山脈とカスピ海の間の所謂「民族の門」或ひは「欧洲の門」を通ってヨーロッパに侵入したのである。

斯くして最初の渡来者たる古代アジア人は最北に退き、やがてツングース族、蒙古族、トルコ族等が相次で来住し、それ〴〵の勢力に応じて、それ〴〵の位置を占めることになった。最後の渡来者たるスラブ族は、森林ステップ上を西から東に貫通して、先住諸民族を南北に両断してしまったのである。

以上の諸民族は、夫々民族的特性を保持しながらも、占據せる地域の自然的特性と結合して、その地域に特有の生活形態をとらざるを得なかった。最北のツンドラ地帯では遊牧、狩猟、漁撈の混合せる形態をとり

、中帯の原生林（タイガ）地方では狩猟、ステップ地帯では農牧、沙漠では遊牧と水利農が、更に極東の沿海地方では主として漁撈がそれぞれ営まれる如きである。

スラブの先住民に対する征服が成り、最後にソヴエット政権がシベリヤを支配するに至つて、諸民族の自治が原則として尊重せられ、有力なる諸族即ち「ヤクート」「ブリヤート・モンゴル」の如きは民族自治共和國を、「ハツカス」、「オイロート」の如きは民族自治州を形成してゐるのである。此の外に雜多な弱少原始民族は民族管区制の下に保護を加へられて居り、更にスラブ以外の文化民族にはユダヤ人と朝鮮人及支那人が相当に存し、ユダヤ人は黒龍江畔にユダヤ人自治州を作つてゐる。尚一九三九年調査のシベリヤ地方の人口（カザクスタンを含む）を掲ぐれば次の如くである。

地方		都市人口	農村人口	全人口
ウラル地方	スヴエドロフスク州	一、五〇八、五〇七	一、〇〇三、六六八	二、五一二、一七五
	バシュキール共和國	五三一、〇九六	二、六一三、六一七	三、一四四、七一三
	チエリヤビンスク州	一、一八一、八七一	一、六二一、〇七八	二、八〇二、九四九
	チユカロフ州	三七九、五一四	一、二九七、四九九	一、六七七、〇一三
(一)	右ウラル地方合計	三、六〇〇、九八八	六、五三五、八六二	一〇、一三六、八五〇
(二)	カザクスタン	一、七〇六、一五〇	四、四三九、七八七	六、一四五、九三七
シベリヤ	オムスク州	一、四九五、二九四	一、八七一、三〇九	二、三六六、六〇三
	ノーヴオ・シビルスク州	一、六五五、三六八	二、三六七、三〇三	四、〇二二、六七一
	アルタイ地方	四〇四、四四一	二、一一五、六四三	二、五二〇、〇八四

地方	都市人口	農村人口	全人口
シベリヤ　クラスノヤルスク州	五五一、四一九	一、三八八、五八三	一、九四〇、〇〇二
シベリヤ　イルクツク州	五六一、六七六	七二五、〇二〇	一、二八六、六九六
シベリヤ　ヤクーノク共和國	七八、六六七	三二一、八七七	四〇〇、五四四
シベリヤ　チタ州	五一〇、九〇〇	六四八、五七八	一、一五九、四七八
シベリヤ　ブリヤート・モンゴリヤ共和國	一六三、四二五	三七八、七八五	五四二、一七〇
(三)右シベリヤ合計	四、四二一、一九〇	九、八一七、〇五八	一四、二三八、二四八
(四)極東（大約）	七五〇、〇〇〇	二、二五〇、〇〇〇	三、〇〇〇、〇〇〇
以上四地域總計	一〇、四七八、三二八	二三、〇四二、七〇七	三三、五二一、〇三五

第二款　原住民族

シベリヤの諸民族を「原住諸民族」と「外来諸民族」の両者に区別するならば、前者に属する主なるものには古代アジア族、ツングース族、ヤクート族、ブリヤート族が擧げられ、ロシヤ人の東侵以前には、東部シベリヤ一帯がその天地であつたのである。「外来諸民族と云ふのは、十七世紀の初頭ロシヤ人が此の地方に侵入して以来の移住者であつて、ロシヤ人、ウクライナ人、白ロシヤ人など、主に欧露から移住したスラブ諸族を始め、ユダヤ人其の他、及アジアの南方から来た支那人、朝鮮人等を指すのである。此等原住民は所謂「自然民族」（古代アジア族、ツングース族）乃至は「半文化民族」（ヤクート族、ブリヤート族）に屬し、外来諸族に比して著しく文化の程度が低い。殊に殆んど農耕を営まず、牧畜、狩猟及漁撈を以て主たる生業とする古代アジア族、ツングース族などは、從来極めて未開な、原始的生活を續けて来たのであつて

、帝政時代には概ね衰滅の過程を辿ってゐたのである。ヤクート族及ブリヤート族は之に比すれば数段進んで居り、古くより牧畜を営み、帝政時代既に「遊牧的半文化民族」から、「定住的半文化民族」への過程を辿り、農耕の発達、商品貨幣経済の滲透及ロシヤ化の影響によって、部分的にはかなり近代化してゐた。今日ソヴェート政権下に於て彼等の文化水準は更に高まり、漸次「文化民族」に化しようとしてゐると云ふ。

最先に居住した原住民族は、過去に於て他の有力な種族に圧迫されて北へ北へと退避し、今日ではシベリヤでも最も北東隅に当る一帯の地域、即ちベーリング海及北氷洋に臨む地域にとぢ込められ（エスキモー族、チユクチ族）、その一部はカムチヤツカ半島に（コリヤク及カムチヤダール族）、或は内陸のコルイマ河上流に（ユカギル族）、又樺太島及アムール河口に（ギリヤーク族）、夫々と分布してゐる。然し此等の数を合計しても、現在漸く三四万程度の人口に過ぎずその生業は主として海獣や魚類の捕獲或ひは狩猟である。ソ聯邦は北の地方民族管区とな

して、此等弱少原始民族を保護してゐる。

ツングース族はシベリアには漸く七万位しか居住して居ないに拘らず、その分布地域は驚くべき広大な範囲に亘ってゐる。即ち西はエニセイ河の流域から、東はオホツク海の沿岸まで、北は北氷洋の沿岸地方から南はアムール河に至る一帯の地域に、文字通りの散在であるが、隈なく広がってゐる。尤もバイカル地方其他南部の鉄道沿線地方は、ロシヤ人やブリヤート人等に占められて居り、こゝではツングース族の点々たる「島」を見るのみである。シベリヤに於てもツングース族の最も密集してゐる本據的地方は、エニセイ河の右支流たるツングースカ河の流域である。

ヤクート族の基本的分布地域は、厖大なツングース族の分布地域を、其中央部に於てレナ河を中心として大幅に切断してゐるヤクーチヤである。ヤクート族の分布は、東はコルイマ河に達し、西はハタンガ河の西に及んで居り、その人口は現在三〇万以上と認められるが、九割八分ま

でがヤクーチヤに集中して居り、ヤクート自治共和國を形成してゐる。

ブリヤート族はバイカル湖を圍む一帯の地域、所謂ブリヤーチヤと呼ばれる地方に住む。

ソ聯領に住むブリヤート族の人口は約三十万と稱せられ、大部分は此の地方に集中して、現在ブリヤート、モンゴル自治共和國を形成してゐるが、一部は隣接のチタ州、イルクーツク州に散在し、又ソ聯領外では外蒙に一万六千、滿洲國に約一万の居住者があると云はれる。

第三款　スラブ民族

スラブ族が最初にシベリヤへ侵入したのは夙に十二世紀の頃と云はれる。始めノヴゴロドの商人達が武装してウラル以北の地を侵し、土民を

掠奪したり、貢物を徴したりしてゐたが、ノヴゴロトの没落後はモスクワの統治下に移つた。然るに十三世紀末にはシベリヤの中原に現はれた蒙古族は、「欧洲の門」を通過してロシヤへ侵入し、欧亜に跨る大帝國を建設して、ロシヤの封建諸侯をその傘下に（欽察（キプチヤク）汗國の支配下）に置き、却てスラブ族の蒙古化が行はれ、かざくなる特殊民族成長の素地が作られた。十五世紀初頭にキプチヤク汗國が分裂し始め、蒙古族の支配が稀薄となるに從ひ、小領主は漸次大領主に統一され、大ノヴゴロド、モスクワ王國の出現、延いてロシヤ帝國の出現に迄発展したのである。

此の間ノヴゴロドの冒險商人達は漸次ドビナ河に沿ふてタイガ中に進出し、当時の最重要商品であつた銀を手中に収め、次でペチヨラ河口から北極海に出で、ツンドラを通過してオビ河に達し、シベリヤタイガの土民との間に掠奪的な毛皮取引を行つた。殊にイワン雷帝の時代（十六世紀中葉）に至り、西欧との通商が漸く盛となるにつれて、毛皮其の他シベリヤの珍貴な天然資源が注目をうけ、ロシヤ商人は續々とシベリヤ

目がけて進出したのである。当時モスクワ公國は隆々たる勃興の気運にあり、既に蒙古タタール汗の覇絆を脱しつゝあったが、イワン雷帝が南方カスピ海に通ずるヴオルガ水路の獲得をめざして決然カザン汗國の攻略を開始したのを端緒として、間もなくウラル、ヴオルガ一帯の地を征服し、シベリヤ東侵の基礎は固められた。

ロシヤ人のシベリヤ進出に就て逸すべからざるはノヴゴロドの富商ストロガノフ家である。本来塩業を以て富をなしたのであるが、毛皮と銀とを大々的に手に入れようと欲して、モスクワ公の許可を得てシベリヤに道路を開き、都市を建設する計画を立て、大掛りなシベリヤ侵入を試みたのである。その際利用されたのが有名なカザクの匪賊團長エルアークであった。カザツクは別記の通り中亜からドン河下流に流れ込んだトルコ族と蒙古族の交流に、スラブの血が参加したものであるが、十六世紀以後にはロシヤ内部からの逃亡農民を主流とするやうになった。彼等は狩猟と遊牧とを生業としてゐたが、タタールの不断の襲撃のために全生活を

殆んど戦闘に打込んで、勇敢な戦闘力を貯へる様になった。之がストロガノフの利用するところとなり、又彼等自身がシベリヤに発展することにもなった。斯くてストロガノフ家の遠征の結果、十六世紀の末葉には早くも西シベリヤの全部が攻略せられ、土地はモスクワ皇帝領に献上せられ、土民には毛皮税が課せられた。一五八五年のチユメン、八七年のトボリスク、九六年のナリム、一六〇四年のトムスクの各城塞の建設は、ロシヤ人東侵の一里塚であり、又足場となった。更に十七世紀に入ってもカザツクの東進は止まず、初頭には早くも東部シベリヤを席捲し、一六一八年にはエニセイスク、二八年にクラスノヤルスクを建設し、三二年には北東ヤクーツクの城塞が築造された。ツングース族、ヤクート族、ブリヤート族などが、ロシヤの武力によって征服され始めたのはこの当時である。ザバイカルを侵したカザツク部隊は餘勢を駆って蒙古にまで進出し、更に北はヤクーチヤ、北氷洋の沿岸からカムチヤツカに至る迄ロシヤの國旗は一歩一歩進んで行った。一六四六年にはボヤルコフ

がオホーツク海に達し、四八年にはデシネフがベーリング海峡を横断して北氷洋から太平洋に出るに至った。アムール地方、沿海洲地方は、ずつと後の係合であるが、とも角十七世紀末までにシベリヤの大部分がロシヤの領有に皈したのである。かくて領土は拡大し、毛皮の徴税は増加したが、一方では軍隊や役人に支給する食料品の輸送は政府の負担を重くするのみであった。シベリヤで穀物を得るために流刑囚や各種の農業移民を送ったが、当時尚ほ殆ど効果をあぐることはできなかった。

黒龍江地方の略取に就ては、始め清朝と衝突したゝめ、一時之を放棄して、ロシヤ人は道を代へてカムチヤツカを発見し、コリヤークと戦ひ続けて一七〇七年には完全に之を占領した。一七三〇年代に行はれたベーリング等の数度の探険の結果は、豊富な海獣、魚類及最良の黒貂を発見し、十八世紀末には水産物と毛皮の集散する無数の商事会社が生れ、一七九八年此等はロシヤ皇帝保護の下に集中されて、独占的な露米会社が建立された。又一時放棄されたかに見えた黒龍江沿岸地方占領計画は、國際情勢の変化、清朝の実力衰頽と共に再燃し、遂に清朝を屈服せしめて、一八六〇年の北京條約に依り、ウスリー河以東の現在の國境線が、確定されるに至った。

斯くして全シベリヤを完全に占領した帝政ロシヤは更に南下して満洲、朝鮮に羽翼を延ばすに至ったが、その結果は日露戦争の勃発となって、圧くなき南下は茲に完全に阻止にせられるに至った。

帝政ロシヤのシベリヤ植民地経略は、異種族に対する徹底的な抑圧と搾取とによって一貫された。征服されたシベリヤの諸民は、ツアーに依り法外に高率税（特に毛皮税）を課せられ、又官吏を始め自由な植民者より頻りに掠奪され、或ひは半ば強奪的な「取引」を己むなくされた。殊に十八世紀末には土人との「取引」が大部分官吏の手に移り、行政権と商業的搾取とを一手に掌握した官吏の收奪行為は益々土民の零落を甚しからしめた。斯くの如き一切の生活手段を取上ぐる暴力的掠奪、大量的な虐殺、土地の徒收及追放は、シベリヤで「ロシヤ」病と呼ばれた始

柳病の蔓延や、ウオツカの害毒と相俟つて、シベリヤの弱少諸民族を急速に衰滅の渕に追ひつめたのである。ロシヤ人の少い地方では相当の自然増加を示してゐた異種族も、ロシヤ人の町村の近接地では著しく死亡率が高くなつた。

異種族よりの収奪がなされ尽くし、もはや何物も残されざるに及んで、ロシヤのシベリヤ政策は茲に一変して移民事業の発達に重点をおくこととなつた。即ち初期の移民は政治犯や國教反対者の流刑、此等に混る若干の自由移民（その多くは農奴制の重圧からの逃避者、苛酷な募兵制度の忌避者、或は長子相続制に累された次男以下の離村者であつた）であつて、官吏が分与された都市近傍の農場、カザツク分与地の農場等の周囲に聚つて村落を形成したのである。然るに十九世紀の八十年代から政府によつて積極的に農業移民が送り出される様になつた。殊に歐露方面に於ける相対的土地不足、農村人口過剰が顕著となり、農業問題が漸やく深刻化せんとするに及び、ロシヤ政府はシベリヤへの農業移民を大

いに奨励した。先づ西部シベリヤに大量の移民が送られたが、やがてシベリヤ鉄道の開通するに及び、特に此種移民が増加し、又東漸していつた。西部シベリヤでは既に異種族は衰滅するか、又は北方のツンドラ地帯に移動してゐたので、さしたる影響を与へなかつたが、東部シベリヤ特にバイカル地方に於てはブリヤート人、ツングース人等が尚ほ多数居住してゐたので、ロシヤ農業移民を入植させるには、彼等の土地を収奪せざるを得なかつた。即ちブリヤート人は放牧の土地を失ひ、耕作農民に強制され、その固有の牧畜経済は破壊された。尤も官吏や僧侶等を除けばロシヤ人は個人としては概して民族的偏見は甚だ少なく、異民族との混住によつても別段複雑な葛藤を起す様な事は稀であつた。中にはヤクート族に混住する一部のロシヤ人の如く、すつかり異民族に同化し去つたものすら存する。

斯くしてロシヤ人は、シベリヤ、極東における政治産業、交通の中心地、云ひ換へれば要所要所を悉く占めてゐるのであつて、今や總人口三

千数百万の中圧倒的多数を占めるに至り、而も自然的條件に恵まれた南部の地帯にかなり稠密に集中してゐるのである。即ちイルクーツク方面からザバイカルを通つてアムール河に走り、南下してウラヂオストツクに至る鉄道線路に沿ふ一帯の細長い地域には、殆んど間断なくロシヤ人が分布して居り、東に於てはアムール河下流地方から樺太へ、更にカムチヤツカへと、その分布地域は点々と飛び、遂ひには北氷洋に及んで居る。西に於てはレナ河に沿ふてヤクーツク乃至それ以北にも及び、政治上或ひは資源の開発上多少とも重要な意義をもつ地方で、ロシヤ人の足跡の及んでゐない地点はない。而も総ての都市は悉くロシヤ人の都市であると云つてよいのである。革命以後、殊に最近年、極東に於ける國防経済の強化、軍備の充実が愈々本格的となるにつれて、ロシヤ人の移民及び赤軍の数も益々増加し、ロシヤ人の比重は更に増大してゐるのであつて、ブリヤート及ヤクート自治共和國を除くバイカル以東の地方（チタ州、ハバロフスク地方、沿海地方）のみでも今日二百五十万以上のロ

シヤ人がゐるものと推定されてゐる。

以上はロシヤ人、即ち帝政時代の大ロシヤ人についてゞあるが、次にウクライナ人は主に沿海地方に於て、農業に従事して居り、ウスリー地方、ウスリー河右支流の下流地域、その他海岸線に沿ふ一帯の地方が、その分布地域である。一九二六年の國勢調査によれば所謂、極東地方のウクライナ人は約三十二万人であつたが、現在の数は詳しく之を知ることが出来ない。但しその数は餘り増加してゐないものと認められる。

白ロシヤ人も主として沿海地方、ハバロフスク地方の各地に住み、殊に森林地帯に散在してゐる。一九二六年当時極東におけるその人口は約四万と言はれ、主に農業を営んでゐたが、現在の状態は之亦詳しく知ることを得ない。

第四款　其他の外来民族―ユタヤ人、朝鮮人
支那人―

第一ユダヤ人

ソ聯邦内には古くからユダヤ人が多数居住し、帝政時代に極端な圧迫を加へられてゐたことは有名である。現在その数は約四百六十万と言はれてゐるが、主として欧露方面に居住し、又西部國境辺、旧ポーランド、バルト地方の各都市に集團して居り、シベリヤでは以前からずバイカ地方に若干住人でゐるたに止まる。

ユダヤ人は現在ドイツを始め中西部ヨーロッパ諸國より駆逐せられ、世界の涯々を遍歴して安住の地を求めようとしてゐるが、ソヴエート聯邦に於ては民族自治の趣旨に依り、ユダヤ人の自治を許す事とし、近年極東のアムール河に沿ふビロビヂヤン地方に新しく「ユタヤ人自治州」が建設された。右のユダヤ人自治州には、主として欧露方面から移民

として流入して来たのであるが、その移民計画は予定通り進行してゐないもの丶如く、現在約十万程度の人口を数ふるに止まつてゐる。主として農業が営まれ、穀物、牧畜、其他華果、桃、日本柿の産があり、又各種の軽工業も建設されてゐる。

第二　朝鮮人

朝鮮人は十九世紀後半から農業移民としてウスリ河畔の國境に近い土地に入り込み、尓来沿海州の各地に廣がつていつた。一九二六年当時極東に於ける朝鮮人は約九万三千であつたが、漸次増加して三十六、七年頃には十七万に達した。然るにその大部分は如何なる動機に依るものか、一九三七年頃ソ聯政府によつて中央アジアの方面に強制的に移住せしめられ、沙漠の水田化に當らしめられてゐると云ふ。現在蘇聯邦内の朝鮮人の数は約二十万である。

第三　支那人

支那人は主として十九世紀の末葉から苦力としてロシヤ領極東地方に移住し、一九二六年には極東地方に約二万の人口を数へてゐたが、漸次

増加して一時七万以上に達した。その大部分が沿海地方、ハバロフスク地方の工業中心地にゐるものゝ如く、そのウスリー河畔に居住した者は朝鮮人と同様先年中央アヂアの沙漠に移されて、沙漠の水田化に從事させられてゐる。但し現在ソ聯邦内に止まる支那人の數は朝鮮人に比して遥かに少く、總數三万に足らない如くである。

第六節　人口事情

第一款　總人口の趨勢

ソヴエート聯邦は全世界陸地面積の六分の一を占め、人口密度こそ甚だ粗であるが、總人口に於ては、支那、印度に亜ぐ大量を擁し、世界第三位を占めてゐる。帝政末期以来最近までの總人口及一八九七年を一〇〇とせる指數を掲ぐれば次の如くである。

	千人	
一八九七年二月九日調査	一〇六、四三二	一〇〇
一九一四年一月一日推定	一三九、三一三	一三一
一九一八年一月一日推定	一四二、五八〇	一三四
一九二〇年調査	一三四、二〇〇	一二六
一九二六年調査	一四七、〇二八	一三八
一九二八年一月一日推定	一五〇、四二七	一四一

一九二九年一月一日推定	一五四、二八八千人	一四五
一九三〇年一月一日推定	一五七、四四四	一四八
一九三一年一月一日推定	一六〇、四三〇	一五一
一九三二年一月一日推定	一六三、一六六	一五三
一九三三年一月一日推定	一六五、七四八	一五六
一九三四年一月一日推定	一六八、〇〇〇	一五八
一九三七年末　推定	一六九、〇〇〇	一五九
一九三九年　調査	一七〇、四六七	一六〇

右は調査人口と推定人口とを並列したものであり、又地域の返還も考慮に加へられてゐるか、どうかも疑しいので、どれだけの確実性があるか固より議論の餘地があらうが、もし大勢を察するに差支えないものとすれば、ソ聯邦の人口は戦争、内乱及飢饉の時代に一時数百万の人口を喪って、総人口に於て絶対的減少を示したにも拘はらず爾後漸次恢復して十九世紀の末から約四十年の間に約七千万、即ち大割の人口を増加して、

ゐることを知るのである。而して一九二〇年以前と姑く除き、その趨勢を多少分析的に観察すれば、其の自然増加の趨勢が著しく低下傾向にあることを知るのである。

由来ソ聯邦は帝政時代以来、多産國として有名であり、其の出生率は西欧諸國と同日の談ではなかった。勿論死亡率も甚だ高かったが、その自然増加率は世界にも冠たるものであった。プロコポウィチ教授がソ聯邦の資料から得た出生率及死亡率並に自然増加率を示せば次の如くである。

ソ聯邦欧露地方	出生	死亡	自然増加
一九一一—一三年	四五、五	二八、六	一六、九
一九二四年	四二、九	二二、〇	二〇、九
一九二五年	四四、二	二二、九	二一、三
一九二六年	四三、五	一九、九	二三、六
一九二七年	四二、七	二一、〇	二一、七

一九二八年	四二、一	一八、一	二四、〇
ソ聯邦全体			
一九二六	四四、〇	二〇、三	二三、七
一九三〇	三九、二	二〇、四	一八、八

然し乍ら此比類なき高自然増加率も、一九三〇年代から漸次低下の傾向に移り、曾ては三百万の自然増加を見、年々芬蘭一國分の人口が殖えると誇称してゐたのが、第一次五箇年計画、第二次五ケ年計画の時代を通じて著しく落調を呈するに至ったのである。今二八年以後年初に於ける人口趨勢を見るに次の如くである

年次	年増加数	増加率
一九二八年	三、七六九千人	二五、一（千人に付）
一九二九年	三、二四八	二一、一
一九三〇年	二、九八六	一八、八
一九三一年	二、七三六	一七、一

一九三二年	二、五一五	一五、四
一九三三年	二、五八二	一五、六

一九三四年以後は精数を欠いてゐるが、その推定数の増加及その割合は既掲の如く著しく低少である。斯く自然増加数の逓減及率の低下の原因は、主としてこの期間に施行された人口の都市集中、即ち工業化にあるものと考へられる。即ち一九二八年から一九三二年迄に約千二百万人が農村より都市に流入して居り、此の傾向は其の後に於て更に顕著であると認められるが、此の厖大なる人口の離村向都は当然出生率に影響を与へたに相違ないのである。蓋し都市に於ては死亡率は農村より低いが、出生率はそれ以上に農村よりも低く、従って自然増加率も農村より著しく低いことは、世界的共通の事実であるからである。殊にソヴエット聯邦の如く急速に都市化、工業化を強行した國に於ては、住宅問題生活資料の問題、婦人の労働進出問題等が、結婚を阻害し、出産を阻害するの條件となったと認められる。之と共に一時自由放任されたゝめに起った

家庭生活の紊乱、頻々たる離婚、公然たる堕胎等が、人口増加に悪影響を與へたことは想像するに難くない。

第二款　都鄙別人口

ソ聯邦は周知の如く世界の大農業國であり、最近急速な工業化都市化が行なはれてゐるけれども、尚國民の圧倒的部分が農村にあることは云ふ迄もない。今都鄙別の人口割合を見れば次の如くである。

	全人口（千人）	都市人口（千人）	農村人口	都市人口（%）	農村人口（%）
一八九七年二月九日の人口調査	一〇六、四三二、三	一五、八二五、六	九〇、六〇六、七	一四、八七	八五、一三
一九一四年一月一日の推定	一三九、三一二、七	二四、六八六、六	一一四、六二六、一	一七、七二	八二、二八
一九二六年十二月十七日の第二次調査	一四七、〇二七、九	二五、七八三、四	一二一、二四四、五	一七、五四	八二、四六
一九二九年一月一日の推定	一五四、二八七、七	二七、六三〇、二	一二六、六五七、五	一七、九一	八二、〇九
一九三三年一月一日の推定	一六五、七四八、四	三九、七三九、二	一二六、〇〇九、二	二三、九八	七六、〇二
一九三四年一月一日の推定	一六八、〇〇〇、〇	四〇、三〇〇、〇	一二七、七〇〇、〇	二三、九九	七六、〇一
一九三九年一月十七日の第三次調査	一七〇、四六七、〇	五五、九〇九、九	一一四、五五七、三	三二、八〇	六七、二〇

斯くの如く都市人口の割合は、一九二六年の一七、九%から一九三三年の二四%、一九三九年の三二、八%と躍進し、一九二六年以後の十二年間に於て人口五万以上の都市は八十五から百七十四に増加し、都市人口は二倍以上に増大したのである。都市人口が倍加するのは國々と時代とによって異なるが、米國は三十年、ドイツは四十年、英は実に七十年を要したと云はれる。我國の市部人口には大正九年に約一千万であったが、昭和十年には二千二百六十万となり、又大正十四年千二百九十万だったのが、昭和十五年には二千七百六十万となって、夫々十五ヶ年に倍加してゐる。然るにソヴエット聯邦に於ては、十二ヶ年を以て倍加したのであって、その急激なることと驚くべく、シベリヤの曠原に於てさへも「男女子供達が一夜にして一つの都市を造り上げてしまった。」のである。今試みにロシヤ共和國の都鄙別人口を州別或は地方別に掲げて見よう。

共和國地方州	人	口	數
	都市	農村	計
ロシヤ共和國	36,658,008	72,620,606	109,278,614
1、アルタイ地方	404,441	2,115,643	2,520,084
内キイロート自治州	23,573	137,858	161,431
2、アルヘンゲリスク州	435,290	763,888	1,199,178
3、バシキル自治共和國	531,096	2,613,617	3,144,713
4、ブリヤート、モンゴール自治共和國	163,425	378,745	542,170
5、ヴォロコド州	284,981	1,377,277	1,662,258
6、ヴォロネジ州	657,676	2,893,333	3,551,009
7、ゴリキー州	1,218,900	2,657,374	3,876,274
8、ダゲスタン自治共和國	196,480	734,047	930,527
9、イワノフ州	1,168,395	1,481,988	2,650,383
10 イルクーツク州	561,676	725,020	1,286,696
11、カベルヂンニバルカル自治共和國	84,662	274,574	359,236
12、カリーニン州	702,704	2,508,735	3,211,439
13、カルムイク自治共和國	35,023	185,700	220,723
14 カレリ自治共和國	150,440	318,705	469,145
15 キーロフ州	328,649	1,897,460	2,226,109
16 コミ自治共和國	29,163	289,806	318,969
17 クラスノダール地方	764,844	2,408,041	3,172,885
内アジヘイ自治州	67,302	174,471	241,773
18 クラスノヤルスク地方	551,419	1,388,583	1,940,002
内バッカス自治州	109,416	161,239	270,655
19 クリム自治共和國	585,701	541,123	1,126,824
20 クイブイシエフ州	773,153	1,994,409	2,767,562
21 クールスク州	286,215	2,910,599	3,196,814
22 レニングラード州	4,119,230	2,315,846	6,435,076

共和國地方州	人口數		
	都市	農村	計
23. マリー自治共和國	75,873	503,583	579,456
24. モルドウ自治共和國	82,486	1,106,112	1,188,598
25. モスクワ州	6,268,331	2,650,058	8,918,389
26. ムルマンスク州	245,371	45,817	291,188
27. 獨逸人沿ボルガ自治共和國	131,647	473,895	605,542
28 クヴキシピルスク州	1,655,368	2,367,303	4,022,671
29. オムスク州	495,294	1,871,309	2,366,603
30. オルジヨニキーゼ地方	394,469	1,554,871	1,949,340
内 カラチヤエフ自治州	10,623	139,302	149,925
チエルケッス自治州	28,646	63,888	92,534
31. キロフ州	693,066	2,789,322	3,482,388
32. ペンゼン州	283,230	1,425,376	1,708,656
33 ペルミ州	822,804	1,259,362	2,082,166
34 沿海地方	464,509	442,711	907,220
35 ロストフ地方	1,263,097	1,630,941	2,894,038
36 リヤザン州	218,797	2,047,076	2,265,873
37 サラトフ州	665,763	1,133,042	1,798,805
38 スウエルドロフスク州	1,508,507	1,003,668	2,512,175
39 北オセチン自治共和國	154,851	174,034	328,885
40 スモレンスク州	447,996	2,242,783	2,690,779
41 スターリングラード州	892,757	1,396,292	2,289,049
42 タンボフ州	281,024	1,601,115	1,882,139
43 タタール自治共和國	621,859	2,297,564	2,919,423
44 トウーリ州	711,240	1,338,710	2,049,950
45 ウドムルト自治共和國	320,720	899,287	1,220,007
46 ハバロフスク地方	647,653	783,222	1,430,875

共和國 地方 州	人口数 都市	農村	計
内猶太人自治州	71,634	36,785	108,419
47 チエイヤビンスク州	1,181,871	1,521,078	2,702,949
48 チエチエノ・イングーシ自治共和國	198,669	498,739	697,408
49 チタ州	510,900	648,578	1,159,478
50 チカロフ州	379,514	1,297,499	1,677,013
51 チユバシ自治共和國	131,533	946,081	1,077,614
52 ヤロスラウスク州	796,529	1,474,778	2,271,307
53 ヤークト自治共和國	78,667	321,877	400,544

（暫定資料）

次に一九三九年に於て人口五万以上を数へた百七十四都市につき、一九二六年の人口に対する増加率を掲げ、如何にその膨脹が急激であるかを見よう。

人口5万以上の都市に就き1926年と比較したる1939年の人口数

都市名	人口 1926年12月17日現在	1939年1月17日現在	1939年の1926年に対する%
1 モスクワ	2,029,425	4,137,018	203.9
2 レニングラード	1,690,065	3,191,304	188.8
3 キエフ	513,637	846,293	164.8
4 ハリコフ	417,342	833,432	199.7
5 バクー	453,333	809,347	178.6
6 ゴーリキ	222,356	644,116	289.7
7 オデッサ	420,862	604,223	143.6
8 タシケント	323,613	585,005	180.8
9 トビリシ	294,044	519,175	176.6
10 ロストフドーヌ	308,103	510,253	165.6
11 ドニエプロペトロフスク	236,717	500,662	211.5

都市名	人口 1926年12月17日現在	人口 1939年1月17日現在	1939年の1926年に対する %
12 スタリーン	174、230	462、395	265、4
13 スターリングラード	151、490	445、476	294、1
14 スベルドロフスク	140、300	425、544	303、3
15 ノボシビリスク	120、128	405、589	337、6
16 カザニ	179、023	401、665	244、4
17 クウィブイシエフ	175、636	390、267	222、2
18 サラトフ	219、547	375、860	171、2
19 ヴオロネージユ	121、612	326、836	268、7
20 ヤロスラブリ	114、277	298、065	260、8
21 サボロージユ	55、744	289、188	518、8
22 ノヴフノボ	111、460	285、069	255、8
23 アルハンゲリスク	76、774	281、071	366、1
24 オムスク	161、684	280、716	173、6
25 キエリヤビンスク	59、307	273、127	460、5
26 トーラ	155、005	272、403	175、7
27 ペルミ	119、776	255、196	213、1
28 アストラハニ	184、301	253、655	137、6
29 ウーファ	98、537	245、863	249、5
30 イルクツーク	108、129	243、380	225、1
31 マケユフカ	79、421	240、145	302、4
32 ミンスク	131、803	238、772	181、2
33 アルマ、アタ	45、395	230、528	507、8
34 マリウーポリ	63、920	222、427	348、0
35 カリーニン	108、413	216、131	199、4
36 ヴオロシーロフグラード	71、765	213、007	296、8
37 ウラヂオストーク	107、980	206、432	191、2

都市名	人口		1939の1926年に対する %
	1926年12月17日現在	1939年1月17日現在	
38 クラスノダール	161,843	203,946	126.0
39 エンバン	64,613	200,031	309.6
40 ハバロフスク	52,045	199,364	383.1
41 クリヴオイローク	38,228	197,621	517.0
42 クラスノヤルスク	72,261	189,999	262.9
43 タガンローク	86,444	188,808	218.4
44 イギエフスク	63,221	175,740	278.0
45 ヤロスラフ	123,283	172,925	140.3
46 グローズヌウイ	972,087	172,468	177.6
47 スターリンスク	3,894	169,528	4353.8
48 ウィテュブスク	98,857	167,424	169.4
49 イヴァノヴォ	104,909	167,108	159.3
50 カラガンダ	—	165,937	—
51 インジェニータギール	38,820	159,864	411.8
52 ペンザ	91,924	157,145	171.0
53 スモレンスク	78,520	156,677	199.5
54 シヤハトイ	41,043	155,081	377.9
55 バルナウル	73,858	148,129	200.6
56 ドニエプロジェルジンスク	34,150	147,829	432.9
57 スターリノゴルスク	—	145,870	—
58 ゴメーク	86,409	144,169	166.8
59 キーロフ	62,097	143,181	230.6
60 シムフエロポリ	87,213	142,678	163.6
61 トムスク	92,274	141,215	153.0
62 ルイビンスク	55,647	139,011	250.3
63 サマルカンド	105,206	134,346	127.7
64 カメロヴオ	21,726	132,978	612.1

都市名	人口 1926年12月17日現在	人口 1939年1月17日現在	1939年の1926年に対する %
65 ポルタヴァ	91、984	130、305	141、7
66 ウランウデユ	28、918	127、172	447、5
67 オルジョニキーゼ(セヴェロオセチンスク共和国)	78、346	126、580	162、3
68 アシユハバッド	51、593	121、285	245、3
69 タムボヴ	72、256	121、205	167、9
70 コストローマ	73、732	119、972	164、4
71 クルスク	82、440	119、972	145、5
72 ムルマンスク	8、777	117、054	1333、6
73 セバストポーリ	74、551	111、946	150、2
74 オリユール	75、968	110、567	145、5
75 セミパラチンスク	56、871	109、774	193、0
76 ゴルロフカ	23、125	108、693	470、0
77 プロコピユフスク	10、717	107、227	1000、5
78 ケルチ	35、690	104、471	292、7
79 ドゼルヂンスク	8、910	103、415	1160、7
80 チタ	61、526	102、555	156、7
81 ウリヤノフスク	70、130	102、106	145、6
82 キロヴオグラード(ウクライナ共和国)	66、467	100、331	150、9
83 モギリコフ	50、222	99、440	198、0
84 オリユオヴオ、ズウユヴオ	62、841	99、329	158、1
85 ズラトウスト	48、219	99、272	205、9
86 キロヴアバット	57、393	98、743	172、1
87 ヘルソン	58、801	97、186	165、3
88 リヤザニ	50、919	95、357	187、3
89 ノヴオヒシイスク	67、941	95、280	140、2
90 ヴオログダ	57、976	95、194	164、2

都市名	人口		1939年の1926年に対する %
	1939年12月17日現在	1939年12月17日現在	
91 ジトミール	76,678	95,090	124.0
92 コンスタンチノフカ	25,303	95,087	375.8
93 クラマトルスク	12,348	93,350	756.0
94 ヴィニッツア	57,990	92,868	160.1
95 フルンゼ	36,610	92,659	253.1
96 ペトロパヴロフスク	47,361	91,678	193.6
97 セルプーホフ	55,891	90,766	162.4
98 クレメンチーク	58,832	89,553	152.2
99 ガルガ	51,565	89,484	173.5
100 オルジヨニキーゼ(ウクライナ共和國)	24,329	88,246	362.7
101 ブリヤーンスク	45,962	87,473	190.3
102 マハチユ、カーラ	33,552	86,847	258.8
103 ウオロシースク(オルジヨニキーゼナガ)	58,640	85,100	145.1
104 コカンド	69,324	84,665	122.1
105 ホブルイスカ	51,296	84,107	164.0
106 アンジジアン	73,465	83,691	113.9
107 アルマヴィール	74,523	83,677	112.3
108 スタリナバード	5,607	82,540	1472.1
109 オルジヨニキーゼグラード	36,040	82,331	228.4
110 レニンスク、クヅネッツキー	19,645	81,980	417.3
111 クタイシ	48,196	81,479	169.0
112 ノヴオチエルカスク	62,294	81,286	130.5
113 ノギンスク	38,494	81,024	210.5
114 ピースク	45,561	80,190	176.0
115 ペロウオ	23,711	77,729	327.8
116 ジズラーニ	50,293	77,679	154.5

都市名	人口		1937年の1926年に対する %
	1926年12月17日現在	1937年1月17日現在	
117 ナマンガン	73、640	77、351	105、0
118 スタリノゴルスク	—	76、207	—
119 メリトーポリ	25、289	75、735	299、5
120 スラヴヤーンスク	28、771	75、642	262、6
121 キユーメニ	50、340	75、537	150、1
122 キニユシユマ	34、110	75、378	221、0
123 コロムナ	30、767	75、139	244、2
124 チムケント	21、018	74、185	353、0
125 エーンゲリス	34、345	73、279	213、4
126 ペダリスク	19、793	72、422	365、9
127 アンジユロ、スドジエンスク	30、199	71、079	235、4
128 ペトーミ	48、474	70、807	146、1
129 コムンモリスク	—	70、740	—
130 ヴオロシーロフ	35、344	70、628	199、8
131 ロシノオスメロフスク	15、624	70、480	451、1
132 ミチユリンスク	49、853	70、202	140、8
133 セルゴ	27、105	69、728	257、3
134 レニナカン	17、224	68、360	396、9
135 チユルニゴフ	42、313	67、707	160、0
136 マイコツプ	35、234	67、356	191、2
137 コヴロフ	53、033	67、302	126、9
138 ウラヂミール	26、584	67、163	252、6
139 リペツク	39、654	66、761	168、4
140 ベルヂチヨーフ	21、439	66、625	310、8
141 ペルヂチヨーツ	55、613	66、306	119、2
142 ウラリスク	36、352	66、201	182、1

都市名	人口		1939年の1926年に対する%
	1926年12月17日現在	1939年1月17日現在	
143 キユレムホーヴオ	14、485	65、907	455、0
144 オルスク	13、581	65、799	484、5
145 オデジョジンスク	33、346	64、719	194、1
146 リユヴリーノ	8、391	64、332	766、7
147 スムイ	44、213	63、883	144、5
148 ヴヴイシュニーヴオロチョーク	32、022	63、642	198、7
149 ベレズニヤーキ	16、138	63、575	393、9
150 ペヤキゴルスク	40、674	62、875	154、6
151 ドジヤムブール	24、761	62、723	253、3
152 クンツユヴオ	9、978	60、963	611、0
153 ムイキーシキー	17、054	60、111	352、5
154 プスコフ	43、226	59、898	138、6
155 プラゴヴエシチエンスク	—	58、761	—
156 キヤパユフスク	13、529	57、995	428、7
157 シユーヤ	34、479	57、950	168、1
158 ニユポーリ	14、214	57、841	406、9
159 コボリコフスク	29、674	56、340	189、9
160 アルキユミユフスク	37、780	55、165	146、0
161 ヴオリスク	35、272	55、053	156、1
162 ヴオロシーロフスク(ウクライナ共和国)	16、040	54、794	341、6
163 フヤルドジヨウ	13、950	54、739	392、4
164 ルザヨーフ	32、810	54、081	164、8
165 クルガン	27、996	53、224	190、1
166 ボリングリユフスク	39、788	52、056	130、8
167 チヌールカスイ	39、511	51、693	130、8
168 ベルドヤーンスク	26、408	51、664	195、6

都市名	人口		1939年の1926年に対する%
	1926年12月17日現在	1939年1月17日現在	
169 キスロヴォドスク	25,913	51,289	197.9
170 ルイン、ヴァ	27,279	51,192	187.7
171 カメンスク	5,367	50,897	948.3
172 エリヨーツ	43,239	50,888	117.7
173 クラスヌイルーチ	12,425	50,829	409.1
174 ブハーラ	46,778	50,382	107.7

第三款　年齢別構成

ソ聯邦政府の発表する人口の年齢別構成は、一般に見らるゝ処と其の区切り方に於て甚だ異ってゐる。今一九二六年及び一九三九年の年齢構成を掲ぐれば次の如くである。但し之は男女合計であり、且つ西ウクライナ及び白ロシヤの分を除いたものである。

ソ聯邦人口の年齢別構成

年令別	実数（単位千人）		百分率 %	
	1939年	1926年	1939年	1926年
8歳以下	31、412、2	31、935、1	18、5	21、7
8—12歳	16、409、1	11、226、2	9、6	7、6
12—15〃	13、336、1	11、521、4	7、9	7、8
15—20〃	15、124、1	16、976、5	8、9	11、5
20—30〃	30、639、0	25、851、0	18、1	17、6
30—40〃	25、333、0	17、517、7	14、9	11、9
40—50〃	15、235、9	12、862、9	9、0	8、8
50—60〃	10、867、4	9、802、9	6、4	6、3
60歳及ビ60歳以上	11、129、3	9、802、9	6、6	6、7
不詳	1) 32、9	88、7	0、0	0、1
總計	169、519、1	147、027、9	100、0	100、0

註 1) 西ウクライナ及ビ白ロシヤを除く

即ち八才以下の小児は一九二六年には總人口の二一、七%を占めてゐたが、一九三九年には一八、五%となり、各年令層平均は三百九十三万人である。之に対して八才乃至十二才の各年令層平均は四百十万、十二才乃至十五才は四四四万で、比較的多数であるのは、晩近の出産力減退を物語るものに外ならない。然し一般に幼年者及び青年者層の占むる割合は西欧諸國に比して遥かに高く、之に反して壮年者及び六十歳以上の老年者の割合は著しく低い。例へば六十歳以上の割合は六、六%であるのに対して、ドイツでは一二、二%で約倍率を示してゐるのである。

年齢層を更に大きく区畫して見ると次の如き比率を得る。

	一九二六年	一九三九年
二十才未満	四八、六%	四五、〇%
二十才乃至四十才	二九、五	三三、〇
四十才乃至六十才	一五、一	一五、四
六十才以上	六、八	六、六

二十才未満の者は總人口の約半分を占むるが、（ドイツは三〇、九%）之は革命後に生れた青少年層であって、一九一九年から一九三八年迄の出生数は七千六百三十万に達する。二十才から四十才までの壯年層は人口の約三分の一、即ち五千六百万であって、前世界大戦に参加せるもの及び大戦前に青層年期を經過した老年層は總人口の一二%、三千七百二十万人に過ぎない。（ドイツでは当該人口の割合は三六、〇%である。）一九二六年に比すれば、幼少年層の割合は微減してゐるが、然し他の諸國に比べれば依然相当の高率である。試みに十五才以下の者の割合を若干の欧洲諸國と比べて見よう。

ソ聯邦	三六、二%
ドイツ	二三、三%
イギリス	二二、一%
オランダ	二八、六%
ルーマニヤ	三四、七%

要するにソ聯邦人口の年齢構成を観るに、西欧諸國に比して幼少年層の比率が著しく高く、之は正に出生率の大、從て又自然増加率の大を物語るものに外ならないが、之を十二年前と比すれば、其間幼少年層の占むる比率が稍々低下してゐるのを知るのである。之は云ふ迄もなく前款に記した様に、諸種の原因の下に出産力が衰へたことを証するものである。

尚、以上は男女を一緒にした統計であるが、男女別に見た各年齢層の比率は次の如くである。但しこの数字は一九三一年一月一日現在の推定人口を基礎とするものであるから、現在とは幾分違ふかも知れない。

年齢	男	女
〇—三	一三、三七%	一二、〇六%
四—七	一一、二四	一〇、四〇
八—一一	八、四七	七、九一
一二—一五	七、二八	六、七一

年齢	男	女
一六—一七	五、一八%	四、六六%
一八—一九	四、七六	四、四一
二〇—三九	二九、〇七	三一、四一
四〇—四九	八、八七	八、九九
五〇—五九	五、九一	六、四〇
六〇才以上	五、八五	七、〇五

第四款　職業別構成

ソ聯邦當局の發表する人口の職業別或ひは社会別構成も、他の諸國のそれと大いに異つてゐる。今一九三九年の調査に於ける職業別構成を掲ぐれば次の如くである。

職業別	人口（家族を含む）	
	單位千人	百分率
都市及び地方に於ける労働者	54、566、3	32、19
都市及び地方に於ける給料生活者	29、738、5	17、54
集團農民	75、616、4	44、61
協同組合に加入せる家内労働者	3、888、4	2、29
協同組合に加入せざる家内労働者	1、396、2	0、82
個人農	3、018、0	1、78
無職	60、0	0、04
不申告者	1、235、3	0、73
合計	169、519、1	100、00

即ち最大の割合を占むるグループは集団農民で、總人口の約四五%に達する。之に次ぐのは都市及地方に於ける労働者で總人口の約三分ノ一、第三位は俸給生活者（總人口の約六分ノ一）である。労働者及び俸給生活者を合計すれば、数に於て遥かに集団農民を越え、總人口の約半分に達する。独立農民は僅かに一、八%を占むるに止まり、又無職者の割合は殆んど零に近い微数である。

一九二八年（第一次五ケ年計画開始年度）の職業別比率と、一九三七年（第二次五ケ年計画最後年度）及び一九三九年のそれとを比較対照すると次の如くであって、（一九三九年第十八回黨大会におけるモロトフの報告による）ソ聯邦人口の職業構成或ひは社会構成の変化が明瞭に看取されるのである。即ち労働者及び俸給生活者の割合は一九二八年から三七年迄に二倍以上となり、一九三九年には殆んど三倍になった。集団農民及び協同組合加入の家内労働者の割合は、一九二八年から三七年迄は飛躍的に上昇したが、其後労働者及び俸給生活者の割合が上昇するにつ

總人口に占める各社会別人口比率の変化

職業別	總人口に占める割合		
	1928年	1937年	1939年
労働者及び俸給生活者	17%	35%	49.7%
集団農民及び協同組合加入家内労働者	3	55	46.9
個人農及び協同組合未加入家内労働者	73	6	2.6
その他	2	4	0.8
資本主義的分子	5	—	—
合計	100	100	100

れて、下降に轉じた。「資本主義的分子」は消滅し、独立農民及び家内労働者は今や全くその影を没しようとしてゐる。斯くして両三項の五ケ年計画は、その都市化、工業化、集団農化の政策を通じて、ソ聯邦全民衆の社会的、職業的構成を根本的に変革したのである。

第七節　民族政策の基調

ソ聯邦の民族政策は上記の各節に於てもそれぞれ断片的に関説したが、茲にその基本的な動向を略説しよう。

由来帝政ロシヤの異民族に対する政策は、専ら大ロシヤ人の利益の為に、政治的には之を極力圧制屈従せしめ、文化的にはその向上を阻止し、経済的には原料生産者に止めて置くといふことを基調としたものであつた。而して其の方法としては所謂「分けて治める」といふのであつて、諸民族間の反目軋轢を利用助長し、又同民族間でもその階級的対立を煽動利用した。欧露の文化的少数民族、特に南カフカス地方の諸民族に対して、この方法は効果をあげたのである。シベリヤ其の他の辺境民族、或ひはまだ遊牧を生業とする如き低文化民族は、云ふ迄もなく、その民族意識も低く、利用する程の民族的又は階級的対立もなく、又之を支

配するについて、その必要もなかつた。唯比較的数も多く、文化も進んだ、又従つて民族意識も多少具へてゐたブリヤート・モンゴル族に対しては、統治上その上層階級（氏族の酋長）を懐柔庇護して、之を通じて下層農民から収奪搾取するの方法をかなり露骨に行つた。又ヤクート族に対しても毛皮其他を収奪するに就て、色々の圧迫暴行を加へた。

而して之等異民族特に低文化異民族に対して帝政ロシヤが与へた「文化の贈物」は何であつたかと言へば、唯ウオツカと花柳病だけであつたのである。かの屡々暴力を以て強制的に行はれた原住民のギリシヤ正教徒化は、帝政ロシヤの専制的性格を露骨に示したものでこそあれ、全く原住民の文化向上とは無関係であつた。要するに帝政ロシヤは文字通りの「諸民族の牢獄」に外ならなかつたのである。（尤もロシヤ人個人は既述の如く概して民族的偏見が少く、他のスラブ族に対しては勿論、フィン、タタール其他辺境民族に対しても、又西欧の文化民族に対しても比較的親和的であつて、至る処で混住し、又容易に混血した。中には

却って異民族に同化されてしまった一部のロシヤ人も存するのである。）

之に対して革命ロシヤの民族政策は、正に帝政ロシヤのそれに対蹠的であった。―と云ふよりも寧ろあらねばならなかった。何となれば、「他の民族を抑圧する所の民族は自由ではあり得ない。民族的誇りの感情に充ちてゐる我々大ロシヤ人労働者は、如何なる場合でも隣國に対するその態度を、人間的な平等の原則の上に立て、偉大なる民族の品位を辱しめるやうな奴隷的な特権の原則の上に立たぬ所の、自由な独立的な民主主義的な、共和主義的な誇りに充ちた大ロシヤとなることを欲する」とのレーニンの言葉は実現されねばならなかったからである。即ち一九一七年の二月革命によって帝政が崩壊するや、堰を切った民族運動は澎湃として各地に起り、諸民族の独立或ひは民族自治の叫びは全露を風靡するに至った。かねてより独自の「民族綱領」を準備してロシヤに於ける被圧迫諸民族の革命的エネルギーを自己の目的達成に利用しようと待構えてゐたボリシエヴィキは、同年十月の蜂起によって政権を奪取するや、直に有名な「ロシヤ諸民族権利宣言」を公布し、

(イ) ロシヤ諸民族の平等と主権
(ロ) 分離及び独立國家形成をも含むロシヤ諸民族の自由なる自決の権利
(ハ) 一切の民族的及び民族宗教的特権並に制限の撤廃
(ニ) ロシヤ領土内に住む民族的少数派及び人種的グループの自由なる発達

を公約したのである。

此の宣言公約が被圧迫諸民族を吸引したことは絶大であって、之によって異民族の支持を得、革命政権は勝利を博したと言っても過言ではない。而して此の結果はどうであったかと言へば、ポーランド、バルト三國及びフインランドは、「民族自決」主義によりロシヤより分離して完全に独立せしめられたが、爾餘の諸民族は分離結合の過程を通じて結局ソヴエートロシヤの中央政権の傘下に再び統一せられることになった。即ち一九二二年の内乱の全く終熄した時機を俟って、諸多の民族共和國

の合同成り、大ソヴエート聯邦は創建せられたのである。而して先の民族平等の原理は幾許もなく一九二四年の憲法に明定せられ、且つその具体化は聯邦最高会議と並んで、民族会議が設定されることによって実現された。斯くして各構成共和國及自治共和國は、從来支配的勢力を占めた大ロシヤ共和國と平等に、五名の代表者を民族会議に送り、又共和國内の自治州も同じく夫々一名の代表を選出するの権能を附與されたのである。一九三六年の憲法改正に依り、民族的地域的単位は増加せられ、又民族会議は各単位の代表者数を増加して、一層広汎に諸民族の政治的要求を会議に反映せしむることゝなった。即ち各構成共和國は夫々二十五名、各自治共和國は夫々十一名、各自治州は夫々五名、各民族管区は夫々一名の代表者を民族会議に選出することゝなったのである。斯くして先住古代アジア民族として將に滅亡に瀕してゐるカムチヤツカ半島のコリヤーク族の如きも、民族管区として一名の代表者を最高会議に選出し得ることゝなった。更に旧憲法に於ては尚多少下位にある觀があった民族会議の地位が（旧規定では「民族会議ノ組織ハ全体トシテソヴエート社会主義共和國聯邦ソヴエート大会ニ承認セラルベキモノトス」との制限があった。）改正憲法（第三十七条）によって聯邦最高会議と全く平等同権と規定され、両会議の合同会議に於ける議長は、夫々の議長が交互に之に当ることゝ定められた。

斯くして帝政時代支配的勢力を占めた大ロシヤ民族も、名目上勿論何らの特権を認められず、民族的専制、或ひは又民族的ショーヴィニズムの発生は極力之を排撃するの建前となってゐるのである。例へば之を数的に観察すれば、一九三七年末最高会議選挙の結果は、聯邦会議代表四六九名、民族会議代表五七四名であり、此内絶対過半数の民族人口を擁するロシヤ民族の代表は一四六名であった。又ロシヤ共和國及之に包含せらるゝ民族自治共和國一七、民族自治州六の代表者總数一八二名に対し、ロシヤ共和國と同等数の代表選出権を有するウクライナ始め十個の少数民族の構成する共和國及びそれらに包含される自治共和國五、自

治州三の代表者總数は三二〇名であったのである。勿論比較的多数を占めるといふことは夫自体比較的勢力の強いことを意味するものに外ならないが、とにかく絶対多数を許さないといふことは、民族的専制を予防しようとの名目上の理由となってゐるのである。

由来ソヴエート的聯邦制度は、極端な中央集権を特徴とするプロレタリアート独裁と、聯邦を構成する諸民族の民族的利益とを調整し、統合する極めて合目的的な制度と云ふべく、各民族は前記の如くその実力に応じて、共和國、自治共和國、自治州或は民族管区と名付けられる新しい形態の民族地域的単位に組織され、或程度迄の民族的自立と自治を享有するに至ったが、党及ソヴエート機構を通じて、更に又聯邦制度の紐帯を通じて、中央政権の威令は凡ゆる諸民族に透徹し、又次第に増加してくる各民族出身の党員は中央と民族地方とを結ぶ一種の楔として大なる役割を果してゐるのである。一九二〇年代の所謂「新経済政策時代」に入って、再び顕著となった大ロシヤ主義や、地方的民族主義の勃興、

両者の対立、矛盾は一時重大なる政治的危険を齎したが、党首脳は党内の民族的偏向を徹底的に排撃すると共に、一切の民族的紛争を抜本的に根絶するための大方針として「後進諸民族の経済的文化的向上」により、事実上の不平等の解消其の他民族問題の解決を図ることゝした。蓋し既述の様にソ聯邦内諸民族の経済段階、文化段階は雑多であって、例へば(一)既に産業資本主義を経過した民族(ロシヤ人、ウクライナ人、白ロシヤ人、グルジア人、アルメニア人、アゼルバイジャン人の一部等)、(二)族長封建制＝自然経済乃至牧畜経済段階にある諸民族(トルコタタール系の中央アジア諸民族)(三)氏族制段階にある遊牧狩猟諸民族(キルギース人、バシュキール人、オセチユ人等)、(四)個別的流動的少数民族群(ポーランド人、ユダヤ人等)が並び存してゐるのである。勿論此等諸民族を名目的に平等化することは全く容易であって、前記の憲法規定や民族会議選出規程は既に之を解決してゐるのである。然し之を実質的に、即ち経済的に又文化的に平等化することは甚だ困難であって、一朝一夕

にその実現を図ることは出来ない。唯茲に云ひ得ることは、この「後進諸民族の経済的文化的向上」によつて事実上の不平等を解消し、民族問題を抜本的に解決すると云ふ大方針は、尓来今日に至る迄党及ソ聯政府の終始一貫堅持するところであつて、而も着々実行に移されてゐるといふことである。即ち党及ソヴエート機関の民族化は、欧亜各地方に於ける或は工業建設、集団農場建設等による後進諸民族の経済的発展に、或ひは教育の普及其他文化厚生施設の拡充による民族文化の向上に、一歩一歩とその成果は現はれて来、ソヴエート中央政権に対する辺境諸民族の信頼と、ロシヤ民族を中心とする諸民族融和の基礎は益々強固となつて来てゐると傳へられるのである。独ソ開戦以来既に二年に垂んとし、国土の心臓部を奪はれて凡ゆる苦闘と困難に堪へ乍ら、当初一部に予期された様な國内的動揺が何ら起る兆候がなく、寧ろ却て強固に結束して来たかに見えるのは、恐らく右に縷述した様な民族政策が或程度成功してゐることを証するものではないかと思われるのである。

（以上）

第六章　北米合衆國民族事情

第一節　人口の人種的構成

アメリカ合衆國は世界において最も雑多な人種から構成されてゐる。然し現在に於てはこれらの雑多な人種が混交融和して一種のアメリカ民族（ヤンキー）を漸次形成せんとしてゐる過渡期にあると見られる。所謂アメリカニゼーション運動はかゝる政策の一つであつて移民割当制、有色人種排斥の如きもかゝる工作の一部と見るべきものであらう。

人種の起源的構成はイギリス人を主とし其他ドイツ人、アイルランド人、フランス人、イタリヤ人等の白人系と奴隷として移入された黒人及び日本人、支那人、フイリツピン人等の東洋人が主なるものであつて合衆國總人口一億二千二百万人のうち一億八百万即ち八八％までは白人であ

り、黒人は一千一百万人、一〇%であり、メキシコ人インド人、日本人、支那人等が二百万人、二%となつてゐる

一般に米國に於ける最大の弱点はその國民が雑多な人種によつて構成されてゐることであるとされてゐる。従つてアメリカニゼーションが米國の主なる政治的問題になつてゐる。米國の人口構成は原住民たるインデアンを除けば他は總て移民からなるものであつてその渡来の時期は次の如くである。

一、植民地時代＝米國発見より一七八二年まで（母國よりの統制）
二、無制限移民時代＝一七八三－一八三〇年（英國からの分離）
三、州統制の時代＝一八三一－一八八二年
四、中央政府統制時代＝一八八三年以降
(a) 一八八二－一九二一年の調節
(b) 一九二一年の制限と割当（一九一〇年の現住民族の三%以下、一九二四年には一八九〇年現在民族人口の二%に修正。一九三一年以後は五〇、〇〇〇人に限定）
(c) 移入より移出の大なる時代＝一九三一年

割当除外地カナダ、ニューファウンドランド、メキシコ、キューバ、ハイチ、ドミニカ、パナマ、中南米の独立國、

旧移民＝一八八〇年まで（主に英語使用民族）
新移民＝一八八〇年－一九一四年
現移民一九一四年－現在

現在に於ては現米合衆國一億二千人に対し、毎年許可される移民は三千五百人であるが故に殆んど文化的経済的影響を持たない。米在住の外國人は五百万人と推計されてゐる。

合衆國は國籍取得は出生地主義 jus soli であるため市民権獲得には出生による市民と帰化による市民とがある。

一九三六年の人口總数一一六、四九〇、四三三人の中七、九一九、五三六人即ち六、八%が帰化による市民であり、そのうち一二七、〇〇〇人は人種的関

係により帰化が許るされず、六〇〇、〇〇〇人は市民権獲得期間未了のものである。この期限は一七九〇－一九〇六年の帰化法に限定されてゐるのであって一八二四年発布のものは合衆國に五年以上生活し、そのうちの三年間は二十一才以前たること、帰化は自由な白人に限る（一七九〇年一とされ支那人は一八八二年の法令により帰化権なく、印度人、日本人、フイリッピン人は高等法院の判決により帰化権がない。但し三年以上米國軍務に服したものは除外される。一九三五年議会は欧洲大戦に東洋人で米軍に参加したものゝ帰化権を認めた。

帰化の條件は英語が話せ、願書を自署すること、米國史と政治に関する試問を通過すること、一九二六年には聯邦の法廷が試験することになった。

外國人と結婚した婦人は依然市民権を有するが他方外國生れの婦人は結婚や夫の帰化によっても市民権を獲得しない。但し三年夫と米國に在住すれば許るされる。一九〇六－一九三六年間に一二、〇八七の帰化証が

備造された。一九〇七年の法令で帰化外人は二年以上故国に住み又は五年以上外国に住むと米国市民を放棄したと推定される。

一八二〇年－一九三六年間に於ける主要諸国からの合衆国への移民数及び移民入国許可年割当比率は別の如くである。

國名	1820—1830	1831—1930	1931—1936	117ヶ年 1820—1936 総計
全國	151.824	599209	256.533	38.018.550
歐洲	106.508	495853	158.339	32.434.685
アルバニア	—	663	1.183	2.846
オーストリヤ	—	868	3.073	4138.333
ハンガリア		680	2.899	
ベルギー	28	846	1.636	155.024
ブルガリア	—	945	506	65.424
チェッコスロヴァキア	—	194	5.308	110.928
デンマーク	189	1.430	1.434	333.900
エストニア	—	576	263	1.839
フィンランド	—	691	863	18.310
フランス	8.868	45610	5.048	588.023
ドイツ	7.729	152202	30.929	5.938.822
大英國				
イングランド	15.837	7.420	9.900	2.629.335
スコットランド	3.180	2.781	5.700	732.587
ウエールス	170	012	574	86.233
其ノ他	8.302	65 —	—	793.741
ギリシヤ	20	084	5.517	427.006
アイルランド	54.338	207 —	—	
アイルランド自由國	—	591	7.797	4588.464
北部アイルランド	—	—	1.726	
イタリー	439	2.315	41.252	4.622.447
ラドヴィア	—	399	519	3.918
リトアニア	—	015	1.151	7.166
ルクセンブルグ	—	727	127	854
オランダ	1.127	1.948	2.430	249.059
ノルウェー	94	1.531	2.663	2.018.640
スウェーデン		249	2.374	

第一表

西暦1820―1936年間ニ於ケル主要諸國カラノ合衆國ヘノ移民

國名	1820―1830	1831―1840	1841―1850	1851―1860	1861―1870	1871―1880	1881―1890	1891―1900	1901―1910	1911―1920	1921―1930	1931―1936	117ヶ年 1820―1936 總計
全國	151,824	599,125	1713,251	2598,214	2314,824	2812,193	5246,613	3687,564	8795,386	5735,811	4107,209	256,533	38,018,550
歐洲	106,508	495,688	1597,501	2452,660	2065,270	2272,262	4737,046	3558,978	8136,016	4376,564	2477,853	158,339	32,434,685
アルバニア	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	1,663	1,183	2,846
オーストリヤ	―	―	―	―	7,800	72,969	353,719	592,707	2,145,266	453,649	32,868	3,083	4138,333
ハンガリア										442,693	30,680	2,899	
ベルギー	28	22	5,074	4,738	6,734	7,221	20,177	18,167	41,635	33,746	15,846	1,636	155,024
ブルガリア	―	―	―	―	―	―	―	160	39,280	22,533	2,945	506	65,424
チエッコスロヴァキア	―	―	―	―	―	―	―	―	―	3,426	102,194	5,308	110,928
デンマーク	189	1,063	539	3,749	17,094	31,771	88,132	50,231	65,285	41,983	32,430	1,434	333,900
エストニア	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	1,576	263	1,839
フィンランド	―	―	―	―	―	―	―	―	―	756	16,691	863	18,310
フランス	8,868	45,575	77,262	76,358	35,986	72,206	50,464	30,770	73,379	61,897	49,610	5,048	588,023
ドイツ	7,729	152,454	434,626	951,667	787,468	718,182	1452,970	505,152	341,498	143,945	412,202	30,929	5,938,822
大英國													
イングランド	15,837	7,611	32,092	247,125	222,278	437,706	644,680	216,726	388,017	249,944	157,420	9,900	2,629,335
スコットランド	3,180	2,667	3,712	38,331	38,769	87,564	149,869	44,188	120,469	78,357	159,781	5,700	732,587
ウエールス	170	185	1,261	6,319	4,313	6,631	12,640	10,557	17,464	13,107	13,012	574	86,233
其ノ他	8,302	65,347	229,979	132,199	341,537	16,142	168	67	―		―	―	793,741
ギリシヤ	20	49	16	31	72	210	2,308	15,979	167,519	184,201	51,084	5,517	427,006
アイルランド	54,338	207,381	780,719	914,119	435,778	436,871	655,482	―	―	―	―	―	
アイルランド自由國	―	―	―	―	―	―	―	388,416	339,065	146,181	220,591	7,797	4,588,464
北部アイルランド	―	―		―	―	―	―	―	―	―	―	1,726	
イタリー	439	2,253	1,870	9,231	11,725	55,759	307,309	651,893	2,045,877	1,109,524	456,315	41,252	4,622,447
ラドヴイア	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	3,399	519	3,918
リトアニア	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	6,015	1,151	7,166
ルクセンブルグ	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	727	127	854
オランダ	1,127	1,412	8,251	10,789	9,102	16,541	53,701	26,758	48,262	43,718	26,948	2,430	249,059
ノルウェー	94	1,201	13,903	20,931	71,631	95,323	176,586	95,015	190,505	66,395	68,531	2,663	2,018,640
スウエーデン					37,667	115,922	391,776	226,260	249,534	95,074	97,249	2,374	

六四三九

ポーランド	21	334	9,637	407,366
ポルトガル	180	894	1,784	254,499
ルーマニア	—	46	2,422	155,496
ロシア	89	242	1,097	3,343,088
スペイン	2,616	2,158	2,048	168,913
スイス	3,257	4,876	1,985	292,153
欧州トルコ	21	59	432	155,568
ユーゴスラヴイア	—	64	2,442	53,394
其他欧州	3	03	990	21,309
アジア	15	00	7,828	911,023
支那	3	07	2,737	379,982
印度	9	86	327	9,704
日本	—	62	1,519	277,162
亜細亜トルコ	—	65	282	205,317
其他亜細亜	3	80	2,963	38,858
アメリカ	11,951	33,416	87,687	4,329,116
ニューファウンドランド	—	15	886	2,957,422
カナダ	2,485	13,6	59,335	768,453
メキシコ	4,818	6,687	12,517	768,433
西印度	3,998	12,399	7,164	438,633
中央アメリカ	107	69	3,626	46,919
南アメリカ	542	815	4,156	117,649
其他米國	—	31	9	40
アフリカ	17	86	1,001	25,311
オーストラリヤ、ニュージランド	—	99	1,438	53,739
太平洋諸島	—	27	245	10,610
其ノ他	33,333	69,928	—	254,066

ポーランド	21	369	105	1,164	2,027	12,970	51,806	96,720	—	4,813	227,734	9,637	407,366
ポルトガル	180	829	550	1,055	2,658	14,082	16,978	27,508	69,149	89,732	29,994	1,784	254,499
ルーマニア	—	—	—	—	—	11	6,348	12,750	53,008	13,311	67,646	2,422	155,496
ロシア	89	277	551	457	2,512	39,284	213,282	505,290	1,597,306	291,201	61,742	1,097	3,343,088
スペイン	2,616	2,125	2,209	9,298	6,697	5,266	4,419	8,731	27,935	68,611	28,958	2,048	168,913
スイス	3,257	4,821	4,644	25,011	23,286	28,295	81,988	31,179	34,922	23,091	29,676	1,985	292,153
欧洲トルコ	21	7	59	83	129	337	1,562	3,626	79,976	54,677	14,659	432	155,568
ユーゴスラヴィア	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1,888	49,064	2,442	53,394
其他欧洲	3	40	79	5	8	1,001	682	122	665	8,111	9,603	990	21,309
アジア	15	48	82	41,455	64,630	123,823	68,380	71,236	243,567	192,559	97,400	7,828	911,023
支那	3	8	35	41,397	64,301	123,201	61,711	14,799	20,605	21,278	29,907	2,737	379,982
印度	9	39	36	43	69	163	269	68	4,713	2,082	1,886	327	9,704
日本	—	—	—	—	186	149	2,270	25,942	129,797	83,837	33,462	1,519	277,162
亜細亜トルコ	—	—	—	—	2	67	2,220	26,799	77,393	79,389	19,165	282	205,317
其他亜細亜	3	1	11	15	72	243	1,910	3,628	11,059	5,973	12,980	2,963	38,858
アメリカ	11,951	33,424	62,469	74,720	166,607	404,044	426,967	38,972	361,888	1,143,671	1,516,716	87,687	4,329,116
ニューファウンドランド	—	—	—	—	—	—	—	3,311	179,226	742,185	924,515	886	2,957,422
カナダ	2,485	13,624	41,723	59,309	153,878	383,640	393,304					59,335	768,453
メキシコ	4,818	6,599	3,271	3,078	2,191	5,162	1,913	971	49,642	219,004	459,287	12,517	768,433
西印度	3,998	12,301	13,528	10,660	9,046	13,957	29,042	33,066	107,548	123,424	74,899	7,164	438,633
中央アメリカ	107	44	368	449	95	157	404	549	8,192	17,159	15,769	3,626	48,919
南アメリカ	542	856	3,579	1,224	1,397	1,128	2,304	1,075	17,280	41,899	42,215	4,156	117,649
其他米國	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	31	9	40
アフリカ	17	54	55	210	312	358	857	350	7,368	8,443	6,286	1,001	25,311
オーストラリヤ、ニュージランド	—	—	—	—	36	9,886	7,017	2,740	11,975	12,348	8,299	1,438	53,739
太平洋諸島	—	—	—	—	—	1,028	5,557	1,225	1,049	1,079	427	245	10,610
其ノ他	33,333	69,911	53,144	29,169	17,969	790	789	14,063	33,523	1,147	228	—	254,066

第

（注意、總ニル

國又ハ地域域	割当比率
アフガニスタ（））	100
アルバニン	252
アンドン	3、314
アラビヤ半島（ムスカトアデン植民ち 保護領サウディアラビヤコ八	人 707
オーストラリヤ（ダスマニア、パプア、オー ラリア所属）全諸島ン	123
オーストラリ領	100
ベルギ領）	100
ブータ領）	100
ブルガリコ	226
カメルー地	100
支ヨ	100
チエッコスロヴァキア	845
ダンチヒ自由シ	100
デンマー計	153,774
エヂプ	
エストニ	
エチオピヤ（アビシニヤ	
フィンラン	
フラン	
ドイ	
グレートブリテン北アイルラン	
ギリシ	
ハンガリ	
アイスラン	
印	
イラク（メソポタミア	
アイルランド自由	
イタリ	

第二表　移民入國許可年割當比率

（注意、總テノ割當ハ合衆國ノ市民權ヲ得ル資格ヲ有シ合衆國ノ移民法ニ従フ者ニ適用サレル）

國又ハ地域	割当比率	國又ハ地域	割当比率	國又ハ地域	割当比率
アフガニスタン	100	日本	100	西南アフリカ（南阿聯邦委任統治領）	100
アルバニア	100	ラトブイア	236	スペイン	252
アンドラ	100	リベリア	100	スエーデン	3、314
アラビヤ半島（ムスカトアデン植民地保護領サウディアラビヤヲ除ク）	100	リヒテンシュタイン	100	スイス	1、707
オーストラリヤ（ダスマニア、パプア、オーストラリア所屬ノ全諸島）	100	リトワニア	386	シリア、ト、レバノン	123
オーストラリヤ	1、413	ルクセンブルグ	100	ダンガニカ領	100
ベルギー	1、304	モナコ	100	トーゴランド（英領）	100
ブータン	100	モロッコ（佛領、西領タンジール）	100	トーゴランド（佛領）	100
ブルガリア	100	ムスカト（オーマン）	100	トルコ	226
カメルーン	100	ナウル	100	日本委任統治領ノヤツプ其他ノ	100
支那	100	ネパール	100	太平洋諸島	100
チエッコスロヴァキア	2、874	オランダ	3、153	ユーゴースラヴイア	845
ダンチヒ自由市	100	ニユーギニア（附屬諸島ヲ含ム濠洲委任統治領）	100	カメルーン	100
デンマーク	1、181	ニユージランド	100	總計	153、774
エヂプト	100	ノルウエー	2、377		
エストニア	116	パレスタイン（トランスヨルダンヲ含ム）	100		
エチオピヤ（アビシニヤ）	100	ペルシヤ	100		
フィンランド	569	フイリツピン	50		
フランス	3、086	ポーランド	6、524		
ドイツ	25、957	ポルドガル	440		
グレートブリテン北アイルランド	65、721	ルアンダ・ト・ウルデイ（白委任統治領）	100		
ギリシヤ	307	ルーマニア	377		
ハンガリヤ	869	ロシア（欧洲、亜細亜）	2、712		
アイスランド	100	サモア、西部（ニユージランド委任統治領）	100		
印度	100	サンマリノ	100		
イラク（メソポタミア）	100	サウデイアラビヤ（ヘヂヤツト・ネジド及ビ屬領）	100		
アイルランド自由國	17、853	シヤム	100		
イタリー	5、802	南阿聯邦	100		

第二節　人種政策

同人種内の小数民族問題以外に更に北米合衆國には次に挙げる三群の異人種が存在し、合衆國の民族政策は之等の異人種を問題の対象としなければならぬ

1、アメリカインデアン等の原住人種

2、十七世紀初頭から奴隷として輸入されたニグロ

3、前世紀半頃から移住した少数人種（日本人、支那人、メキシコ人、ゲルマン族ならざる南欧及東欧よりの移民）

北米の人種政策に於てニグロは主役を勤めたが之は今日に於て最も重要な問題である。彼等は一九一六年から経済的事情の為大量に北米に輸入され就中南部に於て奴隷として使役された。次で一七七七年から奴隷解放が始った。併し憲法が発布された一七八九年に尚約七五〇、〇〇〇人の黒人奴隷が存在してゐた。憲法には黒人の法律上の身分に関し何等

有効な規定が無かったのである。之に関聯した憲法の條文は二重の意味に解釋された為にニグロの多い南部諸州では奴隷制度を尚許可されてゐるかの如く解し、北部諸州では之と反対の見解を持ってゐた。此の法律上の解釋の不明瞭なる結果南部諸州が削反し次でリンカーンは戦争を起し再び南部を統一した。内乱の結果として奴隷制度は全く廃止され、更に一八六五年の第十三回憲法改正により「奴隷制度及び自由意志に反する隷属はアメリカ合衆國内に於て許可せず。犯罪に対する刑罰としての奴隷も許可せず。犯罪は合理的処理により判決す」と規定された。此の当時北米には既に五百万人の黒人が存在し、解放されたのである。次で解放されたニグロの法律上の身分の規定により黒人問題の発展が特徴づけられた。茲に重要なるは一八六五年四月九日附の第一民法であって、次の如き規定がある。合衆國に生れ、外國の権力に従属せざる者は課税せられざるアメリカインデアンを除き合衆國市民と解す。市民たる者は如何なる種族も、有色人種も、又館住に於ける奴隷たる身分に関せず

合衆國の各州及び領域に於て次の同等の権利を保有す」

次で一八六八年七月二十八日附第十四回憲法改正により憲法力を以て平等権が記録されたが、就中人種法として次の條文は注目に價する。「合衆國に生れ又は帰化し合衆國政府に従属する者は總て合衆國市民たると同時に其の居住する州の市民とす。州は合衆國市民の権利を左右するが如き法律を制定する事を得ず。合理的なる法律上の根據あり、合法的の処理を認められる場合に於ても州は個人の生命、自由権、財産権を左右することを得ず。如何なる州もその行政力の下にある個人に対し法律上の平等なる保護を拒否する事を得ず。」次に一八七〇年三月三十日の第十五回憲法改正は總ての異人種に対し合衆國市民たる限り選挙権、投票権を許可した。

上述の諸規定により合衆國の異人種殊にニグロは白人市民と共に完全なる法律上の平等権を有するのである。併しながら人種政策上非常に共味のあることは、今や現実の状態は平等思想に支持された根本方針の規

定する処とは全く別の様に発展したのである。次に合衆國に於ける特徴のある人種政策に就て述べよう

一、白人と異人種の混血結婚禁止規定及び私通禁止規定（人種交混法）

合衆國の三十州に於て特殊の混血結婚禁止規定がある。尚、二、三の州に於ては白人と異人種との間の私通禁止が規定されてゐる。何れも州により非常に種々様々である。之を一覧表にして掲げると次の如くである。

州名	混血結婚禁止規定	制定年度	罰則
アラバマ	白人対ニグロ又ハニグロ混血児結婚禁止（以下同様）	一九二三	二年以上七年以下の禁錮
アリゾナ	コーカサス人種又ハ其の子孫対ニグロ、蒙古人、インデアン及其等の子孫	一九二八	六ヶ月以下の禁錮又は罰金又は両者
アーカンソス	白人対ニグロ又ハムラット（白人と黒人の混血）	一九二一	一年以下の禁錮
カリフオルニヤ	白人対ニグロ、ムラット、蒙古人、マレイ人	一九二九	無し
コロラド	白人対ニグロ、ムラット	一九二一	二年以下の懲役又は罰金又は両者
デラウエア	白人対ニグロ、ムラット	一九二七	百弗の罰金、払はぬ時は三十日以下の拘留
フロリダ	白人対ニグロ、八分の一以上のニグロの血液を有する混血児	一九二七	十年以下の禁錮又は千弗以下の罰金
ジョージヤ	白人又ハコーカサス人種対ニグロ、アフリカ土人、インデアン、印度人、蒙古人、日本人、支那人等の血を僅かたりとも有する者、	一九三〇	千弗以下の罰金又は六ヶ月以下の懲役或は以上の二、三を同時に科す
アイダホ	白人対蒙古人、ニグロ、ムラット	一九一九 一九二一	六ヶ月以下の禁錮又は三百弗以下の罰金又は此の両者
インデアナ	白人対八分の一以上のニグロの血を有する者	一九二六	一年以上二年以下の禁錮及百弗乃至千弗の罰金

州		年	
ケンタツキイ	白人対ニグロ、ムラット	一九二二	五百弗乃至五千弗の罰金、罰を受けた後性交を継続した場合は三箇月以上一年以下の禁錮
ルイジアナ	コーカス人種即ち白人対インデアン、有色人種、ニグロ インデアン対有色人種又はニグロ	一九二〇 一九二五	一ケ月乃至一ケ年の禁錮
マリーランド	白人対ニグロ又は八分の一以上のニグロの血を有する混血児		一年半以上十ケ年の禁錮
ミシシッピー	白人対ニグロ、蒙古人、ニグロ或は蒙古人の血を八分の一以上有する混血児		五百弗以下の罰金十年以下の禁錮又は両者
ミズーリー	白人対蒙古人、ニグロ、八分の一以上のニグロの血を有する混血児		二年以下三ケ月以上の禁錮又は百弗以下の罰金又は禁錮
モンタナ	白人対蒙古人、僅かたりともニグロの血を有すると認め得る者		五百弗以下の罰金、又は六ケ月以上の禁錮又は両者

州		年	
ネブラスク	白人対八分の一以上のニグロ、日本人、支那人、の血を有する者	一九二二	百弗以下の罰金又は六ケ月以下の禁錮
ネバダ	白人対ニグロ、蒙古人、マレー人	一九一二	六ケ月以上一年以下の禁錮又は五百弗乃至千弗の罰金又は此の両者
ノースカロライナ	白人対ニグロ又はインデアンの血を八分の一以上有する者	一九三一	四ケ月以上十年以下の禁錮又は罰金
ノースタコダ	白人対八分の一以上のニグロの血を有する者	一九一三	十年以下の禁錮又は二千弗以下の罰金又は両者
オクラホマ	白人対ニグロ	一九三一	五百弗以下の罰金一年以上五年以下の禁錮
オレゴン	白人対四分ノ一以上のニグロ又は支那人の血を有する者 二分の一以上のインデアン又はカナカ人の血を有する者	一九三〇	三ケ月以上一年以下の禁錮
ソースカロライナ	白人対ニグロ、インディアン、ムラット、メスチイット（混血の一種）	一九二二	五百弗以下の罰金又は一年以下の禁錮又は両者

ソースタゴダ	コーカサス人種対ニグロ、蒙古人、朝鮮人	一九二九	千弗以下の罰金又は十年以下の禁錮又は両者
テネッシイ	白人対八分の一以上のニグロの血を有する者	一九一七 一九一八	一年以上五年以下の禁錮
テキサス	白人対八分の一以上のニグロの血を有する者		二年以上五年以下の禁錮
ウター	白人対ニグロ又は蒙古人		六ヶ月以下の禁錮又は三百弗以上の罰金又は此の両者
ヴァージニア	コーカサス人種対僅かたりともニグロの血を有する者、十六分の一以上のインデアンの血を有する者		二年以上五年以下の禁錮
ウエストヴァージニア	白人対ニグロ		一年以下の禁錮及び百弗以下の罰金
ワイオミング	白人対ニグロ、ムラット、蒙古人、マレー人		百弗乃至千弗の罰金又は一年以上五年以下の禁錮又は両者

州名	私通禁止規定	年度	罰則
アラバマ	白人対ニグロ、ニグロ混血児	一九二三	混血結婚禁止規定ニ準ず
フロリダ	白人対又は八分の一以上ニグロの血を有する混血児	一九二七	一年以下の禁錮又は罰金
ルイジアナ	コーカサス人種対インディアン、有色人種、ニグロ	一九二〇 一九二五	一年以下の禁錮
ネバタ	インディアン対有色人種又はニグロ 白人対ニグロ、蒙古人、マレー人	一九一二	百弗乃至五百弗の罰金又は六ヶ月以上一ヶ年以下の禁錮又は両者
ソースタゴダ	コーカサス人種対ニグロ、蒙古人、朝鮮人	一九二九	千弗以下の罰金又は十年以下の禁錮又は両者

此の他の州は混血結婚禁止規定を有しないが、其の内数州は非常に多くの黒人人口を有してゐる。

之等の混血結婚禁止規定は白人と異人種との間に結ばれた婚姻は無効なりと規定してゐる。場合により之から生れた子供は私生児として取扱

われ、相続人を認められぬ事がある。又故意に宗教的の結婚式を挙行したり、違法の混婚を行はんとする男女に結婚証明書を発行したりする事に対し多くの法律に於て多かれ少かれ罰則が設けられてゐる。更に十箇州に於ては自己の州に於ける禁制を避ける為他州に於て混婚を結んだ者に対し混婚禁止規定に於ける罰則を適用すると規定する法律を有する。混婚未遂も屡々罰せられる。

然しながら斯かる混血結婚禁止法の憲法適合性に関する疑義が起きたのは勿論であって屡々論議された。即ち之が合衆國市民たる権利に影響し第十四回憲法改正に違反しはせぬかと云ふのである。併し最高法廷の判決に於て混血結婚禁止法は全く憲法に適合してゐると常に決定されてゐる。例へば一八七七年アラバマ州の最高法廷に於て次の如き判決が下った。「婚姻は家族法の制度であり社会と秩序は之に基いてゐる。婚姻は一般の安寧の為に州の最高の権力を以て規定される。市民に対し参政権を保証せんとする。併し我が州は今日迄家族法の事務を掌る為有してゐた確実なる権力を放棄する事を望まぬ。」と。一八八一年同法廷は又次の如き判決を下した。「結果は両人種の混合を来し混血人口と退化文化の発生を来す。之は健全なる政治により阻止さるべきものであって、此の健全なる政治は社会と國家が最も注意してゐる処である。」とヴァージニアの最高法廷は一八七八年次の如く宣言した。「風俗純潔の保持と、両人種の道徳的身体的の幸福と我が南部地方の文化の進歩の為に、相互に非常に差異のある両人種は各自の範囲の内に於て神の與へ給ふた運命と分ち之を果さねばならぬ。神と自然が禁止してゐると看做される処の甚だ不自然な関係は積極的な法律を以て例外なく拒否さるべきである。」最後に合衆國最高法廷は此の混血結婚禁止法の憲法適合性を記録した。

（一八八八年 Maynard v. Hill の判決）

今日此の法律の憲法適合性に対する疑問は存在しない。

併しながら此の法律は州により非常に多様であり、殊に二、三の法律の條文は甚だ不明確にして而も人種生物学的に一様に解釈出来ない表現の

為、実地に色々の困難を伴ふ事は更に不思議はない。之に加ふるに以上の他の十八箇州に於て斯かる法律が存在しない為に、此の規定を有する州に於ても法律は非常に実効性に乏しいものとなってゐる。即ち二人の人種の異る結婚希望者は混婚を禁じてゐない州に逃避して結婚する事が出来るからである。最も重大な欠陥は、四十三箇州に於て異人種間の私通を禁止してゐない為、結婚外混血に対する扉が開かれてゐることである。実際私生児のムラット（白人と黒人との混血児）の数は莫大なものである。

二、移民制限法

近来北米合衆國は異民族移民の防止を目的とする法律を制定した。先づ一八八二年五月六日支那人排斥法を制定し学生、観光客を除く総ての支那人の移民を禁止した。次いで一九〇七年合衆国政府は日本と紳士協約を結び日本人移民を防遏した。

一九一七年二月五日重要なる移民制限法を制定した。之によりアジア州一定区域の土着民族は学生、外交官、宗教家等を除き合衆国に入国する事が出来なくなった。制限地帯はオーマン、東アフガニスタン、英領印度（ベルチスタンの一部を除く）ネパール、ブータン、露領トルキスタンの一部、西支那、シャム、仏領印度支那、マレイ半島、セイロン島、スマトラ、ボルネオ、セレベス、チモール、ニューギニヤ、印度洋及太平洋の小島である。

移民に関する最台の法令は一九二四年五月二十六日付で発布された移民法（ジヨンソン法）である。此の法律は特に次の如く規定してゐる。

第十三條　C

帰化権を有せざる外國人は合衆國に入國する事を得ず。（此の為アフリカ人を除く總ての有色人は入國出来ない。）学生等は此の限りに非ず。許可されたる移民は之を非歩合移民と歩合移民に分つ。カナダ、ニューファウンドランド、キユーバ、パナマ運河地帯、中米、南米よりの移民は前

者に屬し、世界の他の部分よりの移民は後者に屬す

第十一條 b

一九二七年七月一日より各國に対する一年間の歩合移民割当数を一九二〇年に於ける各國の北米移民数の同年に於ける總移民数に対する割合を以て歩合移民總数十五万を配分して決定す。各國は最低百人以上の移民を許可せらる。移民に當て奴隷として輸入されたる人口の子孫を含まず。（之によりアフリカよりの黒人移民を拒否す）英、佛等よりの移民に対しては南及東歐羅巴の諸國に比し三倍の歩合を許可す。

メキシコ人はその十分の一は白人、十分の三はインディアレ、十分の六はインデアンと白人とニグロの混血であるが移民に関しては此の間に歩合の制限はない。

尚一九三三年合衆國市民に非らざる比律賓人の移民は毎年五十人づゝに制限された。

一九〇六年六月二十九日の合衆國法に依り帰化に関する制度が定まっ

つた。北米の市民となり得る者は自由なる白人の外國人及びアフリカ生れの者又は其の子供たる外國人である。如何なる外國人が白人に屬するかに就いては細目の規定がない。又アフリカ生れの者及び其の子供に就ての解釋にも論及してゐない。併し合衆國最高帰化委員会は慣例により詳細に之を規定してゐる。即ち、合衆國外領域のインディアン、前述の移民法の制限区域の住民たるアジア人、日本人、支那人及比律賓人は帰化権がない。之に反して總てのメキシコ人及ハワイ市民は帰化権がある。

三、選挙権

第十五回憲法修正はニグロに対し明確に選挙権を許可してゐるが、実際には彼等は尚之を有してゐない。二、三の州は選挙権の実施を非常に嚴重な種々の条件（例へば居住期間、納税、資産、品行、教養、理解力、性格等）に適つた者のみに許可する爲、比較的僅かの有色人しか之に合格する事が出来ない。之に加ふるに合衆國に於ては選挙権に対する條件として民主党が共和党の党員たるを要するのであるが両党ともニグロ

を党員から除外してゐる。

四、人種差別的学校法

二十箇州（大部分南部）の憲法及二・三の州の簡單な法令は学校に於ける完全なる人種分離を規定してゐる。之等の州に於ては白人、黒人或は有色人を別個に収容する学校のみ許可される。又二、三の移人種人口の稀薄な州に於ては人種分離の学校組織は地方の学務官庁の裁定に委任されてゐる。他の十州に於ては憲法又は簡單なる法令により人種又は皮膚の色に就き差別することを嚴禁してゐる。殘りの二、三州に於ては学校制度に於ける人種差別の法律又は差別禁止の法律は存在しない。勿論人口は總ての米國市民に入学許可其他学校制度に関する平等権を規定してゐる第十四回改正憲法に論及し学校制度に於ける人種的差別を規定せる各州の法律の憲法適合性につき屢々論議した。それにも拘らずかゝる憲法適合性は一九二七年合衆國最高法廷に於て承認された。但し判決に於て、種々の人種に対し分離された学校制度は同價値なるべき旨要求さ

れた。

併しながら現実に於ては白人と有色人とに分離された学校は平等でない。例へば異人種に対する学校建築物は白色のそれに比し多く價値の低いものである。

五　其の他の人種差別法

合衆國の總ての市民は契約を結び之を履行する事或は相続、売買等に就き平等なる権利を有する事は明かである。第十四回憲法改正は、州は合衆國市民の権利殊に自由又は財産を正當の理由なくして制限する如き法律を制定する事を得ずと宣言してゐる。之により北米に於ける異民族市民は少くとも財産法に関しては白人と全く同等の権利を有する筈であるが、事実は決して其の通りではない。

就中茲に必要なのはジム、クロー法（一八八〇年乃至一九〇〇年に於て制定された。一部は尚其の後発布さる）である。此の法律は交通制度に関聯し、有色人と白人とに対し分離された室と車に就き規定してゐる。例へ

ばマリーランド州の法律を引用して見よう。（一九二四年マリーランド州 Annoted Code Art 27 ）

「四三二条

旅客運送の車体を有する総ての鉄道会社は白人と有色人に対して夫々分離されたる客車を備ふべし。一箇の客車に於ても、堅牢なる壁を以て分たれ各々戸口を有する各部分は分離されたる車と看做す。分離されたる客車には白人又は有色人に対し指定されたる車なることを明示すべし。

四三二条

鉄道会社は之等の客車の價値、快適、設備に於て差別又は不平等をなすべからず

四三四条

四三二條及び四三三條の命令に従はざる鉄道会社は違法行為を為したるものと看做す。各違反に対し三百弗以上千弗以下の罰金に課す。

四三五條

鉄道会社の管理人及び監督者は白人又は有色人の旅行者を夫々指定されたる客車に入らしむるべく命ずべし。旅客若し之を拒みたる時管理人及び監督者は其の旅行を拒否し、列車より退去せしむる権利を有す。指定されたる客車に乗車する事を拒みたる旅客は犯罪をなせるものと看做す。各犯行に対し五弗乃至五十弗の罰金、又は三十日以上の禁錮又は此の両者を課す。

四三六條

四三五條に於て命ぜられた義務を怠り又は拒否したる管理人又は監督者は犯罪を為せるものと見做す。各犯行に対し二十五弗以上五十弗以下の罰金を課す

同様の規定が船舶、市街鉄道其の他種々の施設についても存在する。例へばヴァージニヤ法を見ると（一九三〇年ヴァージニヤ法典）「總ての人、組織、団体にして公衆用の劇場、オペラ、映画、其他の娯楽、集会等の設備を有し、白人も黒人も之に出入する場合、之等の人、組織、

団体は白人と黒人を区別し、各々に対し特定の席を設くべし。本規定に違反せる場合は百弗以上五百弗以下の罰金に処す」と規定してゐる。ジム、クロー法の憲法適合性も屢々論議された。併しながら此の憲法適合性は法定に於て度々承認され、就中合象國最高法廷に於て一八九六年 Plessy, v. Ferguson の判決に確定された。此の判決の内次の箇條は興味がある。

「第十四回憲法改正の目的は勿論両人種の絶対的平等を法律に導入する事であった。併し皮膚の色に基く区別を取り除かんとする事が出来ないのは当然である。両人種にとり不満足なるべき社会的平等と混合を強制する事は立法者の意志に反する事となろう。両人種が互に接触する場所に於て両者の分離を許可し或は規定する事は一方の劣等性を必然的に仮定することはならぬ。かゝる法律の制定は例外はあるが一般に警察力を使行する為の立法府の権限内にある一手段として認められてゐる。」

其の他合象國の有色人種は交際社会に於て非常な不利益と不平等を経験してゐる。二、三の南部の州に於て企てられた試み即ち法律により白人と有色人との住所を分離する事を規定せんとする事は合象國最高法廷の態度により不成功に終った。（一九一七年 Bucanan, v. Warley の判決）之に反し前途の目的を達せんとする家屋持主の協定は許可された。北部及び中部諸州に於て法律による平等宣言があり、之に一定の地域に於ては旅館、理髪所、静養所等に於てニグロは白人と全く平等なることが規定してあるが、実際には旅館の経営者は己れの心に適った人とのみ契約を結ぶ法律上の権利を有する為、黒人なる故拒否したと云ふ口実を用ひずして有色人との契約を拒否する事が出来る。

嘗て黒人は裁判上の証言権及び証言義務に於て制限を受ける傾向があったが、今日は總て之等の制限は撤廃された。併し今日尚実際に於て有色人の証言に対し余り重きを置かれない。陪審員から有色人を除外する事は一八七九年の合象國裁判により憲法違反なりと宣言された。併しながら陪審員となる事の出来る者は選挙権を有する者のみである為有色人

は此の條件を満す事が出来ず、従って実際に於ては有色人種の判事、官吏は殆んど存在しない。犯罪者、被告の人種は形式上裁判の過程に対し何等影響しない事となってゐるが、事実は有色人は屢々白人よりも重く罰せられる。

リンチ（私刑）の問題は更に興味がある。曾て非常に屢々行はれ、今日尚時に之を見るのであるが、黒人が白人の女子を襲撃した場合に激昂した群衆により黒人は屢々私刑を受けた。一九二二年合衆國議会は反私刑法の立案に対し同意したが上院の民主党の反対に会って否決された。併し一九二〇年から数州に於て反私刑法が立法され今日かゝる法律は北部の十州以上に於て制定されてゐる。私刑行為に参加した者及び之を擁護した警察官刑務署官吏は罰せられる事になってゐる。併しながら裁判所及び州の弁護士の拒絶的態度の為今日迄実地に於て此の法律は極く稀にしか適用されてゐない。

一八八二—一九三五年のリンチ被害者総数は四、六八一のうち一、三一一人は白人であり、一九一〇—一九三五年では一〇〇人の白人と九三四人の黒人がリンチを受けた。白人婦人凌辱はこの廿〇%であり、黒人婦人がリンチを受けたのは八四人である。

最後に人種法的に見るべきものとして、従って白人をニグロの子孫なりと言った場合裁判に於て之を重大なる侮辱を認め、刑罰を課すと云ふ規定がある。

以上の如く北米合衆國の人種政策は自由思想と人種意識の相剋により甚だ不統一な支離滅裂な状態を示し、各州により非常に様々な状態である事が特徴である。

第三章　英吉利民族事情

英吉利の當面する國内的な民族問題として所謂アイルランド問題があり、英吉利の民族事情を論ずるに當つては之を無視し得ない重要性を有つてゐる。以下アイルランド問題の沿革について略述しよう。

スコツトランド及びウエールスが征服されたのはアイルランドより遥かに後れたのであるが、それらは容易に英吉利に同化され、征服者と被征服者との間には最早何等の民族的対立関係を止めない。然るにアイルランドのみは遂に英吉利と融合することなく、本世紀の始めに至り联合王國より介離独立しアイルランド自由國を建設するに至つた。英吉利側としては自由國を以てカナダ型の自治領であると認めてゐるが、自由國としては自ら自治領以上の完全なる独立國となし、自らエール共和國と稱してゐる。

英吉利とアイルランドの関係が極めて非融和的であることの原因として

では、人種宗教の相違を挙げ得るであらうが、然し更に根本的な原因は英吉利の採つた対アイルランド植民政策即ち英吉利の掠取弾圧政策にあると解されてゐる。そこでアイルランドが英吉利の收奪植民地として従来如何なる待遇を受け来つたかといふことに関し簡単な歴史的回顧をなさうと思ふ

アイルランド人はゲール人種に屬するものといはれ、もと地中海沿岸の出であるが紀元前次第に西方に移動し遂にアイルランドに植民するに至つたと云はれてゐる。

彼等は紀元前に於て既に相當高度の文明を有し、當時北欧西欧に於ける最大の文明國と稱されてゐたといふ。五世紀頃にはキリスト教が弘まり、以後数世紀間キリスト教及びラテン、ギリシヤ文化の中心地をなして居つた。

かくの如く上古より中古にかけ、欧洲の一角に絢爛たる文化を誇つたアイルランドが近世に至り何故に、文化衰へ産業振はず、國民貧しく教育程度低き後進國へ転落したのであらうか。かゝる事態こそ將に英吉利の收奪、圧迫政策に歸さるべきである。

英吉利のアイルランド征服は十二世紀に於けるストロングボウのアイルランド侵冠を以て始まり、それ以来征服と植民は着々と進められた。當時イギリスは既に統一的な封建制度の下にあつたが、アイルランドに於てはいまだ氏族土地共有制度の域を脱して居らなかつたといはれてゐる。イギリスのアイルランド征服はイギリスの制度のアイルランドへの強制的移植を意味し、こゝに於てアイルランド人の生活の根底たるアイルランド人固有の社会制度、社会慣習は破壊せられた。植民國と文化型態を異にする原住民との間に通常見らるゝ処の、社会制度慣習の相違により惹起せらるゝ摩擦相剋は英愛間に於ても正に典型的に現はれてゐるのである。かくして最初の不幸がアイルランド人に落ちかゝつて来たのである。

征服の初期に於てはイギリスの支配力は一地方に限定されてゐたが、

次第に拡張され、イギリスのアイルランドに対する政治的支配は強化せられ、また宗教的にも種々の干渉を行ふに至つた。また十六世紀以後アイルランド豪族の領地は、或は叛乱に対する處罰として、或は法律の異なる解釋により形式上は平和的に没收された。殊にクロムウエルの時代には大規模な土地や没收が行はれた。かゝる土地没收が如何に激しいものであつたかは次の数字によつて想像し得る。即ちヘンリー八世の時代アイルランドの土地の三分の二は事実上アイルランド人を意味する旧教徒の所有に属して居つたが、それは次第に減少し十八世紀の初め頃には二十分の一にまで減少したといはれてゐる。斯様にしてアイルランドの土地はイギリス人殊にイギリスの大地主、不在地主の手に帰し、旧教徒及びアイルランド人は小作人、労働者に没落する外はなかつた。

更に十七世紀末以来はイギリスの支配並に搾取強化を目的として諸種の刑罰法規が制定され、旧教徒の政治的社会的自由は極端に束縛され、旧教徒は苛赦なき抑圧、奪掠を蒙つた。

次いで十七、八世紀に制定された商業関係の諸法規は當時重商主義時代の下にあつたイギリス資本の利益のために、アイルランドの産業的発達を阻止せんとするものであつた。

元来アイルランドは農耕及牧畜の國であつたが十七世紀以来の諸種の刑罰法規の結果、小作権は不確実となり、また時代は苛酷であつたために農耕は衰微し、牧畜が主として行はれるに至つた。一方十八世紀以後に於けるイギリス及大陸に於ける工業の発達はアイルランドの羊毛及肉類の需要を増加し、ためにアイルランドの牧畜はいよ〳〵盛大となると共に農耕はいよ〳〵衰微し、其の結果アイルランドは却つて食糧を輸入しなければならない状態に立至つた。

處でイギリスは自國の羊毛工業の利益のために、アイルランドの羊毛がイギリス以外の諸國に輸出せられることを防止するために非常に高額の輸出特許料を課すると共にアイルランドに於ける羊毛工業の發達を阻止するために、アイルランドの羊毛製品のイギリスへの輸出に対し禁止的

課税をなし、更にイギリス植民地への輸出まで禁止した。更に後にはイギリス及イギリス植民地以外の諸外國に対する輸出をも禁止するに至つた。一方イギリスはアイルランドの羊毛製品に対する保護関税設定の要求を拒否し、アイルランドをして完全にイギリス工業に対する原料供給地、イギリス工業製品の販賣市場たらしめんとした。この一例によつて知り得る如く、アイルランドに対するイギリスの政策の基調は全く自國の利益のためにアイルランドを犠牲にするといふことにあつた。

かゝるイギリスの徹底せる搾取政策がアイルランドに失業と貧窮をもたらしたことは極めて當然のことであつた。以上の如き政治的経済的状勢は、民族宗教の相違と競合し、こゝに深刻なる英愛対立関係を発生せしめ、アイルランド人を駆つて激烈なる抗英独立運動に走らしめたことは当然である。

かゝる状勢下に於て十八世紀末に勃発したアメリカの独立は物心両面に於てアイルランドに深刻なる影響を與へた。

即ちイギリスは叛乱せるアメリカ植民地に対する食糧品等の供給を遮断するためにアイルランドのアメリカ向輸出を禁止した。この結果としてアイルランドの産業は俄かに衰微し、多くの失業者を生じ、アイルランドの貧窮は愈々甚だしくなつた。また同じく産業貿易上本國の束縛に苦しめるアメリカの独立運動の一中心勢力がアイルランド出身のプレスビテリアン派の人々であつたといふ事実がアイルランド人の自由独立の念願に油を注いだことは想像に難くない。

かゝる経済的搾取、階級的対立の激化は政治的、宗教的対立と競合し、英愛関係は愈々深刻なる対立抗争状態へと発展したのである。

イギリス政府も斯くの如く次第に激化し行く英愛間貿易自由の要求を無視する能はざるに至り、多少の譲歩をなしたが、それは決してアイルランド人を満足せしむるものではなく、却つて貿易自由の要求は一歩を進めてイギリスの立法的干渉の排除といふ方向に変りつゝあつた。恰も十八世紀末に爆発せしフランス革命の餘波はアイルランドにも及び、人

類の自由平等、專制政治の廢棄と立憲政治の確立といふ革命の理想に從ひ、こゝにアイルランドを打って一丸とする處の國民主義運動が燃え上るに至った。

一七九八年フランスを後援とする共和政府樹立の革命運動がアイルランドに勃発し、それは結局不成功に終ったが、それを機会にイギリスはアイルランドの腐分子の買收等の姦策に訴へ一八〇〇年アイルランドとグレートブリテンの合邦を実現してしまった。

從来アイルランドはイギリス國王をその國王とし別個の議会を有する國であったが、一八〇〇年の合邦法により名実共にイギリスに合邦されるに至った。然るにアイルランドの合邦は元々イギリスの利益のためのみになされた結果として合邦後のアイルランドは経済的にも財政的にも苛酷の負担を負はされたことはいふまでもない。かゝる財政的経済的搾取の結果アイルランドの貧窮はいよ〱甚だしきを加へ、かつ旧教徒に対しては政治的にも不平等な地位が與へらるゝに過ぎなかった。かゝる

政治的経済的情勢はアイルランドを駆つて革命運動に狂奔せしむるにいたり、十九世紀の初期以来アイルランド各地には続々として秘密結社が設立され、革命の氣運はいよ〱熟しつゝあった。

アイルランド人の貧困については屡々述べた処であるが、アイルランド農民は馬鈴薯を主食となし、その生活程度極めて底く、正に餓死戦上を彷徨せる状態であった。從って僅かの馬鈴薯不作によっても直ちに饑饉状態を來す程であった。アイルランドは十八世紀の初期以来屡々饑饉に見舞はれたが殊に一七三九―四一年のものは激烈であり、ために人口の五分の一は失はれたといはれてゐる。十九世紀に入ってからも屡々饑饉が襲し、殊に一八四五―四七年のは極めて激甚であった。そのために人口の國外流出は極めて著しく、これが一十九世紀後半に於てアイルランドの人口を半減せしめた主要原因である。

かゝる状態の下に於て農民暴動の頻発するのは当然で、十八世紀以来地主に対する農民の暴行、強迫は全國を吹きまくるといふ状態であった

。

イギリス政府はアイルランド事情の調査に著手し、その結果アイルランド農民貧窮の原因は人口過剰にありといふ結論に到達し、その應急対策として移民の必要を強調した。然しながら産業の発達が阻止せられ、土地の集中により小作人は土地より追放され、耕地は牧地に転換され、農民間の競争の結果地代は騰貴に次ぐに騰貴を以てし、また穀物の生産と家畜はゆうにアイルランド人を養ひ得るに拘らず、それはイギリスの大地主、不在地主に奉納すべく彼等農民の食すべきではなく農民は收量豊富なる馬鈴薯を主食とする外なく、かくて彼等の生活資料たる馬鈴薯の不作の故のみを以て充ち溢る穀倉の内に餓死するの惨事を惹起するといふが如き状態の下に於ては、アイルランド農民の生活向上の慾望は消滅すべく、彼等が次第にその美風たりし勤勉努力忍耐誠実を失ふことは当然であつたらう。アイルランドの悲惨なる状態は人口過剰の結果に非ずして、寧ろイギリスの採りし植政策の帰結といふべきである。

一八四五―四七年の大饑饉はさすがにイギリス人の反省を促し、以来土地制度、小作制度に関して若干の改革がなされたが決してアイルランド人の要求を満足せしむるものではなかつた。かくて十九世紀後半に於て農民暴動が頻々として起り殊に十九世紀の末に於ては耕地の集中、小作人追放の激化と共に暴動は愈々甚だしくなるばかりであつた。

一方かゝる経済問題と並んでアイルランドの政治的自由を獲得せんとする國民運動は依然として続けられ後になる程熾烈となる有様であつた。一方かくの如き政治的経済的要求と並んでアイルランドの古典、古語等アイルランドの文藝復興を目指す処の民族運動が勃興し、その運動は次第に熾烈さを加へつゝあつた。

かゝる情勢の下に於て、其の後も叛乱と弾圧の歴史が繰返されたが、遂に一九二〇年に至つて所謂アイルランド統治法の誕生を見るに至り、こゝに於てアイルランド人の宿望は或る程度充されることとなつた。即ちアイルランドを南北二つに分離することを條件として各々に対し制限

的ながらも或程度の自治權が賦與されるに至った。因みにアイルランドを南北二分したのは少數派となるべきイギリス系の北アイルランド人を保護せんとするイギリス側の意圖の現れである。

然るに北アイルランドはこの法律を承認したが、南アイルランドは南北アイルランドの分割に反對し、また自治の程度の不充分なることに反對した。

當時イギリス軍とアイルランド國民主義團体との間には流血の爭鬪が屢返されつゝあったが、遂に一九二一年に至り兩者間に平和條約成立し、その結果アイルランドに對しカナダ型の最も程度の高い自治領たるの地位が認めらるゝに至った。然るに北アイルランドがこの條約を受容しなかったので、北アイルランドのアルスター地方を除外し、レンスター、マンスター、及コンノートの三地方を合して、こゝにアイルランド自由國が盛立せらるゝことゝなった。

もと〳〵南北アイルランドは地理的に一体を成して居り、また經濟的にも北部の工業、南部の農業とは互に相補ふべき關係にあるに不拘らず何故アルスターは南北分離に強硬に固執したのであらうか。第一の理由は宗教關係である。即ち自由國に於ては人口の九割以上が旧教徒であるが、アルスターに於ては旧教徒は人口の僅か三割に過ぎないといふことであり、アルスターの新教徒は南北合一によって少数民族の地位に置かるゝことを怖れたためであると云はれてゐる。

第二の理由は經済的のものであり、工業発達し、比較的富裕なる資本主義的な北部は南北合一による經済的不利を虞れたためであるといはれてゐる。

既に述べた如く、一九二一年アイルランドは宿望を果して自治權を獲得し、アイルランド自由國を建設したのであるが、彼等アイルランド人は尚かゝる自治に満足せず、一九三三年デヴアレラ首相の就任以来ます〳〵独立を強化し、一九三七年以来はイギリス側で用ひるアイルランド自由國なる名称を忌避し自らアイルランド語のエール共和國といふ名

稱を用ひ、茲数年来一独立國としてこの行動を採りつゝある。アイルランド自由國が英自治領と見る可きか或ひは別個の独立國と見る可きかは別問題として、今日のアイルランド自由國は自治領の唯一の義務とせらてゐる「共同の王冠に対する忠誠」さへも認めず一九三七年ジョージ六世の戴冠式に際しては、世界の有ゆる國々から祝賀の使節を倫敦に送つたそのなかで、使節を送らなかつたのは伊太利を除けばアイルランド自由國のみであつたといふことは、以て英國関係の如何なるものであるかを推測せしむるに十分である。

最後に現在アイルランド自由國の対英問題の中心をなして居る処の軍事問題、貿易問題について概観しよう。先づ軍事問題については、一九二一年の英愛平和條約には、外國の陸海空軍に対しアイルランドを対英攻撃の根據地として利用せしめないといふ條項があるが、之に対しアイルランドが如何なる態度に出るかといふことが注目の的となつてゐる。イギリス側としては、アイルランドは対英攻撃基地として利用される可

能性は無く、またその危険ある場合にはイギリスが先手を打つてアイルランドに敵を接近せしめない措置を取ると豪語してゐるといふ。それはとにかくアイルランドが外國をして其の國土を対英攻撃基地として使用せしむる場合にはアイルランドもまたイギリスによつて容易に攻撃さるゝことは云ふまでもなく、また攻撃によりアイルランドの蒙る損害も甚だしいであらうことは想像に難くない。従つてアイルランドが容易に軽擧盲動し得ないことは明白である。

次に貿易関係について述べれば英愛関係が一般に対立狀態にあることは既に繰返し述べた如くであるが、一方英愛間の經済関係がその地理的関係からして唇歯輔車の関係にあるべきことも事実である。アイルランドはアイルランド独立年賦金（土地領有報償金）の支拂をイギリスより要求されたが之を拒絶せるため、其の対英輸入品に対し報復的に極めて高い輸入関税を課せられてゐる。かゝる事情にも拘らずアイルランドの対英貿易は、それ以外の世界各地との貿易總計よりも遙かに多額である

といふ奇異な現像を示してゐる。アイルランドとしては如何に高率関税を課せられても、損を覚悟で対英輸出の維持増加に頼らなければならない事情にある。他方イギリスとしても口先だけではアイルランド生産物の輸入禁止によつてアイルランド農民は全滅すると強がりを云つてゐるが、國内食糧品の需給上、アイルランドの対英行動に憤慨しつゝもアイルランド生産物に対し断乎たる輸入禁止の強硬策に出られないといふ事情にある。イギリスの識者の内にはイギリスに対するアイルランドの軍事的重要性を強調し、英愛間の融和を計るべしと主張するものがあるといふことである。

第四章　英植民地民族事情

第一節　カナダ

カナダの存在は既に十一世紀頃から北欧人によつて知られて居り、彼等による植民活動も時折行はれはしたが、何れも一時的のものに過ぎなかつた。カナダに於ける本格的な植民の行はれ始めたのは之より遙かに後れ、十六世紀に入つてからである。

一五三五年に佛人カルティエーはニユー、フアウンドランドよりセント、ローレンス河を溯つて探検し、モントリオールに達し、フランス国王の名に於て同地方を占領した。次いで一、六〇三年シャンプレーンはアンリー四世の命によりカナダ植民に従事しアゲジヤ（ノヴア、スコーシア）クエベツクの二植民地を建設し、鋭意植民地の拡張に努めた結果フランスの勢力

は次第に強国になつておつた。
一方イギリスも十七世紀の初頭以来積極的にカナダ植民地の建設に乗出し、一六二八年にはフランス植民地ノヴア、スコーシヤを占領するに至つた。
かくして十七世紀以後植民地争覇をめぐつて英佛間の対立抗争は愈々激化することゝなつた。殊に欧州に於けるスペイン王位継承戦争その他をめぐる英佛の争ひは植民地にも反映して、英佛植民地戦を一層深刻なものとした。
英佛争覇は結局イギリスの勝利に帰し、イギリスは一七一三年のユトレヒト條約によりニユー、フアウンドランド、ノヴア、スコーシヤ及ハドソン湾沿岸地方を領有した。其後欧州に七年戦争が起つたが、イギリスはフランスが大陸の戦争に忙殺され、植民地を顧みるいとまなきに乗じ五大湖地方の要塞並にフランス植民地の本據たるケベツクを陥れた。次いでイギリスはパリ平和條約によつて全カナダを正式にフランスより譲渡せ

しむることゝなつた。
其後イギリスはカナダ植民地に於ける英佛両系植民族の融和を計るために、旧佛領地域の住民に対し頗る広汎な地方自治権を賦与すると共に民法、商法等もフランス法の踏襲を許し、用語及信仰の自由をも確認して民心の安定に努力するといふ寛大な態度に出たのである。かゝるイギリスの努力にも拘らず、人種、宗教、言語、風俗、習慣等の相違は両系人民の融和を阻害し両者間の対立関係を解消するに至らなかつた。
イギリスのカナダ領有の初期に於てはカナダは上下カナダ、ノヴア、スコーシア、ニユー、ブランズウイツクの四つの自治的植民地から成つてゐたが、各植民地の発達に伴ひ、之等各地を聯絡統轄すべき中央政府の必要を生じ、一八六七年強力なる中央政府を有する联邦即ちカナダ自治領が組織せられるに至り、茲に今日の政治制度が確立さるゝことになつた。其の後マニトバ、英領コロムビア、プリンス、エドワード島、サスカツチユワン、アルバータの五州が联邦に加入し、また西北領地方及ユーコン地

方が联邦の直轄地域に編入され、これに九個の自治州と二個の联邦直轄州とより成る、現在のカナダ联邦の様態が整へられたのである。

その後第一次欧州大戦があり、カナダも参戦してイギリスのため貢献するところ多く、その結果ヴェルサイユ平和会議に際しては、カナダは之に対し自らの代表を送り、更に條約に署名する権限をも与へられた。

第一次大戦以後の時期はカナダの国力が次第に充実すると共に、その享有する自治権の内容も次第に高められて行った時代である。

一九二三年の英帝国会議、一九二六年の同会を経てカナダの独立的地位は次第に強化されていったが、一九三一年に発布されたウェストミンスター憲章は各自治領とグレート、ブリテンとは互に共同の王冠を推戴するといふこの外に何等の従属関係を認めない、完全に平等な立場に立つものであるといふことを明示してゐる。

自治領は最早「帝国の内部に於て独立」であるのみでなく「世界に於て独立」なのである。自治領は今日に於ては單に「自治権を委ねられた

植民地」ではなく、植民地以上の一種の独立國家であるといはなければならない。

本国と自治領との関係は「共同の王冠に対する忠誠」によって結ばれてゐるけれども、其の権利に於ては対等であり、本国政府の発言や行動は何等自治領を拘束し得ない。本國に於ける如何なる権力機関も、憲法も、議会も自治領に対し何等命令する力を有ってゐない。しかも自治は対内関係についてのみではない。

対外関係に於いても同様である。外交問題に関しては本国と自治領の間には意見の交換や意思の疎通は行はれるけれども、政策の決定は各独立に行はれる。戦争に参加するか否かといふことさへ自治領が独立し、別個に決定すべき事柄である。

かくの如く最早今日に於ては自治領を以て一種の独立国と見ることが寧ろ現実に則した観方といふべきである。またこれを自治領住民の心理状態といふ方面からみても、今日カナダ人や濠洲人は自らを「カナダ人

」、「濠洲人」として意識し、最早「イギリス人」としては意識してゐないのである　彼等が所謂本国に協力するとしても、それは本国の為にではなく、共同のなにものかのためになすに過ぎないのである。また自治領の唯一の義務とせられてゐるところの「共同の王冠に対する忠誠」の解釈も自治領に於て区々であり、アイルランドの如きもあり得るのである。

以上極めて簡略ではあるが、我々はいはゞこのカナダ小史を通観してこゝに注目すべき二つの事実を見出すのである。

其の第一は歴史家の謂ゆる英帝国の遠心化の過程即ち植民地の分離独立化の過程である。

元来カナダは植民政策学上の謂ゆる移住植民地として発展したものである。かくの如き、アングロサクソン乃至白色人種の移住地に対するイギリス本国の統治方針は専ら収奪と搾取を目的とする開発植民地に対するものとは全く異り、移住者による自治といふことであった。勿論自治領がその完全なる自治権を獲得する過程に於て、本国の利益のために植民地の自由が束縛されるといふことはあったろう。しかしそれは植民地の成育過程に見られる寧ろ非原則的な現象であって、移住植民地に対する本国の本質的態度は本国の出店ともいふべき移住植民地の健全なる発展を希望するにあったものと考へられる。

自治領に対する本国の態度がかゝるものであったとするならば、人種的文化的共通性の点より見るも本国と移住植民地との間には、異人種、異文化より成り　それに対する目的が単なる搾取に過ぎないところの収奪植民地乃至開発植民地との間に見らるゝ如き深刻な民族的対立関係が生する余地のないことは当然である。

カナダと英本国との間に何等の利害の対立がなかったといふのではないが、その事実を以てイギリス人とカナダ人との民族的対立相剋と解することは妥当でないであらう。寧ろ問題はカナダがその成長発達と共に次第に母国たるイギリスよりの分離独立化の傾向を強め、最早今日に於

いては完全な独立国として本国と完全に対等な地位に到達したといふこ
とゝ一方その地理的な條件も手助けし米国に対し政治的、経済的、文化的
に次第に接近の形勢を示しつゝあるといふことである。

第二の問題はカナダに於ける英佛両系住民の対立相剋といふ純然たる
国内問題である。カナダ小史が示してゐる通り、カナダ史の少なからざ
る部分は英佛人の血腥き争闘によつて占められてゐる。今日に於てもカ
ナダには多数のフランス系移民の子孫があり、それらは大局的にはアン
グロサクソンに同化され、広義のアングロサクソンを形成してゐるとは
いへなほ人種的、宗教的、文化的相違等に基づく対立関係を解消してな
い。

否佛系民族を以て独立の共和国を建設せんとする所謂ラレンシヤ共和
国建設運動は国際情勢逼迫の現状に於て一時屏息せるとはいへ、将来再
び表面化するものと見られてゐる。そこで本稿に於ては先づカナダ自体
の直面する国内的な民族問題として英佛両系カナダ人の摩擦相剋の問題
について極めて簡單な展望を行ひ、その後でカナダの対英、対米関係に
多少論及しようと思ふ。

合衆国がこゝに移住して来れる種々雑多の異分子を同化して、アメリ
カ的なアングロサクソン文化を建設したるに反し、カナダは移民の人種
が單純であるに拘らず、依然として同化し切れぬ人種問題の悩を抱いて
ゐるのである。即ち一方に於ては英佛両国間の協定によつて特殊の権利
を享有し飽くまでも、その独自の個性を推持しつゝあるフランス的なカ
ナダ文化とイギリスの傳統を享けつぐ英国的なカナダ文化とが並立する
その上に南に隣接する強大なるアメリカ文化の影響をも受け入れ、カナダ
は正に之等三つの文化型の混合の上に錯雑混沌たる、様相を呈してゐる
のである。カナダには佛系カナダ人専門の学校があり、新聞があり、特
殊社会施設があり、佛系カナダ文学と称されるものさへ生れてゐるとい
ふ。以て此間の事情を察するに足るであらう。

欧洲人のカナダ開拓初期より十八世紀の末に合衆国の独立を見るまで

の期間に於てはカナダ人口の大部分はフランス系住民によつて占められてゐた。合衆国独立に先立つ二十年の一七六三年には佛系住民の人口数は六万五千であつたと云はれてゐる。合衆国独立後独立地域内に住む移民中飽くまで英本国との連繋を保たうとする人々は大挙して北方へ再移住をなし、こゝに於て従来「フランス系住民によつて大部分を占めて居つたカナダは既に英系住民を加へ、やがて英系カナダ人が佛系カナダ人を凌駕するに至つた。

フランス系カナダ人がイギリスの治下に入れられてから既に百八十年になるが、この間佛系カナダ人はよく既得の特殊的地位を失はず、寧ろ前途に民族的優越性をさへ期待されてゐるのは主として宗教に起因するものであり、フランス系旧教徒をして英国系新教徒と別個の存在を得せしめたのは正に教会の活動によるものであるとされてゐる。

旧教会は新教教会に比して遙かに大なる社会的支配力或は活動性を有するといはれてゐるが、カナダに於ける旧教教会の勢力はフランス系カナダ人の初等学校から大学までの教育機関を全く掌握しつゝあり、かゝる教会勢力下にあるフランス系の教育機関によつてフランス文化の傳統が永く保持され得たのである。フランス系カナダ人の団結を助成する役割を果しつゝあるフランス語はクェベック州に於ては英佛間の條約により容認保障され、諸学校の第一國語とされてゐる。このことがクェベックをして、ますます佛系カナダ人の本據たらしめてゐる。

イギリス人とフランス人とは血統上必ずしも遠縁ではないが多くの点に於て異なる特徴を有つてゐると云はれてゐる。例へば気質といふ点からみてもフランス人の理窟屋に対しイギリス人の現実第一主義、英人の鈍重に対し佛人の軽妙、英人の常識的に対しフランス人の天才的と挙げれば切りのない程の違いがある。ところが英系カナダ人とフランス系カナダ人との差違は英本国人と佛本国人との差違に勝るとも劣らないといはれてゐる。マッククリアリー教授はカナダは国民といふ共通の絆で結ばれた二つの國語と二つの人種から成立つ國であるといつてゐる。

かくて之等両者の間には種々の問題についてしっくり意見の一致を見ないといふことは当然であらう。英佛両系住民が如何に非融和的であるかといふことについては、こゝに二、三の例を挙げて之を推測することにしよう。

先づ一つは先に一言したラレンシヤ共和国建設の問題である。佛系カナダ人の指導者達は同種全住民を糾合して独立を企て、合衆国の東部に隣接するセント、ローレンス地方をカナダ聯邦から分離し、そこに旧教勢力を背景とする一共和国を建設せんとする運動を最近まで続けて来たといふことである。この運動は第二次大戦の勃発、カナダの対独宣戦といふ国際的緊急事態の下に於て一時そのかげを潜めてはいるものゝ将来再び燃え上るべきものと見られてゐる。

また一九三九年に入り第二次大戦勃発し、イギリスの対独宣戦布告に直面するや、カナダ首相は直ちに凡ゆる方法により対英援助を行ふべきことを声明し、次いで総督は聯邦議会に於て独加間に戦争状態の存在す

ることを宣言し、之に引続き英国々王がカナダ国王の資格に於て対独宣戦布告文に署名し、カナダは名実共に参戦することになった。カナダの宣戦問題に関し、州政府の聯邦政府に対する態度は必ずしも支持的ではなく、フランス系カナダ人の本據たるクェベック州の如きは聯邦政府の措置が州の自治権を侵害するとの理由で反対した。当時若し英軍が英本土で敗戦すれば英政府及英艦隊は殆んど異論なくカナダへ移駐し、カナダより抗戦を継続するといふ態勢を示してゐたのである。かゝる緊急事態にありながら、戦争に関する英佛両系民族の見解が対立状態にあつたといふことは、真に驚くべきことゝ云はざるを得ない。かゝる一例を以てしても両民族の非融和的状態を推測するに十分である。

之と同様のことが第一次大戦に於ても見られ、当時聯邦議会に於けるクェベック州選出聯邦議員の戦争参加反対、強制徴兵反対等の事実があり、カナダ全土の統一に幾多の支障を来たしたのである。

カナダに於ける英佛両系民族の対立抗争及びその前途といふ問題につ

いては、人口問題が極めて密接な結び付を有つて居り之を省略することは出来ないので、こゝに簡単ながらカナタの人口問題に一言触れて置きたい。

一九三一年の調査の結果によればカナタの人口数は約千三十八万であつた。その内九七%は欧州系であり、その内英系は五二%と過半数を占め、之に次いではフランス系の二八%、ドイツ系五%でこれら三者のみで八五%を占めてゐることになる。之を以てしてもカナダが如何に完全な白色人種国であるかゞ分る。先住民たるエスギモー及米系印度人は合計僅かに二十二万に過ぎない。一方一八七一年に於ける人口数は三百六十九万であつたから之を一九三一年の人口数に比較すれば、この七十年間に約二、八倍の人口増加を示したことになる。一八七一年以来のカナダ人の自然増加率を示せば次表の如くである。

一八七一 — 一八八一	一七、二三
一八八一 — 一八九一	一一、七六

一八九一 — 一九〇一	一一、一三
一九〇一 — 一九一一	三四、一七
一九一一 — 一九二一	二一、九四
一九二一 — 一九三一	一八、〇八

カナダの如き移住植民地に於ては人口増加に関しては自然増加よりも移入超過がより大なる役割を演ずることが屢々ある。事実約三十年前まではカナダ人口増加の主たる原因は自然増加ではなく移入超過であつた。

殊に一九〇一年—一九一一年の人口増加は移民殺到に負ふところ極めて大である。即ち同期間に於ける移入超過は九十八万以上に達したが之に対し自然増加は八十五万に過ぎなかつたのである。

然るに一九一一年以後に於ては移入超過と自然増加の地位は転倒した。特に一九三〇年には新たな移民に対し厳格な移民制限法が適用されることゝなつたため、それ以後の人口増加は殆んど全く自然増加によることゝなつたのである。

カナダ自治領全土について人口動態統計が得られるやうになったのは一九二六年からであるが、各州については夫れ以前の数字が利用し得るそれらによるとカナダの出生率は異常に高かったことが推察し得る。其後出生率は次第に低下したが、然し一九二六―三〇年といふ比較的最近までカナダの出生率は二四、一といふ割合に高い率を維持して居ったのである。この当时濠州の出生率は二〇、九九、ニュージーランドでは一六、七、イングランドウェールスでは一六、七といふ低率にまで下って居ったのである。

しかしカナダの出生率を州別に観察すると、九つの州の間には相当の差違のあることを知るのである。例へばクェベック州では三〇、五の高率を示しておる一方オンタリオ州では二一、英領コロンビアでは一六、二と極めて低率を示しておる。かくの如き州別出生率の著しい差違は如何なる原因に基くものであらうか、マックグリアリー教授によれば、かゝる地

方別出生率の差違は経済的地位、又は人口の体性別構成の差違といふのが如き普通の原因によっては説明し得ないものであり、それらは宗教の相違といふことを意味する人種の差違に関聯を有するものであると述べておる。

カナダ人の出生率について最も重要な特色は、各州の出生率が仏系カナダ人の人口割合に応じて異なって居るといふことである。例ば仏系カナダ人が全人口の七九%を占むるクェベック州に於ては一九二六―三〇年の出生率は三〇、五であったが、一方仏系カナダ人の割合が七、八%に過ぎない、オンタリオ州に於ては同年の出生率は二一であり、更にその割合が二、一%に過ぎない英領コロムビアに於ては僅かに一六、二に過ぎないのである。かゝる現象は要するに仏系カナダ人の出生率が高く、英系カナダ人に於ては低いことを物語っておるのである。かくの如き仏系カナダ人の高出生率を以て人種的な特性と考へ得ないことは、彼等の母国の出生率を見れば分るであらう。

佛系カナダ人の高出生率はローマン、カソリツク教会の影響であると説明する外はない。佛系カナダ人の殆んど全部は熱心な旧教徒でありカソリツク教会は避妊を禁じておるからである。因みに英国系カナダ人は主として新教の各派を信奉し、佛系カナダ人は旧教徒信奉に一貫しておるといふ宗教上の相違は既に著名な事実である。

一方フランス系カナダ人の圧倒的に多いケベツク州の死亡率はカナダとしては最も高率を示しておる。それに反し英系カナダ人の多いオンタリオ、英領コロンビア州に於ては死亡率は格段に低い。即ち佛系カナダ人は謂ゆる多産多亡型であり、英系カナダ人は少産少死亡型に属するものと云ひ得るのである。

そして、出生、死亡を差引きして、人口増加率といふ点から見れば佛系カナダ人の圧倒的勝利で佛系カナダ人は英系カナダ人に比し問題にならぬ程旺盛な増殖力を示しておることは次表に見らるゝ通りである。

一九三四年に於ける主要州別人口動態率

	出生率	死亡率	自然増加率
カナダ全國	二〇、五	九、四	一一、一
ケベツク	二五、五	一〇、六	一四、七
オンタリオ	一七、五	九、九	七、六
英領コロンビア	一三、五	八、八	四、七

かくの如き民族別差別増殖力の結果としてカナダの民族別構成が次第に非英国的方向に変化しつゝあることは云ふ迄もない。試みに過去、六十年間に於ける英系カナダ人の人口割合を見るに次表の如く次第に低下しつゝある。

一八七一年	六〇%
一九〇一年	五七〃
一九一一年	五四〃
一九二一年	五五〃

一九三一年　　　五二%

なほこの六十年間に於てフランスからの新移民はなかつたのに、イギリスからの移民は夥しい数に達したといふことを考へ合せると右の表は佛系カナダ人の増殖力が英系カナダ人に比し如何に旺盛であつたかといふことを示してゐるのである。

一九三一年の調査当時英国系カナダ人は五百三十八万餘で全人口の五二%を占めて居り、佛系カナダ人の本據たるクェベック州を除けば大体至る所で主要民族の地位を占め、特に東部三州に於ては全住民の七一%といふ高い割合を占めてゐる。これに対し佛系カナダ人は二百九十二万餘でカナダ全人口の二八%を占むるに過ぎず、数の上から英系カナダ人とは相当の開がある。

しかしながら、現在の民族的増殖力の差違が将来も長く持続するとするならば、半世紀の後には佛系かなだ人はカナダの支配的民族となる運命にあるものと予想されてゐる。

カナダ自治領は之を全体としてみれば他の自治領、合衆国或は西欧諸国に比し今尚相当に高い再生産力を有してゐる。現代カナダ人は自らを置き代へる以上の再生産をなしつゝあるのである。しかしその再生産力は次第に低下しつゝある。カナダも恐らくは西欧諸国と同一の運命を辿り、やがては純再生産率の台割れを演ずるに至るものと思はれる。こゝにカナダは西欧諸国と全く共通の悩みを有つてゐるのである。しかもカナダについては更に特別の事情があるといふことは先きに述べた通りである。

マツククリアリ教授が述べてゐる通り、「未来のカナダ人はシェークスピアの言葉ではなく、モリエールの言葉を語るに至るかも知れない」といふことこそ英系カナダ人はもとよりイギリスの憂慮の種となつてゐる。

以上主としてカナダの対内問題について述べたのであるが、次にカナダの対外問題としてカナダが次第に英本国から分離独立する一方米国に

接近しつゝあるといふ点について極めて簡単に述べて置かう。

カナダが第一次大戦以来次第にその国力を高めると共に漸次英本国から政治的独立を強化してゐつたといふことは、先のカナダ略史の中に於て一言述べて置いたところであるから、こゝには繰返さない。こゝでは単に経済的側面から観察を加へることゝしよう。

先ず貿易の方面からカナダと英米の関係を覗つて見ることとする。

前世紀の末期から一九三九年までの期間に於けるカナダの相手国別輸出入貿易は次表に示されてゐる通りである

カナダの相手国別輸出貿易

	一八八六年	一九一四年	一九二九年	一九三九年
米國	四四、一%	三七、九%	三六、八%	四〇、六%
英本國	四七、二%	四九、九%	三一、四%	三五、一%
英本國以外の英聯邦内諸国	四、二%	五、四%	七、八%	一一、一%
米國以外の諸外國	四、五%	六、八%	二四、〇%	一三、二%

カナダ相手国別輸入貿易

	一八八六年	一九一四年	一九二九年	一九三九年
米國	四四、六%	六〇、〇%	六八、六%	六二、七%
英本國	四〇、七%	二一、四%	一五、三%	一七、六%
英本国以外の英聯邦内諸国	二、五%	三、六%	五、〇%	九、九%
米国以外の諸外国	一二、二%	一一、〇%	一一、一%	九、九%

先ずカナダの輸出貿易についてみるに前世紀の末期から第一次大戦勃発までの約三十年間に於ては、カナダの対米輸出貿易は常に対英本國輸出貿易以下であつた。即ちこの期間に於ては、英本國はカナダの農産物に対する顧客として米国に比しより重要だつたのである。然るに第一次大戦以後は形勢は逆転し、対米輸出の方が対英輸出を凌駕するに至つたのである。

次に十九世紀の末以後最近に至るまでのカナダの輸入貿易をみるに、米国よりの輸入は圧倒的に旺盛であり、常に英本国よりの輸入の数倍の

額に達しておるのみでなく、次第に増加する傾向を示しておるに反し英本国よりの輸入は次第に減少しつゝあることを知り得るのである。

更に注意すべき点は輸出入貿易を通じて、英本国以外の英聯邦内諸国及米国以外の外国との貿易比重が増大しつゝあるといふことである。之等の数字は、カナダの立場よりする限り、対英本國貿易の衰退を米国並に英聯邦諸国及諸外国との貿易の隆盛によって置代へたことを意味するものであり、貿易の上からもカナダが次第に英本国より離れ、米國其他との聯繫を強めつゝある形勢を窺ひ得るのである。

次に英加及米加の貿易関係を英国及び米国の側からみれば如何なる情況にあるであらうか。

英国の一九三八年に於ける輸出総額は五億三千万磅餘であったが、之を相手国別に見るとカナダはその四・四%で第七位を占むるに過ぎず独乙の五・〇%よりもなほ下位にある状態である。

また英国の輸入総額九億二千万磅を相手国別に見ると第一位は米國の

一二・八%であり、カナダは第二位を占めて八・五%となっておるが、このことはカナダが英国の必要とする原料食料品の相当多くの部分を賄っておるといふ意味に於て寧ろカナダの対英発言権を増大せしむるものであるとも解し得る。然らば米国の対外貿易に於けるカナダの地位如何といふに、一九三八年に於ける米國の輸出総額三十億九千四百十万弗のうちカナダはその一五%を占め英国の一六・八%に次ぎ米国最大の顧客であるまた輸入の方面に於ては米國の輸入総額十九億六千五十三万弗のうち第一位は断然カナダで一三・二%を占め第二位の英本国六・〇%とは格段の差がある。

次に投資の方面から英加、米加関係を眺めてみよう。

カナダに投下された外國資本は一九三七年末現在で六十七億六千五百万弗、その内五八%餘りは合衆國の投資であり、英国の分は三九%に過ぎない。カナダに投下されたる外国資本は右の如く巨額に達しておるのであるが　一方カナダとしても相当の海外投資をなしておる訳である。

然し債務の方がより多いことは云ふまでもなく、毎年巨額の利子配当の支払を行つてゐる。
一九三六年及三八年に於ける、カナダの米国資本に対する利子配当支払超過額はそれぞれ一億九千二百万弗及二億百万弗に達した。之に対し対英本国利子配当支払超過額は八千三百万弗及八千二百万弗に過ぎない。しかも一九三六年を一九三八年に比較すると対米支払超過額は増加してゐるが、対英本国支払超過額は僅かながら減少してゐるのである。之等の数字によつても、カナダの対米依存性が次第に高まりつゝあると共に、対英本国関係が次第に稀薄になりつゝあることが領けるのである。
更にカナダに於ける外国資本の投下状態を米国及英本国の側から見ると如何なる状況にあるであらうか。先づ米国側からみると、一九三六年に於ける米国の海外投資総額約百三十億弗のうちカナダに対する分は二六、九%で第一位にあり、これに次ぐドイツに対する九、二%とは雲泥の差がある。

一方英国側から見ると、一九三六年に於ける英国の対外投資総額は約三十七億磅であるが、之を国別にみると、第一位は濠洲の一五、四%、第二位は印度の一四、三%でカナダは一四、一%で第三位にあり、米国のカナダに対する関係とは可成りの開きが認められる。
以上の如く、貿易及投資の方面よりしてもカナダと米国との相互依存の関係が極めて深く到底英加関係の比でないことを知り得るであらう。
以上の如き経済的事実によつてもカナダに対する英米の引力の何れが強いかといふことは推察に難くない。地勢的にみてもカナダは北米の延長地域であり、この間何等自然的な国境を有してゐないと言はれてゐるが、かゝる地政学的条件がカナダに及ぼす米国の牽引力をいよ〱強大ならしめることは当然であらう。
殊に一九四〇年の米加共同防衛協定は、従来一貫して孤立政策を固執し、米国の汎米工作への参加を頑強に拒否しつゝあつたカナダが遂に米国との共同工作へ加盟することを意味し、こゝに米加関係はいよ〱緊

密化することゝなったものであり　カナダ外交の劃期的転向として極めて注目されておる。事実カナダ人自身の間に於てもカナダは最早名目上英国々王の治下にあるのみで実際には米国の北辺延長地帯に等しくなつておるとの意識が相当に強められて来ておるとのことである。

しかしながら、カナダは今尚英国に対する忠誠を失つておらない、一種の宗教的観念とさへ云はれる程の強烈な英国主義的感情を有つておると云はれておる。

一方米国に対しては親しみのうちにも、自己の存立を危くする虞があるものとして心中秘かに恐怖の念を抱いておるという。かゝる恐怖心は米国の独立当時英本国との聯繋を保たんとしてカナダに移住した王党派の人々が米国に対して抱いた多大の恐怖心と、限りなき怨恨をいまだに受けつぎ、現在にまでその影響を残しておるものといはれておる。

図らずも今次大戦に際し米加関係は極めて緊密化することゝなり、かくの如き米加両人間の見えざる溝は癒されたとはいふものゝ、前後三回に亘れる米国のカナダ侵入等によつて抱くに至つた対米不信の感情、カナダ独立維持の意識、傳統的な対米恐怖感、怨恨は依然として消滅していない。之等はいづれも将来の米加関係を律するものとして注目すべき点であると見られておる。

現在のカナダの国際的立場としては一方に於て英国に対し協調的態度を採り、以て米国からの重圧を支ふると共に他方第三国からの脅威に対しては米国の存在を有力なる安全保障と考へ、結局カナダの政治的独立はこの二重依存関係の均衡保持によつて保たれざるを得ないであらうと見られておる。

第二節　ニユージーランド

ニユージーランドは一六四二年オランダ人タスマンによつてその存在を認められたが、その後約百二十年間は世人より置き忘れられてゐた。其の後一七六九年に英人クツクが上陸して之が占有を宣言して以来はイギリスの植民地として英領の一に加へられた。併しながら當地ニユージランドに対する英國政府の開発方針には未だ確たるものなく、とりあへず之をオーストラリアのニユー、サウス、ウエールスの属領として取扱ふに過ぎなかつた。一八二五年英人の一団は初めて此地に移住したが間もなく立去り、フランス人も一八三五年に之を占領したが遂に保持出来なかつた。

ニユージランド植民は英人ホブソンとマオリ族酋長がウエーターンジー條約に署名した一八四〇。年以来のことである。当時白人移民は千人にも満たなかつたが、ウエクフィールド式の組織的移民計畫が成功し、ニユージラン

ドが本國に対し價値ある植民なることが判明するや、イギリスは一八四一年之をオーストラリアの属領より分離し、独立の植民地とふし積極的開発に着手した。それ以来人口は次第に増加し、一九三六年には遂に百五十万を突破するに至つた。ニユージーランドはオーストラリアと共にイギリス人が大量的に植民して成功した例と見做されてゐるが、一八四〇年英國の宗主権宣言以来僅々一世紀にして近代國家としての形態と内容を整へ、僅かに百五十萬の人口を以て英联邦の一自治領として克く自立自存を計り得るまでに発展し得たのは開発の方法が組織的であつたればこそであると云はれてゐる。因にニユージランドは一九三一年のウエストミンスター憲章によつて自治領の資格を与へられた。

　ニユージランドは世界中で最も英國的であると云はれてゐる。或るイギリス人の如きはニユージランドはイギリス以上に英國的であるとさへ云つてゐる。ニユージランドの移民は殆ど全部イングランドから来たものであるがオーストラリアに渡つた移民の多くはアイルランド、スコツ

トランド及ウエールス地方からのイギス人を主流として居る。このことがニユージーランドをして英國的即ちイングランド的ならしめてゐる原因である。ついでながらカナダに於ける英系カナダ人の出身地を見ると、イングランド系が五二%、スコツトランド系が二五%、アイルランド系が二三%といはれてゐるが、然しカナダ在住のイングランド系人民もその多くは北イングランド地方の系統を曳くものとされ、北イングランドとスコツトランドの相似性から見て結局英系カナダ人の大部分は極めてスコツトランド的色彩が濃厚であるとされてゐる。かゝる民族構成上の相違が自治領中にあつてニユー・ジーランドをして最も英國的ならしめてゐる原因である。

　ニユージーランドの移民がイングランド一色であるといふことが、植民地社会を極めて単純、自然的ならしむることは云ふまでもなく、殊にニユージーランドにはオーストラリアの如く罪人の流刑を行はなかつたがために、社会の空気は極めて明朗であるといふ。

尚右の如きニユージランドの純一性は今日まで採られ來つた移民政策によつて一層擁護されたことは云ふまでもないがこの点については後に述べるつもりである。

ニユージーランドはオーストラリアと異なり全島温帯にあり氣温の変化の少き海岸性氣候を有し白人の移住には極めて適してゐる。

ニユージーランドは優れた健康地であるとされてゐるが、こゝに興味あることはニユージーランド、オーストラリア共に、その自然自体が人間の身長を伸ばす作用を持つて居るといはれてゐる。此の地方に來住の欧洲人も氏を重ねるに從ひ一様に身長が高くなるといはれてゐる。ニユージーランドのマオリ族も身長頗る高くスポーツ向の理想的肉体を有つて居るといふことである。

一八四〇年以來入植を開始したイギリス系住民も二氏、三氏となるに及んで斉しく背が伸びる傾向にあるといふ。しかし之等の現象も要するに、ニユージーランドの氣候が佳良で、春秋は云ふまでもなく夏冬でする野外運動に適して居り勢ひ在住民の運動勢を高め、自然肉体的向上が

齎らされるといふことであるらしい。

自然的な諸條件が民族性に対し何等かの程度に於て影響を及ぼしてゐることは容易に相像されるところであるが、ニユージーランドの國民性といふものも、たしかに其の温和な氣候の影響を受けてゐるやうである。

同じ英联邦内にある自治領でも、オーストラリア人、ニユージーランド人とカナダ人或は南阿联邦人とでは性格の上に非常な相違を見出すといはれてゐる。カナダ人がカナダの天地に米國と対等の文化を築き上げるには米國人が今日の地位を獲るために拂つて來た努力に数倍する努力を傾注しなければならない程の自然的に不利な條件の下にあつたといはれてゐる。カナダ人は米國を評して機会によつて築き上げられたものとし、自身カナダは機会の代りに忍耐によつて築き上げられたものと強調して止まない。カナダ人の環境はカナダ人をして、何よりも仕事を第一とする性格を形成せしめたのである。之に対し、ニユージーランド人は一躍一富豪に成りたいと云ふやうな願望は餘り持ち合せて居らず生活

に事足る程度の財源確保を以て満足するといはれてゐる。この点一獲千金を夢見る南阿聯邦人とは全く対遮的な存在であると云ふ。
ニュージーランド人もオーストラリア人もその青年壮年の時代には非常に勤勉に働くが、決して老後まではあくせく働かず、まだ活力のあろうちに隠退して生活を楽しむことを理想としてゐるといはれてゐる。
かゝる生活態度を反映せりや否やは確言出来ないが、ニュージーランドにもオーストラリアにも抜ん出た富豪の類は非常に稀で、その反面極端な貧民層も少く従つて中産階級が比較的多数を占めてゐると云はれてゐる。その影響を受け人間同志といふ平等意識が強いといふ。之は勿論民族内部だけに通用するに過ぎない。
ニュージーランド及オーストラリアは「労働者の天國」と云はれて居るだけあつて、各種の労働立法の外一般社会施設と完備されてゐるといはれるが一つは階級的類似性の然らしむるところであらう。
さてニュージーランドは氣候が白人の定住に適し、資源また豊富であ

り、かてゝ加へて植民計畫宜しきを得たため、こゝに於ける植民事業は非常なる成功を納め得たのである。然し乍ら、入植の初期に於ては可成りの困難や支障が横たはつてゐた。頭初欧洲人の植民が発展しなかつたのは、オーストラリアの先住民族に比し文化程度の遥かに高く、またその人口数も多い原住民マオリ族によつて妨害されたからである。マオリ族はオーストラリアの原住民と異なり文化に順応する能力を有し、農耕に長じ工藝に巧であるといはてゐる。
近来マオリ族の数は極めて少数であり、一九三六年の國勢調査によると、その人口数は混血人を入れて八万二千人、ヨーロツパ人の百四十八万余に対し僅かに五%程度を占むるに過ぎない状態である。今日白人のマリオ族に対する態度は相當寛大であり、現在マリオ族は白人と同一の政治的権力を与へられつゝあるが、一八六〇年代に於ては白人植民者との間に血腥き闘争が続けられてゐたのである。
紛争の原因はホブソンとニュージーランドの主なる酋長との間に締結

された所謂ウエータンジ條約にあつた。本條約は次の三箇條約より成り、

第一條　ニユージーランドの酋長は土地人民に関する一切の權利を英國女皇に讓渡すべきこと。

第二條　英國女皇は酋長の所有に屬する土地、森林、漁業其の他の財産に対して十分なる保護を与ふべきこと、但し彼等が其の所有地を賣却せんとするときは英國政府に申出でて其の許可を受くべきこと。

第三條　英國女皇の名に於て土人に対しては總て英國臣民と同一の權利を与へる。

といふのであつた。然るに土人は條約の何たるやを解しなかつたため、後にイギリス人とマリオ族との間に紛争をかもすこととなつた。果せるかな一八五〇年代に至つて土地の所有問題に関し白人とマリオ族との間に一大紛擾を見るに至つたが、政府はマリオ族に対し極めて威嚇的態度に出たため、一八六〇年より六六年にわたり、長期の戰亂が起

つた。

當時マリオ族の人口十二萬人は十年以内に半減したといはれてゐる。結局戰争は英國人の勝利に帰したが、政府は原住民に対し種々待遇上の改善を許ることの必要を認め、彼等のために、学校、病院等を設け、下院に四人の議員を出席せしむる權利を附與した。後に至り、労働者保護に関する法律制定せられ、無料の学校教育、强制的仲裁手續、仲裁裁判及最低労賃並に養老年金等の諸制度が施かれ、マリオ族の社会的生存が保障さるゝこととなつた。

現在マリオ族は欧洲人と平等なる政治的地位を享有し、人口数に比例しヨーロツパ系移民と同一割合の兩院議員を有し、内閣に閣僚を送り、また社会の各方面に重要な地位を占めてゐる。

尚オーストラリアの原住民が滅亡に瀕してゐるのと異なり、マリオ族の増加率の大なることは注目すべくニユージーランドの白人人口の自然増加率が一路減退の傾向を示してゐる一方マリオ人の増加率は近年ヨー

ロッパ人を遥かに凌ぎ、逐年増加の傾向にあるといふ。
ニユージーランドの現在直面する最も重要な問題に人口問題がある。以下ニユージーランドの人口事情について簡単に述べて見よう。
十五年程前までは、マリオ人以外のニユージーランドの人口は非常な勢で増加したのである。例へば一八八一――一九二〇年の四十年間に於ては、年平均の増加率は人口千につき二三といふ非常な高率であつた、それ以後一九二六年に至るまでは増加率は極めて高く二〇と云ふ率を維持したが、同年以降は次第に低落し、一九三四年には遂に六・四にまで低下した。
尤も一八七一――七五年までの人口増加は主として移民によるものである。例へば右の五ケ年間に於ける自然増加は四萬餘に過ぎないが、移入超過は約八万二千にも達して居るのである。然しこれ以後の時期に於てはニユージーランドの人口増加は主として自然増加によつてゐるのである。

ヨーロッパ系のニユージーランド人の出生率は以前は非常に高かつた。一八七六――八〇年の年平均出生率は人口千につき少くとも四一・二には達してゐたといはれてゐる。然しそれ以後出生率は漸減し、一九三四年には一六・四七にまで低下した。一方同期間に於て死亡率と一一・八から八・四八まで低下した。之は著しい死亡低下ではあるが、その低下割合は到底出生率の低下割合に及ばなかつた。
ニユージーランドの死亡率の低い理由の一つはニユージーランド人口に於ける青壮年人口割合が異常に高いことである。然し青壮年人口の死亡率の低いことは当然である。そこで将来之等の人々が年を取り高死亡率の年令に達する時が来れば死亡率は上昇せざるを得ない。また青壮年人口は高い出産力を有つてゐるが、之等の人口が年を取り再生産力を失ふ時が来れば出生率は著しく低下するであらう。
現在ニユージーランドの純再生産率は〇・九七八であるが、このことは現在の世代が次代によつて完全には置代へられないことを意味してゐる

。從つて若しニユ！ジーランドの出生率、死亡率及び移民が今後不變の狀態にあるとすれば、ニユ！ジーランドの人口増加はやがて停止し、次いで急速に減少するであらう。

右の如きニユ！ジーランド人口の危機は既にニユ！ジーランドの識者によつて自覺されて居り、同國首相も「人口こそニユ！ジーランド防衛の第一線である」と强調してゐる。

更にニユ！ジーランドのブレディスロー卿は、「人口情勢が斯の如くであり、而も英帝國中最も魅力に充ち、また開発容易なる此の國土の空隙を充たすために、眞剣にして遠大なる計畫が遂行されないならば、人口過剰にして嫉妬深き國々の、「英人は强慾であり、自ら利用しない人口稀薄なる土地を他國人をして利用せしめない」といふ批難を打破することは出来ない」と述べてゐるがニユ！ジーランド開発を白人のみの移存する從来の政策が最早行結りであることを自ら告白せるものと云ふべきである。

ニユ！ジーランドの總面積は附屬島嶼を含めて約十萬三千方哩、我が本洲と九州との合計よりも少しく広い。この國土に対し人口總数僅かに百六十五万余、人口密度は一平方哩僅かに十四人余に過ぎず、我國内地に比すれば三十分の一といふ稀薄さである。かゝる事實にも拘らずニユ！ジーランドの採つた政策は英人第一主義であり、殊に有色人種に対しては徹底的な排斥政策を採つてゐる。

ニユ！ジーランドはオーストラリアと同様、人種の純潔保持、労賃低下防止及其の他の政治的理由からアングロサクソン以外の移民を防止するに努めてゐる。一九二〇年の移民制限改正法は、英國人を親とし、英國生れの者以外は豫め許可を得るにあらざれば人口を許されないことを規定したものであつて、有色人種は勿論、白人であつても、アングロサクソン以外のものであれば、事實上移民の人口が禁止されてゐる實状である。

最後にニユージーランド対英本國の関係を一瞥して見よう。

ニュ！ジーランドはカナダ等に比し本國依存の程度は遥かに高いと云はれてゐる。先にも述べた通りニュ！ジーランド人は大部分イングランド人の系統であるが、このことがニュ！ジーランドをして特に親英的ならしめてゐるものと考へられるが、経済的にもニュ！ジーランドの本國依存度は極めて高く、従つて英本國のニュ！ジーランドに対する発言権もカナダ等に比してより大なる影響力を有つものと云ひ得る。

既に述べた通りニュ！ジーランドの社会政策的施設は極めて完備されてゐるが、之がために支出せられる費用も示大な額に上つてゐる。しかして之等の費用は何れも公債を以て賄はれて居り、その公債の大半は英本國金融市場に於て起債されてゐる。この結果としてニュ！ジーランドは年々多額の外債利子支拂債務を負ふて居る訳で、自然英本國の対ニュ！ジーランド政策がこの金融面を通じて示現され、ニュ！ジーランドの動向を大きく左右することは否み難い事実である。

更に貿易関係より見ても、ニュ！ジーランドの対英依在の極めて高度

であることを知り得る。

ニュ！ジーランドの貿易は、その産業構成を端的に反映し、輸出総額五千八百万磅のうちバター、チーズ、食肉、羊毛の如き畜産物の輸出が輸出総額の九割と云ふ圧倒的割合を占め、又輸入に於て自動車、機械器具、織物類等の工業完成品が八割以上、食料品及飲料品類が一割余を占める工業製品と食料品が輸入の九割以上を占めてゐる実状である。

而して貿易を相手國別に見ると、英本國との貿易が圧倒的に多く輸出にあつては総額の七六%、輸入にあつては四九%、輸出入総計に於ては六四%が対英本國貿易によつて占められてゐる。かくの如くニュ！ジーランドの対英依存性は金融、貿易等の経済関係を通じても明白に認め得るのである。

第三節　オーストラリア

「大英帝國は欧洲國家ではなく欧洲外國家である」と云はれてゐる。成程大帝国は世界面積の四分の一にも相当する尨大な領域を保有してゐるけれども、その領土のうちヨーロッパに存在するものは本国のブリテン島を除けばその面積僅かに五方料に過ぎないジブラルタルの岩石と地中海の小島嶼マルタに過ぎず、実に本國の一四〇倍にも相當する広漠たる植民地は何れも欧洲外の広大なる地域に散在し文字通り「太陽の波せざる国」を形成してゐる。

かゝる広大なる領域に居住してゐる住民は、その数約五億といはれ、これまた世界人口の四分の一に相當する。この五億の人口中白色人種は僅かに六千六百万、残餘の四億三千万は有色人種に属してゐる。この白人種の中圧倒的多数を占めてゐるものはアングロサクソン民族であることは云ふまでもない。

かくて大英帝國とはアングロサクソンが、その本國に百数十倍する領土を占有しまた自らに約七倍する有色人種を支配する組織であるといふことば出来よう。

かゝる広大なる而も分散的な領域の支配権を確保し得うるためには、アングロサクソンは、世界の爾餘の諸國家に隔絶せる民族力、武力、経済力を有しなければならない。

かへりみれば十六世紀末エリザベス時代以来間断なき膨脹の歩みを続けて来たイギリスは今世紀に於ては常に一貫して防禦的、守勢的、現状維持的であつた。イギリスが最早一世紀の世界制覇を享有し続けることの出来ないのは世界に対する関係に於て、相対的に没落しつゝあるが故である。

イギリスはその領土が分散的であり、従つて海洋の支配がその存立上不可欠條件をなしてゐること云ふまでもない。然るに第一次大戦後に於て海洋の支配に大きな変化が生じた。一九二二年ワシントン條約は英

國の海上支配権が量的に制限されたことを意味する。本條約はイギリスが単独優越の「二強國標準」の傳統よりイギリス、プラス、アメリカの新な式に転換せることを示すものである。更に潜水艦と空母の発達はイギリスの海上支配権を質的にも制限することゝなつた。

また世界の船舶界に於けるイギリスの地位も次第に低下した。第一次大戦直前イギリスの船舶保有量は世界の總噸数の殆ど半分に近かつたが、一九三八年には三割にも満たない状態となつた。

またイギリス経済の最も主要な部分をなす貿易についてもイギリスの地位は相対的に低下し、第一次大戦前イギリスは世界貿易額の十四%を占め世界の第一位に居つたが、第二次大戦勃発前には遂に合衆國によつて乗越へられてしまつた。

しかしながら、かゝる軍事的、経済的な優越性の喪失と共に、或はそれ以上に大英帝國の危機を招いてゐるものは実に英帝國の人口情勢にあるといふも決して過言ではない。現在のイギリス联邦を通じ、経済的に、社会的に、政治的、又軍事的に最も不安の焦点とせられてゐるものは即ち、抱擁する領域の広大さに比較して、余りにも人口稀薄の地を多く、且つそれをアングロサクソン民族によつて稠密化する見込みも立たないといふことである。かゝる事こそが英联邦のあらゆる前途を不安焦燥の極へと駆立てゝゐるのである。

人口問題こそは英帝國の民族、軍事、政治、経済、社会等の各方面に於ける有ゆる困難なる問題の最も深奥なる原因をなして居るのである。このことは特に人口稀薄にして資源豊かなる濠洲に妥当するのである。

本稿に於ては先づ、濠洲の対外的民族政策たる白濠主義なるものが、如何に多くの矛盾を内包して居るかといふことを、人口、國防、経済等との関联に於て述べて見ようと思ふ。オーストラリアの原住民に関しては問題の非重要性に鑑がみ本稿の最後の部分に於て簡単に觸れて居くに止める。

一七八七年、北米に代つて罪囚の流刑地として新に登場したオースト

ラリアに所謂第一艦隊が派遣せられて以来、自由移民の来住するものも次第に増加し此の地に居住する白色人種は年と共にその数を増加することゝなつた。

一八五三年には全オーストラリアにわたつて流刑が発止されるに至つたが、當時オーストラリアの人口は約四十八万であつたと云はれてゐる。その後人口は次第に増加し一八八〇年には二百二十六万となり、一九〇〇年には三百七十五万、一九二一年には五百四十四万、一九三十三年には六百六十三万となつた。一九三六年末の人口は更に増加し六百八十一万に達したものと推定されてゐる。この總人口中英國系以外の住民は原住民を分算してもその一割にも達せず九〇％以上は英國系の移民によつて占められてゐる。

一方大島嶼大陸オーストラリア及びタスマニア島の面積は約二百九十七万平方哩を包擁し、ほゞ合衆國の面積に等しく、またカナダの五分の四に相當し、グレートブリテン及アイルランドの約二十五倍の大きさを有

してゐる。従つてオーストラリアの人口密度は一平方哩當り僅かに二人に過ぎず、我國に比すれば實にその百六十分の一と、殆ど空地にも等しい狀態であり、しかもその人口の三五％まではシドニーとメルボルンの二都市のみに蜜集してゐる。

そも〳〵英帝國全体の人口密度が既に著しく低く、一平方哩僅かに三十五人、我日本全土の三百四十六人に比較すれば一割程度の稀薄さに過ぎない。尤も英帝國だけの人口密度は流石に高く一平方哩四百人を超えてゐるが、それでも日本内地の四百三十六人には及ばないのである。

英帝國内の全自治領の面積は世界全陸地の七分の一を占むるに拘らずその人口は僅かに世界人口の七十五分の一に過ぎない。之によつても自治領の人口密度が如何に低いかといふことは容易に想像し得るであらう。

即ちカナダ联邦は欧洲全度よりも大きい三百七十万平方哩の領域に僅か千五百萬の人口を抱擁してゐるに過ぎず、人口密度は僅かに三人である。

ニュー・ジーランドはその領域十萬平方哩にマリオ種族約七万、ヨーロ

ツパ系住民百五十万といふ稀薄さであるが、それでもその人口密度は十五人でオーストラリアの二人やカナダの三人に比較すればそれでも八倍乃至五倍の人口稠密さである。
　また南阿聯邦の領域は我國の約一倍に相當する五十万平方哩で、その現有人口は土着の黒人やアジヤ系諸人種五百萬にヨーロツパ系住民百六十五万で、人口密度は二ユ！ジーランドに等しく十五名を数へてゐる。
　かくの如く何れも甚だしく人口稀薄な自治領の内でも、オーストラリアはとりわけ甚だしい人口の稀薄さを示してゐる。
　右の如く殆ど無人の國にも等しいオーストラリアが絶対に有色人種の人口を排斥し、またアングロサクソン以外の白色人種に対しても成る可くその来住を拒否せんとするのは、そも〲如何なる理由によるものであらうか。
　オーストラリアは屡々スープ皿に例へられる。スープ皿の縁は肥沃であつて、オーストラリア人が生活してゐるのはこの部分であり、皿の中

央部は所謂砂漠をなして、耕作上利用し得ない部分が多いといふのである。
　しからばオーストラリアは果して現在既に人口抱擁力の限界に達してゐるのであらうか、この問題に解決を與へるために、オーストラリアの人口支持力に関する権威者の意見を聞いて見よう。
　F. C. Benham博士はオーストラリアの最適人口即ち人口一人當り最大の経済福祉をもたらすべき人口を千万から千五百万の間としてゐる。エール大学のEllsworth Huntington教授は新しく、豫期しない発見が行はれるか、或は生活程度が低下せざる限り最大人口数は二千万人を超えないと解してゐる。Jest教授も同様の見解を持ち「この有為なるオーストラリア人はスープ皿の縁で生活してゐる。縁の部分は肥沃であるが、皿の中央部は水のない沙漠である。大規模な灌漑計畫は望みがない。最も楽観的に見ても十九億四百万エーカーの内約四千万エーカーしか耕地はない。そこでオーストラリアは人類の生活する場所として見る場合に

はスペインかイタリー位の大きさに縮少することになる」と云つてゐる。他の權威者はこれよりは遙かに有望であるといふ意見を持つてゐる。Griffith Taylor 教授は、若しオーストラリアが歐洲なみの飽和点に達するとすれば約六千五百万の人口を支持し得ると推計してゐる。Mullett 及 Wadham はこの数字はオーストラリアの扶養能力を超えたものであり、四千万から五千万の間が実際的であると解してゐる。アデレードの Waite Agricultural Research Institute Richardson 博士は、オーストラリアは一億の人口を支持するに足る小麦を生産し得ると考へて居る。S. W. Gregory 教授及前首相 Hughes の推計もこれと同様である。

以上の如くオーストラリアの人口支持力の限度に関する諸家の意見はまちまちであり、それらの間には相當の開きがある。しかし乍らオーストラリアが今日以上の多数の人口を支持し得ることは明白であり、且つ、オーストラリアの資源が明かにされるに從つて、低い推計よりも高い推計の方が眞實に近くなりつゝあるものと思はれる。

前述の如くオーストラリアの面積はタスマニアを含めて約三百万平方哩であるが、この内約百十万平方哩は降雨量年一〇吋以下で、その大部分は沙漠状態をなしてゐる。しかし、内部は未開拓であり、近代的な灌漑方法を用ひることによつて沙漠を肥沃な工地にする可能性は大きい。その上オーストラリアには鉱物資源に恵まれてをるから、オーストラリアの將来は非常に有望であるといふことが出来よう。

アツク・クリアリー教授は最も内輪に見積つてもオーストラリアはその生活程度を低下せしむることなしに現在の少くとも二倍の人口を支持し得ると云つてゐる。

事情がかくの如きものとすればオーストラリアが絶対的に有色人種の移民を排斥し、またアングロサクソン以外の白人の植民をも餘り歓迎しない理由は、オーストラリアが現在以上の人口を支持し得ないといふ点にあるものでないことは明白である。然らば白濠主義なるものは如何なる

意圖を有するものであらうか。

　白濠の第一の論據は人種問題である。白濠主義者の意見によれば現在までの處オーストラリアには人種問題といふべき程のものはなかつた。オーストラリア人の九割以上は英國系であり、原住民はその数六万に過ぎず、而もその大部分は白人より遠く離れて叢林中に生活して居るのであるから、全然無視し得る存在である。オーストラリアには合衆國に見られるやうな深刻な人種問題は全くないといひ得るのである。然るに非ヨーロッパ系労働者の来住を許すならば、将来深刻な人種問題が発生する虞れがある。従つてオーストラリアは人種的な難問が増加しこそすれ減少するとは思はれない。アメリカや南阿の苦しい経験を繰返す愚をなしてはならないといふのが彼等の主張なのである。こゝに特に有色人種の労働者のみが特に問題とされてゐるのは後述の経済的理由とも結びついてゐるのである。

　第二は民主主義の擁護といふ見地からの有色人種排斥である。

オーストラリアは外國との紛争から殆ど全くわずらはされることなくして、そこに組織の上からもまた感情的にも真に民主主義的な、また全民衆が平等に経済的福祉を享愛する社会を建設したといふのが同國人の誇りの種なのである。かくの如く完全に民主主義的である。オーストラリアは、新移住民に対しても、その参政権を否定することは出来ない。しかるに政治的な見解及傳統、社会的行動に於て相異なるこれら選挙人の投票権といふものはオーストラリアの政治にオーストラリア文明の構造を破壊する無数の因子を導き入れることゝなり、オーストラリアが依然として民主主義国であり得るや否やは頗る疑しいといふのが第二の理由である、第三は経済的な理由である。

　アジア人の生活程度は欧洲人よりも低いから、これらがオーストラリアに来住するならば、それとの競争の結果オーストラリア労働者の現在の生活水準が脅かされる虞があるといふのが第三の理由である。アングロサクソン以外のヨーロッパ系の移民は余り歓迎されてゐないけれども

、有色人種の絶対排斥に比べればその程度は遥かに弱い。その理由としては以上述べた三つの事項が總してその理由となる訳である。

以上が白濠主義、正確に云へばアングロサクソン濠洲主義の論據であり、理窟はどうともあれ乗ずるに空地にも等しく、而も資源豊かなる広大な地域をアングロサクソンに依つて独占し享樂せんとするのが白濠主義の正体なのである。

然し乍ら世界の一角に人口過剰の圧迫に喘ぎつゝある有為なる民族がその資質を発揮すべき生活圏を求めて止まないに拘らず自らは之を充分に開拓し活用することもなく、単に広大な地域を独占し、續けることが果して公正なる態度と云ひ得るや否やは問はずして明かである。

オーストラリアの十分なる開発のためには更に多くの人間を必要とし、若し移民制限がないならば白濠主義の名に於て排斥さるゝ更に多くの人間は喜んで来住することは明白である。

然るに最近に至つて各自治領に於ても漸く識者達は彼等の固執し来れる空地独占政策が不公正なものであり、また如何にこの政策を維持せんとしても既に四囲の事情が之を許さざるに至りつゝあることを理解し初めたのである。

そして流石の白濠主義者達も最近に至り、一平方哩當り僅かに二人の人口を以てしては、例へその対外軍備を強化するとはいへ、活用しきらぬ大天地を徒らに一人占めすることの不公正を強硬に指摘された場合、果してよく自己の地位を保持し通せるや否やに確信を失ふに至つたのである。寧ろ無人大陸ともいふべき広大な領土を防禦するといふことは永久に不可能である。ことを彼等はしみじみと感せざるを得なくなつたのである。

大英帝国内の各自治領に共通し、近来最大の悩みとされてゐるのは人口過少の問題であり、アングロサクソン移民招致の問題である。殊に開拓可能の地域を未開のまゝに独占せるオーストラリアの人口問題に対する苦悩は極めて深刻である。

然し乍らオーストラリアが今尚飽くまでその白濠主義を押通さんとする希望を放棄してゐないであらうことも疑ひない。

然らばその際何物にも増して必要なことは極めて短期間にアングロサクソンを以てオーストラリアの天地を充すことでなければならない。

オーストラリアの人口を稠密化する手段としては、オーストラリアの自然増加率を引上ぐることゝ、多数のアングロサクソン移民を受入れる以外に方法はない。オーストラリアに果してその成算があるだらうか。

我々は先づオーストラリアの人口状態を極めて簡単に検討してみよう。

一八七一――七五年の五年間に於てオーストラリアの出生率は人口千につき三七といふ極めて高いものであつた。

然るにこの時期を過ぎるとオーストラリアの出生率は次第に低下し、一九三四年には遂に一六・三九まで低減した。この六十年間に於て出生率は正に二分の一に減少したのである。

一方同期間に死亡率も漸次改善され、一九三四年には九・三といふ信ずべからざる数字を示した。しかし乍らかゝる死亡率の低下をもつてしても、出生率低下を中和し得なかつたのである。こゝに注意すべきことは、かくの如く低い死亡率の原因の一部は有ゆる新開発國に見らるゝ異常な年齢構成にあるといふことである。

死亡率九・三といふことは出生時に於ける平均餘命が一〇七・五歳であることを意味するものであり、之がオーストラリアの死亡の眞の測度でないことは明かである。

一九三二―三三年に於けるオーストラリアの純再生産率は〇・九七六であつた。そこで若しオーストラリアの出生率死亡率が一九三二―三三年の状態に止まるならば、新しく生れた千人の女児から生れる女児の数は九七六人に過ぎないことを意味するのである。オーストラリアの女子は、最早その数だけを再生産してゐないのである。かゝる憂ふべき事態に狼狽した英帝國主義者は遅まきながら人口こそがオーストラリアの救ひ

の神であることを痛感して次の如く叫ぶのである。『オーストラリアは正に岐路に立つた。オーストラリアは彼等と同じ種族に屬する更に多くの人口を必要としてゐる』と。オーストラリア联邦首相ライオンズ達ですら『若し速かに我々各自の手によつて充分な人口を殖えつける方策も立たぬやうでは領土保有の正當さを外國に対し主張し通せなくなるであらう』と警告してゐる。

オーストラリアの唯一の頼りは英本國からの移民である。しかるに何とその本國人口そのものが既にオーストラリアと同一の運命を辿りつゝあるではないか。英本國は今尚海外移民を送出すべき餘力を失つてはゐないかも知れない。しかしそうでなくなる時は目睫に迫りつゝあり。かつ本國が自治領に供出し得る移民の數は決して自治領の危機を救済するに足るものとは到底考へ得ない。

海外発展の最盛期に於てすら、イギリスの各自治領一の移民は毎年二十万前後に過ぎなかつた。この昔の夢が再び繰返される奇蹟が出現した

としても、之が自治領にとつて何の助けとならう。ましてや最近のイギリス移民の趨勢は却つてイギリス向戻りの超過を来しさへしてゐるに於ておや。

既に述べた如くオーストラリアを初め英联邦内の各自治領を共通して近来最大の悩みとされてゐるのは移民問題である。

イギリスの自治領相マクドナルド達も「若し我々の手によつて、カナダ、オーストラリアを速かに開発し切れない。ことがあれば、例へ如何なる制限や阻止の方法を講じても、それらの空地は外國人によつて開拓されてアふ現実に直面するであらうと」公言してゐる。

自治領諸國特にオーストラリアは移民問題の解決こそ自治領の死活に関する緊急問題なりとして熱心にイギリス移民の積極的来住政策の確立を要求し、またイギリス政府　毎年巨費を計上しオーストラリア及カナダ向けの移民奨励に努力して来たが、その結果は完全に失敗に終つたのである。イギリス移民の送出がはかぐしく進捗しないといふことの裏

には人口問題は別としても英本國と自治領間の経済上の利害の不一致及び微妙な感情上の問題がからまつてゐることは見逃せない。

それらの点については後に觸れることとし、こゝでは先ず最近の濠洲移民の状況について一瞥しよう。

最近のオーストラリア移民の動きについて奇異ふ現象が現はれてゐることは、白濠主義の前途に暗陰を投ずるものとして特に注目する必要がある。

それは近来濠洲では南政移民の入國が旺盛であり、それに反して英系移民の出國数が逓増しつゝあるといふことである。

即ちオーストラリアの迎へつゝある新来住民の顔觸れはあかの他人に過ぎない南欧人が圧倒的に多く肝腎の本家イギリスからの移民は新たに来住する者よりは却つてオーストラリアの移民生活に行結り逆にイギリス本國へ引揚げて行く者の方が超過してゐるといふことである。オーストラリアは既に英本國より完全に独立した國ではあるが、然しその國を支配しつゝあるものはアイルランド、ウエールス、スコツトランド系統のイギリス系住民であり、彼等から見ればオーストラリアが次第に非アングロサクソンの國と化しつゝあるを見ては心平らかならざるは當然であらう。

試みに一九三六年に於けるオーストラリア向、南欧人の移民状態を見ると、イタリー移民は九百名、ギリシヤから九百名、ユーゴースラヴィアから四百名等々南欧を主とする外國移民は二千五百名に達した。これらは何れもオーストラリアの採つてゐる移民阻止策或は制限策の障壁の乗越へに成功した移民の数に過ぎない。之に反しイギリスからの移住民は英帝國内移民自給自足円滑化資金の奨励によつて、其の数こそ五千八百名を算しはしたが、一方オーストラリアに見限りをつけて故郷イギリスへ引揚げたイギリス人はそれよりも遥かに多い七千二百名に達したのである。かゝる形勢は決して一ケ年だけのものではなく、一九三〇年以来の一貫した事実である。

かくの如く、有色人種移民の絶対排斥、非アングロサクソン系移民の来住抑制の方針を取りつゝある一方、オーストラリアの最も希望するアングロサクソンの移民が近来寧ろ本國へ逆流しつゝあるといふのが最近の形勢であり、かくしてオーストラリアの人口稠密化など思ひも寄らぬ事である。オーストラリアの人口減少は僅かに不歓迎の南欧新移民によつて食ひ止められてゐるといふ皮肉な現象を示してゐる。なほオーストラリア移民の出戻り超過の原因に関しては次の様な事情があると云はれてゐる。

即ちオーストラリアはその移民草創時代、清教徒的なカナダ移民と甚だしく異なり、恰も帝政ロシアのシベリアに等しい色彩が加へられたもので、ために今日と雖もオーストラリア人と英本國人とは殆ど祖先が同一であるに拘らず、この二者の間には第三者の想像にも及ばぬ暗い対立的な感情が未だに強く支配してゐるといふ。かゝる事実がオーストラリア移民の出戻りの多いことに深い関係があると見られてゐる。

尚濠洲当局が南欧移民を成る可く拒否せんとし、彼等の入國に対し種々の條件を設けてゐるが有色人種に対する制限に比すれば遥かに寛大である。南欧各地からの濠洲移民は渡航旅費の自辨は勿論のこと、一定額の見せ金を所持し、また濠洲内に確定した就職口を有つてゐるものに限られ、而も移民当局の推薦を必要とするといはれてゐる。尤も南欧人と雖も相当多額の見せ金所持者はそれ程移民法の拘束を受けないといふ。之に比べると、有色人種は言語、財産、健康、職業、労働條件等々に関して厳格な入國の條件を設けられ事実上移住を不可能ならしめられてゐるのである。

オーストラリアの支配者たるアイルランド、ウエールス、スコットランド系のイギリス系住民が南欧人を歓迎しない理由としては彼等南欧移民が南欧に於ける慣習を固守して容易にオーストラリアの慣習に融合せず、また収入をオーストラリアに再投資せず故郷へ競つて送金し、また南欧人の激しい氣質を現はして南欧移民の入植以来刑事事件がオース

トラリア联邦内に著増したといふやうなことが挙げられてゐるが、要するに人種的、社会的、経済的な各種の原因が複雑にからみ合つて居り決して單純なものではないのであらう。

南欧移民の不歓迎は右の通りであるが、オーストラリアとしては、若し如何なる方法を講じてもイギリス系移民の後続部隊が得られなければ寧ろ気質が重厚で、イギリス人の風習に近いドイツやスカンヂナヴィア等の北欧人の方がまだましであるといふ態度をとつて居り、南濠洲政府のバトラー首相等も「彼等南欧からの移民はオーストラリアの将来に深刻な社会対立状態を惹起するであらう。若し我々が遂に英本國からの移民を受入れる方法が立たないならば、南欧人は後廻しとして、先ず北欧からの移民を眞剣に考慮すべきであろ」と公言してゐる。

オーストラリアの移民が肝腎のイギリス人によつて支持されてゐないといふ近況はカナダに於ても又南阿联邦に於ても同様に見られる処で、カナダの移民はイギリス人よりも中欧人、東欧人が絶対的多数を占め、

また南阿への移民はイギリス人よりも欧洲大陸からの方が圧倒的に優勢であるといふ風に各自治領の非アングロサクソン化の過程が着々として進行して居り、かくして各自治領は次第に中欧人、南欧人の國と化しつゝあるのである。

かゝる現状に鑑がみ、英帝國としては移住奨励金の如きものを設定しつゝあるが、かゝる基金の設定によつてよく移民の逆流を防ぎ得るやは疑はしい。そも〱英帝國内のみで移民の自給自足を計り得ざるに至つた眞の原因こそはアングロサクソン人口自体が極めて過少であるのみならず既に衰減の兆をさへ明かにし初めた点にあるのである。

しかし假にこの点は問はずとしても、英本國が自治領の要請に答へて、本國移民の送出を決意したとしても、その実現は不可能に近い。自治領側の移民送出要請に対しては本國側として之に対し積極的に應じられない種々の理由がある。

イギリスとしても母國としての威信と各声確保のため、自治領各國に

差迫る國防上の最大缺陷を補強するためのイギリス移民需給円滑化を要望はしてゐるのであるが、本國側として見ればこの問題を第一級の緊急重大問題としては取扱ひ兼ねる事情にあり現に今日に至るまでイギリスと各自治領との間に於ける移民需給の平衡化についてはイギリス政府としては何等有効な措置なり対應を講じてゐない有様である。假にイギリスが本國移民を送出するとしても、これには非常に困難な経済問題がつきまとふのである。

イギリス人の如く余りに文明に慣れた生活を続けてゐる労働者を大量に移住させ自治領の開発に使傭することゝなれば、彼等の手に成る新生産物の原價は割高とならざるを得ず、この点が自治領として重大な懸念を抱かざるを得ない處である。且つ積極的に英人移民を求むるには、彼等が現にイギリスに於て受けてゐるのと同程度乃至それ以上遥かに良好な條件を以て、彼等の生活を保証しなければ、態々移住して来る者は尠いであらう。

そこで自治領としては、イギリスからの積極的移民によつて生産物が増した分だけイギリス本國に輸入増加の保證をして貰ふことが必要であり、この保證の得られない限り、自治領としても英人移民を積極的に迎へ得ないといふ立場にあるのである。

然し乍らイギリス本國側としては現在ですら無理以上に外國品の輸入を制限し精一杯英联邦内各地からの生産品輸入に努力してゐることとして、最早これ以上自治領生産物の輸入数量を増加することなどは全く問題にならないのである。

英本國の輸入の実勢は過去二十年間を通じて、各自治領は漸く二七%を供給したに過ぎず、英帝國以外の外國生産物が過半数を占め、殊に欧洲大陸諸國からの供給は三六%に達してゐる。之はブリテン島の経済的位置の然らしむるところであり、日用必需品の輸入に関しては各自治領よりも手近かな欧洲大陸諸國に依存する必要が遥かに痛切である。

イギリス本國の住民が如何に富裕であるとしても、わざ〱遠くから

運んだ割高で品質の低下した品物を常用出来る程の剰費は持合せてはゐないであらう。
のみならず戦時下に於ては、長途の海上輸送は困難であり、なまじ遠距離にある自治領生産物よりは却って外國生産物に俟つ方が遥かに安全性の多いことは否めない。
更にイギリスとしては自治領の生産物の輸入増加を考慮するよりも、國内必需品の自給自足を計らなければならない必要に迫られ、この方が遥かに重要問題である。
のみならず英帝國側としては近来人口減退の兆候さへ現れて来て居り、しかも本國側として見れば既に本國から独立し去った各自治領ではあり、殊にオーストラリア、カナダの如きは自分に都合の良い要求ばかり固執し、少しも本國を本國として尊敬せず曽て一生懸命に盛立てゝやつた分家達に却つて苦汁を味はゝされるといふ割損な本家の体験を充分激増により増加せる生産物の消費引受が英帝國國防の根本義であるとはい

へ自治領への移民奨励態度は自然消極的ならざるを得ないのである。
イギリスとしては余り頼もしくもない自治領よりも寧ろアルゼンチンやスカンヂナヴィア諸國に新密さを感じ且つまた通商の上に於てもそれを具現してゐるといふ実状である。
また各自治領の本國に対する態度を見ても、現下國際情勢緊迫下に於て精々英本國の尻押しをして軍備の強大化を許らせ、自分等はその武装英本國の蔭に隠れて安全第一を期するに如くはないと考へ、これらの好都合な理由から自治領は差し當りイギリスを旧来通り上座に据えて利用するといふ甚だずるいことを考へて居るのであるが、かゝる自治領の態度が本國に分らぬ筈はなく、それが再び本國の対自治領態度にも反映されることにならざるを得ないのである。
之を要するに、海洋遥か彼方に散在する多くの自治領や植民地までもイギリス自身の手で完全に防禦するといふことが最早不可能であることは明白である、曽ての自治領相マクドナルドが述懐した通り「若し英本

國人の手によって、例へ何らかの特別處置を講じてなりにせよ、カナダやオーストラリア等を開発し切れないならば、如何なる嚴重な制限を設けて居ても、それら英自治領各地は外國人によって全く開拓権を奪はれて了ふ現実に直面される」に相違ないのである。

結局英帝國に於ける国防上の最大缺点は領域の大に反し余りにも人口の過少なることに帰着するのであり、自治領の国防問題、移民問題の解決は、之等空地にも等しい国土を人口稠密にして資源の乏しい國に解放する以外に方法のないことは、彼等自治領識者自身肯定せざるを得ざるに至ってゐる。曾てニュージーランドの總督たりしブレディスローも「我々英國人が積極的に集団移住を断行するか、若しそれが不可能ならずば一刻も早く、より有利な取決めによって其の移住開拓権を人口過剰国へ譲渡するか、この二つの方策以外に英自治領諸国の人口解決策は有り得ぬであらう」と云ってゐる。

かくて各自治領の直面してゐる国防の恒久的強化の問題はそれを英本

國にのみ期待するのでは絶対に解決される望みは無く、結局は自治領自身の公正なる判断に従って之を解決する外ないことは極めて明白である。

最後にオーストラリアの原住民について簡単に觸れて置かう。

一七七〇年オーストラリアが正式にイギリス領となり積極的な欧洲移民が来住し始めた頃には、原住民の数は百万人と稱されてゐた。爾来彼等原住民の人口数は次第に減少し今日に於てはオーストラリア人口六百九十万中僅かに六万を占むるに過ぎない状態にあり、やがては自然に滅亡するものと見られてゐる。

この衰滅し行く原住民に対しては、今日に於於てこそ、種々の保護対策が採られつゝあるとは云へ、欧洲移民来住の初期に於ては所謂絶滅政策が採られ盛んに虐殺が行はれた。

絶滅政策を採るに至った根本的な原因は白人側に於ける恐怖感であって、初期の移植民及び牧羊者が、見知らぬ廣大な地域にまばらに移住し

してゐたために常に家族の完全が脅かされてゐるといふ強迫観念につきまとはれてゐた。従つて極めて些細な事が動機となつて、ともすると土人を射殺すると云ふ傾向が強かつた。当時欧洲からの移民、主としてアイルランド人は必要に應じ原住民を射殺毒殺其の他何れの方法による個人的な制裁を加へることを公に許されてゐたといふ。そこで原住民側としても白人が、自分ら種族に対し殺意を抱く危険人種であると考へ、また白人の脅威から逃れるために白人を見付けると槍で刺殺した。また元の狩猟地から追ひ出されたことが土人を激昂させたことも当然であつた。そこで白人は狙撃隊を組織して土人狩を行つたが、時には友好を装つて、原住民に毒を入れた食物を与へて、之を殺害するといふ残酷なる方法もとつた。この外土人間に於ける流行病や銭饉を放任するといふ消極的絶滅政策も採られた。

タスマニアに於ては一八七六年を以つてタスマニア人は根絶してしまつた。ヴィクトリアに於ても殆ど絶滅に帰した。クインスランド其の他に於ては其の後白人移住者の数が増加し、完全に原住民を征服してしまふと恐怖心は消滅し絶滅政策は放棄されるに至つた。

オーストラリアの原住民は人類に進化してより既に三万年と称せられるが精神的にも物質的にも殆んど太古時代そのまゝの状態にある。十七世紀初頭ヨーロツパの人類学者達は当時ニユー・ホーランドと呼ばれてゐたオーストラリアの原住民を獣類よりは稍進化した動物と認めて居つたといふ。彼等は最近まで人喰人種の域を脱せず、ために種族漸滅の主因は欧洲移民の圧迫もさることながら、寧ろ彼等自身の共食ひの慣習にあつたとさへ評されてゐる程である。彼等は未だに棲む家さへ有たうとせず、食物も大体に蟲類、爬虫類が多く、我々の想像も及ばぬもので満足してゐる。また夜は柴で簡単な風除けを作り、傍らに焚火をしながら裸体の侭で寝入つて了ふといはれてゐる。尤も現在では彼等土民の内若干の老人達は濠洲政府の手により、名ばかりの小屋に収容されて保護されてゐる。

オーストラリアの原住民が現在如何なる待遇を受けてゐるかといふに、欧洲系住民達は約七十八円納税して地方廰から許可さへ得て置けば、多少の報酬を與へることによつて原住民を幾人でも使役出來るやうになつてゐる。尤も彼等家族に必要な、粗末な食糧を給與しさへすれば、その勞賃は全く支拂ふ必要はないと云はれてゐる。

彼等原住民は欧洲移民から家畜の飼育方法を教へられ、また奥地農場に於ける一般的な雑用に使役されてゐる。原住民の白人に対する不法行爲は相當重く處罰され、例へば欧洲系住民所有の家畜類はその種類を問はず、若し彼等原住民が盗喰する場合には相當重く処刑されて居り、苔打ちの刑は官許の私刑とも云はれてゐる。

彼等原住民の將來に対する一般オーストラリア人の態度は到つて無関心であり、或著名なオーストラリア政治家でさへ「オーストラリア原住民は最早衰滅し去る自然の運命にある人種であり、今更彼等に対する保護策を講じたりすることは却つて彼等の苦悩を永引かせるのみである。

寧ろ自然消滅の趨勢を早めてやつた方が眞に彼等のためにならう」と公にしたといふことである。以て大多数オーストラリアの原住民に対する態度を表明したものと見て良いであらう。

かゝる大勢に反対して原住民の保護及び補導に乗り出してゐるのがオーストラリアの宗教団体である。又人類学者達も衰滅人種の保護方を聯邦政府へ要望してゐるといふ。

現在までの處、まだ何人も原住民の向上、または近代教育を施さんとせるものは無かつたが、然し彼等を良く理解し、心服せしめ、続懐出來さへすれば強ち彼等に甦生の能力及可能性が無い訳ではないと云はれてゐる。

現にロツクフエーラーから派遣された視察者達も彼等原住民の智能程度が白人に比して僅かに劣るに過ぎないと稱して居り、またシドニー大学の人類学教授ですら、略ぼ同一の見解を有してゐると云はれてゐる。

然し乍ら肝腎の原住民達は、年令の差違など一向に留意せず、若い女

が年寄男と一緒になり、老婆に近い女が若い男と一緒になるなど乱雑な結婚状態にあり、人口増加の施設も最早時機を逸し去つたと云はれてゐる。

いずれにせよ、現在オーストラリアの民族問題上、彼等原住民の存在は最早何等の意義をも有せざるに至つてゐるのである。

第四節　印度

第二節以下に於て述べ来つた自治領諸國は英國植民地中、他の植民地に対し質的に全然相違する独特の地位を保持するものである。それ故各自治領の対本国関係は必ずしも同一ではないが、之等を一括して英聯邦構成体の一類型と見ることが出来る。即ち自治領は大体に於て白人の移住に適する温帯に於て形成せられ、その住民は概してアングロサクソンを基体とする白人人口より成立するものであり、而してこの種植民地経営の目的は白人人口の移植であり、また自由や自治の如きアングロサクソン秩序の拡張にあるといふことが出来る。一言にして云へば白人社会の新地域への拡大といふことが之等植民地経営の目的である。

かくの如き、白人人口の移植、アングロサクソン秩序の拡張等を目的として発展した植民地に対し、全然別個の目的の下に経営される植民地の類型がある。それらは多く熱帯或は亜熱帯に存在し、その住民はすべ

て土着の有色人種より成り、政治的には本国政府の管理下に置かれ経済的には本国に対する原料食料供給或は本國製品の販賣市場として、本國に対し全然従属的地位にある。かゝる植民地に対する経営の目的は、自治領に於けるが如き人口の移植でもなければ、また自由や自治の如きアングロサクソン秩序の拡張でもなく、專ら收奪と搾取にあるのである。植民地なる観念はかゝる地域に対し最も妥当するものである。以下述べようとするインドは將にかゝる類型に属する植民地である。インドに対し英国の期待するところは、その植民地の経営によつて最大の経済的利益を擧ぐること以外にはなかつた。インド人の政治的社会的経済的文化的向上等一般にインド社会の幸福の増進の如きはイギリス人の何等企圖するところではなかつた。彼等イギリス人の唯一の目的は極めて少数のイギリス人の手を通じてインドの尨大なる土地と夥多なる民族とを支配することによつて、最大限の經濟價値を收奪するにあつたのである。かゝるイギリスの意図がその対インド政策の上に極めて明瞭に具現されて

ゐることは蓋し当然のことである。かゝる利益の追求のためには、彼等イギリス人はインド人の生活の基礎である古来の社会制度と慣習とを破壊し、之によつてインド人に甚大なる苦痛を與へ、また收奪の結果インドの貧困はいよ〳〵甚だしく、社会的混乱と饑饉を招来するも何等意に介しなかつた。彼等イギリス人は彼等の利益に影響せざる限り、インドの悲惨には全然ひとごとの如き無関心の態度を取つたのであり、積極的にインド人の福祉の増進のために努力する如きことは勿論なかつた。然し乍ら、かゝる政策が植民地土着民族の憤激と反抗を招き、それは更にイギリスの支配力そのものゝ覆滅を企図する民族運動にまで発展すべきは当然である。

インドは其の数四億といはれる尨大な人口を擁してゐる。之に対し支配者たる在印イギリス人の数は僅かに十二万人に過ぎない。それ故インド四億の民族は自己の四千分の一に過ぎないイギリス人によつて身動き出来ないまでに縛り上げられ、膏血を搾られてゐることになるのである

。假にイギリス本國の人口をとつて見ても、インドは約十分の一に過ぎないイギリス人によつて完全に支配されてゐることになるのである。インドは何故四千分の一に過ぎないイギリス人をインドより追放し得ないのであらうか、又インド人は何故十分の一に過ぎないイギリス人の支配から脱し得ないのであらうか。
インド人の或る者は云ふであらう「身には寸鉄さへ帯びることを禁じられた我々インド人として、どうして近代的な武装を有するイギリス人に刃向ひ得やうじ」と。
然しインドにはその兵力三十二万の陸軍があり、その内八割以上はインド人が占めて居るではないか、また海軍總人員二千名の内九割以上はインド人ではないか。空軍に於ては流石にインド人は少いが、それでも總人員二千五百名中一割以上はインド人が占めて居るではないか。またインドの警察官は其の数極めて少いと云はれてゐるが、それでも二百数十万の警官があり、また警察官の背後には東洋隨一と云はれる尨大な諜

報網があるではないか。之等は一部の首脳者を除けば何れもインド人によつて組織されてゐる。かくの如く、インド人は同じくインド人によつて組織された二十六万の陸軍の外に若干の海軍、空軍兵員と極めて尨大な諜報網に極めて多数の同胞を関與せしめてゐるのである。之でもインド人は身に寸鉄も帯びずと云ひ得るであらうか、インド人はインドの自由と独立のために役立つべき之等の機関を皮肉にもイギリスのインド支配の保障機関たらしめてゐるのである。しかも之等の機関の維持に要する莫大な費用は総て貧窮のどん底に喘へぐインド人民衆から搾り上げられるのである。それ程までに虐げられたインド人が、その自由と独立のために大いに役立て得べき、かゝる財宝を何故に顧みないのであらうか。
イギリスのインド侵略より今日に至るまで、イギリス人に対するインド人の闘争は止むことなく繰返された。然しそれは余りに精神的な或は極めて平和的な手段によつてのみ行はれたに過ぎない。それらは結局イギリス人の残虐な仕打に恰好の口実を與へるに役立つたに過ぎない。

インド人は最早自由独立の念願を放棄してゐるのであらうか。否決してそうではない。現に大東亜戰争下、インドでは多数の民衆が、反英抗争のかどで殺戮されてゐるのである。

然しインドの自由解放を期待する第三者として見れば、インド人の行動程、歯がゆく、また不可解に思われることがあるであらうか。然し乍ら、かゝる不可解なことが現実に存在する処にインド社会の特徴があり、このインドの特徴を巧みに利用したものこそ所謂イギリスの分割統治策なのである。

イギリスのインド政策は、之を各方面から観察して、そこに幾つかの特徴を抽出することが出来る。しかし最も重要なものは謂はゆる分割して支配する政策であり、イギリスの印度政策の多くの部分は、この分割支配政策によつて解明し得るといふも過言でない。そこで本稿に於ては分割支配政策を中心として、印度の民族事情について若干の考察を加へて見よう

「英吉利の王冠に鏤ばめられたる最も光輝ある寶石」ともいはれ、或はまた「英吉利の寶庫」とも稱される印度は是等の形容の如く凡ゆる意味に於て、英吉利に対し魅力に充溢れたる存在である。

印度は欧洲、アフリカ、マレー、東亜諸地域及び濠洲、新西蘭等を結ぶ、交通、通商上の要衝たるのみならず、戰時に於ては印度洋、南太平洋更に近東、西南アジア、アフリカを制圧するための絶好の基地たるの條件を具備し、英帝国国防上極めて重要なる地位を占めてゐる。

又印度は東西、南北とも延長二千哩、その面積は英本國の二十倍、日本全版圖の六倍といふ広大なる地域を占め、その内極めて狭少なる佛領及び蘭領の植民地を除けば、他は印度帝国であり、内五割五分は英領諸洲、他の四割五分は印度王侯國によつて占められてゐる。印度は英吉利王を君主に戴く帝國であつて、所謂植民地とは異なるものとされてゐるが、然し其の実質に於て植民地たること変りはない。尚ほ最近ビルマは行政上印度から分離されたことは周知の通りである。又セイロン島は

印度の附属島嶼と考へられ易いが、行政上は英國の直轄植民地であつて、英國植民省管轄下の知事によつて統治されてゐる。
印度北部のヒマラヤ山地、南部のデカン高原、この間にはインダス、ガンヂスの二長河が貫流し、こゝに広大肥沃なるインダス、ガンヂスの両平野が打開けてゐる。是等の地方は概して土質、氣温、濕度に恵まれ、世界屈指の農業地帯をなしてゐる。殊に氣候の多様性の結果として、農作物の種類は極めて豊富である。
事情かくの如くであるから、自國内に既に農村を失つた英吉利としては食料或は工業原料の供給地として印度に期待するところ極めて大であるのは當然である。
又印度の人口は実に尨大である。一九三一年の國勢調査の結果によれば、印度の全人口数は三億五千万餘であつた。一九四一年の調査の結果は恐らく四億に近い数を示すであらうと云はれてゐる。かゝる尨大なる人口数を擁する印度が、英國商品の販賣市場として絶大なる價値を有す

ることは謂ふまでもない。
試に印度の対外貿易に於て英本國の占める地位を見るに、印度の輸入總額中英本國の占めてゐる割合は前大戰以降減少したとはいへ尚ほ三割といふ数字を維持してゐる。また印度の輸出總額中、英本國向けは大戰以来稍ゝ増加し最近では三割四分程度に達してゐる。
英本國よりの主要輸入品は綿糸、綿製品、機械器具、鉄鋼、自動車、金物、羊毛製品等の工業製品であり、対英輸出の主たるものは皮革、茶、棉花、黄麻、黄麻製品、亜麻仁、採油種子、マンガン鉱等の主として工業原料品である。
更に之を英本國の側から見ると、英國の總輸出額中印度向けの割合は最近減少の傾向にあるとはいへ、然も尚も七、八分を占め、南阿联邦に次ぐ重要な輸出市場である。
印度はまた英國の投資地として非常に重要な地位を占めてゐる。
一九三〇年末に於ける英國の海外投資總額は約三十七億磅と推定され

てゐるが、その内英國の證巻取引所に上場されてゐるものは約三十二億磅であつて、之を投資地別に見ると、英領への投資が大割以上の約二十億磅でこの内印度及びセイロンへの投資額は約四億六千万磅の巨額に達し、海外投資總額の一四%、英領投資額の二三%に相當してゐる。対印投資の対象として目星しいものは公債と鉄道事業で、両者を合して三億五千万磅、總額の七七%を占めてゐる。是等の対印投資が年々一億磅といふ莫大なる利潤をもたらすのであるから、印度は英國の資本投下地としても非常に重要性をもつことが理解されるのである。

更に印度は、こゝから多額の貢納金が上るといふ意味に於ても英國に取つて大なる價値を持つてゐる。

在印数万の英國官吏の俸給、恩給等は総て印度の負担で、本國は鐚一文も出してゐない。ところが在印英國官吏の俸給、恩給等の給與たるや法外な高額であるために、是等の負担は印度に取つて非常な重荷になつてゐる。

一例としてボンベイ州知事に対する俸給其の他の給與を擧げれば、其の額は驚くべし六十五万八千六百留比にも達するのである。また印度總督の年俸は約二十六万ルーピーで合衆國大統領の約二十万ルーピーに比し遙かに高給である。之の一例によつて見ても在印英國官吏が如何に高給を得てゐるかゞ分る。その他任命の際の支度費、赴任旅費も莫大なもので、是等も総て印度の負担で、英本國は一文も拂はない。英國官吏のかゝる不當な俸給は英本國が印度を非常に不健康な土地であり、また印度兵叛乱事件（一八五七年）の联想によつて印度を危険な土地であると過信してゐるためであると云はれてゐるが、此問題は常に国民会議派以下の的となつてゐる。

一ケ年間に印度の支出する在印英国人官吏の俸給、恩給其の他の支出は三千万磅といはれてゐる。

又国防費として印度の負担する額は五億乃至六億ルーピーで総歳出の四割以上を占めてゐる。その国防費なるものも、名目上はともかく實質

的には英國の印度支配を確保するための費用に過ぎず、而もその費用たるや半餓死状態の印度の懐から捩り取るといふ残忍さである。皮肉な見方をすれば、印度人はその自由と独立を失ふために骨身を削つてまで英本國に莫大な貢納金を奉つてゐることになる。

以上述べた以外に王侯国からの献金があるから、之を加へれば年々英本國が収得する利益は莫大なものである。

ヴアルガーの推算によれば一九二四――二五年に於て英国が印度から上げた利益は実に一億七千万磅（約二十二億ルーピー）に達するといふことである。その内訳を示せば、在印英国人官吏に対する俸給、恩給其の他の三千万磅、投資利潤一億磅、商業上の利得一千五百万磅、工業上の利得一千二百万磅となつてゐる。英国の利得は今日に於ては戦時課税、強制寄附金等によつて寧ろ増加するとも減少することはないと見られてゐる。

以上の如く英国の印度経営は全く割の良い商賣であつたし、一方英國

は印度人の福祉といふやうなことについては殆ど何等の財力と精力を費やさずに済んだのであつたから、彼等の目から見れば、印度は正に「英吉利の王冠に鏤ばめられた最も光輝ある寳石」であつたに違ひない。

そこで英国が斯くの如き、寳石であり寳庫であるところの印度を失はざらんとして凡ゆる権謀術数を弄し、また弄するであらうことは容易に想像し得るところである。

十七世紀以来三百年余に亘る英國の印度統治は時の流れと共に幾多の変遷を経来つてゐるけれども、然し是等に一貫した特徴を挙げるならば、先づ政治的には印度の植民地たることの永久的確保であり、経済的には徹底的搾取であつた。

印度に於ける英国の統治が、その結果として印度に恩恵をもたらしたとしても、それは恰も卵を生ませるために鶏に餌を與へるのと同様、それは飽くまで偶然的副産物に過ぎない。印度に於ける英国の植民地経営は正に帝国主義的植民政策の典型といふべきであらう。

英國の印度統治の根本方針は要するに印度をして永く英国の植民地たらしむることに存する。

この目的のために英国の採つた具体策は種々雑多であらうが、所謂分割統治政策こそは其等に一貫した顕著なる特徴であつて、之を解明することによつて英国の印度統治方式の核心は把握し得るものと考へられる。以下之につき概説しよう。

印度には幾つもの人種、言語、宗教が実際目に見えて存在する。そのために或る者は印度とは単なる地理的名稱に過ぎない。ベンゴール人、ラーゲプト人、パンジャブ人、グゲエラート人、マーラタ人、シーク人、パルシー人共等多くの民族はあるがインド人といふものはないと主張する。この見解は勿論正当でない。なる程印度の各民族が凡ゆる政治社会問題について意見を抱いてゐることは事実である。然し彼等が英國人とは異なる何等かの共通の文化を有つてゐるといふ意識、この共同意識によつて一つの社會に結合されてゐるといふ自覚は印度人・印度國民の存在を主張する根據たり得るものである。かゝる共同の意識こそは、各種族社会の特殊性を超越して統一的國民運動の温床となり得るのである。

さあれ、印度が人種、言語、宗教共等の点より見て、誠に異質的諸要素より成立する複雑極まり無き社会たることは否定すべくもない。

分割統治政策とはかゝる印度民族の種族的、宗教的、文化的複雑性を利用して、印度人の分裂抗争を激化せしめ、以て反英的な統一勢力の結成を阻止し、英國の印度支配を確保せんとする一連の統治方策を包含するものである。

右の分割統治政策について、之を具体的に述べるに先立ち、印度社会分裂抗争の素因たる、種族、言語宗教について略述しよう。

印度の如く人種の複雑を極めてゐる処は尠い。其の人種に関しては諸説紛々として、いまだ一致を見るに至らないといふことである。

一口に印度人と云つても皮膚の色の白きものもあり、黒きものもあり、或は黄色、褐色を帯びた者もある。又身長も長大なるあり矮少なるあ

り、又鼻形にしても扁平なるものもあり、短少なるものあり、細長なるものあり、鼻先の高いものもある。その他鬚髯の状態も濃淡種々様々であるといふ風に極めて多くの人種的特徴が見られる。

印度の原住民或は最古の土着民はマレー、スマトラ方面の種族に近似せるものであつたらしく、この原住民は西方からはアリアン、スキシアン、パタン、モガール、東北からは蒙古、ビルマの諸民族の侵入を受け、それらとの混血の結果現在の諸種族が出来たといふことである。

Sir Henry Risley は印度人を次の七種族に大別してゐる。

一、ドラヴィダ型　Dravidians
一、蒙古型　Mongoloid・
一、印度アーリア族　Indo-Aryans
一、トルコ・イラン族　Turko-Iranians
一、蒙古ドラヴィタ族　Mongolo-Dravidians
一、アリヨ・ドラヴィタ族　Aryo-Dravidians

一、スキト・ドラヴィダ族　Scytho-Dravidians

以上各種族の居住地及体質的特徴については茲には述べない。之、では単に之等の種族は更に数十の種族に区分され極めて雑多な構成をなして居り、印度の国民的統一に対して非常なる障害となつてゐることを指摘するに止めよう。

印度の種族が雑多であると同様に、其の言語も亦頗る多種多様である。現今印度に於て使用されてゐる言語の数は実に二百二十五種の多きに及んでゐる。之に方言を入れれば其の数は非常なる多数に上るといふ。地方郵便局で使用を公認してゐるものだけでも七十余種に達するといふことである。

印度の言語は恰も欧洲大陸に英語、独逸語、佛蘭西語等々の多数の言語があるのと類似して居り、印度の大部分で話が通ずるためには、欧洲にある国語の数程言語を知らなければならないといふ状態である。英語は印度の法定語とされてゐるが、それは亦知識階級の意思疎通の手段、

謂はば國際語の機能を営んでゐるといふ奇妙な現象を呈してゐる。印度人にして英語を解するものは四百三十万、即ち人口一万につき男子二一二人、女子二八人の割であるといふ。中央、地方の議会に於ては英語が公用語とされてゐるが、國民会議さへ英語で行はれるといふ有様である。

印度語の内で最も広く用ひられてゐるのはヒンドスタニー語で、全人口の三分の一以上が之を用ひてをり、地方により多少の訛はあるが大体印度の標準語と見做されてゐる。

凡て民族の統一には意思の疏通手段たる言語の同一性が最も必要であることは云ふまでもなく、印度の言語の複雑性は人種の複雑性と共に印度の民族的統一を妨ぐる因子であるといはなければならない。言語の方面に於て印度人の意思疏通、民族運動の展開に役立つたものは皮肉にも英語であつたのである。

然し最近ガンジーを中心として、ヒンドスタニー語を中心として作ら

れた印度共通語、印度文字の普及統一を許らんとする運動が生じてゐるといふことである。

次に印度の宗教について簡單に述べよう。

他の諸國に於ける宗教が單なる宗教たるに反し、印度に於ける宗教は政治、社会、文化、思想等の凡ゆる分野に亘つて、民衆の一切の生活の根源として絶大なる影響力を有してゐるといふことは実に顕著なる事実である。かゝる宗教的支配力の絶大さはその内容の迷信的排他的なることと共に、全印度社会を極度に分裂混乱せしめてゐるものであつて、印度問題を考察するに當つては宗教は人種、言語その他の如何なる要素にも増して非常なる重要性を有してゐるのである。

以下印度宗教殊に印度教と回教の概況を述べよう。

印度の宗教は印度原住民の間に発達した宗教、アーリア系のもの、セム系のもの、是等の混合せるせるもの等ありて其の種類は極めて多数に達してゐるが教徒数の上から主なるものを挙げれば左の七つである。（一九三一年調査）。

	教徒数（千人）	總人口に対する百分比
印度教	二三九、一九五	六八・二四%
回教	七七、六七七	二三・一六
原始教	八、二八〇	二・三六
基督教	六、二九六	一・七九
シーク教	四、三三五	一・二四
耆那教	一、二五二	〇・三六
拝火教	一〇九	〇・〇三

右の如く印度教と回教は印度の二大宗教であつて、両教徒を合せば總人口の九割以上に達する。

印度教徒は主として印度の中部と南部とに多く殊にマドラス州の如きは人口の八九%までは印度教徒である。回教徒が優勢を示してゐる地方はインダス河以西とベンゴール州である。

問題、社会問題或は英國の分割統治政策との関聯に

於て最も重要なものは印度教徒と回教徒の相剋である。即ち各宗教中印度教徒と回教徒との反目暗闘は最も著しく、屡々宗教的政治的闘争が表面して多数の死傷者を出すといふ状態で、両者の摩擦軋轢は印度の國民的統一の一大障碍となつて居り、英國の分割統治政策は正に印度のこの弱点につけ込んだものであり、回印両教徒の争闘こそ印度独立上の癌をなしてゐるのである。

此間の事情を明かにするため以下印度教、回教について、その教理、儀式、慣習につき概説しよう。

印度教徒は今日に於ては幾多の分派があるが其の起源は約三千五百年前中央亜細亜よりインダス平原に侵入したアーリア族の宗教にあるといはれてゐる。このアーリア族の宗教は一種の自然崇拝教であつて、崇拝の対象は太陽、月、火、風、雷を初めとしてソーマ酒醸造の原料ソーマの崇拝に至るまで無数の神を信じてゐたといふ。アーリア族は是等の神々に果実や菓子を供へ、或は牛、仔牛、馬などを犠牲となし、又祈禱、

讃美を捧げた。

然るに其後アーリア人が漸次原住ドラヴイダ族を駆逐してガンヂス平原に侵入した頃には最初の信仰や風俗習慣に変化を来し、こゝに婆羅门教の思想が生ずるに至つた。

婆羅門教の教理に従へば、宇宙の萬物は至高の梵天より生じ、万物は凡て梵天の靈を有し、是等の靈は絶えず輪廻し、良き靈は神、聖人の体に宿り、不良の靈は犬の如き不純なる動物に宿り、それは更に輪廻して遂に梵天に復帰する。之に要する期間は二千四百万年に達するといはれて居る。

婆羅門教の教理は最初の内は比較的単純であり、儀式等も余り厳格ではなかつたが、後になると祈禱、供物、宣誓、齋戒、沐浴などの儀式が定められ、また被服、装飾、起居動作、飲食等日常生活の瑣事に至るまで厳[illegible]を受けた。大衆はかゝる律戒儀式を厳守する閑暇も餘裕もなく従つてかゝる教を歓迎しなかつた。

かくて佛教は婆羅門教に対する反動として生れることになつた（紀元前五世紀）。佛教は阿育大帝（前二七二－二三二）の時代に国教として一時全印度に勢力を振ひ、佛教最隆盛時代を現出した。それに応じ婆羅門教は自然に衰微した。後佛教は印度で衰へ、西藏、ビルマ、支那に傳はり、八－一〇世紀には佛教は印度から完全に駆逐された。一方婆羅门教は西紀四－六世紀に再び勢力を盛返し、佛教思想を採入れると共に従来の動植物崇拝をもとり入れ、こゝに婆羅門教は印度教として復活するに至つたのである。

印度教は婆羅門教の教理の一部と印度の古史詩、神話的傳説を織込んだ複雑怪奇な宗教で信仰の對象は動物、木石、生殖器の靈にまで及び、神々の数は三億にも上るといふ。かゝる雑然たる宗教であるから、専門の學者と雖も印度教の内容を統一的に説明することは不可能であるといふことである。或る学者は印度教を以て「一切の迷信、精靈と幽鬼、半神々たる聖者、家族神、部族神、宇宙神、及びそれらのために建立され

た煕教の寺院殿堂の混沌たる集積」と評してゐるのを見ても、それが如何に複雑奇怪なものであるかゞ想像される。

印度教は宗教であると共に、その教理、カスト、人種、言語、歴史より成立する一箇の社會組織であるといはれ、印度教とは印度の社会組織の別名であるといはれるのも之がためである。印度教を述ぶるに當つては印度教のカスト、不可觸賤民を見逃す訳には行かない。是等は孰れも大きな究題目であつて、茲で詳述することは不可能である。こゝでは単にその概要を述ぶるに止める。

カスト（Caste）は本来ポルトガル語で種姓又は階級を意味する言葉であるといふ。我國では普通、種姓制度、身分制度、姓階制度、種姓階級制度などと訳されてゐるが、要するに身分、職業が世襲的に固定してゐるところの社会階級制度である。我國に於ても封建時代には士農工商及び穢多なる階級があつたことは我々の熟知せる処である。欧洲諸國に於ても中世時代にはこの種の制度が存在してゐたのであるが、今日に於て

も尚ほかゝる制度の存在するは印度以外には見當らない。

印度のカストは法律上の制度ではなく、一種の社会慣習に過ぎないのであるが、其の影響力は實に偉大なもので、印度人社会は正にこの基礎の上に立つてゐるものといひ得るのである。印度教徒中には種姓制度の全廃を唱へるものもあるが、かゝる制度を存続せんとするものが一大勢力を有し、この制度を打破するといふが如きは非常な困難事であるといはれてゐる。勿論今日の階級制度は昔日の如き厳格さを維持し得なくなつて来てゐるといふことである。

カストの起源については必ずしも学説の一致を見てゐないやうであるが、一説によれば今より三、四千年前アーリア族が中央亜細亜より印度西北國境を越えてインダス平原に侵入し、更に先住のドラヴイダ人を駆逐して漸次ガンゲス平原に定住する頃に完成したもので、最初はアーリア族の血の純潔と文化の清純を保持するためにドラヴイダ人を除外して自ら婆羅門（Brahman）、刹帝利（Kshatriya）、吠舎（Vaisya）の三階

級を組織し、被征服民たるドラヴイダ人を首陀羅（Sudra）として賤業階級として四種の種姓制度を樹立したものであるといふ。

婆羅門は僧侶の階級、刹帝利は武士の階級、吠舎は商人、実業家の階級、首陀羅は農奴、僕婢の階級、奴隷階級とされてゐた。

以上の四種姓階級の外に、今日其の数五千万余といはれる不可觸賤民（英語ではUntouchables, Depressed Classes, Scheduled Castes等といはれ、ガンヂーは之をハリジャン（Harijan）と呼んでゐる）がある。之はカストに含まれず、所謂穢多の階級で首陀羅の下位にある。

婆羅門以下首陀羅の四階級の区別は婆羅門教時代には頗る厳格で、他階級との間の結婚及び職業の混同を許さず、その身分、職業は出生と共に決定されてゐたのである。

然るに後世文化の発展に伴ひ、社会的分業を生じ、従つて職業も夥しき分化を来し、且それ等の職業は世襲とせられてゐたために、同一階級内に於ても職業の高低により無数の副階級を生じた。また紀元四－六世

紀にかけて、印度に侵入したペルシヤ人、トルコ人、蒙古人、ギリシヤ人の子孫はやがて印度化されて婆羅門、刹帝利階級に編入されたが、これ等は人種の相違に基いて自ら別個の副カストを形成した。かゝる事情によつて今日カストの数は数千にも及ぶといふことである。

是等のカストは何れも共通の保護神を戴き、また互に結婚せず、飲食を共にせず、各々共通の礼儀や共通の社会的規律の下に独立的な身分職業社会を形成して、各地の階級を恰も単一人種の社会の如く信じてゐるのである。かゝる状態であるから、今日全印度人口の六八％を占むる印度教徒の大同団結が出来ないのも当然である。

現在婆羅門に属するものは人口の八％に過ぎないが、僧侶を初め、法律家、教育家、技術家、醫者の外地主或は農民となることも認められ、また特殊の経済的理由があれば、小作人、料理人、兵士になることも認められてゐる。これ以外の職業に従事するならば、たちまち其の階級より脱落することになる。今日官吏の三分の一はこの階級の出であり、印

度社会の支配的実権を握つてゐるのはこの階級である。
刹帝利はその分派最も多数で、多くのものは実業方面の職業或は農村に於ける地主として婆羅門と共に印度の上流階級をなしてゐる。都市では菓子、香料、理髪等の精潔とされる職業に従事してゐる。
吠舎階級は非常に多くの副階級を有するが、古来の農業、商工の系統をひき、今日経済界に根強い勢力を有し、大実業家階級はこのカストから出てゐるといふ。この他この階級は、農業或は比較的清浄な職業に従つてゐる。首陀羅階級は主として上述の諸階級に使傭され、また下賤汚穢とせられる製革や掃除等の業務に従事してゐる。
最後に不可触賤民はカスト外の穢多階級で首陀羅の下位にある。彼等は特殊部落に居住し惨めな生活を送つてゐる。彼等の触れるものは一切不浄とせられ、一般階級の使用する公共用井戸には接近することさへ許されず、また子弟を公共の学校へ入学せしむることも禁ぜられてゐる。また印度教徒といふことになつてゐながら寺院へ入ることも出来ない。若し婆羅門姓の者が近付いて来るときは走つて身を隠し、道を転じなければならない。この下可触賤民階級のものは経済的にも最下層で大部分住むに家なく、食すべき食物もないといふ状態といはれてゐる。尚ほ序に述べるが、階級の区別は帽子や額面に印した種々の表彰、所謂カスト・マークによつて容易に識別されるといふことである。
最近不可触賤民の階級中より水平運動が起り、政治的、社会的自由の獲得を要求するに至つてゐるといふ。又回教徒聯盟の提唱する所謂パキスタン案（回教國建設案）を支持すると共に不可触賤民自身に対しても一つの独立的領土を要求してゐるといふことである。
カストについては述ぶべきことが多々あるが茲では総て省略し、最後にカストなる社会制度が印度教徒の日常生活の上に如何なる形をとつて現れてゐるかの一例を述べよう。
例へば家庭の家事使用人の仕事について見れば、其等は總てカスト別の分業になつて居り、コックが第一位、食堂ボーイが之に次ぎ、家内掃除はハマールといふ階級のものがすることになつてゐる。便所や庭の掃

除は最下位たるメーターの仕事となってゐる。メーターは如何に勤勉に働いてもハマールに昇格することは出来ず、ハマールはまた食堂ボーイになることは絶対に出来ない。
かゝる社会制度の下に於いては、人々が向上の慾望を失ふことは當然であり、国家社会の進展も期せられないことは明白である。
また職業の厳守といふことは一面専門的技術の上達といふ利益はあるにしても、他国ならば一人で出来る仕事に数人を必要とするのみでなく、一人の仕事の分量が減ずる結果、彼等は一日の大部分を無為に過すといふことになり、このために印度の労働能率は人口の割に非常に低いといふ結果となるのである。
次に回教は印度にとっては外来宗教である。回教の印度侵入は七——八世紀の頃でモハメットの死後間もなくのことであった。其の後侵入は頻々として繰返されたが、回教徒が実際に印度を征服したのは十三世紀の初期で、最初の印度回教王朝たる奴隷王朝を初めとして幾多の王朝が

創始された。以来十五世紀までは回教徒の印度掠奪は絶えまなく行はれたが十六世紀に入り元の帖木児五世の孫バーバルの侵寇により北印度全部は其の支配下に置かれるに至った。これ即ちモガール帝国である。
バーバルの孫アクバールの時代即ち十六世紀中葉より十七世紀の初期にかけてモガール帝国の最盛期を迎へることとなった。帝は努めて寛容の態度を以て印度教徒に臨み、これが融和に成功したのであったが後に熱狂的回教徒たる第六世オーランゼブ帝の時代に至って再び印度教徒虐待の政策を採ったので、印度教徒の蹶起となり、こゝに回教徒と印度教徒の争闘の時代を現出するに至ったのである。
其の虚に乗じて英人の印度攻略となり、遂に今日の英国統治時代となったのである。
回教は教理、式は儀式、慣習等に於て印度教と全く対蹠的である。回教は一神教としてアラーク外に神なしとして印度教の多神主義、偶像礼拝主義を排撃すると共に、印度教のカストに反対し、無差別平等主義を

唱へた。回教は本来非常に侵略的、傳導的宗教であり、それは剣を以て多くの信者を作つた。印度教徒中にはその圧迫によつて回教に改宗せるものもあり、また印度教徒のカスト外に置かれた不可触賤民中には回教の無差別平等主義にひかれて回教に改宗せるものもあることは先に述べた通りである。

右に述べた通り、回教徒は永く支配者として印度教徒に臨んでゐたのであるが、かゝる歴史的因縁は教理、儀式、慣習等の根本的相違と相俟つて回印両教徒の間に深い溝を作つてゐるのである。回印両教徒の間の精神的隔りが如何に甚だしいものであるかは、モリソンの如き言葉によつて想像することが出来やう。都市に於ては回印両教徒は別々の地域に住ふ傾向がある。これは宗教慣習を同じうする人々の共同観念を鞏固にするためであるが、モリソンに従へば「是等の両教徒の間には欧洲に於ける二国家以上の隔りがある。それは全く異なつた、しかも仇敵の間柄にある國民を想起せしめる。獨佛の両國は仇敵國家の代表的なものであ

るが、それでも佛蘭西人は独逸へ行つて独逸人の家に寄寓し、起居、食事を共にし一緒に礼拝所に行く事が出来る。然し回教徒と印度教徒の家庭はそれが絶対に出来ない」のである。

回教徒と印度教徒との離反が如何に甚だしいものであるかを完全に理解するためには、両教徒の交渉の歴史、宗教そのものの相違、宗教上の儀式の相違、風俗習慣の相違等について研究することが必要である。然し茲では回印両教徒相剋の一原因として屡々引合ひに出される二、三宗教上の儀式の相違について述ぶるに止めよう。

印度教徒は牝牛を神聖視し、之を屠殺する如きは重大なる罪悪であると考へてゐる。然るに回教徒は宗教上の犠牲として牝牛の屠殺を盛んに行ふ。回教徒が生贄として牝牛を捧げるのは、それが廉くつくためであつて、必ずしも牝牛に限つた訳ではない。それはとにかく、回教の祭日には特別の警戒が行はれるのであるが、この牝牛屠殺の件が屡々両教徒衝突の種となり、多数の死傷者を出すことも珍しくないといふ。

又印度教徒は宗教上の儀式に盛んに鐘を叩き、音樂を奏し、歌を謳ふのであるが、回教は礼拝の時は音樂を嚴禁してゐる。そこで印度教徒の行列が騒々しい音を立てゝ回教寺院の前を祈禱時に通過すると必ず一悶着起し、時にはそれが拡大して一大殺傷事件にまで発展するのである。

また賑かな印度教の春の祭、ホリイ祭は屡〻回印両教徒衝突の原因になる。この祭日には綺麗に着飾つた印度教徒が何時も色水を掛け合つて喜ぶ習慣があるが、この折、見物に現れた回教徒にうつかり掛つて、回印騒動の原因になるといふことがよくあるといふ。

右の二、三の例は我々の目から見れば些細な問題であるが、かゝる些細な問題も、そのよつて来たる処は遠く深いのであらう。

要するに回教徒と印度教徒との交渉の歴史が両者を分つ大きな原因と考へられる。印度教徒の目から見れば回教徒は外國人であるから、彼等をもとの故郷に追放しなければならないであらうし、又印度は印度教徒が多数を占めてゐるから印度教徒が支配者の地位に立つのが當然である

と考へ、

又回教徒の側では、自身を神の選んだ人種と考へ、その宗教上の理想達成のために印度教を信仰するものと戦はなければならないと考へるのである。かゝる見解の相違が両者の間に大なる溝渠を作つてゐるのである。

更にまた両者の間に結婚が嫌忌されてゐること、食事を共にしないこと、言語、文字を異にすること、學校教育の種族主義、指導者の無知、偏見は両者の融和を妨げること著しい。

以上印度の人種、言語、宗教其の他の點について概説を試みたのであるが、この簡單な展望を以てしても、印度が如何に複雑な社会であるかを知るに足るであらう。

複雑なる人種構成、乱雑を極めた言語、錯雜せる宗教、印度教に於ける無数のカスト等は事実印度をして無数の排他的、独立的社会に分裂せしめてゐるのである。かゝる状態では印度の独立運動が発展し切れない

のも無理からぬことと考へられるのである。

然しながら是等無数の独立的社會の存在が一國家としての印度の分裂の素因たることは疑ひの余地なきも、さればとて是等無数の社会が互に争闘を事とせねばならぬといふことはないであらう。

何となればカシミールでは君主は印度教徒であるに拘らず住民は回教徒の方が多く、反対にハイデラバードでは君主は回教徒であるが住民の大多数は印度教徒である。然も極めて最近まで王侯国間に於ては共同体抗争は殆ど見られず、回印両教徒は和平のうちに生活し来ったからである。

印度社会の分裂性に誘因を與へ、之を激発せしめられたるものは正に英國の傳統的政策たる分割して統治する（Devide and rule）の方策であると考へなければならない。

英國の分割統治政策の目的とするところは要するに印度民族の種族的、宗教的、文化的錯雑性、分裂性を利用して、内部的闘争を誘発、激化

せしめ、反英的な國民的統一勢力の結成を抑止し、以て英國の印度支配を永久化せんとするにあり、いはゆる夷を以て夷を制するの策であると云ひうるであらう。以下二、三の具体例について概説しよう。

印度の民族的統一、殊に人口の九割以上を占めてゐる回印両教徒の融合一致を妨げてゐる最も有力なる要素が、宗教を中心とした種族、言語、歴史、傳統等の相違に基づく社会組織の対蹠性にあることを考へるならば英國がこの点に目を付けることは至極當然である。従って英國の分割統治政策は主として宗教的不一致、殊に回印両教徒の分裂抗争の誘発激化に向けられたのである。勿論分割統治政策は宗教以外の、例へば文化的部面、経済的部面に於ても採用されたのである。例へばビルマの分離は後者の一例であり、教育制度、官吏任用の資格に関する政策等は前者の一例である。

そもそも分離統治政策の採用を英國政府に奨めた最初のものは一八二一年の *Asiatic Journal* にカルナティカスの署名で発表された一論文で

あるといはれてゐる。その論文は「分離統治こそ我々の印度統治のモツトウでなければならない」と主張し、これに続いてコール中尉が「我々の努力は異なる宗教、民族間に現存せる分裂状態を全力を挙げて強化することであり、これを解決することであつてはならない」と述べてゐる。この分離統治政策が行はれたのは十九世紀の中頃からであつて、最初は専ら回教徒の圧迫に向けられた。といふのは當時モガール帝國の潰滅は回教徒そのものの転落をもたらしたのであるが、英國によつて政治的覇権を奪はれた回教徒は反抗を以て之に報いたからである。

一八四二―四四年總督たりしエレンボローは次の如く述べてゐる。「余にはこの民族(回教徒)が本質的に我々に敵意を抱くといふ事実に目を蔽ふことは出来ない。従つて我々の真の政策は印度教徒との和を獲得することでなければならない」と。

之より先きオークランド總督(一八三六―四二年)は従来用ひられてゐた公用語を廃止し、英語を以て之に代へた。印度教徒としてはペルシ

ヤ語を學ぶ代りに英語を學べばよかつたのでさしたる苦痛を感ぜず、競つて英國管理下の學校に入學した。回教徒としては英國に對する反感もあり、また英國の学校経営方針が回教徒無視の態度をとり、主として英語とヒンヅー語による欧風教育を行つたので、回教徒はその子弟を英國経営の学校に入れる事を忌避し、独自の教育方針を堅持した。

次いで一八四四年總督ハーディング(一八四四―四七年)は英國流の教育を受けたものに社会的地位の優先権を與へる旨の声明をなすに至つた。かくて印度教徒はその習得せる英語によつて漸次政府の役人の地位を独占するに至つた。回教徒は之とは逆に政府の官吏の地位から除外され悲運に沈吟するに至つた。また従来免税の特權を有してゐた回教徒の學校或は名家等は英國の新統治によつて悉くその特典を剥奪され、数千の名門が没落し、多数の学校は閉鎖され、その結果回教徒は経済的にも著しく衰退せざるを得なかつた。

殊に一八五七年のセポイの叛亂(土民兵の叛乱であつて、印度に於け

る英國の植民地的支配に対する最初の民族的一大抗争であった）には印度教徒も参加してゐたが、その中心勢力が回教徒の土民兵であったので、これが有力な回教徒圧迫の口実を英國に與へた。かくて回教徒は一段と迫害されます〳〵窮迫するに至った。

一方文化、経済の分野に於て有勢を示して来た印度教徒は、やがて回教徒侵略以前の印度教文化の復興を志すに至り、之がひいては民族独立運動にまで発展する勢を示すに至つたので、英國は対回教徒態度を改め、之に懐柔策を施し以て印度教徒を牽制せんとした。

十九世紀の後半に於て英國は突如として回教徒を意味する少数民族の保護を宣言するに至った。こゝに於て回教徒も英國側と妥協し、一八七五年には従来拒否し續けて来た英國流の教育を承認した。一九〇五年のベンゴール州分割令は回教徒に対する英國の迎合であつて、要するに回教徒と印度教徒とを二分することによつて東ベンゴールに於ける回教勢力の成長を援助し以てヒンヅー社会の勢力を抑制せんとしたものであつた。ベンゴール分割令を契機として従来高まりつゝあった印度教徒の政治的不満は遂に爆発し、テロと一揆に発展し、全印度に亘ってスワデシ運動（Swadeshi・國産品愛用運動）が展開された。遂に英國もこの強硬策を断念し、一九一二年の印度統治法に於てベンゴール分割令の取消しをなすに至った。之が同地方の回教徒の不満を買ったことは云ふまでもないが、不穏行動が法律を改廃し得るといふ確信を印度民衆に植付けたといふことは極めて大きな意義をもつてゐる。當時回教徒の間に「爆弾なくして恩典なし」（No Bombs, No Boons）といふ皮肉な洒落が流行したといふ。

次に政府の密使が回教徒社会に派遣され、イスラムの復興のために回教徒は急遽蹶起しヒンヅー勢力を打倒することを使嗾した。ために回教徒の蜂起となり、一時ヒンヅー教徒の恐怖時代を現出したといふ。

また回教徒は一九〇九年の所謂モーレー・ミント改革によって分離選挙制を獲得し、ヒンヅー勢力に対抗するための政治的保障を得た。

即ち一九〇九年十一月の施行令（一九〇九年の印度参事会條令に対する）は宗教、経済、其の他の特殊利害関係に基づく選擧制を規定し、中央の立法参事会にも大地主、商業会議所、大學、回教徒からの選擧制が規定せられた。而して宗教関係で選擧制を認められたのは回教徒のみで、特に其の選挙方法は直接選擧制であり、他の團体については間接選擧制が採用されたといふ事は印度法制史上に於ける回印両教徒の分割政策の最初の現れとして極めて重要なものと云はなければならない。

其の後世界大戦に於て英國が回教宗家たるトルコ帝國を攻撃せるため、英國と回教徒との関係は悪化し、一九一九年にガンヂーの提唱で第一次非協力運動が採用された時には、回教徒と國民会議派（国民会議派は印度教徒を最も多く擁し、印度教徒を母体とする政治団体である）との共同戦線が結成されたが、それも前後八ケ年にして崩解し、以後両者の関係は悪化するばかりであつた。一九四〇年に至り回教徒联盟（印度教徒に対する回教徒の立場を擁護せんとして結成され、回教徒の主張を代表

する最有力な政黨である）総裁ジンナーは印度總督に対し所謂パキスタン案を正式に通告するに至り、回印両者の決裂は最早最終段階にあるを思はしめる。尚ほパキスタン案とは回教徒の多く住む西北國境、カシミール、ベンゴール、アッサム等の諸州を联盟の独立運動を行ふ地域に指定し、この地方に於ける会議派運動を禁止すると共に首府をラホールに置かんとするもので、回教國建設を提案せるものである。

更に一九三五年印度統治法の中央立法議会に於ける議員の構成を検討するに、上院に於ては議席英領印度一五六名、王侯國一〇四名以下で、英領印度は六名の総督任命議員を除けば、人民の直接選擧によるものは残り一五〇名である。その内一般議席七五（印度教徒代表に対する議席）、不可觸賤民六、シーク教四（但パンジャブ州）、回教徒四九、婦人六、英國人七、印度基督教徒二、アングロ・インディアン一となつて居り、下院に於ては議員数、英領印度二五〇名、王侯國一二五名以下であるが、英領印度の議席は一般一〇五名（内一九は不可觸賤民に割當て）、

シーク教六、回教徒八二、アングロ・インディアン四、英國人八、印度基督教徒八、商工代表一一、地主代表七、勞働代表一〇、婦人九、合計二五〇名である。

之議員の割當てを検討するに、人口に於て印度総人口の二五%を占めるに過ぎない王侯國に対し上院で四〇%、下院で三三%の議席を與へ、また人口の二三%を占むるに過ぎない回教徒に対し、上院三三%、下院三二%の議席を與へてゐるに反し、全人口の六八%を占むる印度教徒に対しては両院とも僅かに三割程度しか與へてゐない、之印度教徒を圧迫し、回教徒を擁護し、又保守的勢力たる王侯國を援助して、以て國民会議派の独立運動を牽制せんとするものであることは言はずして明かである。

また選擧方法として宗教別其の他の團体選擧制をとることも種族的、宗教的其の他の対立観念を助長し、以て印度人の國民的団結を妨碍せんとする意圖に出ずるものである。

回印両教徒の間に於て、極めて些細なことをきつかけとして紛争が生ずること極めて屡々で殆ど年中行事の観があるといふことについては既に述べた通りであるが、是等の闘争の原因が何時も曖昧であるといふことがまた是等の事件に共通の特徴である。しかし是等の事件を詳細に調べて見る時、その正体を正確に握み得ないに反し、かゝる事件を誠しやかに傳へるデマ宣傳が非常に大きな役割を果してゐるといふことを認めざるを得ないといふことである。かくて回印両教徒の闘争の背後には英國側の巧妙なる謀略が潜んでゐるといふことは疑ふ餘地はない。

根も葉もない出来事や些細な回印両教徒の衝突はたちまち英國のデマ宣傳の材料として利用され、無知な民衆はそれを信じ、遂に宗教闘争としてたちまち各地に波及し、大事に至るのである。かくの如く回印両教徒の衝突の多くは、宗教社会に適用された英國側の分割統政策によつて誘発激化され、それは再び両教徒衝突の素因として作用するものと云ひ得るのである。

回印両教徒の衝突事件に対する英國側の取締は極めて手温るく、果してこれを防止する意思を有するや否やを疑はしむるといふことであるが、けだし当然のことであらう。また停車場の水飲場、列車食堂等は回印両教徒によつて夫々別にしてあるが、是等も両社会の対立意識を強化するに役立つであらう。又学校、言語、文字に関して種族の傳統を尊重するといふ英國の方針も、文化的部門に於ける分割統治政策の現れであると見られる。

第五章　独逸及伊太利の民族事情

第一節　独逸の民族問題

第一款　序説

第一項　ナチス獨逸民族の人種的構成

今日の独逸国民を形成する独逸人の人種的系統を專ら生物学的見地より観察するならば、中部及び北部に認めらる、北方人種と主として南部に検証せらる、アルプス人種の二つの人種系統を指摘することができる

（備考）欧羅巴人種を一般に北方人種、アルプス人種、及び地中海人種の三系統に分つ。その主要なる体質的差異を挙ぐれば、北方人種は長頭、碧眼、金髪、長身、狭鼻を、地中海人種は長頭、褐灰眼、暗褐髪、中背、広鼻を、アルプス人種は短頭、暗眼、淡褐髪、中背、広鼻を特徴とする。概して北方人種及び地中海人種とアルプス人種との間には極めて大いなる人種的差異がある。

ギュンターの研究による更に詳細なる独逸人の人種的構成を掲ぐれば
次の如くで

北方人種系	五〇%
フェリッシュ系	五 〃
東方人種系	二〇 〃
ディナール人種系	一五 〃
東バルト人種系	八 〃
西方人種系	二 〃

大体北方人種を中核として諸地の人種系統を混入せるを概観せしむべく、特に独逸の地が欧洲の中央に位せる地理的事情より、或はローマ人とスラブ人との闘争地として、或は東方アジア人の侵冦の最も頻繁であった地域として、歴史時代に於いても屡〻異種族混血の厄を蒙れることも事実であるが、今日の独逸人が人種的には主として北方人種を根幹として形成された単一民族を為すものであることはいふ迄もなく、且つその一民族としての文化的乃至政治的統一も亦之を所謂「北方的」起源に負ふものであることは否定し難い。

尤も独逸民族の民族意識を強化する為にナチス政府が取上げた北方人種優越思想の過当な強調が、ナチス登場後間もない頃の独逸の一部国民層に、無くもがなの人種思想を惹起したことは事実である。一九三四年十一月二十八日付の「アングリッフ」紙が「若い健康な褐色のヒットラー青年団員が罪を告白する犯罪者のような顔で医師を訪問し、自分がどの人種に属するかと訊ねることは稀れな出来事でなく、極めてありふれたことである」と報じて、人種思想の行き過ぎた強調に対して一矢を酬いているのに見ても、その間の事情を髣髴するに足らう。其後のナチス政府が、純科学的な人種学的研究と之に基く北方人種優越思想の綱領とを堅持し乍らも、無用な公衆的混乱を回避すべく、行き過ぎた人種問題の通俗的論議を抑制することゝなったのは勿論当然の話で、今日に於ける独逸国民の民族的統一は単に生物学的な人種的類同指数の多寡によつ

て測定せらるべきものではない。たゞナチス独逸に於ける人種的関心の異常な昂揚にも然るべき歴史的事情があり、独逸民族の歴史を離れてはその民族問題の眞相を把握することも不可能に近いといへよう。

第二項　独逸民族形成史の概観

独逸民族生成の史的淵源は、紀元前一五〇〇―一二〇〇年頃ユトレヒト半島及び南スカンヂナヴィア地方に棲存したと考へられる典型的な北方人種系住民にまで遡る。今日の所謂ゲルマン民族の祖先であるが、その後も永く北に殘つたものが今日のスカンヂナヴィヤ人を為し、南方へ發展せる種族の内、東方の東ゲルマン諸族は古代末期の所謂ゲルマン族の大移動として独立した民族に生成することなく分散して了つた。たゞ今日の独逸の土地に永く定住した西ゲルマンが現在の独逸人の本当の祖先である。西暦紀元前一世紀の後半には西ゲルマンは北海東海の沿岸から中央山脈に到るまで拡大し、紀元前後の數世紀に亘つて略々同種型のケルトと闘争し乍ら混血し、大凡ライン線に於いて南のローマ人、或は文化的にローマ化せられたるゲルマン、ケルト族と対峙した。今日の独佛両民族の民族的分界線は、文化的にも又政治的にも既にこの時に定まつたと称するも過言でない。

が独逸民族の眞に民族的なる生成形成過程〔は中世代に於ける諸國家群と諸種族群の〕に從つ可きもので狭隘だが嚴重な封建的生活環境の中でその民族的骨格は練成されたといつてよい。特に高期中世代に於ける困難なる國内拓植事業と人口の極めて正常なる發展とは、互に因となり果となつて民族的共同態の形成に作用したといつてよい。そして民族的生活力のかゝる内的開拓事業〔集成は、晩期中世代に到つて独逸民族の東方〕として結實した。

史上幾多の興亡變遷の際はあるものの、その東方政策と之に伴ふスラブ民族との対立は今日も独逸民族にとつて宿命的な問題であり、特にソビエツト政権の確立は此の民族的宿命をいよいよ重大化したものといつてよい。晩期中世代の東方發展によるスラブとの混血問題は既に過去の歴史的事實として、現在は東部独逸人に多少の異色を止むる程度に過ぎな

いが、今日の独逸が当面してゐるソビエット治下スラブ民族との民族的対峙は、唯にその政治思想の極端なる対立ばかりではなく、今日の独逸人口学者が口を開ければ必ず力説することを怠らないやうに、スラブ民族の強大なる民族生物学的増殖力との対立、民族文化の保持者である民族人口そのものの人口比重の均衡如何の問題として立ち現はれてゐる。嘗てラテン民族が欧洲文化の指導者であつた頃には、ラテン民族は全欧洲人口に重要なる比重を示してゐたばかりでなく、その人口は正常なる発展の跡を示してゐた。此の欧洲文化指導の地位は既にラテン民族からゲルマン民族に肩替りされて今日に及んでゐるが、併しゲルマン民族の欧洲に於ける人口比重は、恰もゲルマン民族の将来に於ける文化指導的地位の没落を豫言するかの如く、早くもスラブ民族によつて脅かされてゐるといふのが、独逸人口学者の強調して熄まない杞憂であり、そしてそれは特に独逸民族にとつて常に亡霊の如くに再現する独逸民族問題の最後の背景をなすものである。

（備考）ブルグドエルフアーが算出せるラテン、ゲルマン、スラブ三民族群の欧洲に於ける人口比重変遷の数字は左の如くである。

(イ) 総数（単位百万）

	ラテン	ゲルマン	スラブ
一八一〇年	六三	五九	六五
一九一〇年	一〇八	一五二	一八七
一九三〇年	一二一	一四九	二二六
一九六〇年	一三三	一六〇	三〇三

(ロ) 百分比

	ラテン	ゲルマン	スラブ
一八一〇年	三三、七	三一、六	三四、七
一九一〇年	二四、三	三四、〇	四一、七
一九三〇年	二四、四	三〇、〇	四五、六
一九六〇年	二二、三	二六、九	五〇、八

却説、独逸民族の東方発展を見た晩期中世代は、また都市の興隆と貨幣経済の発展を見た時代として、独逸民族にとつて民族問題上永く後累を残した歴史的事実が初まる。即ち独逸の諸都市に於けるユダヤ人の増加の問題である。その頃キリスト教では利子をとることを罪悪視してゐたので、金貸しとしてのユダヤ人は、貨幣経済の発展に伴ひ、さういふ実際的必要からも要求されたわけで、それに諸王侯は財政的必要からも有力な納税者としてそのユダヤ人を無條件的に排斥することを喜ばず、時には陰に陽に保護をさへ加へた。併しその頃の独逸民族の民族的本能は終始一貫して此の異種民族を憎悪し、ユダヤ人迫害の史実は遠く十一世紀に初まり中世代を通じて枚挙に遑がない。或は黒死病の流行に當つてはユダヤ人はその責任者なりとされて或は惨殺され或は追放されたりしたが、併し遂にその跡を絶つことがなかつた。それは経済的必要と民族的本能との相剋に関する好事例で、同時に所謂民族問題の最も古典的な範型であるともいへよう。この間、ユダヤ人とキリスト教徒との私通に嚴罰を與へ、又キリスト教徒の少女や乳母がユダヤ人の家庭で働くことを禁じたなどといふ事例は諸方に見られるところであるが、同じやうなことが今日ナチス治下の独逸に、新しいイデオロギー的背景を以て法令化せらる、に到つたことは興味深い事実といへよう。

異質民族としてのユダヤ人の問題は十五世紀の中頃から十六世紀の中頃にかけて、即ち独逸民族自身の近代的発展の力によつて、一時的には影をひそめる。いひ換へればユダヤ人自身が独逸諸都市から一時影を潜める時代がくる。が近代社会の発展は第十七世紀と共に再びユダヤ人の入国を盛んにした。経済生活の国際化がその主因と考へてよく、諸王侯が財政上の理由から之を利用した事情も亦前と同じい。殊に近代社会の発展に伴ふ近代思想の普及は中世代に見られたような宗教的対立意識を弱化して居り、近代に於ける唯理論的世界思潮が民族の本能的叡智に根ざした民族的感覚を非合理的な錯覚とさへ考へるようになつたことは近代に於けるユダヤ人問題に独特の歴史的意義を與へるものである。西欧

洲に於ける啓蒙の世紀といつてよい第十八世紀に円熟されたさういふ思想的背景は第十九世紀に到つてユダヤ人に対する同等の市民権の認容といふ事実となつて実を結ぶ。一八〇八年ウエストフアリア王国が凡ての臣民に法律的平等と信仰の自由を認むると共に、ユダヤ人の同権をも認容したのを先蹤とし、殊に六〇年代以降バーデンを筆頭に各邦政府とも近代的「人権」思想の名に於いてユダヤ人に対する民族的差別待遇を徹去するに及んで独逸に於けるユダヤ人は各地方とも著しく増大した。その間の事情は一八七〇年近代的独逸国家の成立後と雖も変りはない。十九―二〇世紀プロシヤに於けるユダヤ人の増加趨勢は次表の如くで

年次	ユダヤ人数	総人口に対する割合
一八一六年	一二三、九三八	一、一九％
一八二五年	一五三、六八八	一、二二％
一八三四年	一七六、四六〇	一、三〇％
一八四六年	二一四、八五七	一、三三％
一八五五年	二三四、二四八	一、三六％
一八六四年	二六二、〇〇一	一、三六％
一八六七年	三一三、一六五	一、三〇％
一八七五年	三三九、七九〇	一、三二％
一八八五年	三六六、五七五	一、二九％
一八九五年	三七九、七一六	一、一九％
一九〇五年	四〇九、五〇一	一、〇九％
一九一〇年	四一五、九二六	一、〇三％
一九二五年	四〇三、九六九	一、〇五％

その総人口に対する割合は一％餘に過ぎないが、独逸人口の増加と並行してその割合を堅持してゐる。が特に注意すべきは之らのユダヤ人が、ユダヤ民族特有の経済的才幹によつて独逸の社会経済生活の中枢部に食ひ入つてゐることで、その事情の一斑は、次表に見る如き都市生活者の累増の跡にも之を窺ふことがで

きよう。

ベルリン市に於けるユダヤ人数

一八一六年	三、三七三人
一八三〇年	四、六八九人
一八五〇年	一〇、〇三七人
一八八〇年	五三、九一六人
一九一〇年	九二、〇一三人

都市生活者として、即ち近代文明の享受者としてユダヤ人が近代社会の上層に侵入せる事実は、また之を其の子弟の高等教育修了率にも見ることができる。一九〇四年に一般独逸人子弟にして高等教育を受くるものの僅かに二五%なるに対し、ユダヤ人子女に於いては八〇%といふ数字を示してゐる。要之、ユダヤ人は、その独特の経済的才能と都市的、寄生的生活とによつて次第に独逸の社会経済生活の中枢部を占領し、且つ金権が政治と文化とをも支配した近代社会特有の法則によつて、独逸民族

の文化生活の死命をも制するに到つた。過ぐる第一次欧洲大戦に於ける独逸の國内的破綻の原因をユダヤ禍が一事に求めることは勿論正鵠を得た歴史解釋とは称し難いが、併しこのユダヤ禍が所謂近代社会の経済的、政治的、乃至は文化的な諸弊害の最も顕著な典型的表現であつたといふ意味では正しい。一九三三年一月ナチスの登場と共に、ユダヤ人問題が民族的な関心を以て取り上げらるゝに到つたのは、それ故に、独逸民族共同体的再生の大事業にとつて極めて当然の事柄であつたばかりでなく、又その民族啓蒙政策的價値に於ても極めて適切好便の問題であつたといふことができよう。

第三項　独逸に於ける民族問題

すべての民族成員が、その社会的地位と職業的活動分野の如何を問はず、一民族の一員として民族共同体的運命観を体現することは、ナチス独逸が新しい第三国家の実現すべき最高の理想とするもので、民族成員

の適正なる社会階級的並に職能的配分とその間に於ける社会的正義の実現とは之に不可欠の政治的課題と考へられるが、このような民族意識の強調は在来の所謂「民族問題」に独特の転機を齎した。といふのは専ら異種民族との交渉を中心として取り上げられてゐた従来の民族問題は、茲に於いては専ら自民族自身の民族的再生の問題としてその重点を一転するに到つたとも考へられるからで、今日の民族問題が人口問題と表裏一体の関係を為すに到つた所以も亦そこにあるといへよう。と同時に異種民族の取り扱ひに関する政策技術的問題さへも亦自民族の政治的及び文化的理想と結び附いたイデオロギー的基礎附けを要請するに到つたといへよう。斯くナチス独逸に特有な民族問題の民族主義的再燃が当然に権着せざるを得なかつた第一の問題は、全独逸民族の政治的結合に関する問題である。「我々は凡ての独逸人が民族自決の原則に基き大独逸に統合せらる、ことを求む」といふナチス黨綱領の第一に掲げらる、命題はこの問題を極めて卒直明快に表現したものであるが、この政治的スローガンは一九三五年のザール地方編入、一九三八年の独墺合邦以来、今日の第二次欧洲大戦を通じて着々として実現せられ、アルサス、ロートリンゲン地方の正式帰局如何が国際政治的機徴に觸れて延引せられてゐる等の部分的事例を除いては、現在は既に概ね解決済みの問題となつたといふことができよう。

（備考）ナチス政権樹立当時、独逸の国境外に有り本国との合体を要望されてゐた国外独逸人の情況として独逸政府自身の半公式に公表せる数字を掲ぐれば次の如くである。

ベルギーに於ける独逸人	約	一四○、○○○人
独逸系スイス人	〃	二、九二四、○○○
リヒテンシユタインに於ける独逸人	〃	一○、○○○
波蘭（西部地方）〃 〃	〃	三○○、○○○
ダンチツヒ 〃 〃	〃	三五○、○○○
ルクセンブルグ 〃 〃	〃	三○○、○○○

北シュレスヴィヒに於ける独逸人　約　四三、〇〇〇人
エルザス・ロートリンゲン　〃　〃　〃　一、五八〇、〇〇〇

尚、右の外、過去に於ける国外移住の結果として欧洲内の諸処に独逸人集団を散在させてゐるが、中世代に於ける東方移住の結果として今に残るものにはバルチック沿岸の独逸人（エストニアに約一万六千、ラトヴィアに約六万三千）があり、現在も現住民より遥かに社会的地位も高く、且つ北方人種的乃至フエリッシュ的体貌を今も止めてゐる。その他、十七、十八世紀に於ける大量移住の跡はハンガリーに、或はルーマニアのドブルーデヤ等に独逸人の社会集団を残してゐる。

尚、十九世紀の国外移住は殆んど新大陸に対し行はれたが、現在の両米大陸に於ける独逸系人口は次の如く概算せられてゐる。

北米合衆国（独逸系第一代及第二代人口）　八、〇〇〇、〇〇〇

内、独逸語を語るもの	三、〇〇〇、〇〇〇
加奈陀	五〇〇、〇〇〇
メキシコ	一三、〇〇〇
其他の中米諸国	八、〇〇〇
ブラジル	九〇〇、〇〇〇
アルゼンチン	二三〇、〇〇〇
チリー	二五、〇〇〇
パラグアイ	一五、〇〇〇
ウルグアイ	八、〇〇〇
ヴエネエヅエラ	三、〇〇〇
コロンビア	三、〇〇〇
ボルヴィア	一、〇〇〇
計	九、七〇〇、〇〇〇、

國境外隣接地域の少数独逸民族統合の問題は、右の如く、現在既に概ね解決せられ、或は少くとも解決し得る政治的諸條件を実現せらる、に到つたといつてよいが、特に欧洲内の遠隔地方に散在する自民族に対しては本国再移住の政策が採用せられた。バルト三國、旧波蘭東部地方、並にルーマニアの南北ブコビナ、ベツサラビア及びドブルーヂヤ地方から通計五十万近くの独逸人が極めて組織的な計画及び統制の下に引き挙げられ、新しく独逸の支配下に入つた旧波蘭領の各地に移住せしめられた。それは独ソ開戰に先立つ政治情勢の媿むを得ざる結果であつたとはいへ、同時に民族人口の分散よりも結集を求める新しい民族志向の一つの表はれであることはいふ迄もない。

が独逸民族の政治的統合問題の解決は、乍併ナチス独逸にとつて第二の、新しいそして本来の意味に於ける民族問題を発生させた。いひ換へれば新しく大独逸領内に編入せられ、或は独逸の政治軍事的支配下に包摂せらる、に到つた東南欧諸國の異種民族に対する問題である。そして

民族自決の原則による大独逸実現の要求が多分にナチス登場当時の独逸の国際政治的事情を條件として標語化されたものとするならば、客観的情勢の転換に伴ふ民族問題の此の新しい象面は、ナチスの民族主義に於ける独逸民族優越の思想をそのイデオロギー的前提として更にいよく強調せざるを得ない必然性をもつてゐるといへよう。

その帰趨如何は勿論今後の問題であるが、しかし民族問題のそういふ展開方式は、ナチス登場後直ちに着手せられたユダヤ人問題の解決に既にその範型を示されてゐるところで、ナチスのユダヤ人排斥政策に対する毀誉の極端に対立する理由も亦そこにあると考へられる。蓋し民族共同体的自覚の実現に政治指導の最高の目標を置く者にとつては、異種民族に対する政策技術的問題も常に自己民族の民族的覚醒の為の恰好の一方便として利用せられねばならないからで、そういふ利用的態度に道徳的批判を以て対するならば、ナチスの人口民族政策の理論的出発点であるアリアン人種乃至北方人種の優越思想も亦科学的根據を欠いた一つのイ

デオロギー的方便であることに變りはないのである。が偏狭な北方人種優越思想も、極端なユダヤ人排斥政策も、共に独逸民族の民族的再生運動、或は民族的生活力の復活といふ一つの根本的事実に起因する派生的現象と考ふべきもので、自己民族の内面的再生意欲のないところにはもと〱所謂民族問題なるものは成立する筈がないのである。そういふ意味でもユダヤ人問題と其の対策はナチス独逸の民族問題理解の鍵を為すといふこともできよう。

第二款　反ユダヤ人立法

第一項　一九三三年当時の所謂ユダヤ禍の概観

ナチス政權の樹立を見た一九三三年の国勢調査結果によつて見ると、ユダヤ教会所屬のユダヤ人は独逸総人口の〇、七六%で、改宗者や混血児を加へても恐らく一、五%を超えない。作併、所謂ユダヤ禍の眞相は、上述の如く、單にその人口比率よりも寧ろその社会的比重の如何にある

わけで、彼等が金融界の指導的地位をはじめとして、政黨・学界、乃至は新聞事業その他の文化領野を支配してゐた勢力は寔に驚くべきものがあつた。例之、伯林の證券、物産、金屬三取引所の理事六十四人の中四十七人はユダヤ人であつたし、また伯林大学の医学教授の半数、哲学教授の二割五分、プロイセンの辯護士の三〇%、全国医師の一三%はユダヤ人の占むるところであつたといはれてゐる。そして之らの社会中枢部に於けるユダヤ人の勢力が、假令直接に反独逸的に行動することがなかつたとしても、独逸国民の民族意識の教化に冷淡であつたことは疑ひないところで、且つこの冷淡が同胞の核心に觸れ国民生活の危機に当面するほど敵対的関係に転化せる事実は蔽ひ難い。嘗て一独逸人哲学教授が国民の血統協同体的関聯を説き、そして独逸的思想家としてのカントと当時の有力なカント学者たりしユダヤ人コヘンのカント解釋との差異に論及したるに、学界に異常な問題を惹き起し、遂には当時の哲学界に最も有力な学術団体であつたカント協会を脱会することを餘儀なくされた

という揮話からもその一班を察するに足るといへよう。況んや新聞、映画その他の文化事業に於けるユダヤ人の勢力を思へば、民族文化死活の鍵が先づ此のユダヤ禍の清掃に求められた理由も納得することができよう。

第二項　反ユダヤ人立法

(イ) 新聞界その他の文化部面のユダヤ禍清掃

新聞事業のユダヤ的支配を清掃することは夙にナチス黨綱領中にも明記されてゐるところであつたが、一九三三年十月四日に公布を見た「新聞業者法」Schriftleitergesetz はその意志を実現したものといつてよく、本法により新聞人たる可き者は必ずアリアン血統の者であり且つ非アリアン血統の者を配偶者とせざる者であることが最も重要なる資格要件として明記さるゝに到つた。但し本法の施行令（三三年十二月十九日公布）は本人が世界大戦に出征せる者であるか、或は本人の

父又は子が世界大戦に戦死せる者である場合に限り右規定の適用を免除してゐる。この種の除外規定は勿論過渡的のものであるには相違ないが多少の程度に於て所謂アリアン立法の凡てに見られるところである。

新聞についで劇、映画、ラヂオ、音楽、美術等諸般の文化部面に対しても統制が強化された。尤もこれは直接の反ユダヤ人的立法といふよりも寧ろ文化部面に於けるユダヤ主義的傾向の禁圧を目的としたもので、既に早く三三年七月十四日には「臨時映画局」の制定を見、同年九月二十二日には諸般の文化領域を統轄せる「独逸文化院」Reichskulturkammer 制定の法律が公布されてゐる。これは勿論官廳ではないが其の評議員は同院総裁たる宣伝及啓蒙相の任命するところで、専門家の経験と才能とを国家の目的に随つて動員しやうといふ仕組である。たゞ右独逸文化院を中心としたナチス独逸の文化統制は現在は既に当初の消極的統制の域を越えて諸外国の資本主義的経営には求め

難い公の損失負担による藝術向上の域にまで進んでゐることも注目すべきで、それが反ユダヤ主義運動のそもそもの眞髄であつたともいへよう。

所謂アリアン立法中我々の記憶に最も深いのはアインシュタインを初め多くユダヤ人学者の学園追放であるが、ユダヤ化の防止は学生生徒に対しても亦行はれてをり、一九三三年四月二十五日公布の「独逸人諸学校ノ収容人員制限ニ関スル法律」は教育上の見地よりする收容人員の制限や職業的需要に即應する各科人員の適正化を行ふと同時に、また公私を問はず独逸人諸学校の新規収容人員中後説「官吏身分再組織ノ為ノ法律」所定の意味に於ける非アリアン血統者の占むべき割合を制限し、全校及各科に於て右非アリアン血統者は彼等が独逸総人口に於いて占むる割合を超ゆ可からざる旨を規定してゐる。同法施行令（同月同日公布）は右比率を一、五%と明記してゐるが、茲にいふ非アリアン血統者の大部分は勿論ユダヤ人であるわけで、彼等の就学

率は独逸人のそれを遥かに超えてゐたことを物語る。之に見ても此の種のアリアン立法。ナチスの所謂人種政策なるもの、重点が何処にあつたかを理解するに足らうと思ふ。民族保全は同時に民族文化の保全、従つて何よりも先づ民族自身の手による文化の保全を必要としたわけである。

(ロ) 國家機関に於ける人種原理の確立と「独逸國公民法」の制定

国家の指導的地位は独逸血統の独逸国民の手へとの思想も亦ナチス黨綱領の宣言するところであつたが、その主張は早く一九三三年四月七日公布の「官吏身分再組織ノ為ノ法律」Gesetz zur Wiederherstellung des Berufsbeamtentums によつて実現された。本法は特に世界大戦後に見らるる官吏資質の低下と思想の悪化とに対してナチス一流の清掃工作を断行したものであるが、之と同時にまた国家機関における人種原理の確立を行つたもので、本法により官吏へ公吏及び之に準ずる公務員その他社会保険事業、ライヒスバンク等の関係者をも含

む）にして非アリアン血統の者は凡て免職せられることゝなつた。（但し一九一四年八月一日以降既に官吏であつた者、世界大戦に出征せるもの又は其の父又は子の世界大戦に戦死せる者、並に其の夫の世界大戦に戦死せる婦人官吏を除く。最後の一項は三三年九月二十二日改正法律による。）本法施行令（三三年四月十一日公布）の明記するところによると右非アリアン血統者とは其の父母又は祖父母中一人の「非アリアン、特にユダヤ血統」の者ある者を謂ひ、特に其の父母又は祖父母の一人がユダヤ教会に所属せる者なる場合はそれだけで右所定の非アリアンと認定されることになつてゐる。ナチスのユダヤ人規定は四祖父母中少くも三人のユダヤ人ある場合を完全なるユダヤ人とし、二人乃至一人の場合をユダヤ混血児としてゐるから、右規定は結局凡てのユダヤ人及びユダヤ混血児を官界から追放しようとするものといつてよい。更にその後公布の「官吏任用、俸給及救護法規則中改正法律」（同年六年三十日公布）は非アリアン血統者と結婚せる者の任官

をも禁じ、且つ官吏にして結婚せんとする者は其の配偶者がアリアン血統の者なることを証明せねばならないことになつた。本人のみならず其の配偶者についてもアリアン血統を要請するのはアリアン立法一般の通則と見てよい。

右官吏層からの非アリアン、特にユダヤ血統者の清掃はその他の之に類する諸法令と併せて官吏、軍人、判検事、弁護士、疾病金庫医師等国家機関の全面に亘つて断行され、ユダヤ人並にユダヤ混血児は一部の例外規定該当者を除き全く一掃さるゝに到り、且つ之を配偶者に有つことも不可能となるに到つた。一部の例外規定も勿論一時的のもので其の後廃止を見たことは後説の如くであるが、この種徹底的なアリアン立法の精神は同時に労働奉仕や兵役法関係の諸法令に於ても一貫せられ、非アリアン血統者は之を労働奉仕又は兵役の義務より免除する立て前を取つてゐる。（尤も国防国家建設途上の労働力不足の深刻化に伴ひ一九三九年二月十三日公布の「國策上特ニ重要ナル事業ノ為

ノ労力需要確保ニ関スル命令」は所謂「労働給付義務」を負ふべきものを舊令に於ける「独逸国民」から「独逸国内の居住民」に拡張し、独逸国内のユダヤ人をも亦之を労働戰線に動員し得る立て前を取るに到つてゐる。）

所謂アリアン立法中最も基本的なるものは一九三五年九月十五日公布を見た「独逸国公民法」Reichsbürgergesetz で、本法により「独逸国公民」たる為には「ソノ行動ニヨリ誠心独逸民族及ビ国家ニ奉仕セント欲シ且ツ奉仕シ得ル者ナルコトヲ確認セシムルトコロノ、独逸又ハ之ト同種血統ノ Deutschen od. artverwandten Blutes 独逸国民」でなければならないこと、なつた。いひ換へれば独逸国公民たる資格は思想と血統との両要件によつて規定されるに到つたわけで、右公民権の規定は諸多の人口政策的諸立法による助成金乃至扶助金給付に際し被助成者の資格要件の一つとして屢々採用されるものである。

また本法は右公民資格の規定とは別にユダヤ人は官吏たり得ざる旨明記するに至り、従来の除外規定（上掲）該当者も本法施行と共に免官されること、なつたわけである。（たゞ世界大戰出征者に対してのみ恩給規定に関する多少の配慮が行はれてゐるに過ぎない。）尚、本法施行の為の第一次命令（三五年十一月十四日公布）の詳示するところによると本法所定の「ユダヤ人」とは四人の祖父母中少くとも三人の純ユダヤ人を有つ者を謂ひ、所謂「ユダヤ混血児」（四人の祖父母中二人乃至一人の純ユダヤ人を有つ者をいふ）中にあつても四祖父母中二人の純ユダヤ人を有ち、且つ本法公布当時ユダヤ教会に所属せる者なる場合、或は本法公布当時乃至以後にユダヤ人と結婚し居りたる者乃至結婚せる者なる場合、或は「国民血統保護法」（後説）の発效後に於て行はれたるユダヤ人との結婚より生まれたる者なる場合等は本法所定の「ユダヤ人」として取り扱はれることになつてゐる。

尚、右「独逸国公民法」所定の規定に隨へば単に曽祖父母中一人のユダヤ人を有つ者は完全なるアリアン血統者と見做されるわけである

が、然し特定の場合について要請される血統規定は更に強度のものもあり得るわけで「世襲農地法」の如きに於ては申請者の血統は一八〇〇年一月一日現在にまで遡つて問題とされてゐる。

(ハ) 独逸血統保護法」の制定

叙上の諸立法は直接非アリアン血統者、就中ユダヤ人の排斥を主とせるものでたゞ配偶者規定に今後の非アリアン的混血児蕃殖の間接的抑制を行つてゐるに過ぎないが、更に直接にユダヤ人を対象として今後のユダヤ混血児の増加を押へたものに一九三五年九月十五日公布の著名な「独逸血統保護法」Gesetz zum Schutze des deutschen Blutes u. der deutschen Ehre を挙げることができる。本法は上掲「独逸国公民法」と併せてニユールンベルグの人種法律と謂はれるもので、本法により独逸或は之と同種血統の独逸国民とユダヤ人との間の結婚は禁止せられ、之を犯す者は懲役を以て罰せられる。私通も同様禁止せられ、之を犯す者は拘留又は懲役処分を受けること、なつ

た。また独逸或は之と同種血統の独逸婦人にして、四十五才未満の者がユダヤ人の家に雇傭せられることも禁止せられ、之を犯せる者は一年以下の拘留及び罰金、又は其の孰れかに処せられること、なつてゐる。嘗てユダヤ人とキリスト教徒との私通を厳罰し又キリスト教徒の少女や乳母がユダヤ人の家で働くことを禁じたともいふ中世のユダヤ人排斥は茲に新しい國民的自覚の下に国法化さるゝに到つたわけである。（本法中「ユダヤ人」とは上掲「独逸国公民法」所定のものに依る。）

又、本法施行の為の第一次命令（三五年十一月十四日公布）はユダヤ混血児の婚姻に関して種々の規定を定めてゐるが、之によると四祖父母中二人のユダヤ人を有つユダヤ混血児が独逸人又は四祖父母中一人のユダヤ人を有つユダヤ混血児と結婚する場合には特別の許可を必要とし、許可に当つては申請者の身体的乃至精神的状況、その家族の独逸滞在期間、或は本人又はその父が世界大戦に参加せるや

否や等の事情を考慮されることになる。又四祖父母中一人のユダヤ人を有つユダヤ混血児相互の間の結婚は禁止された。要之、所謂ユダヤ混血児の今後の増加を防止すると共に其の混血度を出来るだけ薄めて行かうといふ立て前であるわけである。

(二) 要約

要之、現在のナチス治下の独逸に於いてはユダヤ人、ユダヤ系混血者、及びユダヤ人を配偶者とする者は、最早独逸国公民としての権利を有たぬ。官吏、軍人、判検事、弁護士、疾病金庫医師等の国家的諸機関や、新聞、映画、ラヂオ、音楽、美術、学校教員等の国民啓蒙的機関にかゝはる職務に就くことを許されぬ。たゞ独逸国家に寄生する特種の人民として私生活を営み、専らユダヤ人として相互に特別の教会を作り、特別の新聞雑誌等を刊行するを許されてゐるだけである。

独逸国民との間の結婚は、懲役刑を以つて禁止せられて居り、その点独逸国民と一般の非アリアン血統者との結婚が単に公民権その他の

特権の喪失に止まるのに較べて特に徹底的且つ禁止的である。

のみならず其の制限せられたる日常私生活に於いても種々の差別待遇を蒙ることは、その一例を所得税制に於ける反ユダヤ人的規定に見ることができよう。現行独乙の所得税制はナチス治下に入つて人口政策的見地より徹底的な改正が行はれ、特に独身者に重課せらる、こと、なつたものであるが、ユダヤ人に対しては、甚しい低額所得者に対する例外的場合を除き、その家族関係の如何を問はず一律に之を独身者として取り扱ふことになつてゐる如き、差別待遇の最も公然且つ露骨なるものといへよう。

第三項　一九三九年国勢調査によるユダヤ人の現況

叙上の如き反ユダヤ人政策の結果はナチス以来独逸のユダヤ人を続々として国外へ逃避せしめたが、その結果を一九三九年五月施行の国勢調査結果によつて見ると以下の如くで、総数及び独逸総人口に対する

比率の著減、特に男子人口の減少等その痕跡は極めて著しい。その集計結果の一部を掲ぐれば以下の如くである。

（備考） 本調査範囲は当時の独逸国領域のみで、メーメル地方、ダンチッヒ自由市、旧波蘭領たりし東部地方、及びオイペン、マルメヂ、モレスネを除く。又本調査に於けるユダヤ人の取扱ひは其の各四人の祖父母について其の血統を報告せしめ、右四人の祖父母中少くとも三人が完全なるユダヤ人である者をユダヤ人とし、四人中二人の場合を第一種のユダヤ混血者、四人中一人の場合を第二種のユダヤ混血者として集計せるものである。

(イ) ユダヤ人及ユダヤ混血者の総数

ユダヤ人及びユダヤ混血者の総数並に其の独逸総人口に対する割合は下の如くであつた。

	総数	独逸現在人口に対する割合
ユダヤ人	三三〇、八九二	〇、四二%
内、男	一三九、八三三	
女	一九一、〇五九	
混血（第一種）	七二、七三八	〇、〇九%
内、男	三四、〇一〇	
女	三八、七二八	
混血（第二種）	四二、八一一	〇、〇五%
内、男	二〇、六五四	
女	二二、一五七	

右数字には私生児の数が含まれてゐないわけであるが、大勢を察するには充分で、純ユダヤ人の方が混血者よりも遥かに多いことが注意を惹く。 独逸統計局はこの事実を以つて従来僅かの資料を基とせる単

なる推測によつて杞憂されてゐた民族的混血の事實に對して極めて樂觀的なる結論を抱くに到つた。

(ロ) 一九三三年以降の比較

いま之を三三年調査と比較してみると次の如くであるが三三年の調査に於ては單に Glaubensjuden 即ち正式にユダヤ教会に屬する者のみを算へてゐるので、正確なる比較は困難で完全なユダヤ人の一部が除外されてゐる一方低度のユダヤ混血兒や、時には全くユダヤ人に非ざる者も多少は含まれてゐるわけである。

	一九三九年（混血を除く）	一九三三年(1)（ユダヤ教会所屬者）
舊領土内	二二三、九七三（〇、三四％）	五〇二、七九九（〇、七六％）
舊墺太利	九四二七〇（一・四二％）	一九一、四八一（三、八三％）
ズデーテン独逸地方	二、六四九（〇、〇七％）	二七、三七四（〇、七五％）
計 (2)	三三〇、八九二（〇、四二％）	七二一、六五四（〇、九四％）

（備考）上二段の括弧内の数字は現住人口に対する百分比なり。

（註1）舊領土内の調査は一九三三年六月十六日、ザール地方は三五年六月二十五日、舊墺太利は三四年三月二十二日、ズデーテン独逸地方は三〇年十二月一日。

（註2）メーメル地方、ダンチヒ及び新東部地域を含まず。

右数字に明らかなる如くナチス治下に於けるユダヤ人の減少は極めて顯著だが、独逸統計局はその原因として特に三七年以降に著しい其の國外移住の外に、ユダヤ人の老齢化と強度の出産制限による死亡超過の事實も與るところ尠からずとしてゐる。なほ地域別に見てズデーテン独逸地方の減少率の極めて高いのは同地方の独逸再帰に先立ち同地のユダヤ人が国境通過の憂なしに莫大な財産を伴つてボヘミア及モラビヤ地方へ移住せるが為であるといふ。

(ハ) ユダヤ人の体性別集計

本調査に於けるユダヤ人の体性別集計をみると極めて異常で、前三三年調査にも指摘されてゐる女子過剰は更に顕著となつてゐるが、勿論これは独身壮年男子を主とする国外移住の当然の結果で、それは過剰率が混血者に於けるよりもユダヤ人の場合に於て特に著しい點にも窺れるが、併し根本はやはりユダヤ人口老齢化の事実に基くと考へられる。集計結果を掲ぐれば次の如くである。

ユダヤ人	男子千に付き	女子一、三六六人
混血（第一種）	〃	〃 一、一三九 〃
混血（第二種）	〃	〃 一、〇七三 〃

尚、独逸全国の体性別比率は男子千に付き女子一、〇四七人である。

(二) ユダヤ人の大都市居住

ユダヤ人に都市、特に大都市居住者の多いのも依然たる特徴で、その地域的分散状況を見ると次の如くである。

	全国現住人口	ユダヤ人	混血（第一種）	混血（第二種）
一萬以下	五〇、四%	九、二%	一〇、九%	一五、八%
一－二萬	六、二	二、〇	二、八	三、六
二－五萬	八、〇	三、三	四、九	五、七
五－十萬	五、二	三、二	三、七	四、三
十萬以上	三〇、二	八二、三	七七、七	七〇、六
内、				
十－五十萬	一二、八	一一、二	一二、三	一四、五
五十－百萬	七、四	一五、四	一三、四	一一、八
百萬以上	一〇、〇	五五、七	五二、〇	四四、三

（ベルリン、ハンブルグ及ウイーン）

又、ユダヤ人の総人口（現住人口）に対する百分比を地域別に見ると次の如くである。

	ユダヤ人	混血（第一種）	混血（第二種）
全国平均	〇、四二%	〇、〇九%	〇、〇五%
十萬以上都市	一、一三	〇、二四	〇、一三
百萬以上都市	二、三一	〇、四七	〇、二四
ウイーン市	四、七六	〇、八一	〇、三五

第三款　大独逸支配下の諸民族

第一項　大独逸国境内の異種民族

独墺合邦にはじまる独逸国境の拡大は境外少数独逸人統合の目的を概ね実現すると同時に、新らたに東南方の多くの異種民族を大独逸国境内に包容すること、なつた。その内主要なるものは新しく独逸の総督領となつた旧波蘭西部のポーランド人と、旧チエッコスロバキア国の解体に伴ひ新しく独逸保護領となつたボヘミア及モラビアのチエツク人である。

（備考）一九三三年以降の独逸の膨張の跡をその面積及人口に於いて見ると次の如くである。

	面積	人口
独逸旧領域（三三年々首）	四六八、六二〇	六八、四七四、一三二
ザール地方（三五年三月）	一、九二五	八四二、四五四
オストマルク（三八年三月）	八三、七六四	六、六五〇、三〇六
ステーテン独乙地方（三八年十月）	二九、〇九九	三、四〇八、三八九
ボヘミヤ及モラビア（三九年三月）	四八、九五九	七、〇〇〇、〇〇〇
メーメル地方（三九年三月）	二、八四八	一五四、六九四
ダンチッヒ自由市（三九年九月）	一、九五一	四〇七、五一七
旧波蘭領東方地域（三九年十月）	九一、九七四	九、六二七、〇〇〇
オイベン・マルメヂ及モレスネ（四〇年五月）	一、〇五六	六八、五九〇

	面積	人口
独逸及西保護領合計（四〇年五月）	七三〇、一九六	九六、六三四、〇〇〇

（補註）メーメル地方、ダンチヒ自由市、旧波蘭領東部地域、及びオイペン、マルメヂ、モレスネを除く独逸領土は一九三九年の調査人口、ボヘミア及モラビア西保護領は一九四〇年々首の推定人口、メーメル地方は一九四〇年々首の算定人口、旧ダンチヒ自由市は一九二九年の調査人口、旧波蘭領東部地域は一九三〇年の調査人口、オイペン、マルメヂ及モレスネは一九四〇年々首の算定人口による。尚、オイペン、マルメヂ及モレスネの面積及び人口は旧プロシヤ領地及モレスネ中立地帯と国境の最後的決定は未だ行はれず。

(イ) ポーランド人

ポーランド人は従来より東部独逸の大農業地帯に於ける定期的出稼ぎ労働者として毎年数十万を算へ、独逸の産業構成上不可欠の労働人口をなすものであつたが、独波戦後の国境変更と波蘭総督領の成立とは之らポーランド人の主要部分を直接に独逸治下の定住人口として包容するに到つた。

ポーランド人の民族総人口は大約二千万に近く、又波蘭総督領の推計人口は大約一千二百万、その大部分がポーランド人と見てよく、スラブ民族系に属し、主として旧教を奉じてゐる。過去に於ける歴史的葛藤は独逸との抗争に終始してゐるが、その一般的生活水準は独逸民族よりも遥かに低く、随つて全く独逸の経済的並に文化的支配下にあると見てよい。独逸人自身がポーランド人を対等視してゐないことはその差別的賃金政策に於いても看取せられるところで、独逸労働戦線の機関誌「ナチス社会政策月報」一九四〇年一九一二。號所載の論文はワルテガウ及ダンチヒに於ける独逸人及びポーランド人農業労働者に設定されてゐる差別賃金率に言及して、「独逸人労働者はポーラン

ド人労働者よりも高い生活水準に慣れてゐる」ことを此の差別待遇の当然の理由として挙げてゐる。之は「ポーランド人が独逸人と同一の生活水準を持つと考へることは不当である」といふロベルト・ライ博士の有名な聲明を稍〻穏やかに表現したものである。

農業労働に於ける此の種の差別賃金制度は工業労働に対しても亦形を変へて行はれてゐる。といふのは工業関係に於いては独逸人工場主が給料の高い独逸人よりも給料の低いポーランド人を使用したがる弊害を考慮せねばならなかつたからで、その為に採用されたのが所謂「社会的調整税」Sozialausgleichsabgabe といふ極めて露骨公然たる差別待遇の方法である。即ち之によると独逸の工業主は独逸人労働者と同額の賃金をポーランド人労働者にも支拂はねばならぬ、然しポーランド人工業労働者は右の「社会的調整税」なる名目の下にその日当の一五％乃至二〇％に当る特別税を賦課されるのである。之は単に経済的搾取を主動機とした差別賃金といふよりも、寧ろ民族的差等観を前提とした公然の国家的制度の一例と解すべきもので、ナチスの異動民族待遇法の一斑を示して遺憾ないものであると共に、又独逸民族の産業機構に寄生するポーランド人の社会的地位を語る事例といへよう。

尚、旧波蘭国はその人口の一割前後のユダヤ人を含み、且つそれらのユダヤ人は民族自治を要求する程各国中最も活潑なる活動を続けてゐた点に於いて特記すべき国であるが、ナチスの支配下に入ると共に此のユダヤ人問題は原則的には既に自然解消を見たものといつてよい。

(ロ)　チエック人

独逸の新保護領となつたボヘミア及モラビヤのチエック人も西方スラブ系に属する民族で、総数約七百万、独逸に対する民族的反感をもつてゐることもポーランド人の場合と変りはないが、そういふ民族的反感を政治的に結集する自力をもたないことも亦ポーランド人の場合と同じい。たゞチエック人は工業労働者として極めて技能的に優秀であり、且つ独逸本国内にも大量の労働人口を移出してゐる。独逸政府

は之らの移入チエック人を公式の政府統計等には外国人として取扱はず、又ポーランド人の場合に見た如き露骨なる差別待遇も行つてゐないようであるが、その民族的所属の故に独逸公民たる資格を與へないことはいふ迄もない。保護領制度がチエック人に対する政治的妥協の産物であることはいふ迄もないが、併し異種民族の政治的支配によつて独逸国民自身の民族的統一を不純化せまいといふ新しい統治方式たる意味も亦否定し難いといへよう。

(八) 在独イタリー人労働者

独逸国内に在住する外国人労働者の中現在特に注目に値ひするものは今次大戦下に激増したイタリー人労働者である。といふのは、戦前に於ける在独イタリー人労働者数は約五万程度のものであつたが、戦時下独逸の労働人口の不足を補塡する目的を以て一九四一年二月伊太利を訪問した独逸の工業使節団は総計三十二万のイタリー人労働者を独逸に派遣せしむる協定を締結するに到つたからで、その協定はその

後着々として実行されてゐる。之は勿論、所謂民族問題的葛藤を惹起する問題ではなく同盟国の好意ある訪客として待遇せられるもので、一九四一年々首以降に実施を見た全国民的な児童扶助金制度の恩恵についても、独伊両国間の相互協定により、之らイタリー人を全く独逸人と同等に待遇すること、してが、異種民族に対する各種の差等待遇政策の一例として特に附記するに値ひする事実といへよう。

第二項　独逸の政治軍事的支配下の諸民族

現在独逸の政治軍事的支配下にあり、将来の独逸にとつてその勢力圏下に包摂せらる可き東南方諸国の民族事情を一覧すれば次の如くである。

(イ) 旧バルト三国、白ロシア及びウクライナ

〔本資料ソ聯邦の部参照〕

(ロ) スロバキア人

スロバキア人はチエック人と共にスラブ民族の一派たる西スラブに

属する民族でその言語も互に似てゐるが、十一世紀以来政治的に一致せることがなく、血縁的親和感もなく、そういふ意味でも旧チエッコ、スロバキア共和国は確かにベルサイユ会議の生める畸型児であった、この民族的分化対立の理由は主としてその社会経済的事情に帰すべきもので、ボヘミアが農工的資源を以て繁栄し旧墺匈国の金庫とさへいはれたのに対し、スロバキアは千年に亘るハンガリーの治下にあって退嬰的なる山岳農民として止まり、その生活利害はことごとく相対立するものとなってゐた。一九三九年三月十四日独逸軍のボヘミヤ侵入とボヘミヤ及モラビヤの保護領宣言と日を同じうして、スロバキヤは独立を宣言し、十八日之に関し独逸と正式條約を結んだ。人口大約二百五十万、数に於いても質に於いても独逸の政治指導にさしたる困難を豫想せしむる民族ではない。

(ハ) ハンガリー人

ハンガリー人は十世紀の初頭カルパチア森林を経て侵入して来たマヂャール人騎馬部隊が独逸民族の抵抗に遭って次第に此の地に止まり、独逸人の文化的感化によって十一世紀初頭より農業者として定着したもので、現在のハンガリー人も自らマヂャール民族と称してゐる。広くアジア人種に属し、フイン人（フインランド）及びラップ人（フインランド北部辺境民）と共にウグリア系民族に分類せられる。但しマヂャール人はウグリアの要素にトルコ人要素が附加され、互にスラブとの混血によって体質的にも風俗的にも可なりそのアジア的特性を失ってゐる。

ハンガリア人は永くハプスブルグ家を主として仰いでゐたが、十九世紀にはマヂャール族の民族意識の昂揚をみ、独立宣言までも行ったことがある。之は露西亜の援けを得た墺太利の弾圧に遭ひ、結局ウイーン政府の独逸化政策に屈服せざるを得なかったが、普墺戦争後一八六七年墺太利と対等の自主的地位を有する墺匈国の一部となり、更に第一次欧州大戦後に完全なる独立国となるに到ったものであるが、そ

のアジア的血縁思想に根ざす特異の民族意識と国境外自民族統合の要求とにより民族意識は極めて旺盛である。

今次第二次欧洲大戦に於ける旧チェッコ、スロバキア並にユーゴー、スラビア両国の解体により、スロバキアの南部の一帯及びルテニアを加へ、更に独逸軍のユーゴー、スラビア及ルーマニア進駐の結末は南方国境をも亦拡大して、新版図一六〇、七二九方粁、一九四一年一月末現在の人口調査による総人口は一三、六三八、八三九人、その内ハンガリー人は大約八割五分、千百五十万と概算せられる。中欧より南東欧に亘る群居諸民族中最大の人口数をもつてゐるが、その地理的事情により南東欧諸族に比し早くより近代的出産減退傾向を示して居るのが注目せられる。但しハンガリーが最近獲得した地域は単にハンガリー人を主住民とする地域であるばかりでなく、又特に多産人口地域で、その為に同国の出生率を急上昇せしむる結果を見せてゐる。

（備考）南東欧諸国の最近の出生率を示せば左表の如くである。

南東欧諸国及独伊両国の人口動態

出生率

年次	ハンガリー	ユーゴー	ルーマニア	ブルガリア	ギリシヤ	伊太利	独逸(2)
一九二一－二五	二九、四	三五、〇	三七、九	三九、〇	二九、九	二九、七	二二、一
一九二六－三〇	二六、〇	三四、二	三五、二	三三、一	三〇、二	二六、八	一八、四
一九三一－三五	二二、四	三一、九	三二、九	二九、三	二九、五	二三、八	一六、四
一九三五	二一、二	二九、九	三〇、七	二六、四	二八、六	二三、三	一八、二
一九三六	二〇、四	二九、一	三一、五	二五、六	二八、三	二二、四	一八、三
一九三七	二〇、二	二七、九	三〇、八	二四、〇	二六、六	二二、九	一八、一
一九三八	二〇、一	－	二九、六	二二、八	二六、四	二三、七	一九、〇
一九三九	一九、一(1)	－	二八、三	二一、一	二四、七	二三、五	二〇、四

(1) 一九三八年十一月二日のウイーン仲裁協定後の領域内、現在の領土内に於ては一九三七年度の出産率は二二、六、死亡率は一五、一、自然増加率は七、五となる。

(2)　一九三一年度以後はオストマルク、ズデーテン地方、メーメル地方及びダンチヒを含む。

又、その人口年齢構成を比較すれば次表の如くである。

南東欧諸国及独伊両国の年齢構成（百分率）

	一五才未満	一五～三〇才	三〇～四五才	四五～六五才	六五才以上
ハンガリー（一九三〇年）※	二七、五	二七、九	二〇、七	一七、六	六、三
ユーゴー（一九三一年）	三四、六	二七、五	一七、九	一四、七	五、三
ルーマニア（一九三〇年）※	三四、九	二九、四	一七、五	一三、九	四、三
ブルガリア（一九三四年）※	三五、五	二五、六	一八、九	一四、八	五、二
ギリシア（一九二八年）※	三二、二	二八、五	一七、五	一五、九	五、九
トルコ（一九三五年）※	四一、四	二三、五	一八、八	一二、四	三、九
伊太利（一九三一年）	二九、七	二六、九	一八、八	一七、三	七、三
独逸（一九三五年）	二四、二	二四、五	二三、一	二〇、九	七、三

※調査年時の領域内

(二)　旧ユーゴー・スラビア（セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人）共にバルカン、スラブと総称せらる、スラヴ系民族で、第一次欧洲大戦後ユーゴー、スラビア国を形成せる三つの主民族であるが、併しその地理的隔居生活は夫々独自の性格、言語、風俗、習慣を形成せしめ、夫々別の宗教を奉ずるに到らしめて居り、政治的な対立意識は相互に極めて強い。今次独逸軍の侵入に当りクロアチア人が独自の行動を取つたのも単に独逸の巧妙な政治的操縦だけに由るものではない。セルビア人は主として旧ユーゴースラビア国の東部農業地帯を占拠する主幹民族で、多年オットマン・トルコ帝国の治下にあつて多分にその影響を受け、宗教もギリシヤで教を奉じてをり、大セルビヤ主義によつて国家主義的に固まつた言はゞ現実的、政治的民族であるに対し、クロアチア人は地理的にも性格的にも工業的発展の諸條件を具へて居り、文化的には墺匈国の影響を受け、宗教もローマ正教を奉じてゐる。特に性格的にはセルビア人に対照して理想主義的で、自ら旧ユ

ーゴー・スラビア国に於ける知識層を以て自任じ、従来も事々にセルビア人と対立抗争してゐたものである。スロヴエニア人もその民族事情はクロアチア人に近い。三民族の人々比重はセルビア人、クロアチア人、スロヴエニア人の順序で、前二者を合せて約九百万、スロヴエニア人は約百万余に過ぎぬ。（尚、旧ユーゴースラビア国内には此の外、夫々五十万前後の独逸人、マヂヤール人、アルバニア人、ハンガリー人等を包容してゐた。）

独逸の政治軍事的支配下に入った今後に於ける独逸のこれらの諸民族に対する方策はなほ未決定であるが、之を俘虜の取扱びに見ても特にセルビア人がポーランド人の場合と同じく釈放せられずに強制労働に使役せられてゐる点が注目せられよう。（この点ノールウエー、デンマーク、和蘭の俘虜に対する釈放政策と好対照を示してゐる。）経済的には既に今次大戦前よりその政治的特殊事情にも拘らず独逸に連繋してゐたもので、之を一九三八年の旧ユーゴースラビア国貿易統計に

見ても、輸出の二一%は独逸へ、一三、五%は墺太利へ、また輸入の三四、二%は独逸より、一〇、三%は墺太利より入れてゐた。独墺合邪の結果は輸出入の四〇%以上が独逸のものとなり、之に対し英国は約九%。伊太利は七、六%で殆んど問題とならぬ。

(ホ)

ブルガリア人は紀元五〇〇年頃この地方に南下して来たアジア系の民族で、六九七年に建国の紀録を残してゐるが、同時にこの地方の先住民族であったスラブと混血して居る。

近世に於いては屡々オットマン・トルコの支配と侵入とを受けてその影響も尠くないが、併しブルガリア人の多くは中央及び北部の山岳地方に逃避してその民族的純潔を維持したといはれて居り、現在もブルガリア人中部以北地帯をその主住地として居る。

現在ブルガリアに於ける単一支配民族で、同国人口の八割余、約五百五十万を算するが、第一次欧洲大戦に戦敗国として国外に多数の自民族を算へる。ルーマニアのドブルーヂヤ地方には約四十万。また旧

ユーゴースラビア国内の所謂ブルガリア、マケドニア人約七十万、ギリシヤ国内の西部マケドニア人として約十万は所謂マケドニア問題としてブルガリア人の民族運動の中心問題を為してゐる。

ブルガリア人も亦南東欧諸民族と同じく農業民族であるが、特に農業民族に特有な忍耐力とねばり強さを多分に備へてをり、その民族理想を追及する執拗さはバルカンの民族闘争に於けるブルガリア人の最強の武器であるともいへよう。但し現在の國際政治下に自力を以てその宿願を達成し難いことが、従来より同国の政治に親独的傾向の絶えず有力な一勢力として作用してゐた理由であり、国際経済的にも亦ブルガリアに於ける独逸の勢力は圧倒的である。

(ヘ) ルーマニア人

ルーマニア人は一名ワラキヤ人とも称し、古代ローマ帝国の一州ダキヤに於ける植民者の後裔を以て自任するローマ化されたダキヤ人の子孫であるが、その後の外国侵入者と混血して居り、スラヴの血は尠くない。民族人口は前大戦後の版図及総人口の約七割五分で千三百五十万。他に露西亜、旧ユーゴースラビア、ブルガリア等国外に約六十万のルーマニア人を止めてゐるバルカン諸民族中人口比重の最も高い民族であるが、教育程度も経済水準も低い農民を主体としてをり、国内の少数民族たるマヂャール人（約百五十万）、独逸人（約五十万）等よりも文化水準は遥かに低く、その支配に幾多の困難をみせてゐた。

但じバルカンに於ける特異な準ラテン系民族としてその血縁的関係はヴエルサイユ的体制の下で特に政治的に利用せられてゐたものであり、ルーマニアの上層貴族たちは好んで佛蘭西に留学し佛蘭西風の生活を為すを誇りとしてゐた。かゝる国際政治的事情が生んだ独有の民族問題として我々はルーマニアに於けるユダヤ人問題を挙げることができよう。

ルーマニアに於いてユダヤ人問題が政治的に取り上げられたのは百

年以上もの昔に遡り、既に一八一七年にはユダヤ人とキリスト教徒との結婚を禁止して居り、また一八三二年の憲法はユダヤ人を以て国外に追放せらるべき民族的危険分子として其の公民権及び市民権を剥奪までしてゐる。そして前大戦末まではユダヤ人は凡て外国人として取扱はれ、国政に参與することを許されなかつたものであるが、其後の国際政治的情勢はルーマニアをして国際ユダヤの暗躍を拒絶することを困難ならしめ、一九一九年十二月九日の少数民族に関する巴里協定を承認するの媿むなきに到つた。右協定の実施は国際聯盟の保障の下に置かれてゐたもので、之によりルーマニアは同国内に住むユダヤ人にして外国籍なき者の凡てに対して何等特別の処置を介することなく直ちに完全なる公民権を賦與せざるを得ざるに到り、ユダヤ人はいよ〱ルーマニアに於ける経済的実権を掌握し利用する結果となつた如き、国際政治上に独立の実力なき民族に特有な独特の民族問題として特に注目するに足る事実といへよう。一九三八年頃よりルーマニア政府も遂に種々の反ユダヤ的立法を実施するの媿むなきに到つてゐる。

(ト) ギリシヤ人

民族人口六百万余を算する現在のギリシヤ人は嘗て東方のペルシヤ人を撃退しパルテノンを建設した古代ヘレネースの子孫ではないが、併し第八世紀末に於けるスラブ系人口の移植入を強調し現在のギリシヤ人を以つてビザンチン化されたるスラブ人なりとする Fallmerayer の提議も今日は諸家の批判に堪へ難いものとなつた。寧ろ現代のギリシア人はビザンチン統治時代の初期に於けるギリシア住民の子孫と考ふべきもので、彼等が古代希臘から継承せる高度文化によつて其の後ローマ支配、ゴートの侵入、スラブの入植、その他中世代に於けるフランク人、ヴエネチア人、トルコ人等の支配下にも之らの諸要素を完全に同化し乍ら存続して来たものと考へるのが今日の通説である。

但し現在のギリシヤ人が古代ギリシヤ人の直系であるとの民族的誇りをもつてゐることは別問題で、今日のギリシヤ人はその多元的な起

源にも拘らず極めて同質的な一民族を形成してをり、民族意識の旺盛なる点はハンガリー人と雙璧を為すといつてよい。且つ今日に於いても南東欧諸民族中最も智的才能を生具してゐるといつてよい。但しこの天與の智的才能も、今日の国際的情勢の中では、却つて軽薄な小利口さに変質してゐることも否定し難く、その愛国的熱情も徒らに政治的論議と抗争とに空費されてゐる傾きが尠くない。カッフェーの中でも活溌な政治談議が闘はされることはギリシャ特有の風景で、レストランの給仕も家庭の下女たちも夫々の自分の好む黨派の新聞を愛読するなどといふ事実もその一班を語るものである。要之、今日のギリシア人は利口で、野心的で、且つ多情多能な民族で進んで自己犠牲をさへ惜まないが、大国民たる為めには猶は或る確固たる性質が欠けてゐるといつてよい。

第二節　ファッシズム伊太利の民族政策

第一款　序説

永く世界歴史の中心舞台であつた伊太利半島に住む現在のイタリー人について、過去の史的葛藤に伴ふその人種学的組成を論ずることは別であるが、現在のイタリー人が半島に於ける唯一の支配的な単一民族を形成してゐることはいふ迄もなく、且つ古代ローマ人の政治的発展を出発点とし、また根幹として混融された民族として其の正嫡の子孫を以て自ら任じ得るものであることも亦概ね異論のないところであらう。今日の伊太利に於ける民族問題は、前節ナチス独逸の場合に於けると同じく、一九二二年以降の新しいファッシズム伊太利の誕生と共に初まる。そして所謂民族問題が異種民族に対するの方策たると同時に、自民族自身の

民族的更生、その民族資質の純化と民族人口増強を主眼としてゐる点も亦ナチス独逸に於ける場合と同じい。国土の貧困の為に欧洲に於ける最大の移民送出国であつた伊太利が、極端な国外移住禁止方策に一変したのも、一つは南北アメリカ諸國の移入民制限政策の然らしむる所ではあるが、同時に「量は力なり」といふムツソリーニの標語に見る如く、民族力量の分散による自然消耗を防止しようとするのが其の主眼で、その結果は或は莫大な国費を投じた国内開拓事業となり、或は万全の国家的指導と保護の下に行はれるリビヤ植民事業として表はれてゐる。

リビア植民事業にもその一端を窺ひ得る如く、アフリカに於ける自国植民地に対する政治的関心の一変せることは特に注目すべき事実である。嘗て国策が自由主義的政争の犠牲となつてゐた時代には財政的見地から厄介物視されさへしたこともあるこれらの植民地は、嘗てのローマ帝国の夢を趁ふ新しい大伊太利帝國建設の理想の下では、帝国と不可分の領域として、幾多の軍事的葛藤をさへ顧みず、その行政機構を新しく母国の中央集権的支配下に再組織せられたばかりでなく、エチオピア戦争は更に伊領アフリカ植民地を外延的にも異常に拡大した。而かも帝国の一部としてのアフリカ領土に対する政治的関心は、エチオピアをも含めて大約千三百万に及ぶ異種民族との交渉を真剣に取り上げる必要を惹起した。西洋と東洋とを統合した古代ローマ帝国の偉業を理想として彼等を伊太利帝国の臣民に教化し、ファッシズムの真の擁護者、防衛者たらしめようとする理想の成否如何は之をなほ遠い将来に俟たねばならないが、併し新しい大理想への着手は、同時にそれだけ真剣にイタリー民族の民族的指導を確保する為の諸方策の考慮を余儀なくしたといつてよく、混血防止に関する諸方策の如きも亦はじめて真剣に考慮せらる、に到つた。

而かもか、る民族保全に関する関心は更に進んでは伊太利民族の民族的優秀さを自覚し高揚しようとする思想運動として結実せねばならない。一九三八年の「人種宣言」の如きその最も著名なる事例とすることが

できよう。この運動は同時にまた徹底的な反ユダヤ人的立法の出発点ともなつたものであるが、以下ファッシズム伊太利の政治的性格に淵源するこれらの諸問題について項を分けてその要点をのみ畧述すること、する

第二款　植民地土着人口に対する諸方策

ファッシズム伊太利の新植民政策の特徴は、第一に、嘗て自由主義的政治理想から植民地に與へられた一切の独立性（例へば一九一九年トリポリ及キレナイカの土着民に與へられた立法及び行政権への参與の如き）を解消して、之を完全な中央集権的政治機構に編成替へしたことであり、第二にはファッシスト黨の組織を植民地にも拡大し、この黨組織を以て母国と植民地との真の連結帯としようとしてゐることである。（例へば東アフリカの極めて僻遠の地にも会員数名を算するに過ぎぬ様な黨の支部がある。）更に第三に、母国とのか、る精神的連結を現実に保障する紐帯として、ファッシズム政治の基本要請である組合制度の植民地への拡充政策を挙げねばならぬ。それは専ら経済的利害に基く移植民者の母国離反を未然に防止することを目的としてゐるものであるが、土着民の商業行為もこの組合組織の中へ包含せらる、ことはいふ迄もない。但し右第六、第三の特徴は主として植民地在住の母国人を対象としたもので、対土着民の問題として最も重大なのは第一の政治的独立性の完全なる否定にあるといへよう。事実この国策の強力遂行は土着民に多大の反抗を呼び起したし、嘗てエチオピア戦争当時にはその危機をさへ招来したともいはれてゐる。この危機を乗り超え得たのが伊太利の政治軍事的実力に負ふものであつたことはいふ迄もないが、同時に諸他の教化政策が兼ね行はれてゐることも亦事実である。

伊太利領アフリカ植民地の土着住民は、アフリカ住民中最も教化度の高い住民群に属すべきもので、リビアの主住民たるリビア人（主としてバルバリ人）はアラブ化された白人系の人種といはれて居り、伊領東アフリカの住民はネグロイド要素の混入は強いがセム及ハム系の人種と考

へられ、所謂アフリカの黒人的人口は極めて尠い。（詳細は本資料アフリカの部を参照）。従って民族意識も強く、政治的反抗の力も亦強烈であったわけであるが、それだけ土着民に対する教化的政策が積極的な効果を期待し得る可能性も亦強いといへよう。

教化政策の実体を為すものは衛生行政と教育制度とで、之を通じて土着民の福利増進を図ると共に強大なる伊太利帝国の臣下たる誇りを土着民の心に植えつけることを目的としてゐるものといへよう。衛生行政は広く人畜に対する水源問題の解決、或は牛の傳染病駆除などの事業にまでも及んでゐるが、学校教育を介して行はれる衛生思想啓蒙の直接間接的効果は特に大きい。か丶る衛生行政の差し迫った必要と、その漸進的だが期待すべき実績の一端は之を次の数字にも窺ふことができよう。

リビアに於ける初等学校生徒の疾病率（百分比）

学年度	伊太利人	イスライル教徒	モハメット教徒	総計
一九二五－二六年	二二、三	八〇、〇	八三、九	五一、五
一九二六－二七年	二二、六	六四、〇	七九、四	四七、〇
一九二七－二八年	一七、一	六一、二	七八、三	三八、二
一九二八－二九年	一六、八	六〇、〇	七〇、〇	三五、八
一九二九－三〇年	一四、五	六〇、〇	六八、七	三四、〇

学校教育、特に初等教育の普及も、政治機構の改革に伴った長期の植民地戦争の一段落後は極めて大規模に実現され、その施設はリビア沙漠内の極めて僻遠なオアシスに迄も及ぶに到ってゐる。リビアに於けるモハメット教徒の為に建設された国立の初等学校の生徒数は一九二二年に千二百人であったものが、一九三六－七年の学年期には一万六十八人の多きを算へ、十五年間に四倍以上に増大された。（右の外、モハメット教による私立学校も夥しく、同数の生徒数を有ってゐる。）学年は普通四ケ年で、更に高等二ケ年の補修教育を為すを一般とし、土語及伊太利語を折半して授業せられ、処によっては下級官吏又は通弁を養成する為に更に四ケ年の高等教育を授ける制度もある。

が衛生福利施設も学校教育の普及も、自然衰滅の危機にある土着人口を保全し、且つ其の熱帯民族特有の反労働的性格を陶冶して完合なる農工業的労働力を作り上げようとする伊太利自身の国家目的と表裏してゐるものであることはいふ迄もなく、そこに亦当然の限界もあるといへよう。作併、嘗ては民族的反抗の最大の源泉であつた学校教育の普及拡大は、同時に之を通じて土着民を大伊太利帝国の防護者にまで教育し得るとのファッシズム政治の自信をも物語るものである。学校卒業者の優遇、特に高等課程修了者の行政機関への優先採用等は、土着民の中にファッシズム政治の擁護者たるべき一種の指導者住民層を作らうとする政策の一部を為すもので、この種方策は或は帝国の功労者への勲章、称號、土地傳来の貴族称號の供與、或は軍務服役者に対する公民権供與等の諸方策と相俟つてファッシズムの指導者政治の精神と社会階級的構成とを土着民の中にも推し及ぼさうとしてゐるものといへる。リビアでは一九三五年にはバルボ総督によつて十二才より十八才のアラビア人少年を以てファシスト的少年団が結成せられ、リビア沙漠の旅行者が思ひ掛けぬ僻遠の地で「ヂヨビネッタ」の歌を聞きファシスト的敬礼に接して驚異の感を抱くことも尠くない。

とはいへ右の如きファシスト的教化政策も必ずしも土着民の欧洲人化を意味するものではなく、寧ろ土着民傳承の風俗習慣を尊重する点に於いてはファシスト伊太利の対土着民政策は特に細心の注意を拂つてゐるといつてよく、その点その宗教政策に於いて特に著しい。過去千二百年に亘るアラビア人の支配の結果である回教の勢力は土着民教化の最善の手段として利用せられてをり、回教々儀の研究の為の高等教育機関も亦保護助成せられてゐる。尤も之は、他面より之を見れば、土着民の高等教育を宗教々育に限定し、且つその修学課程に於けるファシスト的思想の鼓推と相俟つて、土着民の中に伊太利帝国の防壁たる可き指導者層造成政策の主要なる一環を為すものであることはいふ迄もない。

第三款　反混血立法

西洋と東洋との統一した古代ローマ帝國の理想を鼓推し、土着民を大伊太利帝國の一員として教化しようとすることは、作併、民族的混血を目的とするものでないはいふ迄もなく、寧ろファッシズム伊太利の民族政策は徹底的なる混血禁止政策を立て前としてゐる。この種の反混血立法の先蹤をなすものは伊太利のエチオピア征討後一九三七年四月十九日勅令を以て公布せられた人種保護法中の一節で、伊太利市民と植民地土着民との間の非合法的婚姻關係を嚴禁したものである。之により伊太利帝國領土内に於いて伊太利領東アフリカの土着民、若しくは之を同一視せらるべき道徳習俗或は法律乃至社会観念を有つ外國人と非合法的婚姻關係を営める伊太利市民は一年乃至五年の禁錮刑に処せらるゝことゝなつた。本法が非合法的性交のみを対象としてゐるのは、一つは土着民との合法的婚姻事例が極めて稀であるにもよるが、その教理上人種的差別待遇を許さないローマ教会に対する政策的妥協によるもので、伊太利に於

ける人種民族問題に特有の思想的葛藤を示すものといへよう。（土着民との合法的婚姻の防止は徴戒規則若くは婚姻認可の拒否等の行政的手段を以て行はれた。）

が伊領東アフリカに於ける人種的隔離政策は、右の如き反混血立法の外、社会生活の諸部面に於いて実施せられて居り、例へば伊領東アフリカに於いては一九三八年六月、南阿聯邦の先例に倣つて、土着民に対し欧洲人の集会所や娯楽所に入ることを禁じ、また欧洲人の自動車運轉手に対して有色人を乗車せしむることを禁ぜるが如きその著しい例を為すものである。

伊領東アフリカに実施せられた右の如き反混血政策は、一九三八年の「人種宣言」（次項に参照）に見らるゝ如きファッシズム、イデオロギーに於ける民族人種思想の劃期的昂揚を轉機として更に強化且つ一般化せられ、一九三八年十月六日ファシスト大評議会に於いて議決せられた人種決議はユダヤ人との混血を嚴禁すると共に、従来單に伊領東アフリ

力にのみ適用せられてゐた土着民との混血防止政策をリビア土着民に対しても拡張し、伊太利人と伊領アフリカ植民地の凡ての土着民との間の完全なる人種的隔離を行ふに到つた。

第四款　一九三八年の「人種宣言」

一九三八年七月十四日に一群のファシスト学者によつて公開された所謂「人種宣言」は、ファッシズムの民族政策イデオロギーを十ケの原則に要約した重要なる文献であると共に、ファシスト伊太利の民族政策に於ける劃期的轉機を為すものであるが、参考の為めその要旨を掲ぐれば凡そ左の如くである。

第一、「人種」とは單に我々の概念的構成物ではない。それは遺傳的な肉体的並に精神的諸徴表に於いて互に類似した何百万といふ人間群によつて展示せられてゐる現實の存在である。従つて地上には多くの異なつた人種が存在すること、なる。

第二、所謂「人種」の概念には広狭の二義、即ち通俗的及び生物学的の二義があるが、多数の共通的徴表によつて区別せられる狭義の人種概念（例へば北方人種、西方人種、ディナール人種等の区別）が生物学的立場から見て正しい真の「人種」概念を為すものである。

第三、「人種」なる概念は純生物学的概念として取り扱はれねばならぬ。従つてそれは「民族」及び「国民」の概念と区別せられねばならないが、併し歴史的、文化的な民族の成立に人種的要素が極めて主要なる一因子を為すものであることも亦強調せねばならぬ。

第四、伊太利はアリアン的である。即ち数千年来の伊太利半島の住民はアリアン起源であり、その文化も亦アリアン系のものである。

第五、歴史代に大量の他人種群が伊太利半島に来住したといふ説は單なるお伽噺に過ぎぬ、ランゴバルドの侵入以来伊太利には国民の人種的相貌に影響を及ぼすに足る程の特記すべき人口移動は存しない。その点近代に於いてさへ其の人種的構成に明白な変化を受けた他の欧洲諸国民

と著しい対照を為すものである。

第六、それ故に、生物学的見地より之を見るも、現在に於いては一ケの純粋なる「伊太利人種」が存在する。古くからの血の純粋性は伊太利国民の最高の尊號である。

第七、ファッシズム政治の全努力は、その根本に於いては、人種政策に外ならぬことを告白せねばならぬ。併しファッシズムの人種政策は本質的に伊太利的のものでなければならぬ。アリアン的、北方的思想の強調も伊太利人を非欧洲的人種と甄別するのが主旨で、伊太利人とスカンヂナヴィア人との同一性を主張するわけではなく、況んや伊太利に独逸の人種政策の教義をそのまゝ、導入してよいといふ意味ではない。

第八、欧洲の地中海民族と東洋人及阿弗利加人とを区別することは特に必要で、二、三の欧洲民族のアフリカ起源を主張し、或はセム及ハム民族をも西方人種に包括せんとする如きは特に危険なる学説といはねばならぬ。

第九、ユダヤ人は伊太利人種には属せぬ、また数世紀を通じ伊太利半島に来住したセム人は今日最早何等の痕跡をも残留してゐない。ユダヤ人は伊太利に於いて絶えて同化しなかつた唯一の人口である。

第十、伊太利人の純欧羅巴的な身体的及び精神的諸徴表は如何なる仕方によつても変化さる、を許さぬ。混血はたゞ欧洲諸人種の範囲内に於いてのみ受容し得るに過ぎぬ。及之非アリアン的文化を擔つた非欧洲的人種との混血は伊太利人の純欧羅巴本質を変質せしめるであらう。

第五款　反ユダヤ人立法

伊太利に於ける所謂ユダヤ禍問題は独逸に於ける程深刻ではなかつたが、併し特に第一次世界大戦以後は多数のユダヤ人が中欧方面より入国して伊太利の社会経済生活に次第にその影響を示してゐた。前項所説の如き民族的自覚は特にユダヤ人問題に於いて政策化せられ、一九三八年九月二日には内閣決議を以て外国籍ユダヤ人の伊太利本国、リビア及び

エーゲ海諸属地に常住するを禁じ、又前大戦後入国せるユダヤ人の伊太利市民権を剥奪すると共に、一般にユダヤ人を伊太利の諸学校及学術団体より追放することを決定してゐる。

が伊太利の反ユダヤ人政策として最も重きをなすものは其後間もなく一九三八年十月六日に行はれた上掲ファシスト大評議会の人種決議と、茲に之に基き同年十一月十日制定せられた「伊太利人種保護法」に於ける徹底的な反ユダヤ政策の具体化である。本法は一般に伊太利人男女とハム、セム及び其他の非アリアン人種に属する者との結婚を禁止したものであり、特に官公吏及び公共団体の文武官に対しては一切の外国婦人（人種の如何を問はず）との結婚を禁止せるのみならず、伊太利市民とアリアン系外国婦人との結婚も内務大臣の事前の許可を必要とすることとしたものであるが、特にユダヤ人に対しては次の如き反ユダヤ政策が法制化せられた。即ち

(イ) ファシスト黨への入黨禁止

(ロ) 百人以上の被傭者を使用する凡ゆる種類の事業の所有乃至経営の禁止

(ハ) 五ヘクタールを超ゆる土地の所有の禁止

(ニ) 平時及び戦時に於ける軍務の禁止

(ホ) 外国ユダヤ人の入国禁止

そして右法規違反者には禁固刑を以て臨んでゐる。

尚、本法にいふユダヤ人とは、大評議会の決議に随ひ、左の各項に該当する者をいふ。

(イ) 其の両親共にユダヤ人なる者

(ロ) 父がユダヤ人にして母が外国人なる者

(ハ) 混血児にしてユダヤ教会に属する者

但し伊太利国籍を有つユダヤ人にして特定の場合に該当する者（例へば其者の家族中に今世紀伊太利の遂行せる最近四大戦役、即ち伊土戦役、第一次世界大戦、エチオピア戦役及びスペイン戦役の孰れかに於ける

戰死者の有る場合、或は同じく自ら進んで志願参加せる者の有る場合等

等）に対しては之を特にユダヤ人と見做さゞる除外規定が設けられてゐる。

第六章　アフリカ大陸民族事情

第一節　アフリカ民族事情

略々北緯十五度以北に存在するアフリカ北部は其の中にエジプト、ヌビヤ、地中海沿岸全サワラ地方、モロッコ、アルジェリヤ、チュニス、トリポリを含み人類學上單一地帯として取扱ひ得るのであつて殊に地中海に面し大部分は——勿論西部、南部アフリカと近密な関係を其の人種構成に持つてゐるのであるが——特殊な地域として獨自の問題を供してゐる。

此處は外國地との類縁関係、人種構成の一般問題と併合して同一地域に於ける人種の恒常性、変化性等人種史の研究に貴重な資料を世界中最も多数持つ地域である。

殊にヌビヤから河口に及ぶナイル渓谷は多くの考古學者に依つて大規

模に調査され最早期の前王朝時代から現代まで約七千年以上に渡り同一の民族から由来した頭蓋遺物の系列が発見されてゐる。更に人種史、人種地理研究に便利なことは遺骨資料の非常に多いこと以外人体の軟部（毛髪、顔形等）が保存され且つ多数のミイラ、絵画彫刻の残存してゐることである。それで或程度まで彼等の真実の形実の形態を復原することが出来る。最もよく保存された資料、頭蓋の調査は、新石器時代から全エジプト帝国史を通じて、主に二分し得る頭蓋形態があつたことを数へる。一は異様な形状を呈してゐるのであつて、広く短い額、狭い直状額――中央がもり上つて穹状を呈してゐる――下に強き輪郭を描いてゐる眉骨弓がある。前頭隆起と顱頂隆起がかなり著しい。眼眶は低く鼻骨は小形で扁平である。骨部鼻孔は円形で低く廣い。其の下縁部は尖らずに上顎の前面部に円形に流れそこに斜瀉則ち鼻前窩を形成してゐる。全顔は強度の斜顎型であつて顎が甚だ突出してゐる。總ての之等の徴表結合は現今のネグロ頭蓋に見られる。更に長い獨自な均衡をした黒人的四肢

と木伊乃（ミイラ）に於ける典型的黒色捲状毛を見るならばエジプト民族に類黒人（ネグロイド）構成要素があつたことを確実に推定し得るのであらう。而もエジプト人はそれを典型的に（彩色壁画）描いて居る。即ちそれは捲状と厚い隆起唇を持ち黒褐色なのである。然しながら此の黒人体型は劣勢であつて他の欧洲人的な相貌なものが住民の大多数を形成してゐたのである。此の頭蓋は前者の如く狭く、そして美形を呈し、よく発達した顎を持ち狭い額骨弓のある中長狭顔である。鼻は前者に反して狭く鼻骨は屋根形で顔は突出せず正顎型である。身長は著しくないが毛髪は黒褐色で滑状である。そして図を信ずるならば彼等の皮膚は非常な浅黒色で日に焦けた男性の皮膚は暗色で略々今日の南伊太利人のやうであるが女性の皮膚はやや明色で鼻は短く直状で美しく中幅から薄くなつてゐる。此の頭蓋所有者の人種的関係は多くの論争が費されてゐたが今日尚確定してゐない。或人は此の体型を「古い」人種とし或人はそれを「新しい」人種とし或人は単に「非類黒人」と視してゐる。然し南欧洲の部分で視したやうに

所謂地中海人種に關係しておると云ふことは明言し得る。又同時に強き他人種の侵入があったことも言及されなければならない。此の地中海人種はネグロ住民と關係があったことは確であらう。總ての頭蓋の約七分の一は明かに類黒人(ネグロイド)である。乍然そこには正確にいふと——今日の住民に黒人侵入の全階梯を見ることを得る如く——無數の程度差違があるのである。黒人特質は全時代を通じて新石器時代からローマ時代まで豐遍してゐた。然らば何處から此の類黒人的住民が由來したのであらうかの問題が起る。

エジプト帝國の初期はエジプトの最北端にあったが古代帝國の末期にエジプト人はアッスワンを越えてナイルの方へ進み(二、〇〇〇年頃)第十二王朝時代にはヌビヤがエジプトの縣となり一萬の黒人兵士が置かれたのである。然し更に一千年後南エジプトの王位には名前と肖像から純黒人であると知られたところのヌビヤ人の王が嗣いだのである。彼等はよく統治しエジプトの權威をパレスチナまで及ぼし當時の高等文化の精華

の中に生活した。それで又此の類黒人はエジプト民族の重要な構成部分となったのである。

今日のヌビヤ人、アビシニア人等は比較的變化しない此のヌビヤ・エジプト人の子孫と稱されてゐる。これで後世の黒人混血は明かにされるが新石器時代及びそれ以前の彼等の移動は明かでない。マントのダリマルディイ人種の發示が告げアルジェリヤ、チュニスの人類學的發見物が確證するやうに嘗て黒人は地中海附近まで到達したのである。彼等は又全エジプト(後期の後洪積世荒地を含み)を占領し且地中海から三角洲の地域、更に突進して全國に擴がってゐたらしいのである。地中海人の成立地域に關しては殆んど知られてゐない。假説は彼等がアフリカで成立したとする。それで彼等はナイルを下りアフリカ一般に擴がったらしいのである。乍然此の人種——彼等は一般に地中海人種と呼ばれるものであるが——はエジプト民族の主要素である。更に此の人種は又(他のものと混血して)エジプト文化の創造者特にハム語群の主要な分派エジプ

ト語の製作者、使用者と看做されてゐるのである。それで強い八ム民族性をこゝに見、その人種的主要基礎として地中海人種を見るのである。是等体型が数千年間変化しなかつたことはエジプト人の表現物が示してゐる。発掘された現今カイロ博物館にある驚嘆すべき人像（第五三期）は一見してアラビヤの日傭人を憶起させるがこれは酋長である。此の人像はそれ以来所謂村長若くは酋長の名で呼ばれてゐる。多数の人像の王候、僧侶、學者等は上述した人相を示してゐる。然しエジプトの人種構成は錯雑してゐるのであつて多数の他の人像は違つた特徴を示してゐる。ラムセス鼻は地中海人種、ネグロ人種中にはない。エジプト民族は今尚他人種を入れてゐるがこれは初めから續いて行はれてゐるのである。王朝の後期に最も重要な構成分子としてセム人即ち東方人種が考察される。

それでエジプトの歴史家は遊牧人種と数千年續いた闘争のあつた事を告げるのであつてこの種族は紅海とスエズ地峡を越えて絶えず攻撃をなし、いつしか國内に留まつたのである。そこに血液混交が起つたことは

明白であり、先史代にも又同じことが起つてゐたことも確かである。エジプトの繪画は之を現はしてゐる。彼等は淡黄色の──エジプト人よりも明るい（前方アジヤの東方人種の徴表）皮膚、長い黒色髮と曲つた適度に突入した鼻を持つてゐる。此の体型は又エジプト民族中に強く現はれてゐることは疑なく繪画が明かにそれを示してゐる。然し頭蓋資料に於ては地中海人頭蓋と東方人頭蓋とを區別し得ないのである。かゝる人種と共に彼等は尚前方アジヤからの他人種を取入れたのである。──それは既に述べた──前方アジヤ人種である。明かにそのことを示してゐる頭蓋遺物から推定することを得る。更に西及び北西から所謂海洋民族リビヤ人群が侵入した。

彼等は繪画に見ることを得る如く、人種としてはバラ白色皮膚ブロンド毛髮及び青色眼を持つてゐる。又小アジヤの北方人種（混血した）の漂泊民族の侵入が前方アジヤから印度にまで及び又アトラス地方にはブロンド色のものがゐたことを考へるとアフリカにもその侵入があつたこ

推測されるが然し北方人種の侵入があつた證示は未だ発見されてゐない。

斯くしてエヂプトでは最早期から各種の体型があつたので――メネシス Menessis 時代以前のアビドス Abydos 跡遺に於ける如く――之は當時は既に種々の民族要素が混在し多様の混交が行はれたことを示すものである。ペトリ Flinders Petrie は最古の住民としてブッシマン人種を採用し紀元七世紀のアラビヤ人侵入までその人種的発展があつたとしてゐる。エテキング Aetheking は早期にリビヤ人体型がありネグロと混血を起し後にシリヤ要素が来たとしてゐる。彼は次の如く成表してゐる。

紀元前八〇〇〇〇年

〃 八〇〇〇〇―七〇〇〇〇年　下品なリビヤ体型(A)+上品なリビヤ体型(B)

〃 七〇〇〇〇―五五〇〇〇年　混和+尖つた鼻の民族

〃 五五〇〇〇―五〇〇〇〇年　継續　増加

〃 五〇〇〇〇―四〇〇〇〇年　小数なスダン混合

〃 四〇〇〇〇―三五〇〇〇年　下品なリビヤ体型(A)+混和+上品なシリヤ体型

〃 三五〇〇〇―二五〇〇〇年　混和

〃 二五〇〇〇―一六〇〇〇年　+三角洲にゐるヒクソス　混和

〃 一六〇〇〇―一四〇〇〇年　+上エジプトにゐるベルベル

〃 三〇〇〇―〇　下品なリビヤ体型(A)+混和

紀元後〇―四〇〇〇年　増加

〃 七〇〇年　+アラビヤ人

〃 九〇〇年　+リビヤ人　継續

北部アフリカ沿岸地方の現住民は(一)ベルベル部族――最多数を占め定住農民として山嶽高地に居住してゐる――(二)アラブ種族――一部はマホメット征服者及び十二、十三世紀移民の後裔であり一部はアラブ化されたベルベルであつて半遊牧民であり各地に散在してゐるが主にカト

ラス山南側、サハラ沙地に住人である──の二部に分たれる。ベルベル部族は全地域で優勢な民族であって身長は中位、膚、毛髪色、眼色は浅黒色であるが一〇──一二%のブロンド色が現はれてゐる。基本体型は著しき長頭、狭鼻型である。ドニケ Deniker は両者を合してアラボ・ベルベル又はヤミト・ハム群と呼んでゐる。

ソマリーランド、アビシニヤ及びナイル河の東部、アトバラ河の北部に存する地域の所謂アフリカ住民はハム民族として分類されてゐる。此の全地域住民は二群に分たれる(一)はベニアメール、ソマリ、ガラ、ショア、ゴージャムのアビシニヤ人、以前ルドルフ湖北部に居住してゐたマサイ、スジエンプを含む東部及び南部群であって主に長頭、狭鼻型を示し、(二)はティグレ及びナンナ湖のアビシニア人を含む北部群であつて主に長頭廣鼻型である。これらの所謂北東アフリカのハム民族はドニケのエチオピヤ人又はクシト・ハム群に相應する。

人類學的に考察されるアフリカの地理は其のアフリカ圏としてエジプト及び沙漠北縁の地域を除外した他の全地域を包含してゐるのである。

一般にアフリカに於ける人種構成は單純なものと思惟されてゐるのであって過去に於てアフリカにはネグロが住居してゐると云ふ素朴的な解釈で満足してゐたのである。近代に於て種族・言語，体型及び其の相互関係の錯雑した多数の問題に當面したのであるが最近の研究──人類學的・言語学的・人種学的──は單一な共通した大特徴を発見したのである。然し個々の問題に至っては未だ充分に解決されてゐない。それでアフリカ圏に於ては基本的な二個の人種層位を認めることが出来る。明かに古きものに属するのは矮小(ピグミー)族であり，他の一つはネグロである。

全アフリカに渡って──地中海沿岸から歐洲にまで──太古住民が分布してゐたことは明確であって此住民は異様な小形発育と他の数個の徴表によって單一性を形成してゐるものなのである。然し其の内部で級等は集群的な差違を示してゐるので更に亜種・地方的変種に細分し得るのであるが、總てのこれ等の二次的差違は異種血統の輸入・接觸と觀念す

ることが出来るのである。現在民の此の原始層は北方ネグロ（身長高く黒色）中央のネグリロ（褐色皮膚の矮小族）南方のブツシマン（身長低く黄色・異常脂肪蓄積性大声）が属してゐる。此の層位の上にクロマニヨン人種の殘存系統と考へられる亜細亜起原のハム要素が加はり更に後に南方セム要素が加つたのである。

アフリカはスエズ地峡を除く外、海洋に圍繞されてゐるけれ共、海岸線短く海岸より二〇哩以上の内陸が全面積の約八割を占めてゐる。かゝる塊状的大陸は外部との交通の便を缺く結果暗黒大陸の名を與へられるに至つた。

アフリカに出入する門戸としては、先づ次の三ケ所が主なるものである。（一）シナイ半島に接續してゐるスエズ地峡、（二）バブニルマンデブの海峡と紅海を横切り對岸アラビヤへの交通路（三）遙か歐洲のジブラルタルに對するセウタ・スパルテル岬間のジブラルタル海峡がそれである。前者はエジプトからの遠征を除いて侵入のみの地域であつたが第三者は

エジプトからの主要な出口の一つであつた。実際に逆な方向への進行は五世紀のヴアンダル族・アラン族の侵入及び約十世紀末の所謂ムーア人の歸還のみである。又地中海を横切り或は同じ沿岸に沿つた進行もあつたがこれは只地方的影響を持つのみでアフリカの大部分に重大な影響を與へなかつたのである。

アフリカの大部分には既に舊石器時代に人類が居住してゐたことは疑ひないのであつて石器の遺物が南・北・ウガンダを含む北東アフリカに見出されてゐる。これは非常な古代のものであると推定し得るが然し現今に於ては未だ西部歐洲のものと同時発生的起源を有するとする積極的證示がない。中期旧石器（ムステ・リアン）型の遺物は北アフリカ・エジプト・ウガウダに発見され又南アフリカからも報告されてゐる。北アフリカの前期旧石器時代の石器製作は今日カプシャン（ゲトゥリアン等）と呼ばれてゐる。下カプシャンが西部歐洲へ移殖された時それは特種な性質を帯びオーリナシャンと呼ばれる。上カプシャン文化は発達して

タルドノアシャン文化となり廣く歐洲、東南アフリカ等まで擴がつたのであつた。南アフリカの後期旧石器型の多数の遺物はカプシャンと云ふ語が北アフリカで用ひられてゐるものと同じ一般文化に属してゐる。佛蘭西のオーリナシャン及びマダレニヤンの畫石彩色彫刻とブッシマンのものとは一般的技工的類似があることは彼等の間に深き相関々係のありしことを推測せしめるものであるが彼等の各個の石器（殊に近代のブッシユマンのもの）とは更に仔細に比較するとかなりの相違があるのである。歐洲の後期旧石器時代の小像には華奢な体型肥つた体型及びブッシマンとの比較される確かな異常脂肪蓄積体型を示してゐるものがある。此の存在の意義は北アメリカ又は歐洲にブッシマン種族が存在したことを示す骨學的證示がないので断言し得ない。

而も層位學的證示が缺けてゐるのでジブラルタル頭蓋、エジプト旧石器人、ボスコップ及びトランスヴアール・ロデシヤで発見されたブロークンヒル頭蓋の確実な年代を決定することも亦不可能である。

上述した如く前史時代のアフリカに就てはエジプトのピラミッド、オベリスク、スフインクス等の巨石建築のみならず更に旧い石器が発見され、ペトリ Petrie アメリノ Amelineau クイベル Quibell ルグレーン Legrain シュヴァインフールト Schweinfurth シャントル Chantre ド・モルガン de Morgan 等の研究に依つてそれは歐洲のものと類似型であることが明確にされて来たのである。旧石器・新石器類型の粗製石斧石刀がケープ・コロニー（グーチ Gooch ）に燧石矢鏃、シェレアン類型の遺物がコンゴー自由國のソマリー族居住地（サンダーソン Sanderson ）モンブドウ族居住地（エミン・パシヤ Emin Pasha ）に発見されてゐる。殊にチュニスの旧石器遺物（ガフザ・ガーベス湾西岸）はコリニヨン Collignon に依れば全く歐洲のものと同一である。前期旧石器時代の終期か後期旧石器時代の初期に歐洲の地中海岸なるイベリヤ半島にネグロ体型の人種の存在してゐたことは其の遺物から知ることを得る此のネグロ体型のグリマルディ人は理論的にアフリカ起源のものと

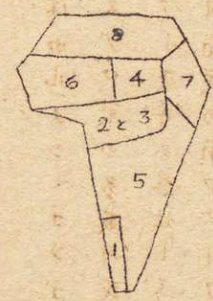
推定されてゐる。
埃及學の學者は紀元前四〇〇〇年までエジプトは新石器時代であつたが此の時代に中央アジアに銅の發見がありこれがエジプトに輸入され更に錫を加へて青銅を作る技術を發見し裝飾品・武器を作るやうになつたのであると云つてゐる。石器は三角洲とエドフ間の數百を數へる遺跡に發見されてゐるのである。小石の多い沖積層の表面に種々の異つた形態のものが累積し、シエレアン、マダレニヤンを含む其の層位には動物の骨を伴なつてゐる。之等の遺物は相互に孤立し離れてゐるので全大陸に單一の原始工業が存在してゐると推測されるのであるが、逆にアフリカの最も未開な現住民に石器及び石器に關する傳說迷信のないところから石器時代は單に偶發的な地方的文化にのみ存したとも考へられるのである。更にエジプト・地中海沿岸を除くと銅器がないのでアフリカの大多數の民族は骨器・木器時代から直ちに鐵器時代に移つたものらしいのである。而もコンゴー、ソリリー、アルゼリア、チユニス等の現住民から

石斧、石刀、石鐵斧が發見されてゐても現住アフリカ人は一般に——假令多少石器を使用するとしても——石器時代にはあるのではなくして鐵器時代にあるのであつて「鍛冶屋」階級が存在してゐる程である。從つて或る考古學者は鐵工業はアフリカから歐洲に輸入されたと云つてゐる。
アフリカは地勢上北アビシニヤから紅海の沿岸地方ソマリを含む南ザンベジ河畔に至る所謂東部山脈に沿ひ、南緯十五度に及ぶ地域は蜿蜒として三千——千呎の高原をなしてゐる。其の北部は主に草原と廣大な森林地であるが其の北西部、南部には大沙漠がある。
モロッコの大西洋岸に起り東方チユニスの海岸に至るアトラス山脈は狹き山嶽帶をなしてゐる。此の北部山嶽帶と大東部高地と南高地間に東から西へ掛けて走つてゐる人種學的丘帶地へ細分すれば八地帶）がある。
（一）は大西洋から紅海に及ぶ北部沙漠地帶であつてサハラ・リビヤ・エジプトの諸沙漠を含み、セネガール河からティベスティ丘、キリマンジヤロ山に及ぶ凹狀北方地域である。所々にオーシス所謂沙漠の船が散

在してゐるのであつて主にセム系のアラブ族、アビシニヤ族、ハム族のゴーニシエ族、フールベ族、ガラ族、ソマール族、ワフマ族、マサイ族を含む。此の地域の住民は主に歐洲、前方亜細亜・地中海圏に屬してゐる。

（二）は沙漠の南側草地帯であつてセネガル河口から英領スダン・佛領スダンから上流するナイル河に及ぶ主にテイブ族等の――例へばハマイトとネグロ・――混血族が居住してゐる。

（三）はギネア灣の北側にある熱帯森林地帯であつてスダン及びコンゴー地方を含む。此の地域は主に上部セネガル・フルベ族の如きスダン・ネグロ系が居住してゐる。

アフリカに於ける人種圖（モンタンドン）

（四）はカルメン・コンゴー河流域以南ナタールに及ぶ地域であつてバントウネグロ系の多數の民族例へばルンダ族、ベチュアナ族、ヅール族カツフアー族等が居住してゐる。

（五）前獨領西南アフリカのカラハリ沙漠の延長地・ダマラ高地地方にはブッシマン族とホツテントット族が居住してゐる。

此の外ナイル、コンゴー河間流域（アビシニア・コンゴー・カメルンカ一部）には矮小（ピグミー）族が住人であるのである。

人種又は亜人種	中心地	典型民族	皮膚色	身長	頭形指數	鼻形指數	特性
1、ステアトピグ人種	カラハリ	ブッシマン	ドス黒い帶黄色	一四五	七六	一〇〇	非常に粗大
2、ピグミー人種	大森林	イトウリ住民	中等の褐色	一四〇	七九	一〇五	部分的に顕著
3、パレエテオピヤ・ネグロ亜種	〃	多數部族の要素	暗褐色	一六〇	七八	一〇〇	非常に粗大
4、ネグロ・言語亜種（シャリ群／ナイロティク群）	シャリ／上流ナイル	サラ／ディンガ	〃／暗色	～一七八	八一／七二	～九五	粗大

5. 南アフリカネグロ亜種	サンベシ	カッファ	黒褐色	一七〇	七五	九〇	半ば粗大
6. スダン・ネグロ亜種　セネガル群	セネガル	ウォロフ	暗色	一七三	七四	非常に可変的	非常に可変的
ニジエール群	ニジエル上流	マンディング	暗褐色	一七〇近			
チャド群	チャド	ハウザ	民褐色				
7. パンエテオピヤ人種	エチオピヤ高原	アムハラ	中等の褐色	一六八	七六	七五	大部分平滑
8. 褐色人種のベルベル・アラブ亜種	アトラス	ベルベル	黄褐色	一六七	七四	七〇	草

第二節　アフリカの諸問題

其の大いさアジアに次ぎ、世界総面積の二〇%を占めるアフリカ大陸の面積は約三千九百万方粁、それに比して海岸線の長さ三万五百粁。自然の良港に恵まれぬ事を示してゐる。

此の大陸の総人口一億五千百六十六万、世界総人口の七・五%を有つに過ぎず、人口密度一平方粁わづかに五人、世界平均密度一五・三人に比して、略其の開発の程度を窺ふに足ると云へよう。

既に古く五千年前その絢爛たる文化を誇つたエジプトを有つ北アフリカは紅海と印度洋とに依つて欧亜と接し、地中海に沿う事に依つて常にそれはヨーロッパと歩を同じうする事を得たが、サハラより南、熱帯アフリカは今に至る迄忘れられた土地として、暗黒大陸の名を擅にしてゐるのである。

此の暗黒アフリカに最初に渡来し来つたものは回教徒としてのアラビヤの商人達であつた。中世に至つて北西アフリカの奥地にあると信ぜられた黒人黄金郷を目指して、アラビヤ人達は其の回教を伴ひつゝ北阿から中部・西部スーダン迄伸展して行つたのである。此の沙漠を越えての熱帯貿易を独占したアラビア人達は、八世紀以来その東アフリカの海岸を南下して遠くコリエンテス岬に迄到達し、其の間専ら植民と都市国家の建設に意を注いだのである。此のアラビア人の活動が十九世紀末迄の

毘境スーダンの隆盛を導いてゐたと言はれなければならない。
ヨーロッパ人のアフリカ大陸への進出は十五世紀に至つて行はれた。それは専ら奴隷の想像を絶した香料への憧憬の結果に外ならない。此の香料の産地とそのルートが右のアラビア人の手に委ねられてゐた所から西欧人達は此の香料の直接の産地への探究を深めつゝあつたのであるが、當時勃興したオスマン・トルコに依つて其の陸路さ断念しなければならなかつたのである。其の結果遂に此の香料獲得を目指して海路アフリカを迂回する事に依つて産地インドへ到達せんと企図される事となつたのである。
最初にアフリカ大陸に渡つたヨーロッパ人はポルトガル人である。ポルトガル王朝バーガンディ家の王ヘンリーの派遣した船は一四三四年大陸北西のボジャドール岬を抜けた。継いでジョン二世の援兵の下に一四八七年バーソロミュー・ディアズはアフリカ南端に到達し、その迂回可能なるを証した。此のディアズがその南端を稱呼して「暴風カ岬(トルメントソ)」と

せるを、ジヨン二世は之を「希望ガ岬(カボ・ダ・ボア・エスペランサ)」と改稱した。一四九八年ポルトガル人ヴアスコ・ダ・ガマは二の希望峰を迂回して東アフリカのモンバサを経、印度のカリカツトに到着したのである。此のアフリカ大陸発展以来ポルトガル船はその沿岸を基地としつゝ印度との貿易を續け、漸次アフリカは白人の手に依つて開発されて行つたのである。斯くて近東の諸民族の手に握られてゐたアフリカは此の時以来、スペイン、フランスオランダ、イギリスの手に移されて行つたのである。
ヴアスコ・ダ・ガマの発見以来相續く探検家と、金、象牙、別して奴隷貿易に依つて此の大陸の各海岸地方は開発されて行つたが、一七八八年アフリカ協會の創立と共にその奥地探検の手も伸ばされたのではあつたが、然し絶へ、近アフリカ大陸そのものは依然東方への一つの基地としての存在でしかあり得なかつたのである。
然しながら此處に一八六九年スエズ運河は開通された。この画期的な欧亜の最短ルートの開通と、更に之に加ふるに産業革命の進展にその鋭

鉾はこの熱帯地アフリカに向つたのである。今猶熱帯アフリカに於いて白人移住の適移性への止む事なき科学的探究と調査とが行はれてゐる如く、之以来白人移住可能地域は限定されて居つたが故に、このヨーロッパ人の間に於ける植民地分割を争奪の歴史は激烈を極めざるを得なかつたのである。

ダイヤモンドとして著名なる南阿に於けるポルトガル人の後継者としてのオランダ人とイギリス人とのかの南阿戦争は右の意味に於ける典型的な一例に過ぎない。此の南アフリカの外に、イギリスは北アフリカにエジプト・スーダン・東アフリカにウガンダ、ケニアを獲得し、カイロよりケープタウンに至るその所謂アフリカ縦断計画を樹立し、更に之に附加して西アフリカにナイジェリヤを得た。フランスは北アフリカにアルゼリア・チュニスを其の保護國とし、マダガスカルを植民地とし、又セネガルを得て英の縦断計画に對抗した。ドイツは英佛両國に遅れてはゐたが、東海岸にタンガニカ、西海岸にトゴランド、カメルンを獲得し、独領西南アフリカを得、其の植民地経営は他の諸列強を抜いて別して卓越したものであつた。右の外はイタリア、ポルトガル、スペインも加はり、この暗黒大陸としてのアフリカは既に全く其の姿を換へてヨーロッパ諸國の夫々の植民地より成る分割された。ヨーロッパ列強の和戦興亡の或時は鍵として或時は影として存在する事になつたのである。

此の激烈を極めた列強のアフリカ分割の歴史も十九世紀末葉に至つて一應の完成を見たのではあるが、それに直ちに引續くこの酷暑と悪疫の大陸への開拓の闘争が始まらねばならなかつた。彼等は凡て其の原住の蛮族と戦ひつゝ、開拓を續け、以て其の撲滅を企図しなければならなかつたのである。元来アフリカ原住民は北部に於けるハム族を除いては道路を作る事を知らない。従つて現今に於いてさへ内部奥地に於いては河川とジャングルに妨げられながら労賃の安い黒人運搬夫に依る原始的運輸が行はれてゐる。然しイギリス人がパーム進出のために西アフリカラゴ

スより海岸への運輸に始めて自動車を用ひた事に端を発して、其の運搬費の低廉なるに倍加されて、現今アフリカに於ける自動車道路はとくに発達してゐる。舟運の便少き河川しか與へられてゐないこのアフリカ大陸に於いてはこの自動車道路の発展は特に重要であつて、アフリカが近代的経済状態の端緒に辿り着き得た事実はこの自動車道路の進展に負ふ所極めて多いと云はれなければならぬ。

之に附加されて航空便も前大戦後著しく発展し、東、南部アフリカに英、中部にベルギー、西部は佛、米が夫々定期空路を持つ現在に至つてゐる。

右の如く欧洲各列強に依つて絶えざる相剋と争闘の下に分割され開発されて行つたアフリカに單に形式的にのみ独立を維持してゐたエジプトエチオピア、リベリヤの三國があつたが、エチオピアは一九三六年イタリーに併合され、エジプトは前大戦當時トルコより逃れてイギリスの保護國となり、名目のみの自治権が許容されてゐるに過ぎない状態である。

そしてわづかに残されたリビリヤに於いてさへ、それは唯一のアフリカ原住民のための共和國ではあるが、他の國の保有する殆んど全部の経済的資源はアメリカの掌中に握られてゐる現状である。

斯くの如く欧洲列強争奪の的となつたアフリカ大陸の有つ資源は、然しながら全く未だその科學的調査の域を出でない現状にあると云はなければならない。アフリカに於いて金剛石、金、銅、クローム、石綿等を産出してゐるのは現今南阿聯邦とベルギー領コンゴ、及び南北ローデシヤであるが、未だ如何なる土地に如何なる鑛産資源が埋藏されてゐるかは殆んどその緒についたとのみ云はるべきであらう。石油はアフリカに於いては極めて少量しか産出されず、エジプト、東阿、南阿にその形跡を見るのではあるが未だ全く試掘の域を脱してゐない。又アフリカに於ける農産物についても東阿に於いては砂糖黍がその主なるもので、奥地に於いてはサイサル麻、棉花、ゴム、コーヒー、茶、コヽアなど、西阿に於いてコヽア、油パーム、バナヽ、コーヒーとそれは次々にその主要

栽培物を廃へて行ったのである。そして東阿に於いては耕地面積も多くサイサル麻、棉花などを白人が主として之の武営に当ってゐるが、西阿に於いては植物油、嗜好品を未だに黒人がこの森林地帯の中で耕作してゐる現状であって、結局アフリカに於いては農業さへ未だその試験的な時期を経つゝあると云はれなければならぬ。そして此の試作期を出でない農産資源が前述の鑛産資源よりも少くともその地歩を固めたと言はるべきこのアフリカの現状は、換言すれば現今漸くにしてその開発の端緒に入り得たと云はれるに過ぎないものである事を示してゐる。換言すれば右の問題は僅々二十年の間に夫々の植民地として分割し終ったヨーロッパ各國がアフリカに於いて何を為し得たかの問題を示してゐる事を意味する。即ちそれはアフリカに於いてその土着の黒人がその種族の生存のために直接に必要とする食糧のみを生産してゐた農業を、その白人の嗜好する物資たるコ、ア、コーヒー、砂糖、綿花の栽培へと転換せしめ、黒人をして賃銀を支拂って耕作せしめる事を意味したのである。白人にとってはその氣候と風土病に於いてアフリカへの移住と其處に於ける労働とは断念せしめられねばならなかった。従ってアフリカ資源の開発はその調査、探究、輸送に於いては勿論先進國民の力に負はねばならぬものではあるが、然しその労働力の供給は之を原住の黒人に俟たねばならない現状にある。然しアフリカに於ける黒人の人口密度は極めて稀薄であって、その一平方粁五人を以ては、如何にしてもその資源開発は遠い昔と考へねばならない。そしてマラリア、ペスト、チブス、結核、黄熱病、嗜眠病の如き風土病と、その非衛生からの高率の幼児死亡率と醫師の不在とはアフリカの人口の増殖を阻む越し難き障害となつてゐる。之に加ふるにアフリカの地味の不足とそれへの施肥の重要さの認識されてゐない今日、更に洪水により颱風に依り　アフリカの土地は日に〳〵その浸蝕の被害を受けつゝある現状である。此の現状に直面してアフリカ開発のために白人の永住的移住が唱へられてゐる。現今に於いてはその氣候良好なる南阿に於いて白人はその移住に成功してゐると

云はれ得る。アルゼリアと南阿聯邦では次の如き数字を示してゐる。

	白人	原住民	白人一人に対する原住民の割合
アルゼリヤ	九九万人	六二五万人	六・三人（一九三六年）
南阿聯邦	二一二〃	七〇〇〃	三・三人（一九三九年）

然しながら依然として中阿に於いてはその熱帯気候と風土病のため白人の移住は不可能と云はるべく、其の気候的障害の無くなる高地に於いても猶その原住民の駆逐と、海岸からの交通に想到した時依然たる困難を示してゐる。然し例へば南ローデシア、ケニアの如きは将来に於いてかなり廣大な白人居住地域を有つと云はれてゐる。ローゼルベルグは「一口に黒人と呼ばれてゐる諸種族の間にも、道徳的品質に於て、非常なる差異が認められるのである。併乍ら、次の二箇條はあくまで眞理として承認されなければならぬ。すなはち、眞の黒人文化なるものは絶対に存在しないこと、黒人と白人との混血は、断然排斥されねばならぬことこれである。アフリカが國家性を持つてゐないと云ふことは、すなはち世

界政策上、白人がこゝに植民地を設ける権利を有してゐるといふことを意味する」と述べてゐるが、此の言に依る迄もなくアフリカ開発のためには文明國の指導に俟たねばならぬは勿論である。にも拘らずアフリカの人種問題は関聯して東阿の貿易業の一切を擔ふインド人の存在がある事を忘れてはならない。アフリカ在住のインド人總数はわづか三十万に過ぎぬのではあるが、彼等は大部分商業に従事して奥地深く入り込み黒人を相手に着実にその陣地を築きつゝある。然し此の生活程度低きインド人は白人の絶えざる桎梏の下に置かれてゐる現状である。アフリカをして開発し、以て白人の土地たらしめんとする時、彼等は何よりも先づ其の土着の原住民と此のインド人とに挺しなければならないのである。

大東亜共榮圏確立のために南方諸地域が存在する如く、戦後ヨーロッパ新秩序建設のためにはアフリカの資源が要請される。欧亜両共榮圏の相互の問題よりも更に、何よりも先づその各々の共榮圏の内部に於ける、換言すれば、ヨーロッパとそのアフリカに対して、それは飽迄もアフリ

カ自身の開発を目標として貫かれた全面的な計画が打樹てられねばならない。徒らに争奪と分割の宿命を負はされたアフリカが現今迄イギリスの事実上掌握下に置かれ、ためにドイツ、イタリー、フランス、ポルトガル等との盡くるなき相剋に依ってアフリカの開発は徒らに日を曠うしてゐた現状に置かれてゐた。交通機関の整備、風土病の根絶、土地改良労働力供給の問題等、アフリカは数多の問題を蔵してその全面的な統一的開発の計劃整備を待ち構へてゐると云はるべきであらう。

本章の叙述は主として左の二書に負ふ

○ Lord Hailey: An African Survey; A Study of Problems Arising in Africa South of the Sahara, 1938.

○ 大熊 眞、「アフリカとその問題」

附節

資料「アフリカの輸送ルート」

○元来アフリカ大陸には大河の貫通するなく、又巨大な人口集團もなく交通量の増加を予想せられる事も無かった故に、アフリカの交通機関はその発達を極度に妨げられた。今後のアフリカ大陸の開発、資源の運搬は當然、鉄道、自動車路、航空路の発達を前提とする。昨年十二月のXX th Century誌上に於ける「アフリカの輸送ルート」は直接には目下全世界の視聴を集めて其の帰趨を注目されつゝある北阿戦線の今後の動向への一つの興味ある資料として提供されたものであるが、之は又先に述べた意味に於いても極めて示唆に富んだものと考へられる。以下が其の抄譯である。

白阿と黒阿

反縦軸側が長い、危険なアフリカ南端の迂回をせずに、大西洋から地

中海に達する陸路には次の三つのものがある。
（一）フランス領北アフリカ、即ちフランス領モロッコ、アルジェリヤ、チュニジヤを通るもの
（二）フランス領西アフリカを通るもの。このルートはセネガル及びサワラ沙漠の南西を流れるナイジヤー両河を利用する。
（三）アフリカの「腰部」を横ぎるもの。このルートはギニー湾からナイルに至るものである。以下本論ではまづ前二者を問題とする。これらは相互に密接な関係のあるものであり、現在時局の脚光を浴びてゐるものだからである。

フランス領アフリカはサワラ沙漠の擴がりによつて二つに分れてゐるこれら両者の間には近年まで陸路による連絡はなかつたから、同じフランス領でありながら、この二つは全く別々の單位を形成してゐた。中世アラビヤの地理學者達はこれら二つの地方をそれぞれ「黒人の國」および「白人の國」と呼んでゐた。

北のモロッコからチュニジヤに至る間が即ち「白阿」である。この「白阿」はたしかに地理學上の一單位を形成してゐる。即ち、北アフリカの海岸とアトラス山脈とサワラ沙漠の北辺とに區切された比較的狹い帶のやうな地域である。しかし、この地域はフランスとスペインとを合せたよりも廣い面積を持ち、人口密度はアルジエリヤ、チュニジヤ、スペイン領モロッコでは一平方キロにつき三十八人の割であり、フランス領モロッコでは一平方キロにつき十五人の割である。この地方はヨーロッパを距ること、ジブラルタル海峡では僅かに八マイルであり、シシリーとチュニジヤとの間でも八十六マイルにすぎない。またこの地方はトリポリ（リビヤ）によつて近東へとつらなつてゐるが、このルートは古代には侵入および遊歴のルートとして非常に利用されたものである。

さらに、サワラ沙漠を越えた南側には熱帶に屬する「黒阿」がある。この地方が「白阿」と異る主な点の一つは自然の交通路にある。即ち「黒阿」ではセネガル及びナイジヤーの両流域がヨーロッパ侵入の主要ル

ートであつたのに「白河」では河は存在しないが、存在しても航行不能である。したがつて、これら両地方の内部の発達状態はこの自然の根本的差異によつて大いに影響を受けてゐる。

モロッコの鉄道

八月の灼熱する太陽の下でも万年雪の消えない、アトラス山脈の麓なるモロッコの棕櫚の林マラケシから鉄道の建設が徐々に續けられ、遂にチュニジヤの港スファックスに達した。

モロッコには一九二一年の末に狭軌（六十センチメートル）の鉄道千五百キロがあつた。これは或る程度の役には立つたが、ともかく一時的のものであつた。

それで普通の軌道の鉄道網がこれに代つて次第に発達し、一九二五年にはカサブランカからラバトを経てフエズに至る線が完成した。この線はさらに一九二七年に完成を見たフエズからタンジールに至る線に接續した。續いて一九二八年にはカサブランカ――マラケン線が建設され、一九三四年には遂にフエズから國境のウジヤに至る線の開通を見、こゝにモロッコの鉄道と連絡することになつた。なほウジヤからモロッコの内部を南に走つてボウ・カルフアに至る線もある。

アルジェリヤ、チュニジヤ

アルジェリヤでは二つの鉄道建設計画が相次いで遂行され、いづれも成功した。第一のものは一八五七年に計画されて、一八九〇年に完成した。即ち、それはオラン、アルジエー両港をつなぎ、さらに海岸に沿つて東へ延びた。第二の計画は一九〇七年に立てられたものであるが、これが完成したのは廿年後である。この計画によつて、海岸から南方へ走る数線を含むアルジェリヤの鉄道網とこれをモロッコおよびチュニジヤとつなぐ線が出来た。

チュニジヤにはフランスの保護領になる以前からチュニスの近くに短い路線があつた。これはイタリヤの會社が建設したもので、チュニストボーヌとをつなぐものである。一九二二年までに多くの新設路線がこれ

に加はり、チユニジヤ内部と同様、チユニジヤ海岸に沿つても鉄道網が完成した。

　このやうにして、北アメリカを統一する横断鉄道は徐々に建設され、将来のアフリカ大陸横断鉄道の礎石は置かれた。「白阿」は豊富な石炭の埋蔵量と水力資源とを持つてゐるので、これが鉄道組織の大部分を電加することができた。

　道路と港湾

　殆んどすべてこの鉄道網に平行して近代的なアスファルトの道路が走り、その上をスピードの速い自動車が走れるやうになつてゐる。特にモロッコでは、この道路建設当時農業をやつてゐなかつたために、四千キロの主要路と二千五百キロの側道を完全に、真直ぐで、十分に廣くすることができた。アルジエリヤには五千キロの立派な主要路と二万五千キロの良い側道がある。チユニジヤには五千キロの主要路がある。これらの道路と鉄道とはフランス勢力の浸潤に並行して発展した。

　「白阿」には多くの良港がある。モロッコの諸港湾は、フランスの保護領になる前から開かれてゐたものも、その後に開港されたものも、長いこと汽船が沖に碇泊しなければならないやうな港であつた。貨物及び乗船客は、やむを得ず艀船で積卸しされた。カサブランカが深い碇泊所を持つた、大きな、近代的良港になつたのは、一マイル半に及ぶ岸壁の建設、燐鉱石の積荷をするための最近の設備から石炭置物、穀物引揚機電気起重機に至るいろ〳〵な設備をして、偉大な改良が行はれてからである。一九三九年、カサブランカの取扱つた貨物はモロッコの貿易数量三百九十万トンの大部分に及び、サフイ、アガディル等その他の港の分は合計しても五、六十万トンにすぎなかつた。

　アルジエリヤには、アルジエー、オラン、ボース、フイリペヴィン、ボージ等近代的設備を持つた良港があり、その他の群小港の分も合せて年々一千万トンの輸出入品を取扱つてゐる。しかし、そのうちアルジエーとオランニ港のみで五リ％を占めてゐる。

チュニジヤにはビゼルタ、チュニス、ソーセ、スファックスといふ四つの良港がある。これらのうちスファックスは燐鉱石を積出すためにチュニジヤの全貿易数量三百八十万トンの半ば以上を取扱つてゐる。

北阿米英軍の補給路

さて、われ〱が新聞報道によつて北アフリカの戦局を判断しようとすると、報道があまりにもまち〱であつて、北アフリカにおける反枢軸国軍が今後どのやうに出るかを的確に判断することは困難である。しかし、次の点だけは確實であらう。即ち、北アフリカの戦局がいかに米英軍に有利に展開したとしても、つまり米英軍が北アフリカ全土を占領し得たとしても、地中海における枢軸の勢力に對抗して、彼らの北アフリカの派遣軍に十分な補給を確保することは困難であらう。そして、このことは最近ウインストン・チャーチル及び米國海軍長官ノックスによつても公然と確認せられた。

以上のやうな理由から、フランス領北アフリカにある米英軍が南から

即ちセネガル及びナイジャー両地方から陸路によつて補給を受けるかどうかといふ問題が非常な重要性を持つてくる。そのルートと云へばもちろんサワラ沙漠を越えてくるものである。

サワラ沙漠は世界中で最も大きな交通障害物といつてもよいであらう。かつて隊商や遊牧民や盗賊の群が通つたこのサワラ沙漠も今日ではその面目を一新してゐる。

サワラ沙漠を通る隊商の支柱は実に奴隷だつたのである。したがつて奴隷制度の廃止によつて隊商による交易も一挙に崩壊した。そしてヨーロッパ勢力の浸潤は沙漠の全運輸組織を根本的に変革した。かつて唯一の運輸機関であつた駱駝は姿を消し、古い隊商路は次第に或は変更され、或は放棄された。自動車による最初のサワラ沙漠横断は一九二三年ツーグールからティンブクトゥーへ、コロンブ、ベカールからナイジャーへとアドラル・オアセン及びテッサリトによつて行はれた。

今日ではサワラ沙漠の中心を通つて二本の定期的自動車路がアルジェー

こナイジヤー河中流のガオ、アルジエーとナイジエリアのカノとの間に開通してゐる。自動車のお蔭で、今日ではナイジヤー河とアルジエーとの行程は僅かに六日間である。これらのルートは途中数千キロといふものの全く無人の生き沙漠である。したがつて、水及びガソリンを遠くから運んで、「ビドン」と呼ばれる途中のステーシヨンに貯蔵してある。

沙漠横断の困難

これらのルートの他に、カサブランカからガデイル、サワラ沙漠の西部を通りオ・デオロを迂回し、セネガル河口のサン・ルイを通つてダカールに至る三千五百キロの自動車路がある。昔、この距離は駱駝の隊商が三ケ月を費して歩いたところであるが、今日では自動車が十日以内で走破する。この路は、カサブランカから南五百キロは坦々とした自動車道路であるが、残り三千キロは沙漠の路である。以上三ルートとも舗装した道路ではなくて長い砂の悪路で、前の車の残した轍以外路を示すものはない。したがつて、時としてとくに砂嵐の後でよくトラックが行方不明になる。これを防止するために、ルートに沿つて幾つもの監視所を置いて厳重な監視制度を設けてある。そして一つの監視所から自動車が出発するたびに、その監視所から次ぎの監視所へそのことが打電され、次ぎの監視所へ自動車が到着すると、その監視所ではそのことを前の監視所を通達する。もしも自動車の到着が遅れゝば、捜索隊が派遣され、それでも発見されない場合にはさらに飛行機が出動する。

以上述べたやうに、現在「白阿」から「黒阿」へとサワラ沙漠を通ずる自動車路が開けてゐるからといつて「白阿」と「黒阿」との交通は陸路によつてゐる訳ではない。それはむしろ主として海路によつてゐる。最近のヴイシーからの報道によれば、毎日約五十トンの貨物が沙漠の双方から以上のルートによつて運ばれてゐたといふ。しかし、これではフランス領北アフリカ両地方間の交易のほんの一部分にすぎない。これ以上を運ぶことは非常に困難で、そのことは例へば海上ルートを封鎖されてから、ダカールに事実上フランスから切り離されたに等しくなつたこ

とによつても分る。とにかく、サワラによる輸送路は以上述べたやうに僅かのものを運ぶのにも非常な困難を嘗めるのであるから、まして数千のトラックや軍隊を運ぶとなつたらなほさら大変だ。

なほ、サワラ沙漠を飛んで「白阿」から「黒阿」に至る航空路もあつた。これはアルジェーから第五號のビドン、ガオ、セグー、バマコ、カイェーを経てダカールに至る。ダカールはまた海岸に沿つてサン・ルイ、アガディル、カサブランカ、ラバト、フェズ及びウジヤを経由してゐる空路によつてアルジェーと結ばれてゐる。

サワラ鉄道計畫

一八六〇年、ハノトーは次のやうな予言をした。「いつの日かアルジェーとティンブクトゥとをつなぐ汽車が六日間で熱帯とパリとを結びつけるであらう」と。一八七五年から一九二八年まで、サワラ横断鉄道の計画は、熱心に唱へられる時期と全く冷かに忘れられる時期とを交互に経験した。一九二八年、北アフリカとフランス領アフリカとを結ぶサワラ横断鉄道研究機關が法律によつて創立された。その同じ法律に基いて諮問委員會が設立され地方團体及び商業會議所の要請があり、國防最高會議の要求があつたにも拘らず、何も実行に移されはしなかつた。一九三四年ヴィシーに開かれた急進社會党の大會は種々な議題のうちにサワラ横断鉄道計画を取上げ、これを放棄すべしと決議した。

しかし、一九四一年三月二十二日再びヴィシーでペタン元帥から一九三〇年に發案されたルートによつて直に鉄道建設に着手すべしとの布告が発せられた。このルートはその第一行程において現在ウジヤからコロンブ・ベカールに通じてゐる鉄道を利用するものである。それから先は幾つかのオアシスを経てアドラル及びレガンに至り、へサワラ沙漠の最乾地帯タネスルフトを通ずる七百キロ行程を経て、さらにイン・タシットに至る。この鉄道は全長三千五百三十五キロにわたるものであるが、一つのトンネルもなく、鉄橋と名づくべきものは唯一本にすぎない。このやうに極端に簡単なものだから、その建設は三、四年を出でずに完成

されるだらう。この鉄道はディゼル電氣機関車を用ひれば平均一時間に六十キロのスピードを出すことができるから、地中海からナイジャー河まで二日行程になるだらう，

マルセイユとアルジエーとを通じてヨーロッパとアフリカとをつないだ線を延せば、大体以上に計画された鉄道線路と一致する。この既設線及び新設線によつて、北阿はダカールを通じてアメリカと連り、ウガンダを通じてインド洋と連ることになる。

ダカール

西アフリカに於けるフランスの元来の計画は、セネガル及びナイジャー両河の航行可能部分を結びつけることによつて、自然の交通路を利用するといふことにあつた。しかし、セネガル河は八月十五日から十月十五日までに限つて僅かにカイエーまで、それも吃水十五フイート以内の船が航行できるにすぎない。だから、鉄道を建設した方が良策である。ダカールからサン・ルイに至る二百六十四キロの鉄道は一八八一年に開通した。それに續いては、セネガル河中流のカイエーからナイジャー河上流のバマコまで五百五十キロの鉄道が建設される予定で、一八八一年に着工したにも拘らず、一九〇四年に至つてやつと完了した。しかして一九二三年にダカールからカイエーに至る六百六十七キロの鉄道が開通した。さらに最近にはバマコーセグー線ができ、かくして一千五百キロの鉄道がナイジャー河中流とダカールとを二日間で連絡してゐる。

セネガル及びナイジャー河両河口の間にあるフランス領沿岸植民地の内部に進入つて行くルートは色々ある。セネガル地方のルートについては上述した。佛領ギニーからはコナクリー港からナイジャー河上流のクルサに至る六百六十二キロの鉄道がある。これは一九二四年に完成したものである。また象牙海岸ではアビジャンとボボ・ジユラツソーとを結ぶ鉄道が幹線をなしてゐる。この線から分れてセグーに至る一支線が出てゐるが、この線はセグーでサワラ横断鉄道及びセネガル鉄道に連結してある。他の一支線はナイジャー河に沿つたニアメイに至つてゐる。また

ダホメーでは比較的短い数本の鉄道が海岸から内部へと走つてゐる。
　フランス領西アフリカの道路は非常に短期間に発達した。即ち一九二三年には一万五千キロにすぎなかつたものが、一九二八年には五万キロにおよんだ。さらに、一九三九年にはこれが十万キロにおよび、鉄道と平行して、或は鉄道と鉄道との間をつないで走つてゐる。これら道路の一部分は一年中使用できるが、大部分は乾燥期だけしか使用できない。
　以上にのべた水路、鉄道、道路等すべてのルートによつて、西アフリカ奥地から年々四百万トンが港へと送り出される。この四百万トンのうち、ダカールだけで二百六十万トンを吸収してゐる。かつてはサン・ルイが西アフリカ第一の港であつたのだが今やその地位をダカールに奪はれた。ギニー湾に面するフランス領諸港はいづれも第二次的のものである。といふのは、船は沖で錨を下さなければならないので、天候の悪い時には荷役作業が困難だからである。次に主としてギニー湾からナイル河上流に至るルートを検討しよう。このルートの特色は、途中に鉄道の

便がないことである。しかし、皮肉にも、その原因は今日このルートを命の綱と頼んでゐる英國の政策に歸せられる。
　このルートの建設計画は米英聯合國側の要求が大きくなつた今日始めて生れたものではない。このルートの建設計画は、フランスがセシルローズのケープタウンからカイロへといふ北進ルートに對抗して、セネガル河からフランス領ソマリーランドへといふ東進ルートを企画した時に始まる。即ち、英國がカイロ、ケープタウン間の鉄道及道路建設計画を推し進めたのに對して、フランスはダカールからセネガルのヒンダーランドへ、フランス領ソマリーランドのジブチからエチオピヤの内部へと鉄道を建設して行つた。しかるに、この競争する二本のルートは、ナイル河の上流で、當時どの國の領土でもなかつたスダンで衝突することになつてゐた。したがつて、スダン争奪戦は英佛間に最高度の緊張をもたらした。世界は固唾を呑んだ。フランスはまづダカールからジブチへと植民地帝國を完成するか、或は英國がケープからカイロへとその帝國制

覇を行ふかと。
一八九六年にこの歴史的なスダン争奪戦が始まった。即ち、英のキッチナー元帥が英エジプト駐屯軍を引連れてナイル河を遡った。しかるに一方、フランス軍のマルシャン大佐がその軍隊とともに西アフリカから東進し、一八九八年九月、キッチナーがナイル河上流のファショダ（現在はコドクと呼ばれる）に到着した時には同市はすでにマルシャンの手に歸してゐた。そして、この両軍が對峙してゐる間にロンドンとパリとの間で外交交渉が行はれて英佛間に戦端が開かれずに済んだ。
當時フランスの政治的考慮を左右してゐた第一の要素は、一八七〇年に敗北したドイツに對する復讐の念であった。しかして、ドイツに復讐するためには英國と結ぶより他に方法がなかったために、ラインの夢を実現させるべく、ナイルの現実を放棄した。しかるに、今日のフランスはナイルをもラインをも失ひ、英國によってシリヤに、マダガスカルに、赤道アフリカに、第二、第三、第四と相續いてファショダ事件を仕掛け

られ、遂に今やその最も重要な植民地である北アフリカに侵入されるに至った。

アフリカの輸血路

かくしてアフリカから敗退したフランスが、對獨関係に全注意力を奪はれてゐる間に、英國はさらに進んでケープカイロ・ルートの完成に全力を盡した。しかし、運命の皮肉はこゝにも現れて、事態は人々の予想を裏切って発展した。即ち、フランスと争って英國の建設したアフリカを縦断する南北ルートは、フランスが計画しながらその実行を英國によって阻まれた西アフリカからナイルに至る東西ルートに比べると殆ど重要性を持たなくなってしまった。
ニューヨークを立った船が喜望峰を廻って紅海に達するには、二ヶ月を要するが、アフリカの西海岸に至るには、その半分以下の日数しかかからない。今日では聯合國側にとって船腹は特に貴重である。だから、米英は中央アフリカ経由で物資を送ることにあらゆる努力を拂ってゐる。

フランス領赤道アフリカーは、今やド・ゴール派の手中に帰してゐる。ベルギー領コンゴーまたしかり。中立國リベリヤも最近米軍の侵入するところとなった。

リベリヤの占領は単なる戦時的意義以上のものを持ってゐる。米國の軍隊がモンロヴィヤといふリベリヤの首都に進駐したといふこと自体、米國がいかにその傳統的外交政策から逸脱したかといふことを表象してゐる。即ち、モンロヴィヤとは米國大統領モンローに因んでつけた名であり、モンローと云へば人は誰でもかの有名な不干渉政策＝モンロー主義を思ふであらう。米國は今やモンロー主義を棄てゝ、モンロヴィヤ主義を採ったためである。

西アフリカの諸港

さて、アフリカの西海岸を占領した米英国はどんな利益を得たであらうか。この質問に答へるためには、彼等が手に入れた諸港の價値を調べて見なければならない。

アフリカ大陸を横断して、重い軍需資材を大量に運ぶための起点として役立つやうな港はさう多くない。アフリカの港は大部分波をよけられるやうな投錨所がなく、近代的波止場を缺いてゐる。ごく最新式の設備のあるダカールを除けば、ほゞ良港な設備のある港は三つにすぎない。

即ち、非常に良好で五万以上の人口を有するシエラレオネのフリータウンと、人口十三万五千を有し、廣くて大きな船でもはいれるニジェリヤのラゴスと、数本の大河が合して海に注ぐところに位置し、汽船が着く波止場まで内陸に引込んでゐる鉄道が通じてゐるフランス領赤道アフリカのツアラとの三つである。他の港はすべて全く役に立たない。バサーストはじめ〳〵した土地にあり人口僅かに九千である。モンロヴィヤは聖ポール河の河口にあり、この河は厖大な砂防でせき止められてゐるので、大きな船ははいることができず、海上に投錨しなければならない。またモンロヴィヤの人口は六千にすぎない。黄金海岸の首都アックラでも海上に投錨しなければならない。ハーコート港はナイジャー河デルタ

にあるので、港内に碇泊できる。フランス領ガボンにあるリブルヴィルは港としては全く價値のないものであり、人口も数千人にすぎない。ポワン・ノワール及びベルギー領コンゴーのマタデは防波堤があるが荷役設備が不完全で、大量の荷物を取扱ふことはできない。

ナイルに至る三ルート

アフリカの陸路は空路よりも多くの物資を運ぶのみならず、空路にとっても缺くべからざるものである。何となれば、飛行機の燃料を運び、飛行場を建設するには陸路を利用しなければならない。

暗黒大陸には米英軍に取って戦略的重要性を有するルートが東西に三本走ってゐる。その起点及び終点の名によって、これらを

（一）ニジェリヤ―スダン・ルート

（二）カメルン―スダン・ルート

（三）コンゴー―ウガンダ・ルート

と名づける。

第一の最北ルートはチャード湖を経由するものであるが、このチャード湖に至るにはナイジェリヤのよく発達した交通網を利用するのと、フランス領カメルンのヅアラを出発点とし、ヤウンデから北進する自動車路によるものとがある。チャード湖に至る途中のカノまではニジェリヤのラゴス港及びハーコート港から鉄道が通じてゐる。さらに、ナイジャー河下流は、河口からラゴス、カー間の鉄道がこの河を横ぎる点まで船が通行できる。さらにもう一つの自動車路がラゴス、カー間の鉄道に沿って走り、カノを越えてクカに至ってゐる。このルート中の最難関はチャード湖からエル・ファッシアに至る区間である。この間は沙漠の丘陵地帯で、約千二百キロといふもの縦断路を辿らなければならない。エル・ファシアとエル・オベイドの間には自動車路があり、エル・オベイドからは狭軌の鉄道が通じてゐる。このルートの困難さはこのルートによって、中型の汽船で運ぶだけの貨物を運搬するには一千五百輌のトラック或は四万頭の駱駝を必要とすることを考へれば一目瞭然である。しか

も、その全行程はラゴスからアレキサンドリア迄約六千キロである。

河とジャングル

第二の大陸横断ルートはフランス領カメルウンのツアラからヤウンデを通って、コンゴー河の航行可能な地点にある。バンガイ迄自動車路によりそこから更に河を遡つてニアンガラに達する。ニアンガラは自動車路によつてナイル河上流のジュバに結ばれてゐる。このルートによつても、自動車路のみで総計千五百キロに上る。

第三のルートはベルギー領コンゴーを通る。この植民地は今や全く米英軍の奪取するところとなり、一九四二年七月十五日、ベルギーの前首相はベルギー領コンゴーは急速に西亜に対する米國のルートとなりつゝあると声明した。コンゴー河の下流は滝があるために水運に利用出来ない。水運に利用できるのはスタンレー・プールから上流である。このスタンレー・プールといふのはブラザヴィルとキンシヤサとの間に河によつて出来た広いプールのことである。スタンレー・プールは二本の鉄道によつて海岸と結ばれてゐる。即ち、一つはボワン・ノワールからブラザヴィルに至る鉄道であり、他はマタディからキンシヤサに至るものである。スタンレー・プールからスタンレー・ヴィルに至るコンゴー河上流一千七百キロの間、薪を燃料とする河船が物資を運ぶ。スタンレー・ヴィルからはニアンガラに至るまでブタ・バムビリを通る自動車路がある。ニアンガラからは第二のルートと同じである。

コンゴー・ルート

ちよつと見ると、この最後のコンゴー・ルートは有望なやうに見える。しかし、コンゴー地方も非常な運輸難がある。コンゴー地方の最も重大な障害は、海岸からスタンレー・プールに至る狭軌の鉄道にある。これら二つの鉄道は非常にけはしい山嶽地帯を四百キロも走つてゐる。スダンを貫流するナイル河流域の交通路も著しく難渋である。ナイル河はジユバからカルツームを経てベルベルまで定期的な水運が開けてゐるが、このナイル河上流の定期船は百トンくらゐしか積めない小さなも

のである。ベルベルまで来ると、貨物は狭軌の鉄道貨車に積みかへられなければならない。そして、ベルベルから六百キロ離れたツディ・バルファに運ばれ、そこで再びナイル河を船で下るか、或はベルベルから四百キロのポート・スダンまで行って、そこで紅海経由の船に積みかへられなければならない。ボロン・ノワールからカイロに至るこのルートの全行程は約七千二百キロである。

さて、結論をいふと、以上三ルートによって西アフリカから北アフリカ及び西亜へ運ばれる物資の量は知れたものだ。第三のコンゴー―ウガンダー―ナイル・ルートが最も重要なものである。しかし、このルートの輸送能力とても知れたものだ。といふのは、絶えず貨車から船へ、船からトラックへといふ風に貨物の積替を行はなければならないからである。さらに、コンゴー下流及びナイル中流に沿った鉄道は狭軌であるため、その輸送能力が非常に限られる。またコンゴー河の船の輸送力も非常に小さい。その上、奥地における自動車の燃料をはるぐ運んで行かなければならない。

以上で我々は米英が喜望峰を迂回することを欲しない場合に太西洋から地中海に達するための三ルートを検討した。それらのうち最後に見た中央アフリカを通ずるルートこそ米英が最初に利用したルートである。しかして、これの米英と三ルートその計画は多分一九四一年になされたものであらう。しかして、これの具体化が真剣に取上げられたのは、一九四二年の初頭、米国の参戦後間もなくのことであった。多分、米英は、フランス領北アフリカを経由してより直接的に地中海に近づく希望を見出した今日でも、将来事ある場合に備へて、中央アフリカを通ずるルートの発展に努力するであらう。

第七章　猶太人問題

序言

ユダヤ民族は故國を去つて二千年、世界各地に離散放浪の生活を重ねつゝなほよくその民族的特質と結束とを失はず、却つて獨自の才能と強靱なる生存力とを發揮して、史上幾多の問題を生起せしめつゝあることはむしろ驚嘆に値する所である。その問題は宗教・社會・政治・經濟・文化等凡そ人間生活の各般に亘り、複雜深刻にして、且つ廣汎なる史的事實の上に及んでゐる。從つて、問題の把握は容易でなく、その立場を異にするに從つて、或は文獻の取捨選擇の如何に依つて全く正反對の觀察をなし、對立的な歸結に到達する場合もあると考へられる。本問題の認識にやゝもすれば不明瞭と不公平とが伴ふとされる所以である。

此處には能ふ限り不偏の立場に於て、現代の問題を理解するに必要なる限りに於て、ユダヤ人の思想、境遇、地位、活動を史的に概觀し、極めて概括的ながら複雜難解なるユダヤ人問題の本質内容の何たるかを問

ひ、併せてその對策に及ばんとした。
尙末尾に「タルムード」抜萃、「シオン議定書」抜萃、及び「フリーメーソン」の三項を附加して本文に足らざる所を補ひ、參考に資せんとした。

第一節　ユダヤ民族概說

第一款　史的生成過程

ユダヤ民族は約四千年以前メソポタミヤ地方に、彼等の唯一最高神たるエホバを信仰しつゝ遊牧してゐたものであり、アルメニヤ地方から出たアルメノイド人種と、アラビア半島より出たオリエンタール人種との、混血せるセム種族の一分派であるとされてゐる。エホバの指示によりて、族長アブラハムは西歷紀元前二千年頃一族を率ひ郷里ウルを去りパレスチナに移り、族長國を作つた。その後飢饉に會つて埃及に逃れ、約二百年居住したが、迫害されて民族的英雄モーゼに率ひられパレスチナへ復歸した。ユダヤ民族はその後十二支族に分れ相爭つたが、ソール出で、國王となり、ユダヤ王國が始めて建設された。ダビデ、ソロモン等

英邁なる君主が出て王國は繁榮したが、紀元前九五三年ソロモンの没後王國は南北に分裂し、南はユダヤ（都イェルサレム）北はイスラエル（都サマリヤ）となつたが、兩王朝共隣國アッシリヤの爲に攻略された。その後埃及、バビロニア、シリア等近辺に勃興せる強國の屬領となり、紀元前六三年、ローマ帝國の治下に入つた。然るに、ユダヤ民族はローマに對し屢々反逆を企てたので、西歷紀元一三五年時の皇帝ハドリアンヌスは徹底的な彈圧を加へパレスチナよりの追放を期し、苛酷な重税を課し、エルサルムに於ける居住を嚴禁するに至つた。此處に於て彼等も遂に四散するの止むなきに至つた。所謂「ジャスポラ」と稱する放浪離散の生活が此處に始まることになる。

離散の方向は東方に向つたものもあるが、多くは地中海の南北兩岸を西方に進み、北岸を行つたものは又欧羅巴奥地へ向つた。米國へ渡つたのは西暦千四百九十二年コロムブスの米大陸發見と同時であると云ふべく、支那への移動は舊約時代に始まるとの説もあるが大体西暦紀元前二

百年頃讓の時代に入り込んだと信じられてゐる。離散後の歴史は之を概観して大体二期に分たれる。即ち民族の重心が未だパレスチナ或はバビロンに在つた時代と、それが次第に東洋から欧洲に移動し其の間永き苦難をなめた時代と、遂に十八世紀のフランス革命と自由主義の勃興により解放されて、欧洲及びアメリカに於て政治的にも社會文化的にも影響する所強大となり、二十世紀以降再び排斥迫害されるに至つた時期之である。

尚ユダヤ民族はその離散生活は於てドイツ、ハンガリー、オーストリー、ポーランド、ロシア等東北方面に分散したものと、北アフリカ、大アラビア文化圏 ポスフオラス、スペイン等西南方面に分散せるものとの二型を區別することが出來、前者はドイツ型又は「アシユケナジム」、後者はスペイン型又は「セフアルヂム」と稱せられてゐる。又一つはゲルマン、スラブ化されたもの他はアラブ及南欧の血を受け地中海化されたものと云へるであらう。

第二款　人口分布狀態

以上に於てユダヤ民族の史的生成過程及び移動の大略を概觀したが、現在に於けるユダヤ民族の地域別分布狀態は次の如くである。

ヨーロッパ	九、三九四、〇七二
アメリカ	五、三四三、二〇〇
アジア	八一九、二四三
アフリカ	六〇一、七九七
オーストラリア	二七、〇一六
計	一六、一八一、三二八

即ち世界に於けるユダヤ人口は千六百十八万一千餘人で、世界總人口の百分ノ一以下に過ぎない。尚各國別ユダヤ人口を示すと次の如くである。

		人口比%
アメリカ合衆國	四、八三一、一八〇	三、七四
ポーランド	三、一一三、九〇〇	八、九三
ソ聯邦	二、六七六、一〇九	一、六九

ドイツ	六九一、一六三	〇、九〇%
ルーマニア	九〇〇、〇〇〇	四、六〇
フランス	二四〇、〇〇〇	〇、五七
イタリア	五七、四二五	〇、一三
ハンガリア	四四四、五六七	三、九九
チエツコ・スロワキア	三五六、八三〇	三、六三
パレスタイン	三九九、八〇七	二八、一八
英國	三〇〇、〇〇〇	〇、六五
支那	一九、八五〇	
日本	二〇〇	

右は亜米利加版「ユダヤ年鑑」一九三九、四〇年版による

さて、問題とするユダヤ人は、之を血縁関係に於てパレスチナ、ユダヤ人の子孫たることを根本的要素とし、更に精神的文化的要素として、

ユダヤ教を信奉することの二要素を以てユダヤ民族たることを決定すべきものとする。

第二節　ユダヤ民族の特性

第一款　不同化性とユダヤ教

ユダヤ民族が國家の獨立を失つて約二千五百年、離散の生活に入つて約一千八百年の今日まで、凡ゆる迫害に抗しつゝ尚民族として旺盛なる存在を續けて居ることは周知の如くであるが、他民族の間に入り込んだ少数民族としての彼等のかゝる強靭なる生存力こそ所謂ユダヤ人問題を生起せしむる重要素因とされるのである。前節に於てユダヤ民族の史的生成過程を瞥見したが、更に進みて彼等の精神上の特質、それに基く特異の性格、生活等にふれなければならぬ。それに依てユダヤ人問題の基本的特色の一面が自ら窺はれるであらう。

先づユダヤ人の精神生活の基本を形造るものは、ユダヤ教の信仰であ

る。之こそ彼等の生命とも云ふべきもので、亡國以來彼等の結束の原動力をなしたものも此の宗教心である。エホバの神より世界救濟の特殊使命を受けてゐると云ふ自意識は、自らを他民族と異るものとし、所謂選民意識を成立せしめる。此處に彼等の自尊心が生じ、排他的となる。かゝる意識に基く彼等の不同化性こそ、ユダヤ問題の終始一貫した第一義的要因とされるのである。彼等は律法（トーラー）（モーゼ五書）の赴く所即ち吾等の祖國なり（ハイネ）と稱するのであるが、更に此のトーラの外に、その信仰、道德、風儀上の諸規定の書綴られたる深刻浩瀚なるタルムード存し、それ等の影響のもとに彼等の特殊なる精神狀態及び生活習慣が形成され、ユダヤ人以外との婚姻を行はず、自身の曆をもち、安息日を作り、食物の特殊なる調理法を行ふ等、總じて環境に順應せざる排他的生活を持するのである。此の如き獨善的、種族的優越感を根本とするユダヤ教徒に對して、又神の子キリストを十字架にかけて虐殺したるユダヤ人に對して、キリスト教徒が憎惡の念を抱くのは自然であらう。殊に初代中世の如く宗教心の熱烈であつた時に於て然りである。

第二款　功利主義

ユダヤ民族は離散生活に入つた後、各國に於て、種々の壓制、迫害を受けたのであるが多く土地所有の制限禁止、住居の制限等が行はれた。その結果、農業に從事すること少なく、多く都市に集中して、手工業、商業等に從事した。而して彼等獨特の拜金主義、功利思想は金貸業等に從事する者を多く出し、民衆を搾取することゝなり、その他一般人の忌む、酒場、賭博場等の經營をなし、勢ひ社會の健全性を害することゝなつて世人の反感を受くるに至つた。

第三款　萬民主義

更にユダヤ人は、民族發生當初から、遊牧をなし、土地に固着せず、世界を放浪するに至つた爲、國家主義的觀念薄く、後年の彼等の國際主義も此處に基くものと云へるであらう。政治的經濟的に國際主義による機構を設け、各國内に於ける有力ユダヤ人の聯繫に依て活動せんとす

る傾向が多分に存することは人の知る如くである。

第四款　陰性の性格

又その發生當初よりの歴史、環境は彼等をして自然に、陰性的な性格を保持せしめるに至り、耳語することも多く、一般に神經質にして猜疑心深く、復讐の念強く、狡猾にしてその行動は陰險であり利己的である等の嫌惡すべき民族的個性が形成され、かゝる性格の爲に一般の反猶思想を醞釀せしめたことも否定し難い所である。尚民族の標象は蛇である（又星章）。

第五款　迫害と生存力

以上の如きユダヤ人の特性が、他民族による迫害、排斥の要因となつたものであることは想像に難くない所であり、中世紀の迫害は深刻を極め職業、社會生活上の諸制限を初め「ゲットー」（ユダヤ窟）への隔離、營業、店舗、シナゴーグ（教會堂）の燒打破壞、虐殺、追放等が盛に行はれた。

然し自らを選民とし他の民族を獸類に比する程の彼等は、如何に放浪し迫害されてもユダヤ教典の教ふる所に從つて頑として譲らざる堅

忍不拔の精神を保持し、節儉にして勤勉なる生活を營み、飽迄旺盛なる活動を續けつゝあることは特に注目されるを要するであらう。自らを締めなければ油を出さぬオリーブの實に喩へ、如何なる苦難にも身を挺して打克つ底の生存力は偉とされる所である。

第三節　ユダヤ民族の解放と進出

以上ユダヤ民族の精神的特質、民族的個性とも云ふべきものを指摘し併せて宗教的、社會的、心理的にユダヤ人問題なるものゝ發生する要因をみたのであるが、更に近世現代に於て此等の特質を有するユダヤ民族が、その獨自の個性乃至は特異の才能を基本として如何に世界の政治、經濟、社會文化の各面に進出し如何なる問題を生起せしめつゝあるかを見なければならぬ。

第一款　ユダヤ人の解放と社會急進思想

ユダヤ民族の解放と進出はフランス革命以後に屬する、各國に於て自由主義思潮の勃興するや、宗教の自由が與へられ市民權が認められ、各

方面に對する彼等の著しい進出が行はれた。即ち當時の重商主義、自由主義、資本主義擡頭の機運に乗つて、經濟、政治、文化の各面に頭角を現はすに至つたのである。

今此等の狀態を概觀するに先だちて、一應ユダヤ人が思想的に當時の社會狀勢、社會思潮に於て如何なる役割を果したかを見て置かねばならない。元来ユダヤ民族は、甚だ保守的であるに拘らず、其の反面に於て急進的であり革命と云へば其の裏面に彼等の暗躍が考へられてゐる。彼等の獨善的選民意識と、それとは余りにかけ離れたる現實狀勢とは、彼等をして、急進的思想の保持者たらしめたと云はれるであらう。いづれにせよ故國を逐はれて以来、常に彼等を支配した思想は、征服者に對する叛逆と、故國の復興とである。異民族による絶えざる壓迫と云ふ歷史的、社會的環境が、逆に彼等の革命思想を濃化せしめたと云はれよう。

中世以降、彼等に加へられた迫害は、彼等をして、近世に於ける自由主義思想、民主々義思想の醞釀、勃興に著しい役割を演ぜしめたことは

否定し得ない。彼等の秘密結社運動が革命を目的とするならば、その爲には先づ何よりも民衆獲得が必要であり、民主々義、社會主義、共産主義等々が鼓吹されねばならぬ。且つ近代資本主義の興隆は、一般的現象として社會分化による階級間の對立、相剋を深からしめ、被壓迫階級の解放運動を生起せしめたのであるが、自己解放を企圖するユダヤ人が此等の解放と共に起ち、或はむしろ指導的役割を演じたことも事實である。

近世初頭のフランス革命に於て大なる役割を果したと云はれるフリー・メーソンは既にユダヤ人の影響を少なからず受けてゐたと云はれ、又米國獨立運動に於けるユダヤ・フリー・メーソンの役割も否定し難い所とされる。

フランス革命に依て民權の自由は確立されたが、個人主義の弊害となり、社會改革とは、多くの距離を殘した爲、新たなる社會運動の展開、即ち相次ぐインターナショナル運動の勃興となり、カール・マルクス、エンゲルス、ラサール以下多くのユダヤ人左翼思想家及び左翼運動の闘士を輩出した。

近くはロシア革命に於けるトロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフ、ヨッフエ等無数の革命指導者、ドイツ革命に於けるリーブリネヒト、ハンガリー、スペイン革命に於けるベラ・クーン、愛蘭革命のド・ヴァレラ、エ耳古に於けるジャロウイツド、パシャ等いづれも皆ユダヤ人たることをみれば、凡そ彼等の此種運動に於ける役割の如何が想像されうる。

かゝる事実は、世界のあらゆる革命、戦争はユダヤ人の陰謀によるとの風説を起せしむるのであるが、彼等自身は、かゝる運動に於けるその役割は、所謂るメシアニズム（世界救済思想）の社会的領域への、倫理的発展と解するのである。

然し、いづれにせよ、ユダヤ迫害の深刻なる諸国、例へば東部ヨーロッパ、ドイツ等に於て急進主義的過激主義が存在するに比し、彼等に対する生活を比較的苦しいものにしなかった諸国、例へば西部ヨーロッパ、スカンヂナビヤ、スウェーデン等に於けるユダヤ人の政治的傾向が概して温和なものであったことは注目に値するであろう。

第二款　フリー・メーソン

此處でフリー・メーソンに就き一言しなければならない。けだし、それによつて、ユダヤ人の社会思想及び運動上に占むる地位をより判明ならしめ得るから。

フリー・メーソンは世界的秘密結社で、起源は非常に古く、中世石工組合に発したものであるが、大体現今に於ける意味に於ては十八世紀頃から英国を根拠としてロンドンに成立し、その後欧米諸国に組織的に発達し、今日に及べるものである。

そのモットーとする所は、自由、平等、友愛であつて、結社員は相互に国家民族を超越して兄弟と呼び、その目的とする所は、彼等の世界共和国の建設に在りとせられる。

ユダヤ人の結社員たることを許されたのは十八世紀に於てゞあるが、彼等の国際主義的傾向と多分に合致する所より、彼等に恰好の逃避所となり、此處に彼等は勢力を樹立し、これを有利に運用発展せしめ、

十九世紀末頃には既にユダヤ人の左右する所となり、同運動に於けるユダヤ的勢力は極めて大となる。「フリー・メーソン結社員は人工的猶太人である」と云はれる程、フリー・メーソンは精神的にも實際的にも猶太人と利害を共にするものと見られるのである。彼等の建設せんとする社會は勿論彼らに有利な社會であることは云ふ迄もない。フリー・メーソンがそのモットーよりして、一見人類最高道德を磨く國際親善機關の如く見られる場合もあるが、又屢々急進過激思想、國体破壞の原動力となつたことは歷史上著名な事實であつて、之れが存在を禁止してゐる國もある。直接武力によらざる世界征服、一國革命より世界革命を企圖せんとするのが、その明日の事業であるとされてゐる。

近年の諸發表によればその會員数は四百四十八万と稱されてゐる。（米國三百三十万、英國四十六万、加奈陀二十万、佛國約五万と云はれ、英米獨佛等に於ては元首にしてその會員たりしものもあり、著名なる高官軍人學者にしてその會員たるものもある。

第三款　資本家と革命家

さて、かゝる被圧迫階級の解放とその指導及び実際運動に於けるユダヤ人の役割の著明なるを知ると共に、正にその反面に於て彼らの経済的進出の巨大なることをみるのは一見奇異に感ぜられる所でもある。即ち多くの革命家を出したと共に幾多の大資本家を出してゐるのであるが一見矛盾する此の事実はヘルツルによつて「吾人ははけ口の無い所から、財産を増大すると同時に、社會的危険分子となる所の中流知識階級を拵へることゝなり、教育あつて財産の無いユダヤ人は、悉く社會主義者に落ちて行く、社會的闘争が吾人の背に於て行はれるのは、吾人が資本家的にも又社會主義的にも顯著な地位にあるからである」と説明されてゐるが、此の言はユダヤ人の特殊な才能と特異の性格を物語るものとも云へるであらう。即ち彼等は一面よく環境に對する順應性を有すると共に、他面又傳統的に急進的となり得る素質を具備してゐると云はれうるのである。

第四款　經濟的進出

次に然らば、民族的解放以來の彼等の驚異的なる經濟的社會的進出とは如何なるものか、此の点をみなければなるまい。

彼等が經濟的に著しい進出を示したのは、在來、商業、金融方面に比較的自由なる活躍をなした過去の環境からみて、當然の現象と云ふべきで、倫敦、巴里、維納、フランクフルト、ネープルス等を本據として、大飛躍をなし、欧米に於てもアジア大陸に於ても、啻に一國内に止まらず、廣く國際經濟界を牛耳る幾多世界に名だたるユダヤ財閥を發生せしめたのである。

今、英、佛、米、獨等に於けるその概略を見ることゝする。

英國に於けるユダヤ人口は一九三一年度調査によれば三十萬で、總人口に對し、僅々〇、六五%を占めるに過ぎなかった。然るに、その一般的勢力の著大なることは、佛國と共に雙壁をなし、それが何れも、彼等の經濟的勢力の基礎の上に立つものであることは爭はれぬのである。

即ち同國ユダヤ財閥の巨頭はロスチャイルド家であるが、これが樞軸となって英國金融經濟に指導的地位を占める他、一般産業界に於ても人口と比例のとれぬ程多數の財閥巨頭を出し、重工業方面に於ては左程ならずとも、家具製造及び販賣、映画、裁縫業、化粧品業をほとんど獨占し、煙草、電氣器具、化學製品、連鎖店事業等に又主勢力を振ってゐるのである。

佛國に於ては、ユダヤ人口は一九三六年度調査によれば二十四万で、總人口に對し、僅かに〇、五七%であったが、而も同國の財界及び産業界が代表的財閥たるロチルド家（即ちロスチャイルド家）を中心とする幾多ユダヤ資本家により左右される場合の多かったことは、周知の事實である。

勿論最近のロチルド財閥には現世紀初頭に於ける如き全能的な勢力はなく、非ユダヤ的勢力と或る程度に經濟界の分有を認めねばならなかった。併し、その指導力は微動だもせず、現に佛國々民經濟を構成する金融、商工業界の大半に代表を出し、石油、電氣に支配的勢力を維持する

外、鉱山、運輸、保険、水道、瓦斯等の特許事業に至るまで牢固たる地盤を築き、並に佛國全經濟の大半を握つてゐたのが、今次大戰直前迄の狀況であつた。

ロチルド家に續くユダヤ系財閥又は著名財界人としては、更にラザール、ウオルムス、スデルン、フイナリー、ドレイフユス、カアン・ダンベール、ブロツク、ゴールドマミス、サミユエル等々の諸家を擧げ得るであらう。

米國は今次戰爭までは世界に於て最大多數のユダヤ人口（一九三七年度調査によれば四百八十三万餘、對總人口比率—三、七四%）を擁し、一般にその經濟的勢力も何れの國に於けるよりも大なる如く考へられる傾向がある。これは、在米ユダヤ人口の殆ど九五%が都市生活者で、而もその約半数がアメリカ國家生活の中樞をなす紐育に集中してゐる点より與へられる印象が多分に手傳つてゐるのであるが、事實はそれ程でなく、アングロ・サクソン系とは比較にならぬことを、一應認めねばならない。

特に金融方面に就て見るも、一流財閥としては、シツプ一家を中心と

するクン・ローエブ商會を擧げる程度であり、紐育手形交換所會員たる十九大銀行の重役にしても、總数四百二十名中ユダヤ人は三十名程度である。併じユダヤ資本の性格は必ずしも個々の大財閥のみによる活動を特色としない。彼等同族資本の見ゑざる協力、連繫こそ、その恐るべき力であるとすれば、米國に於けるユダヤ人の財的潜勢力は確かに一大威力であると見るのが眞相に近い。この間の消息を物語るものとして、次の二事例が擧げられる。第一は、一九一二年ヤコブ・シツプ等を中心に團結せるユダヤ財閥の專横が米國上下両院の問題となり、之が眞相究明のため組織された調査委員會の調査報告が、ユダヤ系銀行トラストの存在すること、それが五個の主要銀行と百十二個の重要な銀行を管理すること、而して此等の銀行が總資本額二百二十億餘弗を擁し、米國全土は勿論、海外まで勢力を伸張し居ることを明かにし、世人の耳目を聳動せしめたことである。

第二の事實は、曾て米國が世界大戰後の不況に襲はれ、閉鎖銀行数實

に七千八百餘行に及んだ際、その九割までが非ユダヤ系銀行で、而もその大部分がユダヤ系資本の併呑するところとなつたことである。以て米國に於けるユダヤ系金融資本の実勢力を窺知するに足るであらう。
次に産業界に於ける勢力も、全体から見て少数勢力たるは免かれぬが、併し人口比例からすれば実に侮り難きものが存する。いまその進出の著しい部面を求むれば、比較的に勢力の微々たる重工業方面に於て、屑鐵業の九割までをその掌中に握り、銅山業界に支配的地位を占めることは特筆さるべき点であらう。
しかし、ユダヤ人の米國産業界に於ける勢力を代表するものは、実に軽工業及び商業方面であつて、織物、衣類、葉巻煙草等に獨占的経営を行ひ、数種軽工業製品の販賣部面を壟断し、百貨店事業に著しい進出を示してゐることは、夙に著明な事実に属するのである。
最後にドイツに於ける進出を見なければならぬ。大体同國がユダヤ人を解放してからナチスの排猶太政策実施まで、僅々六十数年の間に發展

を遂げたものであるが、その間第一次世界大戦前後の混乱期に際して不動の地盤を確保するに至つたことは、注目さるべき点である。
ドイツに於けるユダヤ人口は一九二五年に於て五十六万五千、同國人口の一％弱であつたが、そのユダヤ人がドイツ経済界に於て如何なる地歩を占めたか。ナチス排猶政策実施直前の状況を見るに、その進出は凡ゆる部面を通じて目立ちたる中でも、商業及び金融業に於てユダヤ人商會の占むる比率は總体の五七％餘、織物及び衣服販賣に於て四〇％、穀物取引に於て約二三％、銀行業に於て一九％であつたが、就中、同國一流銀行の理事及び監査役級が圧倒的にユダヤ人により占められてゐた事実、伯林商工會議所を始め諸取引所の幹部の椅子が過半数ユダヤ人の掌中にあつた事実等は、その商業界特に金融界に於ける勢力の如何に甚大であつたかを証明するに足るのである。
工業方面の勢力は商業、金融に於ける程には非ざるも、エミール・ラテナウの創設にかゝるA・E・G會社の如きは著名なもので、其他にも相

當敎の會社があげられ得たのである。

右の如く世界主要國に於けるユダヤ人の經濟力に就ては、つとに喧傳されるが如く著大なるものであるが、此の如き經濟的進出に就ても、その勢力は常に國際的色彩濃厚であり、同族間の資本的連繋が緊密なる点は留意さるべきであり、ユダヤ人の國際主義的特色が窺はれる。

第五款　政治的進出

ユダヤ人が此の如く、經濟的勢力を獲得した當然の結果として、その政治的地位も著るしく向上した。前例に從い二三の主要國に就き概觀すれば、

英國に於ては、彼等の經濟的地盤の確立は最も古く、從って又その政治的勢力も断然優勢である。即ち同國近世に於ける著名政治下中、シャフツベリー（ヴィクトリア女皇時代の首相）ビーコンスフィールド（保守黨首領、首相）グラッドストン（首相）いづれもユダヤ人である。近くはヘンダーソン、スノーデン、サイモン等をあげ得べく、ホアーベリシア、フイリップ・サッスーン、リース・ロス等みな然り、以て同國に於けるユダヤ人政治家

の勢力を窺知するに足るであろう。

佛國はフランス革命に於て既にユダヤ人の大なる暗躍を經驗した所であるが、現代に於ても大戰直後の首相兼外相次いで大統領となりしミルラン、パンルベーを始めとして、近くは、レオン・ブルーム、マンデル、ジャン・ゼー、レイノー等同國一流政治家がユダヤ人である事實をみても、その勢力が窺知されうる。

米國はその經濟的進出の頂に於てみたる如く、政治界に於てもユダヤ人の表面的な著明な進出は余り見られず、唯ハーデングがそれであり、むしろ大統領の影無者としての幾人かのユダヤ人の活躍が（例へばウイルソンに於けるバラヂの如し）云はれるのである。

しかし、現大統領ルーズヴェルトはユダヤ人の血を承け繼ぐと云はれ、そのブレン・トラストも殆んどユダヤ人であると云はれる。かくて全國に於けるユダヤ人の政治的勢力の伸張が云々される所である。尚モーゲンソー、ルイス・ブランデス、レーマン、ボラー等の著名政治家をあげ得る。

ソ聯邦、帝政ロシアに於てはアレクサンドル二世の改革以来ユダヤ人は解放されて、自由な活動をなし得るに至り、経済社社會の各方面に進出し、一九一七年革命直前に於てはロシア金融機関の大部分を通じて、商工業の大部分を支配してゐた。

しかし、一九一七年革命を契機としての政治的進出は最も目覺ましいものとされる。帝政ロシアのユダヤ政策は却つて彼等の過激思想を激發した。ロシア社會民主勞働黨の幹部ダン、アクセリロド、アルトフ、リーベル等いづれもユダヤ人である。彼等の精神的後継者たるトロツキー、カーメネフ、ジノヴィエフ、リトヴィノフ、ラデック、ヨツフエ等帝政ロシアの專制政治を轉覆せしめたる指導的革命家もユダヤ人出身であり、一般反政府的ユダヤ人大衆の有力なる参加によつてロシア革命は成就され、爾後ユダヤ人の進出は驚異的となつてゐる。

ソ聯に於てはユダヤ人は完全に解放され、反猶運動は禁じられ、革命に乗じて、空席となつた、諸官廳の椅子はユダヤ人によつて占められた。

單に政治に止まらず、凡ゆる方面に法外の進出が為されたのである。

獨逸に於けるユダヤ人の政治的進出は、第一次大戰に於ける、カイゼルの顧問マックス・ワルブルグ、資源局長官バーリン等の活躍、革命に於けるランツベルに、リープクネヒト、ローザ、ルクセンブルグ等の活躍、共和政体に於けるエーベルト以下、ハーゼ、ラテナウ、コーン等著名なるものがあるが、ナチス政權の擡頭によつて終焉をつげた。

更にユダヤ人の政治的進出は單に一國内に止まらず、國際政治に重要なる干與を示すに至つた。その國際間に於ける経済的財的勢力の増大に伴つて、國際政治上の勢力も當然に擡頭した。第一次大戰後の講和會議には聯合國側、獨墺側共に多数のユダヤ人代表を参加せしめた。彼等の縦横の活躍は此の會議を動かし、遂に二千年の大念願たるユダヤ國き、故國パレスチナに建設せしむるに至らしめたのであるが、これこそ彼等の政治的進出を如実に示すものと云へよう。

尚第一次大戰の講和會議より生れた國際聯盟に於けるユダヤ勢力は、

その重要なる部署が如何に多くユダヤ人に依つて占められたかを一見すれば解る。

聯盟事務總長　ドラモンド（英國籍ユダヤ人）
〃　次長　アブノール（佛國籍　〃　）
〃　交通部長　ハーリース（　〃　）
〃　衞生部長　ライヒマン（ポーランド籍〃）
〃　經濟部長　ソルター（ドイツ　〃　）
〃　宣傳部長　コンメン（國籍不詳ユダヤ人）

聯盟の提唱者ウイルソンの裏面に在りたるものがユダヤ人被害バラチであり、その他聯盟關係で著名ユダヤ人としては、ベネツシユアダリアが、イーマンス等世人の記憶に新たなる所であらう。

以上、ユダヤ人の政治的進出の概況を敍述したが、更に他の文化領域に於けるその活躍を記述しなければならない。就中國際宣傳機關としての新聞、通信、或は映画事業に対するその熱意と勢力とは特に注目に値するものが存すると云へよう。

第六款　新聞通信藝術學術界への進出

先づ新聞に就て見れば、一部論者の如く果して歐米言論機關の八〇％が彼等の掌中にあるやは、多大の疑問なしとせざるも、その勢力は確かに大なるものが存する。就中佛國はその最たるもので、同國五大新聞を以て稱されたプテイ・パリジヤン、マタン、ジユルナール、エコ・ド・パリを始め、全國主要新聞約八十種の中大半はユダヤ系を以て目されてゐた。

又米國に於ては倫敦タイムスと雙稱される紐育タイムス以下二十數種の有力紙（總發行部數約百五十萬部）がユダヤ勢力の支配下にあると見られ、ハースト系新聞（五百五十萬部）やバタソン・マッコーミック系新聞（二百三十萬部）、スクリップス・ハワード系新聞（百八十萬部）等に比して一見微々たるものではあるが、併し財界、産業界、學界等に於ける彼等の勢力や思想的影響、乃至大都市方面に於てユダヤ系百貨店が廣告主として此等日刊新聞に對

し相當の腕を利かし得る地位にある事實等に想到すれば、同國新聞界に於けるユダヤ的勢力は、發行部數を超越して大なるものの存することは否定し得ぬのである。從て米國に於て、一部の者の間に、新聞はニュース・ペーパーならで別名ジュース・ペーパーを以て呼ばれゐることも、強ち根據なきこととは言はれぬであらう。

英國に於ては、全國九大新聞の所有主中ユダヤ人はサウスウッド卿一人を算へるのみで、表面支配的勢力と云ふには足りない。併し同卿がデーリー・ヘラルドを含む國内で最も有力なる新聞系の一つを支配しゐることは事實で、その意味に於て英國新聞事業に於けるユダヤ人の勢力も、決して輕視し得ぬのである。

ヒットラー政權出現以前の獨逸に就て見れば、一九一二年「新聞の偉大なる力」の著者エベルレは、當時既にドイツ新聞の四分の三がユダヤ人の所有か或はその支配下にあつたことを指適して居り、第一次大戰に際しては、官報であつたベルリネル・ターゲブラット、・ミュンヘネル・ノーエステ・ナハリヒテン両紙を始め此等一聯のユダヤ系新聞が幾多國家に不利なる記事を掲載して後日に問題を残したことは著名な事實である。右により、ユダヤ人が新聞界に於て、經營者として或は資本家として如何に著しい勢力を持つに至つたかは、略窺知し得るであらう。

併し一方、新聞事業界に於ては、ニュースの單なる印刷配給よりも、記者の活動により、又通信者や世界各地のニュース源よりニュースを蒐集する仕事の方が、より重要であることを忘れてはならぬ。而して今日世界通信事業界に覇を稱ふる佛の「アウアス」、英の「ルーター」、米のアソシエテッド・プレス（略稱A・P）、ユナイテッド・プレス（略稱U・P）、數年前まで中欧通信界に名をなした獨の「ウォルフ」等の世界的大通信社が、いづれもユダヤ人の支配下にある事實に徴すれば、この方面に於けるユダヤ的勢力は、新聞社自体におけるよりも遥に大なりと見なければなるまい。

其の他一般出版業、放送事業等に於ける進出も決して輕視し得ぬが、最後に特筆さるべきものは映画事業である。これは周知の如く殆んど一

般的現象とも云ひ得るのであるが、特に米國に於て、それは殆んど彼等の獨占經營に屬し、英佛、其他諸國亦之に準ずる狀態にあると云はれるのである。更に藝術及び學術方面に於ても近代のユダヤ人は甚だ多數の代表者を出して居り茲に之を列擧するの煩に堪へぬ程である。近代藝術に優れた文學者、劇作家、俳優、作曲家、畫家、彫刻家等に、幾多の戰士が輩出した外、學術界に於ては醫學に、物理學に、心理學に、哲學に之亦世界一流の多數名士を送り出してゐるのである。智的水準のバロメーターと稱し得るノーベル賞受賞者中に、ユダヤ人の占むる率の大なることも、この方面に於ける彼等の進出の如何に著しいかを立證するものでなければならぬ。即ちノーベル賞設定の一九〇一年以來、三七年迄の受賞者數は百九十五名であるが、その中ユダヤ人は十九名で、總數の九・七%を占めてゐる。歐洲總人口に占むるユダヤ人の比率が一・八五%、北米のそれが一・九四%なることに想到すれば、ユダヤ人受賞者の比率はその人口比率を遙かに越すものであることが判る。

第四節　ユダヤ民族と他民族との對立抗爭

第一款　近代反猶思想及運動

右の如きユダヤ民族の解放と進出とは、その反面に於て二つの反動を齎らした。一つは彼等の他民族への同化思想の彌漫であり、他は彼等の飛躍的進出に對する激烈なる反猶思想の再擡頭である。

同化思想に對しては、民族的意識の復興、同族團結の再強化策として、世界猶太人同盟（一八六〇年創立）、世界ユダヤ人大會等幾多の機關が結成された。就中、ユダヤ民族傳統の精神的團結を維持強化する上に特に顯著なる役割を演じたものはヘルツルにより提唱されたる「シオニズム」即ち祖國パレスタイナを復興して猶太國を再建せんとする主張及び之が實現を期するシオン團（一八九七年創設）であつた。かくて彼等の傳統的特質たる不同化性は維持されたが、これは又反猶思想の激成に間接に寄與する所となつた。

往來の主として宗教的色彩の濃厚なる對立感情を基調とした反猶思想

に代つて、近代的な社會的經濟的對立に基づく反猶思想を激成したのであるが、我々は獨逸にその著るしい例を見うるのである。

十九世紀後半よりかゝる意味の反猶思想は獨逸を中心として勃興し、近隣諸國に波及して一般的現象となつた。

具体的に獨逸に於ける反猶思想の理由をみれば、

一、地主、軍閥、官僚等の支配階級が、ユダヤ人ブルジヨアジーの中に恐るべき新興勢力を見出したこと

二、中産階級以下がユダヤ人資本家を自己の敵と見るに至つたこと

三、ユダヤ人は急進思想の持主として、ドイツ的傳統に對し反逆的異分子と認めたこと

四、ユダヤ人は國内に於て依然民族的集團強固にして、國家中別の國家を形成するの感強く、國際的傾向濃厚にして、獨逸國の團結に有害と認めたこと

五、文化領域に於ける進出が、一般文化人をして焦慮せしめるに至たつたこと

第二款　現代反猶主義及び運動

右の如き諸理由に基く近代反猶主義は、一九世紀後半その最高潮に達したのであるが、第一次大戦を轉期として、眞に本格的な展開をなし、幾層倍となく強化されて現代に於ける反猶主義を生み出したのである。

即ち獨逸に於て

一、大戦時に於けるユダヤ人の非愛國的なる數々の行爲が國内を混乱、崩壊せしめ、敗戰の重要原因をなしたとみられたこと、

二、第一次大戦末期に成立した獨、墺、ソ聯政權及びその前後の共産主義運動、共産革命失敗後の社會民主々義政府等に於てユダヤ人が重要な地位を占め、ドイツを屈服せしめた聯合國側に於てもユダヤ人が活躍し、國際聯盟又ユダヤ人の固むる所となつたこと、

三、大戦後共和政權下のドイツに入り來れるユダヤ人が、既住の同族と共に、政治、經濟、自由職業、學界、言論界、映画等に於て甚大な勢力を占め、ドイツ民族を壓迫し或は之を凌駕せんとしたこと、

之等の具体的諸原因によつて、ユダヤ人憎悪は大戰後の獨逸に於て新しく爆發した。ナチスのヒットラーは、その指導者として現はれ、排猶運動は再び辛辣に強行せられるに至つた。官公職よりの罷免、一般社會生活職業上の諸制限、財産沒收、禁業、シナゴーグ、店舗の焼打、ボグロム等となつて現はれた。その窮極の目標は、ユダヤ人の完全放逐に在る。かくて既に幾十萬のユダヤ人は難を國外に逃れんとして新たなる移動をなしつゝあるのである。

而もナチスはあらゆる戰爭、革命、社會不安はすべてユダヤ人の所爲として、海外へ宣傳これ務めるのであるから、ユダヤ人の進出に恐れをなしてゐた諸國に於て反響を呼び起したのは自然である。先づイタリー之れに共鳴し、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、デンマーク、スイス、オランダを動かした。のみならず、英米両國へも移植されたのである。

此處に於て、ナチス・ドイツに於ける反猶太主義の指導者としてのヒットラーの對ユダヤ人觀を一瞥しなければならない。けだし民族論的な反

猶太主義は現代反猶運動の一特色をなすものと云はねばならぬから。

ヒットラーは「我が闘爭」に於て次の如く述べる。

「民族的世界觀は、人類の意義をその種族的元素の中に認める。此の世界觀は、國家に對して原則的には單に目的の爲の手段のみを認め、國家の目的は人類の種族的存在の保持にあると考へる。同時に種族の平等性を信ぜず、種族の多様性と、その有する價値に差異を認める。」

而してユダヤ民族に對して「彼等は寄生民族として國家も固有の文化も有せず、その熱烈なる民族意識――選民意識は惡魔的なエゴイズムであり、彼等の智性は狡智である。彼等は自己の目的を達するために資本主義を利用し、共産主義を創造して、世界民族を崩解せしめんとしてゐる。分裂主義、享樂主義、虚偽怠慢等々は凡てユダヤ人の戰術である。彼等はドイツのボリシェウイキー化を完成し、之によつてドイツの知識階級を絶滅し、かくてユダヤ世界經濟の支配下にドイツ人の勞働生産力を隷屬せしめんとするのである」云々、

かくの如き民族觀、ユダヤ人觀がナチス・ドイツの反猶思想の根本をなしてゐることは疑はれぬ所である。而してこの如き民族觀は、第一次大戰後の極端なる經濟荒廢、社會不安、内外の諸壓迫對立の中に呻吟せる獨逸民族をその急迫せる危機より救出せんが爲に自然に湧出せるものと見ることを得るであらう。換言せば、ナチスの反猶政策は、對内的に、自民族の團結を圖る手段として、資本主義、共産主義をユダヤ的なものとして排撃することにより、間接に自國の資本家、共産主義者特に社會主義者及び自由主義者の制禦彈壓に資し、對外的には對ソ、英、米、佛等の外交問題に於て、之をユダヤ的と烙印して攻撃し以て親獨分子に呼びかける余地を残さんとせるものと云へるであらう。

かくて少數者たるユダヤ民族の驚異的進出に對する多數者——他民族の政治的、經濟的對立、相剋が、近世及び現代に於ける反猶主義の特色をなすと共に、ナチスの民族觀に基礎づけられたる反猶運動もその國際宣傳にもより且つは國際情勢の激變より來たる諸國の民族主義的全体主義的機運の勃興と相伴ひ、現代反猶運動に一つの民族的特色を附與せるもの、と考へられるのである。

之を要約するに、近世現代に於ける反猶主義は根本的に、ユダヤ人の各方面への進出が當該國家、社會に於て大多數者を構成する他民族にとりて恐るべき競爭者となつたこと、又當該國家の維持發展にとつて、ユダヤ人の持つ非愛國性と國際性とは、特に危險とされねばならぬことの二大理由に基くものと云はれよう。かくて、生來具備せる不撓の生活力と精神力とを有するユダヤ人が寄生小數者として、獨自の發展を遂げんとして之に對する、多數者他民族との間に惹起される經濟的、政治的對立相剋こそ、近世及び現代ユダヤ問題の核心を成すものと云へよう。勿論、此の場合に於ても、ユダヤ人の一貫せる民族主義による不同化性、宗教的反感、彼等の恐るべき諸性質並に習性に對する心理的憎惡等反猶思想の間接素因として潜在的に働いてゐることは否定し得ない所である。

ユダヤ問題の本質の何であるかに就て、その概略を右に叙述したのであるが、尚一言、現代ユダヤ問題の特色をなすものとして、所謂るシオン賢者の「プロトコール」なるものに言及しなければなるまい。このプロトコールは一八九七年バーゼルで開かれた會議の報告書と信ぜられて居るが、第一次大戰の末期頃ロシア語から各國語に飜譯され廣く流布されるに至つた。その内容は、シオン賢者の頭領が、ユダヤ人とフリー・メーソンと共同して世界を崩壊せしめ、ユダヤ人の世界帝國を建設せんとして描けた秘密計画であり、その戰術として、諸國民を相互に鬪はせ、政治的、経済的、道徳的に腐敗墮落せしめんとするものであり、それに全く猶太的であり、タルムードの世界觀、人生觀並に一般猶太人の考へ方がありのまゝに出てゐると云はれる。その眞偽に就ても兎角の論が存するが、むしろ問題となるのはその内容とみるべきであり、かゝる文書の出現によつて、現代反猶主義に特殊の性格を附與してゐる事は争はれぬ所である。

所謂るユダヤ禍の名稱の下に總稱される、ユダヤ民族の種々の活動が、例へ客觀的に相當の理由の認められる場合でも、往々このプロトコールに依つて事實以上に誇張され、主觀化され、ユダヤ民族は世界征服を企図する陰謀民族として、「國際秘密力」「地底政府」等々と云ふ如き一大秘密計画と組織とを有する如くに喧傳せられつゝあるのである。

此のプロトコールを根據として、演繹的にユダヤ問題を觀察することは勿論不可とすべきであらう。しかしその内容と一九一四年以後各國に惹起された事實との間に一脈の共通点の發見され得ること、又その指導者中には實際に斯る企図を抱き、その實現を期する、シャイロック的性格の者の存在し得ると云ふことが、ユダヤ民族の陰謀恐るべしとの深刻な印象となつて現代反猶思想の普及に有力な役割を果してゐることを知るを要するであらう。

第五節　ユダヤ人問題對策

今次大戰勃發以來ユダヤ民族の運命は益々悲慘の狀態に向ひつゝある

と云へるであらう。過去の迫害に於ては何れかへ逃げ路が與へられたのであるが、現在は各國とも植民地人口過剰に悩み、到る處経済不況に見舞はれ、各國とも國民主義的風潮濃く、ユダヤ人を喜こび迎へる所は殆く、彼等にとりては住み憎い世界と云ふべきであらう。三百十万の猶太人口を擁したポーランドは獨ソ兩國に分割され、一方はナチス排猶政策の犠牲となつて路頭に迷ひ、他方はソヴエート化による生活革命となり昨日までの資本家は無一文のプロレタリアと化しつゝある。

獨逸に征服せるフランス、ベルギー、オランダに於けるユダヤ人の運命も同様に悲惨の一語につきるであらう。

他方英米兩國の場合はユダヤ人との結合関係はそれ程たやすく一朝一夕に破壊される如きものではない、パレスチナ、シオニスト代表部は大英帝國に味方してデモクラシー擁護のために戦ふ旨の宣言をなし、又ナチス排猶の犠牲者救済の為に大統領以下米國官民が積極的活動を示してゐるが、既に兩國ともユダヤ民族との関係は飽和点に達して、進んで難民を自國領内に吸容する程の積極性を示し得ないであらう。パレスチナ建國も對アラビア人政策から支障百出の狀態である。

英、米、ソ三國に既住のユダヤ人は別として、殘された五―六百万人の運命は如何になるか。彼等を压迫せる諸國に於て、又彼等の落ちゆく先に於てユダヤ問題は激化されゆくのではないか。否しろこれは單に一ユダヤ人問題ではなく、之と関係をもつ凡ゆる國々の問題であり、世界人類の問題であるとも云へるであらう。さて此處に於て我々は更めて二千年以来繰返されてきたユダヤ問題解決の為に如何なる對策がとられたか、又それは如何なるものであるべきかを見なければならない。

第一款　過去に於けるユダヤ人問題對策

先づ順序として、ユダヤ問題解決の為に過去に於てとられた方策を一瞥しよう。

一、絶滅政策、これは最も原始的な形式に属するものであつて古代埃及、バビロニア、ローマに於て、中世ではイギリス、スペイン、近代

ではロシアに於て採用されたが、むしろ彼等の復讐心を刺激したものである。

二、隔離政策、ユダヤ人の居住を一定地域に制限せんとするものである。所謂「ユダヤ屋敷」は之に依て生じたものであるが、しかし、人間相互の自然的交通を遮断することは不可能であるし、所期の効果を期待することは出來なかつた。

三、改宗による同化融合政策、之はユダヤ人を基督教化することに依り一般西洋人との不同化性を除去せんと試みるものである。これは相當の歷史を持つものであり、特に十八世紀のユダヤ人解放以來實行され、西欧諸國及び米國では相當の成功を收めた如くに見られてゐた。しかしユダヤ人が依然として其の所屬國家と融合してゐないことは第一次大戰に依て明かとされた所である。從つてこの改宗政策に依ても、彼等の旺盛な排他的民族主義を全的に矯正することは出來なかつた。

四、追放政策、之は古くローマ、中世以降英國、スペイン、現代に於けるナチス・ドイツ等の實行せる所であるが、これは一國内の問題を他國

へ送りこむ結果となるに過ぎぬ。

五、獨立政策、ユダヤ人自身の側から「シオニズム」として提案されたるもので、パレスチナにユダヤ人の獨立國家を建設せんとするものである。シオンとはヘブライ語で「日の照る所」の義であり、思想としてのシオニズムは頗る沿革に富んだものであるが、政治運動としてはヘルツルに依て一八八二年起されたものと見られる。第一次大戰のバルフォア宣言を契機として英國委任統治下にその緒についたのであるが、現在のパレスチナの如き小地域を以て全ユダヤ人を收容することは勿論不可能であるし、對アラビア人の問題に依てその建國運動も阻害されてゐる實狀であり、これらの諸條件の改善されざる限り、心理的の効果は別として、實質的に問題の解決に多くをもたらし得ないであらう。

第二款　ユダヤ人問題對策

此の如く、云はゞ欧洲文明の幽界と陰影との表象の感ある、深刻複雜にして、解決困難なるユダヤ人問題に對し、將來如何なる對策がとられ

ねばならぬかと云ふ問題に當面するのであるが、もとより有効適切なる對策を、今俄に此處に開陳することは、よく企て得る所ではない。只問題の本質と、在来の歴史的事實よりみて、可能視される若干の方向を考へてみんとするにすぎない。

「歴史を通観するならば、あらゆる欧洲人が猶太人に反抗したことが判明する。このあらゆる」と云ふことは、確かに意味深長なことである」（ドストエフスキー）此の一句に依ても、ユダヤ人對非ユダヤ人の心の對立の深さが凡そ想像されるのであるが、ユダヤ問題の云はば心的地盤たる此の心構へにして何等か更められる所なくんば、諸般如何なる對策も十分の効果を收め得ないであらう。これはユダヤ族のみならず、非ユダヤ族の側に於ても當然同時に反省さるべき点と云はねばならぬ。相互の偏見、人種的差別感、憎悪の感情を極力冷静に省察排除すると云ふ努力に於て先づ、問題解決への第一歩が踏み出されたと稱すべきであらう。これは一見迂遠であるが、人間社會生活に於ける感情的心理作用の重要さに想倒するとき、又極めて難事であることが判る。

對ユダヤ族對策に於て、かつて或程度の成功を收めたる政策同化策が、破綻を來したのも結曲相互の差別感の露呈に依るものとすれば、能ふ限り偏見を去り、平等感につくことが差別感に端を發する問題に解決の緒を與ふることゝなると考へられる。

かゝる心理的自主的對策を先づ第一に顧慮すべきであらう。

シェモラアも云へる如く、大多數のユダヤ人が若し、シャイロックとナタンの中間氣質のものとすれば、右の如き基本的心構へを志向する同化政策は、依然としてユダヤ問題對策の一つの重要なる方向を示すと云へるであらう。即ち過去の經驗に基き、單なる政策を目ざすに非ず、むしろ實生活上の差別感を除去する点に重きを置かねばならぬ。爲政者としては、これを社會的政治的に誘導規制する必要がある。即ち從来諸國のユダヤ人間に認められる如き、凡そ宗教的、文化的或はその他の意図のもとに行はれる集會、或は諸組織、施設にして、徒らに民族意識を培養

し、政治活動たらしめ、國際的連絡にまで及ぼさしむるが如き結合に對しては、断呼両検討を加へ之を統制下に置くべきであらう。かゝる制度の下に於ては如何に旺盛なる民族意識も時と共に弱まらざるを得ぬであらう。現にユダヤ人に對し、何等差別待遇を與へず、平等の地位を保證すると共に、一断乎民族主義活動を禁止してゐる國もある。

更に現にユダヤ族を國内に抱擁せる國の現實的問題として、非ユダヤ族との無用の對立、摩擦を緩和する意図に於て、適當たる隔離政策をとることも又止むを得ぬであらう。只古代及び中世の如き、ゲットー式(ユダヤ窟)隔離を爲すは不可であり、何等か現代的方法、例へば定住区域を指定して、或る程度の自治生活を與ふるが如き方策が考へられる。

更にユダヤ人の職業分散に就て考ふべきであらう。即ち従来、ユダヤ人は寄生小數者として主として都市に集中し、商業其の他都會的職業に偏して他民族の競争者として目だつに至りたるのみならず、中間搾取によつて他民族に寄生するとの印象が、反猶思想を培養する結果となりしことよりみて、ユダヤ人が各経濟部門に分散的に進出することを必要とするであらう。労働、農業等に從事して職業分布の偏倚を矯正すべきであると考へられる。ユダヤ人自身自發的にかくするのみならず、爲政者に於て、彼等の経濟生活調整に乗り出すべきであらう。

尚、ユダヤ人は世界各國に分散寄住してゐるのであるから、此の問題の解決は關係諸國の連絡、協力を必要とする。而して追放その他諸種の事由より諸國に止まり得なくなつたユダヤ人を收容する爲に、一定の土地を解放して、彼等の獨立又は自治を行はしむるも一方策と云へるであらう。

かゝる見地に於て、ナチス獨逸政策により追放される幾十万のユダヤ人の爲に、米大統領提唱の下に三十二ヶ國より成る國際政府委員會が結成され、新たなるユダヤ人收容可能地に關し調査研究されてゐる所と聞く。けだし、これも亦ユダヤ問題解決の一方向を指示するものと云ひうるであらう。

近代ユダヤ民族の國民的自覺に基く代表思想とみられうるシオニズムが、第一次大戰後平和會議の確認を得て、具体化した、ユダヤ民族二千年思慕の地パレスチナのユダヤ国建設に於ける、對アラビア人問題の如きも亦か丶る見地より運に顧慮さるべきであらう。

以上比較的可能視されるユダヤ問題對策の若干の方向を列擧したのであるが、全問題の如く複雑なるものに在りては、夫々の特殊事情を斟酌し、時と場所とに應じ、綜合的見地より對策を施すの他ないであらう。

我國とユダヤ人問題の関係及び、これに對する對策の如何、又その獨特の立場に就ては、節を更めて言及することゝしたい。

第六節　日本とユダヤ人問題

以上、ユダヤ人問題について、極めて概括的であるが、その發生、原因、内容、特質等を叙述し、之に對し非ユダヤ人社會が如何なる態度を持したかを見たのであるが、最後に日本とユダヤ人問題につき言及しなければならない。

第一款　日本に於けるユダヤ人

日本に始めてユダヤ人社會が出來たのは一八八〇年代長崎に於てゞあるが約十年間に略百人を算するに至り主として商業に從事した。彼等はロシア、アメリカ、イギリス等から渡來したものである。然るにその後長崎に代り新に横濱、次いで神戸にユダヤ人社會が出現した。主として英、米、近東諸國、印度から來住し、多く貿易に從事し、相當繁榮した。

就中横濱にはロシア系ユダヤ人の、戰爭と革命より逃れ來るもの多く、かくて一九二六年日本國内に約二千人のユダヤ人が居住した。その後一時的避難民の引揚げにより一九三一年五百人余と成った。その後多少増加し昭和十五年現在世帶数約四百、人口千人内外と推定され、主として横濱神戸に相半して居住してゐる。殆んど大部分は貿易業に從事し、極く少数の外交関係者、教師、技術者等を数へた。

而して在日、ユダヤ商社の七、八割までは神戸に集中し、その数昭和十

四年一月現在八十五社を数へ、大部分は個人経營で、僅少資本を以て手堅い活動をなしてゐる。

而して在留ユダヤ人に就て特記すべきことは、昭和十四年日本最初にして唯一の猶太民會を組織して同族の團結を計つてゐることである。同民會はハルビン極東ユダヤ民族中央協議會の指令下に立つものである。

消費的有力者としては百万円程度のものが二、三存する。

第二款　満洲に於けるユダヤ人

次に満洲に於けるユダヤ人を一瞥せんに、帝政ロシア政府は鉄道建設にユダヤ人を利用し、ユダヤ人は自由の新天地を求めて、南露方面より企業心に富んだ多数の者がハルビンに入り込んだ。その他日露戦争に於けるユダヤ兵、革命を逃れるユダヤ人の入満する者等多く一九〇八年頃既に六千人に達し、一九一七年には一万一千人以上を算した。主としてハルビンを本據として、鉄道建設事業、商業、金貸業等に従事した。次第に経済的地盤を固め、同族間の公供施設を次々に開設して行つた。

ソビエット政權となるや巧に之れに順應し、その勢力を伸張した。露亜銀行、極東銀行等の金融機關をはじめ、ウスリー鉄道支社、その他諸々のソビエット機關、東支鉄道ソ聯側要職等いづれもユダヤ人がその首脳部であつた。かくて一九二六年頃はユダヤ系企業が最も繁栄し、社會的勢力も絶頂にあつた。

その後露亜銀行の破産、ソ支紛争等に依り勢力漸次衰退し一九三一年在満ユダヤ人数は五千人以下に減じた。

ついで満洲國の誕生、東支鉄道の喪失、第二次欧洲大戦の勃發による満洲統制経済の強化は彼等の衰退に拍車をかけ、現在在満ユダヤ人は三千三百を算ふるにすぎぬ。

しかし、彼等特有の粘着力と、その國際性による在外同族資本との連絡は彼等の潜勢力を軽視することを許さない。特に各主要地に民會を組織して、同族團結を確保してゐることは銘記されねばならぬ。而して極東在住ユダヤ人を統轄するハルビン極東ユダヤ民族中央協議會は全世界

の同族指導機関と結合してゐる。
尚数百万の富を有する財界有力者を数名算へることが出来る。

第三款　支那に於けるユダヤ人

次に支那のユダヤ人にも一瞥をくれなければならぬが、この点は西欧資本主義の東漸と共にユダヤ人の対支進出が行はれたとみてよいが、上海を中心に香港、天津、青島等に居住し夫々本國勢力の伸張に寄與した。
人口概数をみれば、現在天津約千八百、北京約百、青島約二百である。
天津、青島には会堂が組織され、その他の諸団体、社會施設が存する。
多く商業、銀行業、その他の自由職業に從事してゐる。
上海に於けるユダヤ人は極東のユダヤ人を語るに當つてその最有力な存在として注目される。最近までの情勢に於ては、上海を本據とする英國系猶太財閥の勢力は時に支那を抑へ、國際關係を左右するの観があつた。
事変前約四千人のユダヤ人を数へ、三千数百はアシュケナジム系に属し、

残る四、五百のセファルジム系が支配的勢力を有した。他に獨墺よりの避難民は約二万人に達した。
上海には幾多のユダヤ財閥を数へうるが、一頭地を抜くものは上海王を以て呼ばれた、サッスーンである。彼の統率せるサッスーン・バンキング・コーポレーションは単に極東財閥たるに止まらず、國際ユダヤ投資金融機関であつて、その政治的勢力も大であつた。本部は倫敦にあり、上海に於て英、米、佛、獨、日等のユダヤ商事會社、銀行等を組合員として、英蘭銀行と香港上海銀行を親銀行とし、鉄道、鑛山、牧畜、築港、土地賣買、為替賣買、金融保證等を経營し、投資本額三十億に達すると云はれた。
上海に於けるユダヤ人はその構成及び勢力関係に於て錯雑してゐるので、此等を統合する諸機関、團体も複雑であるが、同族の運命に共通した問題に當面するや、一切を超越して結束する。
以上、日満支に於けるユダヤ人の概況を一瞥したが、次にそこに於け

る現実的ユダヤ問題の何たるかをみなければならない。日本とユダヤ問題との関係は當然、満支に於けるそれを包括する。

第四款　日本に於けるユダヤ問題（初期）

我國に於てもユダヤ問題は漸く世人の注意を惹くに至つたが、問題そのものは敢へて今日に始まると云ふ譯ではない。既に切支丹渡来の當時からその黒幕としてユダヤ人の活動のあつたこと、徳川時代和蘭通商によつてユダヤ商人のために莫大な金銀が日本から持ち去られ、同國と共に押し寄せた欧米勢力の中にユダヤ人の積極的な活動の認められること等は、ユダヤ問題が実質的には日本にもあり得たことを證明する。唯當時欧米の内部事情に通じざりし日本としては、之を問題として意識せずにあつたと見るべきであらう。

我が國に本問題が初めて紹介され、意識的に、論議されるに至つたのは、今から約二十年以前のことである。即ち一九一四年の第一次大戦が誘引となつて、同十七年ロシアに革命が勃發するや、同大戦も又革命も共にユダヤ人の陰謀であるとの説が一部に行はれ、且つ、「シオン賢者のプロトコール」が流布されるに至つたのと相俟つて、俄然我國にもユ

ダヤ問題が登場するに至つたのである。當時の浦鹽派遣軍に關係せし軍
人等がロシアの反過激派軍關係者を通じて得た「ユダヤ禍」に關する知
識、特に露譯された「プロトコール」より受けた印象等が、其儘日本に
持ち込まれ、紹介されたに始まるものと見られてゐる。
言ふまでもなく、第一次大戰は、ユダヤ人の策謀、暗躍に因るものと
のみ斷じ去ることは早計であらう。併し右の歴史的二大事件に於てユダ
ヤ人が如何に有力な參加をなしたかは、數々の明白な事實の證明すると
ころである。從つてユダヤ人の如何に警戒を要すべき存在であるかを、
我國の一部識者が一應身近に感じたであらうことは當然と言はなければ
ならぬ。しかし、我國におけるユダヤ問題登場の動機を單に右の事實の
みに限定することは適當でないであらう。既に當時の我國思想界及び財
界の歩みつゝあつた方向の中に、憂ふべきユダヤ禍の我國の足下にも忍
び寄りつゝありし事實をも強ち否定し得ないのである。
明治以來の我國思想界は云はば西洋學の直譯に過ぎざりしことは、改
めて指摘するまでもない。然るに、イギリスの功利主義及び立憲主義、
或はフランスの自由主義、いづれも皆二千年來の流浪寄生生活から培は
れたユダヤ人の傳統的な精神に相通ずるものであり、彼等の積極的參加
の下に生成發展を遂げたことは、史實の明示するところである。更に第
一次大戰以來直輸入された民主主義、社會主義、國際主義等の諸思想亦
同斷である。而して此等の影響を受けた我が學界、思想界も一部に於て
遂に國体觀念上許し難き言説の現はるゝ狀態にまで發展せしことは、周
知の如くである。他方當時の我國經濟界に於ても、漸く國際經濟との連
繋を濃くしつゝあつたが、斯る事情は歐米財界に覇を稱ふるユダヤ國際
金融資本の侵入と跳梁を許し、進んで我財界の死命を制するは勿論、前
記思想的影響と相俟つて、一國の政治方針までも掣肘するに至るなきや
を危惧せしめたる事實的根據が無かつたとは云ひ得ぬのである。
即ち、我國に於けるユダヤ問題は、當然登場すべくして登場したので
あるが、併し當時の一般社會が之に對し、極めて無關心であつたために、

その所論も単なる好事家の好奇心を満足せしめる程度を出でなかつた。

而して、それは主として次の如き諸理由による。

一、ユダヤ問題は欧洲に發生せしものであり、日本に於ては、前述の如く間接的な形をとりしものは別として、直接には問題とすべきものの存在せざりしために、この複雑な問題を感知する爲の必要な予備知識に欠けてゐた。

二、ユダヤ人は英米其他民族の國籍を使用して、その國人の如きカムフラージユをなし、所属國家を背景として行動する場合多きため、日本人には、その識別困難であり、從つて「ユダヤ禍」による被害の正しい判断をなし得なかつた。

三、我國に於ける一部ユダヤ論者の問題取扱ひの方法に問題が存し世人の本問題に對する不信を昂めた。一例を示せば、一切の問題をユダヤ問題に結びつけんとし、ために、往々にして見へすいたこじつけをなし、不合理な獨断、偏狭な見解の押賣りを爲す感を與へた如き、或は日本の直面する切実なる諸問題に無関係な事実の羅列に終始する観のあつた如き、即ちそれである。

要するに、我國のユダヤ問題は假令一種の輸入ユダヤ禍論にスタートせしものとするも、他面之を裏付ける若干の事実的根據の上に立つものであつたことは明白である。唯その事実的根據なるものが間接的のものであり、且つ前述の如き諸事情が作用して、ユダヤ問題に何等の理解さ持ため一般人の注意を惹くに至らざりしところに、その展開を見ざりし主要な理由が存するやうに思はれる。

第五款　現代に於けるユダヤ人問題

併し、今や我國人が欲すると欲せざるとに拘らず、ユダヤ問題は種々の意味に於て、東亜にとつても、日本にとつても、重要性を加へ来つたことを否定し得ない。而もそれは、從来間接的な問題に過ぎざりしものが、現実の問題として直接我々の眼前に展開されるに至つたのである。

かゝる新しき意味に於けるユダヤ問題は、大体満洲事変以降の我國の

大陸進出及び獨・伊の勃興を中心に捲き起された世界情勢の緊迫等を契機として登場せしものと見られ得るが、以下それに就て、叙述を試みるであらう。

滿洲に於けるユダヤ人問題

滿洲事変の結果日本が滿洲を占據し、次いで我國と一体不可分、共存共栄を標榜する滿洲國の建國となるや、その勢力圏内には滿洲の草分けとも稱すべき数千のユダヤ人が現に居住して餘喘を保ち、國際的に種々の繋がりを持つ彼等の動向が、日滿両國にとつて重要な関心事となりしことは當然と云はねばならぬ。今その理由を闡明するために、在滿ユダヤ人が過去に於て日滿側と如何なる関係にありしかを述べることは、問題の核心を衝く上に徒爾ではあるまい。

最初彼等は帝政ロシア勢力の一翼として、吟爾濱を本據に滿洲の開發に貢献したが、一度革命起り新ソヴエート權力の滿洲進出となるや、巧に之と順應、提携して、ソヴエート勢力の對滿浸潤を援け、自らも一九二五、六年頃に至つて繁栄の頂点に達した。この時代の彼等は明かに、新舊両ロシアの出先勢力として日滿（或は日支）側に對して對立的な分子であつた。

然るに其後に於ける滿洲よりのソウエート勢力の退潮と張軍閥の權力増大は、著しく彼等の立場を不利にした。支那側官憲の彼等に對する粗暴且掠奪的な行爲は益々募りその前途は正に暗澹たるものであつた。これ彼等が滿洲事変勃發の當初、日本の大陸進出に共鳴し、特に日本軍の哈爾濱入城の際の如き、同市居住ユダヤ人の圧倒的な大多数が之を歓迎せし所以であつたのである。當時の彼等は日本勢力に依存する事に依つて、その前途に光明を見出さんとせしものなる事は、容易に推測され得たところである。

併し事変及び滿洲建國を續ぐりて捲き起された複雑な國際関係は、彼等の歸趨をも多岐ならしめた。多くの者は在米ユダヤ指導層の指令に動かされ、一部の者は某國の走狗となつて密かに反日的言動を提供して之

を援けたるものが存したと傳へられた如き、その一例である。

併し大體に於て在滿ユダヤ人の當時の心境は、一面に於て日本の滿洲進出に共鳴すると共に、他面深い繋りを持つ反日諸國の働きかけに會して困惑の状態に陥り、去就に迷ったとみるのが眞相に近いと考へられる。

然し、彼等のかゝる動揺に終止符を打つ新事態が發生した。即ち、民族協和を標榜する新生滿洲國に於てロシア・ファシスト黨の公然たる反猶運動がその機関紙を通じて行はれるに至ったことであり、更に時を同じくして哈爾濱に於ける富裕ユダヤ人に對し數々の迫害が繰り返されたことである。これ以来在滿ユダヤ人の態度は急激に反日滿的となり、歐米諸國特に米國に於ける對日輿論を激成する上に、相當の役割を演じたであらうことは、否定し得ない。

其後一九三五年頃に至り、在滿ユダヤ人の日滿側に對する態度に新しい傾向が認められるに至った。それは、緊密な國際的連絡によって歐洲に新戰爭勃發の機運を早くも感知した彼等は、極東に於て日滿側との関係を調整し置く必要を痛感し、努めて之との接近を図らんとするに至ったことである。之等は勿論他面に於て、日滿側が漸次ユダヤ人に對する横暴行爲の取締を嚴にせし結果、彼等の信頼を強めしことも與って力ありしことは爭はれぬ。而して一九三七年以来三回に亘り毎年末哈爾濱に開催されたる極東ユダヤ民族大會こそは、かゝる新傾向を如實に物語れるものとして、指摘され得るであらう。

同大會出席者は哈爾濱以下の滿洲國内諸都市、大連、神戸、天律、青島、上海等の居住ユダヤ人より選出されたる代表者であるが、彼等が第一回大會より第三回大會に至るまでの大會宣言及び決議に於て終始一貫表明せしところは、日滿両國との共存共榮の立場より反共産主義を堅持すること、両國の彼等に對する公正なる取扱を感謝すること、両國を中心とする新秩序建設の大業に對し協力を誓ふこと等であった。大會で採擇された此等の宣言や決議が、その都度指導的諸機関を通じて、全世界の同族に傳へられたことは勿論である。

近年、非常時経済統制の強化が彼等の生業をも窮屈となし、且つ、日・独伊三國同盟の結果は、日満両國にも、排猶政策の実施を見るに非ずやとの危惧を抱かしめ、一部ユダヤ人の上海や米國への移住熱を煽り立て、その意味に於て彼等が一種の動揺状態にあることは否定し得ない。然るに、前記の如き彼等の一般的新日満傾向には左して変化が認められざる如くである。日満當局としては彼等の斯る動揺を鎮め、右の望ましき傾向を益々助成・善導するを要するであらう。

在満ユダヤ人は現在僅かに三千数百人に過ぎぬその数より云ふも、一般社會的にみて、眞に微々たる存在たるにすぎぬと云ひ得るかも知れぬ。しかし、一度我々が、彼等の満洲との特種関係、極東ユダヤ人中で占める地位、歴史的なユダヤ人社會として持つ全世界特に米國ユダヤ社會との緊密たる連繋、彼等大部分の者の出身國たる現在のソ聯邦との微妙なる関係等に留意し、他方彼等が満洲に於ける今日までの動向を回顧しつゝ更に将来のそれを豫想する時、それは決して渺たる存在に非ること

が痛感されるのである。従つて之を如何に指導し統御するか、彼等の向背の岐るゝところ其處に如何なる影響が齎らされ得るかは、日満両國の内外政治に直接関係ある重要問題としなければならぬ。こゝに在満ユダヤ人を中心として、一箇のユダヤ問題が確に存在する所以である。

上海に於けるユダヤ人問題

次に上海を中心に蟠踞せる、英系ユダヤ財閥及び、之を圍繞する一般ユダヤ資本を中心として惹起されたる對日問題こそ、東亜新秩序建設の癌をなしたることは凡そ世人の知れる如くである。

彼等が蒋政権と合作して、夫々所属國の出先抗日機関たるの活動を爲すに至れる、直接原因は、彼等の投資投資が飽和状態に達したので、極東に於ける爾投資の目標を満洲に求めその目的を達し得ざりしに在る。

彼等は満洲國建設を、その投資對象として選び、併せてドイツ排猶政策による避難民の收容地を満洲に求めんとしたのである。彼等の計画は挫折すると共に満洲に於て、反猶運動が起つたので、彼等は掌を返す如く

反日に轉じた。即ち、在支諸新聞の反日氣勢を煽り、之を歐米諸國に擴大せしむると共に、資金援助をなして、抗日人民戰線の結成を助けた。更にその投資方向を轉換して、國民黨政府を動かし上海を起点とする中支橫斷鐵道十二ケ年計画をたてヽ沿線資源をも開發せんとした。その前提として斷行されたのが、サッスーンの獻策と宋子文の協力のもとに英系ユダヤ人リース・ロスの提案により成立した例の幣制改革と見られる。而して、此の厖大な對支再投資計画は單にサッスーン財閥に止まらずユダヤ國際財閥の積極的働きかけによるものなることは明白である。從つて抗日戰線を結成せし國際ユダヤ財閥の役割は、援蔣諸國の外交政策の根幹と相通ずるものであり、敵性ユダヤ財閥の活動を封ずることが、又その外交策を排除する方策となる。大東亜戰爭の勃發と共に、外面的な様相は一大變化を來たしてゐるが、その潜勢力は恐らく一朝一夕に洗ひ去り得るものではなく、將來東亜新秩序建設途上、在支外國籍ユダヤ財閥の復活は、我々に重大なユダヤ問題を提供すると云はねばならぬ。

新來ユダヤ避難民問題

一九三八年ドイツに於てナチス政權の排猶政策が强化せられ、續いて獨墺合邦やチエッコ、ポーランドの壞滅と此等諸國に於ける排猶政策の実施は、歐大陸に於けるユダヤ人の地盤を根底から搖がして、無数の避難民を國外に送り出した。その極東方面に流れ込む者の数も夥しかつた。滿洲及び北支方面は逸早く制限措置に出でしため、主として入國制限の無かつた上海に向つて殺到し、一九三八年末は早くも千五百名に達し、翌三十九年更に一萬二千名の上陸を見た。此等避難民の際限なき流入に狼狽した現地諸官憲は、相互折衝の上一定の入市制限を行ふこととなり、その結果幾分渡来数は減少したが、增加趨勢は依然として續き、昨年五月頃には一萬八千人、現在總数約二萬(一説では二萬三千乃至二萬五千と稱される)に達する避難民が上海に氾濫してゐるのである。

此等避難民の大部分は獨墺よりするもので、出國に當り現金十マーク以上の所持を禁止せられあるが故に、一部の者を除く外は無一文、無資

産である。彼等は現地に既設の欧洲避難ユダヤ人國際救濟委員會や新設の上海欧洲避難ユダヤ人救濟聯合委員會、或は現地ユダヤ人有力者等の斡旋を得て、サツスーン系所有のアパートや、ユダヤ協會、小學校等に收容された。次に此等一般避難民に對する救濟狀況如何と云ふに、昨年八月頃の統計に依れば約七、八十名のものが合宿所に收容されて給食を受ける他、一般には就職の斡旋、醫療救濟、開業資金無利子貸付部の融資に依る開業援助等が、救濟諸機關によつて行はれた。因みに、渡來ユダヤ人の職業別を見るに、一作年救濟委員會に爲した三千餘名の職業登錄によれば、商業關係者が斷然首位を占め、有技術者が之に次いでゐる。此等の中、救濟機關の斡旋により就業し得たものは、同年十一月現在にて千二百餘名に達したが、内、商業關係が同じく首位を占めて五四六件、工業關係二五一件、醫業關係一六七件であつた。

以上述ぶるところの避難民救濟には多額の費用を要したこと勿論であるが、之が爲に收納した寄附金額は約三百七十萬元に達し、其他別途の支出を加ふれば優に四百萬元を超ゆるものがある。右寄附金收容額三百七十萬元の中、約二十六萬元は現地で集められ、殘る三百四十萬元は外貨で受領されたものであるが、外國側寄附の主なるものは、紐育のアメリカ・ユダヤ共同分配委員會よりの約五十五萬米弗、英國の二萬三千餘磅等であつた。

中欧ユダヤ避難民の上海渡來狀況を概觀すれば、實に右の如くである。斯る事實から東亞に於て如何なる問題が新に生じつゝあるかを、次に觀察しなければならぬ。以下その主なるものに就て若干の説明を加へるであらう。

先づ順序として現に當面しつゝある問題を擧げれば、その第一は、彼等避難民の救濟費には自ら限度があり、彼等の救濟が意の儘に行はれ得ぬ結果は、無爲徒食者を街上に氾濫せしめ、一個の社會問題を生ぜしめてゐることである。地元ユダヤ人が救濟費捻出に最近悲鳴をあげだしたことは周知の如くであるが、救濟費の大部分をなした外國側の寄附金も、

今次大戦の影響を受けて杜絶状態である。従って、彼等避難民の過半は路頭に迷ふ他はない。治安上からみるも由々しき事態としなければならぬ。況や渡来避難民の中には革命運動常習犯、共産主義者等も相當に居ると傳へられるに於てをや。

更に彼等避難民の職業戦線への進出は、假令それが緩慢なるテムポを以て行はれつゝあるにせよ、一部先住のユダヤ人の二萬数千を数ふる白系露人の大部分に對し、生活上の安定を脅かす悪材料となつてゐることも否定し得ないのである。

上海には既に事変による数十萬の支那人難民もあり、斯かる事態は事変後の現状處理に當る我國にとつて、何等かの應急的措置を必要とするものなることは言ふまでも無いであらう。

次は渡来避難民を繞つての将来に関する問題である。左に項を逐うて、之を觀察しよう。

史実の明示する如く、由来ユダヤ人は傳統的に混乱に乗じて地歩を固むるごとに妙を得てゐる。現在事変進行中であり、現状處理の充分ならざる際に、支那経済の心臓部に彼等が次第に定着するといふことは、必ずや将来同地を中心として東亜の異分子による一大勢力の出現を許すこととならざるを保し難い。この事は、従来も上海がユダヤ金権を中心とする欧米資本力の策源地たりしだけ、一層可能性を加へるものと見るべきである。而してその結果は欧米勢力の再強化を来し、その余支に及ぼす影響、日支人に與ふる脅威の僅少ならざることを覺悟しなければならぬ。尚ユダヤ避難民の過半は在留邦人の居住する所謂虹口以北一帯に蟠踞し、彼等の集團が所々に群生しつゝあるが、此等の地域は皇軍の聖戦による占據地帯で、謂はば我居留民の樂天地たるべき地である、にも拘らず、彼等ユダヤ人の此の方面への流入は、今後その定着の暁に於て此等一帯の地域をユダヤ人の居住地と化する可能性が多分にある。

将来彼等獨自の國際的互助連絡、商才等によつて邦人權益を侵蝕することなしとは断じて言ひ得ないのである。

以上を要するに、上海避難民を繞る現在及び將來の諸問題は、東亜建設途上の我國に向つて、現狀の愼重なる檢討と適切果敢なる措置の必要なることを示唆するものと稱すべきである。

而して此等避難民に對する我方の對策の如何が、同時に對外的にも極めて微妙なる反響を呼び起し得べきことを充分に銘記し、善處するの要あることは勿論であらう。

第六款　日本に於けるユダヤ人問題對策

ユダヤ民族問題に關する以上の叙述を終つて、最後に我日本として、特に大東亜戰下の日本として、ユダヤ人問題に對し如何なる態度を以て臨み、且つ右の現實的諸問題に對し如何なる對策を樹立すべきかの問題に當面する。

既述の如く、ユダヤ人問題は、甚だ廣汎に亙る内容を有するので、それ等の十分なる檢討、正確なる眞相の把握なくしては、到底十分の對策を樹立し得ない。主として西歐社會に於て發生し、その歷史的、社會的環境の下に幾轉變して今日に及べる、同問題の云はゞ一般的なる對策の何であつたかに就ては、既に一瞥した所であり、一般的關係に於ては、もとより、それが日本の問題たるに於て、特に之れと趣を異にすべき理由は存しないが、しかし、又日本のユダヤ人に對する歷史的、社會的なる特殊の事情は、自ら別個の立場の存在することを否定し得ない。

換言すれば、日本とユダヤの關係は、既述の如く主として間接的であり、一般の無關心狀態も、かゝる事情の反映であり、東亜の新事態と共に、新に現實的なるユダヤ人問題に直面するに至れるものであるが、その内容に於ても、西歐に於けるものと同日に語るを得ない。即ち西歐の如く直接の怨恨を相互に抱くいはれは存しないと云ひ得るであらう。

而して、之に臨む根本態度に於て、先づ日本的公明正大の精神を以てすべきことは當然であらう。歷史的事實に徵して明らかなる如く、我國は、肇國以來、如何なる民族に對しても偏狹なる差別感を抱かず、又虐遇討滅的態度を以て臨んだことはない。歸順するものは、之と和協同化し、

如何なる外来民族、異民族をも包容する、大なる寛仁の精神を持してゐる。大東亜に於ける新秩序の建設も、居住各民族をして各々その處を得しむると云ふ、皇國精神の發露をその根本基調とすること云ふ迄もない。

東亜の新天地に安住の地を求めて、渡来するユダヤ人に對しても、之に臨む根本的態度に於て異る所はあり得ない。

只然し、ユダヤ人の思想、信念、進退行藏に非議すべきもの少くなく、幾多の史的事實に徴しても、大東亜戰下特に注意を密にし、警戒を嚴にすべき点なしとしない。若し彼等獨自の宗教的信念、民族理想、思想論理に基く過去、現在の動向畫策を見失つて、徒らに樂觀的態度を以て経過せんか、思けざる悔を残すことなきを保し難い。且つ東亜に於けるその人口の僅少は、決してその勢力の微少を示すものではなく、彼等の各分野に於ける世界的実力との密接なる聯環に在ることを忘れてはならぬであらう。

さて、現實に日滿兩國の統治下に在て皇道或は王道政治に浴しつゝあるユダヤ人は約一萬であるが、彼等が日滿兩國の公正なる取扱ひに感謝し、防共並に新秩序建設への協力を表明しつゝあることは、彼等が日滿兩國の庇護の下に安居樂業せんと希望せるものと云ふべく、かゝる傾向は當然益々増進せしむべきであつて、差別的待遇は絶体にさけ、無用の刺激を以て我に離反せしむるが如きことはとらざる所である。勿論彼等のかゝる意思表示を過大に評價することは不可であるが、先入的偏見を以て見ることは最も不可とすべきであらう。

上海を中心として蟠起せしユダヤ財閥の経濟的、政治的動向を通じて、我が國が重要なる對ユダヤ問題に當面せしことは既述の如くであるが、大東亜戰爭の勃發は此の間の状勢を一變せしめたが、多年畜積された潛勢力は一朝にして抜くで得ないであらうし、且つ將来の問題をも併せて考ふるならば、彼等の侮日、抗日の原因が、いづれも日本の眞意を誤解し或は日本の實力を過小評價せしにありしことは否定し難い。故に此の点の是正を以て根本對策とするであらう。我國の對支進出を欧米流の

帝國と我と同視せしことの誤り、及び彼等にして日本の新秩序建設に協力する者ならばその經濟の安全なることを知らしめ、且つ何よりも日本の實力を知らしめることによつて、將来の大東亞建設途上の障害を除去するを得るであらう。

中欧避難ユダヤ人に就ては、獨伊との外交上盟約は勿論考慮しなければならぬ。しかし、根本的には依然皇國日本の道義精神を以て臨むべきであり、政府當局の「彼等をユダヤ人の故を以て差別待遇をなさず、第三國人として公正に取扱ふ」と云ふ言明にその根本趣旨は表現されてゐる。されど、大東亞戰下の我國に於て、勿論戰時下の特殊事情、且つユダヤ人の特殊性に鑑み、制限、禁止等適宜の處置の爲さるゝことも又止むを得ないであらう。

將来ユダヤ運動と之に對立する反猶運動とは如何に發展するか、ユダヤ人の運命如何は、もとより予測し得ないが、既述の如くこの問題が、幾世紀間、幾多民族が對立相剋を繰返し弱肉強食を續けたる西洋個人主

義、帝國主義社會の中に發生し、各時代の客觀的状勢に照應しつゝ夫々の形態に於て相闘はれて今日に及べるものであり、その病根の深く症状の激烈なる、その解決を殆んど困難視せしめてゐるのである。

しかし、かゝる西洋式覇道の精神とは、根本的にその趣を異にする。皇道日本の精神に基いて、「大東亞の新秩序の下に、万民協和の理想の實現せられるとき、ユダヤ人問題も、その解決の曙光を見出し得ると云へるのではあるまいか。此處に世界に範をたるべき、皇國日本の道義と、日本精神の使命が存すると云へるであらう。

附録　「タルムード」拔萃

「シナイ山とは如何なる山であるか？それは其處よりあらゆる民族の上に憎惡が拡がつて行つたところの山である。

「世界はイスラエル人のためにのみ創造されたのである。

「あらゆるイスラエル人は王者の子供である」「猶太人は、何處へ行かうとも、みづからその地の王とならねばならぬ」。

「非猶太人の宮廷は家畜小屋に等しい」。

「聖書に「隣人」と書かれてある場合には、非猶太人はその中に含まれてゐない。「非猶太人を掠奪することは許されてゐる。何故ならば、聖書（レビ記一九・一三）に「汝の隣人より物を奪ふべからず」とかかれてあるからである。」

「非猶太人の財物は主人なき財物に等しい。それ故にそれは、最初にそれを入手したものの所有となるのである」。

「拾つた物を非猶太人に返却しようとするのは罪悪である」。

「神を欺瞞する場合にも狡猾でなくてはならぬ」。

「あつかましくやれば、神も我々の意に従ふのである」。

「主なる神の肉体は、二百三十六万マイルである」。

「神はモーゼに律法を與へ給ふたが、それは同一の事物をそれぞれ四十九種のやり方で不潔とも清潔とも證明することを許すだけの餘裕のあるものとなつてゐる」。

「トーラ（舊約全書の最初の五巻）を讀むゴイ（非猶太人）は死に値するものである」。

「アクム（非猶太人）の最上のものを殺戮せよ」。

「偶像崇拝者（非猶太人徒）のうちの最も律義なる者を屠れ」。

「邪教徒（非猶太教徒）をみづから手を下して殺害することは許される」。

「不信者（非猶太教徒）の血を流す者は主に生贄を捧げるのと同じ価のあることをしたのである」。

「神、猶太人に言ふ、汝等我を世界の唯一の支配者となせり、されば我も汝等を世界の唯一の支配者となさん」。

「神は夜間にはタルムードを研究し給ふ」。

「一日は十二時間あるが、神は、始めの三時間にはトーラを研究し、次の三時間には全世界を審き、次の三時間には世界を養ひ、最後の三時間には海鰐を相手に冗談を言ふ。」

「非猶太人はすべて偶像崇拝者である」

「美しき者（猶太人）の仕事は、天地創造の仕事よりも偉大である。」

「『人間創造の唯一の目的は、次の事を汝へ（猶太人）に教へんがためである。即ち、猶太人一人を殺すことは、聖書に依れば、全世界を滅亡させるのと同じだけの事をしたことになるのである。』

「猶太人も、妻を持たぬ場合は、人間ではない」。

シオンの議定書　抜萃

第一議定

我々の態度　我々は単なる空語を弄することを止め、その代り各思想の意義を論議して、比較法と推理法とで事態を吟味することにしよう。此のやり方に依つて我々は、我々の思想体系が猶太人と非猶太人との両見地から見て如何なるものとなるかを明らかにしやう。

性悪説、獨裁態、善良な性質の人間よりは、天性不良な人間の方が数に於て優ることは、常に忘れてならぬことである。それ故に、學理上の議論に依るよりは暴力を揮つて用捨なく事を運んだ方が、反つて政治上の好成績を収めるのである。

人は皆權力を求める性があり、誰でも出来さへすれば獨裁者たることを欲する。そして其の際に自己の利益のために一般の幸福を犠牲にすることを敢てしたい者は極めて稀である。

正義は權なにあり　人間と呼ばれる猛獸を今日まで檻に繋いでゐたものは何であるか？　人間を之迄指導して来たものは何者であるか？

社會秩序の當初に當つては、人間は粗野にして盲目的な暴力に服したが、後には、法律に服したのである。しかしこの法律とても、同じ暴力が假面を被つたものに他ならない。以上から余は結論して、自然の法則より見る時、正義は暴力にあり、と言はざるを得ない。

自由とは思想のみ――自由主義の正体　政治的自由とは一つの思想であつて、實際ではない。一黨派が、政權を掌握してゐる他黨を倒さうと思ひ、思想といふ好餌によつて民心を自黨に惹き寄せようとする時には、この自由の理想を巧に適用する術を知らねばならぬ。

もしこの時政敵自身が誤れる「自由」の概念、即ち所謂自由主義に感

深して、この概念のために自己の權力を抛棄しようとするならば、右の仕事は頗る容易となる。―此處に於てか我々の教說は明白なる勝利を得る。即ち、政權の手綱が地上に這ふに至れば、自然の法則に從つて他の者がそれを取り上げて引くに至るからである。何故ならば、盲目なる人民大衆は一日と雖も指導者なくしては濟まされないから。

新權力が自由主義に侵蝕された舊權力に代つて登場する。黃金―信仰―自治、今日では金力が自由主義に取つて代つてゐる。以前には信仰が一世を風靡した時代もあつた。自由の概念は元來實現され得ないものであつて、何人もこの概念を適當に使用する術を知らない。人民に暫時の間自治を許して置くならば、この自治は變じて放縱となる。この瞬間から軋轢が起り、この軋轢はやがて經濟的鬪爭となる。かくて國家は動亂の巷と化し、その威信は灰燼に歸するに至る。

金力の支配　或る國家が、内部の革命によつて力盡きてしまふか、或は内亂の爲に外敵の手中に陷るならば、その國家は滅亡の外に道はない。そしてさうなれば、それは我々の掌中のものとなる。即ち、我々が自由になし得る金錢の力が、その國家に對して救ひの藁を差し出[illegible]政府にして救はるる所もなく奈落の底に沈むことを肯ぜざる限りに[illegible]は、否應なしにそれに取り縋らなくてはならないからである。

内敵　かやうな考へを自由主義の立場から不思議がる人があれば、余はその人に次の如く反問する、「各國が内外の二敵を有する場合、外敵に對しては如何なる戰爭の手段を用ひることも許され、例へば、攻防の計畫を敵に知らせずまた夜陰に乘じて優勢な軍勢を以て襲撃することも許されて、而も不道德と非難されずに濟むとすれば、社會の秩序と安寧とを紊す更に惡質の内敵に對しても同樣の手段を執ることが何故に不道德と稱せられねばならないのであるか？」と。

大衆―無政府主義　反抗といふことは、假令それが無意味に見えようとも、淺薄な判斷しか出來ない人民にとつては面白いものであるが、かやうな反抗の可能性が人民に與へられてゐる時、その民衆を理性的根

據や學意的説得によつてうまく治めるといふやうなことは、筋の通つた健全な考へ方をする人ならば決してそれを期することはない。淺薄な情熱、迷信、習慣、傳統、多感な敵説によつてのみ動かされ易い大衆といふものは、黨派的精神に迷はされ易いものであるが、この黨派的精神なるものは、健全な動議に基いてなされる意志の疎通をすべて不可能にしてしまふものである。大衆の決定はすべて偶然的な多数或は人工的に集められた多数によつてなされるものであるが、この多数なるものは、政治上の權謀術数に通じないために馬鹿氣切つた決議に驅り立てられ、かくて政治の中に無政府主義の芽を萌ざさしめるのである。

政治の道義　政治と道徳律とには何等共通点はない。道徳律に從つて統治しようとする支配者は、政治の何たるかを知らぬものであり、從つて一瞬もその王座を確保することは出来ない。苟も統治せんとするものは奸策と僞善とを用ひなければならぬ。高貴な國民的性質―誠実と公明正大――は政治上の暗礁であつて、其故は、之等は最強の敵にも優つて確實に王位より顚落せしめるからである。

之等の特性は非猶太國の特徴となつても差支へはないが、我々猶太人は決してそれらの特性に導かれてはならぬ。

強者の權利　我々の權利は強さに存する。「權利」なる語は人工的に作られた概念であつて、何物によつても證明されてゐない。その意味する所は、「余の欲する所のものを余に與へよ。そは余が汝達よりも強きことを證せんがためなり、」に過ぎないのである。

權利は何處に始まるか？　それは何處に終るか？　權力の統制が宜しく、なく、自由主義の無数の權利によつて法律も支配者も無力となつてゐる國家に於ては、余は新しい權利を汲み出す。即ち強者の權利に從つて行政權に襲ひかゝり、法律を侵し、あらゆる施設を改造し、「自由主義のために自ら進んで我々に己の權力を讓渡した者共の支配者となるのである。

猶太的フリー・メーソン秘密結社の無敵性　現在に於てはあらゆる權力が動搖してゐるので、我々の權力は他の如何なる權力よりも無敵であらう

う。何となれば、我々の權力は、如何なる奸策も之を葬り去り得なくなる程に強力化される迄は、その姿を現すことはないであらうから。

目的は手段を神聖化する　我々が目下止むを得ず惹起せしめてゐる一時的な災禍は、やがて揺ぎなき政府と云ふ善事を生むであらうが、この政府は、自由主義によつて破壊された所の國民的生存の規則的運行を舊に復せしめるであらう。目的は手段を神聖化する。それ故に我々は、我々の計畫に於ては、善と道德とにではなく、必要と有用とに一層多く注意を向けやうと思ふ。

我々の前には、戰術の規則に倣つて攻撃戰を描いた計畫がある。もし、我々がこの計畫から離れるとすれば、それは數世紀に亘る事業を臺無しにする危險を必ず伴ふのである。

大衆は盲目なり　我々の活動に對する有効な計畫を立てようと欲するならば、我々は大衆が下賤、無定見、無節操であることを悟得しなくてはならぬ。我々は彼等が自己の生活や自己の幸福の諸條件を諒解しきた

批判する能力を缺いてゐることを考慮に入れなくてはならない。　また我々は、大衆の力は盲目で、非理性的で、判斷力が無く、從つて左にも右にも耳を傾けるものであることに注目しなくてはならない。盲人が盲人達の案内役を勤める時、必ずや皆を滅亡の淵に陥れる。從つて大衆の中の者共又は人民の中から成上つた者共は、如何に多才の者であらうとも、一度び政治に喙を容れ或は指導者として登場する時には、必ずや全國民を滅亡の淵に陥れないではおかぬのである。

政治のイロハ　年少の時から自由獨立の教育を受けた者のみが、政治のイロハから成立つてゐる之等の言葉を理解し得るのである。

黨爭　或國民が自分自身に、換言すれば大衆の中からの成上り者に、身を委せる時、その國民は、權力と名譽との爭奪に依つて生み出される黨爭及びこの黨爭から生ずる騷擾によつて自滅するに至る。大衆が平靜にまた嫉妬なしに判斷したり、個人的利害との混同を許さぬ國運を導くといふ如きことが可能であらうか。又大衆は外敵に對して國を禦ぐこと

が出来るであらうか。　そんなことは思ひも寄らぬことである。　群衆の頭数と同じ数の部分に分裂した出師計畫は統一を失つて終ひ、従つて譯の解らない実行不可能となつてしまふからである。
政治の最も有効なる形式は獨裁政治である　獨り獨裁君主のみが國家行政上の諸計畫を明確に處理して、國家機関の機構の萬般を正しく区分する秩序を仕上げることが出来る。　従つて一國の最も適切な國家形式が見出されるのは、責任ある一個人の手に國家行政が委ねられる處に於てである。　絶体的權力なしには文明は存續し得ない。　文明は大衆に依存するものではなくて、如何なる人間であらうと兎に角彼等の指導者となる者の事業である。　大衆は、あらゆる機會に自己の野蠻性を示す野蠻人達より成立つてゐる。　大衆は自己を手中に握るや否や、それを無政府状態に変へて終ふが、之は野蠻の最頂点に外ならない。
酒精、人道主義、悪德、酒に酔ひ痴れてゐるアルコール中毒の動物を見給へ。　無制限に飲酒する權利は、自由と同時に與へられるのである。

然も我が民族をそんな状態にまで陥らしめてはならない。　非猶太民族はアルコールで頭が濁つてゐるし、またその青年達は、古典を過度に勉強することによつて頭が鈍くなつてゐる上に、我々の手先たる者共――富豪の家に雇はれた家庭教師や奴僕や保姆、それから商店の番頭等、によつてのみならず、若年のうちから悪德に誘惑されて、馬鹿になつてゐる。
所謂「社交界の貴婦人」と稱せられる連中もこの部類に入るのであつて、悪德と虚飾を自ら進んで模倣する連中である。
猶太的フリー・メーソン結社の原則　我々の合言葉は權力と偽善である。　國際法の問題で勝を制するのは獨り權力のみであり、一國民を指導するためにも必要な才能ある者にこの權力が藏せられる時は特に勝利は確かである。　權力が基礎となることとは言ふまでもない、が、新權力の代表者にその王冠を蹂躙させることを欲しないやうな政府に當る時には、奸策と狡猾とが權力手段の役目を勤める。　この悪事こそは、善い目的に達する唯一の手段である。　それ故に我々は、我々の計畫の遂行に役立ちさへすれば、買

收、詐欺、裏切等に尻込みしてはならない。一政治上では、他を屈服させまた権力を獲取するに役立つ限りは、猶礙なく他人の財産をも奪はねばならない。

恐怖政治、テロ・平和的征服の道を取る我が政府が、戦争といふ恐怖すべき事柄を避けて、その代り目立つことは少ないがしかしそれだけに一層効目の多い死刑の法を用ひるのは當然であつて、盲目的且つ絶体的服従を強要するためには、とか處刑法によつて恐怖政治が毅然と維持されねばならないのである。公正にして而も假借なき峻厳さは、國家の權力の最良の支柱である。単に利益のため許りではなく、ただ勝利のためには、特に義務の名に於ても、暴力と偽善とを用ひることを我々は固執しなくてはならない。冷静なる打算に基く我々の主義は、それに依つて適用される手段と同じく強力である。それ故に我々は、之等の手段そのものによつてといふよりもむしろ我々の不屈不撓な主義によつて勝利をとり、あらゆる政府を我々の超政府の許に屈服せしめるであらう。

銘せらるべきは、あらゆる反抗を除去するために我々が假借なく事を行ふといふことである。

自由、平等、博愛　我々は既に古代の諸國民の間に「自由、平等、博愛」の叫びを響かせたのであつた。爾後この言葉は、かやうなおびき聲に釣られて四方から集つて来た愚かな鸚鵡達によつてしばしば繰返された。之等の言葉は世界の安寧を破り、以前には大衆の圧迫を免れてゐた所の真の個人的自由をも破壊した。賢明で分別ある非猶太人でさへも、この言葉の本来の意味を解しなかつたし、またその内部に含まれてゐる矛盾を見抜くことが出来なかつた。彼等は、自然が平等を知らずまた自由を與へ得るものでないことを知らなかつた。自然そのものが、悟性と性格と能力との不公平を創つたのであるし、又自然の法則に屈服するやうに仕向けておいたのである。非猶太人は、人民大衆なるものが盲目の暴力であることを考慮せず、また、その選み出した成上り者も民衆自身と等しく盲目であることを考慮せず、又奥義を授かつたものは假令馬鹿

でも統治が出来るのに、奥義を授からぬものには如何に非凡の才があらうとも政治を少しも解する所はない。といふことを考慮しない。彼等非猶太人は、之等総てを看過してゐる。

王侯政治の原則　兎に角、王侯政治の根據は何であつたかと言ふに、政治上の智識が父子相傳となつてゐて、王家の人々にのみは知られるが、その秘密は何人によつても被支配民に漏らされることがなかつたといふことであつた。しかし政治の眞の内容をかやうに傳授することの意義は時と共に失はれて行つたが、これが同じく我々の事業の成功に役立つたのである。

非猶太貴族の特權の廢止　「自由、平等、博愛」といふ言葉は、我々の秘密の手代達の助力によつて、世界の隅々に至るまで、無数の人間を我々の味方に引入れたが、この連中は我々の旗幟を感激をもつて押し立てて廻つた。その間にも之等の言葉は蛆虫の如くに作用して、非猶太人の安寧を喰ひ破り、到る處非猶太人の平和、無事、協同心を喰ひ盡し、それに依つてその支配力を土臺から覆した。諸君、御覧の通り之が我が黨の勝利を到来せしむるに到つた事情である。そしてこの事情が我々に最後の切札を手に入れることを許したのである。即ち、貴族の特權の破壞、もつとよく言へば、非猶太人の貴族政治の本来の本質の破壞をこの事情が我々に許すに至つたのであるが、この非猶太人の貴族政治こそは我々の攻撃に對して非猶太國民並に國家を守る唯一の防禦壘なのであつた。

新貴族　我々は、かの古き血族的並に世襲的貴族の廢墟の上に我々の知識階級の貴族、即ち金權貴族を建てた。そして我々はこの新貴族を創造するに當つては、我々に依存する富と我々の賢者達の指導する知識とを標準としたのである。

人間的弱点の利用　我々が利用し得た連中との交際に際して、我々が常に人間精神の最も感じ易い側面に働きかけたことも、我々の勝利を一層容易ならしめた。即ち我々は、金銭の打算、利慾、飽くなき物質慾等に働きかけたのである。之等の人間的弱点は何れも、人間の意志を彼の活

動を金で買ふものの意の儘に歪けさせることをするので、人間の決断力を殺すには誂へ向のものである。

自由の概念　自由の概念は大衆を説服して、政府とは國の所有者即ち人民が委任管理者であるから、この管理者は古手袋の如く取換の利くものである、と思ひ込ませることが出来た。

人民代表者の交替　人民の代議者たるものが自由に取換への利くものであるといふことは、彼等を驅つて我々の手中に陥らしめたので、彼等の生命権は謂はば我々の手中にあるやうなものである。

第二議定

経済戦は猶太人優勢の基礎　我々の目的にとつては、戦争が出来るだけ領土的利益を齎らさないやうにすることが絶体的に必要である。さうすれば戦争は経済的領域に移されることになるが、この領域に於ては我々の優勢の威力を諸國民に認識させることは容易である。かゝる事態によつて両交戦國は、如何なる遠隔の地までも分散してゐる我々の手代連の手中に陥つてしまふが、而も我々の手代連は何百萬の眼を自由に駆使して、國境によつて活動を阻止されることは決してないのである。その時我々の法律が諸國民の法律を抹殺して、現在諸政府の権力が國民相互の関係を律してゐる如くに、我々の法律が諸國民を統治することになるであらう。

行政官吏と補監顧問官　彼等の奴隷的能力に應じて我々が市民中から選んだ行政官吏は、決して行政能力を準備してはゐないであらう。それ故に彼等は、我々の將棋に於ては容易に「歩」に墮してしまひ、幼時から全世界支配のため教育をうけてゐた所の、訓練と天才とのある我々の顧問の掌中に全く收つてしまふであらう。諸君も知られる通り、之等の専門家はその政治上の知識を我々の政治的計画、歴史の教訓、現代の観察等から取つて来てゐるのである。非猶太人は、歴史を基礎とする冷静な観察を練ることを知らず、吟味的比較などはしないで結果のみを求めるやうな學的熟練を事としてゐる。それ故に我々にとつては、彼等のことを

意に介することは無意味である、たとひ彼等が、いよ／＼の時が来るまで、新たなる歓喜を希望して生きようと、過去の喜びを追憶して生きやうと、そんな事は問題ではない。肝要なのは、科學の命令だとして我々が彼等に吹込んでおいたものを彼等が堅く信じ込んで疑はないといふことである。それ故に我々は、始終新聞紙を利用して、かゝる命令に對する盲目的信頼を鼓吹する。非猶太人の利巧な連中は自己の知識を誇りとして、「科學」から得た知識を巧妙に實現しようとするのであらうが、然もそれの知識を論理的に吟味もせず、又その知識なるものが、人間を我々に必要な方面に教育するため我々の手代達によつて作り上げられたものであることには氣がつかないのである。

破壊的教義の成果　諸君は我々の主張を空論なりと思つてはいけない。我々が仕組んだ所の、ダーウィン、マルクス、ニーチエの教説の徹底的な成果に注意なさるがよろしい。之等の教説が非猶太人に及ぼした破壊的作用は、少くとも我々には明白になつてゐなくてはならない。

政治上の適應力　政治と行政とに於て失敗を犯さぬために、我々はよく時代精神と諸國民の性格及び身分等を考慮に入れなくてはならない。我々の教説は、我々が接觸する諸國民の性情に適應させられなくてはならないが、その永續的成功は、それを實人生に適應するに當つて過去の教説と現代の要求とを統合する時にのみ、得られるのである。

新聞紙の任務　現在の諸政府の手中には國民の中に思想運動を喚起する一大威力が握られてゐる——即ち新聞紙がそれである。新聞紙の任務は、必要らしく見へる要求を指示し、人民の訴を表現し、不滿を表明しまた喚起するにある。自由に関する饒舌の勝利が、新聞紙に具現されてゐるのである。然し政府共がこの威力を利用することを知らなかつたので、それは我々の手中に歸した。新聞紙によつて我々は勢力を得たが、然し我々は尚は背後に隠れてゐた。新聞紙のおかげで我々は黄金の山を掌中に收めたが、それが血と涙の流れから汲み取れなくてはならなかつたことを我々は氣に病みはしなかつた。

黄金の價格と猶太人犠牲の價値　それは多くの同族を犠牲にした。然し我々の側の一人の犠牲は、神の前に於ては、非猶太人千人の値があるのだ。

・第三議定

蛇の象徴とその意義　余は今日もう諸君に知らせることが出來るが、我々の定めた目的までは最早余す所幾何もないのである。この上なほ少し歩けばよいのであつて、さうすれば象徴の蛇――わが民族の象徴である――の環は完全に接合する。この環が先づ接合されると、それはやがて全欧洲諸國を強力な箍で締め付けるのである。

憲法の不安定　宮廷を脅かす恐怖の亡靈としてのテロ　現代の憲法の天秤皿は間もなく顚覆するであらう。何故といふに、我々はその天秤を、それが安定しない樣にと、不正確に据ゑておいたからである。我々は、天秤の挺子が磨り減つてしまふまでその動揺を止めぬやうに心を用ひてゐる。非猶太人は、天秤の竿を充分丈夫に鍛へたと思ひ、天秤がやがて釣合を取るであらうと期待しつゞけて來た。然し天秤を支へてゐる竿は、かの無制限且つ無責任な權力を振つてあらゆる愚行をやつてのける民衆の代表者達によつて不安狀態におかれてゐる。然も彼等がこの無制限且つ無責任な權力を獲得するのは、宮廷内に侵入した恐怖的行動――テロ――に依つてである。支配者達は人民の心を摑むことが出來ないので、人民と和解することは出來ず、また權力を求める野心家達から身を守ることも出來ないのである。我々が主權者の目に見える威力と大衆の目に見えない威力とを引離してしまつたので、兩方ともその意義を失つてしまつてゐる。何故なら、どちらも一方だけでは、杖を失つた盲人にも等しく、途方にくれるだけであるから。

權力と名譽欲　權力者達も競つてその權力を濫用させるために、我々は、あらゆる力の自由な獨立欲を伸張させることに依つて、それらの力を互に闘はしめて來た。この意味に於て我々は、あらゆる企業心を唆つたし、あらゆる黨派に武裝をさせたし、またあらゆる野心の目的を支配力の獲得に向かわしめるやうにした。我々はあらゆる國家を殺亂の巷

と化したのである。 それ故になほ少しの辛抱をするならば、 暴動と崩壊とは一般的現象となるであらう。

國會の演説　倦むことなき饒舌家達は、 國家並びに國家行政の會議を化して演説競技會の會場とした。 享頭な新聞記者及び無恥な讒謗文の作者は、 毎日、 政府の代表者達を攻撃する。 權力の濫用は遂には國家の基礎を搖がせ、 その瓦壊を準備する。 凡ては煽動された大衆の攻撃の下に微塵と砕け去るであらう。

宣傳用小冊子　諸國の人民は、 奴隷制度又は農奴制度よりも激しい苦しみを與へる貧窮によつて困難な勞働を宣告される。 彼等は、 奴隷制度や農奴制度からはあれやこれやの方法で解放されることが出来たが、 然し、 この貧困からは到底脱することは出来ない。 我々は又憲法中へと、 大衆に對して空想的な意義はあつても實在しないやうな諸種の權利を挿入しておいた。 所謂「民權」なるものは凡て空想界のものであつて、 決して現實界に持ち来たされることの出来ないものである。

主權の濫用　幾何かの饒舌家が饒舌を弄する權利を賦與されたとか、 新聞記者が眞實の報道と一緒にあらゆる譫言を書集めることを許されてゐるとかいふやうなことは、 苦役に露命を繫いでゐる多忙な勞働者達にとつて何の役に立つであらうか。 實際、 憲法が勞働者達に提供してゐる利益といふのは、 ほんの貧弱なパン屑位のものであつて、 このパン屑も勞働者達が我々及び我々の代表者に投票してくれる代償として我々の食卓から投げ與へられるのである。 共和國に於ける「民權」なるものは、 貧民に取つては實際の所たゞ苦々しい嘲笑であるに過ぎない。 貧民には「民權」なぞを正しく行使する能力はない。 何故なら、 彼等は必要な生活資を稼ぐにも足らぬ苦役に日々齷齪してゐるのだから。 如何なる勞働者も定まつた報酬を確實に當にすることは出来ないのである。 工場主による閉出しや勞働仲間の罷業に左右せられる身の上だからである。

貴族と成上り者　人民は我々の感化をうけて貴族の支配を破壊した。 貴族は、 人民の安寧の基礎と不可分の関係にある自己の利益に基いて、

もともと人民のおのづからなる擁護者であり養ひ手であつた。然るに貴族を滅してからは、人民は、成り上り者の成金連中の支配に立つやうになつたが、この成上り者連中は、勞働者に無慈悲な奴隷制度の軛を課するに至つたのである。

猶太フリーメーソン結社の軍隊　我々は言はば勞働者をこの奴隷狀態から救ひ出す救濟主の如くに出現するのであるが、それは我々が彼等を招じて我々の社會主義者、無政府主義者、共産主義者の陣營に引き入れるからである。我々は之等の方向の諸主義を原則上支持するのであるが、その際に我々は、我々の社會主義的フリーメーソン結社の、普遍人間的義務に依つて制約される「博愛」の諸規則を表向きの看板にするのである。貴族が勞働者の仕事を自己のものなりとするのは正當であるが、その為にも貴族が、勞働者が滿腹し、健康で、頑健なことを望んだのは自然なことであつた。

非猶太人の頽廢　然し我々は正にその逆を――即ち、非猶太人の頽敗を欲する。我々の權力は勞働者の永續的な榮養不良と虚弱とによつて保持される。此の狀態に於ては勞働者は、最早我々に反抗する力も勇氣も失つてしまふであらうから、我々の意思に屈服するに違ひない。

饑餓と金權　饑餓は金力に勞働者を支配する力を與へるが、その支配力は、王の合理的權力が貴族に與へた力よりも遙かに確實である。困窮とそれから出て來る憎悪とによつて我々は大衆を動かす。我々は群衆の力を借りて、我々の進路を阻む者をすべて片附けてしまふ。

大衆と世界王の戴冠　我々の世界王の戴冠式の期日がやつて來るや否や、その同じ大衆は、なほも我々の進路を遮ることの出來さうなものを悉く掃き去つて呉れるであらう。

未來のフリーメーソン結社系の小學校に於ける教授要目　非猶太人は我々の科學的助言なしに物を考へることを忘れてしまつてゐる。それ故に彼等は、我々の世界支配が達成された曉に我々が一歩も讓歩することなく確保するであらう所のものが、如何に痛切な必要事であるかを認め

ぬ、即ち、小學校に於ては、唯一の眞實な科學、何よりも重要な科學、換言すれば、分業を要求し、從つてまた人間が階級又は身分に分類されることを要求する所の、人生の社會的構造に關する學說が說かれなくてはならないのである。また何人の頭にも必ず叩き込まれねばならないのは、人間の各種の活動が平等でない重要さを持つ結果として、人間の平等なぞは決して存在し得ないといふ事である。法律に對しては夫々違つた責任が生じねばならない。何故ならば、その行動によつて全階級を害ふ者と、たゞ自分の名譽を傷つけるに止まる者とでは、その責任も違つて來なければならないからである。

人生の社會的構造に關する學說の祕義　我々が非猶太人に祕してゐる所の、人生の社會的構造に關する眞の學說の敎へる所に依れば、精神的活動も肉体的勞働も一定範圍の人間の限らるべきであつて、然らざる場合には、豫備敎育と職業との間の不調和が人間苦の源となるからである。

もし國民がこの學說を受け入れたとすれば　國民は自ら進んで主權と主權が立てた國家秩序に屈服するであらう。科學が現狀の如くであり、またそれが我々の與へた方向を取つてゐるので、人民は盲目的に印刷物を信じ、また印刷物に含ませられてある逆論を信ずるので、從つて人民は、その蒙昧さのために自己の價値を誤認して、自己の上にあると思はれる階級のすべてに對して憎惡を向けるのである。

一般的經濟不安　あらゆる取引業及び工業を萎靡せしめる經濟的不安がやつて來れば、この敵愾心は更に大いに烈しくなるに違ひない。我々は、我々に可能である限りのあらゆる陰謀に、完全に我々の手中にある金力とによつて一般的經濟不安を惹起し、同時に歐洲諸國に於て勞働者の大群を街頭に投げ出すであらう。さうすれば之等の大衆は、その單純な心持から幼少以來嫉視してゐた人々の血を進んで流し、その人々の所有物を奪ひ取り得るであらうと考へる。

我が黨は安全　然し我々の仲間は、之等の大衆によつて襲はれることはないであらう。何故なれば、我々には襲擊の時刻が豫め分つてゐるの

で、時期を失せずに我黨の者の保護策を講ずるであらうから。

フリー・メーソン結社の支配する所に理性の國あり　我々は、進歩が非猶太人を理性の國に運れて行くであらうと説明して來た。然し我々の強圧政治は、理性的な峻嚴さによつてあらゆる暴動を鎮圧し、國家生活のすべての部門より自由主義を驅逐する手段を心得てゐるであらう。

指導者の追放、フリー・メーソン結社及び佛蘭西大革命　人民は、自由の名に於て種々の讓歩が與へられたことに氣が付いてからは、自己が支配者であると信じて、權力を無理やりに手に入れた。然し勿論人民は、凡ての盲人と同じやうに、數多き難関に突き當るやうになると、自力ではその難関から脱することが出來なかつた。そこで指導者を探しに出かけたが、以前の指導者の許に復歸することには思ひ到らないで、むしろその全權を我々の足下に置いた。諸君は、我々が「大」の字を附けて呼んでゐる佛蘭西革命のことを思ひ起し給へ。この革命の準備の祕密はすべて我々には解つてゐるが、それは、あの革命は我々の手でなされたもの

であるからである。

シオンの血を享けた帝王　あの時以來我々は諸國民を幻滅から幻滅へと導いてゐるが、それは彼等が我々からも離叛して、我々が全世界の王として準備してゐる所の、シオンの血を享けた王を歡呼して迎へるやうになることが望ましいからである。

フリー・メーソン結社の鞏固たる立場　現代に於ては、世界的勢力としての我々は不死身である。何故なら、もし我々が或一國家から攻撃されるならば、直に他の諸國家が我々の味方になつてくれるから。我々の鞏固國な立場を促進して呉れたのは非猶太人諸國民の限りない卑劣さであつて、それは權力の前には叩頭するが、弱者に對しては無慈悲で、過去には嚴罰を加へても、犯罪は之を寬大に斷罪し、自由な社會秩序の矛盾を我慢することはしないが、大膽な支配慾の暴虐には殉教者となつても顧みぬ程の忍耐を以て對するのである。彼等は現代の獨裁者即ち首相や國會議長の權力濫用を忍耐してゐるが、しかしかやうな濫用の最小なのに

對しても首の二十位は刎ね兼ねまじい有様を示すこともあるのである。フリー・メーソン結社の秘密連絡の任務、この奇妙な現象、即ち、同一の外觀を持つ事象に對する大衆の態度がかやうに首尾一貫してゐないといふことは、如何に説明されるのであらうか。その説明はつまり次の如くである。

即ち獨裁者達は手先を使つて、自分達が故意に國家を害してゐるのは一層高い目的の達成のためである、と人民の耳に囁かしめるのである。そしてその目的とは、人民の一般的安寧、博愛、相互的責務（協同）、及び平等である。といふのである。しかしかやうなものの結合はたゞ我々の支配下に於てのみ組織されるであらうといふことは、勿論彼等に告げられることはない。かくて人民は正義の人を斷罪し、有罪者を無罪にする。また人民は次第に増長して、自ら欲することは凡てなし遂げられるものと確信するやうになる。この様な事情の下に於ては、人民はあらゆる着實な發展を破壞して、一歩毎に新たなる無秩序を喚起して行く。

自由　「自由」なる語は人間社會を驅つてあらゆる權力と抗爭せしめ、神及び自然の威力に對しても鬪爭せしめる。我々が一たび王座に昇るならば、我々はこの言葉を人類の語　の中から抹殺してしまふであらう。何故なら此の言葉は、大衆を血を好む猛獸に化せしめる所の、動物的暴力の結晶であるから。然し之等の猛獸は、血を流してしまへば眠つてしまふので、さうなれば容易に鎖に繋ぐことが出來る。然し血を吸はせないでおくときには、彼等は眠らないで、戰ひ狂ふのである。

第六議定

非猶太人の安寧は猶太人の獨占權に依存す　間もなく我々は、巨大な獨占權を確保するであらうが、それはあらゆる、他の人々の競爭を排除して、我々の龐大な財産となるであらう。非猶太人の大財産と雖もこの猶太人の獨占權に依存するであらうといふことは、かゝる大財産が當該府倒壞後の第一日に消滅してしまふこと、宛かもその國家の支配能力に與へられてゐる信用（國家信用）と同じであることを見れば分るのである。

余は本席に御參列の國民經濟學者達に對して、この思想の意義を正しく評價あらんことを御願する。

あらゆる手段を以て我々は我々の超主權の權力を伸張しなければならない、またこの超主權の方では、それが、自發的に我々に服從する者達の庇護者であり恩人であることを萬人に向つて示さなくてはならぬ。

第七　議定

全世界の動搖、闘爭、敵對關係　我々は、歐洲全大陸及びそれを基点として、他の諸大陸に於て動搖、闘爭、敵對關係を惹起せしめねばならない。之に依つて我々は二重の利益を得るのであつて、先ず第一には、あらゆる國家が、我々が何時でも思ふ儘に騷亂を惹起することも古い秩序を再建することも出來るのをよく知るやうになるので、我々を恐れるやうになるであらう。あらゆる之等の國家は、我々を目して止むを得ざる惡と見るに慣れてゐる。第二には、我々が政治的或は經濟的協約乃至債務の力を藉りて各國の國政機關に連結させておいたあらゆる連絡の糸を、我々自身陰謀に依つて纏れさせるのであらう。この目的を徹底的に達成するためには、我々は口頭での商議に當つては、大いに老狡と奸譎ともつて事を運ばなくてはならぬ。之に反して外面的には、即ち所謂公式文書の交換に於ては、反對のやり方をして、終始正直な、迎合的な態度を示すであらう。我々がこの原則を守るならば、見せかけを本物と思ふ樣に慣らしておいた非猶太人の政府當路者や人民達は、將來もなほ我々を人類の恩人又は救濟主と考へるであらう。

第九　議定

猶太秘密結社の獨裁政治　事實上我々にとつては最早何の障碍もない。我々が我々の超主權を行使する形式は超法律的であつて、それは普遍に專制又は獨裁と呼びならはされてゐるものである。余は充分の確信をもつて言ふが、我々は現在では唯一の立法者である。即ち我々は法の宣布もすれば、その執行權をも施行し、又處刑もすれば赦免をも行ひ、我々の全軍の司令官として馬上に颯爽たる姿を見せてゐるのである。嘗ては強

カであつたが今では全く我々に依存してゐる黨派の遺産を相續したので、いま我々を導いてゐるのは鞏固なる意志である。即ち我々は、抑へ難き野心、燃ゆる如き貪慾、假借なき復讐慾、用捨なき憎悪等を意のまゝに用ひ得るのである。

第十一　議　定

非猶太人は山羊なり　非猶太人は山羊の群であるが　我々猶太人は狼なのである。狼が山羊の群に侵入する時、その山羊の群がどうなるかを、諸君は知つて居られるか。彼等は眼を閉ぢて、ぢつと靜かにしてゐるであらう。何故なら我々は、前以て平和の敵が悉く掃蕩され、また黨派がすべて倒されてしまつてゐさへすれば、今迄奪つてゐたあらゆる自由の返還を約束するであらうから。しかし非猶太人が彼等の權利の再獲得を何時まで待つであらうかといふ事は、今更改めて諸君に申上げる必要もあるまいと思ふ。

「フリー・メーソン」に就て（沿革的に概述を主として）

「フリー・メーソン」は全世界に會員を持つ一大秘密結社であつて、猶太人が其の首脳をなし、猶太人の為に畫策すると云はれるものである。語源から云へば中世の「石工の組合」であるが、其の起源は可成古いものと思はれる。階級地位民族宗教の別なく教養ある同志者を參加させたといふ。之はまづ「ロージユ」（希伯來語の事務室といふ言葉から來てゐる）が基礎になり禮拜堂である。此處で一種の禮拜が行はれるがそれは「ロージユ兄弟」即ち會員にしか知られず外部の者には秘密になつてゐる。ロージユ若干集つて「聯合」となる。聯合には大ロージユがある。聯合内の會員には秘密な合図・合印・合言葉があつて互に其の所屬員たることを知る。之で他のロージユにも出入出來るのであるが、尚出入許可證が與へられる。即ちロージユの會員は正規的なロージユの行事に努めなければならぬ。眞理を探求し、偏見迷信激情を離脱して人道主義同胞主義の實現に盡力する。又啓蒙慈善の事業を行ふ。佛蘭西や伊太利のロージユでは法王廷の干渉に對抗して政治的運動を加味したけれど、十九世紀の獨逸のロー

ジユは社會事業の遂行に重点を置いたと云はれる。儀式禮拜も以前は統一されてゐたものだらうが、後になると地方により國土により餘程相違を生じて来た。だから獨逸にも幾種かの分派があつたやうである。
フリー・メーソンは石工組合時代、其の本部はストラスブルクにあつたといふ。最初建築上の技術に関し、自由な見解を執る者の結社だつたのが、其の後建築にかぎらず、一般技藝家美術家にして加入するものも出て来た。しかし現今の意味のフリー・メーソンは一七一七年倫敦に成立したと見ていい。此の時四個の職工組合、即ちロージユが合体聯合して大ロージユを成したのである。之は「人類愛、眞理の探求、公正の行動をモツトーとし、教會的拘束を脱し、あらゆる方面の人士を網羅して人生の至宝を擁護する」ものであつた。一七二三年になつて説教師のジエームス・アンデルソンは「制度書」を編した。これがフリー・メーゾンの憲法となつたのである。
此の結社は驚くべき速度を以て諸國に傳播し、獨逸ではアブサロムといふものが一七三七年、ハンブルクで最初のロージユを設けた。普魯西のフリードリッヒ大王もその太子時代此の結社に入會したと傳はつてゐる。ともかく伯林に「ツー・デン・ドライ・ウエルクウゲルン」といふロージユの出来たのは大王即位の年、即ち一七四〇年であつて、之が獨逸に於ける「太母胎ロージユ」となつたのである。大王は恐らくその教會的臭味を脱した啓蒙的人道主義的な点に興味を覺えたものであらう。
フリー・メーゾンの初期には猶太人が加入してゐなかつたといふ。之は當時猶太人が完全なる市民でなく、所謂「半市民」であつたからだと思はれる。しかし成立の當初から既に猶太教的色彩の可なり濃厚だつたことは否定しがたい。例へばロージユの語源は希伯来語であると言ふが、其の模範は実にイエルサレムのソロモンの殿堂であつて、ソロモン王は一七三〇年フリー・メーゾンの元首といふことになつてゐる。また神殿、祭壇、約櫃（ブンデスラーデ）、廊柱、七本立の燭臺、毛氈「ヤコブの天梯」、「ダブイデの星」等孰れも猶太教に由来するものであり、合言葉も多数希伯来語から来て

ゐるといふ。紐育の猶太系新聞（ジユウイツシユ・トリビユーン、一九二七年十月二十八日）は「フリー・メーゾンは猶太教に基く、フリー・メーゾンの儀式から猶太教の要素を除いたならば何物も残りはしない」と公言してゐるが、之は如何なる事情によるか、察するに英吉利のフリー・メーゾン創立者は敎會的拘束の煩はしさに耐へず、基督敎的名稱や設備を特に忌避したが、さて之等に代るべきものは他に求めがたいので、猶太敎のものを採用するといふことになつたのではあるまいか。

フリー・メーゾンは短日月のうちに世界的に擴がつた。そして次第に猶太人の加入者增加し、其の勢力が實權を握るに至つたことは事實であらう。遂にフリー・メーゾンは猶太人の世界的陰謀の策源地であるとの非難をうけるやうになつた。此の政治的祕密結社は亞米利加の獨立戰爭、佛蘭西の大革命、並に十九世紀以來の諸國の革命に重大なる關係があるといふ。之は早くから廣く喧傳されたものと見えて、一八四八年に其の會員たるフオン・クニツゲはフリー・メーゾンの猶太人に左右される危險を危惧し、「猶太人はフリー・メーゾンを彼等の帝國建設の手段と見做してゐる」と警告した。今フリー・メーゾンの會員たる猶太人で前後の革命に關係あるものを擧げるならば、二月革命及び第二共和國で活動したクレミユーを初めとし、續いて佛蘭西政界の大立物だつたガンベツタも猶太人の血統を引いてゐる。一九〇九年西班牙に起つた内亂で活躍した無政府主義者フエラー、一九一六年墺太利の首相を暗殺したアードラーも其の例であらう。一九〇七年・一九一〇年の葡萄牙の革命、一九〇七年・一九〇八年の青年土耳古黨の叛亂、一九〇五年・一九一七年の露西亞の革命、及び大獸太に於ける獨逸墺太利二帝國の瓦解もまた彼等の所業といはれるのである。

獨逸のフリー・メーゾンは最初から世界的國際的にフリー・メーゾンと聯絡してゐたのであつて、大ロージユも其の主長も外國の大ロージユなり主長なりと緊密の關係を保つてゐた。

一八七〇年佛蘭西のフリー・メーゾンは獨逸のロージユの「兄弟」たる

普魯西王ウイルヘルム及び太子フリードリッヒを、ある「ロージユの裁判所」で缺席裁判の下に罰金を課した。フリー・メーソンは極端國粹主義・狂信主義・階級主義を排撃するものであるから、獨佛間風雲の急を告げてゐた當時之を理由としたものであらう。兎も角之が爲に獨逸のロージユは佛蘭西のロージユとの關係を絶つに到つた。が一九〇九年になつて元の關係に復歸した。また佛蘭西のロージユは神の名を儀式の時に省いたといふことから他の諸國のロージユと絶縁したこともある。之も其の後妥協が成立したやうである。かやうに各國のロージユ間、時として分離分裂の機會もないではなく、然もそれが國民意識を伴ふことは注意に値する。然し何時しかまた聯絡が保たれる。そしてこの場合猶太人は數も多く重要の地位を占めてゐるといはれる。

獨逸のロージユでは一八四四年頃から猶太人の會員が著しく増加したといふ。伯林を除いた他のロージユでは人道主義を高調して猶太人を全然平等視したが、伯林の三大ロージユは基督教徒に限り加入を許した。

之は反猶太主義者の非難に對處したものだといふが、それでも「吾々は猶太人を憎むものでない」と數次辨明を試みてゐる。一八八一年獨逸のベロージユ聯合は「あらゆる反猶的不法を排撃し之に對抗するを以て義務とす」と宣言した。しかしフリー・メーソンは一八八〇年代の反猶運動に積極的な對策を講じた譯ではなかつた。だが人道主義・平等主義・平和主義を標榜するフリー・メーソンは猶太人にとつて恰好の避難所たることはいふまでもない。彼等が此處に勢力を樹立し、そして彼等に有利に運用發展せしめやうと努めたことは容易に想察されるのである。それが一九〇一年になると猶太人フリンデルは次のやうに述べてゐる。「人道主義の爲の戰爭よりも寧ろ猶太主義の爲の戰爭がより重大である。この場合猶太人が指導的勢力として働くのであつて、獨逸のフリー・メーソンがその下働きを勤めなければならぬといふても驚くことはない。事實上猶太人は暗々裡にではあるけれども巧に歐羅巴の多數の大ロージユに於て指導的地位を占めてゐる。

獨逸に就いていへば猶太人が金融界商業界を支

配し政治的新聞、フリーメーゾンの新聞を支配し数百萬の獨逸人を頤使してゐる。更に進んで司法權をもその支配下に置かうといふところまで行つてゐるのである云々」。之を要するにフリーメーゾンは精神的方面でも實際的方面でも猶太人と利害を共にするものなることは否定し難いやうである。彼等は舊殻を脱して人類の新しい社會を建設するといふ。然しその新しい社會は即ち猶太人に有利な社會を意味するものと見なければならぬ。そして猶太人の勢力が内部に於て指導的地位を占めつゝあることも容易に窺はれるのである。

獨逸のフリーメーゾンには以前から知名の人が加入してゐる。そして國民意識の熾烈だつた自由戰爭時代の名士、而も猶太人嫌ひで有名な人々の見えてゐるところは面白いと思ふ。即ちフイヒテ、ブリューヘル、シヤルンホルスト、シタイン等も加入者である。ハルデンベルグの會員だつたことは怪しむに足らぬ。普魯西の王家ではフリードリッヒ大王以下皇帝フリードリッヒ三世まで歴代の君主が加入してゐる。つまり獨逸の

フリーメーゾンに猶太人の色彩の見え出したのは十九世紀中葉以後であつて、特に猶太人が勢力を振ふやうになつたのは十九世紀の末年からあやうである。

第八章　回教勢力圏

第一節　序説

回教は世界三大宗教の中最も新しいものとして、それは服従――信者達のアラー Allah とそしてその予言者への服従を意味し、教祖モハメッド Mohammed のプリミティブな説教、又それと稍異なるが最近のオーソドックスな組織、又現代回教徒の民族宗教を示すものである。然し回教は宗教としてよりも以上にそれは、少くともその一部分は嘗ての巨大な東洋の世界帝国の一つに実現され、そして数々のセパレートした諸国――現代の回教圏に拡がった――に実現された政治的な又法理的理論を意味してゐる。回教は又文化的全体を意味し、回教国家の概念と回教文化の教義はその宗教上の基礎からその権威を導出したが故にそれは宗教と国家とを包含してゐる。イスラムの理想は生活全体を支配する宗教的規制である。それは世界観として信者達の生活の道である宗教としてイスラムの文化はその

基礎に於いて、その様々な様相に於いて中世紀のキリスト教文化と緊密に關聯して、そして又同じ根源に由來してゐる。

第二節 回教總説

イスラムはアラビヤに起きた、そこではモハメッドの出た時代には異教はその精神的支配を失墜して居り、異教の儀式は傳統の一部として行はれてゐたに過ぎない。主として彼等の經濟的價値の故に毎年メッカへの巡禮、聖月の遵守として。モハメッドの時代より以前に於いてさへ、幾らかのアラビア人――所謂ハニフ Hanifs と云はれる人々――はユダヤ教とかキリスト教に歸依することなしに異教から轉向してゐた。一神教的傾向の促進は之等二つの宗教―アラビアはその數多き支持者を有つ―の影響に依って助長されたのである。主としてアラブ系統の改宗者としてのユダヤ人は、西部アラビアのオアシスに緊密な集團をなして居住してゐた。キリスト教は一般に優勢ではあったけれども、ローマ及ペルシャ帝國に依って起きた Christian-Arab から北及び東に拡ったのである。直ちにそれに續いたモハメッドの時代にはアラーは數多き個人的

な神の中に普遍的な性格の最高な神として認められ始めたのであつて、モハメッドの説教はアラーへの彼の崇拝からではなくして、アラーへの排他的な崇拝に基く彼の主張の故に反対が起きた。斯くてモハメッドはメッカの回教的崇拝に限定されざるを得なかつた所のその本質的な古い形態を留保したのである。即ちカーバ Caaba の崇拝、近隣の聖廟、所謂アラファ Arafat のハジ（巡礼）hajj 等は共に回教の巡礼の主要な要素を形成した。七世紀の初頭から回教は省みられぬ崇拝としてではなくして、典型的に開化された、單に外部的にアラビアの異教に影響された所の都市的な宗教であつたのである。然しながらそれは特にその支配的な民族精神が強く傳統に束縛されてゐたそのアラビアの社会に深く影響された。イスラムの主要なる宗教的教義はユダヤ教と異端者のグノスティックなキリスト教から由来した。モハメッドがその何れかの宗教の正確な智識を具有してゐたとは主張し得ないとしても、モハメッドはユダヤ教徒やキリスト教徒がモーゼとイエスから既に受けた神の啓示をア

ラビア人に宣明する必要を感じた。そしてコーランはより初期の聖典のアラビア語の出版としてそれは一般の強烈な支持を受けたのである。ユダ人が彼を予言者として認める事を拒否した時に、モハメッドは彼等ユダヤ人の聖典は誤つてゐるものなる事を確信するに至つた。依つて彼は彼等に反対してアブラハムに助力を求めて祈念し、そして Hanifism ―未だ腐敗せざるアブラハムの宗教を再興し喧傳する様提言したのである。

アラビア人の異教に取残されてゐた諸儀式はアブラハムの宗教の原因となされたものである。之等の段階はユダヤ教とキリスト教との間に的確な限界を示した。モハメッドはイスラムをして其等と同様に啓示の形式としてそれを認める事を止め、イスラムのみが唯一の眞の宗教である事を宣明した。

モハメッドの説教の出発点は彼が最初に終局のものと考へた、若しメッカの住民達が戒律に服さなければその経済的活動は中止されるべき審判の日の概念である。審判者はアラー其の人である。此の末世観から一

神教の信仰が由来した。人はその全能のそして慈悲深きアラーとの関係に於いて奴隷である。コーランに於て宿命と自由意志とは交互にその場合〳〵に應じて強調されてゐる。之は後に意志の自由の問題を起したのである。コーランの予言の中に、――統一的な一つの啓示の循環的な更新の智識的な概念が物語られてゐる――其処には外典の教義に依った内容の特殊の形式のキリスト教義が示され、それは根本的にDocetic であり、イエスの神聖を否定してゐるのである。モハメッドにとつては彼の予言者的使命の確信が最初に彼の説教の唯一の前提であつたが、後にそれは基本的なドグマに迄発展した。彼は神の啓示の宗教の本質的な要素を聖書の保存、神の奉仕に於けるその聖書の使命と考へたのである。此の理論からコーランの意義が導出されて来る、その眞正さと完全さが他に比類なきコーランが。コーランとはアラビア語で書かれた、それは現実の形に於いては天上の原本の其れと全く同一の再び造られたものと思はれると云ふ意味に於いて、それはアラーの未だ創られざる言葉である。コ

ーランに於けるアラビア語の使命はイスラムの本質的にアラビア的色彩を決定すると云ふ事に於いて重要である。宗教的信條の源泉として、それはHadith ―傳説に描かれたものとして、予言者の生涯Sunnaに依つて補足されてゐる。スンナの役割はイスラムに於いてはスンニーSunnite はオーソドックスと同義語であると云ふ事実に依って最もよく例證される。モハメッドの宗教的權威は、コーランの叙述を越えて問題とせられざるを得ず、――彼の死後直ちに人々は彼をモデルとして引出し始めた。其の間に宗教的制度や信條はユダヤ的なキリスト教的又ペルシヤ的影響の下に発展し続けたのである。若しイスラムが独立の宗教としてのその位置を保持したならば、それは之等の要素が何より先づその予言者自身から発した傳説であつたと主張した事だらう。最後に幾多の論争を惹き起す様々な立場を綜合する方法としてそれ等の要素をモハメッドの言葉に帰するより以外に良い方法はなかつたのである。その最初の二、三世紀の流れの間、イスラムに吸收された一切のものは、予言者のスン

ナとして巨大な物語として残され、そしてHadithの形にされ、其の結果として傳説の眞の中核は殆んど全く隱されたのである。九世紀に權威ある結果が耳で傳へられた巨大な量の傳説から造られたのである。元来イスラム的信條は非回教に對する辯疎として役立つのみならず又古い形式の權威に對してゞも方向づけられたものである。ドグマの問題は政治的な論爭にも関係して提起された。八世紀からの最初の神学派は所謂Mo-tazilitesのそれであつたが、彼は多くの細かな問題について其の力を注いだ。部分的にそれ等は純粋にドグマテイツクな性格――神の統一に関する問題、神なる言葉の非創造的な性格、意志の自由に関する問題として――のものであつたが、彼等の取扱はキリスト教徒の間に於けるドグマの論争の影響を現はしてゐた。意志の自由の問題と半政治的な問題は極く簡單な形で所謂QuadariteやMurjiitesの如き学派に依つて極く早くも取扱はれてゐたが、然しイスラムの神學はMotazilitesの無駄な努力がギリシヤに起源するその洗練された弁證法的技術に依つて傳統的な權威と一致した時代、即ち十世紀迄完全な発達を遂げなかつた。十一世紀にイスラムはその将来の経路を決定した所の明確な形式を凡ゆる本質に於いて達成したのである（そのオーソドックスな組織は発達したのである）が、その進歩は全く止みはしなかつたけれども、そのいや増しつゝあつた固定化と停滞との程度はその智的生活に於いて明白となつて来た。その時代に到達した発展は要素的なそして、究局のものと一般に認められた。凡ゆる刷新は相容れぬものと見做された。正統派の回教の信條を性格づけた法式化と固定化はその早期に於いて神秘主義の方向に於ける反動に導いた。神秘主義Sufismの古典的な発達は――主として九世紀の間に起されたところの――その特色としての苦行の性格を伴つたキリスト教的なグノーステイツクなタイプのイスラムへの侵入、現世的な善と行爲の否認に導かれた神の愛と世界からの後退を示したのである。その後の進歩に於いて三つの主要な傾向が明白となつた。第一、人格の放棄と法悦に依つて神秘的な統一への努力である。第二、神の秘教と多くの人々に依つて企てられた法則の安易なる無視に導

かれた個々の人々の救済に対する欲望である。そして第三に、古代の哲学との融合、神秘主義が智識的となつた結果として、オーソドックスなドグマと法則と緩和された神秘主義との融合は、その影響が現今迄存續してゐる所のアルーガザーリ Al-Ghazzāli (1058-1111) に依つて齎らされた。オーソドックスならざる神秘主義は過激と誇張に向つたのである。十二世紀に神秘主義をポピユラーにした宗教的法則が樹立された。彼等は古代の風習の崇拜集團の後繼者であつた。そして聖者への尊崇に伴つてポピユラーであつたイスラムにその地方的な色彩を與へたのである。神秘主義からの反対の極にはオーソドックス的教義でさへも不滿であつた所の傳統派が起つた。

此の学派はイスラムをして其の初期の清浄さに取りかへさうとしてスンナと云ふ的確な概念を提議した。――すなはち予言者の教説と彼の信者の生活とに――勿論如何なる歴史的な正確さを以てではなくして、それらはその傳統を装飾する所にある。此の学派の強力な支持者 Ibn-Taymiya は彼が一神教から出發すると宣明した所の予言者と其の信者の崇拜に対してばかりでなく神秘主義のドグマと教説の法式化に猛烈に反対した。彼の主張はワッハーブ Wahhabites の宗教的政治的運動によつて取上げられた。

右の間にイスラムを変化させたこれ等の一般的な宗教的傾向にかてて加へてその初期からその精神的政治的統一を脅かしてゐた所の幾多の宗派が起つた。彼等は宗教的政治的動機によつて驅られたのである。それは神政において充分ではあつたが。――モハメット死後直ちに發表したまだ彼が Omayyads の部族モハメットの部族に屬していたかどうかを留意せずしてカリフとして最も價値ある人間の自由選擧を要求した、そしてそのリーダーを守るべくコミユニテイの權利を主張しもし彼の義務を脅かしたならば彼を廢位しようとした所の Kharijites (分離派) のそれであつた所の第一の宗派である。あらゆるイスラムの宗派の様にそれは幾つかの分たれた派に分裂した彼等の反抗は國家に眞面目な關心を與

へやうとしつゞけたのである。

Kharijites は一時北アフリカを支配しそして彼自身のコミユミテイーを建設した。今日彼等の僅かばかりの後継者、Ibadites は北アフリカ、オマン、ザンジバルに住んでゐる。

デモクラテイツクな Kharijites とは反対の極に正統派 Shia、予言者の従兄弟、アリーの徒黨があつた。彼等はあらゆるアリーの崇拜者達を包含し、彼等はオーソドックスな崇拜者達から非イスラム的な偶像崇拜をする人々に迄及んだ。

極く初期に其の議論はアリーの後継者達の向に拡がり始めた、予言者の従兄弟であるアリーは回教國王の位を與へられた。之は基本的な Shiite のドグマとなりそして、Sunnite 回教から Shiites を分離した。アリーとその後継者の不幸は—それは大部分彼等自分のなした事であつたけれど—「予言者の家族」に対する尊崇を増したのみである。数々の Shiite のグループの中でその温和な Zaidites は—彼は丁度正統派の限界にゐる

たのであるが——古いアラビアの Shia を代表してゐた。彼等は最初の三人のカリフの地位を認め、そしてアリーとその後継者に其の次のカリフの位地を限定した。併し彼等はより極端な導師 imam の理論を否認した。彼等は九世紀以来南部アラビアに存続した。アラビアの外に Shiites は回教徒の人々の間に革新的な又異端者的な凡ての傾向に対する集中点となつた。彼等の基本的な理論は imam-theory である。彼等が好んでユミユ゛ニテイのリーダーと呼んだ最初の imam は予言者自身に依つて名付けられ、最初の三人のカリフに依つてその権利を得た所のアリーであつた。imamate は彼の後継者の手に落ちた。この相続者の系統の問題は数多くの黨派の分裂を起したのである。imam は罪過なき特別のインスピレーションを享けたものとして神の意志の権威ある理解者であつた。imam の Sunna はアリーに対して罪深き予言者の勝合の Sunna の代理を務めた。

一般的同意に依つて治められた Sunnitism に反対して、Shiitisms は

権威ある教会を代表した。迫害は主として宣傳を秘密ならしめるために
Shia を限定し、殉教の空気をそれに與へた。imam の苦難を斯く獲得
された後者の救済の概念は支配的な統制を確守した。凡ての Shiite の反
抗の失敗の後に最後の imam は奇蹟的な仕方で消失し、彼が救世主 Ma-
hdi として後帰するだらう時を期待し、イスラムに於ける秩序を復興
すべき「正しく導く所の人」と云ふ確信が起きた。Twelvers 又は Imami-
tes — 主としてペルシヤ、イラク、インドに居るその後継者の大部分の
ものを有つた所のもの — と Seveners 又は Ismailites との間の分裂
は Shiites の派の主要な分派であつた。彼等は彼等が認めた所の imam
の数に依つて分たれた。Seveners は予言者の最後のものとして Mahdi
がモハメツドの著作を完成した所の主義を擁護した。

この主義に対立してモハメツドの使命の窮極的性質に関する
イスラム的な確信が起きた。Agha-Khan の下にインドに存続してゐ
た Khojas と同じ Assassins と Bohras は Seveners の分派である。

余りに極端でイスラムの一派として見做す事が殆んど出来難いやうな
一般的な信條から遠く離れた所の他の Shiite は Druses であり Nusairites
であり Alawites, Ali-ilahis であつた。

宗派的運動は國民的傾向の直接の表現ではなかつたけれども、にも拘
らず彼等は國民的な経済的な対立が屢々表現された所のその形式を採つ
た。ペルシヤ人の間でこの対立は主として Shiitism に表現された、北
部アフリカの Berbers の間にそれが全く異つた形式を採つた間に。
Shiite Idrisites の成功 Almoravide と Almohade の運動成長と同
様に Kharijite の概念の拡がりは相当に Berber の反動に依つて影響さ
れた。

最初に Messiah を獲得した Shiites から Mahdi の概念は Sunnites に
依つてもつと変へられた形で引継がれた。彼等にとつて彼は単にモハメ
ツドの後継者であり、そして彼は其の時期の終りに回教国王の理想を果

し、そして正しく導かれたカリフの傳統を傳へる人なのである。にも拘らず Mahdi
の文字は漸次に政治学の領域から末世觀のそれに移された。
イスラムの歷史は Shiite とそしてオーソドックスな Mahdi の反抗に
充ちてゐる。Mahdi のその期待に於いてオーソドックスな理論は最初の
四人のカリフ以来イスラムの全政治史の其の非難に最も鮮明に現はれて
ゐる。

然し如何なる国家も宗教に依つて全く支配されなかつたと云ふ否認は現実
に於いて非常に寛大な許容に依つて伴はれてゐた。此の出發は現実的條
件に强制されて――特に政治的な分野で――發展した、そして歴史的な
ペシミズムとアラーの測り知るべからざる意志への尊敬に依つて育くま
れた。斯くて人は如何なる支配者にもはつきりと服從すべく命令された。
たとへ彼が不法にもその權力を獲得し、使行したとしても。

回教徒の大多数は一世紀の間オーソドックスの組織を考へた。そして
今日それをイスラムの唯一の正統の形式と未だに見做してゐる。それは

イスラムの全宗教的な教義を包括し、そしてイスラム的コムミュニテイの
宗教的意識とそしてその Catholic instinct の表現である。或る意見と
習慣とは最初に暴力を以て反撥したけれども、一度彼等がコミユニテイ
の相当な派に浸潤させられたとなると彼等はオーソドックスなものとし
ての困難なしに認められた。コミユニテイの確信がオーソドックスなも
のと刻印された所のイスラム的精神の表現が認容し難きものであつたと
云ふ事を主張した人々はオーソドキシイとの断絶と云ふ罪を受けた。オ
ーソドキシイの内容は絶対に誤まらざるそしてイスラム法ばかりでなく
全イスラム的宗教が基礎を有つ普遍的な同意 Ijmā の内容と同一である。
その説明者は凡ゆる時代の神学者達であつた。と云ふのはイスラムは
Ijmā を建設するための如何なる宗教会議も他の機関をも有たなかつた。
其の役割は既往に遡る又進譲的なものである。Ijmā はそれが革新を採
り入れるのではないけれども、その革新を適法化する。Ijmā はイスラ
ムの或程度の進化を許容するが、然し同時にそれを一定の制限内にそれ

を守る。斯くてそれはオーソドックス――中庸を得た神秘主義と、予言者とそして聖者への崇拝として――たる事を認められる。コミュニティの意識の表現として、オーソドキシイの概念は流動に従ふが論理的に無制限たる事ない。然しながら、基本的な教義は、それが公的に定義されなかつたものであつてさへも特殊な固定性を以てコミュニティの意識に根を下ろしてゐる。

イスラムの本質的なドグマは、世界の創造者、生んだのでもなく、生まされたのでもなく、何ものも之に同じきもののない、アラーの絶対的な統一への信仰である。アラーは彼の永久の運命に依る世界に於ける凡ゆる出来事と同様に人間の凡ゆる行為の原因となる。と同時に人々は自由な行動をなす事が出来る、とゐふのはそれが報ひられ又罰せられる故に。奇蹟に依つて公認された予言者の中最後の最も輝かしいものそれはモハメッドであつた。他はアダムであり、アブラハムであり、モーゼであり、デーヴィドであり、ユダであつた。予言者について聖者がある。理論的

な歩寄り――それに依つて正統派回教は聖者の崇拝を認め――それはイスラムにとつては元々全く異教のものでありそして既存した民族宗教から由来したものだが、理論的な妥協それは大多数の人々の宗教的必要に負うてゐた。

斯様な妥協はモハメッドの出現の後にのみ可能だつた――コーランと矛盾して、それは超人的な特質を賦与される様になつた。――

此の過程は極く早い年代に始まり、そして神秘主義と奇蹟に対する一般的な信仰に依つて伸展された。其の時以来予言者は凡ての聖徒の首長として立つ様になつた。宗教的制裁を有つ魔術及魔除けは一般的な世界に重要な要素を形造った。審判の日の主要な標章は反基督のMahdiの、ユダへの復帰の様相なのである。予言者が彼の会衆のメンバーに執成す審判の日は天国と同じく地獄が詳細に表現されてゐる。重大な罪を犯した信者は必ずしも不信心者にはならず、不信心者が永遠の地獄で罰せられてゐる間に、信者であつた極悪な罪人は永遠に地獄には残らぬであらう。

主要な宗教的神の命、所謂「イスラムの柱」は五つに分けられる。(一)信仰の告白 Shahāda、(二)儀式的礼拜 Salāt (三)断食 Ṣawm、(四)喜捨 Zakāt (五)巡礼 Hajj。人は次の忠誠の宣誓を暗誦する事に依つて回教徒となる。「アラー以外に神なし。モハメッドはアラーの使徒なり。」一般的に行はれる Circoncision は義務ではない。忠誠は信條の信仰と宣誓とに存する。イスラムは明白に法則の宗教である、そして全体として神の命令に応ずることは忠誠よりも寧ろ強調させられた。個人的な祈禱から明確に区別される儀式的祈禱は回教徒の主要な外的特徴となつた。それは體の運動、コーランの暗誦、宗教的 Phrase から成る、一日に五度メッカにあるカーバの方向に対して履行されなくてはならぬ。金曜日の日中の礼拜 Salāt は イマム —— 二つの説教を読む —— の指導の下に共同の奉仕として行はれる。之を除いては金曜日は他と同じく労働の日である。断食日 Ramadān の月の間曉より日没迄の義務であり、食物、飲料、香料、煙草、性交から全く節制させられる。施與の税はその種類に於いて最も上位の税であり一年に一度賦課され、その「より高し」は確実な慈惠的な目的のためにの外支拂はれる。それはモハメッドの在世中施し物を與へると云ふより初期の義務から發展した。そしてその言葉の有つ西方の意味に於いて国家の租税よりも寧ろ教会の取るに足らぬ税である。個人的な慈善に附加へられて暖に薦められそして廣く行はれた。どの成人した回教徒も彼の生涯の中若し彼が出来るならば一度はメッカへ巡礼に行く義務を有つ。Jihād を実行する義務、不信心に対する神聖な戦は殆んど六つ目の柱として受入れられ、今日廣く一般的に承認されてゐる。イスラムのコミユニテイの凡ゆる非イスラム的コミユニテイに対する関係は一つの戦であり、それは単に一時的な利益を理由として休戦に依つて中断されるかも知れないが、それは全世界のイスラムへの服従を以てのみ目的とすると云ふ假定に基づいてゐる。イスラムの初期に於ける戦争の精神の汪溢に対する反動として「偉大なる神聖な戦」の教義が —— それ自身の情熱のための戦闘より成る —— 後に發展した。

イスラムは僧侶もなく教会組織も有たず、その言葉の眞の意味に於ける聖餐式もない。神学者は單に神の法則を知る所の人々である。彼等は眞の僧職のカストを構成しない。にも拘らず、彼等は相当の影響を有つ、それは普通の回教徒にとつてはその法則に從つて生きる事は不可能であつてさへも、その代表者に彼が示す恭順に依つてそれに対する彼の尊敬を表現するが故に。更に正統派は個人的な霊魂を導く必要を論議し、そして精神的な指導者の役割を演ずるSufiteの宗教團長の活動を嫌悪する。イスラムは人々を通して神の慈悲の如何なる宗教制度をも認める事は出来ない。

中世キリスト教の如く、イスラムは来世の宗教であり、禁欲的な要素を有つてゐるが、それは現世への特色ある根元的な愛を抑へる事は出来なかつた。それは修道院制度の棄却に示される。そして結婚への自然的な尊崇にそして商業と現世的な財産への積極的な態度に示されてゐる。然し大体に於いて否定の精神が拡がり、婦人に対する警告、裸体の禁止、礼拝所以外の豪華な建造物の禁止、宗教に基礎づけられた節約の倫理、主要な商品に於ける投機を有罪とすること、手仕事と貧困の稱揚に示されてゐる。其の他の宗教的指令は屢々音樂、生物のPortraitの強化された禁止、酒と豚肉の絶対的禁止である。質素にそして節約的に生きんとする義務、凡ての活動を只神と云ふ見方から律せんとする義務、人はこの現世への單なる訪問者であると云ふ——感情から起る不幸に堪へんとする義務。然しながら東洋の廣く弘布されてゐる宿命観は宗教に基くものではなくして、それは教育に、気質に基くものである。凡ゆる人間はアラーの奴隷であると云ふ意識は宗教的同胞と云ふ強烈な感情であると共にそれは大きな社会的重要性を有つ意識である。外部的には之は強固な分離主義と強調された宗教的プライドとに照応する。

今日迄イスラムを特徴づけた政治的性格はモハメッドが單なる予言者でなく、メッカからメディナへの彼の移住の時代から彼がその信者達の論議の余地無き現世の指導者であつたと云ふ事実に主として依存してゐる

る。そのメッカ時代には宗教としてのイスラムの弘布は專ら予言者の宗教的情熱と、その教團の確信に基づいてゐた。然しそのメディナの時代に於ては、その強調強化はアラーの宗教への転換よりもその予言者への屈従に置かれてゐた。数多き夫々の個人の改宗そして全部族の改宗でさへもそれは政治的性格のものであった。イスラムの宗教の弘布につれてメディナの霸権は拡充された。此の政治的構造はアラブの部族的統一をくつがへした——部族に於ける成員よりも寧ろ明確な標識を予言者の認識たらしめんとする事に依って。にも拘らず部族の感情は強烈に残り、そしてそれは專らコミュニティを一緒にした所のモハメッドの人間性に存したのである。族長は彼等自身モハメッドにのみ結びつくものと考へられた、そして彼の死後國家と宗教とはその分離を脅かされた。それ故に確実な勢力のある予言者の仲間は專制的な原理の維持を達成するに成功した。そしてその下に彼等の中の一人が最初のカリフに選ばれた。即ち特に予言的なる所を除いてモハメッドの機能の凡てに於いてその後継

者として・政治的な指導者は分捕品に対する様々な種族の欲望を共通の目的——イスラムの弘布に対する神聖な戦——に集中する事に成功した。初期に於ける jihad の教義の拡大せる発展は戦争の精神は凡ゆるものを犠牲にして奨励された事を指示する。

然しながら回教國の拡大は宗教的情熱に帰せらるべきではなくして、寧ろアラビアから周囲の文明化された國々へと拡がった所の人々の大移住と云ふ言葉で説明されねばならない。之は斯様な特性の最後のものである。経済的政治的情勢の故にアラビアに於いては部族はモハメッドの到来以前一世紀の間不安の状態であった。イスラムはそれを統一した。宗教はメディナの政治的構成を可能にした、それ故に國家はその信者の会衆を生み出したのである。然しながら後にそれはそれ自身の政治的目的のためにそれと独立に始まった所のアラビアの移住を動かした礼拝の会衆ではなくして國家であった。アラビア人の驚嘆すべき成功は——國民を統一し、輝かしい人間に依って若い國家の力を導かんとする意志、

そして現実的に征服を招いたペルシヤ・ビザンチン帝國の状態と云ふプログラムの結合に依って説明される。兵隊達はその分捕品の分前に依って鼓舞された、その五分の四は彼等の間に分たれた。

最初の四人のカリフ、アブーベクル Abû-Bekr, オマール Omar, オスマン Osman, アリー Ali の二十年の支配、予言者の凡ての教國、その部族の成員は、イスラムの黄金時代として見做された。シリア、イラク、ペルシヤ、エジプトが征服された、オマル、オスマンの下に起つた所のものがアラビア回教國の拡充の最初の偉大な段階と特徴づけられる。然し既に部族の、又個人的な軋轢は彼等自身の中に感じられ始めた。オスマンの支配の下の動乱はカリフの暗殺に由来した。新しいカリフ、アリーは自らカリフを宣明した。オスマンの親縁者 Muāwiya ―― その最も怖るべき対立者たる Muāwiya との絶えざる戦に従事した。然し Muāwiya との争闘の前にアリーは暗殺され、Muāwiya Ommiad カリフの最初のものとして一般的承認を獲得した。

オミアドの下に、アラビア回教國の第二次の段階、アルメニア、トランスオキシナ、インダスの地域が東方に於いて服従された、そして西方に於てスペインが又北アフリカが屈服した。その結果、キリスト教世界の廣大な地域がイスラムの支配になった。彼等の回教化と其の他の征服された領土の回教化とは然しながら、その屈服に同じ歩調をとりはしなかった。イスラムがアラビアに止つてゐる限りは、その新國家の支持者の圧倒的な大多数は何の問題もなく特にその宗教は受け入れられた。然し近東の開化された諸國とそして北アフリカが征服されるや否やイスラム諸國の拡大発展はイスラムの宗教の拡大と鋭く分離した。二三の例外を伴って、アラビア人は克服された者を改宗させる事を欲せずして、寧ろ大衆の上に特殊な経済的利益を有つ上層階級として彼等を保持する事を欲したのである。國家主義的なアラビア人の要素が、普遍的な宗教的要素にのしかからうとした。そしてアラビア人は武器を執ると云ふ立場から近東に彼等の宗教を強制する事は試みなかった。征服者アラビア人に従った聖

書に依る宗教の信者は保護を與へられ、貢を支拂ふ上彼等の宗教を信仰する自由を留め置かれた。初期に聖書に基く特権的な宗教の概念は、現実的にイスラムが接觸する凡ゆる重要な信仰を包含する如くユダヤ教やキリスト教を超えて拡まつた。只廃止されたアラビアの異教は除外された。非イスラムの臣民、Shimmi はイスラムの法廷に証人として現はれる特権なき所のその最も重要な資格なき、権利なき市民であつた。貢物 Jizya は Shimmi 又は Kharaj に依つて支拂はれた。征服地への課税はその前所有者の所有に残された。そしてそれは國家の財貨の收入の主要な財源となつた。戦争に参加した回教徒とその家族に対する恩給はそれから支拂はれた、種々なるその神政に於けるその地位に従つて。宗教と政府とは当時本質的にその性格はアラビア的であつたが故に非アラビア人の改宗はアラビア族への加入と云ふ手段に依つてのみ可能であつた。アラビア人でない所の回教徒は部族の外國の教團の位置と名前(Mawali)を引継いだ。アラビアの回教帝國の中に於けるイスラムの宗教の弘布は支配

階級の成長と貢を納める臣民の数の減少と云ふ意義を有つた。と云ふのは貢物の支拂はイスラムを受入れる事に依つて中止されたからである。此の時以来回教化は望まれはしなかつたが、確かにそれ自身目的ではなかつた。にも拘らず支配階級は、若し被征服者が彼等自身の相当な経済的社会的利益を保証するためにその宗教を変へる事に依つてのみそのレヴエルを上げようとしたならば、その彌益しゆく興味を発揮する筈はなかつた。改宗を禁止する事はイスラムの宗教的傾向を否定する事であつた。そして最後に一般的な宗教の概念は元々此の宗教と同一であつた所の國家の國民主義的原理を圧倒した。Omniad 帝國の末期の努力は増加する回教化とこの國民的原理との中和のためになされた。一部分は課税の改正と云ふ事に依つて ―― その大部分は改宗を経済的な刺戟に帰せしめられたその改正に依つて。

その他の要素に依つて支持された ―― Mawla に関する不満足の如き ―― Shiia の宣傳は最後に七五〇年に於ける Omniads の没落に導

かれた。然しそれは予言者の後継者である Alides ではなかった、然し彼等の従兄弟である Abbassides は革命の結果として権力を獲得した。彼等自身の目的のために Shiite の宣傳を使用し、そして彼等自身の集的的な宣傳を実践する事に依って、彼等は Alides をわきに除外し、そして又彼等の勝利はイスラムのアラビア王國の目的を示した。亡された歴代の王朝の成員はスペインに獨立の王國を建設することに成功した。それは後に Cordova のカリフに発展した。Abbassides のカリフの如くにそれは宗教においてオーソドックスであった、そして政治的分野に於いてのみ宗教に反対した。

Abbaside 王朝の支配の最初の世紀の間に、國籍に基づいた社会分化は全く消え失せた。アラビア人が土着の人民と親密な接觸と経済的な競争に入った時、その土着民達は物質的にも又知的にも彼等自身極めて優秀なる事を明かにした。此の優越性のためにアラビア人は彼等自身の卓越として彼等の宗教のみで対立する事が出来た、それ故にその宗教は強

く強調されたのであったが。政府はアラビアの貴族的な支配形態の代りに、そのあらゆる補助的な声明を伴った東洋的専制主義に依って特徴づけられた。既に被征服者を制禦する支配階級は存在しなくて、主人と対等の位置に立つ多数の奴隷が存在した。社会的に引上げようとする過程の完成につれて、アラビア語とそれを伴った宗教は急速な速度で拡がった。実際はアラビア人は然し宗教に大した関心を有ってゐたのではなかった。新しい改宗者とその子孫は、彼等は全く異った宗教的傳統を有ってゐたのであるが、今や傳道的な仕事を始めたのである。専制主義と共にアラビア人には全く異郷のものであった所の國家教会の概念が入って来た、彼等自身の宗教的優越性を強調するにも拘らず。非同教徒の改宗は宗教が必然的な支持者となった所の政治的な権威への関心に今や重点が置かれた。支配者達は神学者達の支持を得んと努めた。そして宗教的情熱に燃えた神学者達は改宗のために重点的に働き始めた。その結果カリフ帝國は大規模に回教化された。

Omiad - Abbaside カリフ國に依って代表される統一された近東國家にヘレニズム的な基礎に基づいてアラビア的なそして様々な國を包合して凡ての影響を示現した数限りなく増加したアジア的特色との綜合的な文化が発展した。イスラムは斯くて國家と文化た、その統一的な宗教的印刻を刻して滲透した。同時にイスラムは國家の適確な理想とその未来を特色づける文化とにその密接な繋がりの中に入って行った。その代りそれは前の宗教に関する精神的遺産の同化の結果として相当の変化を受けた。之は専ら外部的に起きたのである、その結果として得た借りものとその論争――それは内部的に行はれた――を伴った宗教的論争を通じて。といふのは他の信仰からの改宗者達はその慣習、関心、問題と共に前の宗教生活をイスラムの中に単に持ち続けたのみである故に。扨何よりも先づイスラムは宗教と國家の理想と文化の結合となった。そして凡ゆる地方的特殊性と政治的分裂にも拘らず、それは太西洋から支那に迄及ぶ偉大な精神的統一を形造った。宗教は國家やそれに照應する文化を創造はしない、ただ全体としてのイスラムは之等三つの要素の結合から興起した。後に、國家と文化が衰へた時に宗教に基礎を有った彼等の理想はイスラムの教義の一部に残った。

輝かしい豪華な一世紀の後に、Abbaside 帝國は凡ゆる偉大な回教國の特色であった様に衰頽し始めた。集権的な政府の弱体化は実際的に独立した支配者や歴代王朝の下にその領土の政治的アウトノミイに導かれた。同時にそれはカリフとの相互的認識の関係を結ぶことに依って彼等自身を適法化（正統にせんとする）する事に努めた。カリフは彼等が支配した所の地域の行治の資格を彼等に與へた、そしてその代りに彼は霸王として認められた。かくてカリフの領土とサルタンの領土の分割が起きた。それは凡ての近東のイスラムの歴史を占めた所のものである。スペインに於ける Omiads と並んで、それは主として Abbasids の卓越を認める事を拒否し、そして彼等自身のカリフの地位に対立して建設した所の北アフリカ及びエジプトに於ける Fatimites であった、Sovereins の

最も有意義な政治的表現であつた。Fatimite 王朝の建設者は Karmatians の奴隷の宗教的社会的運動と密接に接近した。そしてその運動は同時代の奴隷の反抗に依つて刺戟され、そして継いでコミュニストの社会のタイプを発展させた。それが元来関聯してゐた所の Ismaelite の運動の如くに、それは政治的社会的革新的目的を有つた。その指導者はヒエラルキア的な構成の中に巨大な野心的な活動を手段として実現せんと努めた、其処に於いては従者は完全に主人の精神的道徳的支配の下にあつた。最後に Fatimite カリフの Al-Hākim は彼自身神自身の化身であると宣明した。Fatimites の興起前約二十年他の Shiite 國家は Idrisites の王國の建設としてモロッコに起きた。

十一世紀に政治的分割とそして Sunnite イスラムの脅威された宗教的分離に対して方向づけられた反動があつた、そして一時の間宗教的政治的統一は東方に西方に復興された。西方に於いて此の統一は Almohades の Mahdist 運動に依つて間もなく成功した所の Almoravides に依つて成し遂げられた。

Almohades はその代りに一神教の嚴密な強化と Mahdi の特色の賞揚廓大に於ける純粋のオーソドキシイから出発した。東方に於ける Sunnite イスラムの再構成は Abbasides の如くイスラムに具現された公的な宗教性を有つ國家への古代ペルシヤ人的な概念の主要なる説明者（典型的なもの）としての Seljuks の仕事であつた。彼等はメソポタミヤ、シリヤ、アジア Minor の大部分を軍事的な封土に分割した　それは十二世紀の末葉に実際的には独立したが。Seljuks が第一回十字軍に依つて非常に弱められた後にイスラム正統の選良としての彼等の役割はエジプトの Fatimite カリフ領とそしてその Ayyubite 王朝を終結せしめた Saladin に受け継がれた。イスラムの両端から見れば十字軍は単なるエピソードであつた。其の後間も無く全東方イスラム世界はモンゴール征服に依つて氾濫された、それはエジプトの國境に漸く止り、数多の小國と共にバグダッドのカリフ領を破壊した。エジプトに於ける Mameluc-

ties の最も輝かしい代表人物 Ayyubides に成功したサルタン Bahiras はカリフの家の確実な人々を避難させた。其の時以来カリフの地位は実際は単にエジプトのサルタンの宮廷に於ける官職であつた、そしてその業務は彼等の元首に形式的な官等を授けることに同意すると云ふ仕事を遂行した。モンゴールに集中されたキリスト教徒の希望は新モンゴール國家が予期せざる速度で滲透した所のモンゴールのイスラムへの改宗と云ふ事に依つて画餅に帰した。

モンゴールに従属してアジア Minor に存続し続けた弱小 Seljuk 國家の一つの崩壊に続いて、オットマン國家はビザンチンに対する絶えざる反抗の中に発展した。宗教的基礎に基づいて締結された軍事同盟はその基底に偉大な役割を果した。それは一時の間政治的に西方アジアの大部分を聯合した Sunnite Turks Timur (Tamalane) に依つてそれを処分する打撃から驚嘆すべき容易さで回復した。約一五〇〇の Shiite Twelvers は又彼等の政治的な中心を建設した　そしてそれはペルシヤに於ける

Safawides の Shiite の家族に今日迄存続した。其の後一世紀その絶頂に達した新王朝は優勢にオットマンに対立した。Sunnites と Shiites Twelvers の間の対立の強化と悪化は宗教的又政治的な闘争の此の時期から始まった。現時に於ける第三の偉大なイスラム帝國は約一五〇〇を起した所の－インドに於けるモンゴールの帝國は十六、十七世紀の間に光輝ある豪華な時期を経験した、斯くて一八五七年にその最後の影が消える迄徐々に衰へた。オットマンはヨーロッパとアジアに拡がり続けた、そしてエジプトの征服と共に聖所はスニットイスラムに於ける論議の余地なき卓越さを獲得した。十六世紀初期に於けるその最も拡大の時期に於いてその後のオットマン帝國さへも相当の程度迄イスラムの政治的宗教的統一を再興した。そして最も有力なイスラムの支配者としてのオットマンのサルタンの主張はその版図が廣く承認された。オットマンイスラムの間では厳密なオーソドックスのドグマと Shiite の傾向を有つた強い神秘的な敬虔との綜合に依つて特徴づけられる。オットマンの進歩

はイスラムの初期の拡充があつたよりも猶更に強い印象をキリスト教國に與へた。然しながら眞摯な本質的に一時的なキリスト教世界の敗化ではあつたが、それは其の間に発展した現代西洋文明の敗退を結果せず、又西アジア、北アフリカの回教化と比肩するキリスト教の衰頽をも結果しなかつた。

イスラムは原住民に対するその文化的優越の結果として主として商業を媒介としてその政治的な境界を越えて拡がつた。イスラム諸國の内外に新しい宗教の拡充は一般に平穏に自然に行はれた。イスラムの精神に反した暴力と迫害に依る改宗は比較的に稀であつた。同じ要素が、それが一度改宗された所の人々にその強力な把握に関してイスラムの平穏な拡充が説明される　と云ふのは僧侶と如何なる僧院の組織をも缺如するが故に、責任の感情は個人的な信者の上に置かれたからである。従つて彼は彼自身の宗教に彼自身の生活に於いて重要な位置を與へる様になつた、そして常にそれを弘めやうとするその努力に熱心になつたのである。

此の仕事にその生命を捧げた宗教傳道者のみでなく、回教徒の凡ゆる階級の人々が彼等自身の信仰のプロパガンダに積極的に参加した。特に多くの機会を有ち、そして原住民が屢々外國人、又職業的傳道師を目して抱いた所のあの不信の念を蒙る事なかつた所の商人が、その成功に富んだ弘布を助長したイスラムの固有の性格の中重要なるものは、アラーの統一の主要なドグマの単純性とそして予言者モハメツドとの関係、全教義の合理的性格である。末世を強調する末世觀的要素、就中、不信者に対する永劫の地獄の罪の恐ろしい脅威は又効果的であつた。斯くて単純にして明確な宗教的義務が行はれた、その中礼拝は信者に依つて一日五度繰返されねばならない。そして巡礼はイスラム的統一の強制的な又鼓舞せんとする性格の顯現を示すのである。イスラムを強化するに貢献あつた他の要素は、初期に現はれた宗教に対する理論的に寛容ある態度と同様に民族の信仰を同化するその能力であつた。之等の傾向は或外的な環境に依つて助長されたその傳道の分野の中に、イスラムは支配階級の強力

な國家の、魅惑的な文化の宗教として現はされた。それはより高い社会的なそして文化的な地位に上る事を保證した、そして又屢々人々のより進歩的な要素を惹きつけた。その信者の敬虔な生活は、それは永久的な傳道的使命となったが、それに附隨した諸德は深遠な印象を與へ、十字軍の時代のキリスト教徒にさへも、又 Turks との戦に於いても深い印象を與へたのである。現代に於ける宗教的改革に関する種々の運動はイスラムの傳道的な活動を強化した。

過ぐる五十年の間にイスラムのより更なる発展を通して改革が努められた。之等の中の一つは一八八〇年に建てられそしてそれ以来一宗派となった— Ahmadiyya に依って成された。其の建設者 Mirza Ghulam Ahmad は Mohammedan Mahdi と同じく Jesus に後るべきを言明した。聖なる戦を否認して彼は回教徒、キリスト教徒、ヒンヅー教徒に対して彼の教を説きかけたのである。二つの学派の—彼の教義から発展した—より穏健派はその衙を Lahore に有ち、インド、回教アフリカ、ヨーロッパ—英國、独逸に主として其の支持者を得た—に其の集中的な傳道の仕事に捧げた。Sunnite イスラムとの結合への努力にも拘らず、それは実際は凡ゆる学派に依って反撥された。イスラム内部に於ける発展に関してより重要なのはモダニストの運動であった。

アジアに於ける回教徒國家の領土はかなり早い時期にイスラム化した。只最近セルジュク、オットマンの支配に依って、宗教はアジア Minor に滲透した。インドに於ける廣大な領域は十一世紀に附け加へられた。イスラムはより早く、トルケスタンを通ってイスラム化した Transoxiana から海洋を通って支那に達した。モンゴール運動は支那に於いて大きな獲物を得た。マレー諸島はインドから、そして後に直接にアラビアからイスラム化された。イスラムは又フィリピン群島に支持者を得た。アフリカの北海岸は初期に征服された、そして商業を通じてイスラムは帝國の領土を超えて北部及び中部アフリカに滲透した、上部エジプト、モロッコを出発して、サハラのオアシスのルートを通って行った。約九世紀後に之はアラ

ビア人の植民定住と遠くマダガスカルからザンジバル海岸のイスラム化に依つて補充された。イスラムは又西部、南部、東部ヨーロッパに足場を獲得した、併し十五世紀には完全にスペインを押しのけた。ノルマンの外敵は南部イタリー。地中海諸島——それはアフリカ海岸から征服されイスラム化されたが——を席捲した。東部に於いてはオットマンは彼等の宗教を遠くハンガリー、ギリシヤに迄運んだ、然しそれはバルカン半島にのみ著実な足場を獲た。ロシヤに於いてはそれは主としてモンゴール運動を通じて擴がつた、Golden Hordeの回教化は偉大な勝利だつた。Kirghizはロシヤ政府——それは彼等を後退せる回教徒と見做したが——に依つて八世紀にイスラムの信仰に改宗された。

十七世紀の末葉からオットマンの偉大なる回教帝國は西方に敗戦した。十九世紀にその過程は非常に速度を速めた、然し二十世紀の初頭迄にヨーロッパに於けるトルコの軍事的政治的敗退はイスラム世界に於けるトルコの地位を弱体化する事と、イスラム内部に於ける宗教的政治的勢力の再建設をも結果しなかつた。それ所か之等の敗退は特にAbd-ul-Hamid二世に依つて汎イスラミズムとして知られる防禦的運動の増進を導いた。それはヨーロッパに対立して傾向づけられた、そして傳統的なイスラム的宗教的政治的統一を強化し拡充する事を目的としたものである。然し西方の衝突はより特色ある國民主義的運動を生み出す様になつた、それは一九〇〇年以後近東の人々の間に一般化し、そして廣汎に拡がつたのである。オットマントルコの間に於いて、國民主義は一時汎Turanismの形態を採つた、それはトルコ人達を人種的に同盟せんとする統一への傾向として。世界大戦の結果として、ナショナリストの感情は外國の宣傳に依つて助長され、巨大な勢力に発展した。戦後新トルコ政府は、トルコ領土に束縛されてはゐたが、ナショナリズムをその論理的な結論に迄実践し、そしてイスラム的文化的経歴との完全な遮断を齎した。宗教は公的生活から排除されて、國家の利害に従属した。サルタン領は一九二二年に廃止された。之は一九二四年カリフの廃位、一九二八年に國家

宗教としてイスラムの廃止に続いた。回教托鉢僧の規則は又抑圧された。アラビア人の間では然しながら、オットマン帝國の没落を導いたナショナリスト運動は、宗教的精神的勢力と考へられたイスラムの合同へと入つて行つた、一方宗教的熱狂を否認して。アラビアのナショナリズムは其の性格に於いて地方的であり、そしてシリヤ、イラク、その他の地方的運動より成つてゐる。暫くの間それは政治的汎アラブの野心を放棄した。カリフ位 の消失はイスラムに於ける國際的な宗教的会合の概念を助長した。併しその元来の意味で汎イスラム的運動のそれではなくして。斯くてイスラムの政治的展開の目的は政治的理想の現実性の否認に依つて特徴づけられる。イスラムの領域の政治的分解、カリフ位の廃止にも拘らず、然しながら、強烈な共通感情がヨーロッパ人の支配に対立して存在する。聖なる戦の如何なる真摯な脅威もなしにではあるが。

現時に於いては、イスラムの宗教的側面は再び最もエフエクティヴなものになつた。回教徒の間の紐帯は彼等の共通の信仰と彼等の理想の統

一とに基づいてゐる。公教育の現代化につれて、傳統的な神学的訓育は衰へた、然し現実的な宗教的活動のより大なる再興は顕現されてゐる。真の回教的統一の特徴はコーランの共通の承認である。そしてそれはその支配の失はれた幾ばくかが未だ人々に依つて尊ばれ、そして支持されてゐるけれども。モダニズムとナショナリズムの運動――それは西欧的な考へ方の影響の下に起つたものであるが――は彼等に依つて影響された回教徒の文化的環境に於ける新しい又深い変化を含んでゐる。此の影響の下にイスラムの理想の政治的文化的要素は現代西欧的な考へ方に依つて意識的に棄てられ置換へられ始めてゐる。宗教的理想の傳統的形態でさへも批判的判断に依つてはかられてゐる。その唱道者にとつて元本的な基礎的なものに帰せらるべきと思はれる所のイスラムの真の宗教的領域にとつての此の後退は、未だ勢力的でありそして斯く政治的文化的分野に於いてイスラムに依つて支へられた損失を相殺する所のその中心的な宗教的な力を復興するだらう。

モダニストの分野はインド、エジプト、トルコにその主要な中心を有つて興起した。その傾向の凡てに共通するものはイスラムが未だ一世紀の間存立し、そしてルネツサンスの必要に迫られてゐる事の實現である。如何にして之が齎らさるべきかと云ふ事について意見は相異する。意見の多くの微妙な差異は示されてゐる。その完全な攝取についての西方の精神の理解の完全な缺如から、イスラム法の單調な拒否へのWahhabiteの傳統主義から、コーランとスンナ、イスラムの歴史への批判的洞察に凡ゆる現代的な成就を歸せしめることとなら。之等の傾向の後に眞のイスラムは文化に敵對するものでなくてそれどころか進歩に贊成するものだと云ふ思想がある。宗教の眞の中核とはその上に置かれた――それは又イスラムの衰退の原因となつたのであるが――人間的構造から自由でなくてはならない。そして又回教徒は共通善に關する見解に伴つて、現代の問題に對して束縛される立場に立つべきものなのである。此の立場からオツソドツクスの組織の拒否、イスラムをして宗教的倫理的眞理の中核に歸せしめんとする努力を導いた。現代的な倫理的社会的考へ方に基づいて眞正なものと認めた所の其の傳説とコーランの解釋を基礎づけんとする傾向は、通常歴史的に間違ひであつた所の見解を導いた。最も[illegible]いオーソドツクスなグループの中に於いてさへも、宗教的な再興に對する間違なき努力がある。部分的に相互に重り合ふ所の種々なる潮流はイスラムに於ける現代の危機の表現である。イスラムがより更に分化するだろうと云ふ事は全く可能である――宗派の興起に依つてよりも寧ろ國家教会の形成を通じて。大多数の人々はその傳統的な形態に密着するだらうし、一方モダニズムは教養ある人々の間に拡がり続けるだらうと云ふ事は期待出来る。然しながらモダニズムの進歩は宗教的確信を諦める事は意味しないだらう。そして西方の考へ方との衝突に依つて特徴づけられる現代の重大な危機はイスラムを破壊するだらうと云ふ事はありさうもない。

現時回教徒の数は主としてヨーロッパの支配であつた、又今支配下に

ある、そして世界の他の部分の靜態的な諸國に於いて増加しつゝある。新しい分野への回教の明白な弘布はないが、然し中部アフリカ、インド、蘭領東インドに於いて注目すべき發展は非常に輕微なものである。ソ聯に於ける回教の情勢について適用出來る信頼すべきデータは存在しない。イスラムは未だ社会力として魅きつけてゐる。「植民地的プロレタリアートレからの多數の改宗者は、イスラム化する事に依つて文化的な認識と人間的尊嚴の意識を獲得してゐる。」と云ふのは典型的な回教徒は彼等のコミユニテイを單なる法律的な統一と見做すことなくして、超自然的要素を有つ社会の教会的若又殆んど存在論的な現實在と見做してゐる。

第三節　回教徒の分布と列強の回教政策

此の服從の信仰として、「劍かコーランか」を軸として、その祭政一體性の中にその普遍性と劃一性を把持し來つた回教徒の分布は、凡そ次の如き地域性を示してゐる。

一、獨立國内の回教徒數　（單位千人）

○ヨーロッパ　計	三、三二八
（内訳）	
アルバニア	七〇〇
ユーゴスラヴィア	一、四〇〇
ブルガリア	七〇〇
ルーマニア	二六〇
ギリシヤ	一八〇

フランス　八〇
ポーランド　六
リトアニア　一
フィンランド　一

○ソヴィエト聯邦　計　二〇、〇〇〇
アゼルバイジャン、アルメニア、クリミヤ、ジョルジア、カザキスタン、ツルクメニスタン、ウズベキスタン等の三十二の回教小共和國が包含、

○アジア　計　五三、一四二
（内訳）
サウヂアラビア　四〇、〇〇〇
イエーメン　二、三〇〇
オマン　五五〇
ハドラムート　二五〇

トランスジョルダン　二五〇
トルコ　一五、二〇〇
アフガニスタン　四、六〇〇
イラク　二、六四二
イラン　一四、〇〇〇
タイ　三五〇
支那　九、〇〇〇

○アフリカ　計　一三、〇八〇
（内訳）
エジプト　一二、八〇〇
リベリア　二八〇

合計　八九、五五〇

二、属領の回教徒数（単位千人）

(A) 英領

合計	九五、六六〇
ヨーロッパ（サイプレス島）	六三
アジア　計	八一、〇七八
（内訳）	
アデン	三五〇
印度	七七、六七七
マライ	二、三〇〇
パレスタイン	七五一
アフリカ　計	一四、五一九
（内訳）	
スダン	四、二〇〇
ソマリランド	三四四
ウガンダ、ケンヤ	
タンガニカ）	一、二四三
ニヤサランド	一〇三
ガンビヤその他	六九三
ナイゼリア	七、五三〇
ザンジバール	二一〇
南亜聯邦	一四五
マウリス	五一

(B) 蘭領（蘭印）

	五四、〇〇〇

(C) 佛領

合計	二五、三一八
アフリカ　計	二二、七四三
（内訳）	
アルゼリア	六、二四七

チュニス　二、三三五
モロッコ　五、八九八
佛領東アフリカ　六、二四一
佛領南アフリカ　九四五
カメルン　八七
ソマリランド　二五〇
マダカスカルその他　七四〇
アジア　計　六、五七五
（内訳）
シリア　二、三〇〇
佛印　二五〇
印度　二五

(D) 伊太利領　合計　五、一八五
（内訳）

ロードス島　一五
リビヤ　六七〇
エチオピア、エリトレア、
ソマリランド）　四、五〇〇

(E) スペイン領
モロッコ、リオ・デ・オロ、）
ギニア　六六六

(F) ポルトガル領　一、五〇〇
（ギニア、モザンビク、アンゴラ）

(G) ベルギー領（コンゴ）　五〇

(H) その他　合計　六五
北アメリカ　二五

南アメリカ	三〇
太洋洲	一〇
合計	一八三四三八

以上全世界に約二億八千万を占める回教徒の中、大東亜戦争の結果今日既に蘭印六千万、マライ二百五十万の回教徒をその勢力範囲とし、やがてインド七千七百万の回教徒の動向を注目しなければならぬ現今、以下回教徒に示された列國の回教徒の政策を省みる事に依って、回教徒の其具し示顕するその方向と、回教徒政策全般への検討を試みたい。

其の属領乃至植民地に多数の回教徒を有つ英、佛、伊、蘭、ソ聯等、及び前大戦に依って其の廣大な植民地を喪失した独に至る迄、此の執拗なる迄のその実践力と、狂信的な回教徒に対して、寧ろ忍耐強い懐柔と夫々のより優れた文化を有つて徐々に教化せんとする以外に何等の対策も残されてゐないか如く、勿論それへの破壊が必然的に痛切な失敗に終

り、唯一の残された途が此の寧ろ自由放任に近い漸進的な歩みを辿らされたと云はるべきものなのである。

英國の回教政策も右の傾向以外に出でるものではないが具体的には大別してその印度に対する場合と、アラビア半島に対する場合とにかなりの差異が示されてゐる。英國は印度に対してそのインド教徒と回教徒との対立をして、その植民政策の原則としての分割統治の具と使用する事に依って、その被圧迫の立場にある回教徒を煽動し来ったのである。之に反してアラビア半島並びにエジプトに於いては、之等を欧亜を結ぶ紐帯としての勢力範囲とせんとして、その特異の粘着性と外交工作とに依つて、恒に回教徒の懐柔に努めて来た。其の間積極的に実力行使に訴へた事もあるが、にも拘らず回教徒自身の有つ信仰そのものには一指を抵觸せざる慎重さを保持してゐた。然しパレスタインに於けるユダヤ人とアラビア人との相剋、エジプトのワフド黨の紛争、インドに於ける國民会議派と回教徒の一時的提携の如き英國の回教圏政策もかなりの破綻を

示したとは云へ、右の如き英國の採つた懐柔政策の成功は、著名なるロレンス、フィルビーの如きに負ふ所大なるものであつたと云はれねばならない。前大戰後ネジドの大守、サウヂアラビアの王となつたイブン・サウドの如きすら結局に於いて英國の懐柔に躍らされたと云はるべきであらう。

前大戰後イタリアはトリポリタンとキレナイカ、即ち現在のリビアの回教徒を有つ事に依つて、一九一九年六月一日の條約に於いて之にイタリア市民權を附與し、イタリア市民と同一の權利義務を認めた。斯くの如き急進的自由主義的な政策は、回教徒の増長と誤認を齎らし、一九二一年から三〇年に至る迄、彼等との間断なき抗爭に常に武力鎭圧を以て臨まねばならなかつた。このリビアに於ける回教徒の暴動は一九三一年その根據地クフラの陥落に依つてそのピリオッドを打つたのではあるが、此の失敗のためのイタリアにとつた極度の峻嚴さは結局全世界に於ける回教徒の反軍的風潮を齎らしたのである。一九三六年更にイタリアはエ

チオピアを得、イタリアの採る回教政策は破壊する事なくして教化の方向を嚴粛に歩んでゐると云はるべきである。

蘭印の回教徒は凡て正統派としてのスンニー派に屬し、一九二〇年から同二七年にかけてコミンテルンの暗躍に加へて、彼等自身の有つ積極的性格は、オランダをして極めて困難な立場に置かしめたのである。其の中原住民の内政參與權への強烈な要求は、一九二七年、蘭印人民議会「フォルクスラード」開設の余儀なきに至らしめ、代議員六十人中二十五人が原住民を代表した。之に加ふるに逐年的な工業の発達は労働問題をも惹起したが、蘭印政府は穏健派回教徒との妥協に依つて、之は内政問題に迄干與するの位置を占めず、結局組合主義運動の範囲に止り得た。

オランダの蘭印回教徒への対策も或ひは彈圧し或は懐柔を事とする場合もあつたのであるが、それを貫いてゐるものは、蘭印住民社会の有つ動かし難い階級制度を利用する事に依つて、その上層階級の子弟教育に注目する所の選良主義であつた。そして右の一面一般民衆に対してはコー

ランを基礎とする回敎々育を奨勵する事に依つて極めて寧ろ円滑な対策統治に成功したと云へる。

ソ聯は英佛の帝國主義に対する回敎徒の煽動とキリスト教操作を目的として、一九二〇年来、イラン、アフガニスタン、イラク、シリア、パレスチナの如き回敎諸國に対して積極的に——アラビア語の「アル、アラム、アル、アフマール」宣傳紙の発行——働きかけたのではあるが、それの有つ共産主義は結局に於いて来世観を基調とする回敎徒にとつては氷炭相容れる事能はず、必然的な失敗を来したに過ぎない。にも拘らずソ聯の執つた回敎徒政策に注目しなければならぬ所は、その自國内二千万の回敎徒、三十二の小共和國に対する寛容さである。往時、帝政ロシヤの國教なりしギリシャ正教に対する假籍なき圧迫にも拘らず、ソ聯政府は回敎徒に対しては、それの有つ固有の信仰、その個人的な生活に対しては全くの自由放任の態度に出たのである。その熱狂的な回敎の信仰と、回敎徒の有つ反抗的精神をソ聯政府は一指だに觸れざる慎重さを把

持する事に依つてその統治を全うしてゐる現状である。

フランスが回敎徒と接觸したのは既に古くマルセイユ商人の地中海沿岸進出の当時に始まり、一五六四年には北アフリカのアルゼに回敎國に於ける最初の領事館を開放し、ナポレオン一世のエジプト遠征も又フランスと回敎圏との交渉に一つの時期を劃してゐる。後、アルゼリア、チユニス、モロッコなどを自國領としたフランスは、専らその現前の経済的利益を目標として、その回敎徒中の有力者との交渉を以て、一般回敎徒の操縦を心がけた。元来佛領内の回敎徒は正統派回敎の禁止する奇蹟、迷信に確執してゐる異端マラブー派に属してゐるのであるが、フランスは之等を現実の必要から援助し、利用する方策に出でてゐるのである。

ドイツは現今直接には回敎徒に関聯を有つ立場に置かれてゐるのではないが、それの回敎徒に対する深い研究と、それに立脚した対策への並々ならぬ関心とは以て学ぶべき處を多く持つてゐる。換言すればドイツのとるトルコ、アラビア諸國、イラク、イラン、アフガニスタン等の近

東一帯に対する其の宣傳工作は、その全体主義的基調と回教徒の有つ性格との結び付と共に大いに注目しなければならぬものと思はれる。

第四節　回教國概說

第一款　近東

回教発祥の地であり、それを擔ふアラビア民族、五世紀に亘る回教帝國を建設したトルコを有つ近東諸國について次に概觀しよう。

一九一六年オットマン、トルコ帝國の範囲にあったアラビア諸國は異教徒イギリスに迎合する事に依ってトルコに叛旗を飜へした。之等は特にその獨立運動とイギリスの採った事前工作との関聯に於いて理解さるべきものではあるが、別してそれはアラビア人の宗教を缺いたトルコ帝國への屈從を潔しとしなかった所に淵源はあると云はれねばならない。

即ち一九〇九年のクーデターに依るトルコの「青年トルコ黨」内閣の実現は、オットマン、トルコの傳統的政策たる「汎イスラム主義」を排斥し、「汎トルコ主義」に依ってその衰勢の挽回を努めんとしてゐたこの動向へのアラビア人の反抗と見做さるべきものである。メッカの大守フ

サインは著名なるローレンス大佐の使嗾に依って蹶起したが、戦後のアラビア民族の帝國への夢を、サイクス、ピコ密約に依って画餅に帰し、アラビア半島は大部分英佛に分割され終ったのである。独立國サウヂ、アラビア、イエーメン、オーマン等何れも英國の勢力下に置かれてゐた。

トルコ

五世紀に亘る傳統を一切放擲してムスタファ、ケマルはトルコ革命を完成した。戦後聯合國はトルコの分割について様々の暗躍の中にその夫々の要衝を占領してゐた。ムスタファ、ケマルは此の事態を前にして、絶えざる細心の注意の中にトルコ人の愛國心に訴へ一歩々々確実に政権の樹立に近づいて行った。一九二三年十月トルコ共和國の宣言が発せられ、越えて二四年三月最後のカリフが廃位されて此処にトルコの俗權共和國は完成した。現今トルコに於いて回教は他の宗教と全く同じく夫々の個人生活の中にのみ残存し、回教の一切の公的活動は許されてゐない。斯くて回教自身の有つ特色とせられた政治性はトルコに於いては名実共にその姿を消し去られてゐる。にも拘らず個人生活に於ける回教の残存は意外に根強いものを見るのであるが、――特に之は中年以上の人々の中に――然し青年層に於ける宗教意識の急激な稀薄化は、共和國政府のとる欧化政策と相伴ふ事に依ってトルコは日一日回教國としての姿を消しつゝある。然しこのトルコに行はれた回教信仰の脱皮は若し之が外部よりの強制に依って行はれたとするならば、それは右の如き跛行的形態に於いてさへも必ずや成就し得ることなく、それは内部よりの換言すれば宗教的情操の愛國心への轉生としてのみ右の脱皮が行はれ得たと結論すべきものであらうと思はれる。

オットマン、トルコ崩壊後全世界回教徒の中心は今日フッサインに代ってメヂナ、メッカの大守となりサウヂアラビアの王を宣言したイブン・サウドに集ってゐる。中南部アラビアをその勢力範圍とし、就中聖地メッカ、メデイナの保護者としての彼の位置は英國に対するその從屬的位置を脱却した。メッカ巡礼の最後の日、彼を廻って巡礼者との大交歓會

は彼の声望を彌や上にも高からしめた。彼は特に汎イスラム主義を高唱し、以てイエーメン、イラク等の近隣回教諸國を取纏め大アラビア回教國建設を目指して動いてゐた。斯くて今次大戰勃発前には既にアラビア各地の委任統治制撤廃のための統一的立場を結成しつゝあつたのであるが、今次大戰に於いてイラク滅び、エジプト、トランスジョルダン、パレスチナ、シリアが英國の下に屈し、サウヂアラビアも孤立し、英國の支配下に置かれんとし、ドイツのこの近東への進出形勢と相俟つて極めて複雑な様相を呈してゐる。

イランに於いてはカジヤール、モハメッド、アリ王の専横と、この國を二分せんとした英露秘密條約協定への反抗として、一九〇八年に革命が勃発してゐる。回教國としてシーア派の根據地たるイランも政治的には前大戰に於いても、又今次大戰に於いても常に英露二國の勢力爭の葛藤の舞台とされる受難を蒙り続けてゐる。

アフガニスタンは回教國としてスンニー派に屬するが、イランと同様

英露二國の圧力下に踊躇し、前大戰に於ては辛うじて形式的に中立維持を保ち得たが、そして猶現今アマーン、オーラフ、カーンは英依存の傾向の脱却に努めつゝあるも、猶極めて多難な將来を思はせられる。

イラクも亦前大戰以来絶えざる戰禍の洗礼を受けてゐる。英、土飛闘の舞台とされ、後にイギリスの占領下に於かれ、イギリスの委任統治領となり、一九二二年佛に依つてダマスクスを逭はれたファイサルを王に迎へて英の保護國となり、一九二五年漸くにして形式的に独立國たり得たが・今次大戰に依つて再び英國の占領下に置かれるに至つてゐる。

第二款　印度

七一一年アラビアのムハメッド、イブン、カシムのシンド占領に依つて回教徒のインド侵略は始まつてゐる。其の後ガズニ王朝のマームードは一〇〇一年より一〇二七年間に実に十二回以上に亘つてインドを攻略した。十二世紀末葉ゴール王朝のアフガニスタンよりの南下に依つて回

教徒は事実上インドを征服した。それより十五世紀迄は回教徒の継時的な侵入を受け、十八世紀迄は莫臥児帝國によって回教統治がなされた。一八五七年英國はかのインド傭兵の叛乱鎮定を契機として遂に莫臥児帝國を滅亡させ、代ってインドをその統治下に置くに至ったのである。其れより後の英國のインド統治政策、即ち従来の公用語ペルシャ語の廃止と英語の強制、その個人生活全般に亘る欧化教育の結果は、インド教徒の此の統治策への積極的な共鳴とその社会的位置の向上に反して、依然征服者としての優越感を離脱し得なかった回教徒は英國統治政策への忌避に依って徒らに自己の地位を下げるのみの結果となり終った。従来免税の特権を有ってゐた回教徒の学校、舊家は悉くその特権を奪はれ、インド教徒よりも低い地位に甘んぜざるを得ず、インドに於ける回教徒は政治的には勿論経済的にも甚だしい没落を余儀なくされたのである。此の英國の統治政策に依って招来された回教徒の反英的傾向は、アラビアの急進的なワッハビアー運動等の趨勢に刺戟されて、之はアフガニスタン

などを加へてインド回教徒間に汎イスラム主義的思想を強固ならしめるに至った。然るに一方此の回教徒に対して文化的経済的にもその優越を占めたインド教徒の間にもインド復興を目標として反英的色彩が濃厚になるにつれて、又他はインド西北部に於けるロシア勢力への拮抗――インド回教徒は大多数西北部に占められてゐる――の必要に迫られると云ふ現実の事態に誘はれて、英國は遂にインド教徒抑圧のための手段としてその回教徒の懐柔のためにその回教徒政策は修正の余儀なきに至らしめられたのである。此の英國のインド教徒偏愛の傾向の躊躇に照應して、回教徒側もそのインド教徒の圧力と、インド教徒の再興運動が純正ヒンヅイズムの昂揚として回教徒をも排斥さる、動向を有つ事を考慮する事に依って、回教徒も一八八六年は全インド回教徒教育会議を催すなど英語教育への回教徒の妥協を示すに至ったのである。此の動向に直面して英國は一八九二年インド会議法に依って総督立法会議の民間議員に回教徒代表を任命する事とし、此処に始めて回教徒はその政治的発言権を獲得

したが、爾後の屢々なる憲法改正に於てもその種族別議席割当制には回教徒に一定の議席を與へてゐるのである。現今インド回教徒の政治團体として最も有力なものはモホメッド、アリ、ジンナーを首領とする全インド回教徒聯盟である。一九〇六年アガ・カーンに依って國民会議への拮抗を目標として結成されたものである。此の回教徒聯盟の最初の動向は、英國の政治に一應の服從を示し、大衆の政治的自覺の上に立って自治制獲得を目標とするにあったのではあるが、一九一一年トリポリ戰爭、一九一二年のバルカン戰爭に於けるイギリス政府のトルコの無視、その伊露両國への親近は聯盟の心證を痛く刺戟し、一九一三年ラクノウ大会では即時自治権獲得を決議した如き様相を示したのである。續いて前大戰に於いて英、ト両に戰爭勃発するや聯盟は遂に対英非協力、自治獲得を目指して國民会議と共同戰線を張り、一九二〇年聯合国側の対トルコ講和條件の過酷はこの聯盟と國民会議の反英運動を益々強化させる結果となったのである。斯くの如くインド回教徒の示す動向は、回教圏、就

中その中心としてのトルコへの深き関心に基礎を有つ事に依って、常にそのトルコの動向如何に依って動かされてゐるのである。事実今次大戰に於いても回教徒聯盟の対英要求には「イギリスはパレスタイン問題につきアラビア人の要求を満足せしむべし」の一項がある。此のインド回教徒の有つ回教圏への深い尊崇の念と関心、そしてその動向に決せられる自らの進退、此処にインド回教徒を性格づけ、又注目しなければならない最も大きな鍵がある事を忘れてはならない。然し実際にはインド回教徒はそのインド教徒に対抗して自らの國内的地位の確保するに寧日なき有様であって、その対英抗爭も極めて消極的たらざるを得ず、その回教圏への精神的紐帯は別として、又教徒の人口數七千七百六十七万余、インド總人口の五分の一、全世界回教徒の四分の一を占めるにも拘らず、その政治的経済的勢力は決して有力とは云ひ難い状態に置かれてゐるのである。今次大戰以来回教徒聯盟の動向は寧ろ國民会議への対抗を事とし、英國に対しては極めて消極的な立場を採ってある。同聯盟は一九三

九年運用委員会に於いてイギリスに対し

一、同聯盟を回教徒の代表團体と認めること

二、一九三五年インド統治法による聯邦制を完全に放棄すること

三、回教徒の宗教的、政治的、文化的、経済的、社会的の自由独立を保障すること

四、憲法の改正には必ず聯盟の同意を得ること

の如き諸條件を提出し、専ら回教徒の利益擁護につとめ、極力反英的傾向を回避せんと志し、専ら國民会議への不満の意を表してゐる。現今回教徒聯盟がとる立場はインドをインド教徒と回教徒との二独立國に分立せしめようとするものであって、一九四〇年三月のラホール大会にて之を決議した所である。然し又アザット、ムスリム、コンファレンス——国民会議、ヒンヅーマハサバ、全印ヒンヅー聯盟、シーク教徒、及び国民会議派回教徒——は此の回教徒聯盟の決議に対して反対の立場をとってゐる。現今迄回教徒とインド教徒の反目対立を巧妙に利用する事に依つて英国のインド統治は成功し来ったのであるが、現在インドの対英態度はかかって一に國民会議と回教徒聯盟との妥協一致を如何にして齎すべきかにあるのであって、此処にインドの、又英国にとっても寧ろ宿命的な苦悩が存すると云はるべきである。インド回教徒は支那事変に於いて国民会議派のとった反日親英的傾向に反して寧ろ我が国への深い関心を加へつゝある。インド回教徒の反英的傾向、就中ファッショ団体としてのカークサル黨の如きに我国は特に注目しなければならぬ所以も又此処に存する。

第三款　インドネシア

インドネシア住民七千万の中キリスト教徒——セレベス東北部ミナハサ地方のメナド人、アンボン島のアンボン人、スマトラのバタック人、フロレス、チモールの住民等——千五百万、バリー島及びロンボク島のバリー人のヒンヅー教徒百万余、之にニューギニアのパプア人の如き原

始宗教の部族を加へて東インドの非回教数は二千万を出でない。従つて東インド、即ち旧蘭印諸島、マライ半島のマライ人、又比島の一部等の回教徒数合して五千数百万と云はれ得る。一般に東インドに於ける回教はシャフエイト派を信奉してゐるのであるが、之は回教渡来前一千年に亘つてこの群島に弘布してゐたヒンヅー教と極端に混淆してゐるものである。そしてこの回教もその宗教的情熱と云ふ観点から見る時それは各種族に依つてかなりの差異を見せてゐる。その最も回教化の程度の高い所はスマトラであつて、殆んどその北部に住むアチエー人は所謂アチエー戦争に於いてその狂信性を発揮したのであり、又同じくミナンカバウも又熱心な回教徒であり、ジャバではバンダム地方が信仰心に篤い。

回教がインドネシアに渡来したのは十三世紀であるが、それ以前よりインドネシアに於てはヒンヅー教が此の群島一帯に亘つての支配的な宗教であつて、十三世紀から十五世紀に至るモジヨパイト王朝の時代はヒンヅー文化の黄金時代として、ヒンヅー教のインドネシアに與へた政治

的、経済的、文化的各般に於ける影響は回教が與へたそれと比較出来ぬ程に強大なものであつたのである。此のヒンヅー教は本来ジャバ人の有つてゐた原始的な心霊教と混淆したものであつて、今日に於いても此のジャバ的なヒンヅー文化は原住民の生活全分野に亘つて深い関聯を與へてゐる。モジヨパイト王朝も然し十五世紀になつて回教のため衰頽の一路を辿り、此の時ジャバを逃れたヒンヅー教徒が現今のバリー人である。十三世紀半ば回教は北部スマトラに傳来し、アチエーにサルタンはその勢力を確立した。インドからの商人と住民の結婚等に依つてそれは極めて徐々にしかも根強く、スマトラ、ジャバの海岸地方に、或ひはボルネオ北部のブルネイ、スールー群島を経てモルッカ群島に及んだ。十五世紀末葉にはインドネシア全体が既に回教化され、モジヨパイト王朝の崩壊後はバンタム、マタラムの二王朝がジャバを分割統治した。今日中部ジャバのジヨクジャヤとソロにある王国はマタラム王朝の後裔である。

右の如くインドネシアに渡来した回教は極めて自然に住民の間に順調

に弘布されたのではあるが、然し此のインドネシアに至つた回教は途次インドに於てヒンヅー教の影響を受けたものであり、更にインドネシアに於けるジャバ化されたヒンヅー教と再び相会したが故に、此処に於ける回教は寧ろ極めて偏頗な正統派回教に遠いものとならざるを得なかつたのである。斯くてインドネシアの回教徒の向に於ては、その厳格なる戒律行事に対して極めて冷淡なものとなり、一日数回の祈禱もせず、豚肉も平然と食し、断食月も行はれてはゐない。精神的には熱心な回教徒たるスマトラのミナンカバウ族と、回教の教律と相反する母系制親族相続の習慣を続けてゐる。インドネシアに於ける回教徒の守る行事と云へばプアサ明とメッカ詣りのみである。而も此のプアサ明も回教暦として
の正月ではないが、彼等は晴着を着飾つて之を祝福する、聖地メッカへの巡礼とハジへの尊敬も最近はハジに対するその社会的尊敬とハジの数の増加とは反比例してゐる現状にある。
東インド会社の往時は割礼、回教学校、回教徒の公然又は内密の儀典

執行を禁止し、東インド会社の船にはメッカ巡礼を乗せない政策を採つた事もあつたが、一八一八年蘭印統治法制定以後はオランダは回教のみでなく住民の社会組織、風俗、習慣には一切干渉しない政策をとつたのであつた。宗教上には寛容を以て臨み、進歩には好意的中立を持し、宗教に依る政治運動は弾圧すると云ふ三原則がオランダの採つた回教政策であつた。宗教不干渉主義は回教が何等の実害を伴はないからであり、メッカ巡礼もそれに依つて狂信的になるか、又は反蘭的思想を植付けられて帰国するが如き何等の害を有たなかつたのによるのである。又たとへ進歩的な改善であり民族主義者の賛成するものであつても、宗教に基く習慣の改善は頗る困難を極めるが故である。近時蘭印政府が一夫多妻性を禁止せんとして住民女性より反対を受けた事実すらある。そして尚回教徒が回教を利用して反蘭的政治運動をしない限り、蘭印政府は殆んど回教に干渉しないが故に住民がオランダに反感を懐いてゐる事はなかつたのである。此の限りに於いてオランダの執つた回教政策は成功であ

つたと云へるのである。従つてインドネシアに於いては真の意味で回教運動と見做すべきものは存在しない。現在インドネシアに於ける最大の政黨サリカツト・イスラムも、それは名稱のみであつて、実質的には何等の宗教性をも保有してゐない。この政黨は回教主義に立脚する東インド人の繁栄を綱領としてゐるが、それは元来一九〇九年東インド人のバチツク工業が華僑の競争によつて危機に見舞はれた時その防衛運動としてサリカツト・ダガン・イスラムが結成されたのが端緒であつて、それは回教運動でもなく、又政治的運動でもなく、専ら経済的なものであつた。近時黨員五、六十万の多きを数へ、対蘭非協調主義を捨てゝ協調主義に轉じたのであるが、回教的な性格は飽迄も二次的なものとなつてゐる。之に対して一九一二年に創立されたモハマディア協会は回教運動としての體裁を具備してゐる。それはインドネシアに於ける回教々義の検討、回教思想の普及を目的とし、普通教育と共に宗教々育を行ひ、種々の救済事業、無料診断、無産者の保護に盡力してゐるが、政治的には全く中立の立場を採つてゐる。

右を結言すればインドネシアに於ける回教はインドに於ける如きその政治性をも有たず、又宗教的色彩も稀薄ではある。嘗てのバンタム暴動、又アチエー戦争に於ける回教徒の役割もそれは回教徒としてではなく、専らオランダへの東インド人としての抵抗と見做さるべきでなければならない。そして猶インドネシア回教のヒンヅー教との混淆はインドに於ける如き回教とそれの如き対立をも惹起せず、寧ろインドネシア回教は文字通りインドネシア化された回教と云はれねばならぬ。にも拘らず彼等は又依然として回教徒である限り、インドネシア回教をして之を敢へて回教として殊更に注目する事も、又之をその回教的色彩の稀薄さに乗じて無視する事も許されぬ状態に置かれてゐるのであつて、此処にインドネシア回教の特異性と同時にそれへの対策の困難を考へさせられる所以が存する。

第四款　支那

支那に於ける回教徒の数は正確な所は不明ではあるが一九三七年中國年鑑に依れば三千九百七十一万と云ひ、又趙雲隆氏に依れば四千九百四十一万と云はれ大体四千万乃至五千万であり、支那人口四億として十人に一人乃至一人以上の割合で回教徒は分布してゐる。特に往時の西域たる新疆省から陝西、甘粛に多数存在してゐる。支那の回教徒はその本土にあると辺疆にあるとを問はず、その職業は智的職業に就いてゐるものが少く、牛羊皮革類を取扱ふものが多数である。特に支那本土には回教徒の豚肉禁忌、回教徒以外のものになつたものを攝らぬ習慣から回教徒の宿屋飲食店が多く散在する。支那の回教徒は漢化の程度の著しい漢人と大差なき回・漢、漢回、東干と呼ばれるものと、然らざる纏回、纏頭回と云はれる新疆省に多数存在してゐるものとの二つがある。

支那に於いては回教は特にその中心地と見做さるべき地方が二つに分たれる。一は雲南を中心として貴州、廣東を結ぶ一系列、他は河北、陝

西、甘粛、新疆を連ねる地方である。此処に支那に対する回教の傳来経路が二つに分たれる事実が示されてゐる。アラビア――支那史に云ふ大食國は、特にその商人達に依つて回教を伴ひつゝインド洋を経てインドネシア地方に進出した。此の回教の南下の一分派として、支那に於ける回教は既に七世紀の中葉マラッカ水道を越えて北上廣州に来り、其処に「蕃坊」なる租界を作つた事に此の南からの経路を経た端緒がある。此の廣東から奥地雲南に傳はり其処に根強く弘布される迄にはかなりの年月を要してゐる。此の外に他の一つの経路――陸路西域を傳来したものがある。ペルシヤ湾から東北に向ひトウルケスタンを経てパミールを越え、天山南路又は北路を経て東に向ひ長安を終点としたものである。唐史に依れば高宗時代には北は蒙古から西は中央アジアまで唐の領土であり、又玄宗時代にはトルコ族が今の新疆地方を台據して一國家をなしてゐたのであつて、回教はこの支那勢力の西漸、トルコ族の東進としての東西文化交流の流れに沿うて西北支那にその発達を見るに至つたのであ

る。然し此の西域経路も唐末五代に亘る内乱のため行路平安ならず貿易交通も一時中絶し、宋代には支那の國威振はず陸路通商は阻害され、九世紀にはサラセン帝国内部に内乱発生し、中央アジア一帯に波及したので、この陸路交通は全く渋滞を極めた。然しながら之に継いで蒙古が興起し、大陸を統一し駅站制度を創設したので東西交通は再び劃期的な躍進を遂げるに至つたのである。

現今支那全土に亘つて多数存在する回教徒は、それが回教信奉の異民族の支那へ移住したものの子孫であるとするものと、支那回教徒は漢人であるとなすものとの二説が分たれてゐたが、現今に於いては此の回教徒の祖先は漢人以外の外国人、シリア人、小アジア人、イラク人、イスパハン人、ペルシヤ人、中央アジア各民族、蒙古人、ユダヤ人、キプチヤク人などであるとされ、之等各種雑多の外国人が同一の宗教を有つ事を機縁として今日の回教徒と呼ばれる人々を構成されたと云ふのが定説となつてゐる。回教の支那傳来は唐朝初期であるが、これ以後支那と西方回教国との交渉は頗る頻繁であつて、回教国は支那史上重要な役割を有つてゐる。唐朝安禄山の乱には玄宗は清眞寺を通じてウイーグルに救援を求め、救援に渡来した回教兵は廣く陝西、甘粛、寧夏、青海、新疆等に拡がつたのであつて、後に元朝に於いてもヂンギスカンの中央アジア征服の後従軍せる回教兵も又此の地に多数止つたのである。加ふるに猶蒙古は回教徒を利用し以て漢人を操縦せんとした方策を採つたが故に、その戦功に依つて回教徒を重用し、且宗教上束縛する事なかつた爲め当時回教は大いに隆盛を極めたのである。明朝になつても回教徒はその勢威衰へず、依つて回教暦を採用し豚肉食用禁止令を発布し、回教徒をして各省に分散せしめるなどその回教徒懐柔の政策が残されてゐる。清朝に至つては高宗の天山南路征服の後一変して回教徒に対して強力な弾圧政策をとつたのであるが、そのため十九世紀後半二度に亘つて大叛乱を起すに至つたのである。中華民国に至つてからは当初回教徒を利用したのであるが、後に之を圧迫し中央化せんと努めたのであるが、

此の政策は他省に於いては成功したが、ソ聯勢力の侵入と共に新疆省のみでは成功せず、極めて注目すべき事態を醸してゐる。新疆省は全人口約二百五十万前後であるが其の中トルコ族としての纏回百二十五万、漢回四十万を占め、漢族四十万、蒙古族十三万を数へるに過ぎず、此処に於ける纏回の勢力は優に漢族を圧へてゐる。新疆省に於ける回教徒の歴史は今日に至る迄極めて凄絶な紛乱を示してゐる。一八七〇年イギリスの援助の下にヤコブ、ベックが新疆独立を企図し、清の將左宗棠に破られた事に始まり、爾後英露両国は夫々その回教徒を利用する事に依つて新疆省への勢力拡充に相剋した。中華民国以後一九一一年から一八年に至る向は楊増新が回教徒を巧妙に統治し得たのであるが、一九二八年彼が暗殺され金樹仁が之に代るや、金はソ聯との密約に依つて回教徒の弾圧を加へた。一九三一年漢人官吏の暴行に端を発して叛乱が勃発、甘粛より馬仲英は回教徒軍を統率し新疆に入り、馬仲英を遁走させたのであるが、之に対し新疆省辧盛世才が新疆南部に於いては纏回サビト、ドモ

ライギリスの支援を得て東トルキスタン國建設を企てる如き全新疆は將に混乱の極に達したのである。ソ聯は馬仲英と盛世才の双方に武器を貸與し抗争せしめたが、後馬軍を見捨てたるため、盛軍が力を得、馬仲英はカシガルに逃れた。斯くて新疆は盛世才がソ聯の援助の下に独立国に等しい新政権を樹立して今日に至つてゐる。ソ聯は外蒙を侵略してその宗教否定政策を強行したが、新疆進出に当つては特にその回教に対して極めて慎重な態度をとつてゐる。

支那回教徒は民国以来、蔣政権の少数民族に対する同化政策の対象となり、その圧迫に反抗し続けて来たのである。茲に日本の支那回教徒への対策も存しなければならぬ筈である。昭和十三年北京に於ける日満支三国要人参列の下に開催された「中国回教總聯合大会」は

一、團結を強固にして一致協力して回教を擁護すること

一、中国、日本、満洲国の提携を主張すること

一、中華民国臨時政府を絶対的に支持すること

一、兇暴なる共産黨の打倒を期すること

の決議をなしたのである。斯くの如く支那回教徒の動きは南北を通じ我が占領地区に於いても勿論、それは反共、親日的ではある。然し蔣政權の国内回教徒に対する同化政策の強行は寧ろ懐柔策とも云はるべきものであつて、その南京時代には新疆省より回教徒有力者の子弟を集め教育した。事変以後回教徒の分離傾向の防止のため必然の工作を続け、回教徒白崇禧を擁立してその抗日結合を企図してゐる状態である。支那回教徒の本質は決して反共、反蔣であると簡單に結論する事は出来ない。その回教の有つ嚴重な戒律の恪遵と別に、又支那的な放恣の一面を忘れてはならない。寧ろ我々はその傳来後既に千年を経た支那回教のその極めて高度に支那化された回教の本質を率直に認識する事が当面の課題であると云はなければならない。

第五款　満洲

満洲国に於ける回教は清朝の遼東招民開墾條例に依つて漢人を入満せしめ開発に当らせた時より本格的に拡がつたものである。然し後漢人の経済的勢力の伸展の結果、満人は圧迫を受けるに至り、十八世紀中葉以後は漢人の入満を禁止するに至つたのである。然し十九世紀に及んで此の禁止政策の軟化につれて再び漢人回教徒の入満多く此処に今日の基礎を造るに至つた。然しこの外に満洲回教徒には帝政ロシアの東進政策の発展と、特に十九世紀末葉の旧東支鉄道の開通に依つて露領から流入したトルコ、タタール系の回教徒がある。その後ソヴイエート革命以後の亡命者としての回教徒が流入し更に増加したが凡そ総数三千に過ぎない。満洲に於ける回教の歴史は以上の如く僅々二百年余を算するに過ぎず、その總数も又總人口四千三百万に対し回教徒数大体二百万から二百五十万と云はれてゐる。漢人系回教徒は陸路山海関を経たものも、海路

山東半島から渤海湾より入満したものも、何れも旧奉天省に落着した故に、現今奉天、東安、錦州等に最も多い。一方トルコ、タタール系回教徒は海拉爾、哈爾浜等に多く居住する。

右の如く満洲に於ける回教徒は漢人回教徒の移住者にその本来の姿が見られるのであつて、此の点それは「少数民族」として、五族協和の旗の下に支那事変、大東亜戦争を通じて満洲全般の動向に渾然一体となり、些かの対立もなき協力を誓つてゐる現状にある。現今新京の「満洲伊斯蘭協会」の着実な活動に依つて、各地の回教徒一体の反共への動向が示されてゐる。

第五節　結言

三億に上る回教徒と現下の世界戦争との関係は夙に識者の注意を惹き我国としても大東亜戦争及び戦後経営に当つて、マライ、スマトラ、ジヤワ等の回教徒と接触の関係に立つに至つたのである。全回教徒と云ふも宗派の別れ民族的傾向の分離があるのはいふまでもない。モロッコ、アルゼリア、チユニジア、リビア等のアフリカ群、エジプト、アラビア諸国、トルコ、イラン等の一群、アフガニスタン、印度、西北支那等の一群、ならびにマライ及び南洋諸島の一群に大別され、右の各群の間には、カトリック教に及ぶごとき組織も、連絡も交通も存しない。

さりながら全回教としてはその南洋にあるもの、インド、アラビアに住むものとの別なく、従来英国、オランダ等の搾取駆使に喘ぎ、又はその政治的野心のために悪用されて回教徒本質の姿を保ち得なかつたことには少しも異るところがない。全回教徒が民族的に結合される事は地

理上その他の事情に依り不可能とするも、精神上においては今日こそ、従来の圧政者の羈絆より敢然脱却し、回教諸国が各々その所を得て正当の地位に立帰る絶好の機会であると云はれねばならぬ。我国は常に回教徒に好感を示し来つたものであるだけ、此の機会を掴み極力回教徒の地位向上に協力すること、又に皇軍に依り米、英、蘭等の抑圧、搾取の魔手から解放された回教徒に対するそのなるのみならず、更に進んでインドよりアラビア、アフリカに亘る全回教徒に向つて呼びかけねばならない。

第四編　自然環境と民族の関係

第一章　地勢と民族との関係

第一節　海岸地帯

総ての地理的境界の中で、最も重要なものは陸と海との間にある境界、即ち地的性質に於て地球表面の二つの重要なるものゝ間の過渡帯である。休みなき海の強い侵寇を受け、之に抵抗する花崗岩や砂岩の硬軟に連れて様々なる幅を有してゐる此過渡帯には、陸と海との争闘の俤が宿つてゐる。居住し得べき陸地の擴がりと萬國街公道なる海との間に常に中間物となつて、変ることなく残つてゐる此海岸は、人類の初期、船や帆の応用されない時代に於ては、人類の膨張に対する絶対の境界であ

つたが、今日でも同様に人間の住居に対して最も外の限界となつてゐる。然し航海術が発達し、人間の活動が陸から海を越えて他國に及ぶに連れ、それは海陸両者を繋ぐ門戸となり、同時に探検、植民及び貿易の出口となり、大陸或は島嶼が海何ふから人類及び思想等の寄與を受ける開放的なる入口となつた。障壁と門戸、此二つは海岸が歴史に於て常に演じた役目であつた。海上の航道は今日では盛んになつてゐるが、地球上の海岸は大部分其の住民に取つての障壁であつて、決して出口ではない。海岸は中間帯として其居住者に強い印象を與へる特殊な居住地である。海岸地、沿岸平原、海岸都市、或は海岸民族、海岸國民、海岸殖民地と言ふ語は、海の影響を強く受ける地、人種或は居住地と云ふ感銘を吾等に與へるものである。海岸は「海岸線」と云ふ古い語で言ひ表はされるやうなものでなく、測の得べき広さを有つた帯である。此帯は自然的に種々の特色を有してゐるが、人類学的意味に於ける本帯の特性は、歴史の時

期の異るに従ひ、異る場所に於て人数が其帯の外縁及び内縁を利用してゐるので明らかに示されてゐる。

北海及びバルト海岸の古代ドイツの海岸諸市は海から河を遡つた海岸帯の所謂内縁に位し、肥沃な沖積土の中に走り出た山脈の支脈を確実なる地盤としてゐた。古代のロンドンもテームス河三角州の縁で潮の来る平地や無人の沼地等のある内縁の堅い地盤の上に在つた。總て河に臨める海港は此の種の広い低平な海岸の堅い内縁にあつた。之に反し低平な海岸では、内縁は内地から拡がつて来る居住地の限界を劃し、又河や入江にある。航海の終点として海を越えて外國から来る移住民の目的點でもある。近世の海上殖民、殊にアメリカの植民の歴史は、目的を立てゝ出て行つた。移民の目的は單なる貿易者と異り、河に依つて内縁線を内地に劃し、現在よりも海岸帯の幅を一層広く且つ一層明瞭にするにある。

近年般舶の形態が大きくなつた結果、二つの相反する事実が見られる。港を以て限界としてゐた内線は水の深い海の方に向つて移動した。従

って海岸線は狭くなった。佛のルーアンがルアーブルに、蘭のドルドレヒトがロッテルダムに夫々海上貿易の御株を取られたのは其実例で、外縁が其附近に大船の為に沖ニの港を開設する事に依って最初からの幅を保留し内縁にある港は其の水路を浚渫する事に依って海との航通を改良し進歩せしめて居るのには、独のブレーメンとブレーメルハーフェン、英のロンドンとチルバイーなど港の双生児と云ふ現象が出来た。さもないものは最初からの港が其利益を保留せん事を求めて、河や鹹湖や浅い入江を開鑿して運河を作る事、ペテログラードとクロンスタッドの関係の如きがある。然し緯度が北に寄った地方では、バルト海のやうな嚢状の海に臨んだ外港は、内港が氷に閉される冬期には独舞台になる。さもないと、ハンブルグに於るクックスハーフェンの如く、外港は内港と海との間の水路が改良する毎に衰退して行く。然し海岸帯の幅員は浚渫や運河開鑿に依って収縮を防がれるだけでなく、却って幅員を増加させられる事もある。即ち深く内地へ海洋航海を拡張するに至った事は、マン

チエスター運河がマンチエスターに及ぼした事例で明かである。斯く近年入江や河口に於て寧ろ海岸へ出ようとする傾向のあるに反し、海上航行の終点が好適な場所に於て深く内地に侵入し行き、海岸帯の最小と最大との幅員を著しからしめ、以て内縁の不規則性を増加してる。是れ文明の進歩に伴ふ海岸帯の進化である。

外縁が最も重大な意義を持つ所は、大低一時的ではあるが、航海の初期、海上殖民及び或場合に原始居住に対してぶ耕作すべき平地が少しもなく、且つ内部の狩猟場や牧場から隔てられて居る峻岨な海岸に於てのみ重要で、太平洋上の珊瑚島や火山島の如く、又は極地、準極地の如く海が其住民の食料の大部分を供給しなければならない所では海との接触を断つ事が出来ない。テラデルフエゴや、アラスカの山多き海岸地の住民は、何れも海岸にのみ居住し、大洋の狩猟と漁業ばかり考へて居る。シベリヤ北東部の海岸居住者たるチユクチ人はかの凍野海岸を縁取ってゐる淡水の沼澤と北極洋との間の砂丘の上に其天幕を張って居る。即ち

彼等は此処に位置する事から、海獣の獲猟と同時に北極圏内諸河の夏季の洪水からの保護と言ふ利便を得て居るので、グイーンランドの西海岸全部に於て、エスキモー及びデーン人の居住地は夫に暖流の強い影響と食物を得る事の容易なことが半島や島の突出した地点に其居住地を定めるのに與って力ある事を示してゐる。古代のノース人の居住地の遺物は一般に外海岸から後方約二十哩で、峡湾から離れた夏季の植物の生ずる隠れた谷に発見される。

航海及び探険の歴史の初期に於て、岬角の顕著なる地点は重要なる海上の目標であった。イベリヤ半島のセントヴインセント岬はギリシヤ人及びローマ人に取っては居住世界の西南の限界を劃するもので、幾世紀の後ポルトガル人がアフリカの西海岸を南下した時にも到る処岬は其の目標となった。斯く小海角や海岸近き島嶼は船舶の目標となれるのみならず、初期の海上殖民に取っては、貿易の拠所として好適な場所であった。是はフエニシア人の地中海岸に於ける根據地に見ても明らかである。

古代ギリシヤに於ては、其の海軍力が微弱であったから、海賊を恐れた都市は何れも海岸から数哩隔てた内地にあった。然し其の心配が多少少くなると、位置は貿易に便利な海岸や半島に移された。ドイツのバルト海岸及び北海岸に於ける都市が海岸から退いて位置した事は中世時代に同海岸を掠めた海賊の禍害を幾分保護する為めで、リユーベツクが本来の位置より現在の所に遷ったのは、屡々海賊の厄に遇ったからである。

海上植民の初期の歴史は一般に二つの地理的階段を示してゐる。第一は島嶼及び岬角をなせる海辺の外縁の占領で、次で海岸の内縁、又は更に遠く内地に向ふ前進である。此の初期の階段から成熟階段への進歩は、植民の経済的発達の程度に関するもので、初期の階段はフエニシア及び、ギリシヤの植民地に最も良く現はれ、地中海や近隣諸海に通ふ海上の大公道上に最良なる貿易場となってゐるやうな所を求めた。然し國民が植民地を國民的及び商業的発展の流出口と見る考へが進んで来ると、新地に於ける人種的商業的方面の繁栄は大領土を占有する點にあって、交

易の基礎たる地方の資源の発展にあることが知れて来ると、其居住地は海岸の外辺から漸次内縁に拡がる。肥沃なる平原と航行に堪へる河川があつて、其内地に溯る事を誘ふならば、更に遠く内地に進入つてゆくので、近世の植民運動の大部分の歴史は皆かうであつた。即ち入口を急に過ぎ去つて内地の土壌が肥沃で天然の資源が豊かで労働、相当の報酬の取れる所ならば、何処でも其所に定住するのである。

総ての海上運動は陸地から他の陸地に向けられるので、水陸間の相互関係は大部分其両者間に存する近接の度合に依つて決定する。

而して其の近接の度は主に一陸塊の肢節の多少による。海から遠いと云ふ事が其國を活気あらしめる接触から妨げるが、大陸の心臓に入り込んで居る大洋の動脈は、其心臓をして遠隔未見の海岸の生命の脈膊を感ぜしめるものである。バルト海の入江には其奥の海港ペテログラードをして本大陸の半アジア的な部分に大西洋文明を運ばしめるではないか。一國或は一大陸の海岸の肢節を決定するに、カールリッテル及び其説を祖述せる人々は、海岸を以て面積を除した。此の方法に依ればヨーロッパは海岸線一哩に対し面積百七十四方哩、濠洲は一対二百二十四方哩、アジアは一対四百九十方哩、アフリカは一対七百方哩である。人類地理学の立場から見ると、海上への出口として海岸線の各哩に割当てられる土地の面積を示す限り、此の方法は有効である。斯くして得たる商は、人類地理学者に取つては乾燥無味な数字ではなくて、海辺と内地との間に存すべき関係の索引である。然し此の公式に対する非難は、海岸を帯と見ずして線とする概念から出発して、地球表面の一地帯たる海岸に何処にでも存する次の諸相即ち位置、地勢、起伏、面積、前面の海と後方の陸地へ近接するに容易であるか否かを忘れて居ると言ふにある。是等の諸相は世界海岸の各地皆不同で、海岸に於ける人類の歴史に重大な影響を及ぼし、地球表面の総ての部分中、海岸は陸と水との辺縁として両者の特色を共有し最も複雑な性質を共有して居る。人類の居住地として最も早く人類地理に関係を有するものは、海岸で、水陸錯線の環境に於て相

互に変化を與へ合つて居る多種多様なる影響を注意して解剖して見ると、地理的勢力の纏れ合つた相互作用が内地の盆地から近海まで、近海から外洋まで、各々相違し又各歴史的時代の異なるに従つて異つてゐる。

海岸は住民を有する陸地と流動性の無人の海との間の堅固な境界帯で其の歴史中の重要なる二要素は、奥地の近寄り易いのと海の近寄り易いことゝである。されば海岸の地勢にして奥地との交通上不便を感じるならば人種的商業的発展の爲めに住民は厭でも海の方に向かはなければならない。奥地から政治的に隔つてゐる爲に、其の孤立と長い海の境界の保護とを利用する事はフエニシア、小アジアの多島海岸、ヴエニス、ゼノア等の共和國が之を証明してゐる。陸方面の高さと幅、之を通ずる峠の数と其の難易、殊に其の奥地の大さに対する其の産物の價値は奥地と山岳或は沙漠に隔てられてゐる海岸との間の交通の量を決定する。山脈か高原の懸崖かゞ、海岸地の内縁線に沿つて走つてゐる所、印度の西岸、アフリカの大部、アメリカの太平洋岸等は最も厳しく内地から切り離

され、ノルウエー海岸の背後をなしてゐる高地は、トロンドヒムの窪地を通ずる唯一條の鉄道に依つて横ぎる事を許してゐる。此障壁がノルウエーのスエーデンに対する歴史的関係をデンマークに於けるよりも遥に不親密ならしめた所以である。又アドリア東海岸の山地の障壁が、天然の良港を地方的ならしめ、且つオーストリアの貿易の大部分をドイツ諸港によらしむるが如き、スペインの赤禿の乾燥な不生産的な台地が同国の渓谷から峠つて、政治上國民的統一を防げるが如き其の好例である。大山脈が海に走り出て居る処では、其の間の渓谷が内地から海岸に至る大公道を開くもので、此の地勢はイベリア半島の大西洋岸を地中海岸より遥かに早く開けしめた。ギリシヤのトレス海岸からペロポンネサス南端に至るまでの総ての地方は東方、即ちアジアに面して開ける結果、多島海の文明に近接し易く、ギリシヤ人の海上及び文化的生活は此処に集中して居た。後印度半島は諸河の谿谷に依つて内地と主要なる河流の接触を保つてゐる。北部フランス、ドイツ、南部ロシアの如き緩傾斜の処

では、海岸から近接の容易な広い奥地に依って利益を得る。然し斯かる低平な陸地の縁辺は、沈泥に埋った入江や浅い沼やマングローブの生えた沼澤等海辺其の自身の爲めに内地との自由なる交通を地理的に妨碍されることが屡々ある。海から海岸へ近接する難易は、主として其肢節の程度如何にあるが、此の肢節は其の海岸帯が隆起性を持ってゐるか、沈降性を持ってゐるかに依って異る。内海の底が浅い場合には、海岸線の輪郭に出入がなく、平滑で、従って沈泥の多い河口の外巻と言ふものがない。斯ゝる海岸は漁民を保護して静かな沼沢の濱に住ましめ、海岸近い臆病な航海を発達せしめる。低平な土地の水を排出してゐる河流は、海岸附近の沈澱物の爲めに今少しで海に出ると言ふ処まで来て、物憂さそうに幾哩かの間を彷徨して居る。でなければ沈泥の床たる三角洲の間に無数の分流を出して浅い妨げの多い水道となって、大洋に達してゐる。斯かる河は水陸間の公道としての價値はない。土地沈降の結果、低平となった沿平原に於てすらも、従来の河谷は段々水が入り其処が長い入江に変るので、海上からの近接が益々容易になり、其処には舌の如く突出た低い小山の崎と入江とが交錯することになる。北米大西洋岸デラウエーヤ湾よりバムイユ瀬戸まで、英國の北海岸、ユトランド半島岸の峡湾等皆斯様にして出来たもので、岸近い海は浅く、沙洲などは大船を寄せることは出来ぬ。而かも尚斯かる海岸は水陸両者の密接なる接触を保ち、従って両者に相当する活動の発展を促すのである。肥沃な土壌と地方的資源とは、其の土地を海よりも更に有望なものとなし、住民は海員たるよりも農夫になる。又海岸線の複雑な海岸は極近い間隔を置いて次ぎ々々に入江が並んで居り、居住や耕作に適する平地の量少なく、其の背後に急峻な山が控へて居て、奥地との連絡を妨げてゐる。陸からの近接が不自由なのと、海からの近接が極端に容易であることゝ、地方的資源の僅少なことが相集って、其の地の住民を海上遠く駆出してこれを農民たらしめ、海員たらしめ、海軍学者たらしめる。佛のブリタニーはフランス商船の五分の四を供給し、彼処の遠洋漁

業者はニュ一.ファンドランドからアイスランドに至る海を支配してゐる有様である。

隆起岸は沈降の面積が広い場合には、海岸は一般に滑らかな單純な形狀が長く續くか、若しくは入江及岬角が長く交互に續くかする。從つて海岸の相異は、海との近接の度合の相異を示し、其の港湾は広い範囲に亘る峡湾、三角洲、砂洲、或は珊瑚礁に囲まれた、沼沢、或は湾を囲んだ小の竈と言ふが如き一種の型を示すものである。隆起の度が急激に変化した場合、若しくは地質時代が異つてゐる場合には、此の種の型の次に直ぐ他種の型のものが續くと言ふ事になる。

多くの港湾を有する海岸の進化は、大きい深さと広さ、並に内陸と連絡する爲めの優良な河か運河か鉄道かを有する少数の完備せる港に海上活動の集中せられる事を示してゐる。勿論、初期には多種多様の港湾は何れも量に於て種類に於て殆んど同様の活動をなしてゐた。十四世紀に於て、英國南海岸の諸港は小さいながら活動してゐたが、今ではロンド

ン、ハル、サザンプトンの如き少数良港との競争に合つて衰弱するに至つた。植民時代に於ても本然りで、ニュ一・イングランドの岩石崎嶇たる海岸に一団の人々が移住し來つた時代には、殆ど總ての入江に港があつて、何れも甲乙の差がなかつた。然し後に至つて、海上活動は著しい地方化を生じ、異同を來し、港湾の数も少くなつた。

海との接触の十分な、且つ出入の多い海岸でも、遠隔せる島を有して沿海航海から大洋航海を容易にし、一層広汎なる海上企業をなさねば充分なる歴史的意義を発揮することの出來ぬ事が屡々ある。北方ノルウェ一からブリタニ一に至る長い欧洲の海岸は、かの氷島、フエル島、シュトランド島、オ一クニ一島、大ブリテン島、アイルランド島及び海峡諸島と云ふ長い島々の列があるからこそ、初めて其の歴史上の重要たる役割を演じたのであつた。ギリシヤの歴史が印象深い劇を演じたのは、当國の東海岸、即ち水の深い数多の湾入を有し、其の谿谷は此の多島に向つて開いてゐる東岸であつておつ、此辺に遥か西方シシリ一やイタリ一への

殖民を実行した企業的精神が発達したのであった。斯く海岸から遠く離れて居る島嶼は、発展を誘ひ之に依って其の附近の海岸の歴史的意義を増すものである。又、遠隔の地から来る航海者に有利なる足場を提供し、又今まで死んで居た海岸に生命を吹込む媒介者となる事も屡々ある。東部アフリカのグアダフイ岬から喜望峯に至る長い単調な海岸は、十六世紀にポルトガル人が印度に至る途中の立寄場を設けるまでは歴史的意義を缺いて居た。従って島嶼を有することの少ない海は、歴史的発展が後れると言ってよい。

海岸居住者は、掘立小屋の下を波で洗はれるのを好む多くのマレー種族から、南西アフリカの砂丘の重なり合ってゐる海岸に居住して海の幸を少しも知らぬブッシュマンに至るまで、悉く海との或親しみを示して居る。其の天賦の能力と風習とが海上発展の成果に大影響を及ぼすことは勿論であるが、其の程度如何は彼等の前住地の内陸であったか海岸であったかの地的環境、若しくは海と接触した時間の長短及び其の必要の

程度如何に依って決せられるものである。海岸は、海上からの近接が容易であると言ふことが、其の歴史的意義に重要な関係のあることは云ふまでもないが、其の地の可住性も亦其の一要素である。南アフリカ及びペルーの大部分の海岸の如き沙漠海岸や下カリフォルニア海岸の如き不毛な海岸は其の國の住民を海岸から排除して仕舞ふ。喜望峯殖民地の西岸にある天然の一良港たるサルダナ湾は、流石の企業家たる英人すら之を利用することが出来なかった。何人となれば、其所には清水の供給が全くないからである。上古のエヂプト人が河の生活から航海業へ移る事の遅かったのは、疑ひもなくナイル河三角州の海岸線が冷濕なる沼や、不毛なる砂丘や、瘴癘の気に充ちた沢地が多く、又紅海岸が広大なる不毛の砂原になって居るからである。此処には今日も猶住民の数が甚だ尠少である。之に反し、大陸の縁辺が稠密なる人口を支へるに足りる肥沃な地方では、勝れた肢節があって海岸線を長くしなくとも非常に多数の人々が海と接触するやうになるから、其の地の人民が沙漠や山嶽の

為めに、或ひは既に溢る、ばかりの密度を有する人民の占領の為めに陸方面の発展を阻害される場合には、彼等は其の本國を振り捨て、海を渡つて、他國へ突進して行く、南部支那の人民が夙に南洋に発展したのも、印度人が同じく早く南洋に自國の文明、宗教及び印度の如き肥沃な大境域の海岸に於ては、海上活動は決して早くから開けるものでなく、内地活動の結果として発展するに過ぎない。海上活動が一國活動の主要素となる事は偶然である。歴史上海上の舞台に早く現はれて、華やかな役割を演ずる海岸地が、可住地であることは勿論であるが、其の耕地は二ユー、イングランドの如く肥沃の程度に制限があり、ギリシヤの如く量にも制限があり、ノルウエーの如く両者共に制限されてゐる所もある。斯かる地にして更に世界的商業に対して有利なる位置にあり、多少の佳良なる港湾を有するならば、海上國となつて植民的発展を遂げることは容易である。又内地との交通を隔てられて居る狭長なる海岸地帯は若し非常に肥沃であるならば、其の國民の海上活動を集中し、之を優勢ならしめる事が出来る。古代のフエニシヤ人は斯かる地勢に恵まれ、ヨーロツパ、アフリカの大西洋岸地方へ航海し、植民することが出来た。アラビヤ東部のオーマン海岸も殆んどフエニシヤ海岸其儘で、其他の住民は中世に於てはペルシヤ海とアラビヤ海との間に活動し、ムハメツト時代以前には印度に達して居た。彼等は回教に依つて大いに其の勢力を増し、南支那と貿易し、更に南洋にも及んだ。十一世紀には東アフリカ海岸に達し、十七世紀にはポルトガル人を此の海岸より追ひ拂ひ、十九世紀の中葉には、遠洋貿易にも従事した。佛國の海上史上に於けるブリタニーの活動は其の位置、出入多き海岸と島嶼、ニユー、フアウンドランドの漁業、西印度の貿易に従つた所のあつたことは言ふまでもないが、海岸に肥沃なる土地と、沿岸に豊富な魚類と肥料に適する石灰分の多き為めである。ノルウエーの峡湾も地味よき沖積土と豊かなる海産との為めに比較的多数の人口を支へ、以て活動の基礎を固めて居る。又特別な多産地帯の縁辺たる地味の瘠せた住民の少い海岸でも、其の位置が世界的貿易

に向って特に優秀である場合には、著しい海上活動を遂げ、貿易上にも商業殖民にも大発展をなすものである。アラビヤのイーメンは此の例で、高さ一萬尺に達する山脈が中央アラビヤの高原砂漠を此の地で限り、夏の季候風が運んで来る水蒸気を凝結し、其処に広い高地を作り、それが段々の珈琲畑と成り、菜園となって灌漑されてゐるが、其郷部の乾燥せる海岸地は人口が稀薄で、流の縁だけに多数の巷があって高地の豊かな産物と密集せる人口との出口となって発達して居る。然し印度洋から地中海に出る海上の通路に位し、三大陸の会合點附近に居た事が、其商人をして欧洲、印度及び東部アフリカの貿易の仲介者たらしめたことは云ふまでもない。

歴史を見るに、海岸に居住し、何等かの自然力に依って海上の活動に導かれてゐる民族は、実際無限に発展すべき機会を有って居る。小さな場所も広大海上の優勢を示し、殖民帝國を建設する地盤となってゐることは、中世紀のヴエニス、ゼノヴアの歴史が之を證明してゐる。國民の海上発展は常に頗る重要なる意義を有してゐるが、而して是れは広大なる範囲に及ぶものである。ロシヤの如く内陸國民が海岸に向ふ運動も、英國や和蘭のやうな海國民の海岸及び海外への発展も、広い範囲に渉って民族の移動を促し、海岸に沿うて人種的要素を複雑ならしめてゐる。而して相反することは、満洲及び朝鮮に於る日露の関係が充分之を證明して居る。海岸地方は總て海に依って支配されてゐるから、其の住民も一種の特色を有してゐる。しかし之を近隣内陸の住民との間に存する相違は、啻に其の環境の相違に基くだけではなく、屢〻其の海岸が移住を受けた為に起る種族的或は人種的の根本相違に起因するものである。ロシア今日の人種分布図を見ると、西にドイツ人、北にスエーデン人がある。

パプア人とマレー人とが隣合って住んでゐるメラネシア群島では、マレー人が新来者として海岸を所有し、黒人なる野蛮人が内部へ後退して居る。フイリッピン群島に於ても原住者は侵入者たるマレー人の為めに

追はれて内地に退き、海岸を囲繞する者はマレー人である。日本の北海道辺に住する未開人アイヌ族は今日では海岸の全部を日本人の為に占領され、彼等は内地に蹙まつてゐる。南アメリカに於ては、好戦的なるチユーピ族が嘗てブラジルの全海岸を占領してゐたが、今日では此海岸地帯は白人や黒人の為に占領され、北アメリカに於る初期の英人及び佛人の領土も之と同一の状態を海岸と内地に示して居る。精力旺盛で商業的殖民的性癖を多分に有してゐる。海上國民は、海上を大道とし、到る処の海岸に居住し、海岸と内陸との住民の間に前述の如き差別を齎してゐる。

以上の如く通則としては新来者が海岸に占據して居るが、時には海岸居住者が人種上古い種族に属する事がある。今日バルカン半島に於て古代ギリシヤ人の後裔は海岸に止まつて居る。是れ南部ロシアの平原から陸続きに侵入して来たスラブ人及其の他の北方種族が主として内陸民で、従つて彼等が本半島の中核を占領し、原住者たるギリシヤ人を追ひ立てゝ海岸に送つたからである。是れ多くの半島をして古い種族の最後の立場たらしめる人類地理的作用に外ならぬ。ノルウエー海岸の端に当る最南部から北方トロンドヒム辺までは、其の骨相、中欧のアルプ族と類以せる者が居住してゐるが、彼等は元半島全体に亘つて分布してゐたのに、スウエーデンから来た従来のチユートン族の移民の為に岬角や島嶼のやうな外縁部に押出されたのである。海外からの移民が、一國の海岸的周囲を占領すると、多くの場合人種の純粋性が危くされる。是れ最初劫掠か貿易の意志で来るから、女子を連れて来ない為め、土地の女子と結婚し以て、貿易場や、殖民地を建設するからである。従つて住民の人種的特質は、二つの構成要素の割合、其の以前の姻親関係の遠近及び固有の人種的背反性の程度に依つて異る。商業の事のみを主に考へてゐる海上國民は、小団体を以て動き、其の活動も一時的であるから、土着の海岸住民を変化せしめることは真の殖民國民よりも少ない。殊にそれが其の活動の根據地として成るべく最小の土地を選ぶ場合に於いて然りであ

る。
海岸の人民は、二種の混合の結果たる雑種以上の或特質を示してゐる。航海術が発達すると、海の境界は各方面からの近接を容易にし、従って諸國の人々を吸引し、其の人種を多様ならしめ、之は世界的特質を與へる事が出来る。大きな海港ほどそれは顕著である。ニューヨーク市を見ると支那人町や、イタリー人町や、ロシヤ町や、ハンガリヤ人町等があらうかと思ふと、印度人やアラビヤ人やペルシヤ人等も住んで居る。アテン、マルセイユ、コンスタンチノプール、アレキサンドリア、ポートサイド其他地中海の諸海港の雑種の住民も亦之と同様である。海岸の特色なる世界主義及び商業上の活動は、言語の上にも影響を與へてゐる。即ちかのフランス人やスペイン人や、イタリー人の商業上の常用語となってゐるリング、アフランカはイタリーの商業が優勢であった時代に地中海の東岸地方に起り、イタリー語の台にギリシヤ語、アラビヤ語、トルコ語を接木したもので、今でも地中海岸の多くの海港で話されてゐる。

商用英語として今日支那及び極東の諸港に於てリングアフランカの役目をしてゐるものは、英語に支那語、マレー語、ポルトガル語が多少混淆し、支那語の採用法に依って整理された変則語である。

海岸は仲介者の自然的占有地である。海岸地は仲介者を産出し、後に彼等をして他の海岸地を占領せしめる。陸上への発展は海上への商業的発展に比し、彼等の注意を引くことが極めて少い。アフリカのギネア海岸ドイツ領の土人は、真の海岸商業民の一典型で、彼等はカメルン州の注入するムンゴ河の下流及び三角州に位置を占め、山のない地方を通じて内陸に至る良好な航路を支配して居る。彼等は此処を守って他の近寄るのを妨げ、總ての競争を排斥し、商業を独占し、内陸から来る總ての貨物に対して通過税を課して居る。農業は能ふ限り之を避け、女子と奴隷とは芭蕉の実と芋薯とを作って居るが、多くの労力を要する耕作は全く顧みられない。アラスカの海岸も同じで、クック河口に居る土人は、内陸の土人から陸獣の皮を買ひ、之を海岸地のアメリカ商

人は売つて利益を占めて居る。斯かる独占耕地の政策は、ミンダナオの海岸居住者も之を内陸種族に行つた例がある。即ち彼等はマレー内地の木材及び農産物を低廉な代價で買つて居る。而してマレー人に対し海岸に進み出ることを許さないのは、彼等が海岸の支那商人と接触しはせぬかを恐れてゐるからである。彼等が其の独占權を擁護する事は実に猛烈なもので、フイリツピンに於けるアメリカ政府は僅かに軍隊の干渉に依つて之を破る事が出来るに過ぎない。

職業、食物及氣候の相違は、更に進んで海岸民と其の附近の内陸民との相違を生じ、殆んど何処にも存在する人種の相違を著しくする事がある。西部ブリタニーに於ては、比較的肥沃なる海岸地に住んで居る住民は、乾燥な花崗岩質の内地の住民よりも平均一吋身長が高いが、是れ彼等が食物の供給が豊かで、家門を出ずれば豊富な漁獲があるので斯く体格の増進を来したであらう。又ギネア海岸の黒人は、低平な沖積土に居住し、沼澤の魚類にも近接して居て滋養をよく取つて居るので、其の附近内地の高原に居住する種族よりも強壮で、容貌も勝れて居る。然し此処でもやつぱり人種の有利な混交と言ふ事を其の原因と見做さぬ訳にはゆかない。

海岸の住民が、何処か遠隔の海外から移住して来た所では、彼等は過度の精力を其の地へ齎して来る。此の精力こそ彼等を其の母國から出発せしめた原動力である。左様云ふ國民は、従来の定着民族よりも遥かに多分な開発性と企業心と忍耐力とを有してゐる。是等の性質は便宜の多い新境地に移された事に依つて更に刺戟されるものである。其の原住地に於て海育ちであり、移住先に於ても海育ちである彼等は、海岸地帯を離れる事はない。是れ彼等が最も良く利用し得る條件を海岸に見出すからで、大洋の大公道に常住し、相敵視する人種の住んで居る幾つかの領土を超え、陸行では近接するに遠い諸國と容易に交際し得る位置にあつて、両者の商品及び思想を、食物及び宗教を交換し、以て文明の子となり、剛勇なる進歩的の使徒となる。されば一國の海岸は一地方的な文明

ではなく、世界的文化の発源地である。其の文化は此の地よりして内陸へ廣まるのである。されどペルーやメキシコの太平洋岸のやうな不毛な近接の容易ではない土地或ひはカリフォルニヤ、西部アフリカ、東部ルソンの海岸の如く大洋に面するのみで近接地のない不利な地理的位置にある地方、世界文明の揺籃地から隔つて居る様な地理的恩恵の少ない地方は例外である。

長い出入の多い地中海の海岸は、近世に至るまで各時代を通じ海岸が内陸各地と文化発達の點に於て相違なる事を示して来た。ギリシヤ古代の哲学者等は内陸の都市と海岸の都市との間に存する根本的相違、殊に思想の感受性、智力の活動、文明に対する嗜好の點に於て左様である事を承知して居た。眼をフイリツピンに轉じて見ると、同島のキリスト教を奉ずる者、或は開明せる住民の大割五分は海岸近くに進んで居る事が見られる。内陸に住む残餘の三割五分の大部分もマニラ湾を中心とするキリスト教文明地域の陸方面への発展を示すものである。

海外は海上を経て出入する諸勢力の通過地域で、其の諸勢力と性質と分量とは、其の海岸の接する海、或ひは大洋の如何により、其の海岸と向ふ側の潮に洗はるゝ海岸との関係如何に依る。海岸の地理的位置が小海の一部としてゞあるか、大洋の一部としてゞあるかは其の歴史の根本的要素で、土地が肥沃であるか、其の輪郭線が不規則であるか、海及び奥地から近接が容易であるかと云ふやうな地方的條件よりも一段有力なものである。各時代に於て内海及び外洋に属する歴史的意義の各段階に就いて言ふべき事は、等しく其の海岸に沿へる國家及び民族にも適用される。而して其の大きさ、其の帯的位置、其の大洋大陸に対する関係等海の文化的可能性は増減するものは悉く其の海岸の生活に其の姿を現はしてゐる。小國から大國に、小海から大海に移つた人類地理の進化は、それが地中海、紅海、バルト海のやうに内海に位置するか、支那海や北海のやうな周縁的な海上にあるか、或ひは外洋に瀕するかに依つて絶え

ず変化を受けて居る。世界歴史の初期に於て比較的小さな内海に類する事は其の海上の視界を広め、人心を唆るが、さうかと言って、度過ぎて恐を懐かしめる程ではなかった。然し歴史的発展は人類が小地域から大地域へと移って行く法則に従って、外洋の岸へと出て行った。地中海及びバルト海の重要なるは、一時的であって、欧洲の大西洋岸が、更に重要となる序幕的意義を有するに過ぎなかった。大西洋の重要さも、アフリカ及び南アメリカの周航により世界を廻る太洋に連絡した時、初めて充分なる意義を有するに至った。斯く歴史の進歩に伴ふ地理的地平線の漸進的膨脹は海岸位置の價値の徐々なる進化を見た。海上の主権は小水盤から大水盤に移り、小海巷から大海巷に移り、リューベックからハンブルグへ、ヴェニスからゼノアへ移り、後年には英國南岸の諸小巷からリバプール及びクライドに移った。

海上の諸勢力を陸地に送るものは海岸の聯絡であるが、歴史に徴するに其の海岸の位置次第で多くの例外がある。即ち限られたる地域を有し

、出入の極めて少ない海岸が海上の優越を示し、開化の牛耳を取った例がある。かのフェニシヤの光彩の陸離たる歴史は、其の位置アラビア地狭上に在って、地中海と印度洋との中間、即ち三大陸の会合点に在ったる為めに劣等なる港湾よりも遙かに優ってゐる。此の特殊なる位置の利益は種々の時代に於て又種々の程度に於てシリア及エヂプト海岸諸港を優越ならしめた。中欧の包囲的なる山々を越えて行く種々な陸路と、交通頻繁なる海路との連絡たるアドリア海頭の海岸地は幾時代かの間其の海上諸市を相次いで殷賑ならしめた。之と反対の位置にあるゼノアは背後にあるさまで高からぬ山脈に通ずる二つの峠の落合ふ所にあって、ストラボ時代から今日まで繁華な海市となってゐる。中世のゼノア、ピサ、ヴェニス、及びバルセロナが海上に権勢を振った事は、長い出入の多い海岸が必ずしも必要でなく、唯左までよくない港でも有利な位置にあれば充分である事を示してゐる。帯的位置の相違の為めか経済発達の相違の為に全く異る産物を有する二海岸の中間に位し、海上運輸が容易でな

り、廉價である地方は貿易及び仲介者の仕事を確実に栄えしめる。地中海の中心に位置を占めたカーセージは、文明の著しく発達した東方と、文明の全く停帯してゐた西方との間の貿易事業に從事して、殷賑なるを得たし、又中世に於てはオランダ及び西部ドイツの隆盛なる工業都市と、文明発達の遅帯して居たロシア、ポーランド及びスカンヂナヴィアの中にはドイツのハンザ諸市があって目醒しい発達を示した例がある。

原始時代及び初期の海上貿易は、其の市場も狭く、仲介者も近く居り・主要なる物産地も近く並んでゐた。然し交通貿易上絶好の位置にある多くの海岸が、貿易が発達し、其の範囲が広くなり、両側の二國民を直接交渉させるやうになると、仲介者の利益は失なわれるのが普通である。是れ小範囲から大範囲に移る人類地理的進化の一現象である。地中海岸は印度に至る航路が発見されるや次第に衰微した。其の重要なる地方的意義はスエズ運河を以てしても遂に復活されなかった。十六世紀になって貿易の範囲が小海から大洋に広がると共に海上權力が広い範囲に亙

って移動し、のみならず、地方的政治事情は一時海岸の使用法及び其の價値に著しい変化を及ぼした。古代アテネの心臓となって居たピレウスは、十九世紀に於けるギリシアの独立が復活するまで眠って居た。日本の徳川時代に於ける鎖國政策は北はカムチャツカより南は印度に到る國民の海上活動を制限した。合衆國の太平洋岸に於ける眞の生活は、該國がアラスカを取り、ハワイを加へ、フイリッピンを獲った後に始まった。

海岸は時としては海岸其物の地的変化に依って重要なる歴史的意義を滅ずる事がある。殊に大河の爲に泥が海に運ばれ、海岸の外線が絶えず延長される地方に於て然りである。アドリア海の支配權が漸次河口に移って行ったのは、海岸が沈泥に埋められたからに外ならぬ。ストラボの紀録に依れば、スピナは本来海港であったが、彼の時代は既に海から十哩離れて終った。英國ケレト州に於ける幾多の初期の港湾及びフエンランド沼澤の堅い縁になった岸は、今ではイギリス大海峡及びウオッシュ

湾から数哩の内地にある。一國民は決して其の海岸全部を同一程度に利用するものではない。一國の勢力は良港に集中され、其等諸港の海上に於ける仕事は専門的になる。其の國の領土が膨脹し、文明が進歩し、産物が増加する毎に是等の海洋の門戸を通過する人及び貨物の分量が多くなる。合衆國のニューヨーク州、デラウエーヤ州、及びチエサピーク沿岸は、今日に於ては其の奥地が僅かにアパラチア山脈までであった初期植民時代よりも遥かに重要になってゐる。又同國メキシコ湾は南部の経済が発達すると共に、奴隷使用から自由労働に、綿栽培の独壇上から工業の勃興に伴ふ種々なる貨物の産出に其の活動を盛んならしめた。パナマ運河が開通して太平洋対岸の市場を求めて居るミシシッピー盆地の物産が太平洋の出口から他へ運ばれるやうになれば海上的意味に於て、同海岸は真に其の價値を発揮するであらう。

海岸の人民と其の水陸の環境とを形成する総ての要素との関係を注意深く解剖するには、何よりも先づ海岸地の廣袤、肥瘠、隆降、海陸からの近接の難易、海上の島及び対岸との関係及び位置の遠近等を考察しなければならない。海との接触を容易ならしめる海岸地の小さい肢節ばかりでなく、更に大きな大陸の肢節との関係をも考へねばならぬ。是等種々なる海岸的環境の要素は、此処にも来り住む人々の目的次第で、其の使用法も其の影響も非常に相違する。即ち海賊は、錯峡や蔭になってゐる入江を求めて、其の隠家となし、商業民族は賑やかな港や航行に堪へる河口を選ぶ、然し移住者は静かな港に向って開いた肥沃な谷に定着し、其の海岸を母國との貿易に使用し、又内陸民で従来海上生活の歴史を有せざる者は安全な沼澤地に濕林を作って此処に定住する。

第二節　海洋

地球表面の水は、地質的構成及び地理的形態の相違の著しい陸地に反し、到る所大体同様で、海水と泉、或は小川の水に於けるが如く唯鉱物的成分を異にして居る位のものである。従って之に接触する者を同一の型に入れて捏ね、其活動に同一の方向を與へ、其航海には同一の道具を用ひ、同一の方法を採らせ、以て海上貿易者、或は漁民を遠隔未知の而かも親しみある海岸に渡らせ、恰も其故郷に於けると同様に安易を感じさせるのである。

人は地球表面を包む可動性の覆の一部となって空氣及び水と共に取合はされねばならぬ。水は分散するに極めて便宜の多い所から、動物を広い世界に分布させるが、人は自己の移動力を自ら増大することが出来るから、其動力を空中及び水中に適用して、世界的のものとなり、空氣及

び水の統一の反映となった。

永久に休むことのない流動性の水は、常に人類の無精と言ふ戸を叩き、内に眠って居るものに対して常に覚めよと言ってゐる。流水と潮汐とは、常に野蛮人の好奇心を刺戟し、流れゆく水の行方は何處であらうかとの疑問を起させる。河流は重力に依って野蛮人を大洋の岸に運び、世界の大公道たる海洋に導いてゆく。斯くして彼等は洋流や氣候風や貿易風等に運ばれ、歴史の黎明期には世界人として地球上の可住地に到る處其姿を見せるやうになった。幾百年或は幾千年の間の漂浪的海上生活は、彼等をして未見遠隔の地を領せしめた。彼等は其處に孤立の生活を営み、新環境の影響を受け、心身文化共に全く新しい發達を遂げ、生存競争に対しては新武器を以て身を堅めることになった。初め彼等を故郷から隔離した海も、海上發展と共に反って其統一を来たすやうになった。

航海の發達に連れて大洋が大公道に変じたことは、人類の歴史に於て

極く近頃のことで、恐らく人類が其環境に対する最高の適應形式であらう。蓋し海に適應することは陸に適應するよりも遥に困難であるが、其困難が多ければ多いだけ、知識的物質的報酬も一層大きいからである。海は世界民族の聯合に寄與し人類の歴史即ち経済的社会的政治的知識的の何れにも最も重要な部分を形成して居るから、海の制御は歴史に於て特に高い位置を占めてゐる。従って歴史は其最も劇的な活劇を海若しくは大洋の岸を舞台として演じ、其筋は最も複雑で、驚くべき發展が含まれてゐる。七つの丘の上に建ったローマは「七つの海」を有する英國の前には顔色がない。世界史は海と言ふ結合的要素を考察の中に取入れなければ、半ば其意義を失ひ、部分々々の集合に過ぎなくなり、全体としての意義がなくなって仕舞う。如何なる歴史でも、陸上に於ける人類の運動及び活動と相並んで海上に於ける其等の記録を包括しなければ、世界史と言ふ名はつけられない。学校用地理教科書は、人類が陸上で耕作し、建築し、睡眠を取ると同様に、大洋に於て探検し、植民し、貿易す

る事が十分研究されて居ない。今日世界的大洋に関する驚くべき一事実は、此大洋の為めに其岸に住んでゐる人々の間に多種多様なる関係の結ばれてゐる事である。帆船、汽船及び海底電線の通路は大洋と言ふ共有地の上に網の目にも似た形を成して拡がつてゐる。此大洋を渡つて人類の商業的、政治的、知識的、或は移住的活動が一大陸から他の大陸に行はれてゐる。世界の大海國民はフエニシア人の古から英人の今日に至るまで各々世界の歴史の中に殊に海上活動に依つて自己の時代を記入し、世界と言ふ網の目の中に各々の物語を織込んでゐる。

人類と海との自然的接觸、浮流する丸太乃至水膨れのした動物の死體から思ひついた原始的な航海手段の発明は水に近く住んでゐた民族の業蹟である。是れ不断の必要に應ずる発明中最も重要なものであつて、初め用ひては捨て、一度使つては歇めたのであらう。而して更に漁獲の結果を良好ならしめんが為めに海岸や河岸を越えて冒險に出るやうな習慣を作り、或は新しい獵場を求め、原始林の纏繞を避ける為めに開けてゐる水路を使用する習慣を生ずるに至つたのである。

最初に工夫されたものは筏で、是は木や葦の類や空胴になつた木の幹等を組合せ、又膨らした動物の皮で浮かしたものであつた。此種の筏は今猶諸民族、就中木材を産する事の少ない地方に於て使用されてゐる。メソポタミヤ、印度、モロッコ等にも之と同様のものがある。木材のない國では、河や湖の辺に生ずる葦を小舟に代用する。アフリカのチヤードの湖畔、ペルシヤなどに此例を見ることが出来る。水上運搬具として第二に工夫されたものが、筏よりも進歩してゐたことは言ふまでもない。メソポタミヤの筏師は、柳か楊柳の枝を編んで大きな圓い籠を作り、水の侵入を防ぐ為めにそれに密に縫つた皮を張つた。是は今日でも尚用ひられてゐる。又刳抜舟が非常に広い地理的分布を有して居り、孤立した地方には文明の進んだ時代にも尚残存して居た事は、此種の舟が必須の且つ顕著な発明の一つであつて、世界の諸地方に各々独立に製作されたものであることを示してゐる。河湖のやうな静水は初期の航行に対し最も好適な條件を提供するものであるが、内陸から

海上航行への方法が常に取られるものとは定まつてゐない。構造の進んだ小舟を河海に使用したエジプト人が、海上貿易の點に於てフェニシア人及びギリシヤ人に劣つてゐるのは、ナイル河の沈泥が航通を妨げてゐるからである。コンゴー河の舟航に利用された長さ五十哩から八十五哩に達する大きな輕船も、下流に大瀑布がある為め、海岸に達することが出來なかつた。又海岸に住んでゐても、唯淺い水の中に入つて魚を槍で突く位に過ぎない民族もあつた。ブッシュマンや、ホッテントットやカッファー等は其種類で、彼等は海との接觸を殆ど利用しないのである。

斯かる簡單な航海の初歩時代にある地方から、轉じて地中海及び歐洲文明の未だ波及せざる以前に於て、既に其方面の最高能力を有してゐた地方を求めるなら、唯、指を太平洋の大島嶼、及び其隣接の印度洋中の島々に屈するであらう。即ち土人の構造に係る帆船及び外装船はインドマレー文明の及んでゐる海岸の全部、即ちマラッカから太平洋中の最遠方に位する小島にも分布し、アジアの東辺も此広汎なる海上能力の領

分内に屬してゐた。南部アラスカ及び英領コロンビアの海岸に住んでゐる土人も恐らく此領域内の分岐であらう。此領域に接して北方にあるのが、エスキモーの居る北極洋の長い々々海岸である。エスキモー人は誰の助も借りずに、海豹の皮を張つた舟で海上漁獵を試み、此類のない海上能力を有し、且つ長い間海に親しんで来た為めか、毫も之を恐れることなく、之に耐へる力も亦甚だ旺盛である。

海に對する最高度の親しみは太平洋中の大洋洲に發達した。温和な氣候と、海のみの單色に包まれて、戰爭、商業、耕作何れにしても狹い自己の生れた島を出て他に航しなければならぬ此地には、胸と腕との筋肉を海と言ふ體操場で鍛へ上げた人種が住んでゐる。彼等は椰子の花環に蔽はれた島上の自宅に居るよりも島を圍繞してゐる海上に在る方が遙に多く、移住は彼等に取つては自然の數であり、其歴史を作る業蹟である。彼等が種々なる經驗に依つて自己の地理的位置の優秀なることを自覺し、家郷を離れて數百哩の航海を為すことは、ポリネシアを探檢した多くの

人々が之を證明してゐる。マーシャル群島民の方位正しき地圖、同群島中レートリツク島民の海圖クツクの南洋人より得たる地理的知識、ポリネシア人の神話、未来観念、天文学の萠芽等、皆海から生れたものである。

此半水中動物的なるポリネシア人と、海に親しむと言ふよりは寧ろ之と争ふ為めに無理に海上に押出された北極圏の民族との中間にあるものは温和な気候と潮汐の差の少ない霧の浅い。嵐のない海を恵まれてゐる地中海の島嶼及び半島の住民等である。斯かる海は親しみを呼ぶことは出来ても、剛毅な大膽な航海者を養成する事はない。即ち育児室ではあるが、練習所たることは滅多にない。ゲアルアルプスから吹下す嵐の為めに波の高いアドリア海に面して居るアチアの有名な水夫の外、地中海上の人は一般に波の高い外海に於ける信用を得て居ない。今日イタリー諸港から世界の諸港に至る航路は多くイギリス、ドイツ、オランダの汽船会社に依つて經營され、其視野を地中海の沿岸だけに限られてゐるイ

タリーの位置は航海上旧来の内海方法手段を墨守して、大西洋航路の開けた今日でも猶大海に適用するに足る準備がない。

海や大洋の大いさは海上冒險を索引し、又は耕作する決定的要素である。殊に海上発展の初期に於て然りである。屈曲出入の多い海岸は、單に海岸帯の長いことを意味するだけでなく、其湾入は漁夫、貿易商及び植民が之を根據地とし更に広い世界に乗出す為めの準備の地である。沿岸航海で達し得られる内海若しくは近海は早くから人を誘ひ、更に対岸へ近接し易いこと、及び附近に島嶼のあることに依つて横断航海を試みさせる。従つて海上発展の初期に於て全きをなすものは肢筋の小さな海岸と入江の港とである。次は海上の眼界を広むべき、取囲まれた内海より更に一層大きな水盤に依つて、商業的にも植民的にも工業的にも航海能力を開発した時で、地中海に於けるフェニシア人、ギリシャ人、ベルト海に於けるハンザ諸市、北海に於けるオランダ、イギリス人の如きはそれである。次は最後の階段で、浜近い三角洲の育児室も取囲まれた水

盤の小学校も次第に小さくなつて来て、更に一層大きな海上的精神が動き、大洋を其活動の世界にしようとした時で、かのノース人が峡湾や瀬戸で育ち、此海やアイルランド海で磨いた腕を大西洋横断第一人となつて之を発揮した事実に徴すべきである。入江から取囲まれた水盤、其次に大洋、是れ人類地理学の段階を類推せしむるもので、中盤の水盤は大洋への前進に対し殊に必要なる條件である。

内海及び海辺は十五世紀頃までは大洋中歴史的に最も重要なる部分であつた。内海は近接せる隣保的集団乃至文化的事業を絶えず交換する場所を構成し、其全体を高め且つ統一するものである。而して急速なる海上発展と人種的合同を導く傾向とは統一を人種の上にも及ぼす。是は地中海文化に於て、種族が統一され、文化、言語及び國民が歴史的一体を為した事に依つて明かである。是其中の一団体が共通の努力を集中して岸から岸へ縦横に渡り行くからである。フェニシア人、ギリシャ人、サラセン人及び十字軍等の地中海岸に於ける活動は總て此水盤を中心とした相互的関係を形成するものであつた。即ち劃然と限られた海は、之に接した總ての岸に起る密接なる地理的関係を示すものに外ならない。

此海も地中海と趣を同じくし、其沿岸は今では全くチユートン族化され、本来北岸と西岸とにチユートン族の住民を有してゐたバルト海岸も、歴史の存する頃には全然チユートン化されて仕舞ひ、フィンランドの海岸及びロシアの海岸の大部分すら之に倣ひ、斯くして文明の統一された結果は、此人種の統一となつた。而して此統一が歴史的に最も有意義であつた時代は、十二世紀から十七世紀で、恰も北方の地中海たる役目を演じた。當時　ンザ諸市に属する無数の船は梭の如く遠隔せる海岸に往復して通商貿易を行つた。アジアの西南にある紅海は、其岸の沙漠であるにも拘らず、大陸を繋ぐ位置にあつて、アジア及びアフリカの隣接的要素を保つてゐる。此長い裂目のやうな峡谷の両側が同一の氣候を有してゐることは、人種的混淆を容易ならしめ、此處をラッツエルの所謂「紅海国民族」と言ふ人種及び文化の中心地たらしめたのである。此處に

於ける人種的大容解方はセミチック族である。

包囲された水盤の周囲にある隣接的位置は、諸岸に居住する民族の間に或人種的関係及び婚親を成立せしめ、其間の人種及び文化の統一を容易ならしめるものである。古代及び中世に於ける地中海岸乃至黄海岸は此原則に支配すれてゐた。支那は其広大な面積、長い海岸、大なる人口、早くより開けた文化等に依り、此水盤の中心的要素をなし、日本及び朝鮮は其文化的植民地であつた。日本は歴史的に見ると黄海に面した九州から始まり、文学、医術、工学の方法、政治上の制度、及び佛教等何れも黄河流域の人民から之を得たりである。孔子の教は朝鮮と同じく支那から待来した。三世紀前に日本は朝鮮の釜山、即ち東洋のカレーに植民地を有してゐた。海賊及び密輸入の目的の為めに日本人は、支那の諸川に深く侵入し、朝鮮は幾世紀かの間活潑なる貿易及び外来関係に依つて支那との密接な関係を保つて居た。然し支那は今日日本に留学生を送つて居る。日本が開國以来此海を繞る隣接間の力を突然恢復し、殊に三國

に多くの貿易国に依つて與へられたのであるが、日本は其刺戟に対し、最も活潑に反應した。それは欧洲諸国中最も強く大西洋向の国からの反射的影響を感じたと同様であつた。斯くして日本は地理的條件及び人種の結束帯に助けられ、支那及び朝鮮を其文化的植民地に変じ初めた。関目には支那及び朝鮮の最後の安寧は日本に依り育てられ、日本は左様する事に依つて中華民國に対する古い負債を還すであらう。

支那の歴史は常に内陸的性質を帯び、其政治的膨脹は陸に向つて最も広い周囲に亘り、最も連続的に内陸植民を実行し、其排外政策は太平洋に向つて其視野を鈍からしめたに拘らず、西方との交渉及び西方に向けられた勢力は、重要の点に於て東方及び南方に向けられたものとは比較にならなかつた。一連の辺海は寄港地を點在せしめて、日本、フイリッピン及び遥か離れた濠洲の最外線に到るまで容易なる水路を提供し、南支那海、シャム湾、スール、セレベク、ジャヴァ諸海の周囲、海岸から遠く離れた諸島の海岸地方は、数世紀間支那貨物及び其文明を受容し、支那人の血を混入し

て居る事をどうしても否む事が出来ない。遠い濠洲には微かな痕跡を止めるに過ぎないがフイリッピン、ボルネオ、スンダ諸島及び数世紀間支那人が商業的殖民地を樹立して居たマラッカ半島の海岸に於ては、明かに痕跡が認められ、後印度の東半に於ては其史が水陸共に支那と一国をなして居り、其人種が純粋でないにしても、大部分蒙古人種であるだけ、支那の影響は誠に著しい。為めに其洲からマラッカ地峡に至るまで南支那海の全海洋は、人種及び文化共に同化の程度が実に強い。東京地方に於ける住民も其文明も支那其侭で、安南の海岸地方及び島嶼はカンボヂアの小山まで支那人に占領され、交趾支那と言ふ名は、其所の支配階級の住民が如何なる起源を有してゐるかを示すものである。シャムの住民中六分の一は支那人で首都バンコクには大きな支那人町がある。後印度の南シンガポールに至るまでの全経済生活及び智的生活の大部分は支那人の活動が其中心となつてゐる。

嚢状をなした海の歴史的意義は、其帯的位置及びそれと之を囲む陸地との関係如何による。吾等は黄海、日本海、オホーツク海、ベーリング海及び北極洋と連続せる海を通じ、南から北に至るに従ひ、歴史的意義を漸次減じて居ることを認める。バルト海は遙か北方に位し、湾は氷に閉され、陸は氷結して仕舞ふ様な冬が長いので、歴史の舞台に上る事が非常に後れ、ハンザ同盟の勇敢にして熱心なる活動があつたにも拘らず、其重要なる歴史的意義を有する時期は短かつた。地中海は單に其帯的位置が佳良であつたのみならず、之大陸の会合点と大西洋から太平洋へ東半球を横断する海上貿易の通路に當つて位置したと言ふ利益があつた。印度洋はラッツェルの所言の如く、眞の大洋ではなく半大洋に過ぎない。赤道より北の部分に於て、此海は狭くなり、内海のやうに囲まれて居り、此處には眞の大洋の水界的気界的特質がない。潮流や風は堅く抱き合つてゐる陸地の為めに秩序を亂され、不変の北東貿易風は此處では、北東及び南西交互の氣候風と入換つてゐる。此氣候風は帆船時代既にアラビヤ、アフリカ東岸と印度との間の航海に眞直な進路を取らしめた。又此

印度洋の北半は、地中海を大きくして其南半を取去つたやうにも見える。即ち東方と西方には著しく異つた國民性を有する半島があり、北に向つた灣入がある。唯此方は大規模である。此海はアジアとアフリカの歴史を連結し、紅海及びペルシャ灣に依つて歐洲及び、地中海を其影響範囲に取込んだ。オーマン、イーメンのアラビヤ人はフェニシア人と同じく大陸間に位置を占めて三大陸の仲介者となつた。

歴史の黎明から、北部印度洋は交通頻繁なる道路であつた。アレキサンダー大王が東洋に至る海路を発見するや、此路に依つて印度の植民は貿易業者や僧侶は印度文明の諸要素をズンダ諸島に送り、東洋の貨物や学問や宗教は西漸して歐洲及びアフリカの縁辺に達した。斯く北部印度洋は一は其形の為め、一はアジアとアフリカとの間に位置し、全地球を回つて「歴史的濃密帯」の初まる緯度に在り、殊に歐洲と支那との間の古代及び近世の海上通路の東の部分として地中海の丁度東南に位する為めに連続した歴史的事件の中に捲込まれて來た。歴史の立場から言へば、十五世紀前は、此海は取囲まれた海としての性質を具備してゐるので、大西洋や大平洋よりも遥に高い位置を占めて居た。然し斯かる海の常として歴史的全盛時代は非常に早く過ぎ去り、十六世紀には衰頽し、スエズ運河の開通と共に僅に其頽廃を免れた。然し此衰頽期中にポルトガル人、オランダ人、イギリス人等が喜望峰を回つて此海に入つて來た。斯くて内海的性質が大洋的意義を有するに至つた。

取囲まれて嚢状になつてゐる海や辺海は悉く其面積が小さく、それに接せる陸地圏は比較的に限られてゐる。而して其水面を限る者は唯小さな半島や島嶼である。従つて膨脹の終点として提供させる地域は限られて居り、貿易の需給を充たす資源及び人口も限られて居る。地中海、バルト海の如きは其好例で、沿岸諸國の発達、政治的理想等何れも之を證明してゐる。成長は空間を要し、従つて歴史の進歩には、小海域から大海域への進歩が伴ひ、其海に依つて起る人民と陸との関係は絶えず複雑になつてゐる。歴史上の大きな時期で、海を持たないものはなく、又之に

継続する時代で其海上世界を拡張しないものはない。ギリシヤ人は多島海を、ローマ人は全地中海を、中世紀は地中海と更に北海及びバルト海を加へてゐる。此世界洋が範囲の広がつて来た歴史中に取られるやうになつたのは、一に欧洲人の膨脹の然らしめた所で、彼等は過去二十世紀の間世界史を作る上に於て最も遠くまで出掛けた人々である。其大陸の位置と構造とに依り、欧洲人は常に西方海岸を出口とした。南はフェンシヤ海から多島海、それから地中海、更に大西洋に出て、北はバルト海から北海に、それから北大西洋に出た。斯くして南大西洋に依つて太平洋に出たのである。発見時代に於ては、新航海をする毎に、歴史的地平線は広がり、航海術の改良される毎に、各地の距離は減じ、今日世界洋上の航海に要する時間は古代に於て地中海上の航海に要した時間よりも遥に尠い。然し地中線の広がる事は各時代に於ける既知世界と新世界との間に存する歴史の相関的内容及び意義を同程度に増してゆくものではない。古代に於けるかの小地中海諸國に見られたやうな濃密な集中的國民生活は今日では何處にも求められない。大洋は溢れた國民的勢力の出口を提供したもので、其機会の多少は之に面する陸上の大さ、位置、及び其他の地理的條件に依つて各々異つてゐる。

地球を南北両半球に分けて見ると、一方は陸地が豊かであり、一方は水が大部分を占めてゐる。其為め両半球は歴史上各々異つた役割を演じ、北半球は人類の居住に最も大なる利益を與へ、南半球の人口の五倍を收容してゐる。是れ甚だ意味ある事と言はねばならぬ。之に反し南半球は渺渺たる水界を有し、世界周航的の探検や貿易を促し、以て大洋的大公道となつてゐる。北半球の廣大なる地域に於て何の障碍もなく文明が発達したのは、急速なる進化に必要ある根本的條件を有してゐたからである。即ち北半球は歴史的に最大なる密度を有する帯を含んでゐる。文明が一度北アメリカに移植されると、之に次いでスエズ運河、パナマ運河等最も大きな大陸間の交通線に沿ひ、自分だけの世界周航の水路を有するに至つた。大洋の大さは実に驚くべきものである。然し黒海、地中海、

北海、大西洋及び大平洋の航海は航路の長短に従ひ、其物質的意義を異にしない。大洋は陸地の如く其大さの効果を表面に現すことなく、碧い凄じい織物を以て包まれて居る。原始時代の航海には、水夫が岬から岬へ島から島へ傳ひ行くのであるから、沿岸に包まれた小さい内海が最良の條件を備へてゐたが、今日では大噸数の海洋汽船が其過ぎて行く大陸間の広大なる地域を或程度まで反映してゐる。

大洋の大さの非常であることは、其中立性の基礎となるもので、中立であるといふことは、政治史上近世に初まった思想である。其原則は大洋に関聯して起ったもので、其處から小さな海に押広められた。小海は以前は平和的政治領域であると思はれ、従って其面積は限られて居たが、此事実が彼等をして渡らしめ、占有せしめ、統御せしめ治安せしめたのである。ギリシャ人はフェニシア人を多島海から排斥して其所をギリシャ人の海となした。ローマ人は地中海全部をローマの海となった。スウェーデン及びデンマークはバルト海の支配者として栄え、ハンザ諸市は其入口で通行税徴収の関門を設けて通行税を徴し、勝手に商船を排斥した。十六世紀の初、印度洋はポルトガルの海であった。スペインはカリビアン海、否太平洋をすら独占せんとした。今や國際公法に依って政治的領域は僅に海岸から三哩或は大砲の達する範囲に限られ、爾余の大水界は世界の大道として何の支障もないものとなった。

第三節　大陸と半島

地球の表面が二割八分の陸と七割二分の海とに分れて居ると言ふことは、自然地理学及人類地理学上の大切な事実である。此割合であるが為めに、人類の住み得べき陸が人類の住み得べからざる海に、島として浮き出て居るのである。故に人類は又他の地上生物と同様に容易に除くべからざる島國性を有して居る。それから水は又、陸と陸との距離を遠近種々に分ち人類の棲息し得べき地域を様々に分合し、人種的文明的の親疎をも支配して居る。更に又、唯人類だけが遠近に航行する為めの公道であるから、陸と海との関係を研究して人類移動の道筋と目標とをも知ることが出来る。

陸は若し大陸の如く大なるものなれば、人類の大集團地となり、島嶼の如く小なるものなれば人類の小集團地となり、其相應に之に居住するものの用をなして居る。然し又其位置次第で、アフリカとヨーロッパとの如き隣保関係となり、其歴史も亦互に相交錯する様になる。或は又南米と濠洲との如く、相隔絶して近代の如き頻繁な交通も、尚此両者を相接触せしむることが出来ない。故に陸の分布が或は密集的に或は隔離的なることは、遠大の結果を齎すから、之を雲煙過眼視してはならぬ。最後に大陸と島嶼とは、位置、地形、雨量、河系、動植物等に依つて人類の為めに、種々なる生活状態を来すものである。

大陸と小陸とを自然地理学及び人類地理学の両立脚点より比較して見ると、一方には大小に依つて之を區別し、他方には歴史的影響に依つて之を區別せねばならぬ。左に此両者間の関係を示して置く。

一　獨立陸地

甲　大陸、大きいので独立し、能く多数の人類を支へ、且つ文明の各條件を具へて居る。

(一)　島國的大陸　昔の状態と近代の文化とは著しき相違である。例、

濠洲。

(二) 陸接地を有する大陸　是は幅狭き海に依つて隔てられ、歴史的事件には相共通せる點がある。例、ヨーロッパ洲とアフリカ。又ベーリーング海の周囲にあるアジア及び北アメリカ。

乙 島嶼

(一) 大洋の島嶼　其特色は大陸及び他島嶼から非常に隔絶し、独立分離した歴史を有して居ることである。例、セント、ヘレナ及びアイスランド。

(二) 大洋の群島中の一部　前者に比すれば、左程独立的でない。例、ハワイ。

(三) 大なる島國　是は大いさの點では、大陸の独立と似た所があるが、位置の上から見て独立性を稍缺いて居る。例、ニューギニア、ボルネオ、マダガスカル等又文明的意義に於ては、大英國及び日本も然り。

二 附属陸地

(一) 沿岸島嶼　其歴史は隣接大陸の歴史と密接に関係して居る。例、ユーベーア、ロンング、アイランド、ヴァンクーヴァ、樺太、セイロン等。

(二) 隣接地を有する島々にして歴史的関係の前者ほど親密ならざるもの。例、台湾、カナリヤ島、大英帝國に対するアイルランド。

(三) 内海の中にある諸島　周囲多く陸なるを以つて、東西南北、何れの方面にも交通の便宜がある。例、ジャマイカ、爪哇、クリート、シシリー、ジーランド、ベーリング海中のセント、ローレンス。

(四) 群島にして他の群島とも隔離せざるもの。例、サモア、フイジイ、レンドリー諸島。フイリッピン、スル及びサンダ諸島。大アンチリーズ及び小アンチリーズ諸島。

以上の諸々の陸地は、人類の住居地として、其大いさに應じ、互に相異なつて居る。即ち澤山の人類を産み出し、種々の種族を生じ、次第に

人種的特色を発揮して外國の侵入者があつても、容易に之を撹乱せしめざる程に多數の人類を包容して居るものは、獨り六大陸に限ることである。大陸は各々皆種々なる氣候あり、高低起伏あり、輪郭ありて、之が為種々の環境を生じ、其結果各種の人類を生ずることが出来る。然し濠洲は唯一人種、即ちパプア人とマレー人との混血種を生じたに過ぎぬ。是は土地が乾燥して、全洲の境遇、変化なく、單調なるの致す所である。南北両米の地も亦多種多様のエスキモー人種を除けば、殆ど同一質の人種を生じた。然し人種が同一であるだけで政治的、社会的、経済的には、其程度相互に頗る不同である。即ち沙漠のショショニイ族や、沼岸のフユイジアンスの様な大きい無組織の群衆もあれば、発達したる農業、土木、國境政體等を有した大きなインカ帝國の如きであつたからである。

島は如何程大きくとも、上説の如き独立の人種的発達を示すものではない。それはボルネオ、ニューギニア、マダカスカルを見て之を知り得るであらう。斯くの如きは全く広大な陸地の特色である。ヨーロッパは其大いさと、其半島形と、此二を除けば、之を大陸と称することは出来ぬ。然り、人類地理学の見地から言ふと、確かに大陸ではない。之ぎ大陸と見る様になつたのは、ギリシヤ人が、自國人と、エーゲー海の対岸にあるカリアン、フエニシヤ、ペルシヤ等の敵國を區別せんとしたのに始まる。されば此考は全く政治的起源を有するのであつて、黒海と北氷洋との間に茫漠たる曠野のあることを知らず、且つ其處にはアジアの氣候及び人種と、ヨーロッパの氣候及び人種が相交錯して居ることも知らずして之を区別したものである。眞のヨーロッパは西部ヨーロッパであつて、是はギリシヤ人の所謂ヨーロッパへローマ帝國が段々と附け加へていつたものである。此ヨーロッパは大きさに於ても、高低起伏に於ても、輪郭に於ても此氣候及び人種に於ても、著しく相違し、之を見れば欧亜両洲の相違を收めて心に思ひ浮べることが出来る。然し、地理的の立脚點からしては、欧亜両洲の区別は誤謬である。島的大陸即ち米洲や濠洲など於て見らるゝ独立的発達はヨーロッパの如き半島的大陸には、

之を望むことは出来ぬ。

　陸地の独立は、其大いさ如何にも由り、又其位置如何にも由るものである。即ち大きければ却って他の陸地に近く、独立が保たれない。例へばユーラシアは大きいので、アフリカ、北米、否濠洲さへ密接の関係を有して居る。之に反して、濠洲は一番小さいので、大陸中では最も孤立して居る。大西洋中の孤島は面積僅に数方哩に過ぎぬので、他の陸地とは、全く交通なく、大発見時代までは少しも人類に知られて居なかった。

　相隔絶したる大陸には最も異れる人種が住み、相接近したる大陸には非常に類似した人種が住んで居る。動植物に関して言ふも亦同様である。陸地は北に於て密集し、南に至るに従ひ、半島状をなして相分かれて居る。此近い陸地と遠い陸地とを比べて見ると、動物にも人類にも明かに異同が現れて居る。独り北米とユーラシアとは、北氷洋の周囲で、相接して居るので、東西両半球に哺乳類の類似を見ることが出来る。然し是も馴鹿、大鹿、北極狐の如き北極動物に限って居る。之に反して、夏至

線以南の両半球の動植物を互に比較して見ると、東西の気候相類似して居るにも拘らず、其動植物は全く類似を見ることは出来ぬ。之と等しく陸と陸との相離れたるアフリカ、濠洲、南米の人種を比較して見ると互に相違し、陸と陸との相接近せる北極のユーラシアと米国とを比較すると、人種が能く似て居る。即ち東西両半球の人種の類似は唯此一點に於てのみ認めることが出来るのである。斯くして、世界の北地にありては動植物も人類も相関係し交渉してゐたことを、南地に於て相分離し相絶縁してゐることを知るべきである。

　東西両半球の相接したる所で、人類の類似を見る如く、大陸の相接したる所でも亦人種の類似を見ることが出来る。大陸の相接したる所とは即ち地中海の近傍で、此處にはヨーロッパとアジア、アフリカとが相接近して居るが、其結果、此辺の人種は何れも白皙の地中海人種である。之とは反対に、東部濠洲と、西部アジアとは人種的には正反対になって居る。それにも拘らず、濠洲の極端とアジアの極端との間には、同一の

マレイ人種が散在して居る。
　アフリカが夙に発達したのは、此大陸がアジアと南米との間に介在した為めではない。有力な、頑強なアジアの影響を受けた為めである。南米よりは何の影響をも受けて居らぬ。されば、アフリカは歴史の上ではアジアの附属物、アジアと言ふ大陸の半島たるかの観がある。次いで奴隷賣買、ラム酒輸入等のことが行はるゝに至り、アフリカは初めて大西洋方面よりの影響を受けるに至った。
　アフリカの進歩を阻碍したる大西洋は、人類地理学の立場から言ふと、陸地の分布上頗る大切な一現象である。米國が北大西洋の一端に於て発見せられて、地球は陸の帯を締めて居ることが初めて分かった。ノースマンは紀元一〇〇〇年から、一三四七年までの間にアイスランドとグリーンランドとを経て、米国に航した様であるが、其一事を除いてはコロンブス前に大西洋の両岸に交通があったらしくない。次いでコロンブスは米国を発見したが、此時彼の見た米國は、人種も文明も全く今まで見

たものと違ったものであった。即ち人種は、白人でもなく、黒人でもなく文明は尚石器時代にあった。或はノルウェーとグリーンランドとの間の第三紀時代陸橋が米國へ移民を送るの機会となり、斯くして米國は、夙に欧洲より人類を供給せられて居たかも知れぬ。然しコロンブスの米國発見時代には、ヨーロッパ人種の痕跡は絶無であった。
　氷河の末に至り、此陸橋は崩壊し、大西洋は全く南半球を隔離して仕舞った。大西洋中の島嶼は、数も少なく距離も相隔って居るので、大西洋の両岸間には交通を開くと言ふことは不可能であった。是はカナリヤ島を除き、大西洋中の島々が発見当時悉く無人であったのを見て證明せらるゝであらう。紀元八七二年、ノルウェーのハーファガー時代に、同國に政乱あり、逃れてフェル及びアイスランドに移ったものが、此両島最初の居住者であった。又紀元一〇〇〇年ノースマンがグリーンランドに移住したのが、同島に於ける最初の居住民であった。彼等が此處に達した頃には、土着民の隻影をすら認めなかった。然し住み荒らした住居

や、船及び石器の断片等が残って居るものを見ると、エスキモー人が間歇的に此島に来り、暫く居住したものらしい。

大西洋は斯く東西両半球を隔離したに反し、太平洋は其北極部にも半島あり、島あって、アジアとアメリカとを繋ぎ、両洲の交通を助けた。北米の土藩は全体として見れば蒙古人種的なること、西部エスキモーにはアジア的特徴顕著なること、西北海岸の種族は南洋人及びアジア人と人種的にも文化的にも相類似して居ること等は、何れも皆アメリカがアジアの一大東翼たることを證し、従って又世界に於ける眞の東洋であることを證明して居る。是は地理的事情から考へても有りさうなことである。北太平洋の風及び潮流は、何れも日本から直接に米國の海岸に押し寄せて行く、支那や日本から海へ吹き流された船は、黒潮と西風とで、是も米國の海岸に漂着する。斯かる例は歴史に澤山發見せらるゝことである。

ベーリング海には一方にイースト岬あり、他方にプリンス、オヴ、ウェールス岬あり、其間にダイオミノゲズ島があって、不完全ながら橋をなして居る。それより更に南下すれば、コンマンダー島と、アリューシアン島とあって、カムチャツカ半島と、アラスカ半島との間の棧道をなして居る。而して「此両大陸の間に密接の関係のあったことは、此ベーリング海両岸に住する人類の生理的類似が第一番の證據である」とはヂヤスチン、ウインサーの言である。然し此類似は唯エスキモーとチュクチ族との間に止まるものではない。有名なる言語学者ロバート、レーサムを初めとして其他の学者は、一八五〇年以来既に米國北西部の北米土藩と、シベリアの諸種族との間に言語上の類似あることを度々立證して居る。ダブリュー、エチ、ドールは北米太平洋岸の住民の風俗、習慣が著しく南洋人のそれに類似して居ることを発見し、此原因はアジアから南米まで南緯二十五度の點に於て、大小の島嶼断続せることに存するものと認めて居る。然し南洋の文化が北米に入り込んだことに就いては、オ、ケ、メーソンの説明の方が優って居る様である。其説に據ると、太古

に於て、西南太平洋岸の水夫等は食糧を求めて東アジアの海岸に沿ひ、ベーリング海峡を渡つて、米國の太平洋岸に達したのであらうと言つて居る。

凡そ人種の地理的分布を研究せんとする人は、必ず此大西洋と言ふ大地隙を勘定に入れねばならぬ。大西洋は四百年前までは人の渡るべからざる大なる渕であつた。此影響は今日でも尚多少残つて居て、其西岸住民の運動を指導して居る。即ち此大なる渕があつたので、米大陸は広大な豫備的地域として存し、其處には石器時代の人々が散在し、而して今日ではヨーロッパの優等人種に新なる活動場を與へて居るのである。

濠洲と南北西米とは、人種の範囲と陸地の範囲とが相符合して居る。之に反して、旧世界の之洲即ちヨーロッパとアジアとアフリカとを見ると、其處に三人種が居住して居るには相違ないが、其地理的分布は各大陸の境域に限られては居ない。就中、白皙人は此三大陸の何れにも属し、太古からして地中海を白人の海となし来つた。又蒙古人種は其故郷がア

ジアなるに拘らず、北氷洋の岸に沿ふてノルウェーの大西洋岸にまで拡がり、歴史時代に入つては、ダニューブを溯り、アルプスの麓にまで達した。黒人種とてもアフリカが本據であるが、之には制限せられない、曽ては印度半島、マレー群島などにも居住したことがあつて其残余は今でも尚デッカン、マラッカ、フィリッピン其他に住し、メラネシヤの黒人大中心地と、濠洲の派生的黒人地域との連鎖となつて居る。

ブルーメンバッハに依つて代表せらるゝ旧式の人種学では、五大陸に當てて人種を五つに分けたが、是は誤謬であつた。大陸を五に分けることと、人種を五に分けることゝを同視してはならぬ。是は自ら別事である。人種を地理的に區分せんとすれば、タイラーの説最も當を得て居る。即ち其説に據ると、人類は唯矢鱈に此地球表面に散布されたのではない。甲の人種は、甲の地に属し、乙の人種は乙の地に属し、其特殊の境遇に依つて特殊の型を生じ、それから次第に他の地方に拡がり、而して其途中或は他の人種と混交し、或は種々の境遇に出遇ひ、以て変化を来した

のであると言って居る。

扨、此人種的運動の原則に基いて言って見ると、或陸地は位置良好、面積広大なる故、主位を占め、他の陸地は然らざるを以て従位を占むると言ふことである。即ち東半球は主位で西半球は従位を占めて居る。又北半球は陸地に富み、気候温和の地帯が広いので、主位を占め、南半球は従位を占めて居る。濠洲は常にユーラシアの後塵を拝し、南アフリカと南米とは北隣の助なしに進歩の道を開いたことがない。太古の南米は、南半球にて独立の文明を発生した唯一のものであるが、而もペルーの文明の実蹟は、メキシコや中央アメリカのそれに劣って居る。

斯く南部諸大陸が従位を占める理由は、他の陸地との接触点が唯一方、即ち北方だけであることに原因する。而して其接触が左程密接でないことも亦一原因である。濠洲では交通は散在的の島に由らねばならぬ。米国でも鎖の如き島と、山の多い地峡とに由らねばならぬ。アフリカでは大きな沙漠が間に横って、地中海と黒人の居住する赤道帯を隔てゝ居る。

斯く其位置が不便なので、南半球は久しく歴史的死物であった。漸く四百年前に至り、南半球の航路開け、初めて世界交通の圏内に入ることが出来た。而かも此欧化作用に感化を受けることが、既に南半球は北半球に対して従位に居ることを明かに示して居る。

陸地の構造如何は、人種の運動に影響し、従って其處に居住する人種の発達を支配するものである。即ち単純な構造の大陸は、人種の運動に多くの特色を附すると言ふことは出来ぬ。之に反して構造複雑で、起伏変化の多い大陸は、人種を様々に隔離し、之に様々の特色を発揮せしむることが出来る。例へばアメリカの様な変化の乏しい国では、人類が変化と言ふことを忘れた様である。之に反してアジアには半島あり、島あり、高地あり、低地あり、雪を戴ける山あり、蒸気を発する谷あり、熱帯、温帯、寒帯に拡がって時としては旱魃に、時としては洪水にも遭遇するので、此處には自ら種々なる文明も発現し、色々な歴史的結果も生れた。是はヨーロッパにあっても亦同様である。否アジアに比し一層

高い程度に於て同様である。

南北両米にあつては地勢が非常に單純なアメリカの地勢に変化を與へたものは、北米にあつてはロッキイ、シエラ、ネバダ等、南米にあつてはアンデス等を含める所謂コルヂレラ連山である。此連山に依つて、南北両米は南北に縦断されて居る。之に依つて、太平洋文明と大西洋文明とが原始的の米國に於て相対立して居る。然し概して言へば、此両大陸には沿岸に屈曲が乏しい。若し有りとしても、それは大低極地又は亜極地の都合好からぬ所にある。大きな熱帯的の島々は、不生産的な太西洋に位して居る。地勢には変化が缺けて居る。是等の事情相俟つて、南米大陸には多くの地方的文明が起らなかつた。

地勢の曲屈には、概して二種あることは、之を心得て置かねばならぬ。一は海岸線の屈曲で、ヨーロッパの半島及び島々の輪郭の如き鋸歯状をなせるものがそれである。二は内地の屈曲で、是は山及び沙漠等に限られて、それより起る屈曲である。西藏高原、ボヘミヤ盆地、ポー河の谷

間、ナイルの流域などは之を代表して居る。就中第一の屈曲は非常に大切であつて、それは海に接して居る為めに熾烈なる歴史的活動が起るからである。然し同じ海岸線の屈曲であつても、其大きさ、其位置の如何に依つて大なる相違が生じて来る。例へばラブラドルとユカタン、コラ半島とスペインとの如きは地帯的位置が異なるので、自ら其間に非常な相違がある。又地帯的位置が同じであつても、隣に乏しく、孤立の状態にある時は其歴史は貧弱とならざるを得ない。アイルランドが、イングランドやエトランドや、ゼートランドと同じ緯度にありながら、発達の著しからぬは斯かる理由の為めである。

アジアの南部諸半島の如き大規模の屈曲と、ノルウェー、アラスカ、ペロポンネサス等にあるが如き小屈曲とを比較すると、文化的、歴史的影響が相互に同じからざることを発見する。是は双方其隔離の程度如何に関係することである。アジアの南部諸半島の如きは、其隔離力は恰も小さな大陸と同様であるが、アッチカ、アルゴリスの如き、又は稍大きな

ペロポンネサスでも、其間には入江があって、其隔離力は之が為め、其隣地との間に小異は起って来るが、大体の点に於ては異ならない。ヘラスとペロポンネサスの歴史の相違は、主として双方の隔離から起ったものであるが、大体から言へば、彼等は共に徹頭徹尾ギリシヤ人である。英國史に於けるウェールスとコーンウォールとの間にも如上の大同小異を見ることが出来る。

以上二の海岸屈曲が兼ね備はって居ると共に、それが又群をなして居る所には、歴史的発達が最も都合良く行はれる様である。是は地中海に於ても見ることが出来る。又北海とバルト海との谷に於ても見ることが出来る。斯かる地形にあっては、小屈曲があればある程、海との接触点が増加し、港湾も出来、岬も防波堤も出来て、海岸は船を寄せるに便宜である。又大屈曲は海を小分して航海を奨励し、斯くして隣地同士の間に風俗や習慣の交換が起って来る。他語を以て之を言ふならば、斯くの如き地形は其臨海各地の近隣関係を最も便宜ならしめるものである。

南部アジアには大屈曲はあるが、小屈曲が少ないので、自から損害を蒙って居る。ギリシヤ式の小屈曲多き海岸線を有する半島は、此南部アジアに於ては、前印度に於て発見することが出来る。其處にサンダ諸島が碁布して、丁度ギリシヤのキクレデス諸島と歴史上同様の役目を演じて居る。又ヨーロッパ式の大屈曲は之を黄海及び日本海の周囲に於て発見することが出来る。即ち其處には、本道、山東半島、朝鮮半島が、丁度大英國ユトランド、イタリー等と略々同一の割合をなして居るのである。アラビヤと印度とは印度洋に突出して、其海岸線は可なりに長いには相違ないが、其長さは此両半島の大面積と比較し、言ふに足らぬ程短いものである。半島の輪郭と言ふものは、丁度脳髄の表面と同様なもので、其貴ぶべき点は回転部に属する。南部アジアは、業の数に於て申分はないが、回転が如何にも少ない。斯かる理由で、北部印度洋は、地中海から東洋に達する為めに重要の地位にあるに拘らず、其発達は欧州航海者の出現までは、兎角阻害され勝であった。

大陸の海岸線は、其長さの数字だけを聞いたのでは餘りあてにならぬ。例へばユーラ

シアの海岸線は、六萬七千哩で、北米のそれは四萬六千五百哩と稱せられて居るが、前者の海岸線は大低は熱帯及び亜熱帯側面にあり、大いに利用せられ、後者のそれは寒い北極方面にあつて無用の長持となつて居る。

半島は海岸の地形如何に依つて、海上との交通自ら異なると共に、後地との接続如何に依つて、後地との交通に相違を来すものである。例へばペロポンネサスや、クリミヤや、マラッカや、ノヴア・スコヂの如くに、ほつれた絲の様な細い地峡で、本土と相繋がつて居る場合には、本土の生活と交通乏しく殆ど島も同様である。更にエヂプト、シリヤ、メソポタミヤの如く、沙漠の為めに切断せられて居る場合、スカンヂナヴィア、クーランド、エストランド、フィンランドの如く沼澤地に切断せられて居る場合も亦同様である。

半島は大陸に近づくに従つて却つて幅の広くなるものも少なくはない。斯くの如き場合には、本土の葉としての特色自から減じ、人種的、歴史

的の特徴も亦甚だ乏しからざるを得ない。斯かる半島は大陸的部分及び半島的部分と分けるのが至當である。現に軍人地理学者であつたナポレオンはイタリーを両分して、ポー河の流域を大陸的イタリーと稱し、アペナイン連山部を半島的イタリーと呼んで居る。大陸的イタリーは唯其幅が広いのみならず、丁度大木が地面に近い部分に於て拡がつて居る様に拡がり、且つ其根を大陸の奥深くまで張つて居る。それから此大陸的イタリーの能く容るることを得ざる一の大きな低地と一の大きな河もある。既に斯くの如く地的性質が本土と同様であるから、其人種的、歴史的性質とても亦同様ならざるを得ない。然るに一方、半島的イタリーは如何と言ふに、前者に比して、種々なる特色を具へて居る。即ちアペナイン連山の北では佛語的イタリー語の起りしに反し、其南では純粋のイタリー語が起つた。人種に就いて言ふて見ても、北の方にはアルプスを越えてポー流域に侵入した白皙、長身、広頭のケルト人種及び北東部から侵入したドイツ人及びイタリー人の生息して居るに反し、南の方には淡黒、短身、長頭の地中海種族

が住んで居る。さればイタリー半島とは言ふものゝ、眞の半島的特色は独り南部イタリーに於てのみ窺はれるのである。

斯くの如く南部イタリーは大陸との交通を遮断せられて居たので、其人種も大陸の影響を免かれ、其統一を保つことを得たのであるが、然し其統一性を保つことを得た點では、欧洲中恐らくイベリア半島に越ゆるものはあるまい。イベリア半島即ちスペインとポルトガルでは、コルシカ及びサルジニアに於けると同様に、純粋な長頭の地中海種族を発見することが出来る。スペインはフランスに接しては居るが、此接触點は短かい。且つ此両國の間にはピレニーと言ふ障壁がある。之が為め、此イベリア半島は大陸的特色を有して居らぬ。人種上及び文化上にも、雑種的の地方と言ふものがない。純粋な半島的人種、半島的文化が全半島に蔓って居る。之と丁度反対して居るのは、イタリー及び印度ではあるが、かのバルカン半島の如きも亦そうである。即ちバルカン半島には大陸部多く、地勢亦起伏混淆して居る。それが為め、其半島部は人種上統一性を保つに由なく、スラヴ人・アルバン人、ワラキヤ人、其他の大陸種族が此處に移住した。茲に於てかヘラスもペロポンネサスも共に其半島性を維持することが出来ず、其種族が北方大陸の圧迫の為め混一するに至ったのである。

半島なるものは、其大陸から突出して居る點より言へば、隔離地である。然し又対岸の地に発展する點より言へば中間地である。此両方面は如何なる半島の人類地理にも明かに見えて居る。之を歴史的の順序より言へば、半島は先づ隔離するものであって、其境域内に成熟せる、独立的人民を養成する。然し狭い境域が是等の人民を悉く包容する能はざる様になれば、半島は対岸地に発展する為めの好都合なる足溜となり、或は近隣諸地と交通する自然の通路となるものである。朝鮮は大陸人種を日本に送る為めの橋梁となり、支那文明を日本に伴ふ為めの通路となった。それから一九〇五年ポーツマス條約後に於ては、日本が本土に発展する為めの通路となり、且つ日本から送らるゝ近代文明の不承々々な受領者となって居る。ピレニー半島も亦之と同様で、古今常に欧洲と西南アフリカとの中間者であった。

其人民は、其動植物と共に、アフリカのそれと群を同じうして居る。それから其地は、カルタゴ人、ヴァンダル人、サラセン人等の南北交通の通路になつて居る。又十五世紀にはポルトガル人がタンジーア半島を占領し、紀元七〇九年より今日までスペインがモロッコ沿岸諸地を領有することの連鎖になつて居る。

此中間者たるの役目は、スペイン、イタリー、ギリシャ、小アジア、アラビヤ、前印度、マラッカ、チュクチ、シベリア、アラスカ等の如き大陸と大陸との間に挾まれる總ての半島の負はねばならぬものである。特にアラビヤは、氣候と、動植物と、人種と、歴史とに於て、或時はアジアから、或時はアフリカから引着けられ、而してアジアの感化をアフリカ全土に傳へることの中間者となつた。若し此種の半島の中に、中間者たるの役目を果さぬものがありとすれば、それは唯一のフロリダがあるばかりである。フロリダの土着人種は全く北米的であつて、南米とは關係がない。アラワク種族とカリブ種族とが有史時代に入つて南米ヴェネズエラから北方に発

展した時にも、遂にフロリダに達せず、キューバとハイチまで來て、はたと止まつて居る。此変格は、フロリダの地勢が自から之を説明して居る。即ち此半島の中央と南部とには広大なる沼澤地があつて、何れの方面から植民をするにも邪魔になるので、鏈鎖たるべき半島は却つて障碍となつたのである。

大陸と大陸との間に介在せざる半島は急速には行かぬが、矢張り、中間者の役目を果さずには居られなくなるものである。即ちコーンウオル、ブリタニー、イベリア等の諸半島は、十五世紀末より大西洋横断の業跡を以て、何れも有名であつた。佛國人にして始めて新世界に達し得たものは、ブリタニー、ノルマンヂー等の漁夫であつた。コーンウォル半島の要港たるプリマスは英國の米國探檢史、米國植民史に於て著しく其頭角を現して居る。エリザベス女王時代の海將は、フランシス、ドレーキにしても、ジョン、ハウキンスにしてもハンリー、ギルバートにしても、ウォター、ラレーにしても、皆此地方の出身で、殊にラレーは、コーンウォル及びデヴォンの

海軍中将たりしは決して偶然と言はれない。それから、ラブラドルの東方二十度の点に南米のサン・ローカと言ふ岬があつて恰も半島形を成して居るが、カブラルや、アメリゴ・ヴェスプチの船は此處に到着し、之に依つてポルトガルは南米に其足溜を得たことも亦記憶せねばならぬ。

第四節　島嶼

半島には種々なる特色があつて、海と十分に接觸したること、大陸に比して其の面積小なること、大陸と或は部分的に或は全然隔離せらるゝこと、対岸地に対して橋梁ともなり、道路ともなること等は即ちそれであるが、島となると、半島のこれらの特色は一層増大して来る。世界中の主なる諸半島と、最大の島々とを取つてこれを比較すると、半島の方が餘程面積が広い。假令島の方へ、グリーンランドの様な氷結地を加へても尚半島には遥かに及ばない、又ニューギニアは人類の生息せる最大の島であるが、是は半島中の最大のものたるアラビヤに比すると、僅かに其の四分の一に過ぎぬ。故に狭い面積と云ふことに伴ふ便益と不便益とは半島よりも一層甚だしく島に於て現る、と言ふことを予期しておかなければならぬ。

半島は之を形態学の上より言ふと、本土と島との中間に居るもので、

少し地質的の変化が起れば、本土ともなり、島ともなるのである。大英国は第三紀層の末に大半島であつて、其の動植物を見れば、曾て本土と相接続して居たことが知れる。シシリーとサルジニアは第三紀最新期時代には北アフリカのチユニスと繋つて居たので、是も其動植物を見て察し得る所である。之等は自然力に依つて変化したものであるが、時としては人類が其目的の為め、半島を化して島となすことがある。

即ちキイルや、コリントでは、地峡が航運上の防害となるので、人類は運河を作つて半島を島と化した。ラブラキスのツイリヤムの言ふ所によると、紀元一二五三年に、コヤニヤ人はクリミヤの地峡を開鑿し、韃靼人の侵入を防禦したと言ふことである。

之と反対の作用も亦此の自然界には行はれて居る。支那の山東半島は沖積土の原野の中に聳えて居るが、是は太古、此原野が海で同半島が島であつたことを暗示して居る。ギリシヤには此類の事実が多い。樺太島も自然は次第〱に之をシベリヤ海岸と接続させ、半島となさんと頻りに活動を試みて居る。而して同海岸との間の距離極めて狭く、一八五二年までは、半島と思はれて居た程である。印度半島の動植物、否、太古の人種が、マダカスカルに及び南アフリカと余程類似した所あるは、太古には孤島でそれが遂にアジア大陸に接続したのであることを示して居る。

島は面積比較的狭く、其境界線が非常に鮮明であるから、動植物は勿論、人類の分布を研究するにも極めて好都合の場所である。即ち島は小面積と隔離との二原因によつて、動植物の種類が同緯度の大陸に比し、非常に少い。ニユージランドの様な変化に富んだ長い島に於てさへ、有花植物の数を調べてみると、南アフリカや、西濠洲の同面積内にあるものに及ばない。アツセンシヨン島の如きは、固有の有花植物が六種以下であつた。ダーウインは本土を去ること三百哩以上の孤島に、一種たりとも其島固有の哺乳動物を発見したことがない。故に島は、性質に於ても種類に於ても、人類に於ても動物に於ても悉く貧弱である。大西洋に

散在せる島々は、独り陸に近いカナリヤ島を除けば、餘り本土との距離が遠いので、其発見当時は、悉く無人島であつた。カナリヤ島とても、其住民は、北アフリカの本土のものに比し非常に進歩を阻害されてゐた。

島は斯く動植物に於て貧弱ではあるが、又島には島特有のものがある。是は距離の年月と、又其効力如何とにより、益々増大の傾向がある。本土に近い島では、其の動植物が大体、本土のものと同様で、島特有の種及び属は甚だ乏しい、然し渺茫たる洋中の孤島は、距離が完全の為め、島特有の種に富んでゐるのみならず、他所には発見すべからざる属を見ることもある。

此の動植物に及ぼす島の影響は、又之を人類に於てみることであるが、動植物に於て見るほどに著しくはない。是には二つの理由がある。第一は動植物は人類よりも古く、距離の効力を感ずることも人類よりは久しいといふことである。第二は動植物と違つて、人類は自ら航海術を発明し、又は練習して自由に海を往復するやうになるので、動植物ほどに距離を感ぜぬと言ふことである。されば文明の度の低い間は、人類も動植物同様に、極度に距離の効力を感ずるが、文明が進んで航海術が開けると、人類は動植物と違ひ、距離の効力を左様に感じない様になる。不、島は却つて航海者の目標、又は仲継となり、外部の影響を多量にうけねばならぬ様な場合もある。

此距離的影響と交通的影響とは絶対に反対のものであるが、同時に同じ島民に作用してゐる場合もある。或は互に前後して作用してゐる場合もある。カナリヤ、アゾーレス、マルタ、イギリス、モーリシアス、ハワイ等の古い歴史と新しい歴史とを比較してみると、自ら首肯せらるゝであらう。是等の島々は何れも一時は住民緒なき絶海の一孤島であつた、然し今日では富盛大な貿易場又は途中駅となつてゐる。それから英国人が非常に保守的であると共に非常に発展的であり、地方的であると共に、世界的であり、何事にも先例を求める様で、而も萬事世界に率先

すると言ふ様なことも、島といふ環境の影響である。是れは日本に就いて言ふも同様で、日本は外國と交つて全く外國化せず、外國の文明を取り入れて尚其國粋を失はない。是れ其島國たるが為めに外ならない。

島は其隔離に依つて養はれた個性を具へて居ると共に、又之を普及するの能力をも有しておる。是が即ち、古今を通じて島が大なる歴史的の役目を演ずる所以である。されば〔と〕言つて、島は文明の要素を悉く産み出すと言ふのではない。之をなすには島の面積が許さない。然し大陸に生長した種が若し島に移植せられたなら、島は之に変化を与へ、又は花を咲かせる。日本は支那と朝鮮から、英國は欧洲大陸から其文明を輸入し、而して之を其最高度に発達させた。而して今や此の二國は返禮をなさんとしておる。島が大陸に反動を及ぼさんとして居るのである。日本の理想が満洲よりセイロンまで東洋全体に行き亘りつゝあるを見よ。又英國の文明は欧洲の標準である。エマーソンは「露人は暦中に於て英人たらんとして居る。英國は其文明と知識と趣味とを萬國に移植した」と言つておる。

小さな杯は暫らくの後に溢れ出すものである。島は長く保つておることが出来ぬ。茲に於てか島は與へねばならぬ様になる。島は與へて生きるのである。島の歴史的意義は此点に存する。然し島は其面積に限りがあるので、其文明は遂に進歩することが出来ない様になる。唯英國と日本とは、此の原則の例外で、それは其境域の非常に大なるにも由り、又位置の頗る有利なるにも由るのである。然らばこの原則に当る好例があるかと言ふにクリート島は即ちそれで、其文明を地中海の東部沿岸に伝へたこともあつたが、總て其源泉は涸渇し、却つてこれをギリシヤから受けねばならぬ様になつた。其他エーゲ海中にあるサモス島、ローズ島の如き、クイーンシャーロット群島中のハイダ種族の住める島の如き、太平洋中のイースター島の如き、何れも皆此原則に当るもので曾つては進歩した文明を有して居たが、後に凋落して見るかげもなきに至つた。

海は最も有力な、最も広い境界線である。それ故海に囲まれた島は、総てのものを他から分離せしめるものである。英国の人民は、欧州本土とチユートン人種と近い関係があり頻繁な交通があるにも拘らず、之とは非常に相違して本土のチユートン人種相互の相違の比ではない。大英国とアイルランドのケルト人種も亦欧州本土のケルト人種に比較すると、体格も気質も文明の程度も皆違つて居る。日本人と支那人とを比してみると…其体格に於て、精神に於て、又其国民的意気に於て互に相違しておる。エスキモーは米国の土着人種中では、言語も風俗も余程統一のある種族であるのに、アリユーシヤン島に住するエスキモーだけは著しく他と相違して居る。即ち言語に於て、宗教上の儀式に於て、刺繍織物等の手工に於て、之を認めることが出来る。クイーンシヤーロット群島中のハイダ種族も、本土の種族とは非常な相違で其の起源は別であらうと解せらるゝ程である。

島の文化力は其島民の言語に一番著しく顕れる。即ち島に於ては一種の用語又は方言が出来るからである。又群島にありては、各島に、特殊の方言が起ることもある。チヤンネル群島に於ても此例を見ることは出来るがボッカチオの言ふ所によれば、カナリア島に於ても、島と島との間に言語が通じなかつたさうである。独りボッカチオのみならず、それより凡そ百年後一四五五年に、カナリア諸島が既にキリスト教化した後にも、尚島々の言語は互に別で、語が通じなかつたと説いた人もある。是は遊泳に由るの外は島と島との間に交通の方便がなかつた為であるとし、昔の人も説明をして居る。然らば本土の言語から分化するのは何故かと言ふに、是は本土よりも有利の状態にあつて、一層発達する為であらう。大英国や日本の様な大きな島に於て特にさうで、日本語は多少アルタイ語系に関係はあるが、其の支派の何れにも類似して居ない。支那語に比すれば非常な相違で、既に複合作用の程度を超越して居る。是は英語が大陸のチユートン語に反し、余程語尾変化の形式を脱落して居ると同様である。

島人は大抵限りある移地を背にして、海岸に住んでゐる。故に島人の種族が本土の種族と異るは、本土の海岸住民が内地住民と異るのと同一の理窟である。即ち海に接觸してゐる為に、間歇的に外国人の血液が入り来るのである。斯くの如き混血は、何れの島にも多少認められない事はない。この点に於ては、島は隔離性を備ふると共に、他の一方に交通性のあることを認めることが出来る。例へば今日の英国人は、ケルト人種と様々のチユートン種族との混血である。然しこのチユートン人種は全く其本国を離れた事と、且小団体となつて漸次浸入したのとで、自らケルト人種に同化されて居る。且つ此同化作用は、人口の激増、密接な雑居、文明の統一、作用等に依つて一層其度を加ふるものである。故に島は半島と同様、人種が混血であつても驚くべき程統一を保つて居る。是島が自国民を他国民と隔離し、自国民を堅く抱擁して、人種でも、文明でも、言語でも合一させずにはおかぬのである。英国人、日本人、コルシカ人、サルヂニヤ人等の頭蓋指数を調査すれば各自皆驚く程の統

一を保つて居る。

島は必ずしも其住民を最も近い本土から獲得するものとは限らない。本土の人民が若し航海術を知らぬならば、海は如何程広くとも、航海を知つてゐる人民を妨げる事は出来ぬ。アイスランドは比較的グリーンランドに近いが、其住民は遠いスカンヂナヴイアから来て居る。英国は近いゴールよりも、遠いドイツ、デンマーク、ノルウェー等から数字上多くの移民を得て居る。

島には側面に依り相異なる移民を見ることがある。臺灣は其の一例で、其東面にはマレー種の土蕃が居住し、西面には支那の移民がゐる。マダガスカルも亦之と同様で、其東部及中部にはマレイのホヴア種族占居し、西岸にはアフリカのサカラヴア種族が住んでゐる。此人種的分布は丁度昆蟲の分布と相照應して居る。即ち東部は印度、マレイ的であるが、西部はアフリカ的である。斯くして此島民はアフリカ種とマレイ種との間の特徴を示し、人種は統一せりと言はんよりも、むしろ雑駁と云ふ

べきに拘らず、言語は其親密なる交通の結果統一してゐる。即ち古風のマレイ語が致る処に行はれ、地方地方に方言はあるが、互に相類似して居るので、全島民悉く交通するに差支がない。

内海の小島は、其の初代に於て夙に人種の統一を失ひ、非常に雑駁となるのが常である。是れ第一は内海では航海術の発達早く、而して航海者は必ず斯くの如き島を或は途中駅となし、或は海中の貿易場に充てる。其結果として水夫も商人も植民も征服者も皆此処に集り、人種が世界的となるのである。即ち此の場合には島の交通性が隔離性を圧倒するものと言つて差支へない。第二に斯くの如き島は人口も少数で、混血の影響を受け易いと言ふことで、其結果は非常に複雑した雑種を生ずるやうになる。此作用は此小島が貿易上の焦点であるか、兵略上の要点である間は、長く続いて行くもので、ベーリング海のヂオミード島は、北極諸種族の大市場で、此処に於てシベリアのチユクチ種とアラスカのエスキモーとは貿易を行つて居る。ベーリング海のセント、ローレンス島のエ

スキモーは、チユクチ族と長く交際の結果、チユクチの或種の衣服と舟と多少の単語とを採用して居る。マレイ諸島とパプア諸島との間にあるセラムと言ふ一小島の東端、キルウオールと言ふ処は、極東の土人貿易者の首府である。而して斯くの如き小島貿易場は、小さければ小さいほど、其貿易の範囲が広く、其人種益々雑駁となるものである。濠洲木曜島の住民が総数五百二十六人で、其中二百七十人が英独仏スカンヂナヴイヤ、デンマーク、スペイン、ポルトガルと欧種の濠洲人で、残り二百五十六人は、南洋諸島人、パプア人、アフリカ人、フイリッピン人、支那人及び其他のアジア人である。斯くの如きは、昔にも其例多く、イージナ湾内のイージナ島の如き、印度のセイロン島の如きも亦さうであつた。

内海にある島は、国境にある地方と同様な過渡的性質を帯びて居るので、其周囲にある諸海岸の出張所たる観を呈する。是等の諸海岸は、相争ふて此島を占領せんことを企てる様になり、而して其持主は時代々

々に依つて恰も走馬燈の如くに代つて行く、此痕跡は其島の住民に於て、又其言語に於て、明らかに之を認め得るゝので、イージナ、キプロス、ローズ、クリート、マルタ、コルフ、シシリー、サルジニア等の諸島の歴史即ち是である。就中最も適例として見るべきは、キプロスの歴史で、昔チルの船隊の根據地となり、紀元前一〇四五年には、フエニシヤ人が其処に植民地を有して居た。以後は諸国の争奪地となり、チルが衰へてからは、ギリシヤ人之に代り、それから次々に、テッサリヤ人、エヂプト人、ペルシヤ人、ローマ人、サラセン人、ビザンチン人等の手に渡り、一一九一年には十字軍の為に占領された。それに次いで、エヂプトの手に落ち、一三七三年にはゼノアに奪はれ、一四六三年にはヴエンスに移り、一五七一年にはトルコの有に帰し、一八七八年には愈々英国のものになつた。而して是等代々の占領者は何れも其痕跡を其人民と言語と、文明と建築との上に遺して居る。之と同じ様なことが、シシリーにも、マルタにも、台湾にも行はれた。

島は物質的に言へば、分離された地域であり、政治的に言へば、極めて容易に分離せらるべき地域である。其隔離性は、幾分か島を安全ならしめないことではないが、其面積は限りあり、其人口も亦少数であるが、大なる海上国の犠牲となり易く、属国とせられ易い。此故に島の安全は、其面積と海軍力と隔離の程度とに依つて増大するものである。隔離の程度と言ふは、其島が内海にあるか、外海にあるか如何に関係する。内海の島は、勿論、大きかるべき筈は無く、其の周囲の海岸からも遠くは離れて居らず、従つて其接近したる海岸地から絶えず脅かされる。ユーゼル、デーグーニ島の如きはバルト海沿岸の諸国から一度は必ず占領されてゐる。ゴットランドはハンが同盟に対し、恭順を誓つたことがある。サルヂニアは西部地中海の中央に位して居るので、幾多の国々と順次政治的に合同した。即ちカルタゴ、ローマ、北アフリカのサラセン人等と合同したこともあり、シシリー、ピサ、アラゴン、ピードモンドと合同したこともあり、今日ではイタリーと合同してゐる。

紀元の始め、西部欧州を風靡したるチュートン蛮民は陸上種族であつたから、一衣帯水も幾分か保護の用をなし、之が為めシシリー、コルシカ、サルヂニア、マルタ、パレアリック諸島は一時安全であつた。然し遂にはローマ人、サラセン人等の手に帰し、其後は欧州諸国の間に持廻りの状態であつた。

島は又其面積が狭いので、容易に他国の属地となる危険がある。例へば、アテネは其強大なる海軍を以てナクッス、サモス、タソス等の諸島を撃ち、之を容易にデロス同盟の中に加へて仕舞つた。然しカルシジス半島民、メガラ地峡民を服従させるのは容易でなかつた。英国もアイルランドを長く掌握して居る。然し佛国に於ける其所領中、今尚英国の手にありしものは、唯チャンネル諸島あるばかりである。

海中の一孤島が遠く隔たつた或国の領地になつて居ることが往々ある。是其近接大陸から独立してゐると長く服従状態に居らねばならぬことを証明するものである。例へばカナダのサン、ピエーヤミケロンはカナダに於ける佛領地になつてゐる。英領のベルムダや、バハラは皆是れ英国が久しく此大西洋岸を支配して居た時代を語るものである。西印度の小アルチンには、英領あり、佛領あり、デンマーク領がある。是は此諸国が此近接大陸を所有したことの紀念碑である。キユーバや、ポートリコも亦スペインがアメリカに大領地を有して居たことを語つて居る。斯くの如く海中の孤島は、面積が小さくして位置がた程大切でなくば、人の注目を免れ、何時までも同じ持主の手にあることが出来る。然し兵略上、商業上新に其価値を生じて来ると、其現状を維持することは出来なくなる。スエズ運河の開鑿は、英国をしてキプロスに着眼せしめた。パナマ運河事業は、合衆国をしてデンマーク領諸島の買收に着手せしめた。

島の持主の変更は、内海の場合に頻繁で、外海の場合には左程でもない様である。例へはシェトランド、フェル、イスランド、カナリア、マデゲイラ、ケープ、ヴード、アゾーア、セント、ヘレナ、アッセンション、

ハワイ等の無事なる歴史を見る時は、思ひ半ばに過ぐるものがあるであらう。

以上述べた通りで、土地は其位置に依つて独立であることもあり、其面積に依つて独立であることもある。大なる島、殊に其位置が大陸の外辺である場合には、長く独立を保つ事が出来る様である。然し此独立を永久たらしめんとすれば、大陸の土地を加へて益々其面積を拡張して行かねばならぬ。大英国と日本とは、人格的にも、文明的にも、共に其近接本土の附属物であるに拘らず、其面積と其周囲の海とに依つて独立を維持してゐる。而して両国共其近隣の諸島を併せ、大陸にも其手を伸ばして面積を拡げつゝあることは人の知る所である。マダガスカルはアフリカとその人種が共通でないから、著しく隔離性を見へて居る。而して此事情は其面積の大なることに助けられて、今日までアフリカの政治史と殆んど無関係なることが出来た。アメリカの東岸に及ぼした土地占領慾は、此マダガスカル島に及ぶことが甚しくない。アラビヤ人、ポルトガル人、オランダ人、英国人等何れも島の一部に手を下したに過ぎぬ。此島の西岸の性質と言ひ、之に在する剛健なるマレー人の性質と言ひ、又此両陸を流るゝモザンビク潮流の性質と言ひ、共にアフリカ海岸より此島を征服せんとしても不成功に終らしむるのである。其面積の大なることは無尽蔵の富源を意味し、人の土地占領慾を唆るものであるが、又此大なる面積が占領の邪魔をする。之を以て一八九五年アフリカ大陸の分割が殆んど終了した時まで、佛国も此島には手を下すことが出来なかつたのである。

然るに東印度諸島は熱帯物産のある為め、久しく各国から着目せられ、遂に征服の厄に罹るに至つた。此場合には其面積の大なることが少しも占領の妨げにならず、ポルトガル人、オランダ人等に彼より此へ移る便宜を与へた様であるが、又他の一方から考へると、斯く面積の大なりしことゝ、熱帯地として白人の住居には不便なることが相待ち、欧洲人をして其有效なる政治的占領権を海岸以外には及ぼさしめない。ポルネ

オヤ、スマトラの如き大なる島には、尚内地に未探検の場所多く、是は土蕃の手に委せられて居る。

島国人民の歴史的発達を検すると、多少皆隔離の特性を帯びてゐないものはない。隔離は島民の発展にも便宜を与へるが、隔離が却つて島民の進歩を妨げることもある。何故アフリカの黒人は、経済上、文明上、濠洲及メラネシヤの黒人よりも進歩してゐるのである。鉄、牧畜、農業等の知識はアフリカ全土に伝つて居る。然るに濠洲は隔離されて居るので、其の土人は之を知るに由なかつたのである。然し又或程度の文明に達してゐる島民は、隔離の為に却つて其進歩を助けらるゝ事もある。是はその能力を他に妨げられずに伸ばすことが出来る為である。即ち国境に於て他と衝突したり、侵入軍の防害や侵掠を受けたりする恐れがないからである。然し隔離も極端のものでは却つて進歩を害するから、適度でなければならぬ。英国や日本の如くに大陸と接触し得る便宜を有するものではなくてはならぬ。アイルランドはより大なる島の蔭にあつて、大陸との交通を遮断せられてゐる。其遅々として進まざるも偶然ではない。

島は天然に保護せられたる地域であるから、弱者、戦敗者が之を避難所として求める場合が多い。斯くして歴史的運動の範囲内に引入れられるのである。此の原則は又動物界に於ても行はれて居る。即ち北大平洋の海豹はアメリカの海豹より遁れてベーリング海のプリビロフ諸島に其避難所を発見した。而して彼等が此所に集合し、此所に離居することゝなつた結果、合衆国政府は即ち之を保護すべきことゝなつた。勿論これは海豹の予想せる所ではなかつた。海牛は何れの所にも絶滅して、其最後のものが偶然にもベーリング海の一島に於て発見せられた。是れ亦孤島が此の動物を保護したからであらう。台湾は十三世紀中に始めて支那の移住者を迎へたが、彼等は即ち元の世祖の難を遁れて此処に避難したものであつた。次に一六四四年に支那の一将が其部下を率いて此処に移住したが、彼等は満洲朝廷に降るを欲せざるものであつた。一六三七年に

は、日本のキリスト教徒が此所に移住したが、彼等は其本国に於ける迫害を此島に避けたものであつた。アゾールス島は、一四三一年の再発見後幾許もなく、多数のフランダースの避難者を得た。其事情は恰もアイスランドが謀叛したノルウェー人に依つて植民されたと同様であつた。斯くの如くに、島を避難所とする者に対しては、海は一種安全の感を與へるものである。故に英国は其位置と、其自由政府との為に、壓制に苦しんだ者の好避難所であつた。ナントの勅令の取消後、此処にユーグノーの多数が避難したが、此の避難民は又英国人民の貴重な一要素となつた。

島は斯くの如き貴重の移住民によつて、其人口を豊富にせらるゝのであるが、避難所として適当の地理的条件は、又犯罪者の抑留場たるにも適当の条件である。是れ島は隔離を完全にし逃亡を困難又は不可能ならしめ取締を容易ならしむるからである。地中海の島にして、曾つて犯罪者抑留場たる歴史を有せざるものは一箇所もない。エーゲー海の諸群島などもも絶えずギリシヤから政治的流入を受けいれた。かのセント、ヘレナは面白い歴史を有つてゐる。其最初の住民といふのは、ポルトガルの罪人であつたが、彼等は此所に流された際、種子と家畜とを與へられた。然るに彼等は勤勉でそれより四年後、本国に帰へることを許された時分には、土地はよほど耕されてゐた。其の次の住民は、奴隷船が薪水を得んとして寄港したる際、脱船したる男女数人の奴隷であつた。彼等は次第に其の人口を増加し、労働し前住者の遺業を回復したが、二十年後に、ポルトガル人の為に追はれてしまつた。然し内幾人かは森林に隠れ、一五八八年には其の子孫が繁栄して居たといふことである。一八一五年より一八二一年まで、セントヘレナはナポレオンの監禁所であつたことは人の知る所である。

政治犯罪人、又は改悛の見込なき犯罪人はなるだけ交通不便な島に放つたのが各国の常例である。ナポレオンがエルバに流され、次いでセントヘレナに移されたのは言ふに及ばぬ。スペインでは其政治犯人ギニヤ

湾のフエルナンド、ポーロ、又はカナリア群島中のテネリッフに流すことにして居る。露国では最も危険な政治犯人は、最初之をラドが湖の一小島に放つ。こゝで大低は衰弱するが、若し然らざれば之を樺太に移す。米国の南北戦争の際には、フロリダ南端から百哩ばかり西方にあるドライ、トルツカス群島の一を最も危険な南軍方の監禁所とした。他はリンコーン大統領暗殺の三共犯者が禁錮されたのも此の島であつた。それからはるかに東南の方に当り、南米寄の所にサラ島といふ群島がある。仏国の最も悪るい者を禁錮する所で、就中、ザヤブル島といふのは、最も遠い海中に孤立し、五箇年の間、ドレイフスを収容した所である。此島の住民はドレイフスを除いては悉く癩病者であつた。真に是れ呪はれたる島である。

島はその所有物を隔離して能く之を保護する。斯くの如き保護力があるので島には割合に昔ながらの動物及植物が多く発見される。濠洲、タスマニヤ、ニユーギニヤ、マダガスカル等には未発達の動物が多い。

大西洋のカナリヤ島、大平洋のセレベス島等も、古代生物の博物館で、中には第三世紀中新世時代のものもあるといふことである。斯くの如き遺物は他の国では人の近づき得ない高山などにあるもので、セレベス、台湾及日本などにあるものは、アジア本土にあつては、唯ヒマラヤ山中に於てのみ発見せらるゝものである。

唯動物ばかりでなく、原始的の人類は島とか然らざれば山中にのみ発見せらるゝのである。南部アジアの原住民であつたらうと思はるゝ矮少国人は今日唯印度半島の山中か、アンダマン又はフイリッピン等に於て発見せらるゝのみである。然しフイリッピンにても大きな島の山中か、ホリロ、アラバット、ジヨマリック、其他の小島の外には存在しない。又黒龍江口の南、アジア海岸の先住民たりしアイヌは、今日たゞ北海道、樺太、千島等にのみ居住して居る。唯人間ばかりでなく、風俗習慣の原始的なものも島に於て保存されて居る場合が多い。

島には三十万一千方哩のニユーギニヤ、二十九万一千方哩のボルネオ

の如き大きなものもあるが、大きな島には頗る少数で、小さいのが普通である。島は世界の総地積の七分の一に過ぎぬ。而して其の数から云ふと、フイリッピン群島だけにても小島の数、九百を算する程である。さればい島の特徴は隔離であると共に、又小さいといふことである。この小さいといふ特徴は島国人民に現はれるもので、社会的、政治的、農業的発達が何れも早熟である。此の点に於て、島の価値は世界の幼稚時代に属することが解るであらう。然し島は斯く早熟するのと、それから又能く其の力を一方に集注し得るのとが相合して、小さな島が却つて大きな群島又は大陸を支配するに至ることが、古今共にたくさんの例証がある。

小さい島でも、政治的に優秀の地位を占めることは随分あることだが、この小面積といふことには、種々なる利不利が常に伴ふものである。利の方では強盗山賊といふやうなものがない。例を上ぐればギリシャ半島の如き久しくこれに悩まされたに拘はらず、小さなエーブー海諸島には、全くその形跡がなかつた。又牧羊事業などには小島は便利である。例を挙ぐれば、英国などのやうに狼が根絶されてゐたので大陸で牧羊するよりは、遥かに安全であつた。之に反して不利も少なからずあることである。即ち小島は大陸と遠隔すればするほど動植物が次第に減じて来る。其結果として人類の生活上に種々な影響が現はれる。例を挙げて言ふと、メラネシアは島も大きく、獣類も澤山あるので、狩猟が主な生産であるが、ポリネシアには、狩猟牧畜共に之を見ることは出来ぬ。随つてポリネシアには弓矢の如き態道具の使用が稀である。又小島には樹木が乏しいので、船を造るに非常の困難を感ぜねばならぬ。太平洋中に散布せる小さな珊瑚島では地質単調で、堅い石、殊に燧石がないので、日常の器具又は兵器は、木、骨、貝、又は鮫の骨などを以て間に合はせてゐる。

島の地理的制限は尚之に止らない。肥えたる沖積土層が大陸に比して非常に小さい。勿論沈澱物を以て成れる島もないではないが、大低は、

島と言へば、水中山脈の巓か、火口丘か、然らざれば陥落した高地と、火山的噴出との合併したのである。随つて耕作し得べき低地が乏しい。エーゲー海群島中にあつては、ナクソスだけが浸水的の平野を有つて居る。其他の島は急傾斜の海岸と、砂浜があるばかりである。日本の耕作地の面積は、今日其全面積の一割五分七厘と稱せられて居る。

島は斯く其面積に限りあり、其富源も亦乏しきに拘らず、比較的に人口の稠密なものである。之を同緯度、同構成、同地質の最近本土に比較しても、島の人口が却つて多いことは、決して珍らしくはない。勿論斯く稠密なる人口を有する島と相並んで、或は無人島さ或は牛羊だけの住する島のあることも決して否認は出来ぬ。濠洲と大洋洲とを以て成れる太平洋中の一大天地に就いてみると、島の面積が丁度陸地の総面積の一割五分に過ぎぬ。然し此中に居住する人口は、実に人口総数の四割四分を占めて居る。日本帝国は其耕地の少ないに拘らず、人口の密度は支那の約二倍、朝鮮の約三倍で、アジア大陸の諸國中之に及ぶものがな

い。然しハワイの人口割は日本よりも多く、一平方哩に五百八十七人の密度に達して居る。大英国の人口は一平方哩に四百五十三人で欧洲大陸中之を凌駕するものは、ベルギーあるのみであるが、ベルギーの人口でも、小さいチャンネル諸島のそれに譲らねばならぬ。それは前者に於ては一平方哩六百四十三人であるのに、後者に於ては一千二百五十四人であるからである。

経済的に考へると、右に説くが如き島の人口は過多と言つてもよいであらう。然し南洋にある小さい島などでは、他の小さい島に椰子樹を植え、漁場を設け、定期にこゝへ出稼することにして居る。単調な珊瑚島では、唯最も大きな生産力のある島にのみ人類は生息して居る。ボーモタと言ふ環状珊瑚島では、一八四〇年に於て、其人口が凡そ一万と算せられた。然し此中の半分はアナア島、一名チェインと言ふ一島にのみ住み其四分の一はガンビア島に住み、他の島は之を富源として用ひて居る。トンガ群島でも一八四〇年の総人口は二番で、其中の半分は、トンガ

タブに住み、ハパイ及びヴィラオに四十づゝ、他は殆んど住民を有せざるものである。スコットランドの北にあるオークネイ群島は總數九十で、其中二十七だけが人口を有し、四十は牛羊の牧場となつて居る。然るに此の群島中の最大なるポモナには一萬七千の人口があつて、一平方哩八十五人に當つて居る。シエツトランドも同様で島の總數一百の中、住民を有するは二十九である。而して此群島中の最大なるメインランドには一平方哩に五十三人の人口がある。此の密度はほ近接したるスコットランドの何処にも越えて居る。

島の人口が稠密である理由は他でもない。島は海陸両方の食物に依頼することが出来るからである。之に加ふるに、島は四面皆海で、広い大陸の漁業を、一點に集める傾がある。今日シエツトランドはスコットランドの鰊漁の本場であつて、其の人口の比較的稠密なのは、全く之に由来するのである。佛國は、サン、ピエアとミケロンとを以て、ニユーフアウンドランドの漁の輸出場として居るが、是れ即ち其の人口の稠密で

（一平方哩に七十人）且つ此蕞爾たる島の富んで居る理由である。斯くしてノルウエーのロフオデン群島でも、アイスランドでも、樺太でも、陸に於て失へる所を海に於て補つて居る。是がなかつたならば、充分に人口を支ふる事が出来ぬであらう。

之に加ふるに右述ぶる如き北地の島には潮流が気候を緩和し、余程人類をして之に生息し易からしめることも注意せねばならぬ。然し是れは北地にのみ限らず、熱帯地方にあつても同様である。バーミユーダーの繁栄にして且つ人口に富むは氣候温和、能く季節前に野菜や花を作ることが出来て、英米の市場を賑はし得るからである。英國西南部のシリー群島に二十人の人口があるのも、同様の氣候、同様の事業がある爲めである。

地中海の海岸諸國では、旱魃と極熱とが農作を害することが多いのに、小さい島々には斯くの如きことが少ない。是は雨量が必しも多い爲めではなく、春の豊かな露と、濃い霧とが野菜を活氣づける爲めである。

マルタが英國の守備兵を除いても、尚一平方哩に二十人の人口を有すると言ふのは即ち斯かる事情に由来して居る。

時としては、適順な気候が農業を助ける外、良好な位置が商業を助けて、島の人口を稠密にすることもある。然し又単に商業上良好の位置を有するばかりで、人口稠密な島もある。シロスはキレクーデス群島中で最も小さく、最も痩せた地であるが、エーゲー海中商業上の中心地で、ハームポリスは人口一萬七千を有し、群島中最大の都会である。

気候も土質も共に農業に適したる島では、耕作が夙に内包的な科学的のものとなり、以て次第に増加し行く人口の需要に應ずる事を許って居る。随って島民は海に食料を求めることにも熟練して居るが、之と同時に農業上にも発達して居ることは珍しくないことである。太平洋州に於ては、耕作は何処でも皆土民風ではあるが、トレが、フィイジー等の如き島々では非常な進歩を示して居る。是等の島々は気候も土質も、共に可もなく不可もなき有様で、労すれば労しただけの効果を治め得る土地である。ソサイチテイー島、サモア島の如きは、自然の供給潤沢の為め、農業は稍ゝ不振を免がれない。ギルバート群島の如き人口稠密な環状珊瑚島にあっては、非常の努力を以て耕作が実行されてゐる。即ち椰子には其根を粉砕した軽石を肥料として使用して居る。又里芋は溝を堀り、沼洲に近い所に之を植えて居るが、是は其渇ける根に、珊瑚砂を通して水の滲み込み来る様にしたものである。イースター島は自然の恵みを受けること、最も少き土地で、クックが此島に立寄った時には、全島一木もなく唯一艘の粗末な獨木舟の外には舟もなかったと言ふ事である。随って此島民は殆んど海から食料を得るに由なかったのであるが、而かも斯かる貧弱な島の貧乏な民は周到にして且つ好妙な耕作法に依り、其の乾き切った、磽确な土地を化して、バナナと甘蔗とを産する畑たらしめた。

ミクロネシアでは土地が小さい断片的なものばかりであるから、漁業が主なる生業となってゐる。而して農業、特に里芋の耕作は、ペリウス

の如き大なる島のみに限られて居る様である。西部メラネシヤの大きな島々では、農業は一体に振はない。ニユーギニヤの如きは、獣猟が多くの村々の生業であるから、土地の大部分は昔ながらの曠野で、僅かばかりの部分が耕やされて居るに過ぎない。メラネシアの小さい島々では、例へばニユー、ヘブリヂーズ、ニユーブリテン、及びソロモン群島などでは、高地に灌水準備を施し、所謂外延的農業を実行して居る。ニユーヘブリヂーズ及びバンクス島には一村々々特殊の花と特殊の香草とを持つて居る。其れから農業の最も発達したものは、之をフイジー島に於て見ることが出来る。此処では色の黒い、毛のちぢれた蠻人が、曽ては食人の陋習に耽つたのに、此点に於ては普通のヨーロツパ人と雁行して一歩も譲らない程の状態に達して居る。ドイツのアスパラガス耕作としても、フイジー人の甘蔗耕作以上に綿密であるとは言われぬ。而して此甘蔗は豫め手でほぐした土を堆積した塚に作つてある。其野菜の種類多く、品種の良好なことは驚くべきばかりで、其の反映は其島特有の精巧な

料理法に現れて居る。

農業や、漁業や、商業が、其國々の文明の程度で、食料を増殖して行くにしても、然し島の面積は限りあり、限りなく殖えて行く人口を支え行くことは出来ない。茲に於てか、島國民は、半島国民と同様、外国に移住して其処に植民するの傾向がある。此傾向は島民固有の可動性に依つて益々力づけられてゆく。ツキヂデス及びアリストテレスに據れば、クレテの王ミノは、キクレヂスに植民をしたと言ふことである。ギリシヤは其の有り餘れる人口を以てエーゲー諸海島及びイオニアン諸島に植民したと言ふことである。此他ギリシヤの歴史には尚幾多の実例がある。転じてマレー群島を見るに、マレーの各種族は、殆ど移民に関する伝説を有しないものはない程である。南部フイリツピンには多数のサマル、ロート族に属する回教徒が居るが、彼等は皆スマトラとマラツカ海峡諸島とから来たものである。斯くの如くにしてマレー移住の系統はポリネシヤより始めて、遙か遠方のイースター島まで、其の跡を見ることが

出来る。時としては、一時的に小島の住民が大島に移住することがある。セレベスの東南にあるブートン、ビスングク、及び其他の小島の住民が、過去二十五年の間に、セラム、ブル、アンボイナ、バンダ等の大きな島に沢山移住した。彼等は玉蜀黍、煙草、バナナ、椰子等の畑を開墾耕作し、二年の間働いて、利益を貯蓄しては帰国するを常とした。是等の耕作者は其外見に於ては野蛮人の如く、森林の禽獣同様に内気で、腰までは裸体の儘働いて居る。然し彼等は相当に大きい目的を抱いておるのである。

其国の文明の程度高く随つて其経済法が整つて居るとすれば、どうしても人口は稠密になる。然し又生活の程度が高いので、斯くの如き島では移住の必要を生じて来る。斯くの如くにして、日本は其鎖国の禁令を撤したる以後に、多くの移住民を海外に送り出した。特にハワイ、合衆国等に送り出したもの多く、近頃は又台湾朝鮮等の新領土へ植民をして居る。マルタ島人も亦多く島外に膨脹し、今日では地中海沿岸の諸国、到る所に於て、彼等が園丁、水夫、商人等となつて活動して居るのが見受けられる。マジョルカや、尚それよりも一層不毛なキクレデス島に就いても同様の事実がある。イタリーのカプリ島人も、多数南米に移住するが、彼等は大抵其故郷に帰へつて来る。アイスランド島民も亦寂寞不毛の島を去り、西部カナダに移住して倹約の民となることが珍らしくない。

島では斯く移民に依つて其過剰人口を調節するが、之と同時に又他の方法で自然的増加も制限する様にして居る。是は人口過剰に達したる不毛の高地などに於ても往々見る所である。之に就いてレーナルと言ふ仏国の一僧侶は、一七九五年の頃、夙に一般の島国民に関して言つたことがある。曰く「人口増加を防止する多くの奇妙な制度は島国民間に起源して居る。人肉嗜食、去勢、女陰閉塞、晩婚、童貞、独身奨励、未成年にして子を産める女子の刑罰、曰く何、曰く何」と。マルサスも亦其人口論に於て此言を評論し、而して島の住民数の制限は極めて狭く、極め

て明白で、何人も之を否認が出来ぬ。時に小島においては然りと言つてゐる。

島では、不毛の高地と同様飢饉が起り易いので、結婚は一妻多夫主義に流れ易い。一四〇二年カナリヤ島征服時代には、同島の或部分に此の一妻多夫主義が行はれて居た。又大洋洲でも今現に実行されてゐる。多妻主義は酋長及び財産家の権利である。タヒチ島では女が少くないので、一妻多夫主義を生じ、四五人の男子を以て、一婦人を所有して居る。ハワイでも、昔夫がその妻に情夫を持つことを黙許し、一種の一妻多夫主義を実行してゐた時代があつた。ロバート、ルイス、スチヴンソンの言ふところに據ると、マークエサス群島でも之と同様の風習があつたそうで、斯くの如き情夫のことを土言ではピキオと稱して居た。イースター島に於ても一妻多夫主義が行はれ男子の数婦人に越え、而して子供は、至つて乏しかつたと、昔此島を訪問した人の記録に残つて居る。其他、実例を求めるならば、尚沢山あつて、皆島と婦人の欠乏と、人口縮少の

必要とが相待んで、一妻多夫主義を生ずることを証明するものがある。大洋洲に於て斯くの如くに男女数の不平均なる理由は、女児虐殺、早産、過労、貧窮、淫奔、男子の乱暴等が主なるものである。又飢饉の恐れがあるので人口縮少を断行せねばならぬから、大洋洲では嬰児殺しと堕胎とは普く広まつて居る。ニユー、ヘブイデスとソロモン群島との或部分では、生れる子供を悉く殺して、其変りを随意に買入れる家族もある。フイジー島では妊娠した処女があれば之を絞り殺し、又之に関係した男子をも殺してしまう。婦人は、避妊のため水薬を飲む風習もある。而してもしそれが成功しなかつたら大低之を堕胎するか、然らざれば生後之を殺してしまう。ヴアヌア、レブ島では、其嬰児の二分の一乃至三分の二を殺すのが常である。而して嬰児殺戮を商売にして居る者もある程で、其殺さるゝ者と言へば、皆女児である。而かもかゝる虐待に罹ることを免れて生残つた女児は、馬鹿々々しい程に可愛がらるゝが、之は他のメラネシヤ及ポリネシヤ諸島に於ても同様である。これらは勿論必要

に迫られてすることには相違ないが、風俗上、道徳上大害のあることは言ふまでもない。現にハワイの如き未だキリスト教を知らざりし以前には、胎児、若しく嬰児、殊に女児の三分の二を親自ら之を殺して居たが、それが為、親子の情愛うすく、親は自分の子供を人に貸して恬として恥ざるに至った。又嬰児の死亡率増加し、道徳頽廃し、家族の基礎不安全になり果て、居たと言ふことである。

食物の乏しい結果として、人の生命を軽んずることは、太洋洲全体を通じての風俗である。ハワイの土人は、好人物なるに拘らず、老者、弱者、病者、狂者等に対しては残忍であった。彼等は石で打殺された事もあれば、又餓死する儘にさせたこともある。フイジー島にては、老人が虐待をうけ、或ひは老衰に陥り、或は病気に罹ることがあれば其子は之を殺すか、然らざれば老人自ら其の子に頼んで己を殺させる。ニユー、ヘブリデスのヴエートでは、老人は生きながら葬られ、其来世に移ることを祭典にて祝ふことになつて居る。

太洋洲では人の生命を頗る軽視して居る。斯う考へなくては同島に行はるゝ習慣は解釈はつかぬものが多い。同島では宗教上の宴会又は葬儀の時には、人身を犠牲にするが是れは其の背後に人口過剰と云ふ一大事が伏在しておるのである。又人肉を食ふといふことは、普く太洋洲に拡がつて居る風俗で、その原因はスチヴンソンの言ふところに依ると、一は飢饉の恐れあること、一は是等の島では動物乏しく鳥と犬と豚との外は肉食の機会なきが為である。トンガ群島には、人肉を食ふ習慣はないが、飢饉の時にはそれが著しくなるといふ事である。テラ、デル、フエゴでも冬期の飢饉時には人肉を食ひ、其近傍のチヨノス群島でも又此習慣がある。

以上は島生活の暗黒面である。斯くして人口過剰は嬰児殺しの原因ともなるが、又農業、工業及び商業の発達の原因ともなる。移民、植民などをなして、世界に文明を普及するのも、又此為である。

第五節　平野・草原と沙漠

人類地理学は、陸地の形と高低とを論ずるのが本務である。海床の如きは是唯間接に人生に影響するに過ぎぬ。然らば、海床の高低は、間接にもせよ、如何様に人生に影響するかと言ふに、第一は海岸の形状如何に影響する。第二に潮が河口を洗ひ流すに際し其働を助ける。第三に漁業の如き多くの海岸生活の條件を左右するものである。之に加ふるに、海床をなすものは、海底電線敷設の問題とも関係があつて、此方面から言ふと、海床は又商業上、政治上の意味をも帯びて居る。北大西洋には「電線高原」と言ふ處があつて三條の海底線が交叉して居るが、是れ即ち海底電線と海底起伏との関係を指示するものである。

加之、海底の起伏は地球上に於ける人類の分布にも関係がある。即ち今日の浅海は、地質学上の近代に尚陸地であつて、原人は大陸より大陸

に移るに之を徒歩して行つたのかも知れぬ。米國土人はアジア人種であると言ふ説もあるが、ベーリングの浅瀬は第三紀中新世時代に陸地であつたかどうかは、此説に大関係のあるものである。其他此類のことは尚沢山実例を挙げることが出来る。

大陸の海抜高低表を見ると、國民の平均生活状態が地勢の起伏に関係あることを知ることが出来る。アジアの平均海抜は一千十米であると言ふ。さすればアジアは高地の多い地である。之に反して、ヨーロッパは僅に三百三十米であると言ひ、濠洲に至つては更にそれよりも低く、三百十米に過ぎぬ。是れ即ち共に低地に富めることを示して居る。然し斯かる数字だけでは、人類地理学の道理は明かにならぬ。否斯かる数字は却つて事実を隠蔽するの恐れがある。例へばアフリカの平均海抜は六百六十米でヨーロッパよりは遥に高いことを示して居る。然しアフリカは高地性の國で、其處にある低地や山が言ふに足らぬものであることは、此数字では分らない。之に反して、南北両米の平均海抜は略々アメリカと同様で六百五十米である。然し米國には広大なる低地があつて、之と密接して高地があるが、是も此数字では分らない。要するに平均海抜数は即ち地勢の起伏を示すには足りないのである。随つて解剖的である所の人類地理学には余り必要でない。唯平均海抜数は地形学には必要のものである。

人類地理学者は、地勢に如何なる高低があるかを問ふものでない。其向ふ所は、高低が如何様の分布になつて居るかと言ふことである。即ちアジアの様に、高地は高地、低地は低地と集団を成して居るのであるか、或は西部ヨーロッパに於ける如く交互に連続して居るのであるか。其高地より低地に移るには、南米に於ける如く急であるか、合衆國に於ける如く緩かであるか。之を研究するのが即ち人類地理学の任である。抑々土地の構造が單純で且つ広い処では、其地の歴史的運動も亦單純で広いものになる。是は其土地が人民を集めて大なる群団を作らせ、之をして広大な活動をなさしむることである。兎角、低地の民、殊に草原地の遊牧民

が、山の谷間々々に分住人民に対し、歴史的に優勝の地位を占むるは斯くの如き理由に依るのである。此実例は小規模ながら、之を大英國に於て見ることが出来る。即ちスコットランドには、山あり、谷あり、海峡あり、入江ありて、高地人と低地人と、種族部族が分かたれて居るので、其歴史は、混乱し離れ々々になつて居る。之に反して、イングランドの地勢は稍々統一して居るので、其歴史も滑かな統一した筋道を辿つて居る。

山の起伏は大規模となつて大陸にも現はれて居る。即ち一國に高低様々の土地のあるやうに、大陸にも亦低地あり、高地あり、高原あり、山あることは人の知る所である。就中、低地は灌漑の便さへ具はつて居れば人種的にも、商業的にも必ず発達するものである。低地にあつては、總ての歴史的運動を妨げるものは殆どない。若し是有りとすれば、唯其小流に集る所の水と其肥えたる土壌に養はれし山林あるのみである。人類地理学的に言へば、山と高地の谷間とは、抑留的のもの、拘束的のものである。之に反して低地は、生活状態も大差なく、氣候も大低は單調で、自然の障壁はなく、交際は実行し易い。或は山に圍まれ、或は沙漠に包まれた小さい隔離された低地は、小アジアのエーゲー海岸でもナイルの谷間でも、兎角早熟的に発達し、長く歴史的價値を維持して行くことが出来ない。然し斯くの如き他の特徴は、其低地と点には存せずして、寧ろ其沙漠、其山、其海を限界とする点に存するのである。之に反して、廣大なる低地、広大なる平原が特殊の歴史的價値を有するのは、其拡大茫漠無際涯の平地と言ふ点に存するのである。

平原は總ての歴史的運動の発源地でもあり、又占領地でもある。而して平原は、農耕、商業、交通等に適するので、隨って定住者の住居地として最も好都合の處である。斯くして世界中、人口の密度の非常に高い地は支那の低地、印度の沖積土平原、ナポリ平原地、ポー河流域平原地、其他佛、獨、オランダ、ベルギー、英國、スコットランド等の諸平原地に之を発見し得るので、其人口は何れも一平方哩に三百八十五人以上に及

んで居る。斯くの如き密度は、高地にあつては、唯、耕作し得べき低地に接近し、且つ鉱業の盛なる地に於てのみ之を発見し得るのである。餘りに廣大なる平地は早く文明の発達するには適しない。平坦で、單調な土地では生存も自ら單調になり、偏頗になつて、高地又は山を以て之を補ふ必要が生ずるからである。ミゾリーの低地の最初の植民等に取つては、オザーク高原が実に大恩恵であつた。是れ此高地の小渓流が、彼等に木挽と粉挽との水力を供給したからである。エヂプトの如きも平地で、樹木に乏しく、船材は之をレバノン山の供給に俟たねばならなかつた。銅、孔雀石、土耳其玉、瑠璃等の諸鉱物に至つては、全部之をシナイ山地方に求めたものであつた。

平原は特に地勢に変化が乏しいのと、人民の氣質が平板になると云ふ缺点を有して居る。随つて平地國の人は其天稟豊かならず、人種の異同が平均されて仕舞つて、進歩発達の能力も自ら消滅する様である。之に反して、地勢に変化多きこと、[illegible]ートの如き、大英國の如き個性の発

達が著しい。ヨーロッパの西半部も亦之と同様の特徴を有して居るけれども、ヨーロッパの東半部にはポーランドや、ロシアの平原があつて、此地方の生活は何れの点から見ても單調である。此結果は此地方の人種に現れ、カルパシアン連山の北部と東部とに於て、其頭形略〻一定し、唯僅にリスアニヤ及びクリミヤの如き隔離せられたる地方に特殊の種族を見るのである。

斯くの如き劃一は、小さい平原地にあつては却つて有利で、それが為め、文明の早期発達をも来すことになる。其理由は其隣りに反対の環境が存在するからである。然し露國の如き大なる平原地の國民生活にては利益はない。即ち露國では万事変化に乏しい。國語は二の方言を有するに過ぎぬ。一は北部の大露人の方言で、一は南部草原地の小露人の方言である。他の欧洲諸國語は、是よりも遙に小地域内に限られては居るが、是よりも遙に変化に富んで居る。カザンやアーカンゼルのロシア人は、能くリガやペテログラードのロシア人と話を交へることが出来るのに、

ババリヤ、又はスワビヤのドイツ人は、プロシヤ人、又はメクレンブルグ人と会話の出来ないのも斯かる理由の為めである。ドイツは数十年前に國民服と言ふものが百種以上に達して居た。然し面積に於て、それに六倍した大露國には唯一種の國民服があるだけで、僅に十数点の小異を見るのみであつた。レルウアー・ボーリューは嘗て露國の此單調に関して次の如く言つたことがある。

「都市も皆同一である。百姓も其容貌、習慣、生活法に於て同一である。何れの國にも、是程相互に相似た人民は居ない。何れの國も、是ほど政治的に單純なものはない。國民も亦此國勢に似せて作られて居る。即ち彼等の住する平原と同じ畫を示して居る。否寧ろ同じ單調と言つた方が、よいであらう。」

低地若し平坦で且つ無特色であれば、それだけ少しでも変化を與ふるものが大切である。例へば極く穏かな隆起でも、其他何でも、湖水でも、森でも、沼沢でも、悉く用をなすものである。殊に著しきは土質の

相違で、是は其居住民を分化する作用を有して居る。オランダでは、フリース族のものは、主として西部及び西北部の粘土地及び低い沼沢地に住み、サクソン族のものが、東部の洪積地に住み、フランク族のものが南部の粘土地及び洪積地に住んで居る。それから此諸種族は互に相異なれる方言、建築法、種族的特徴、衣服、習慣等を維持して居る。米國の南部大西洋沿岸諸洲は、起伏の乏しい処であるが、其土質は変化に富んで居る。即ちジョージアでは海岸の沖積地は米と海島綿と言ふ一種の棉との耕作地として用ひられて居る。随つて其住民の六割は黒人である。然るに此沖積地に並行して一帯の砂地がある。此地方では、黒人の比例が減じて二割乃至三割となつて居る。それから此砂地の隣には一の肥えたる地帯があつて、此處では主として綿を耕作するから、黒人は住民の三割五分乃至六割に達して居る。アラバヤでも、同様の地帯が北から南へ並んで居るので、人民の分布も亦同様になつて居る。即ち同洲北境の土質は石灰質で、従つて穀物帯である。されば此地方では、黒人が住民

の三割五分乃至六割を占めて居る。次は鉱物帯で、此処は洲中最も人口稠密の地域であるに拘らず、黒人は一割七分に過ぎない。是より更に南には土質の肥えた綿の地帯があつて、黒人は住民の六割である。其次が低い杉木帯の地で、此處は土質も大いに劣り、従つて黒人の居住する比例も非常に低い、一望際涯なき廣野は、將に発達せんとする人民には好都合でないが、成熟に達したる人民には、大面積を支配する能力を與ふるものである。されば政治的膨脹とも言へるであらう。露人が欧亜の低地を横断して、東方に発展したのは其の一例である。之と相比すべきものは、米人がミシシッピー流域の平原及び草原を横断して、忽ちの間に其の植民地を拡張したること、及びハンガリー人がダニューブ平原地をアルプス山麓より、カルパチヤ分水線まで征服せしこと是である。佛國の政治的発展と集中との中心となつたものは、セイヌ及びロアールの相相連絡したる低地である。獨逸の北部低地は殆ど皆プロシャに併呑せられたが、是れ即ち今日該帝國全面積の三分の二ばかりに當つてゐる。

斯くの如くにして低き平原地が若し適當の雨量をだに有すれば、是が即ち最初には原始的遊牧民に非常の便宜を與へる。それから次には彼等をして定住生活を営ましめ、田圃を開かせ、都市を建設させ、益々発展せしむる基となるものである。扨、此平原地より転じて次には乾燥した草原地及び沙漠のことを説かう。抑々斯くの如き地に住める人民は、住民を定めると言ふことが出来ぬ。絶えず移動して居らねばならぬ。然し人民は移動するが、其文明程度は更に移動しない。其処では満目、日に焦された草原であり、水に乏しい荒蕪地であつて、固有の文明を発生させない。其處では牛羊を、増殖させる外に、富を集める途なく、且つ之を増殖させるにさへ、食料に限りがあつて、思ふ通りには実行が出来ないのである。

草原は舊世界にあつては、牛、羊、山羊、驢馬、馬、駱駝、犛牛等が飼ひ馴らさるゝに至り、初めて其歴史的價値を発揮した。されば、草原をして價値あらしめんとすれば、其處に先づ飼ひ馴さるべき動物がなけ

ればならぬ。又其住民の知力又は環境が其職業を自然的程度より人為的程度に転出せしむるだけに進んで居なければならぬ。扨、斯くの如き事情の具はった草原が、何處かにあったかと言ふに、先づ濠洲には此種の動物がなかった。北米には馴鹿と野牛とがあり、南米にはガナゴ、ラマアルパカ等の駱駝族があったが、此中、アンデス高地で飼ひ馴らされ得たものは、唯最後の二種だけであった。それも一万呎乃至一万四千呎の高處たるを要し、而して斯かる高地では牧草に限りがあるので、原始時代の南米では物畜は農業の附属物であり、到底草原の遊牧業の基礎となる事が出来なかった。然るに西班牙人が、馬と牛とを南米に輸入するにあたり、此無樹草原地に住する土蕃及び雑種人は本職の遊牧民となって仕舞った。此種族を呼んで通常ラネニス及び、ゴーチヨスと言って居るが、是等は騎馬種族であって投槍だの輪索だの、ボラだのと言ふ捕獣器を用ひ、肉食を事とし、時としては、昔の匈奴族の様に馬肉を食ひ近代のキルデス、中古の韃靼族の様に皮製の天幕に住し、馬革を縫ひ合せた

衣服を着し、アルゼンチンの辺境を脅かしては白人植民地から馬、羊、牛などを奪ひ取り、斯くして遊牧民の奪掠的本能を悉く具有して居た。

人を駆って遊牧的生活を送らしむるものは、唯乾燥ばかりではない。空気も亦同じ様な力を有して居る。即ち気候が若し極寒なれば、其處に苔原が出来る。故にノルウェーのラップ地方から、東部シベリヤのチユクチ人の居住地に至るまで、苔原上に馴鹿を牧し、兼ねて食料を獲る為め漁獵を事とする人種が、群を成して住って居る。此馴鹿を牧するチユクチ人は、牧場の續く限り、其半島内に住んで居たが、今では、段々西進し、レナ河畔のヤクツクまでも拡がって居る。東部シベリヤのユリマ河地方のオロコン族は是れ亦主として馴鹿を牧して居るが頗ぶる貧乏である。即ち有福と称するものが四十頭から百頭を有するのみで、大富豪と称するものでも七百頭を有するに過ぎぬ。更に其西方には、サヒイド族、ジリアン族等が居るが是等は其多数の獸群を率ゐ、夏は北進してヤルマル半島、及びヴアイガツツ島に至り、冬は南下することにして居る。

而して是等の種族は、一家四人を支ふるに、五十頭の馴鹿を要すとのことであるが、此五十頭の馴鹿を養ふには、四方哩余の苔原牧場を要すと言ふことで、為めに彼等は永久散住せねばならず、到底歴史的重要の地に達する期がないのである。露国のラップ種族も亦半遊牧生活を送って居るが、冬は森林のあるコラ半島に赴き、夏は漁魚の出来る海岸の苔原地へと移って行く。而して冬期中は沙漠の遊牧民と同様其手薄い収入を補ふ為め、貨物を馴鹿に載せて之を運んだり、郵便の手助をして居る。

されば極北の遊牧民は到底歴史的の要地には達し得ないが草原地の遊牧民はさうでない。其位置中央にあるを以て能く相當の活動をなし得るので、北緯十度から六十度の間を対角線的にアフリカの太西洋から、アジアの太平洋まで、旧世界を横断せる一帯の沙漠地及び草原地があるが、是は熱帯と温帯とにある沃地、沖積地、沿岸、平原等にある旧い文明國と時々接近し、又は之を取囲んで居る。斯くの如き乾燥地に住する牧羊者は、落着きがなく、移動を好み束縛を受けないから、自分の育った國

に長くは居つかず絶えず、自國よりも優良なる隣國に侵入し、其田園や都会を横領した。而して其文明を攪乱したには相違ないが、之と同時に亦之を採用もした。斯くして乾燥地と濕潤地、瘠地と沃地とが相接触して居る為に、此両者の歴史は相離るべからざるに至った。

草原地居住の人民の生活法を見ると、悉く移動と言ふ特徴を帯びて居る。其家屋の如きカルマック人、キルギス人の如くに、獣皮か毛氈の天幕か然らざれば近代のボーア、昔のスクテヤ人の如くに天幕車である。其道具の如きも出来るだけ之を軽減して居る。東部シベリヤのオロンチヨンと言ふ遊牧民の如き、其天幕内に一の家具を備へて居ない。又其僅かばかりの衣服と器具とを手綺麗に縛りつけ、命令一下何時でも出発の出来る用意を整へて居る。聖書に記載せられたるアブラハムや、ロトの如き、又斯くの如き生活を送って居たのであらう。近代では、一八三六年に、南アフリカのボーア人は英國に服従するを欲せず、其住地を捨てゝ一大移住を実行し、彼等は他に移ったのである。露國のコサックも亦移

動的の種族で政府の圧倒に堪ふる能はざるに至れば、即ち其土地を捨てて移住することを意としない。一八七八年の夏、シベリヤでは凡そ九千人のキルギス族を失つた。彼等はセミパラチンスクを去つて、蒙古に移つたのである。

是等の遊牧民の移動は、気候に支配せらるゝことが多い。即ち蒙古族は皆冬期水の多い時は、一處に集まつて住居し、夏期は水を求めて散住する。或は平原を捨てゝ高地に暑を避くるものもある。露領トルキスタンに居る。キルギス族の如きは、夏はアルタイ連山の半腹又は谷間に天幕を張つて群居するが、其周囲に羊、山羊、駱駝、馬、牛などの群をなして居るのは全く壮観である。パミールも夏期は中央アジアの遊牧民の群居場となつて居る。アラビヤの沙漠でも雨期には牧草の生ずることがある。此時にはベドウイン族が此處に集まつて牧畜する。然し続いて旱魃が来ると、イーメン、シリヤ、パレスチナ等の山中に赴き、或はナイルや、ユーフラトの流域に移るものもある。北部サハラのアラビヤ人は少しばかりの羊と山羊とを率ゐて、夏はアトラス連山の半腹に行き、冬は沙漠の辺境に生ずる僅かばかりの針金の様な草を求めて移動する。然るに水や草の供給が不足するか、或は牛、羊の群が殖えて是までの牧場では之を支へることが出来なくなると、彼等は往々其隣地に侵入して行く。又牛羊が斃死したり、食物に不足したりする場合には、彼等は直に剽盗と変ずる。彼等は強盗を恥とは思はない。否寧ろ之を名誉と心得て居る。アラビヤ人は窃盗と商業とに等しく其身を委ねて居るとはプリニユースの言つた所である。彼等は商隊を襲ひ之を捕へて、償金を貪ぼることもあるが、又案内料を取つて、沙漠の安全な案内者となることもある。露領アジアの草原に住するトルコマン種族の如きは、元は其隣地特にペルシヤのコラサンの北部に対し徴発を行つた。又ステツク種族はヘラツト、キヴア、メルボ、ボハラ等の辺境を侵して、大害を与へたが、露人の為に漸次征服されて仕舞つた。テツク種族は是等地方の人民を悉く滅ぼして仕舞ひ、深くペルシヤ領に侵入し、無数の家族を捕へて、

之を奴隷に賣り渡したりのであつた。トルコマン種族、キルギス種族等も、一八七三年以前には、商隊を襲撃し、旅人を引攫つて之をボハラ又はサマルカンドの奴隷市場に賣渡した。

侵掠を受けた國が若し近代的の文明國であれば、直に辺境居住民を以て騎馬巡査隊を組織し以て今後の侵掠に備へるのが其常である。例へば英国はボルス、ソコト、エジプトのスーダン等に於て之を実行した。又露国は其境を進むるに從ひ、騎馬隊を組織して之に守備の任を兼ねしめた。更に古代の国々の実行した所を見ると、各〻其方法を異にした様である。而して遊牧民は其牛羊を率ゐて進来するものであつたから、障害物を設けて置きさへすれば、是で事足る場合も隨分あつた様である。斯くの如き例は枚挙に遑なき程であるが、エジプトのセソストリスは、アラビヤ人を防ぐ柵としてペルシウムよりへリオポリスまで一千五百スタヂヤ（一スタヂヤは六百呎）の長城を作つたことがある。昔のカルタゴ人も亦ヌミヂヤの遊牧民の掠奪を防ぐ目的で、濠を掘つたこともある。

昔のアッシリヤ人も亦沙漠のミード種族の侵入に対抗する為め、ユーフラトの平野を横断して障壁を造つたことがある。然し何と言つても、此種の最も著しい実例は、支那の萬里の長城であらう。

遊牧民は之を経済的に言へば牧者である。之を政治的に言へば征服者である。而して彌久的に彼等は兵士である。彼等が牧場を争ひ井水を争つたことは、既にアブラハム、ロト、イサクの歴史にも記載せられて人の知る所で、此争たるや、対内的にも、亦対外的にも行はれたものである。彼等は其牧場を守るの必要上絶えず軍隊組織を解くことは出来ぬ。國民卽ち静的軍隊で、軍隊卽ち自己運送的の兵站部である。彼等は常に騎乗し、偵察し、武器を使用し、困苦と戦ふので、其一人として兵士ならぬはない。彼等の騎兵、駱駝兵は、共に其進撃に速力と勇気とを添へ、且つ突然の攻撃と、神速の退却をなすを得せしむるものである。昔はダニューブの草原に騎馬と射術とに妙を得たるスクテヤ人と言ふ遊牧民があつた。彼等に関してツユキヂデースは斯う言つて居る。曰く「スク

テヤ人若し一致したなら彼等と比し得べき國民一もなく、彼等に抵抗し得る國民一もない。余はヨーロッパに於て言ふのみではなく、アジアに於てさへも、一もないと言ふのである。」と、ヘロドタス亦此意見に同意して居る。実際、遊牧民の生活は一として彼等の勇気を養ふ種ならぬはない。沙漠で独立的、冒険的の生活を營む結果、アラビヤ人は人類中の最も勇敢なるものとなつた。然しアラビア人は皆強いのではない。エジプトや、回教的スペインに居住せるアラビヤ人は農業に従事し、其好戦性は大抵銷磨し去つて居るのである。

斯くの如くして地理的の状況が直接に遊牧民に移動の習慣を與へ、且つ又間接には軍隊的、政治的組織を結ぶことを教へた。世界の遊牧的人種が政治的團結をなすの大任務を果し得るに至れるは、全く茲に原因するのである。抑々文明進歩の背後には勿論農業が存在して居る。然し農業には勇気や、可能性や、冒険性や政治的大見識などは伴はない。而も遊牧民は悉く之を有するのである。されば若し平和な農民性に権威ある

遊牧民性を併せ、之を打つて一丸としたならば、野蛮族及び半開種族の為めに堅固な政府を作ることが出来るであらう。暗黒アフリカの政治的に懦弱な人民は国家を建てだけの硬骨を戦勝者たる遊牧民より得て来たのであつた。スーダンの諸國は、何れも皆北部の沙漠に侵入したハム族セム族等の遊牧民の力で出来上つたのである。東アフリカのガラ族及びワフマ族等は、ウガンダ、キッタラ、カラグ、ウジンザの如き比較的堅固な國家を赤道地方に建設した。有史時代に入つてからは、アリアン系属たる多くの種族が欧洲及び南方アジアに発展したが、其中にあつても、遊牧種族が独り断然として頭角を露はして居た。其理由は、此時代には一望際涯なき草原地にあらざれば、到底移住と戦勝の為め人数を集中すると言ふことは出来なかつたからである。地勢が不平均で大なる山林のある地方は唯小さな孤立した民を住はしむるに足るのみ、斯くの如き民には共同運動と言ふ様なことは到底考へも及ばず実行も出来なかつたのである。

アリアン種族等は如何にして迅速に其征服の功を奏し得たか、如何にして其征服の範囲を拡げたかと言ふに、是は畢竟其征服地に於ける有力階級だけを排斥し、他の一般人民に対しては殆と手を下さなかつたからである。斯くの如くにして彼等は広い面積の上に薄く拡がつたのである。斯かる戦勝の結果が果して如何程継続するかと言ふに、其長短は遊牧民の到達した社会的進化の程度次第であつた。成吉斯汗や帖木兒は王者の上に王を立てる仕組で、其征服地を組織し、其政治は他方〱の君主に委ね、租税徴集者として年々恰も遊牧的掠奪者の様に国内を駆け廻らせた。トルコ人は今日もヨーロッパ内に立てこもり、其租税を徴集する方法は奪掠的である。而して征服者と被征服者とで其領地内で融和して居るのではないが、其広い面積内で雑多の種族が政治的には結合して居る。エジプトの征服者ヒクソス族はナイルの流域が幾多の侯國に分れ、之に一々國王のあるを見た。然るに此遊牧的戦勝者は、其政権を掌握し、而して有力な中央集権的政府を建てた。是れ即ちエジプト第十八王朝の強

大と栄誉との基礎となつたのである。韃靼族は一二七九年に、満洲族は一六六四年に支那を征服し其境を拡め、自ら治者の地位に立つて國を支配したが當時の國家の秩序は元の儘差置き、更に之に干渉を試みることをしなかつた。

遊牧的勝戦者の歴史を見るに、大抵は氣候の加減と、低地の奢侈な風とにより懦弱になる様である。而して其好戦性を失ふに至つたものである。スーダンの諸國中、フェラタ族の國家を建てたものは即ち其一例である。又或は同じ草原より侵入したる他の戦勝者に其位を奪はるゝに至つたものもある。印度のアリアン諸王が蒙古の皇帝に其位を黜せられしは、即ち其一例である。或は又一旦征服した其臣民の為めに放逐せられたものもある。韃靼族が露国より放逐され、ムーア族がスペインより放逐され、トルコ人がダニューブ流域から放逐されたのは、即ち其実例である。

遊牧民は或は敵の来襲に備へる場合或は大征服を行はんとする場合に

は、互に一致の行動を取るものである。然し斯くの如き一致は、其性質上一時的のものでなければならぬ。彼等は水草の供給上どうしても小群をなして居住するを便として居る。昔はアブラハムとロトが斯かる事情の為め、遂に住所を別にした。ヤマブとエサウとが分れたのも之が為である。キルギス族の如きは、非常の好季節に於て、非常によい牧場に居る時の外は、通常一群の天幕数は、五又は六に止まると言ふことである。バースの言ふ所に據ると、サハラの沃地の村落は假令商隊の通路に當り、非常に枢要の位置を占めて居ても、尚頗る小さいと言ふことである。斯く小群をなして居住するの結果、遊牧民は非常に強い独立の精神を持して居る。ベドウイン種族の如きは一人々々が自由で其酋長の權力は名義に止まり、又多く其人格次第である昔のアラビヤ人が雄辯であつたと言ふのも、圧制を嫌ふ此人民を説得する必要から生じて来たものであらう。是はサハラのチッブス族や、露領アジアのトルコマン族の間には、政治的組織が著しく缺けて居る。「吾等は首長なき人民である。」とは彼等の自ら言ふ所で此処でも首長は虚器を擁して居るに過ぎぬ。彼等は唯習慣と先例とに依つて支配せられて居るのである。斯くの如き遊牧民も一時之を一致させて有力な軍隊を作られぬではないが、然し其一致たるや頗る短命である。

此自由の精神盛なる遊牧民を服従せしむると言ふは余程の難事である。曾てゴードンはスーダンの遊牧民を服従させたことがある。然るに是から三十年を経て一八九八年に至り、彼等は回教の導師を戴いて其盟主となし、假令一時的とは言へ、有力な結合をなして反旗を飜した。之が為キッケナーはゴードンの三十年前になせる所を再び繰返さざるべからざるに至つた。アラビヤ人は今日でも自由独立で、トルコの主權と言ふは單に名義に過ぎない。否、之を怒らせては危險だし、之を攻撃するに困難であるから、之と同盟を結んで居ると同然である。今日トルコに服従して居るのは、海岸の諸地、即ちヘジヤズ、イーメン、ハサ等であつて、内地と東南海岸との各種族は悉く独立して居る。露国は露領アジアのト

ルコマン種族を服従せしめんとして策の施すべきなく、唯絶滅法に依つて目的を達した。支那の如きも、蒙古及びトルキスタンの遊牧民に対しては唯名義だけの統治を以て甘んじて居る。

遊牧生活は何等かの方法で之を根絶して仕舞はねばならぬ。之に就いて佛國がサワラの遊牧民に対して執つて居る政策は、多くの井戸を掘つて、多くの沃地を作り、彼等に繁茂した椰子林を与へる方法である。露國の執つて居る政策は、遊牧民を圧迫して彼等を益々狭い地域に追ひ込め、彼等をして遂に其土地内で是非とも引水と耕作とに従事させる方法である。支那の執つて居る政策は、其耕地の境を益々推し拡めて、彼等の牧場を蠶食し、彼等をして次第々々に劣等な牧場へと移らしむる方法である。

ヨーロッパでは今日遊牧生活は益々減少し、裏海の凹地で、全く農耕には適しない三十万方哩の曠野に、カルマツク族、キルギス族などを見るのである。アジアでも亦益々減少して行くが、独りアラビヤでは其地

域が段々と拡がつて行く観がある。即ちアフリカの遊牧民は唯草原地を占めて居るばかりでなく、又農作に適する様な土地にまで侵入して来て居るのである。されば此暗黒大陸に於ける将来の経済的、農業的歴史の大部分は、農耕地を此遊牧民の手により回復することに存すと豫言しても誤りはあるまい。

遊牧民にして農業を兼ねて居るものも多少ないではない。露国の草原に住するカルマツク族人を傭つて冬期に乾草を苅り入れると言ふことである。アトバラ河及びガツシユ河の東に住む或アラビア種族も亦無雨期には豊饒なるカツサラ地方に移り、其處で蜀黍及び他の穀物を耕作する。カラハリ沙漠の草原地に住するベキエアナ種族は、山羊の小群を牧する處に、甜瓜や南瓜を耕作して居る。然し永久的の農業をなすに必要な水は、何分沙漠や草原では頗る乏しく、若し其量より少しでも減ずれば、耕地は之が為めに縮少を来すのである。濕潤地では左程にも感じない雪や雨の多少の増減が、沙漠や草原では著しい結果、又は悲劇的結果

を示すことになって居る。アフガン地方の河流を調査した英國の技師等は土人が其水を極度まで消費せることを報告して居る。即ちカブル河、ヘリ、ラッド河などは、或季節には灌漑に利用されて、一滴の水もなきまでに涸れ果てると言って居る。又トルコマン種族の住する草原地では耕地を拡げ、運河を増した結果、水の蒸発量が加はり、却って供給が減じたと言ふことである。總て是等の事実を見ると食糧と飢饉とは全く間一髪で、草原地では農業は不安な生活法である。されば旧世界に於ても、新世界に於ても、曽て田園として用ひられた地の、今に委棄せられてゐる跡を往々発見することがある。

遊牧民は飢饉に瀕し易き結果、日々の食物は非常に少量のものである。ベドウイン族は酸敗した駱駝の乳で料理したものを日々の食料とし、唯来客のあった時にだけ、之にパンと肉とを添へるのである。而して其食糧の少ないことは、ヨーロッパ人の一食量が六人のアラビヤ人を養ふに足ると言ふを以て察することが出来る。韃靼人は嘗て欧亜を風靡した時にも尚非常に少食主義であった。或書に「彼等は食ひ得るものを悉く其食料に充てた。何となれば、彼等の或者が虱を食ふのを吾等は実見したから」と記してゐる。彼等は死んだ動物の肉を總て食料に充てる。而して夏期には之を日光に乾かし、以て冬期の食料にした。是は夏期には牝馬の乳が多いので、韃靼人は専ら之を其食料に用ひたのである。彼等は、朝食に一二杯の乳を呑むと、それで晩食まで辛抱し、而して少量の肉を晩食にするから、一頭の牡牛は五十人及至百人の食料として十分で、骨は之を噛んで、光澤の出て来るまでに及ぶと言ふことである。成吉斯汗の如きも動物の血でも、内臓でも其他如何なる部分でも、凡そ口にし得るものは之を捨ててはならぬと命じたことがある。トルコマン族の中には外見有福らしくても、唯乾魚を食ひ、パンの如きは一日一皿だけしか食はぬものが多い。貧者に至っては、麦は高價の為め全く之を食ふことが出来ぬ、サハラのテッブス族は、何時も其腹を充たすだけのものを食はず、唯死獣の皮と粉砕した骨とを其常食として居る。

斯く沙漠や草原の生活が困難なる結果、彼等は肥満を嫌って居る。

西藏の高原に住するココノル蒙古族は痩せぎすで、決して肥えたものはない。ベドウイン種族の理想の体格は痩せて、筋張って、活氣に満ちて強いことである。サハラに住する遊牧種族はハム種たると、セム種たると、黒人種たるとを問はず悉く比標式で、スーダンの河流區域に移住しても、数代の間は改まらない。カラハリ沙漠に住居するブッシユメン族は痩せた針金の様な形で、而かも非常な困難に堪ふることが出来る。

遊牧民は他國征服の嗜好があり、随って其兵力を増す為めに、家族の膨脹は望ましいのである。然し水と食物との供給に限りがあるから人口増加が調節される場合は兎も角然らざる場合は、結婚があっても、産児は段々減じて来る。或は沙漠住民間では、人口的に人口減少を実行することも稀らしくはない。トルコマン種族の家族に子供が少ないと言ふのも畢竟食物不足に原因して居る。西藏のココノル族は、一家の子供の数は、二人又は三人を超ゆることはない。バーヤハルトの説に據るに、ベドウイーン種族では大家族と言ふのが子供三人に止まると言ふ。彼等は回教徒ではあるが、一夫多妻を行って居るものは殆ど無い。否、異数時代には却って一妻多夫主義、又は嬰児虐殺を行って居た。要するに沙漠の住民は自ら一夫一婦主義であるらしい。

遊牧民は自然の数として物品に乏しいから、必要に應じて隣國のものと貿易を行ふことにして居る。アラビヤのベドウイン種族は、バタト駐駒とを以て、麦粉と、馬糧としての大麦と、珈琲と被服とを買ふことにして居る。同じくアラビヤの北部諸種族は、毎年スリヤの國境へ、丁度ダマスコ及びアレッポから行商の来る頃を見計って交易に行く。ロシア及びアジアの諸草原に住するキルギス族は、ボハラ及びロシアの國境地で、馬と羊とを以て、穀物、被服、木具等に代へる。然し時としては、遊牧民の土地にも、牛羊以外のものを産することがある。即ちサハラ沙漠の鹽、インダス沙漠のゴム、ヨルダン東岸の高地の香油の如きもので、是等は前記貿易品に加へらるゝものである。

然し沙漠や高原の産物は少ない。随つて彼等は仲買人となることが多い。シベリアのチユクチ族は露國の製品を馴鹿に載せ、ベーリング海岸の市場に往つて、アラスカの毛皮と交易すると言ふことである。聖書の記する所に據ると、ヤコブの子等、ユダヤの野で、羊を牧して居る際、イシマエル人等が駱駝に香料、沒藥などを載せ、エジプトに下り行くのを見た。而して其際、此イシマエル人等はヨセフを奴隷として購入したが、此奴隷は昔から今日に至るまで沙漠に於ける貿易品の一である。

駱駝を「沙漠の船」と呼ぶことがあるが、若しさうであるなら、沙漠の縁にある市場を港と言へるであらう。是等の市場は、遊牧民に必要なものを悉く備へて居る。而して其郊外は、牧羊者等の入り換り、立ち換り、露營を張る所である。チンブクツーでは斯かる場所をアバラゲオンと呼ぶとの事なるが、年々其処に出入する駱駝は五万乃至六万と稱せられて居る。其工業は・沙漠内及び沙漠の河岸に住する人民の需要が一原因となつて発達する。かのダマスカスの槍の如き、ベドウイン族が最良の武器を必要としたことを反映するものである。

遊牧民自身も閑暇が多いので、其處に工業が全く起らぬでもない。然し其工業は家族工業以上には発展しない。是れ人口少く、分業の道無き為である。ベドウイン種族は間には鍛治と鞍工との外に職人はないが、是等の職業も非常に輕蔑せられ、ベドウイン種族のものは、之に従事しない。それで昔アラビヤでは工業は皆無で、近代でも眞に微々たるものである。唯サハラのアラビヤ人の間には、代々井戸掘りを業として居るものがある。其起源は非常に古く、且つ一般に尊敬せられて居る。

然し東洋絨毯は、確に此牧民に起源したものである。彼等は羊、山羊、駱駝の毛を、丹誠に織り合せて之を作り初めた。然るに何時しか是が沙漠の端にある町村の工業となり、而して遊牧民は其處に定住し、之を専業とするに至つた。東洋に於ける絨毯製造の地理的分布を見るに、此工業は半乾燥地又は鹽分的草原と關係がある様である。即ち舊世界にあつては、ペルシヤ、トルキスタン、西アフガニスタン、ベルチスタン、印

度西部、小アジアの高地等に於て最も発達して居るが、是等は皆其雨量が十吋乃至二十吋、否それよりも以下の処である。而してペルシヤや、小アジアでは其意匠及び色合は多く顧客の趣味に應ずる様にして居る。然し遊牧民は、自用の為めに作るので、其固有の色合と意匠とを墨守し少しも之を改むることをしない。

沙漠と草原とは進歩を阻止する所の手である。其處に住む種族は発達もしなければ、老熟することもなく何時までも世界の子供である。彼等の風俗、習慣、生活法は幾年経ても同一で例へばアラビヤ沙漠の内部の社会的、経済的状態は、モーゼの記事と、モハメットの記事とバルクハルトの記事と、更に一層新しい旅行者の記事とを相並べて見ても、寸分の相違を認めない。ヘロドタスが露國の草原地住民に関して設ける所も、それより五世紀後ストボラの設ける所も、一二五三年、ウイリヤム、ヅ・ルブイスの設ける所も、カルマツク族、キルギス族の現状も全く同一である。唯彼等遊牧民は、稍天恵の多い地に行つて、農業生活を送らねば

ならぬ様になつた場合、若しくは坐業人種と交際して、勞働と進歩の味を知つた場合に、初めて彼等は社会的又は経済的に発達するのである。即ち彼等は移住するか、又は農民間に侵入するか、何れかの方法で、其草原地の環境を脱し、斯くして進歩の途に就くのである。斯くして移住したる遊牧民は別段何事も創始しない。然し文明の傳播者として相當に歴史上其役目を勤めて居る。即ちアジアの遊牧民は、支那、ペルシヤ、エジプト、イーメン等の文明を世界の大面積上に散布した。紅海沿岸の沙漠に住めるセム種の遊牧民は、其商人及び戦勝者を介し、久しい間の暗黒スーダンに文明の光を投げて居た。かのモハメッドはイシマエル種のベドウイン族でメツカとシリヤの間の沙漠を往復する隊商の長であつたが、彼はエルサレムから單純な一神教を傳へて来て、其軍隊的信者を介し、此信仰をアフリカの東部及アジアに播めた。

遊牧民には種々なる特徴がある。勇気、忍耐、剛復、警戒、地方感、観察力等であるが、就中最も強く、且つ歴史的に最も價値あるものは

其宗教心である。ウークとゲビンの證明する所に據れば、中央アジアの高原に住める佛教信者の遊牧民は、其信仰の篤きことに於て、遙かに低地の支那人に越えて居る。世界の三大一神教は何れも、其起源と發達とに於て、シリヤ沙漠やアラビア沙漠と密接の關係を有して居る。殊に回教の播まつて居る範圍を見ると、アフリカのセネガンビヤ及びザンジバルから、アジアの印度河、タリム河、及びオビ河に至り、草原地帶を含み、多少此中に、隣地の水利を有する地域も入つて居る。其人種を言へば、黒人種あり、ハム人種あり、セム人種あり、イラン人種あり、インド、アリアン人種あり、亦蒙古人もある。而して彼等が一様に此嚴格なる一神教を信ずるに至つたのは草原と言ふ環境に由るものと言はねばならぬ。彼等の智力には限りがある。然し其想像は自由不羈、少しも因へられて居ない。而して其單調な環境よりして單一の印象を受け、斯くして其崇物教、自然教を捨て、一神教を信ずるに至つたものであらう。

今若し回教とユダヤ教とキリスト教とを比すれば、ユダヤ教は如何に

も狹い地方的基礎の上に立つて居る樣である。されば世界の各部に広く移植せられても、到底種族的宗教たる其特色を捨てることは出來ない樣である。其教義と言ひ、儀式と言ひ如何にも保守的で其沙漠に生れたる特徴が何時もあり〳〵と殘つて居る。次に回教は如何かと言ふに、是亦其出生地の環境の色彩が著しい。從つて乾燥地の人の心には強く訴ふる力を備へ、実際上にも亦是等の人々の間に傳はつて、其実行的の原則となつて居る。然し回教は畢竟經濟的にも、社会的にも未發達な人民に屬する宗教で、其中に道德的進化の萌芽を缺いて居る。若し夫れ十分に之を有して居るものは、ヘブル的一神教の旧城寨に生れ、而かも飽くまで地中海の盆地とローマ帝國との世界的勢力を抱有して居るキリスト教あるのみである。

第六節　山岳と山道

平原の特色は、各種の歴史的運動を容易ならしむるに存し、山の特色は却つて之を妨害し、拘束し、受け流す事に存して居る。抑々人間は、空氣や水と同じく地球の動的被覆であつて、絶えず重力で吸引せられて居る。従つて山を登ることは登るが、非常に困難を感じ、又山で生活すると言ふことも一方ならぬ難事である。又食物の供給も、低地から高地に進むに従ひ、次第に減少するから、山を越えると言ふことは、移住民に取つても行進軍に取つても、共に甚しい苦痛であると言はねばならぬ。斯かる理由で山は其険難に依り人を反撥し、低地は却つて之を吸引する。歴史的運動が若し高処へ進まねばならぬ様になれば、成る丈山脊や、山嶺を避け、谷や山道を求める様になるのは、其處と低地との交通が最も容易であるからに外ならない。

陸上では、山ほど人類の邪魔をするものはない。人が其発展を許らうとする場合、之を妨げるものは山である。即ち山は険阻で、道を作り難く、且つ森林があつて人を通さない。山は其地味瘠せ、耕地少なく、氣候も宜しからず、外界との交通容易ならぬので生活が困難である。故に低地で経済的圧迫が甚しくならぬ間は、何人も山を耕すことをせず、又此處に家を作ることをせぬ。例へばヨーロッパの原住民たる長頭族は、大陸全体に拡がつて、アルプス山麓まで及んで居たが、アルプス山中には居住せず、唯佛國のオーヴエルス高原に僅に住んで居たに過ぎなかつた。アルプス族が、西部ヨーロッパに住み初めるやうになり、初めてスウイスの高地、ドイツのアルプス、佛國のオーヴエルヌ等に住民を見るに至つた。

山地は沙漠や海と同様に過度地である。人は出来るだけ早く之を通過せんとする。故に山地は歴史的に言へば大低動的地域に園まれた静的地域で・歴史的舞台に現れたのは平原住民が山向ふの地に至らんとする時

の通路となつた時である。而かも山地の演ずる役目は甚だ僅少なるもの である。即ち唯通過し得べき路が役目を果すだけで、其他の部分は更に 顧みられない。昔シーザーは唯アルプスを越えてゐる間に、何時しか此 山の住民がローマの商人及び軍隊の通路を妨げようとしたので、初めて 此山の占領を必要とするに至つたと言ふことを記載しただけで更にアル プスのことを説いては居ない。英領印度も斯かる通路に當る地の主権を 握つて置くことだけの必要から、ベルチスタン、カシミール、シツキム 等を占領することになつたのである。

斯くの如き山地が獨立に歴史的價値を生ずるのは、一國の人口が増加 して、其山が自から一國家の中心となつた時である。自ら盟主となつて、 其周圍の諸地を糾合し、此連盟に加はつた者にだけ此險要の地の通過を 許すこととすれば、該山地は非常なる權威を握ることが出來る。故に斯 かる山地は之を鉄道に譬へて言へば、恰も緩衝機の様なものである。古、 ピレニー山の西端の要路を支配したナヴアーの如き、今日中央アルプス の通路を扼して居るスウイスの如きは即ちそれである。

山は大抵越え得べきもの、又越え得べき様になりつゝある。然し又全 く越え得べからざるものもないではない。コロラド河の大峽谷の如きは、 三百哩の間交通を妨げて居る。ベルン、アルプスには山脊に氷河を載い た所があつて、六十二哩の間一の車道もない。ペニン、アルプスにも五 十四哩の間通路の全くない處がある。之に反して、緩かな傾斜、所謂台 地は人に取つての價値と言ふ點から言へば、山の中でも最も大切な部分 で、山の有する多くの便宜を兼ね、平野の有する交通の便宜をも有して 居る。斯くの如き台地を有せざる大陸及び國家は、その為めに非常な損 失を受けねばならぬ。かの南アフリカが不利益である點は即ち是であつ て、滿洲の太平洋方面の如きも、若し高地より海への傾斜が、今少し緩 やかであるならば、歴史上の價値は頗る増大することであらう。米國の 太平洋沿岸とアパラチア高地とを繋げる平原は、此緩やかな傾斜をなし て居る所である。其處を通ずる河の流域を調べて見ると、何れも人類地

理学的に三階段をなして居る。即ち下流が開港場、中部が種々な農業地、上流が種々な水力工業と鉱山とである。而して各部の風景が其住民に夫々の特色を與へて居ることは言ふまでもない。佛、独、及び北部イタリーにも之と同様の地勢があつて、人類の活動及び住民に同様の效果を及ぼして居る。

山の麓には、山麓帯と稱する部分がある。此山麓帯は、地理的の境界線ともなり、人種的の境界線ともなるものであるが、此境界線が極めて明晰に分れてゐる場合は、低地の高等人種が、段々高地の住民を圧迫する時で、其場合には、人種も文明も一目瞭然之を區別する事が出来る。昔ローマ人とリーシア人とは東アルプスの山麓帯で境を交へて住んで居たことがある。今日も露人は、コーカサスの麓で諸々の異種族と隣合つて居る。又山麓帯は人口の疎密を分ける境界線となることもある。即ち山地は人口の疎なる所であり、平原は密なる所であつて、山麓帯は此間に挾まつて居る所であるからである。然し山が若し非常に高く、其麓に

沙漠や、草原のある場合には、山麓帯が却つて人口の最も稠密な處となる場合もある。又山に鉱物があるか、水力のある場合にも、此山麓帯に多くの人口が集まつて来る。是はサキソニーのエル連山、シレシアのリーゼン連山、北西英國のペニン連山、南ウエールスの高地等に於て見る所であつて、其人口は一平方哩三百八十五人に達して居る。

山は如何なる歴史的運動にも厚遇を與へない。従つて長い間歴史的障害物となつて居る。斯くの如き場合には山麓帯の生活は何時までも植民地の國境のやうな特徴を呈して居る。南アパラチア連山の山麓帯は今日でも、猶此原則を例證して居る。米國民が一八三〇年から一八五〇年まで西部に向つて膨脹した時代に、ロツキー連山の東麓に、幾多の少交易場が散乱して居た。即ち此高地の一産物たる獣皮の集散場が、彼處此處に散在して居た。此交易場は他日カリフオルニヤ、オレゴンの開けるに従ひ、中間駅となつたが、それでも尚久しく國境的交易場たるの観を呈して居た。而して農民や工業者などの此處に密集するに至つたのは、此山

麓帯には水の供給が近隣の平原地よりも豊富で、且つ山上には鉱物が夥しいことの分つた時からであつた。

山がまだ原始的状態にある時には、其處に専門の運送人が現れる。此山麓の運送人は、公道盡き、驢馬亦是より以上に進まぬと言ふ地点即ち山麓帯に集まつて居る。彼等は其特別な環境に教育されて、登山にも慣れて居るので、南北両米の太平洋沿岸、即ちアラスカ半島よりマゼラン海峡に至るまで、到る處に之を発見し得るのである。彼等は百磅乃至百六十磅の重荷を負ふて、能く険路を登ることが出来る。中央アジア高原にも亦斯くの如き専門の運送人があつて、特にダージリンとシガッチエとの間のヒマラヤ越をするブチヤと言ふ種族に就いては色々面白い話がある。ヤングハズバント大佐は、此ブチヤ種族の者を傭ふて運送人とした所が、二人能く二百五十磅から三百磅までの荷物を運ぶことが出来たと言ふことである。恰も中央アジアの運送人の常量の三倍である。パーシヴアル・ランドンの「西藏開放」と言ふ書に據ると、ブチアの一婦人は其頭上にピアノを載せ、平原から海抜七千百五十呎のダージリンまで運び上げたとのことである。

歴史的運動は山麓帯の傾斜地に達すると、其處で其歩調を緩めるものとすれば、高く山上に達した時、最早停止して仕舞うのが當然である。此際若し此山険を突破して交通を全うし得る途が、人に依つて発見されたとすれば、此山険の妨害が初めて幾分除去されたと言ひ得るであらう。ビスケー湾から黒海に至るまで、南欧を横断して居る高地脈の如き、地中海沿岸地方の文明を阻止すること久しきものであつた。中央ヨーロツパが文明史の表面に現ることの遅かつたのは、全く此高地脈に妨げられた為めである。かの透徹的なギリシヤの文明ですら、山険の端を遠廻りして中央ヨーロツパに立ち入ることを得たのである。又ギリシヤの商業は、一方マツシラと、ローン河とを経て、又一方イストリヤとダニユーブ河とを経て、僅に大陸の内部に達することが出来た。

山の天険性は其高さと構造との如何に関係するものである。ピレニー、

コーカサス、アンデンス等の如きは其間に山道の数少なく、且非常に高いので、古今共に交通を遮断する天険であつた。又壘壁的性質を帯びて居るので、ヨーロッパの自然的境界線として、アルプスには非常に良好な山道多く、それが又大低は其分布能く平均を得て居る。米國のアパラチア山脈は、其幅凡そ三百哩、其長さ千三百哩にも及んで居るが、其平行脈の中に幾多の越え易き凹處があつて、それが為め、初期の西部移住者に迂廻的ではあるが、非常な便宜を與へた。ヒンヅクーシュ山脈は其長さ四百哩に達し、且つ高いことも高いが、印度に取つては有力なる自然的境界線と言ふことは出来ない。是は一万二千五百呎乃至一万九千呎の高處にすらも尚幾多の山道があるからで、此山道中、最も東にある数條の如きは、カシミールに下る道路であるから、隨つてカシミールは印度の北の入口の護衛所として特に大切のものである。

山脈が幾條も幾條も相當壘壘して居る場合は、勿論、非常に交通は妨げられるが、之に反して唯一條の山脈が連なれること、エルツや、シュワルツワルトやヴォゲの如き場合、又は一條の山道に依つて越え得ることと西アルプスの如き場合には、比較的交通は妨害せられない。西アルプスは斯くの如き單純な構造であるので、ローマ帝國時代には此處に四條の山道があつた。之に反して、ピレニーは幾多の山脈、相重疊して立つて居るので、スペインは欧洲大陸と全く遮断されて仕舞つた。イベリア半島が長い年月の間、其陸続きなる佛國に対してよりは寧ろ其対岸のモロッコと親しい関係を有つて居たと言ふのも此理由からで、佛國の諺に、「アフリカはピレニー連山より始まる」と言ふことがあるのも、斯かる事情の為めである。構造上には何等の相違がなくても、高さが違へば、それだけに山は天険として交通を妨げるものである。是は高さの増すと共に、山は其人類地理的の效果が益ゝ加はるからである。例へばアパラチア連山とか、ウラル連山の如き、古い擦り切れた山は、幅が広いことは広いが、交通上、比較的に困難ではない。然しアルプスやコーカサスの如き、其峰の巍然として屹立したものは、頗る交通を困難ならしめる。それか

ら又高さの様子も、餘程其天險の度に関係する。其斜面が緩かで、其嶺が扁平若しくは圓い山は越え易く、其斜面が急で、其脊が高く且つ厚味が少なければ越え難い。高原性の山は、假令如何程高くとも、比較的歴史的運動の妨害にはならぬもので、毎年夏期には遊牧民の此処に来住するを見ることもある。かの天山山脈の中央部及び西部は、海抜一万呎から一万二千呎にも及んで居るが、幅の広い高原である。而して比較的強い雨雪があるので、それに養はれて牧草繁茂し、夏期には恰も焦土の海に包まれた緑色の島の様な観を呈する。之が為め、此近傍の草原やら、沙漠などに住する多くの遊牧民が此處に来往するのである。パミール高原は、谷床でも海抜一万一千呎乃至一万三千呎に及んで居る。それでも夏期には、キルギス種族が北より、東より、西より牛羊を率ゐて此處に来り牧するのである。而して此牛羊を掠奪せんとして、南方のハンザ溪谷に住して居る山賊が侵撃を試みる事もある。此パミールは十世紀の頃、「セリカ」即ち「絹の國」から、オクサス河及び裏海地方に赴く支那商

隊の為めの通路であつた。マルコ・ポーロを初め其後の多くの旅人は、此處で其駄馬の為めにに秣を、自分等の為めには食糧を買入れることが出来た。それは此辺に、一時、来住する牧羊者が何時でもあつて、其者等より肉を買ひ取ることが出来たからである。露國は古くよりパミール地方が通路として用ひ得べきを認め、一八八六年に其大部分をボハラ政廳に併合して仕舞つた。

山は、何れの方面からでも同様に登り得ると言ふ様なことは極めて稀である。即ち一方からは、極めて險阻で、登り難いのに、他方からは、其傾斜の緩かな為め、非常に登り易いと言ふことは稀らしくない。而して此緩傾斜面の方は、唯登り易いと言ふ利を有するに止まらず、住居地の面積広く、食物の供給豊かで、輜重運搬の根據地とも成り得べく、従つて軍隊、商隊の進行、人種の發展等の為めに少からざる便宜を與ふるものである。それから登る方が緩かで、下る方が急坂になつて居るから、突然敵に攻撃を加へる様な場合に、兵略上の便宜も生じて来る。ヴオー

ず連山は佛國のセイヌ低地から登る時には極めて緩傾斜を為して居るが、中央ラインの流域方面は非常に急になって居る。モン、ブランから地中海に出づるに、斜面の三分の二は佛國の領内に存して居る。それが為め、イタリーは損失して居るに反し、佛國は非常に利益を得て居る。文明のローマ人、野蠻のゴール人との戰爭は、取組が不適當で致し方もなかったが、ハンニバルの時以來、ナポレオン三世時代に至るまで、北方からアルプスを越えた軍役は必ず成功し、險阻なポー河流域からの軍役が必ず不成功に終ったのも此為めである。

傾斜の不平均は、政治上に其影響があるばかりでなく、又人種上にも影響を及ぼすものである。殊に緯度の方向が、山の両側面をして氣候を非常に相違せしむる時に於て然りである。ローマ時代を除いて、アルプスの南側はイタリー人の為めには、其足を止める墻壁で、南部の農夫は貧乏に迫られなければ、其高い、然しながら日當りのよい谷間まで進んで行くことをしない。又其北側は氣候がよくないので、農夫は之に近づ

くことが出来ない。然るにスウィスは、ケケノ縣に於てアルプスの峰を越え、且つ其政治的境界線をポー河の流域でコモの辺まで深く入り込ませて居る。斯くしてアルプス種族は、山麓よりポーの流域まで到る處に散在し、此低地人に限り、比較的廣頭白面長身でアペナイン山の向ふに住する純粹の地中海人種と際立って相違して居る。

山は其住民にも亦其近傍住民にも影響を及ぼすものであるが、然し何時でも山は天險で妨害的性質を帯びたものである。即ち山は一側面に住する人には、雨の少ない風を與へて居る。之が為めに、ヒマラヤの一側面には、印度人が稠密に居住して居るが、他の側面には僅に西藏の遊牧民が散在して居るに過ぎない。又山は氣候を截然と両分する境界線となることも往々あって、スカンヂナビヤ連山の如きは、ノルウエーに對して暖い、柔かな大西洋の西風を與へ、而して其東側のスウエーデンに對しては、寒帶近傍の寒い氣候を與へて居る。歴史の上から見ても、山は人類を両分する傾向を有し、其道の困難にして危險なることは凡庸者を

して逡巡せしむるが、之に反して或は其山の美を愛し、又山向ふの未見の者に対する好奇心を動かす剛健者には、天険を踏破するの志を起さしむるものである。かのハンニバル、ナポレオン、スヴアロフ、成吉斯汗の如き大豪傑を始めとして、一八四九年の熱狂時代にロッキヤシエラを横断した小英雄及びチルクート山道の雪を蹴つてユーコンの金鉱に突入した冒険者流に至るまで皆此剛健者に外ならぬ。

移住的、好戦的、商業的なる人より言へば、山に関する問題は一に其山道に集中すると言ひ得るであらう。山道とは山頂の凹處又は窪地で、時としては水流の為めに掘り込まれた山峡であり、時としては山の側面に出来た深い溝である。何れにしても、是は山向ふの國に至らんとする者に最も容易なる通路を指示するもので、山越えの旅行には此山道が即ち焦点である。其影響は却々遠大で、アルプスのブレナー山道は、北の方アウグスブルグ、ラチスボン、ニユーレンベルグ、ライプチヒ等をして商業上偉大のものたらしめ、南の方ヴエニスの發達を刺戟した。又アフ

ガニスタンのカイバル山道及びヘラット関門は、久しい間露國と英領印度とのアジア政策を支配して来た。米國の歴史に於ても、モホーク凹地、カンバーランド山峡は皆曾て人民の西進して、ミシシツピー盆地に至らんとする者に方向を指示したのであつた。而して山道の價値なるものは、近代の如くに機械工業の進歩した時代にも尚衰へぬもので、山険を攀づる所の汽車は尚此天然の公道を辿り勝である。

山道の歴史的價値は、其窪が深ければ深い程益々増加するもので、深からざるものが唯臨時用又は地方用に充てられるに反し、深いものは最も多く用ひられる。又山道は其数が少ければ少ないほど其歴史的價値は増すもので、一の側面より他の側面に旅行するには、唯一條若しくは二條の狭路だけを用ふるのが常である。前者の例としては中央アメリカのコージレラ山脈中、パナマの海抜二百六十二呎、ニカラガの百五十呎、テフアンテペクの六百八十九呎を擧げることが出来る。是は南米の諸山道が大抵一万呎乃至それ以上なるに比して非常な相違である。後者の例

としては、ピンダス連山中のテルモピレ山道を擧げる事が出來る。此山道はクセルクセスよりギリシャの独立戦に至るまで、何時でも陸戦の場合には有名なものである。コーカサス連山のダリエル山道及びデルベント山道の如きも亦後者の例であらう。殊にデルベント山道は、ダリエル山道よりも一層越え易く、從って長い且豊かな歴史を有して居る。此山道があったので、昔のペルシャ人は一時コーカサスの北麓に其兵を進めることが出來た。而して北方よりペルシャ及びジョージアに至らんとする者には、古も今も公道となって居る。露國の草原よりコーカサスの南麓に達せんとする鉄道にも此山道以外には好都合の通路がないのである。

海と海との間に挾まれた山は通常其海に接した地點が最も容易な道路になって居る。かのピレニー連山には二の鉄道が敷設されて居て、其一はビスケー湾の東岸にあり、又一は地中海を下瞰する部分にあるのが其実例で。此両極端の中間は、山道何れも非常に高く、若し鉄道を敷くとすれば五千二百八十呎のコル、ヅ、ラ、パーシユと、七千五百〇二呎のポー、ヅ、カンフランあるのみである。

世界の公道は、元来は商賣の爲めに用ひられるのであるから、其公道の價値如何は、商売の多寡如何に依って定まるのである。それから商売の多寡如何は又公道が結びつけて居る両地の性質如何に依って定まるのである。アルプスの諸山道や、ベルフオート山道は、中世紀の初めから既に繁華な公道であった。是は赤道地中海と、温帯的中央ヨーロッパとの交易を便宜ならしめたからである。モホーク凹地は、農業的の西北部と、工業的の大西洋沿岸とを結びつけ、農産物と工藝品との交換を容易ならしめた。アジアの諸連山の山道は、農業的工業的な印度及び支那の諸低地と、牧畜に従事する蒙古、西藏、アフガニスタン、露領トルキスタンとを連絡せしめて居る。それ故に此諸山道は、羊毛、獣皮、毛氈、羅紗、敷物等の如き遊牧地の産物と、肥沃にして人口稠密なる低地の食糧及び工藝品との交易を助けて居る。公道が若し海に達して居る時には、其勢力範囲はそれだけ増すものである。サン、フランシスコ、ニユーヨーク、

マルセイユ、ゼエノア、ヴエニス、ベイルート、ボンベイ等の海港の價値ある所以は、其後地への有力な通路に當つて居る為めである。

若し高地の面積が非常に広く、従つて日を重ねて旅行する必要のある様な處には、假令海拔は高くとも、正銘な山道市が續々として起つて来る。其一例を擧げれば、中央アジアよりカラコラム山道を經てカシミールに至る途中のレーは即ちそれである。海拔は一万一千二百八十呎である。是等の市場へは、支那、トルキスタンの商隊は數物と磚茶とを携へ来り、ラッサの西藏商人は其牧場から羊毛を輸入し、此處で印度の低地より来れる米及び砂糖と交易を行ふのである。就中、レーは印度及び中央アジアの両市場と中央で、頗る便宜の地点に位して居るから、両地方から来た商隊の為めの最終駅で北と南との物産の交易場である。何れの商隊も此レーを越えて先へ進行することは極めて稀で、商人は此地で一二箇月間休息し、以て物品交換を行つて居る。各種の天幕あり、駱駝あり、犂牛あり、驢馬あり、馬あり、様々なる人種の人あり、種々な國語を用ふる人あり、様々な宗教を奉ずる人ありて、夏時北山道の開かれて居る際には、眞に世界的都市たるの觀を呈するのである。カブールはカブール河の源凡そ六千呎の高處に位する市で、是亦ヒンヅクーシユを横斷する多くの通路の焦点となり、パンジヤブの西北境に集中する總ての通路を扼して居る。故に此カブールは、印度に取つて兵略上、商業上の鍵である。其狭く且つ彎曲した市街は東洋商人の絵の如き駱駝隊に塞がれて居る。又店々にはオクサス地方より来れる露國品と、印度より来れる英國品とを共に陳列して、中間駅たる特色を十分發揮して居る。

時としては、非常な高處に地方的の目的の為め市場の起つて来ることがある。印度のヒマラヤ山中のクマオン郡には、ガービヤンと言ふ市場があつて海拔一万三百呎の高處に位して居る。以前はドクパと言ふ西藏種族の貿易中心地であつた。此種族は一万呎以下の低地は犂牛も羊も皆死ぬからと言つて決して其以下には下らない。

河でも、山道でも、自然の公道であつて、移住も、旅行も、商業も、

戦争も皆之に引きつけらるゝものである。故に斯くの如き公道は、太古時代から歴史的價値を有して居る。今は唯其中、山道に就いて説くのであるが、此山道の制御權を握つて居るものは、其大いさと其力とに不相應な程、歴史上に大勢力を揮ひ得るものである。從つて低地の人民が若し斯くの如き要路を扼せんとする時には、此高處へと攻め上つて來る場合も往々あることで、又是等の山道種族の勢は時として、其支配して居る商業の多寡如何に關係することもある。東部ヒマラヤのチュンビ溪谷に、トモと言ふ種族があつて、是はダージリンと西藏との商業仲介者である。西部ヒマラヤにはクマオンと言ふ處があつて、是は北印度の國境をなし、最良の山路の幾條かを支配して居る。されば其土人即ちプチヤ種族は、大膽なる商人で、西藏市場に通ずる山路の商業を一手に引き受けて居る有様である。

斯くの如き山道種族は時として其處を通過する商品に通行税を課することがある。然らざれば其物品を掠奪することがある。ジエラグリ及びセヅニと言ふ種族は、アルプスの大セント、バーナード山道を支配して居たが、此處を通過するローマ人の爲め、其道を開かせるとて、シーザーは彼等と戰つたことがある。又サラッシと言ふ種族はアルプスの小セント、バーナード山道を支配し、是は此山を横斷する者の物品を掠奪するか、然らざれば之に課說した。而して或時はシーザー自身の貴重品を掠奪したこともある。依つてアウガスタス又は久しい間之と戰ひ、アオスタ市を創建し、一隊の近衛兵を此處に置いて其公道を守らせた。更に眼をアジアに轉じて見ると、スレイマン連山の諸山道を支配したアフガンの諸種族は、トルキスタンと印度との間を往返する隊商に稅金を課するのが久しい間の慣例である。されば商人も、數百人乃至數千人隊を組み、其攻撃又は重稅に対抗する手段を取つて居る。又アフガン人はカイバル山道及びコハット山道では、常に道路稅を課し、斯くして數百年來、印度の各王朝を强請し來つた。英國政府が、此道の通行を自由ならしむる爲め、若干の年額を彼等に拂ふことに協約を調へたのは、實に一八八一

年のことである。

山道の斯くの如き兵略的價値は、多少政治上の色彩を帯びて居る。是は山國が其不利なる位置の有する唯一の利益を開発せんと努めた結果で、中世紀末に起つたサヴオイ侯國発祥の地は、ジユネーヴ湖とポー河の西部諸支流との間にあつた。然るに、此位置は佛國とイタリーとの間なる多数の重要なる諸山道を支配して居たので、代々のサヴオイ侯は、其点に於て非常に重大な力を有つてゐた。スウイスの独立は、其地形の城廓的なるにも由り、其人民の独立不羈なるにも由るが、又其兵略的地位を政治的に開發した爲めでもある。之に加ふるに、スウイスは亜熱帯と温帯との中央に位する要地で、其山道は之を守るに力なき程の弱國が、却つて之を所有すべしと言ふ諸隣國の要求にも據る所があつたのである。カブールの王は、スレイマン連山の全然飽くなきアフリヂ種族の後援を受け、露国と英領印度とを争はせて漁夫の利を占め、普通分等國にあるまじき程の厚遇を此二国から得ることが出来た。之と等しく、植民時代の米國に於て、モホーク凹地のイロコイス族はハドソン河から北西部の獣皮産地へ通ずる山道と、カナダ佛人が、ニユーヨーク植民地を攻撃する要路とを扼して居たので、英人は夙に之と妥協し、而して英佛戰争の時にも革命戰争の時にも英國は之を同盟者として利用した。

第五篇　民族的世界觀と國家觀

世界觀とは凡ゆる生活領域に決定的な作用を及ぼす内的精神的態度の基礎となるものを指すのであるが種々の意味に用ひられるキリスト教、佛教の如き宗教的世界觀もあれば、理想主義といった様な哲学的世界觀もあり、又マルクスズム、自由主義の如き政治的世界觀もある。「世界觀」といふ概念はこれらの場合いづれも一般的な信條に基づいて一般人間的な妥当性を要求する世界觀的体系を意味してゐる。ウイルヘルム・カルレは現代社会の内部で指導的力として働いてゐる、世界觀の類型を（１）保守的・貴族的（２）カソリツク的・教会的（３）自由的、民主的（４）民族的・國家的（５）マルクス主義的・社会主義的原理に分類した。

これに対して根本的に区別すべきものは、ある特定民族の生活の表現たる世界觀である。

デュルクハイムはこの意味の世界觀は之を信奉する民族と密接不離のも

のであると述べてゐる。何となれば此の意味に於ける世界観は一民族の独特の本質、その空間的規定、その歴史的運命、及びその生活意欲の表現に他ならず一つの民族に対して一つあり、而して唯一つに限られ、これを一民族から他民族に移すことを得ないものだからである。我々が日本的世界観といひ、独逸的世界観といふものもこの意味である。

かゝる世界観は先づ民族の特質と生活意欲とを表現し、これが根底をなし、これを統一せる信念の力の總体であり、血と土、神話と歴史と祖先伝来の遺産の中に見られる民族天賦の使命に対する自覚であり、高度の発展段階にあつては、同時に人生の諸問題に対してこれより生じ来る意識的な態度及び評價の總体である。この意味に於ける世界観とは民族の自己自身の本質に対する自覚である。自己の本質は民族がこれをおのが義務として遵守すべき價値であると感ぜられるとゝもにこの價値を展開し現実のうちに維持せんとする意志の規定であると感ぜられる。されば民族的世界観は民族の本質表現、價値意識及び意志の秩序である。

かゝる民族的世界観は長期の発展を閲したる後始めて言はゞ民族性の植物的な生活表現を脱して民族的自覚による団結の段階に移り、やがて本質に相応しき國家を生み出す政治力となるのである。

從って民族的世界観とは民族的性格が基底となって現実的情勢の解決を求める場合の政治的原理となる。

云ふまでもなく人間は總ての生物と同様に相互に依存する身体的及び精神的生活表示（生活機能）と生活内容（生活資料）との合体性であつて、その生活が破壊されることなしに解体され得ないところの身体と精神との複合的組織統一体である。而して個々の精神的生活表示の経過する樣式はその根柢にある素質を反映してゐる。民族的性格は生理学的基底が社会の精神的潮流を構成する樣式と程度によつて異なり、遺伝と後生活の所得から構成される。我々は個人の活動を一つの民族的作用体系の実現に見るから個別的な個人現象の観察に当つて反復的なもの、共通的なものを類型に形成する。民族的性格とは外界と内界の相互作用から

与へられた体験に基く精神傾向である。だから性格とは生理力及び精神力の原基たる作用能力を意味する。各人の身体的精神的生活は民族の總体像の一形態を示すが故に我々は一つの全体性における各肢節の酷似性を抽出することが出来る。

身体と精神の統一的な考察から生ずる見解、例へば精神的素質の中に根を下して居ると云ふ見解からすれば身体的構造は精神的構造の中に、否それと反対に精神的構造は身体的構造の中に「特別な様式」に於て反映するのであつて、フルウイツIdurncyは民族的性格の特質は畢竟かゝる感情の昂進や視角や、心理的色調の特殊様式略言すれば同じ内部的或ひは外部的刺戟に於ける心理的反応の特殊様式にこれを認めると云つてゐる。かくして民族的といふことは個人的経験に対して先験的だと云ふことに外ならないから——人間は生れた瞬間既に何らかの民族に属してゐる。どの民族にも属しない人間は現実にはあり得ない——その肉体的存在に於てのみならず、この精神的存在においても既に「民族的統覚」

によつて規定された社会化せる意識の所有者として現はれてゐる。だから感覚や、認識や、行為規範の普遍妥当性の根據である意識一般は真の意識一般ではなくして民族的な着色を持つたものとして現実化される。あらゆる文化形象、社会構成体には民族的色調が含まれてゐる。又異質文化の接觸即ち文化交叉に於ても一つの民族が他民族の文化を攝取するとき、それは該民族の「民族的統覚」によつて独自な加工を受けるが故にあらゆる文化は民族的性格を表現してゐる。諸民族間に於ける文化の交換は決して民族的性格を平等ならしめない。民族統覚のこの一大事実のために一つの民族が他の民族から取つて来る如何なる思想も文化も民族の生活のうちに生かされてゐる限りそれが消化され、全民族的存在に適応せしめられることなしに攝取されないであらう。外来要素と云へども それが民族生活の栄養と為る限り既に民族的性格を持つものである。現在の世界的潮流としては民族自決の原理が中核と成り民族分化は益々対立発展し、民族的性格は相互に益々排他になりつゝある。然しこの民

族自決の政策的深化と分離は現在に於ては「分裂のための結合」であるが然しこれはやがて「結合のための分裂」として其の対蹠的思想としての諸民族の國際的融合への辨證法的行路となるのであらう。民族性の上位には「人間性」が存するからである。発生史的に見て前資本主義社会に於ける民族敵対は生物学的な闘争であった。何となれば社会組織の存在形態は大部分種族団体によって表現されてゐたからである。民族闘争又は確執は通常全社会の生存競争、或は社会内部における社会群の闘争の直接的な形態であった。然るに初期及び盛期資本主義社会に於ては民族の軋轢はその固有の意味を失ってしまった。こゝでは民族は階級的搾取の可能を通した時にのみ重要となる。民族問題は本質的に搾取問題の假装として植民地獲得及び統治の手段としてのみ重要となった。民族の理論は帝国主義的発展に含まれる多数民族・小数民族関係 majority-minority relation の結合によって基礎づけられる種族ではなくして支配搾取の階級が実体をなした。

然るに一九一四－一九一八年の戦争以後に於ける國際協調主義は民族自決にもとづく小民族の國家形成を原則とした。然しこの場合に於ける民族自治の主体たる民族は所謂文化民族であって自然民族ではなかった。

民族意識の國家の結合に対する関係は単一な民族によって構成される國家であるか複数民族によって構成される國家であるかに従って異なる。前者に在っては民族意識は其の結合度の強化に影響し、後者に在っては殘存化に作用する。この意味よりすれば所謂小数民族の民族意識は母國に対する親和感情を構成するものとして重要性を有する。それは又多数民族優勢の存在に伴ふ集合意識の事実に基き、共同生活意欲をその根柢とする自治要求の主観的要素をなすものである。固より民族意識の問題は民族形成の生物学的要素と対立するものとして社会学的考察の対象になるのであるが、然しこれは単なる結合意識であるに止まらず政治的支配関係にまで昂められるものである。政治に指向する民族意識は凡そ三つに別つことが出来る。その二個は國家と関聯し、その一は必ずしも國

家の存在の事実と必然的関联に立つことを前提としない。國家に関联するもの〻一は諸國家内に分属する同一民族、又異質集団を含む國家内に於ける特殊なる階級の社会的結合の程度が増大し、その政治的独立又は他の國家への結合、言語、宗教、教育、民族的自由等に対するその要求と努力とが現実性を加重する場合に於ては屢ば民族闘争の形成に於ける民族解放の事実を認める。即ち異質的なる國家構成要素としての諸民族を包有する國家は相互の利益の抵觸とその調整との程度に従って屢ば表面的又は潜在的なる民族闘争を醸成せしむる傾向に置かれてゐる。異質性に基づく闘争は種々の態様に於て現れるが、その最も著しきは主要構成要素たる民族に対する少数民族の國民的又は民族的異質性の保持の努力として現れる場合である。即ちそれは同質性への努力に対する異質性の抗争である。この結果として複合民族國家に於ては民族の特殊性又は結質性の意識の強烈なること〻その保護とは特定の状態の下に於ては屢ば國家的結合の弛緩とその分裂とへ導き易い傾向を指示する。而してこの傾向はその特殊性に対する法律制度の如何と密接に関联するものである。民族的結質性の保持と発展とに対する要望の強烈なる所に於ては民族の私利の為めの闘争は屢ば國家そのものの統一及発展の條件に背馳し得る。その結果として國家の結合の強度は減少し、國家行政の複雑化と困難とは動もすれば分裂に対する潜在的因子の増大を招き易い。又は一の複合民族國家内に同一民族が新たに國家を形成せむとする場合、即ち分離と独立との過程を通じて新しき政治組織への要求と努力との中に現れる一般的連帯としての共同意識である。その二は他の政治団体に属する一民族が新たなる國家形成の過程に依らずして、同民族に依って組織せらる〻既存の特定國家への合併、又は複帰に対する要求と努力とに現れる連帯の意識である。これらの場合に於ける民族意識は特定の國家の民族との異質的対立、その國家と適応せざる社会的実在の意識として存

在する。第三の場合は特定の國家と直接に関聯せずして成立する民族意識である。この場合に於ては民族は地域的制限を離れて諸國家に散在し、その個性を著しく現はすものは地縁的ならざる共同生存としての民族意識である。特定の國家を前提せずして而も同一民族なることの意識は宗敎的要素、其の他の文化的諸要素の共通の基礎の上に、共同なる歴史の背景を以て成立する。かゝる民族意識は一の民族の政治的結合への要求を伴ふことを必ずしも條件としない。但し何れの場合なるを問はず民族的性格、民族的特性又は他民族との異質性、自己の同質性に対する意識、即ち民族的差異に関する意識の存在を必要とする。而して斯かる差異は民族の自然的特質のみに限定せられずして民族の有する多くの文化的要素の共通、特に歴史的、社会的に規定せらるゝ共同の観念の上に成立するものである。民族意識――それは他民族存在の認知によって初めて形成されるものである――それ自体対立意識であって、この対立意識による民族の闘争は民族的同質性を中心として行はるゝ本来の意味に於ける民族闘争と経済的、政治的な支配の過程に於て必ずしもその同質性に觸るることなく行はるる假装的民族闘争とに区別することが出来る。同質性を中心とする場合は即ち一方に於て一民族が他民族を同化して自己と同一なる民族たらしめむとする努力と、他方に於て民族がその異質性を保持せむとして他民族の同化的努力に抗争する過程とに認め得る。

特に法律上の平等の要求に対する少数民族保護の制度と、民族のこの特殊性に基く特殊的処置の正当性との間に如何なる調和を求むべきであるか。この点よりすれば少数民族保護の諸法制に依って認められたる少数民族に対する事実上及び法律上の不平等なる取扱及び保護の規定は一面に於ては全体的なる國家的関心の減少を招き易く、従って國家としての鞏固なる統一と発達とを犠牲とすることによって民族闘争の損害と危険とを阻止しつゝあるものであるが然してこれは暫定的なものであって、やがては同一國民の意識と運命の共同の意識が民族的差別意識に代置され種族的限界を越えた新な同一民族意識が構成される。民族主義とは現

代に於ては主に国家意識と種族意識との政治的集中形態に外ならない。だから民族的特殊性の過度なる尊重と保護とが民族の闘争に基く国家分立の危機を包含したことはヴエルサイユ條約以後の事実の證明する所である。云ふまでもなく国民は単なる種族団体ではなくして国家の発展に伴ふ差異的構成部分から形成されるところの歴史的、社会的構成体であつて決して単一純粋の自然的構成態ではない。テーニス Tönnies はこの意味に於て国民とは近代的な概念であつて、語源に反し、民族の如く種族により特に言語によつて結合されたる多数人の、自然的にして根源的なる總体を意味せずして、寧ろ政治的文化的な、けれ共特に政治的な共通の制度によつて合成されたる統一体を意味すると云つてゐる。從つて民族は其の歴史的規定性（自律性）歴史的被規定性（他律性）の推積として「生活共同態」から生長した性格共同態に外ならないがそれは同時に政治的生活共同態の母胎でもある。

民族は人間が生活してゐる現実的な永續的共同態であつてあらゆる人

間は「民族」のうちに生きてゐるのである。民族は事実上無数の民族の支配服從関係、相互平等関係、対抗関係として存在してゐる。更に亦一民族の内部、又は一民族の範囲を越えて多数の他の共同構成態が存するのであつて家族、部族、身分、階級、組合、地方自治団体、国家、宗派界の如きはそれである。かくして国家の国民的要素は民族の一部に過ぎない場合もあれば又多数の異質民族の結束である場合もある。然し一民族より小なるものも、一民族より大なるもの、もそれを越えて自然所要的な精神的な運命共同態として一つの新しい民族完成へと常に向ふところの強い衝動を持つてゐる。かくして民族的生活形態は人間社会生活の原基的現象であるが然し民族は甚だしく動揺的な、可変的な、流動的なものであつて徐々に或は急激に新しい民族を形成するものである、これは民族の一部の独立又は数民族の結合——国家権力によつて往々鍛接される——によつて起るものであり、又平和的に異質民族性が相互に浸透し織交して新しい身体的、精神的民族構成が行はれる。それで近代国家は

大なり小なりそのうちに異質対立を含む体制的組織であるが然しそれにもまして國際組織は生存に於ける利害関係を異にする対立とそれの平衡維持とによって成立する。國家の対立は圧迫と被圧迫、或は搾取と被搾取、持つ國と持たぬ國との如き関係から成立し、斯る対立関係の成立は支配と從属との意識を置く。然し支配に対する從属の関係が要求の満足として意識されてゐる時、民族意識は政治的には表現されないが、要求の否定として意識される時、そこには政治的に表現され、不平を緩和せんとする。同情や偽瞞は支配と圧迫との相互に意識されてゐる恐怖に基く。民族意識に於ける自他の対立は他国による自己の否定であり、自己否定の満足は服從としての奴隷の意識であり、自己否定に対する反抗は闘争としての愛國の意識となる。斯る自他の関係が運動として表現される場合には闘争としての愛國の意識は同時に革新としての民族意識となる。

民族が相互に何らの利害関係の衝突と支配関係の軋轢とを意識してゐない場合にはそこには「民族意識」はなく、異にする民族の存在の知覚があるに過ぎない。

社會的傾向の總体としての個体の社會性は自己保存と自己發展の總体としての自我行動に関係し個体に於て二つの複合体が或る時は對立分離し或る時は相互に融合するものであるが民族に對する隷屬の本能は自我の共同社會要求への　動的な適合なのである。心的共同体に基く民族的性格の特異性は相互了解の限界を示すものであって、真の一体感はシェーラー Scheler の云ふ如く生物的活力中樞の領域に屬するものである。然しこのことは異つた民族は相互に一体感を持ち得ないことを示すものではない。地理的接近や民族異質度の軽少や歴史的関聯や政治的感性や言語及び文化、經濟的利害関係の共通が新しい民族的一体感の形成に導くことも多いのである。こゝに集團的民族主義――民族ブロック構成の基礎がある。

キルヒホッフ Kirchhoff に依れば種族的血統、言語等が所謂民族運動の決定的特質ではなくして共屬感情とこの共屬をあらゆる敵に對して擁護せんとする特性的行為に聯る意志が真の民族の魂の全部なのである。だが

らあらゆる民族の問題は結局民族を精神的原理にまで昇める「民族の自覺」にまで還元出來るところの社會感情から發足する。云ふまでもなく總ての人間は必ず一定の民族に屬し、その民族の持つ文化が他の民族の持つ文化より高いか、低いかによつて該民族の人種體型自体の優劣をさへ判斷し而も自己の民族性を最高なものとし、自己の民族性を規準として他民族を判定思惟してゐるのである。然しながらかゝる見解は純然たる感情的なソは政治的な問題であつて何等化學的な根據のないものである。而もこの態度は單に人種、民族、國民の問題に止まらず宗教、政治藝術、學術の世界觀にも強き影響を與へてゐるのである。自己の所屬してゐる集團が最高のものであると云ふ信念は積極的に又は消極的に社會的な一つの本能である。あらゆる民族的自覺と云はれるものは天然自体排他的なものであつて種族保存の本能にまで還元されろ所の本原的なものである。従つて民族の自覺又は種族保存の本能は社會的には異質民族又は異質種族の接觸は存在が意識されなければ發生し

得ないポテンシャルな力である。かゝる集團表象は従つて人類の最初の時代から存在してゐたものである。この見解は種族の名稱によく現れてゐるのであつて、自己の種族を最高のもの又は自己の種族のみを所謂「人間」と考へることである。例へば支那人は自己以外の種族を蠻、夷、戎、狄等の蔑稱をもつて呼び最も原始的民族と云はれてゐるエスキモー（エスキモーとはアメリカインディアンのアブナキ族が與へた名であつて本來「生肉喰ひ」の意を有してゐる）すらイヌイトと自稱してゐるがこれは「人間」の意である如く種族名の中彼等自身が附した名稱は大抵かゝる自身の社會群だけを「人間」と考へ他の群に人格を認めないところの尊稱又は美稱で表現してゐるものである。又例へば民族のアリヤとは「神に忠良なる」意味を有してゐる。此自己の種族のみが選ばれた又は高貴な種族であると云ふ思想は最も本原的な人世觀であり世界觀である。従つて人類は最原始の時代から他の種族を同朋とは決して見なかつた。それは單なる生物として見るか、悪魔、又は敵として見てゐたのである。會へば打

ち合て戦ひ、又は喰ひ合ふところの動物として對立した。旧約聖書に現はれるカインモティーフが支配してゐたのである。民族學者が集團感情 Kollektive gefühl と名付けたこの民族ず悪は永い傳統によつて遺傳され、現今の如き最高の文明になつても全く消滅せず、他種族を排斥、敵視する感情が残存し、これが集團に於て強く再現するのである。個人としてもつとも博愛的であり文明人であるが如く見ゑる西洋人が集團運動に於ては猛烈な排他的野蛮人に激変するのはこの集團感情への「祖先歸り」的な現象と見做すことが出来るものである。これが所謂人種問題又は戦争等に極度に昂揚されるのである。接觸する異質要素に對する反感はこの原始的種族憎悪の感情にまで遡ることが出来るのであつて氏族、種族、政黨、國家、階級等の成員は他のものが單に自己と同じ集團に屬してゐないと云ふ理由だけで嫌悪するのはこの祖先歸り的種族敵視の再現として理解されなければならないであらう。サムナー Sumner はかゝる感情の社會的概念として民族中心主義 Ethnocentrism の語を與へた。白色人種が有色人種――黒色のネグロ人種、黄色の蒙古人種――を体質的に劣弱な且つ文化的に劣性なものとする見解はアプリオリには成立しないにも拘はらず――根強く彼等を支配してゐるのは前述した集團感情と現在のみの彼等の文化の優越から歸納されたものであつて決して先天的な運命ではない。

歴史を体的因子に結合せしめて出生圏による運命觀を説くものに人種史觀がある。グンプロウィツに依れば人類の歴史は自然過程を取扱ふものであつて我々は歴史發展に於て最も本質的な二契機――植物的、動物的、社會的各自然過程にも存する――即ち異質要素と相互に作用する一定關係の存在とを見出すものである。

この自然過程は史的現實として異質群人に認められる場合夫れは人種闘争として理解されるのであるとする。

ウォードも人種の相異はポテンシャルの相違を意味するものであつて生理的、物理的原理であると同時に社會的原理であるとしてゐる。斯くの如

き人種を社會學的文化史的對象として考察すると歴史は常に人種によつて構成され人種の成立、接觸、沒落の進行過程のうちに發展して行くものである。この考へは古代からあつた。

最初の最も素朴的な人種、民族の認識の方法は其の差異性に奇異と警戒の念を抱くことであつた。そしてこの差異性は一種の侮蔑觀を伴つたものである。プラトーの見解は各種の民族殊にギリシヤ人と野蠻人（ギリシヤ人は自己以外の民族を總て野蠻人と呼んだ）とは相互に異質であつて生来敵であると云ふことであつて、人種對立關係の存在を主張しこれがギリシヤの民族觀を代表してゐるものである。アリストテレスも亦アジヤ人は野蠻人で本来奴隷でありギリシヤ人は本来主人であると考へてゐた。オーギュスト・コントですら白色人種を最高のものと作しその中の西部欧洲人を選良若くは人類の前衛と呼んでゐた。又テーヌは民族の行為、運命に對する環境時宜、人種の三要素中人種を最初の且つ最強のものとした。更にゴビノーは世界史に於て彼が人種化學と呼んだところの純粹性と混交性以外の力を認めたいのである。異質人種要素が一定民族に混交することは彼の用語に從へば頽廢（デジェネレ）である。血液の多様性は狀態の多様性を生む。彼は強度の混血によつて成立してゐる社會は先づ外的不安、次に病的硬化遂に死滅が其の運命であると云つてゐる。彼は各種文明の基礎を以て人種的特徴にありと為し人種に先天的優劣の差を認め且つ種族の活力は其の純粹性に宿つてゐるとするのである。最高文明は白人種に屬するが故に若し各人種間に雜婚がなければ黄色及び黒色人種は永久にこれに隷屬するであらうと所謂白人最高主義に一應の學理的根據を與へたのである。これに對し有色人種の將来的發展性を認め、白色人種の勢力下向に對する警戒恐怖に所謂黄禍論の如きものがある。ゴビノーの影響を強く受けたストダード、シュペンギュラーの如きはこの白色人種の運命悲觀論を導き出してゐる。ゴビノーのこの人種哲學は近代の新しい意味に於ける人類社會學——獨逸の意味に於ける若しくは人種社

會學に發展することゝ行つた。
之に對してオッペンハイマーは人種史觀内に科學的基礎を認めずそれはイデオロギー即ち思惟的構成であるとし殊に政治的利害關係から出た場合に然りだと云つてゐるのである。彼は人種は区別しうるのみならず――價値關係に於て――又種々に評價しうると云ふ學説は總てイデオロギー、支配階級の僞似科學であつてそれは搾取又は經濟的諸原因から起つたものであり、其の支配を擁護し且つ自然科學的基礎をよそうものであると極言してゐる。彼に依れば人種と文化自身とは無關係であつて各種の人類定型は地理的社會的に制約されたものである。それで人種心理學でなくして階級心理學が研究されなければならないとする。
この見解は確かに一面の眞理である。例へば勞働力の少ない時にはアフリカの黒人を農業に使用する奴隷として米國に輸入し、又日本人、支那人の入國を歡迎した同じ米國が勞働力が充實すると有色人種として排斥する場合にも見られる。何となれば彼等は最初から有色人種なのであ

つて、米國に移動してから有色人種に變化したものではない。若し經濟的因子より人種的因子が強いならば最初から有色人種の入國を許可する筈がないのであつて、このことは當然人種的因子よりも經濟的因子の強いことを證明してゐるものだからである。
民族は集團表象に基づく同類意識によつて統一されてゐる。この同類意識結合紐帯の積極的投影として自己集團の主張と他民族に對する敵意とを示す。自己集團の自獨性は各集團に固有な感情であつて何等の抵抗なくして他の民族の侵害流入を許容するものではない。兩者の間には必ず接觸面に於て摩擦と抵抗とを生じ兩者の民族的特殊性に反應するのである。民族的移動が多く政治的、暴力的征服關係を伴ふのはこの理由に基づくものである。民族主義は、近代國民國家の成立、維持、發展の過程に生成せる一定の國民的意識乃至國民的生活原理を意味し、近代的歷史的主体的概念として理解することができる。それが歷史的主体的概念であるといふのは、民族なるものは、近代的現象として始めて

歴史的發展過程の中にその姿を現はしたといふにとゞまらず、それが歴史的發展の動的過程を擔當する政治的生活協同体として實践的主体的槪念であるといふことに結びついてゐる。

近代民族國家の成立は集權化と民主化といふ收斂および擴張の二つの過程を経て始めて政治的協同体としての表現を固めることができたのであるが、こゝに至つて始めて吾々は政治的現象統一の形式としての民族主義について語ることができる。かくの如く國民主義は一方において國家の集權的統一他方に於て國民の民主的自由をその基礎的内容として含むことによつて歴史的に成立したものである。

文化協同体としての民族の觀念は先づヘルダー（Herder J.G. 1744—1803）によつて強調せられた。彼は民族といふものに對して無限の深い愛をそゝいだ。彼によれば、人間集團は最初に地理や氣候の時質によつて分化し、然るのちに獨時の歴史的諸傳統―即ちそれぞれの集團にふさはしい言語、文學、敎育、風俗、習慣などを發展させる。この段階に至つて人間集團は一つの「民族性」とも云ふべきもの、そして眞に民族的な文化をもつた成熟せる一民族となるのである。かゝる民族並びに民族文化の多様なる形成を通じて人類の完成といふ最高の目標へ向つて不斷の努力を重ねべきことを唱道するところに彼の文化的民族主義の特質があつた。從つてかゝる立場から彼は帝國主義への辛辣なる批判者でもあつた。彼は「最も自然な國家とは一つの民族性をもつた一つの民族であらう」と述べて、民族に正しい基礎を置いて國家即ち民族國家の意義を力強く高調したのである。

しかし、ヘルダーによつて認められた民族性なる概念は自主的無意識的統一体を意味するにとゞまり、未だ能働的創造的意義を帯びた自覺的統一体としての「國民性」槪念ではなかつた。ヘルダーの民族主義は始而國民主義にまで發展せねばならず、かゝる實践的轉回は促進した人は云ふまでもなくフィヒテ（Fichte J.G. 1762—1814）その人であつた。フィヒテの國民主義はナポレオン戦爭の敗北によつて分裂した獨逸の惨めな政治的

現実を背景として生れた。當時の獨逸にとつて何よりも先づ必要だつたのは全獨逸人の統一であつた。小邦の利己主義的欺瞞によつて四分五裂した獨逸國家の全体としての再興であつた。彼の「獨逸國民に告ぐ」たる講演においては、獨逸人の再興及獨逸人自身の國家を創造するといふことは、全人類に對する義務であり、しかも全人類の最も貴重なる文化的財宝に對する義務であるとする思想が述べられてゐる。この思想の中にはけ文化理念のかの人文主義的超國民的意識の自己実現が外的生活の形式としては國民國家といふ形式をとらねばならぬこと、就中個人および民族の一切の文化的活動の意義も使命も國民統一と政治的獨立なしには実現せられざることを強調した点に、フイヒテの世界主義の中を貫ぬく國民主義の意義を正しく評價しなければならない。吾彼の國民主義は祖國愛を通じて普遍的倫理的人類的理想の実現を確信したものと云ふべきであらう。フイヒテは獨逸民族の中に人類全体を包むところの「根源的民族」を見、この民族が他の諸民族を普遍的人類の目標へ導くところの選ばれた

野性民族であると考へた。獨逸國民を「人類國民」に擬し、獨逸文化を普遍的「世界文化」へ宣揚せんとしたところにフイヒテの國民概念が佛蘭西の場合におけるが如き単なる政治的意義にとゞまる「國家國民」ではなく、謂ゆる「文化國民」である所以を明瞭に看取することができるであらう。フイヒテの國民主義はジャコバン的政治的國民主義に對して文化的國民主義と呼ばれてよいのであつて、そしてこれがまた國民主義の獨逸的形態でもあるのである。

他方英吉利における國民主義の發展を眺めてみるとき佛蘭西獨逸におけるとは異つた原理にもとづく異つたタイプに於ける國民主義の進行を見るのである。

ネオ・マーカンティリズムの出現は先進國英吉利國民主義に對する後進國獨逸國民主義の角逐であり、この段階に達した新なる經濟的國民主義はもはや単なる國民主義にとゞまるものではなく植民地支配の覇權を争ふ帝國主義に変貌したものと云はねばならない。

ここに未だ曽てない大規模な活劇が開始せられた。吾々は十八、九世紀にまたがる國民主義の歴史的展開過程を眺めその形態的変化の中に佛蘭西の政治的國民主義、獨逸の文化的國民主義、英吉利の經濟的國民主義を摘出しそれぞれの特徴を一面的に明かならしめた。而してこれら國民主義の三形態は近代的國民國家成立の歴史的發展過程に於ける三段階をあらはすと同時に理念型的に眺めた國民主義の三類型を示すものとして理解されてもよいであらう。たゞ以上の國民主義にとつて共通なことは、いづれも民主々義、世界主義、自由主義などと云ふ本来人類主義の流れを汲む普遍的世界原理に結びついて發展したといふことであつて、こゝに大戰以後に擡頭せる「徹底的民族主義」(ヘイズ)と區別せらるべき根本的な相違を認めねばならない。

大戰以後の民族主義の特質は何よりも先づ抽象的普遍的世界秩序に對する安易な信頼を一擲し、今一度新しく民族が文化的、政治的、經濟的國民統一を見直してゆかうとするところに求められなければならない。

この意味で今日の民族主義は新しい確實な基礎の上に立つて再出發すべき必要にせまられてゐる。而して民族主義なるものはそれが國家の生活原理であると同時に世界秩序の形成原理たる意味を含まねばならぬ限り、新しき民族主義の出發は同時に新しき世界秩序創造の課題に答へるものでなければならない。かく民族的世界はその民族特有の世界觀であるが我々は　のうちに民族に内在しながら民族を超越する思想要素を見出す。

一、或民族に特有な思想要素

二、アジア民族に共通な思想要素

三、人類に共通な思想要素

實際民族の具体的理解は抽象的な理解と異り、民族の合成的な要素を把握することであり、それは民族の獨立的な生存と發展との前提をなす生活圏との關係に於て把握することである。

合成的な要素とは一民族内部の合成的な要素のほかに、大いなる全体としての民族に合成せる要素乃至は必然的に合成せんとする要素即ち民

族の大生活圏なるものを包括しなければならない。新に生み出でんとする大生活圏を無視しては今日世界史の理解即ち具体的且つ動的な理解を期することは出来ない。今後民族相互間の理解が政治的な意識をもつべきものである以上は特に形成されんとする大生活圏内部の諸民族相互間の具体的関係のみならず大生活圏相互間の民族的関係にも注目しなければならない。